

議事録公表時まで対外非公表

<不開示情報：有（種類：審議・検討）>

<配布先：金融政策決定会合関係者限り>

<作成局における保管期間満了時期：2038年12月>

2008.12.15

金融市場局

金融調節の運営実績

1. 無担O/Nレートの動向と金融調節

金融調節については、11月20～21日、12月2日の会合で決定された方針（「無担保コールレート（オーバーナイト物）を、0.3%前後で推移するよう促す。」）に従って運営した。無担O/Nレートは、概ね誘導目標水準で推移した。

この間、11月末にかけては、先日付で積極的な資金供給を行う一方で、即日資金吸収を行ったこと等により、無担O/Nレートは、0.304%～0.318%の狭いレンジで推移したが、12月入り後は、準備預金の積みが大幅に進捗したこと等を受けて資金余剰感が高まったことから、12月12日には0.222%に低下した。

金融調節運営面では、年末越えの資金供給を一段と積み重ねたほか、国債買現先オペ、CP現先オペの積極的活用を図る等、引き続き、金融市場の安定にも一層配慮しつつ、市場におけるレート形成状況等を踏まえた機動的な運営を行った。また、米ドル資金供給オペによる資金供給も引き続き実施した。

2. 当座預金・準備預金の動向

前回会合以降の準備預金残高（除くゆうちょ銀行）は、
（11月積み期の所要準備額<除くゆうちょ銀行>： ）で推移した
（11月25日： →11月28日： →12月15日 ）。

この間、当座預金残高は、6～9兆円台で推移した（11月25日：9.1兆円
→11月28日：9.8兆円→12月15日：7.9兆円）。

以 上

(図表1)

金融調節の実績の推移

(億円、%)

	無担 コール レート (O/N) 加重 平均値	日銀当座預金残高(実績値)							補完 貸付 残高	<参考> 日銀当座預金残高見込み		
		準備預金残高(含むゆうちょ銀行)	準備預金残高(除くゆうちょ銀行)	非準備先		残高	朝方 即日オペ前	9:20 定例調節後		全即日オペ 実施後		
				超 過 準 備	残り所要額 (1日平均)							
11月17日(月)	0.305	86,800	81,000		2,200	48,300	5,800	1,594.0	97,000	-	85,000	
11月18日(火)	0.306	86,400	81,000		2,000	48,000	5,400	728.0	96,000	-	86,000	
11月19日(水)	0.303	85,200	80,100		2,100	47,700	5,100	784.0	98,000	-	84,000	
11月20日(木)	0.306	91,300	86,000		3,500	47,300	5,300	718.0	104,000	-	90,000	
11月21日(金)	0.305	91,200	85,700		3,300	45,500	5,500	865.0	104,000	-	90,000	
11月25日(火)	0.307	91,200	86,100		4,200	45,000	5,100	3,858.0	97,000	-	88,000	
11月26日(水)	0.304	90,700	85,600		5,400	44,500	5,100	1,044.0	98,000	-	90,000	
11月27日(木)	0.306	99,300	86,300		5,100	43,900	13,000	1,585.0	106,000	-	98,000	
11月28日(金)	0.318	98,300	91,800		5,400	40,500	6,500	425.0	105,000	113,000	97,000	
12月1日(月)	0.299	88,500	83,400		6,600	39,100	5,100	1,435.0	95,000	-	87,000	
12月2日(火)	0.279	82,300	73,500		7,800	38,300	8,800	190.0	106,000	100,000	82,000	
12月3日(水)	0.257	81,000	73,600		8,200	38,000	7,400	403.0	112,000	102,000	80,000	
12月4日(木)	0.263	74,600	68,600		7,300	38,300	6,000	0.0	115,000	100,000	75,000	
12月5日(金)	0.256	75,000	70,000		5,700	38,400	5,000	2,071.0	102,000	87,000	73,000	
12月8日(月)	0.275	79,600	75,300		5,700	37,600	4,300	1,018.0	97,000	82,000	78,000	
12月9日(火)	0.255	80,000	74,400		8,000	37,200	5,600	4,000.0	101,000	91,000	76,000	
12月10日(水)	0.247	73,000	67,200		7,400	36,300	5,800	4,225.0	99,000	84,000	69,000	
12月11日(木)	0.229	64,100	58,800		6,600	36,400	5,300	3,550.0	101,000	81,000	61,000	
12月12日(金)	0.222	63,500	59,000		8,300	38,900	4,500	1,809.0	101,000	81,000	61,000	
12月15日(月)	0.235	79,200	73,400		15,700	-	5,800	3,437.0	110,000	90,000	75,000	

(注1)準備預金残高(除くゆうちょ銀行)は、対外非公表。

(注2)12月15日分は、5時同時処理終了時点。

日銀当座預金の保有状況

対外非公表

(単位:億円)

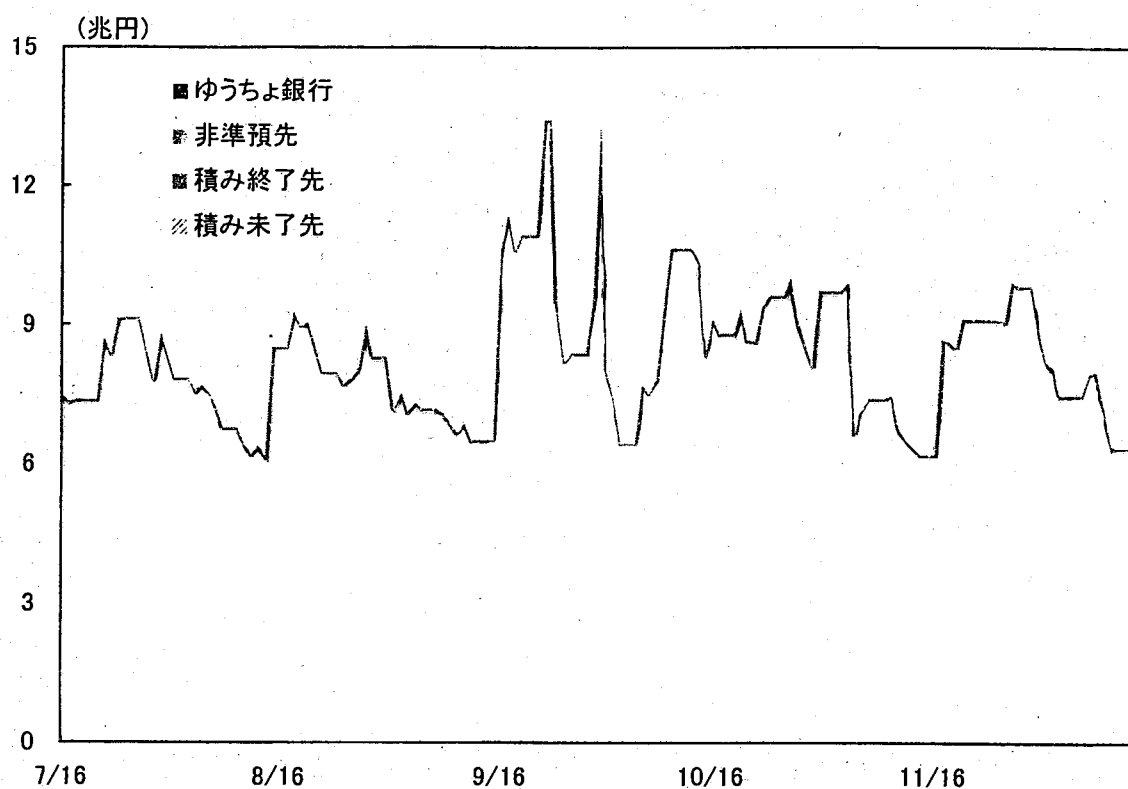
	8月積み期	9月積み期	10月積み期	11月積み期	12/15日	11月積み期 所要準備額
準預先	73,025	86,597	78,656	76,562	73,357	<70,555>
除くゆうちょ銀行						< >
都銀	29,896	29,811	29,778	30,178	27,663	<30,082>
地銀	11,594	12,548	11,764	11,499	12,679	<10,999>
地銀Ⅱ	1,542	3,967	3,705	2,662	2,919	<1,415>
外銀	806	3,452	3,120	2,192	2,643	<289>
ゆうちょ銀行						< >
非準預先	3,927	8,675	5,399	5,785	5,805	
短資	278	984	44	465	725	
一部系統	82	1,109	1,231	972	554	
政府系	716	937	281	379	277	
証券会社等	2,851	5,645	3,843	3,969	4,249	
当預残高	76,952	95,273	84,054	82,346	79,162	

(注1)「証券会社」は、金融商品取引法上の有価証券関連業を行う第一種金融商品取引業者。

(注2)11月積み期の計数は、11/16～12/15日の平均。12/15日は5時同時処理時点。

08/7月積み期以降の当座預金残高

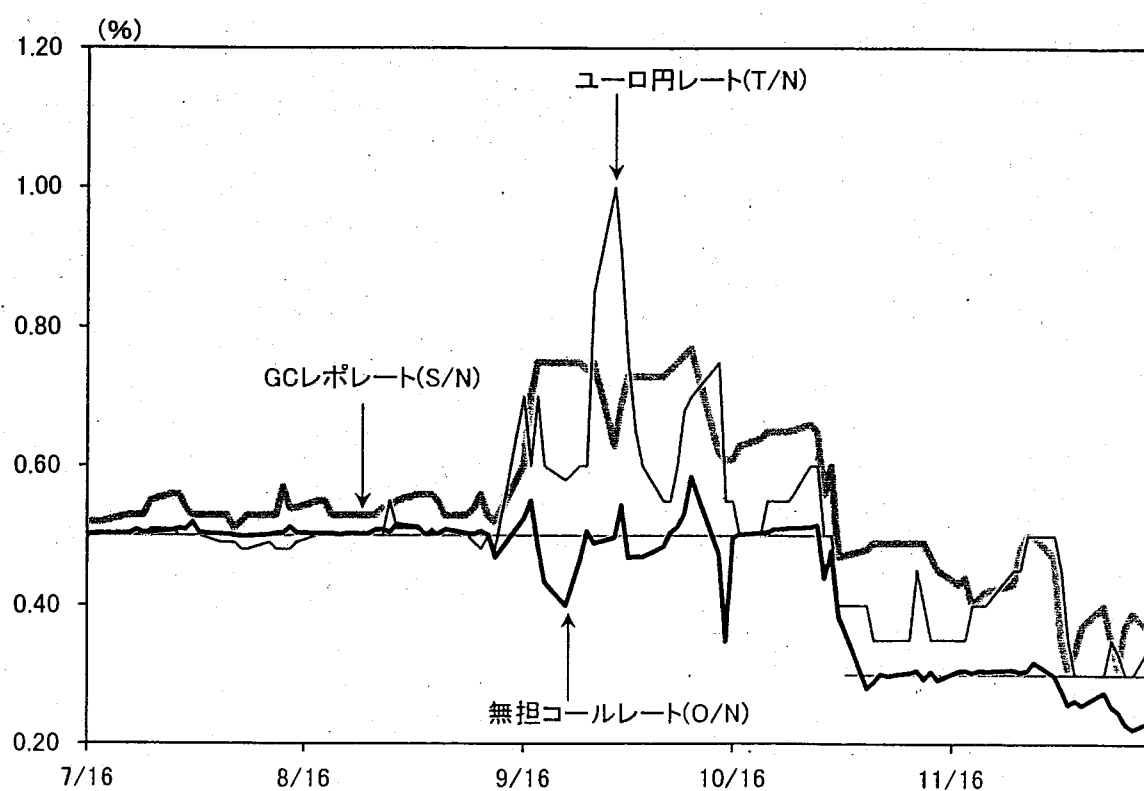
対外非公表



(注) 積み終了先、積み未了先及び一日当たり残り所要(前日終了時点)には、ゆうちょ銀行の計数を含まない。

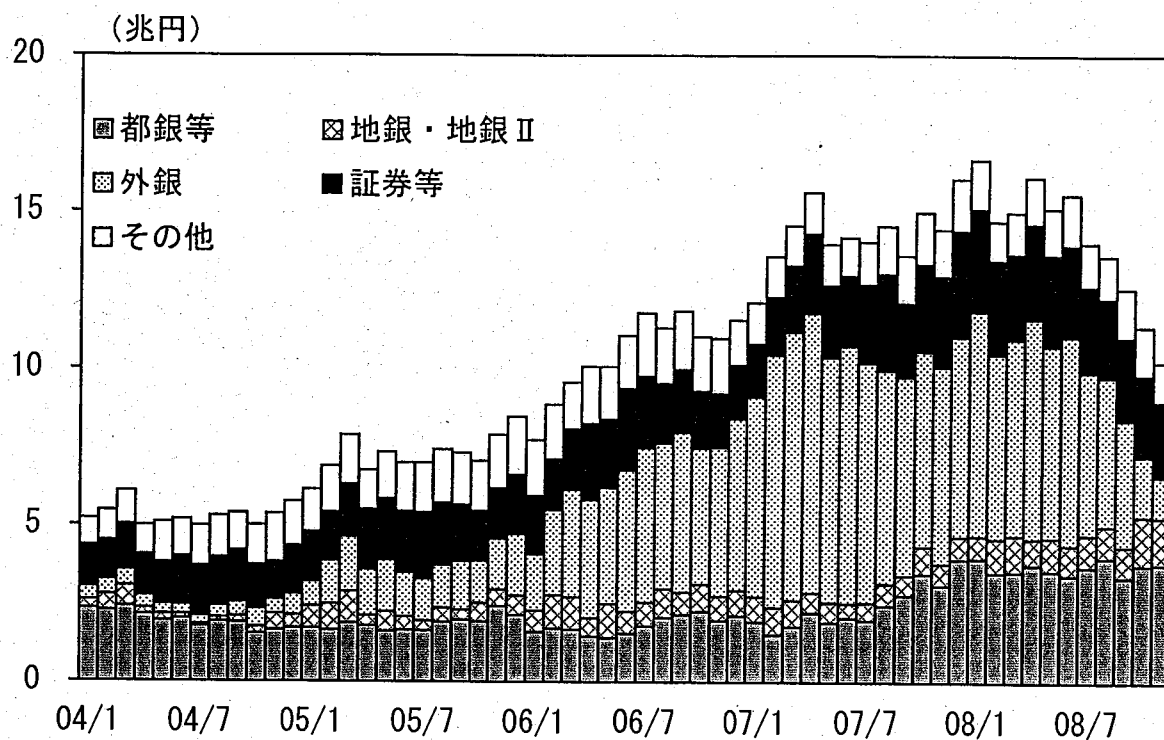
08/7月積み期以降の短期金利

対外非公表

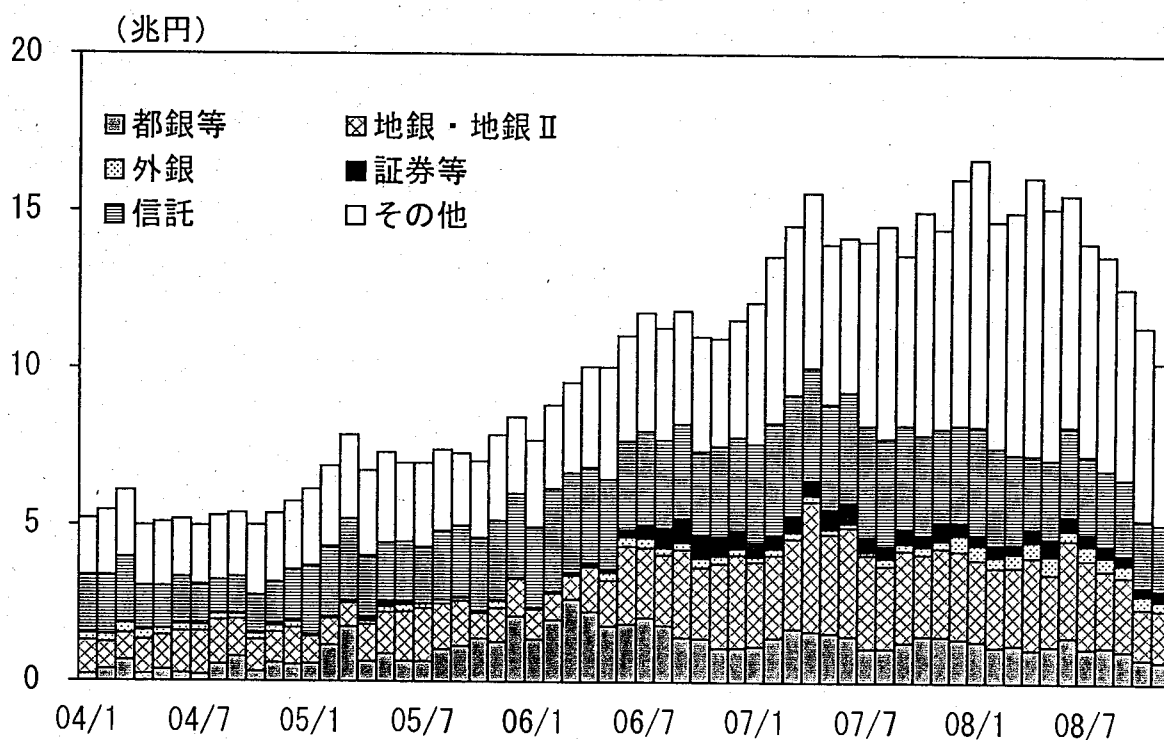


無担コール市場残高

<取り手別>



<出し手別>



(注1) 月中平残。

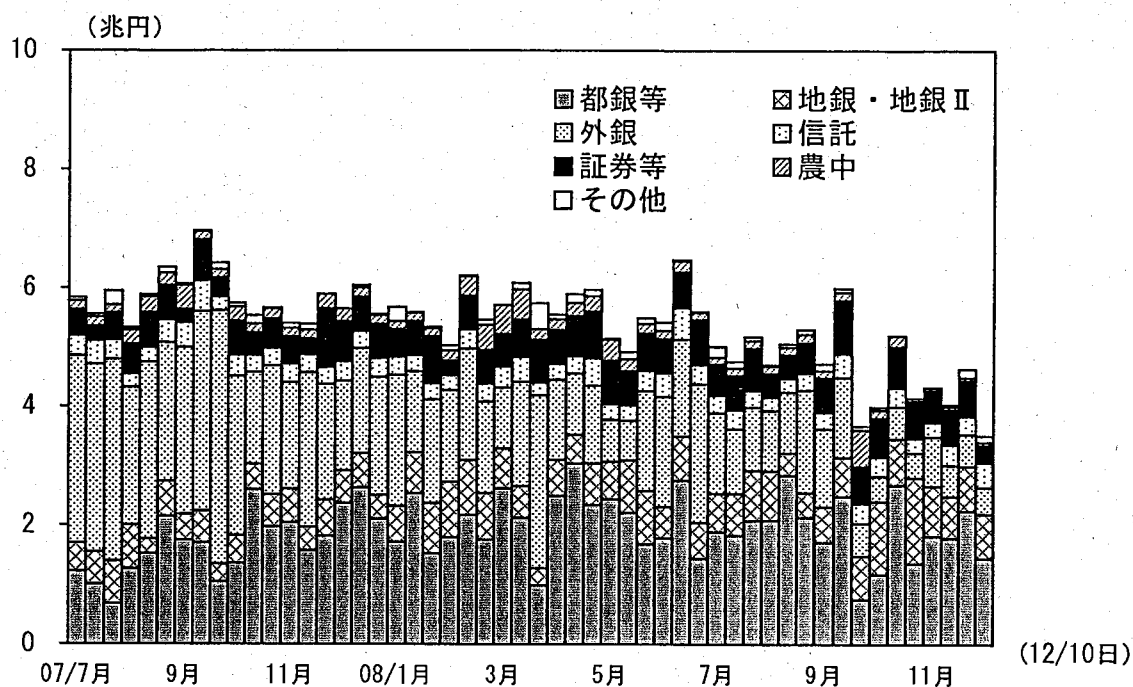
(注2) 無担コール市場残高における「都銀等」は都銀、新生銀行、あおぞら銀行。「証券等」は金融商品取引業者(他の区分に属するものを除く)および証券金融会社。

(図表 5)

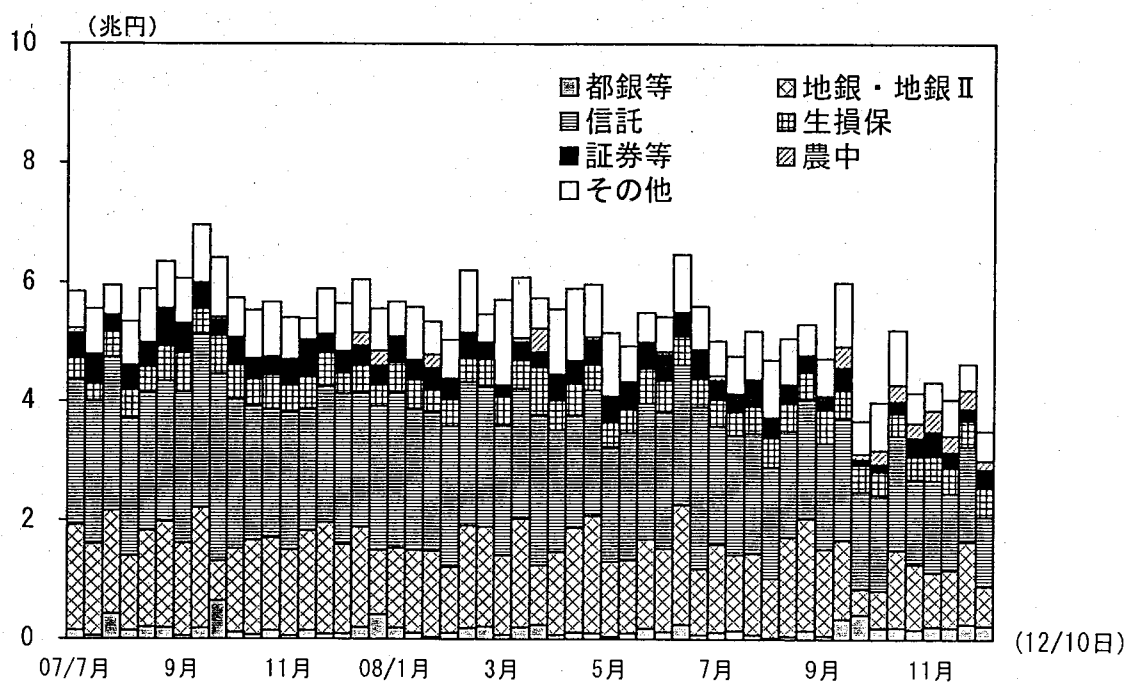
無担コール市場残高 (O/N、T/N、S/N計)

<取り手別>

対外非公表



<出し手別>



(注) 各旬末残高。

(図表6-1)

最近のオペ結果の推移(1)

(資金供給オペ)		(億円、%)						
オペ手段	直近残高	オファー日	スタート	期間	オファー額	応札倍率	平均落札 レート	落札決定 レート
共通担保(全店)	99,057	11/21	T+2	2M	8,000	4.23	0.459	0.45
		11/28	T+1	2W	8,000	4.28	0.502	0.50
		11/28	T+2	2M	8,000	4.52	0.504	0.49
		12/2	T+1	1W	8,000	2.27	0.431	0.39
		12/2	T+2	2M	8,000	3.39	0.479	0.46
		12/11	T+1	2M	8,000	4.29	0.513	0.50
		12/15	T+2	3M	8,000	3.25	0.500	0.48
共通担保(本店)	145,090	11/20	T+1	2W	6,000	5.06	0.433	0.43
		11/25	T+1	1W	10,000	5.01	0.453	0.45
		11/26	T+1	1W	8,000	3.35	0.488	0.48
		11/26	T+2	3M	8,000	4.14	0.471	0.47
		11/27	T+1	2W	8,000	6.40	0.501	0.49
		12/1	T+1	1W	10,000	1.70	0.489	0.48
		12/1	T+2	3M	8,000	3.52	0.487	0.48
		12/3	T+1	3W	10,000	2.90	0.371	0.35
		12/4	T+1	2W	8,000	2.27	0.356	0.34
		12/5	T+1	1W	8,000	2.89	0.357	0.35
		12/8	T+1	1M	10,000	3.44	0.492	0.49
		12/9	T+1	1M	10,000	3.13	0.503	0.50
		12/10	T+2	3M	8,000	3.54	0.487	0.48
		12/12	T+1	3W	8,000	3.37	0.503	0.50
CP等買現先	37,099	11/20	T+2	1M	6,000	1.12	0.275	0.11
		11/25	T+2	1M	4,000	1.20	0.207	0.12
		11/27	T+2	2W	4,000	1.79	0.526	0.42
		12/2	T+2	2M	4,000	1.86	0.539	0.50
		12/4	T+2	1W	6,000	1.13	0.186	0.13
		12/9	T+2	1M	6,000	1.56	0.533	0.49
		12/11	T+2	1M	6,000	1.39	0.486	0.42
国債買現先	106,898	11/20	T+2	1D	20,000	1.28	0.402	0.40
		11/20	T+2	1W	16,000	1.57	0.426	0.42
		11/21	T+2	1D	20,000	1.45	0.405	0.40
		11/21	T+2	1W	10,000	2.59	0.423	0.42
		11/25	T+2	1D	20,000	1.28	0.410	0.40
		11/25	T+2	1W	10,000	3.08	0.434	0.43
		11/26	T+2	3D	20,000	1.49	0.474	0.46
		11/26	T+2	1W	16,000	2.35	0.463	0.45
		11/27	T+2	1D	20,000	1.38	0.493	0.49
		11/27	T+2	1W	16,000	2.20	0.486	0.48
		11/28	T+2	1D	30,000	1.13	0.495	0.47
		11/28	T+2	1W	16,000	1.97	0.498	0.49
		12/1	T+2	1D	40,000	1.01	0.458	0.15
		12/1	T+2	1W	10,000	2.14	0.485	0.48
		12/2	T+2	1D	40,000	1.20	0.320	0.21
		12/2	T+2	1W	10,000	1.99	0.443	0.38
		12/3	T+2	3D	35,000	1.16	0.283	0.21
		12/3	T+2	1W	16,000	1.38	0.357	0.33
		12/4	T+2	1D	30,000	1.10	0.287	0.23
		12/4	T+2	1W	16,000	1.49	0.340	0.33
		12/5	T+2	1D	30,000	1.14	0.289	0.25
		12/5	T+2	1W	16,000	1.35	0.350	0.33
		12/8	T+2	1D	35,000	1.30	0.316	0.26
		12/8	T+2	1W	10,000	2.67	0.379	0.36
		12/9	T+2	1D	40,000	1.28	0.295	0.25
		12/9	T+2	1W	10,000	2.41	0.391	0.38
		12/10	T+2	3D	40,000	1.13	0.256	0.21
		12/10	T+2	1W	8,000	2.48	0.389	0.36
		12/10	T+2	3W	8,000	3.11	0.500	0.49
		12/11	T+2	1D	40,000	1.26	0.270	0.23
		12/11	T+2	1W	8,000	2.17	0.390	0.37
		12/11	T+2	3W	8,000	2.82	0.498	0.49
		12/12	T+2	1D	40,000	1.47	0.276	0.25
		12/12	T+2	1W	8,000	2.18	0.401	0.38
		12/12	T+2	3W	8,000	2.61	0.495	0.49
		12/15	T+2	1D	40,000	1.50	0.304	0.28
		12/15	T+2	3W	10,000	2.20	0.493	0.48
短国買入	88,840	11/21	T+3	-	4,000	2.35	0.011	0.003
		11/28	T+3	-	4,000	3.68	0.026	0.021
		12/4	T+3	-	4,000	3.13	0.015	0.008
		12/12	T+3	-	4,000	3.36	0.013	0.010
国債買入	-	11/25	T+3	-	3,000	4.11	0.035	0.034
		12/1	T+3	-	3,000	3.43	0.042	0.040
		12/8	T+3	-	3,000	3.17	0.030	0.030
		12/11	T+3	-	3,000	3.52	0.006	0.001

(注1) 短国買入・国債買入の平均落札レート及び落札決定レートは、利回り較差。

(注2) 短国買入の直近残高は、繰上償還等を控除していない。

(注3) シェドローは即日スタート分。

(注4) オペ直近残高は2008/12/15日現在(実行日ベース)。

(注5) 国債買現先オペによる買入国債・受入担保国債のうち、変動利付債は7,079億円、物価連動債は5,955億円、30年債は1億円(2008/12/15日現在<実行日ベース>、対外非公表)。

最近のオペ結果の推移(2)

(資金吸収オペ)

(億円、%)

オペ手段	直近残高	オファー日	スタート	期間	オファー額	応札倍率	平均落札レート	落札決定レート
手形売出	34,190	11/20	即日	1D	8,000	1.36	0.389	0.42
		11/20	即日	1D	6,000	2.11	0.426	0.44
		11/21	即日	4D	8,000	2.00	0.389	0.40
		11/21	即日	4D	6,000	2.52	0.395	0.40
		11/25	即日	1D	6,000	2.06	0.370	0.39
		11/25	即日	1D	3,000	3.34	0.330	0.34
		11/26	即日	1D	8,000	1.32	0.376	0.40
		11/27	即日	1D	8,000	1.37	0.383	0.40
		11/28	即日	3D	8,000	2.15	0.282	0.38
		12/1	即日	1D	8,000	1.83	0.343	0.36
		12/2	即日	1D	6,000	2.57	0.338	0.34
		12/2	即日	1D	8,000	2.03	0.317	0.34
		12/2	即日	1D	10,000	1.71	0.326	0.35
		12/3	即日	1D	10,000	2.78	0.296	0.32
		12/3	即日	1D	8,000	2.22	0.300	0.31
		12/3	即日	1D	8,000	1.74	0.296	0.31
		12/3	即日	1D	6,000	2.30	0.263	0.29
		12/4	即日	1D	15,000	2.14	0.294	0.30
		12/4	即日	1D	15,000	1.40	0.293	0.30
		12/4	即日	1D	10,000	1.07	0.305	0.35
		12/5	即日	3D	15,000	1.22	0.292	0.31
		12/5	即日	3D	10,000	1.38	0.287	0.31
		12/5	即日	3D	4,000	2.19	0.280	0.30
		12/8	即日	1D	15,000	0.90	0.308	0.38
		12/8	即日	1D	5,000	2.13	0.308	0.35
		12/9	即日	1D	10,000	1.94	0.305	0.31
		12/9	即日	1D	10,000	1.44	0.301	0.32
		12/9	即日	1D	5,000	1.30	0.311	0.35
		12/10	即日	1D	15,000	1.56	0.304	0.32
		12/10	即日	1D	15,000	0.99	0.317	0.50
		12/11	即日	1D	20,000	1.57	0.316	0.35
		12/11	即日	1D	12,000	1.76	0.321	0.34
		12/11	即日	1D	8,000	1.52	0.333	0.40
		12/12	即日	3D	20,000	1.70	0.299	0.32
		12/12	即日	3D	10,000	1.64	0.314	0.34
		12/12	即日	3D	10,000	1.15	0.315	0.40
		12/15	即日	1D	20,000	0.94	0.325	0.50
		12/15	即日	1D	8,000	1.03	0.352	0.49
		12/15	即日	1D	8,000	0.94	0.379	0.50
国債売現先	0	11/28	即日	3D	8,000	1.16	0.250	0.30

(国債補完供給)

(億円、%)

発動日	供給額	対象銘柄	平均落札レート	落札決定レート
11/21	30	利付国債20年96回	0.200	0.20

(米ドル資金供給オペ)

(百万ドル、%)

オペ手段	直近残高	オファー日	スタート日 (米国東部 時間)	期間	落札額	応札倍率	貸出利率 (固定金利)
米ドル資金供給	127,574	12/2	12/4	3M	30,584	-	1.420

(注1) シャドーは即日スタート分。

(注2) オペ直近残高は2008/12/15日現在(実行日ベース)。

(図表 7)

資金需給の推移

(単位：兆円)

		資金需給（短国調整済）		金融調節 （短国調整済）	当預残高（末残）	
		銀行券	財政等 （短国調整済）			
08／6月		+7. 2	▲0. 7	+8. 0	▲4. 7	10. 2
7月		▲9. 2	+0. 3	▲9. 4	+7. 3	8. 3
8月		▲3. 1	+0. 1	▲3. 2	+3. 1	8. 3
9月		+1. 4	+0. 4	+0. 9	+3. 6	13. 3
10月		▲2. 6	▲1. 1	▲1. 5	▲0. 9	9. 7
11月		▲2. 2	+0. 0	▲2. 3	+2. 4	9. 8
12月	(-15日)	▲2. 4	▲1. 0	▲1. 3	+0. 5	7. 9
	(16日-)	+2. 0	▲4. 0	+6. 0	▲7. 7	N. A.

(注1) ここでの資金需給は、各月の表面上の計数に、本行が買入れた短期国債の償還額を加えたもので、実力ベースの資金需給。金融調節は、短期国債の償還分も含めた計数で、短期オペ残高の増減に国債買入額を加えたものに一致する。

(注2) 12月(16日-)の資金需給は、現時点での予想。金融調節は、12/15日までにオファーしたオペのスタート・期落ち分に国債買入(0.3兆円)を加えたもの。

(注3) 四捨五入の関係で、資金需給の内訳と合計は必ずしも一致しない。

(図表 8)

日銀バランスシート(11月末)

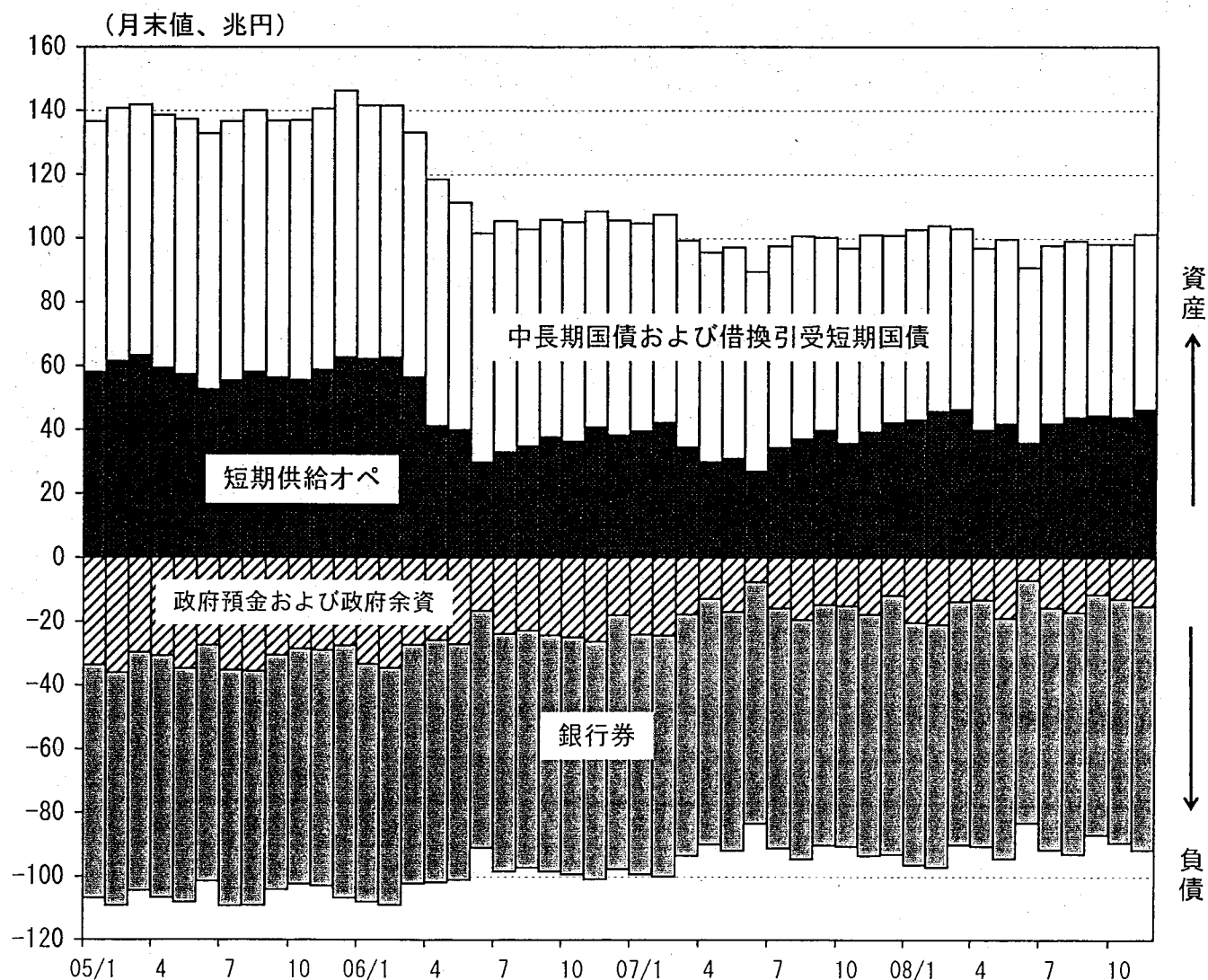
短期供給オペ	46.3	(+7.1)	銀行券	76.6	(+0.7)
中長期国債	43.8	(▲7.2)	当座預金	9.8	(+1.1)
引受短国	13.8	(+0.6)	政府預金および 政府余資	15.2	(▲2.5)
信託財産株式	1.3	(▲0.3)	短期吸収オペ	1.6	(+0.3)

(注1) 主要項目のみ抜粋。単位：兆円。()内は前年差。

(注2) 短期供給オペにおける短国買入オペは、買入累計額からその償還分(繰上償還を含む)等を控除したもの。

(注3) 引受短国は、引受政府短期証券(FB)および借換引受短期国債(TB)のうち償還分等を控除したもの。

(参考) 日銀バランスシート主要項目の推移



(図表9)

(*)は対外非公表

本行受入担保残高の推移

末残、単位：表内＝兆円、括弧内＝億円

担保種類	2008/6月	7月	8月	9月	10月	11月
総計	73.1	79.7	83.6	81.6	85.0	90.7
国債	45.1	52.4	55.9	52.9	57.5	62.7
利付国債等(注1)	31.0	36.5	40.9	36.6	41.6	(注2) 45.9
変動利付国債(*)	7.0	7.6	8.7	8.5	10.7	11.9
物価連動国債(*)	2.8	3.0	3.5	2.9	2.6	2.8
TB・FB	14.1	15.8	15.0	16.2	15.8	16.8
社債	0.6	0.6	0.6	0.6	0.7	0.8
短期社債等(注3)	2.9	2.8	2.5	2.6	1.8	1.6
その他債券	4.7	4.9	5.0	5.2	5.5	5.8
手形(注4)	0.4	0.4	0.4	0.1	0.5	0.7
証貸	19.0	18.3	18.7	19.9	18.7	18.8
企業向け	0.3	0.3	0.3	0.3	0.4	(注5) 0.6
交付税特会等(注6)	18.7	18.0	18.4	19.5	18.2	18.2
うち民間債務分	4.4	4.3	4.0	3.9	3.5	3.9
ABS	0	139	159	159	351	354
ABCP(注7)	225	170	141	176	140	108
(うち特則分)(*)	(-)	(-)	(-)	(-)	(0)	(33)
社債特則分(*)	-	-	-	-	-	-
企業向け証貸特則分(*)	-	-	-	-	-	-
(参考)CP等買現先オペにおけるABCP買入残高	210	0	0	60	325	458
(うち特則分)(*)	(-)	(-)	(-)	(-)	(0)	(0)

(注1) 利付国債、割引国債、承継国債および分離国債。

(注2) 分離国債は、185億円。(*)

(注3) 短期社債、保証付短期外債および資産担保短期債券。

(注4) CPを含む。

(注5) シンジケート・ローン債権は、12億円。

(注6) 交付税特会、預金保険機構および銀行等保有株式取得機構向け。

(注7) 資産担保短期債券を含む(以下同じ)。

共通担保使用額(*)

単位：兆円

	2008/6月	7月	8月	9月	10月	11月
共通担保使用額合計(注1)	22.5	30.5	32.3	31.5	32.9	38.2
うち共通担保オベ使用額(注1)	21.6	29.6	31.4	25.7	22.7	25.6
当座貸越残高 日中ピーク(注2)	4.9	4.1	3.6	4.6	6.8	7.3

(注1) 末残。

(注2) 平残(ITC口を除く)。

信用判定・適格審査の状況

1. 信用判定の状況（*）

	2008/6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
新規適格化先数	0	1	0	0	2	3	9(31)
取下げ・抹消先数	4	2	0	0	5	1	0
信用判定適格先数	307	306	306	306	303	305	314

(注)12月の計数は12月15日時点。カッコ内は審査中のもの。

2. ABCPの担保適格審査状況

	件数	発行枠
担保適格ABCP（特則分）（*）	10件（4件）	8兆4,000億円
担保適格ABCP（特則外）（*）	7件（1件）	1兆5,100億円
市中ABCP計	42件	16兆7,848億円

(注1)「担保適格ABCP（特則分）」、「同（特則外）」は12月15日現在で審査済のもの。カッコ内は審査中のもの。

(注2)「市中ABCP計」は9月末の計数。

議事録公表時まで対外非公表

<不開示情報：有（種類：審議・検討）>
<配 付 先：金融政策決定会合関係者限り>
<作成局における保管期間満了時期：2038年12月>

2008.12.15

金 融 市 場 局

最近の金融・為替市場の動向

1. 概 況

11月の政策決定会合以降の市場動向をみると（図表1、2）、実体経済環境の急激な悪化や不確実性の高まりなどを背景に、金融機関の運用調達スタンスがより慎重化する中で、短期金融市場は神経質さを増す展開となっている。無担保コールレート（O/N）は、概ね誘導目標水準で推移したが、GCレポレート（S/N）は、金融機関の資金放出余力の低下などから上昇圧力がかかりやすい状況が続いている。ターム物の銀行間金利についても、取引が細る中、年末越え金利が急上昇している。

国内資本市場をみると、長期金利（10年新発債流通利回り）は、米欧に比べ小幅な動きに止まっているが、世界的な景況感の悪化等を背景に低下している。株価（日経平均株価）は、10月に急落した後、低水準のまま不安定な動きが続いている。一般債流通利回りの対国債スプレッドについては、低格付銘柄や特定業種が大幅に拡大したほか、高格付銘柄についても、A格社債が拡大している。また、CDSプレミアムは、既往最高値を大幅に更新するなど不安定な動きが続いている。

為替市場をみると、円の対ドル相場は、米国景気後退の長期化・深刻化懸念が一段と強まるもとで、じりじりと水準を切り上げ、足許は、90円前後で推移している。

2. 市場別の動向

(1) 短期金融市場

わが国の短期金融市場は、実体経済環境の急激な悪化や不確実性の高まりなどを背景に、金融機関の運用調達スタンスがより慎重化する中、神経質さを増す展開となっている（図表2）。無担保コールレート（O/N）は、日本銀行がターム物オペを通じて積極的な資金供給を続ける中、12月入り後は、0.2%台で推移した（概ね誘導目標水準）。一方、GCレポレート（S/N）は、長短クレジット市場の機能低下等による法人向け貸出の増加などを背景に、都銀が資金放出を抑制気味にしていることなどから、上昇圧力のかかりやすい状況が続いている。

短国レート（3M）は、レポ市場の流動性低下によるファンディング負担が意識される中、年末越え資金確保のための換金売りの動きもあって、0.4%台後半で高止まっている。また、ターム物の銀行間金利（ユーロ円レート）についても、取引が細る中、年末越えとなる1M物が1%弱まで急上昇している。

CPレートは、日本銀行のCP買現先オペの増額から、幾分需給が和らぐ局面もみられたが、投資家の銘柄選別姿勢の強まりに、年末を控えた資金需要の高まりも加わって、上昇しやすい状況となっている（図表3）。

	11月決定会合 直前（11/19日）	期間中ボトム （終値ベース）	期間中ピーク （終値ベース）	直近終値 （12/15日）
無担コール・レート （O/N、加重平均）	0.303%	0.222% （12/12日）	0.318% （11/28日）	0.235%
GCレポ・レート （出合い、S/N）	0.400%	0.310% （12/3,10日）	0.500% （11/27-28日）	0.360%
短国レート （3M）	0.445%	0.435% （11/20-21日）	0.495% （11/28日）	0.465%
短国レート （6M）	0.435%	0.435% （11/19-25日）	0.465% （11/28-12/1日）	0.450%
短国レート （1Y）	0.425%	0.420% （11/20日）	0.460% （11/28-12/1日）	0.450%
ユーロ円金先レート （2009/3月限）	0.690%	0.690% （11/19日）	0.815% （11/27日）	0.715%

—— この間、グローバルにみた金融機関のドル調達環境に関しては、無担

保調達（LIBOR）、為替スワップ（ドル転）のいずれも、主要国中銀の固定金利によるドル供給オペ開始以降、タイト感は後退してきたが、依然プレミアムは高水準にあり、緊張は払拭されていない（図表4、5）。

OISレートから、日本銀行の政策運営に対する市場参加者の見方を窺うと、実体経済環境の悪化が明確になるにつれ、年明け後の利下げを織り込む動きが徐々に増えている（図表6）。

—— ユーロ円金利先物レートをみると、フォワードレート・カーブは、年末越えのプレミアムを反映して、期近物が上方シフトする姿となっている（図表7）。

（2）債券市場

債券市場をみると、世界的な景況感の悪化等を背景に、米欧の長期金利が急低下する中、わが国の長期金利（10年新発債流通利回り）も小幅ながら低下し、足許は概ね1.4%近傍で推移している（図表8）。

	11月決定会合 直前（11/19日）	期間中ピーク （終値ベース）	期間中ボトム （終値ベース）	直近終値 （12/15日）
2年新発債 利回り	0.545%	0.595% （11/26・27日）	0.530% （11/20,12/12・15日）	0.530%
5年新発債 利回り	0.880%	0.910% （12/10日）	0.825% （12/2日）	0.855%
10年新発債 利回り	1.465%	1.465% （11/19日）	1.350% （12/2日）	1.375%
20年新発債 利回り	2.140%	2.140% （11/19日）	2.050% （12/5日）	2.095%

—— イールドカーブについてみると、11月決定会合時に比べ、短期ゾーンがほぼ同水準となる一方、長期ゾーンは幾分低下する姿となっている（図表9）。

—— 債券利回りの変動要因をみると、低下要因としての「景気動向」と「海外金利」の影響が足許で幾分強まっている（図表11）。一方、「債券需給」は、市場流動性の低下などを反映し、利回りの上昇要因として作用している。このことが、レポ市場の機能低下によるファンディング負担と相俟って、わが国の長期金利の低下幅を、海外金利に比べ小幅なものにしているとみられる。

債券相場の先行きについては、市場流動性が低下した状態が続くもとで（図表10）、不安定な展開を見込む向きが多い。

—— インプライド・ボラティリティは、10月中旬以降、低下したが、長い目でみれば、引き続き高水準にある（図表9）。

（3）クレジット・スプレッド等

わが国のクレジット市場をみると、実体経済や企業業績の急速な悪化が懸念される中、タイト感が増している。一般債流通利回りの対国債スプレッドをみると、年末・年度末を控え、最終投資家やマーケットメイカー（証券会社）のリスク回避姿勢が一段と強まる中、低格付銘柄や特定業種（不動産・建設、消費者金融など）が大幅に拡大したほか、高格付銘柄についても、A格社債が拡大している（図表12）。また、与信コストの上昇や有価証券の評価損拡大等による業績悪化を背景に、銀行セクターのスプレッドも拡大している。CDSプレミアムは、既往最高値を大幅に更新するなど不安定な動きが続いている（図表13）。

	11月決定会合 直前（11/19日）	期間中ボトム （終値ベース）	期間中ピーク （終値ベース）	直近終値 （12/12日）
A格社債の対国債 スプレッド（5年）	1.186%	1.186% （11/19日）	1.546% （12/12日）	1.546%
BBB格社債の対国債 スプレッド（同）	2.069%	2.069% （11/19日）	2.808% （12/10日）	2.796%
CDSプレミアム （iTraxx Japan 5年）	290.8bps	290.8bps （11/19日）	374.5bps （12/5日）	340.6bps

—— 機関投資家のリスク回避姿勢の強まりや短期金融市場の機能低下を背景に、大手銀行や証券会社が、個人向けに社債や劣後債を発行する動きが12月に入ってみられるようになっている。

クレジット・スプレッドの先行きについては、当面、不安定な動きが続くとの見方が多い。

—— 今後年度末にかけて、97～98年度に発行した社債の償還が増加していく。高格付け企業も含め、償還に対応した新発債の起債スプレッドは、投資家のリスクテイク余力の低下から、高水準になることが予想されて

いる。

(4) 株式市場

わが国の株価（日経平均株価）は、10月に大幅に下落した後、企業収益の急速な下方修正などを受け、低水準のまま不安定な動きを続けている（図表14）。足許は、8千円台で推移している。

	11月決定会合 直前（11/19日）	期間中ボトム （終値ベース）	期間中ピーク （終値ベース）	直近終値
TOPIX	827pts	782pts （11/20日）	849pts （12/11日）	846pts （12/15日）
日経平均株価	8,273円	7,703円 （11/20日）	8,720円 （12/11日）	8,664円 （12/15日）
NY ダウ平均	7,997ドル	7,552ドル （11/20日）	8,934ドル （12/8日）	8,629ドル （12/12日）
NASDAQ 総合指数	1,386pts	1,316pts （11/20日）	1,571pts （12/8日）	1,540pts （12/12日）

—— わが国株式の主体別売買動向をみると、年金資金とみられる信託銀行経由の買いが継続している（図表15）。また、事業法人が自社株買いを継続しているほか、株価下落による値ごろ感の高まりから、個人も買い越し基調となっている。一方、外国人投資家は、売り越し基調を続けている。

—— この間、REIT価格は、10月に、上場REITの破綻から急落した後、資金繰りや不動産市況の悪化を懸念して、不安定な動きを続けている（図表15）。

株式相場の先行きについては、世界的な景気後退圧力や円高進行が懸念される中で、もう一段の下振れリスクを内包した不安定な地合いが続くとの見方が多い。

—— インプライド・ボラティリティは、10月に急上昇した後、高水準で推移している（図表15）。

(5) 為替市場

為替市場をみると、円の対ドル相場（NY市場16時時点ベース<以下同

じ>) は、11月の決定会合以降、米国景気後退の長期化・深刻化懸念が一段と強まるもとで、じりじりと水準を切り上げ、足許は90円前後で推移している(図表16、17)。

— ユーロの対ドル相場は、11月決定会合以降、1.25～1.30のレンジ圏内で推移してきたが、足許は欧米金利差の拡大を受けて1.33台にまで上昇している。

— クロス円相場は、9～10月のキャリーポジションの大幅な巻き戻しから下落した後は、振れを伴いつつもレンジ圏内で推移している(図表20)。

為替相場の先行きについては、不安定な地合いが続くとみる向きが多い。

— ドル/円オプションのインプライド・ボラティリティ(1M)、リスクリバーサル(1M)のドルプット超幅とも、11月決定会合以降、幾分低下したが、依然として、リーマン・ブラザーズ破綻直後の水準を上回る高水準で推移している(図表18)。

— IMM先物取引ポジションをみると、ドル/円では、円ロング超の状態が続いている。ユーロ/ドルでは、ユーロ・ショート超幅は緩やかな縮小傾向にある(図表19)。

以 上

2008.12.15

金融市場局

「最近の金融・為替市場の動向」参考計表

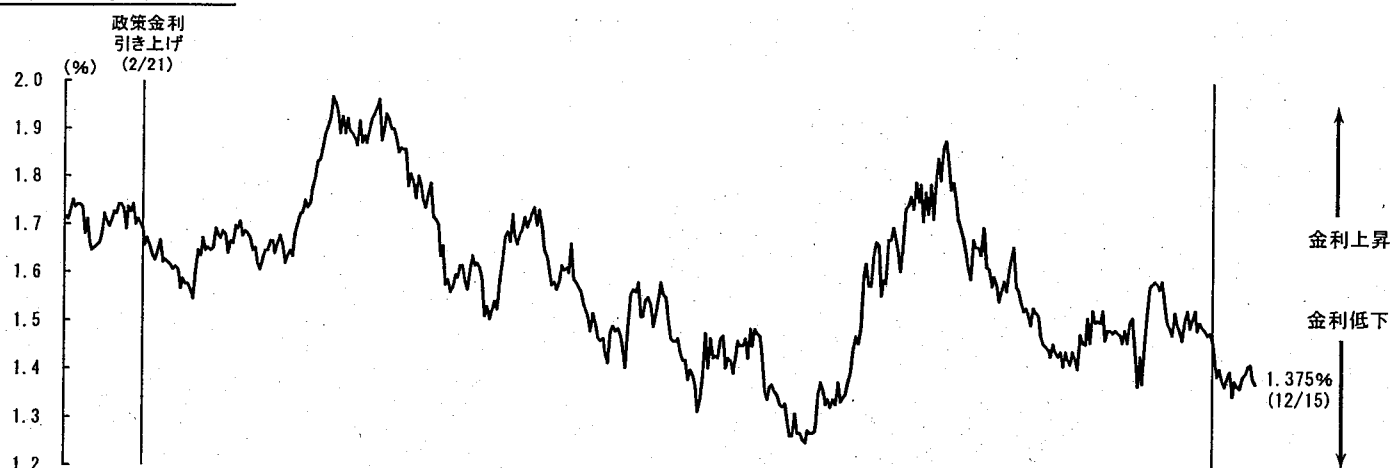
- (図表 1) 金融・為替市場の動向
- (図表 2) 短期金利の推移
- (図表 3) CP 市場の動向
- (図表 4) ターム物レートの推移
- (図表 5) ドル調達プレミアムの推移
- (図表 6) フォワードレート等の推移 (1)
- (図表 7) フォワードレート等の推移 (2)
- (図表 8) 長期金利の推移
- (図表 9) イールド・カーブの動向
インプライド・ボラティリティの推移
- (図表 10) フォワードレート・カーブの動向
長国先物の値幅・出来高比率の推移
- (図表 11) 市場参加者が注目する債券利回り変動要因
- (図表 12) 社債流通利回りの対国債スプレッドの推移
- (図表 13) CDS プレミアムの推移
- (図表 14) 株式相場の推移
- (図表 15) 主体別売買動向等
- (図表 16) 主要為替相場の推移
- (図表 17) 最近の為替相場動向とその変動要因
- (図表 18) 通貨オプション市場の動向
- (図表 19) 通貨先物、投資信託の動向
- (図表 20) クロス円相場の推移
- (図表 21) 外為証拠金取引の動向
- (図表 22) エマージング通貨、株の動向
- (図表 23) 商品の動向

(注) 図表中の縦線は、特に断りのない限り前回会合の前営業日 (11/19 日) を表す。

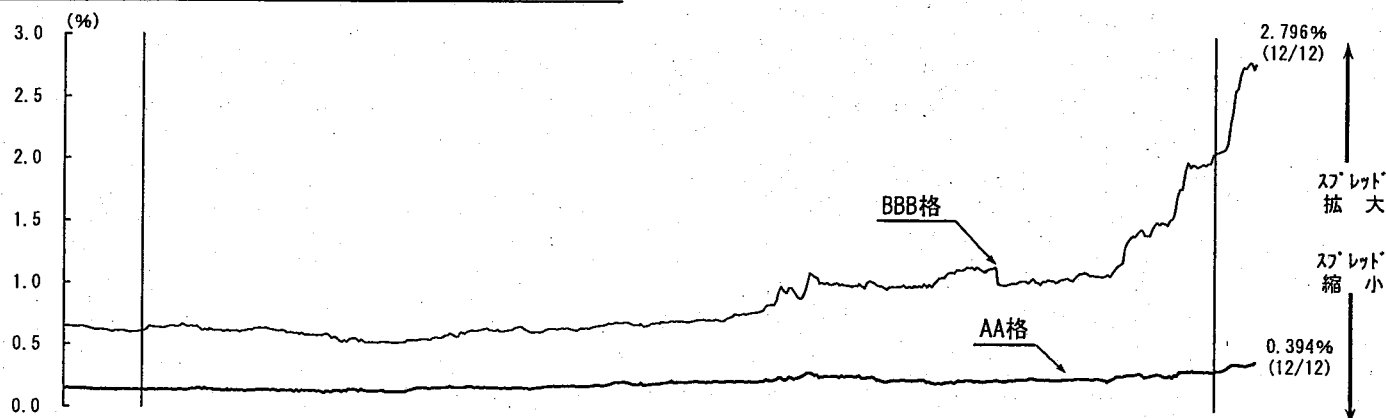
(図表1)

金融・為替市場の動向

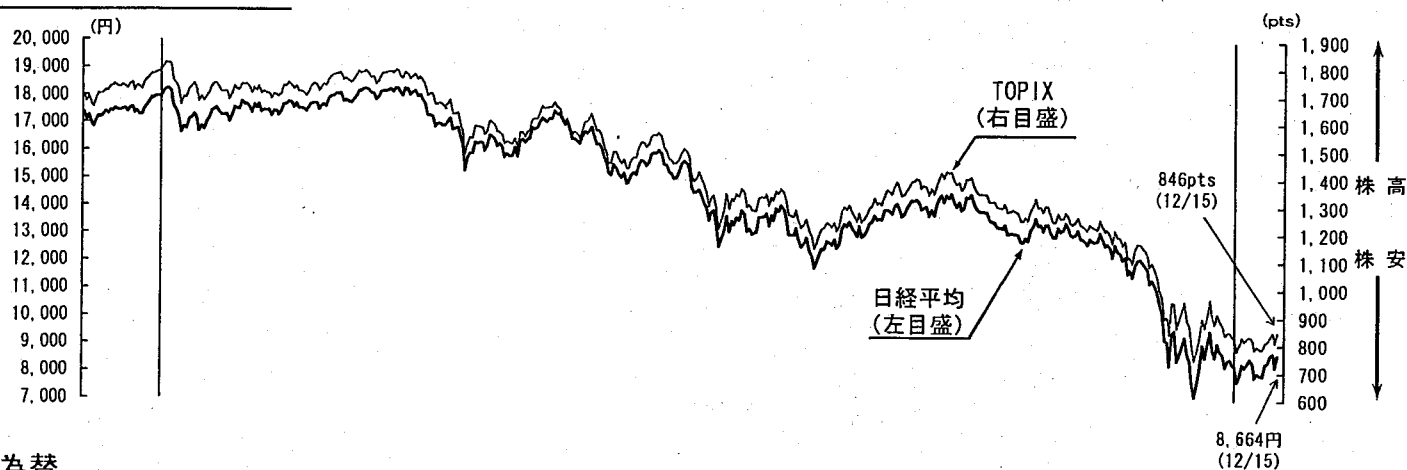
10年新発債利回り



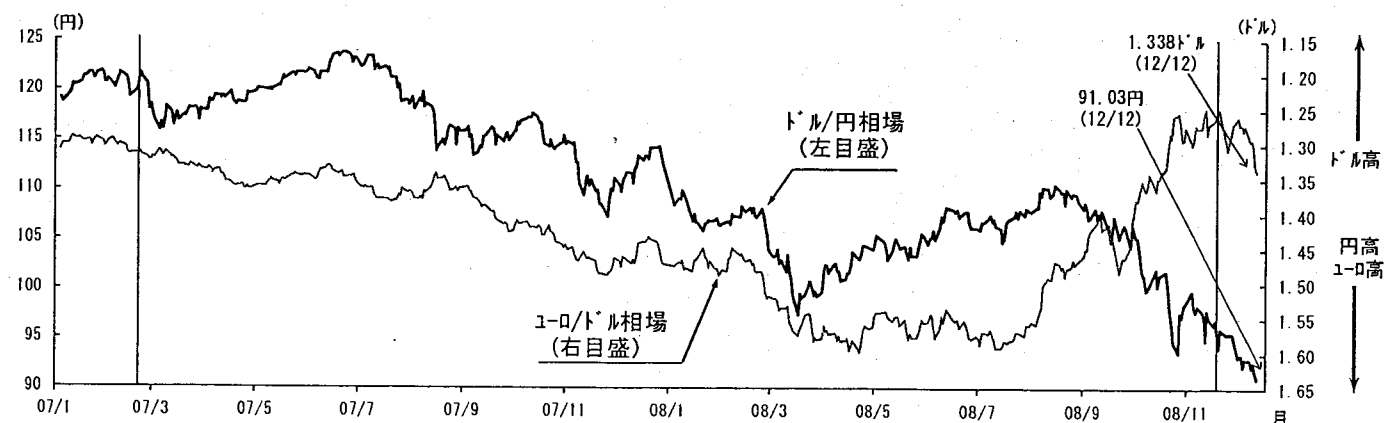
社債流通利回りの対国債スプレッド（残存5年）



日経平均株価・TOPIX



為替

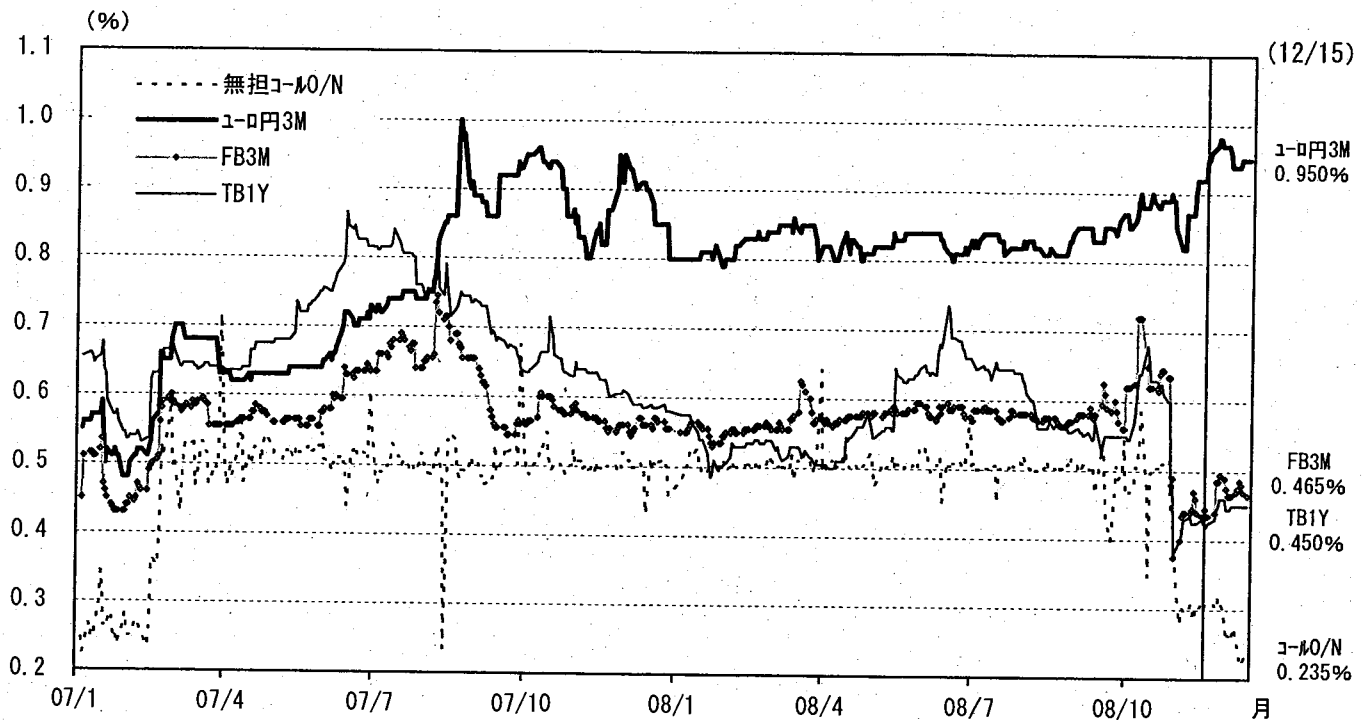


(注) 1. 社債流通利回りは売買参考統計値、格付けはR&Iによる。集計対象は、残存3年以上7年未満の銘柄。
2. 為替相場は原則NY市場16時時点。

(図表2)

短期金利の推移

(1) 短期金利の推移



(2) ターム物レート等の推移

(%)

	無担コール	ユーロ円レート				短期レート			レポレート	ユーロ円金先
	0/N	1W	1M	3M	6M	3M	6M	1Y	S/N	09/3月限 (中心限月)
08/11/19	0.303	0.550	0.610	0.950	0.980	0.445	0.435	0.425	0.400	0.690
11/20	0.306	0.610	0.650	0.950	0.980	0.435	0.435	0.420	0.410	0.730
11/21	0.305	0.610	0.650	0.960	0.980	0.435	0.435	0.425	0.420	0.730
11/25	0.307	0.600	0.650	0.970	0.980	0.440	0.435	0.430	0.430	0.790
11/26	0.304	0.600	0.670	0.980	0.990	0.485	0.445	0.445	0.480	0.790
11/27	0.306	0.600	0.900	0.980	0.990	0.485	0.455	0.450	0.500	0.815
11/28	0.318	0.600	0.900	0.970	0.990	0.495	0.465	0.460	0.500	0.805
12/1	0.299	0.610	0.900	0.970	0.990	0.490	0.465	0.460	0.470	0.775
12/2	0.279	0.600	0.900	0.970	0.990	0.475	0.450	0.445	0.350	0.720
12/3	0.257	0.580	0.890	0.960	0.980	0.465	0.450	0.445	0.310	0.755
12/4	0.263	0.500	0.870	0.940	0.990	0.465	0.450	0.445	0.330	0.755
12/5	0.256	0.450	0.880	0.940	0.990	0.465	0.455	0.450	0.370	0.765
12/8	0.275	0.450	0.900	0.940	1.000	0.470	0.455	0.450	0.400	0.785
12/9	0.255	0.430	0.890	0.940	1.000	0.475	0.455	0.450	0.350	0.785
12/10	0.247	0.400	0.900	0.950	1.010	0.485	0.455	0.450	0.310	0.775
12/11	0.229	0.400	0.900	0.950	1.000	0.480	0.455	0.450	0.370	0.770
12/12	0.222	0.400	0.890	0.950	1.000	0.470	0.450	0.450	0.390	0.730
12/15	*0.235	0.390	0.890	0.950	1.000	0.465	0.450	0.450	0.360	0.715

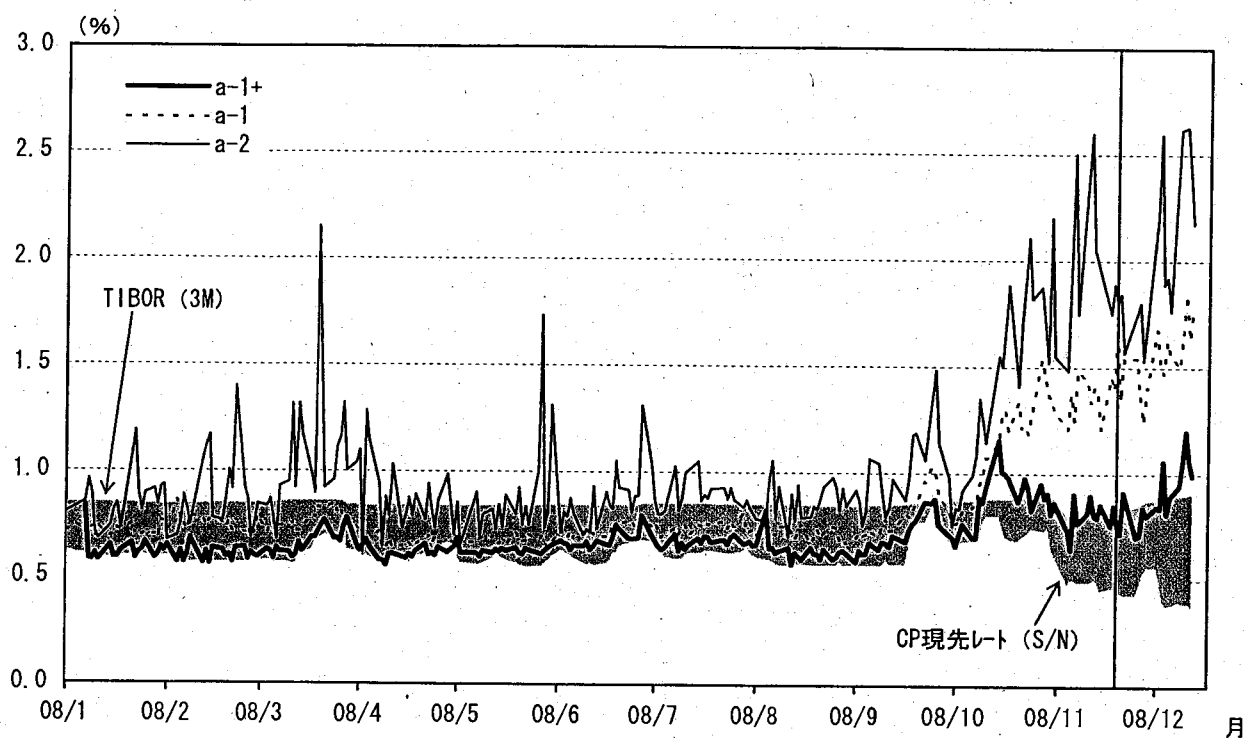
* 速報値

(注) ユーロ円レート・レポレートは、ヒアリングベースによるもので対外非公表。

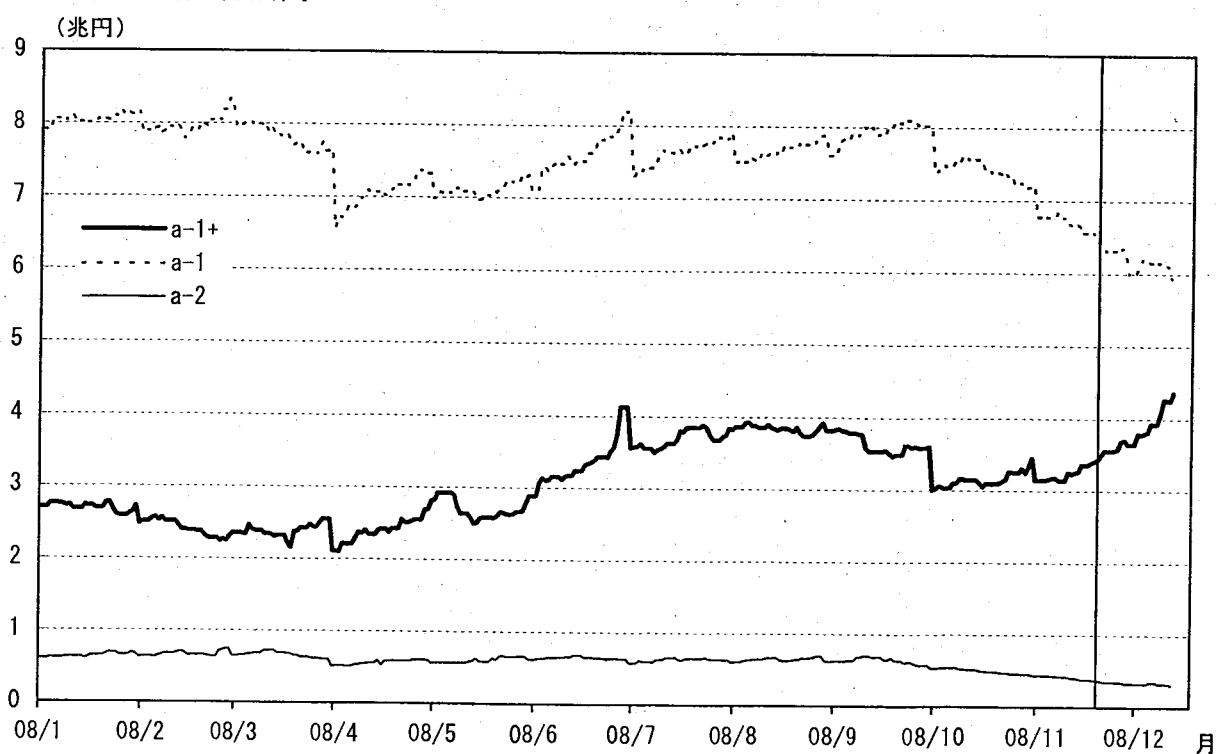
(出所) 日本相互証券、東京金融取引所、日本銀行

CP市場の動向

(1) 格付別発行レート



(2) 格付別発行残高



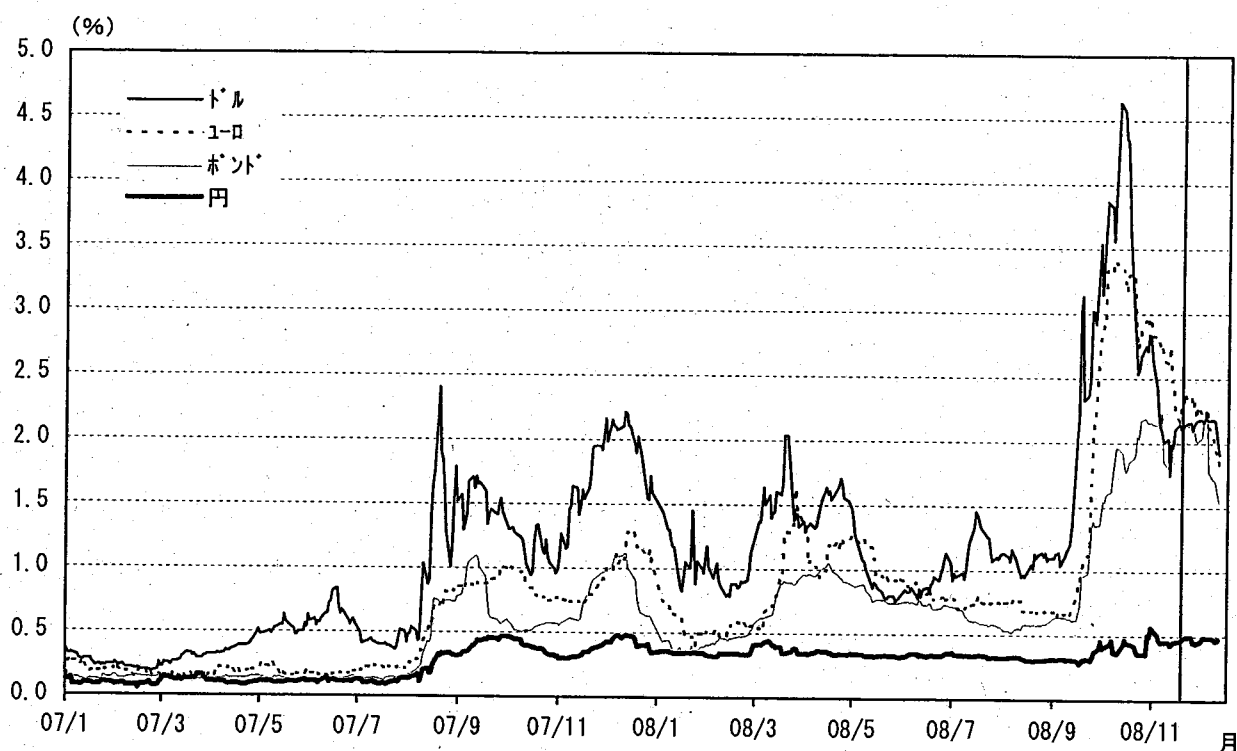
(注) 1. 集計対象は、CP等買現先オペの対象先による引受分（全ターム）。格付けは基本的にR&Iによる。

2. 対外非公表。直近は12/12日。

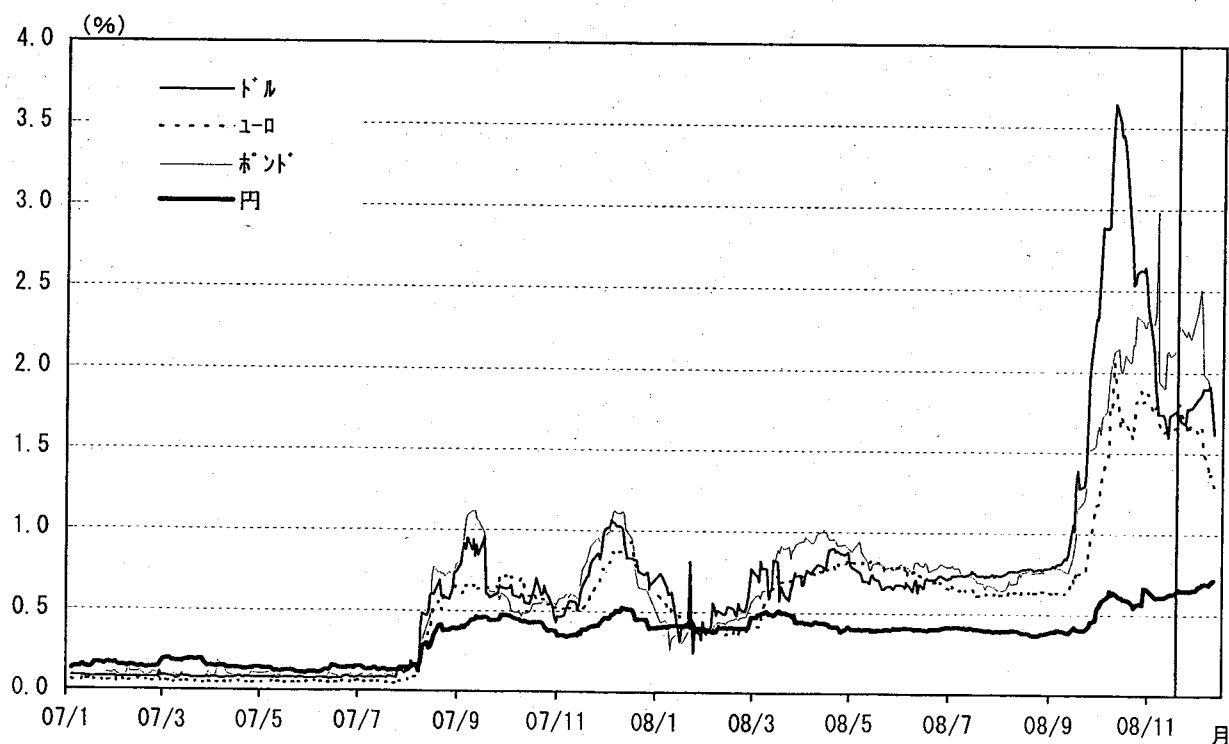
(出所) 全国銀行協会、日本銀行

ターム物レートの推移

(1) TEDスプレッド (LIBOR-FB/TB、3か月物) の推移



(2) LIBOR-OISスプレッド (3か月物) の推移



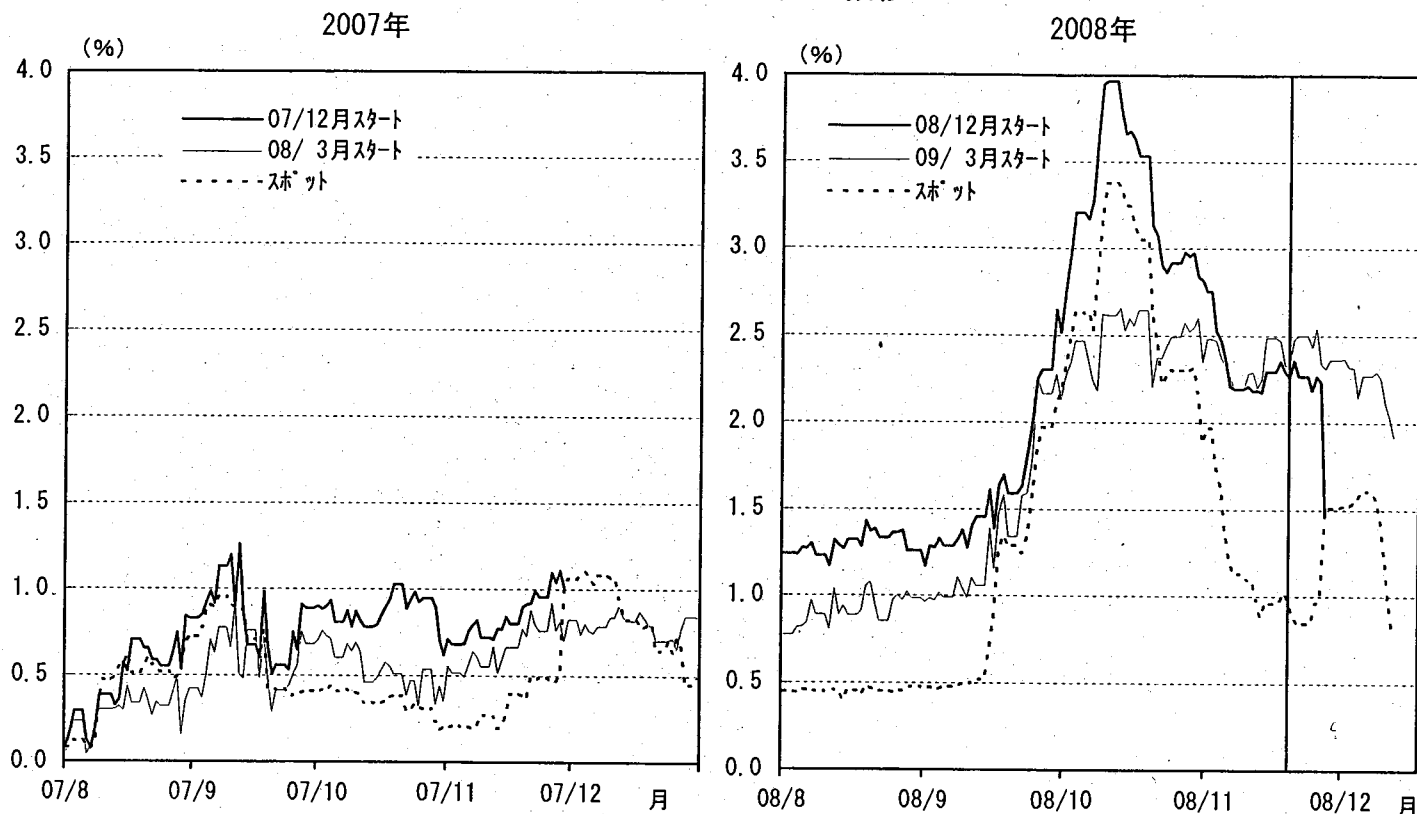
(注) 1. (1)のボンドのFB/TBIは、3か月物レポレートで代用。

2. 直近は12/12日。

(出所) 日本相互証券、Bloomberg、ロイター、メイタン・トラディション

ドル調達プレミアムの推移

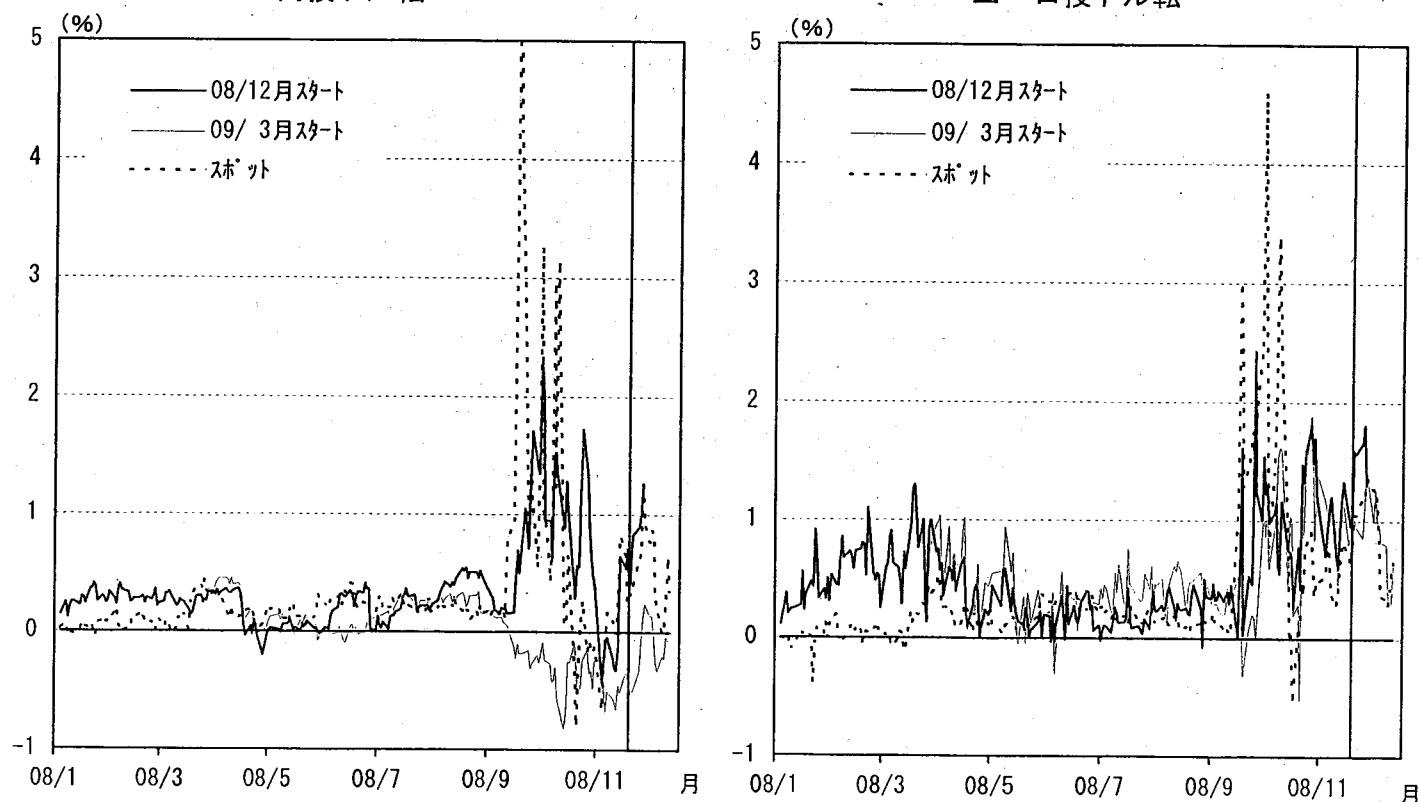
(1) ドルLIBOR-OISスプレッド (1か月物フォワード) の推移



(2) ドル転コスト対LIBORスプレッド (1か月物フォワード) の推移

円投ドル転

ユーロ投ドル転

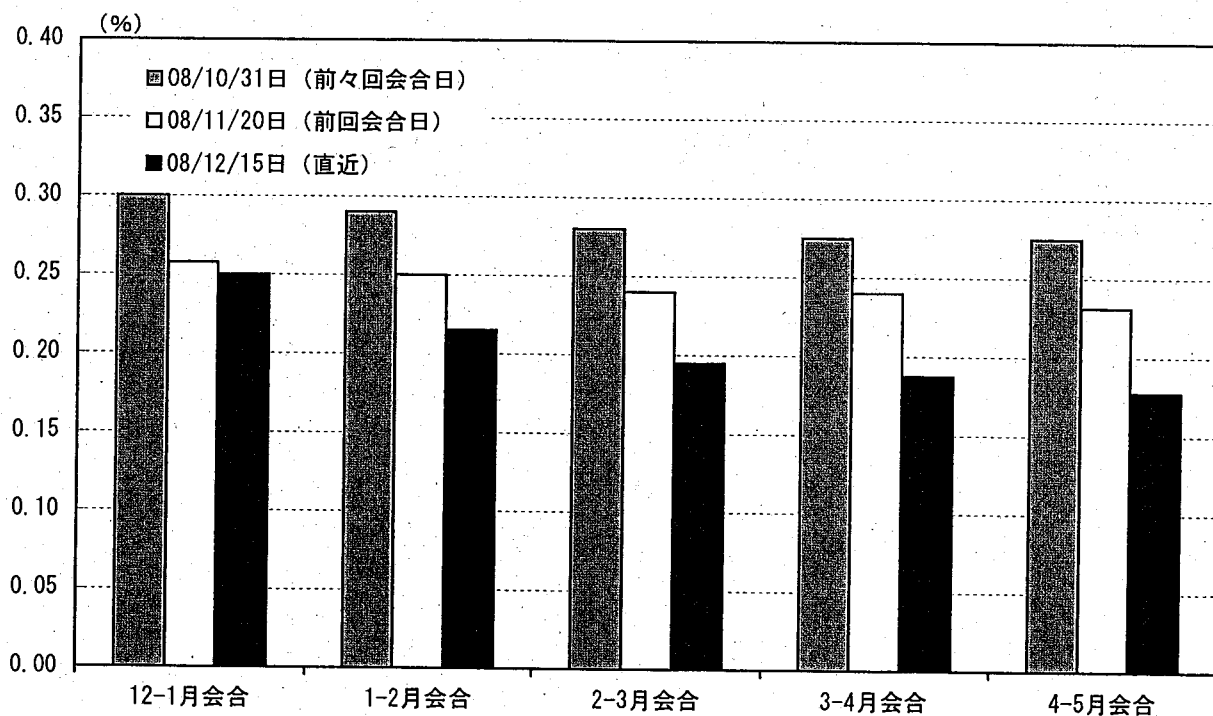


(注) 直近は12/12日。

(出所) Bloomberg、メイタン・トラディション、ロイター

フォワードレート等の推移 (1)

(1) OISレート (会合間取引) の動向

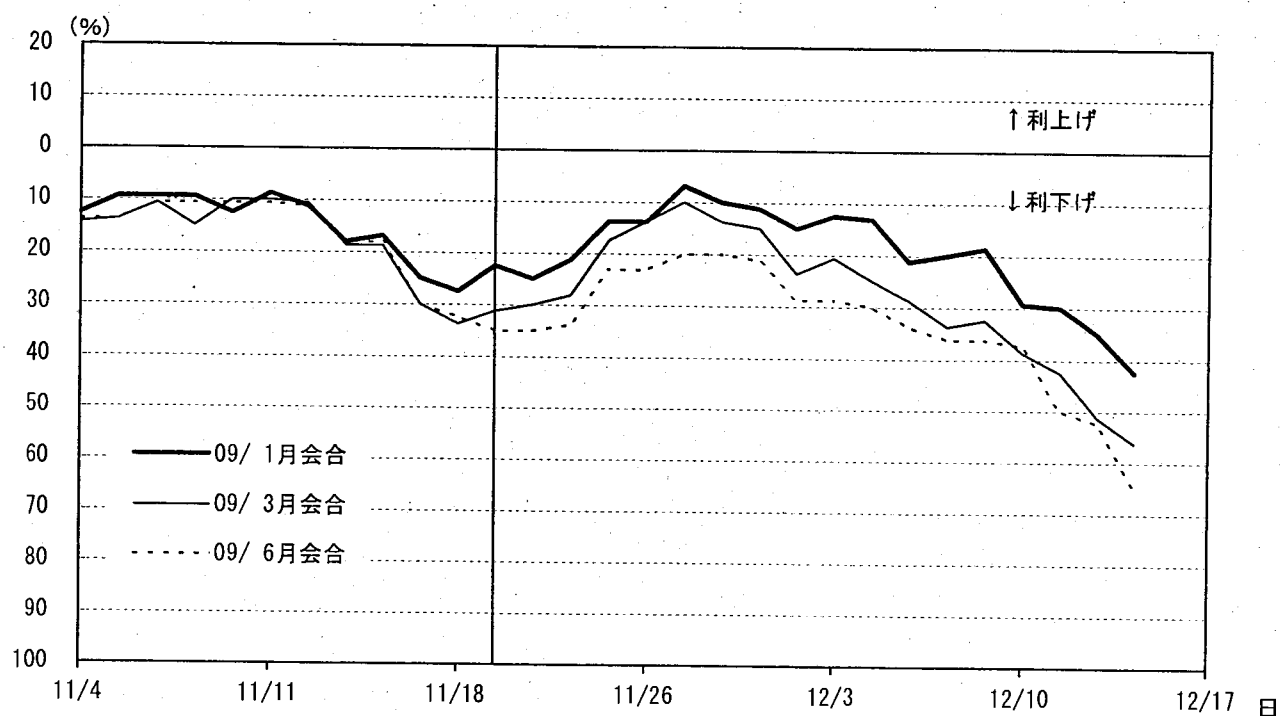


(注) 1. 会合間取引レートの仲値。

2. 直近は12/15日。

(出所) メイタン・トラディション

(2) OISレートからみた政策変更 (±20bps) の織り込み度合い



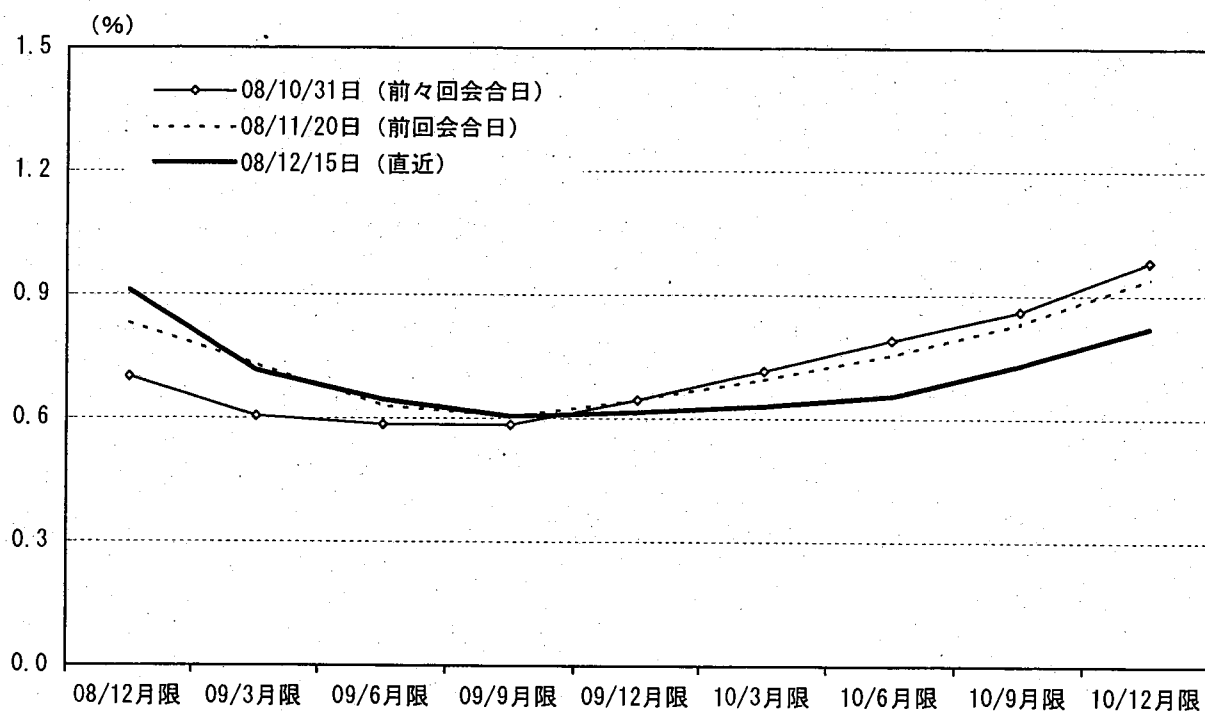
(注) 1. 会合間取引レートの仲値から算出。

2. 直近は12/15日。

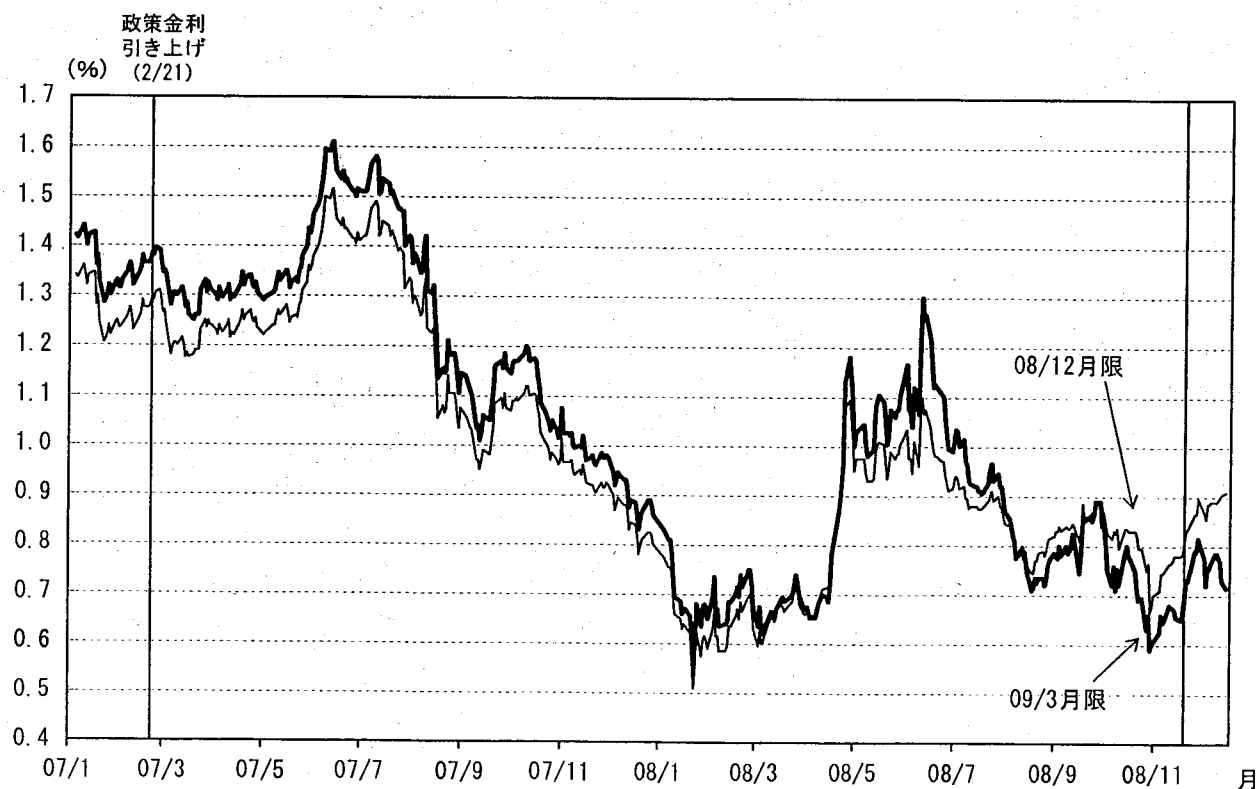
(出所) メイタン・トラディション、日本銀行

フォワードレート等の推移 (2)

(1) ユーロ円金利先物からみたフォワードレート・カーブ



(2) ユーロ円金利先物レートの推移

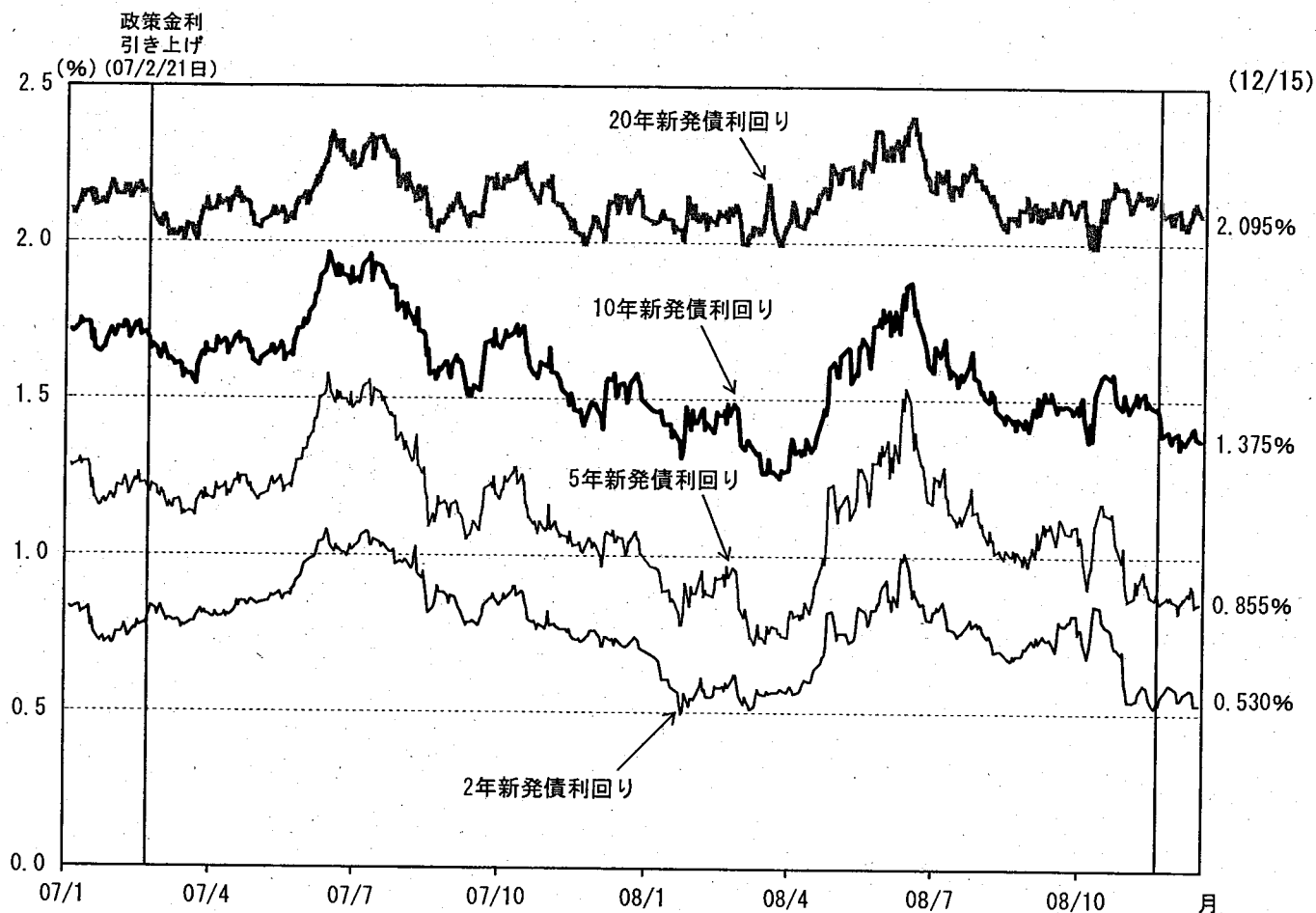


(注) 直近は12/15日。

(出所) 東京金融取引所

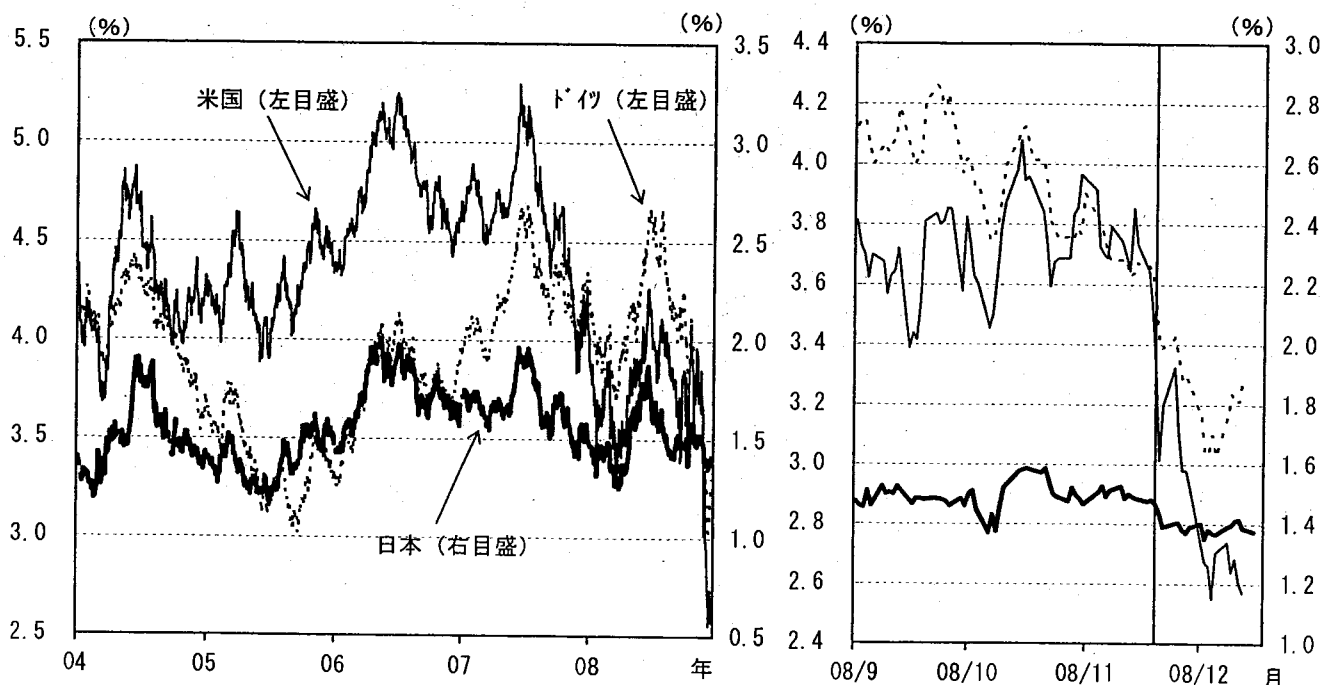
長期金利の推移

(1) 国内年限別の推移



(出所) 日本相互証券

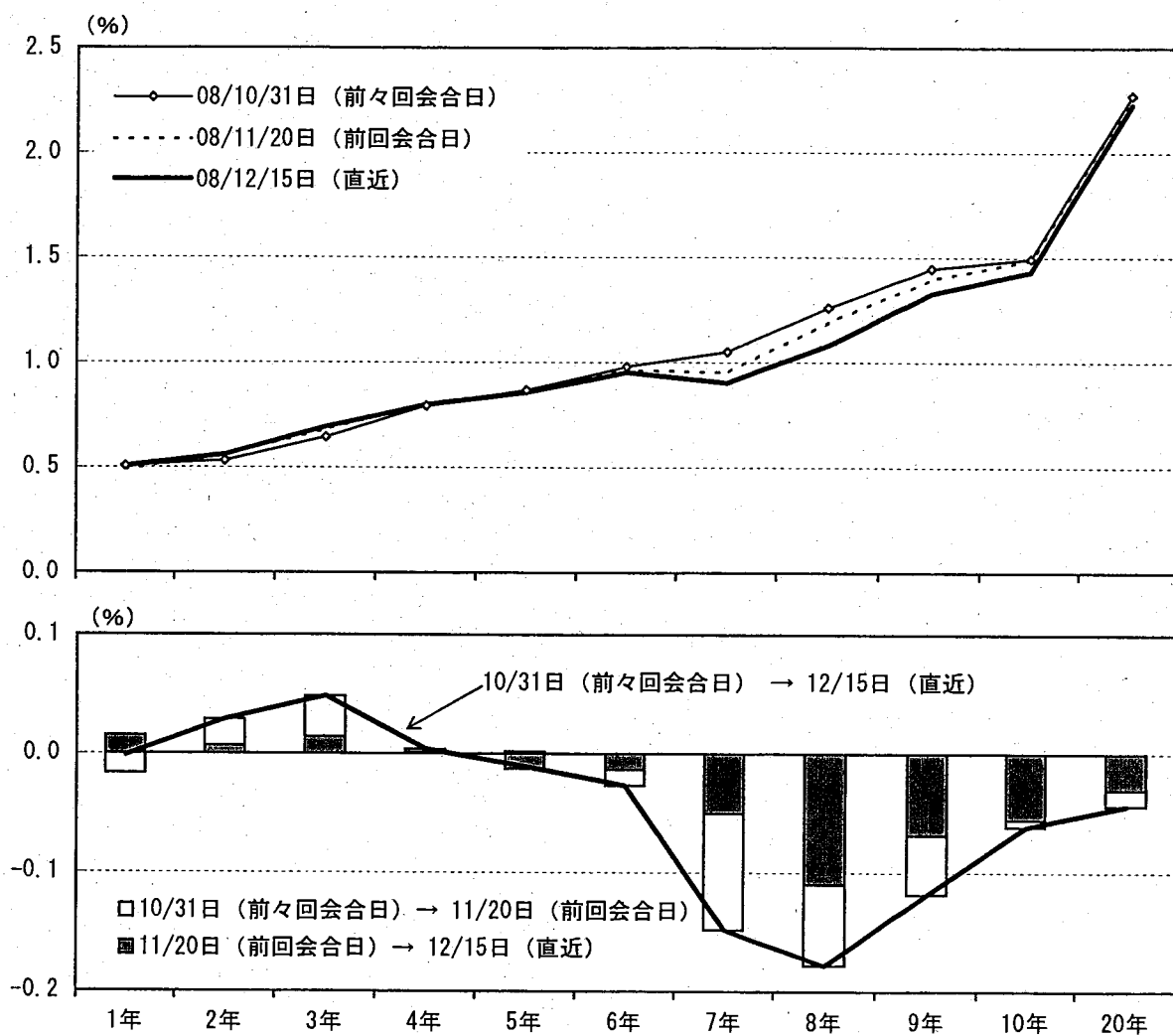
(2) 10年国債利回りの推移



(注) 直近は、日本は12/15日、その他は12/12日。

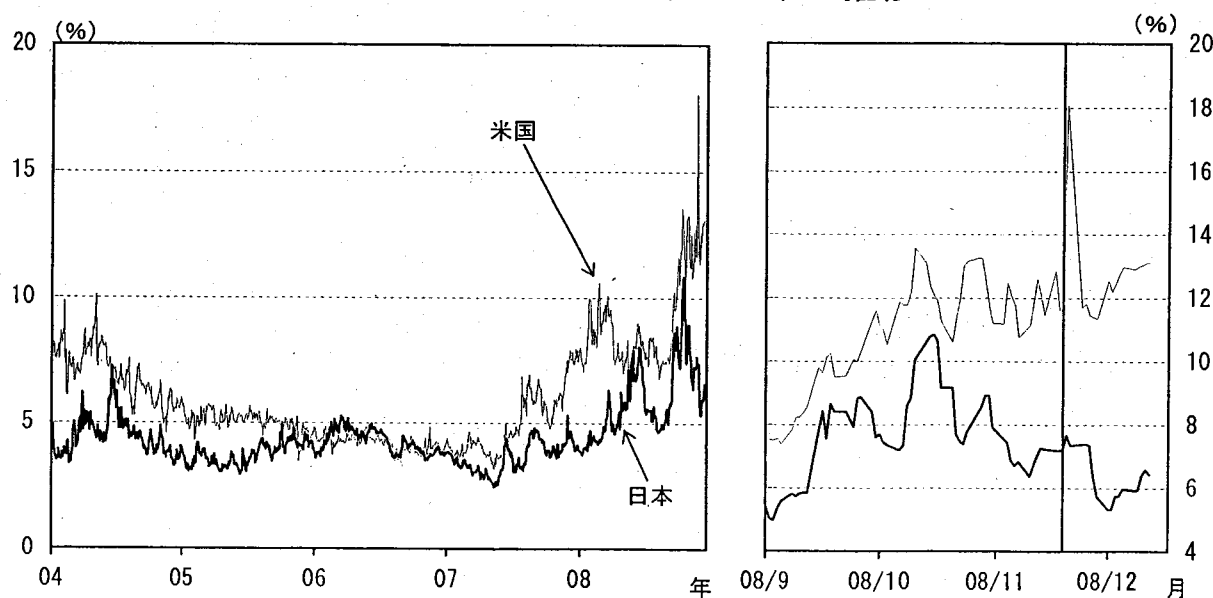
(出所) Bloomberg、日本相互証券

イールド・カーブの動向



(出所) 日本証券業協会、日本銀行

インプライド・ボラティリティの推移

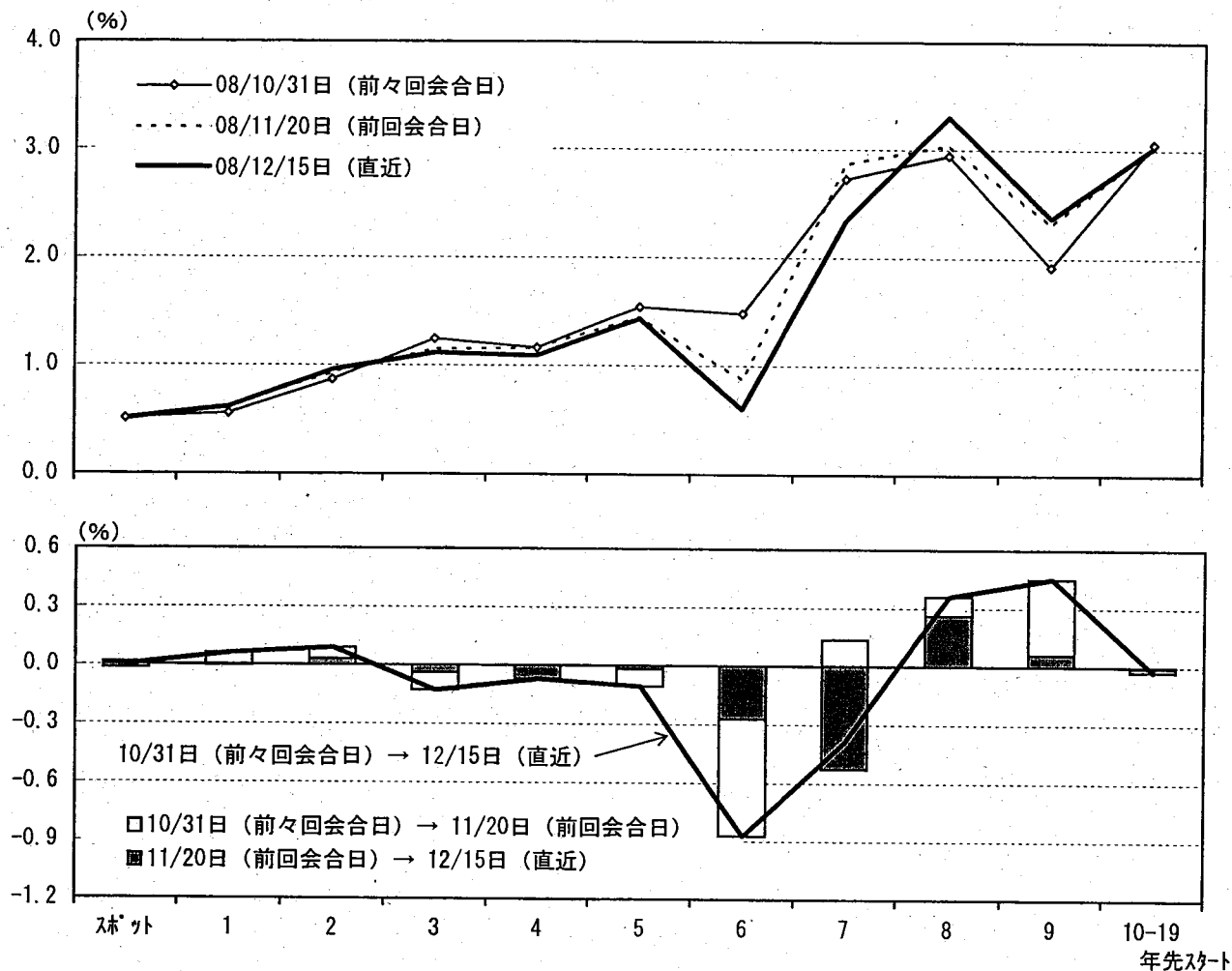


(注) 直近は12/12日。

(出所) 三菱UFJ証券、Bloomberg

(図表10)

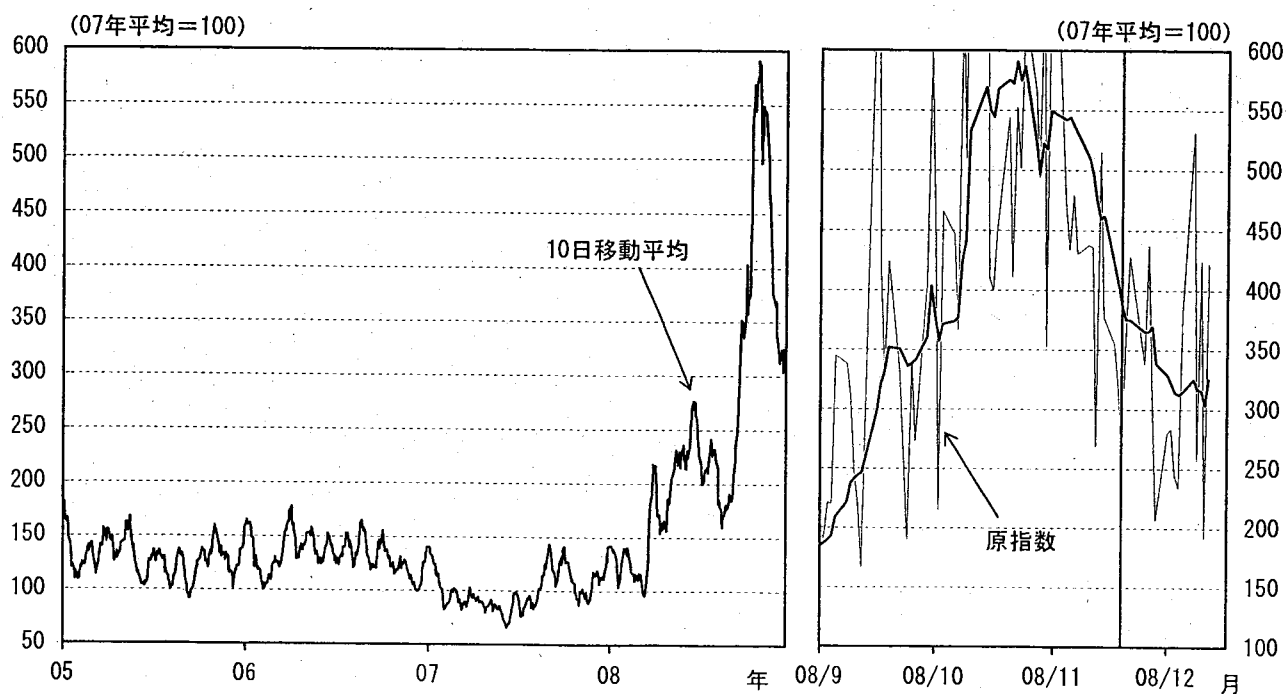
フォワードレート・カーブの動向



(注) 1年物。

(出所) 日本証券業協会、日本銀行

長国先物の値幅・出来高比率の推移

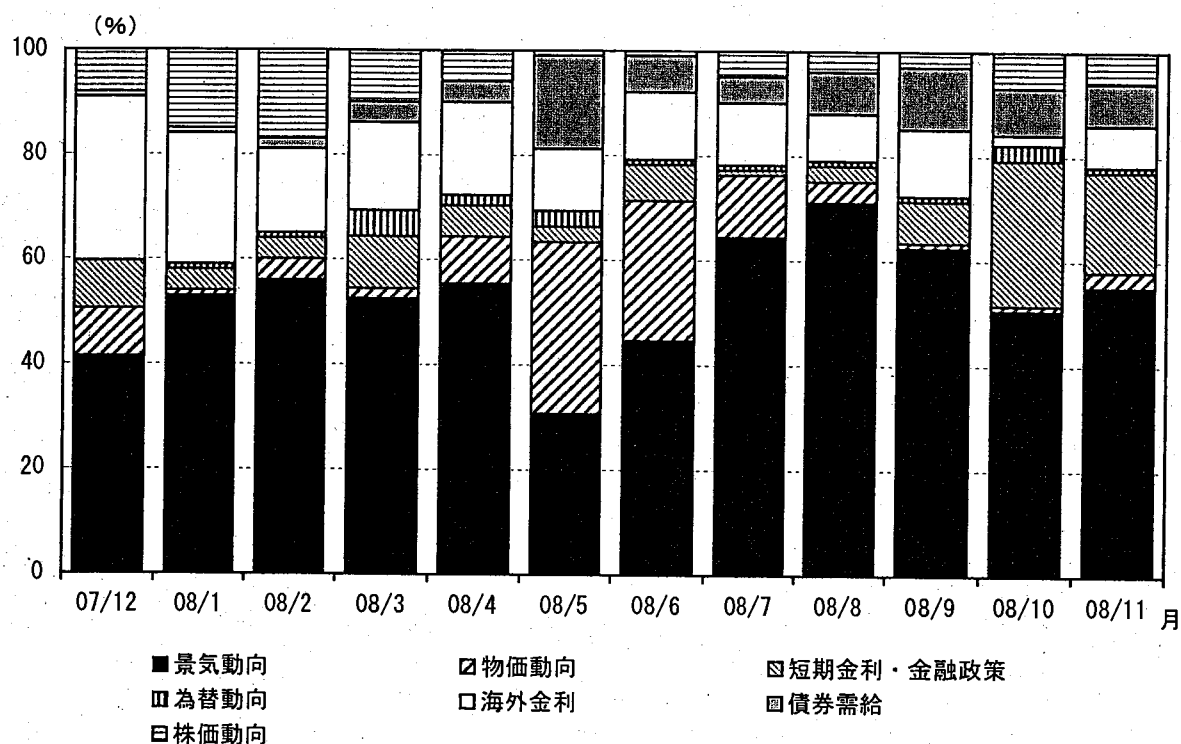


(注) 直近は12/12日。

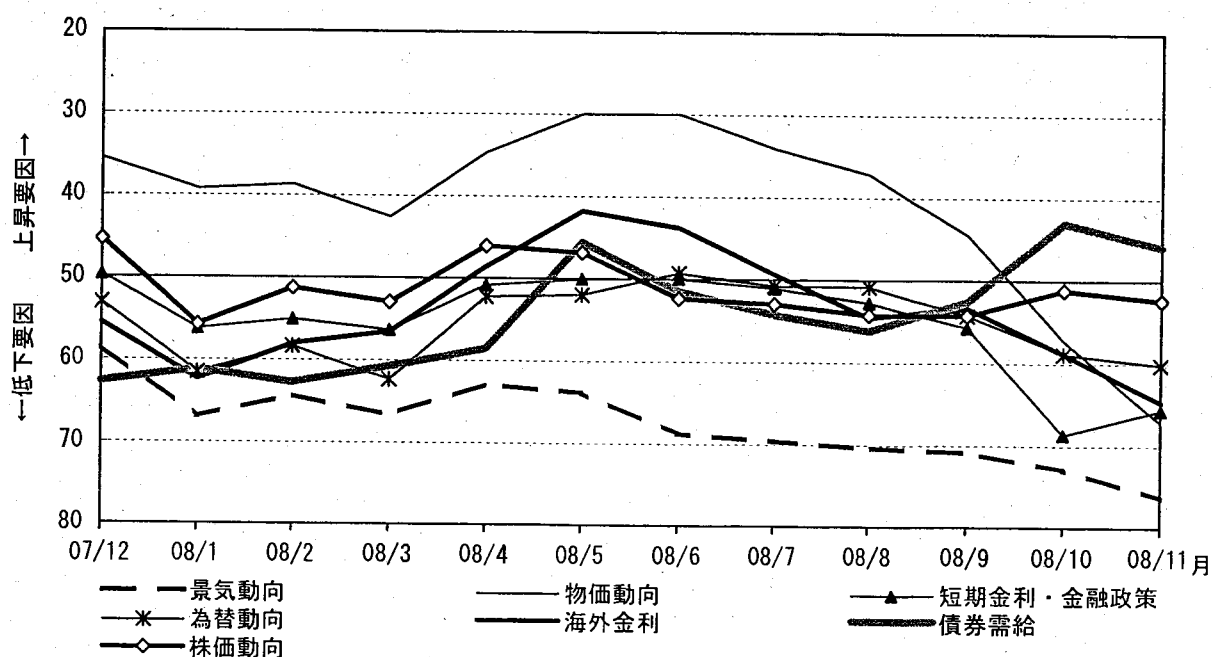
(出所) QUICK

市場参加者が注目する債券利回り変動要因

(1) 注目する債券利回り変動要因



(2) 注目する変動要因の影響（各要因は利回りにどう影響するか）



(注) 各要因について、
強い低下要因=100、低下要因=75、中立・不明=50、上昇要因=25、強い上昇要因=0
として指数化。

(調査方法) 調査期間：08/11/25日～08/11/27日（10年新発債利回り：1.375～1.400%）

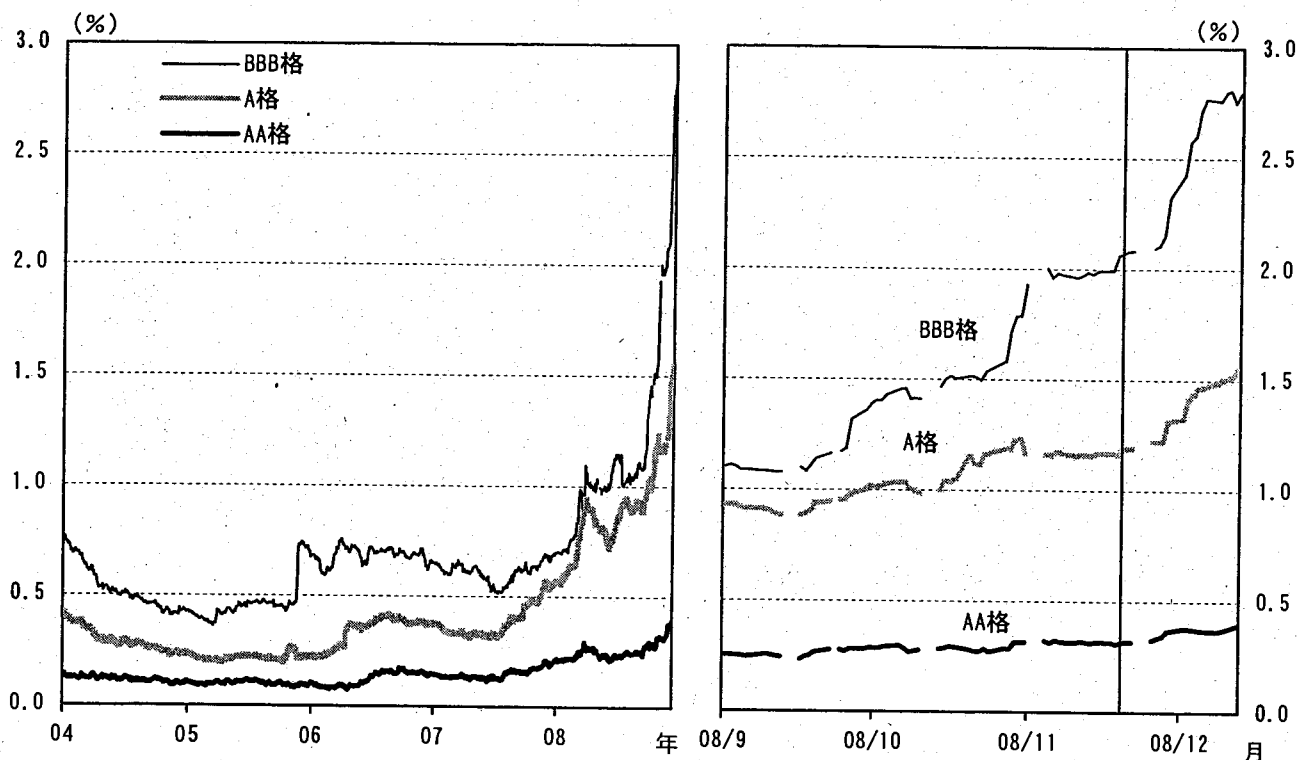
調査対象：証券会社・機関投資家の債券担当208名（回答率 70.2%）

(出所) 「QSS債券月次調査」

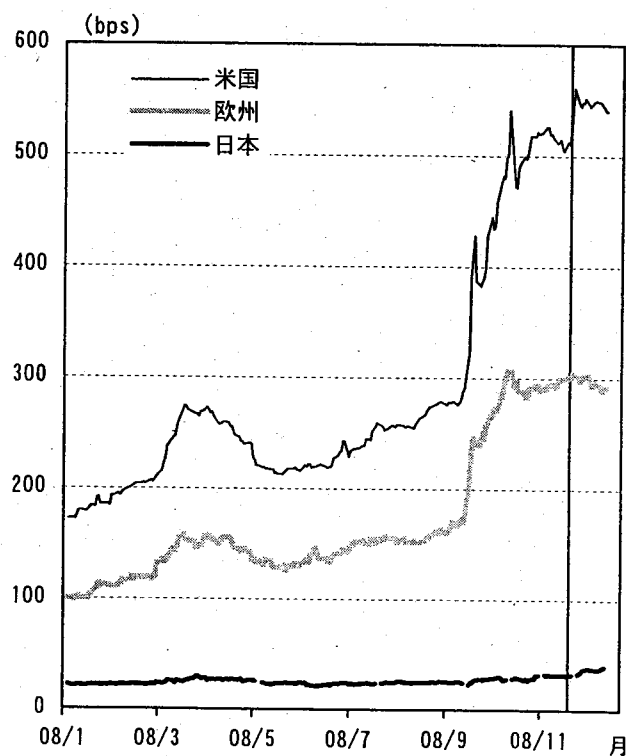
(図表12)

社債流通利回りの対国債スプレッドの推移

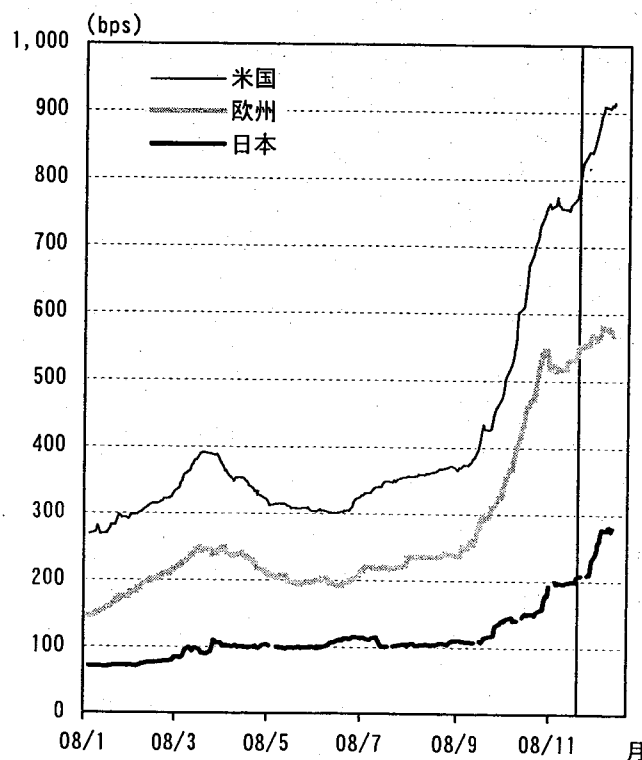
(1) 国内社債の動向



(2) 高格付社債 (AA格) の動向



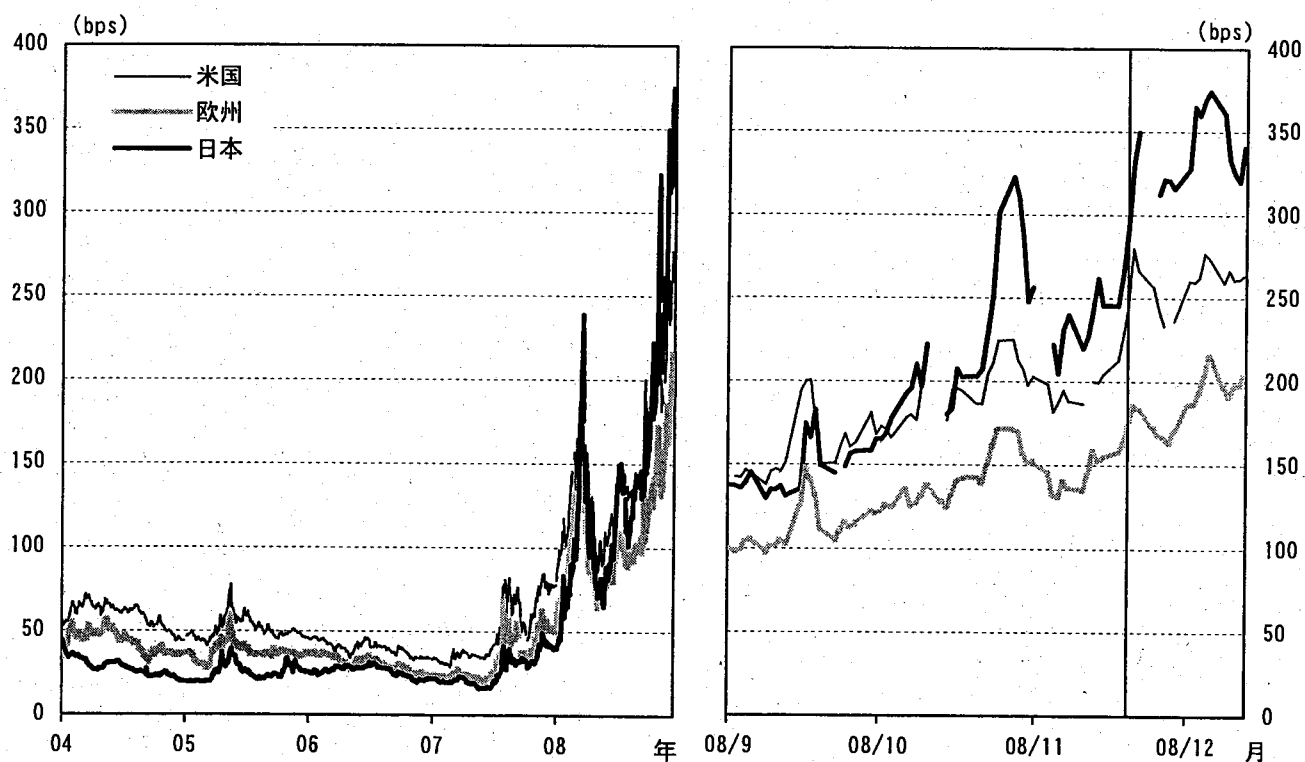
(3) 低格付社債 (BBB格) の動向



(注) 1. 日本の社債流通利回りは売買参考統計値、格付はR&Iによる。集計対象は、残存3年以上7年未満の銘柄。
 2. 米欧はメリルリンチ算出、格付けはMoody's、S&P、Fitchによる。集計対象は、残存3年以上5年未満の銘柄。
 3. 直近は12/12日。

(出所) Bloomberg、日本証券業協会、日本銀行

CDSプレミアムの推移



(注) 1. 以下の各インデックス。年限は5年。

日本: iTraxx Japan 米国: CDX.NA.IG 欧州: iTraxx Europe。

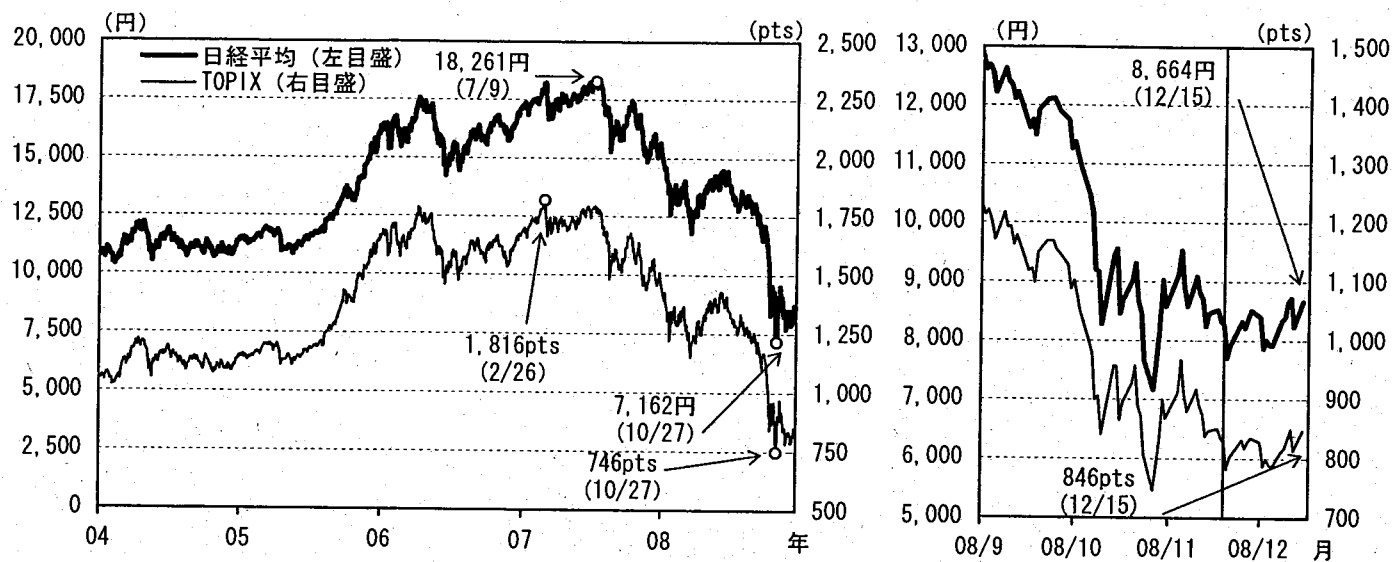
2. 直近は12/12日。

(出所) Markit、JPモルガン

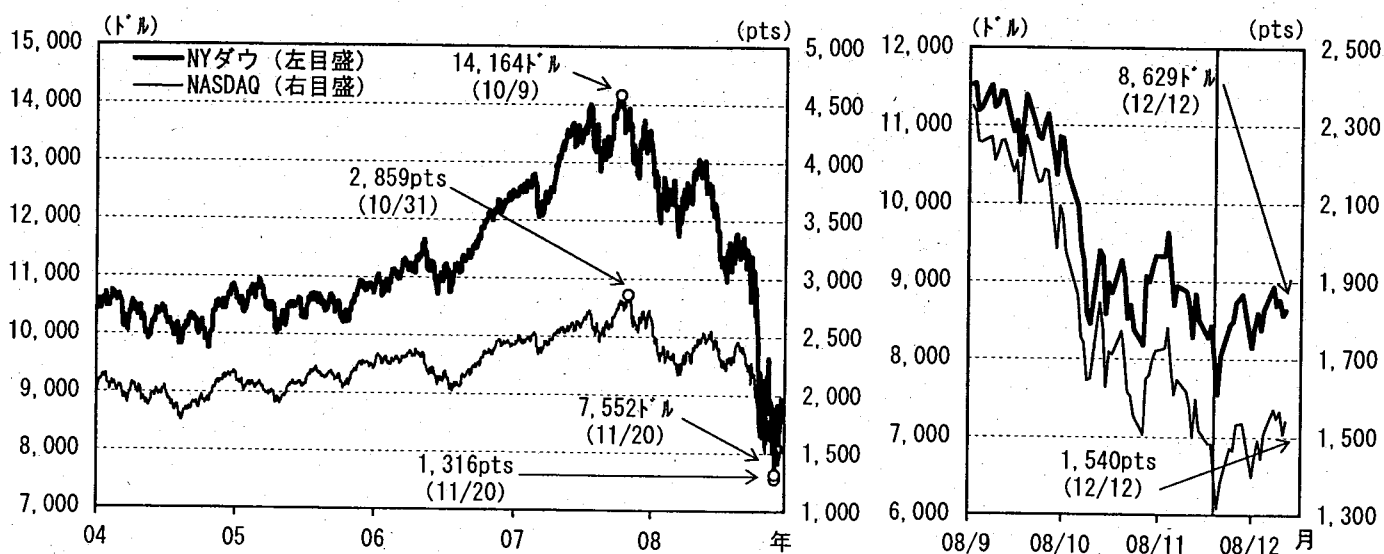
(図表14)

株式相場の推移

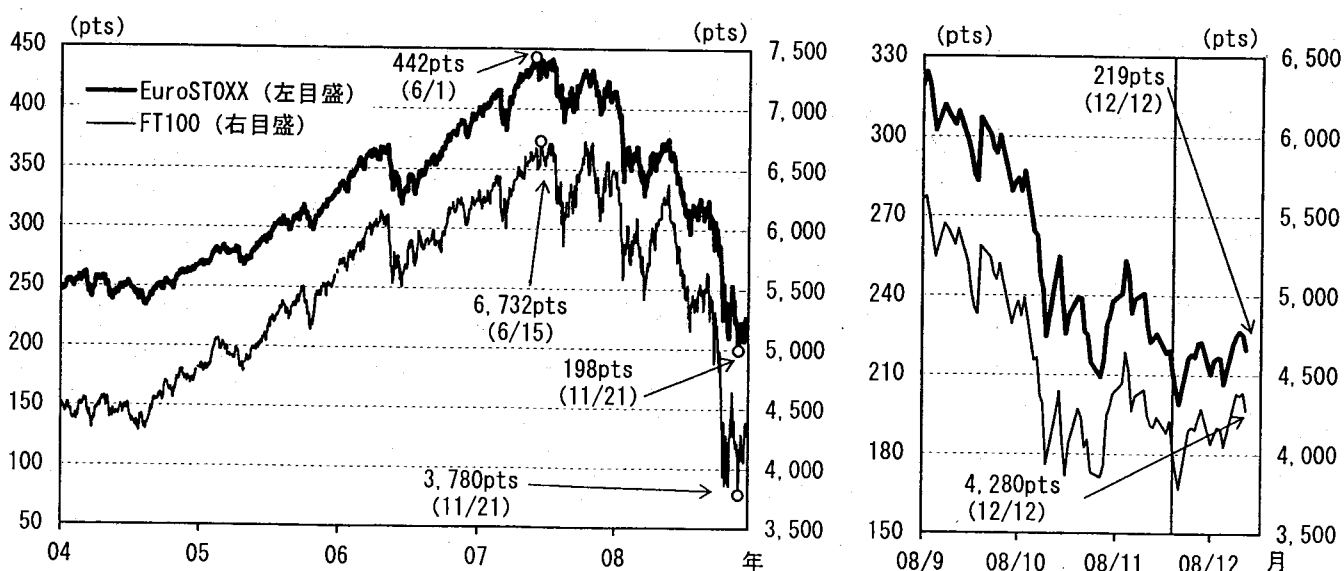
(1) 国内株価の推移



(2) 米国株価の推移



(3) 欧州株価の推移



(注) 直近は、TOPIX、日経平均は12/15日、その他は12/12日。

(出所) QUICK、Bloomberg

(図表15)

主体別売買動向

(▲は売り越し、億円)

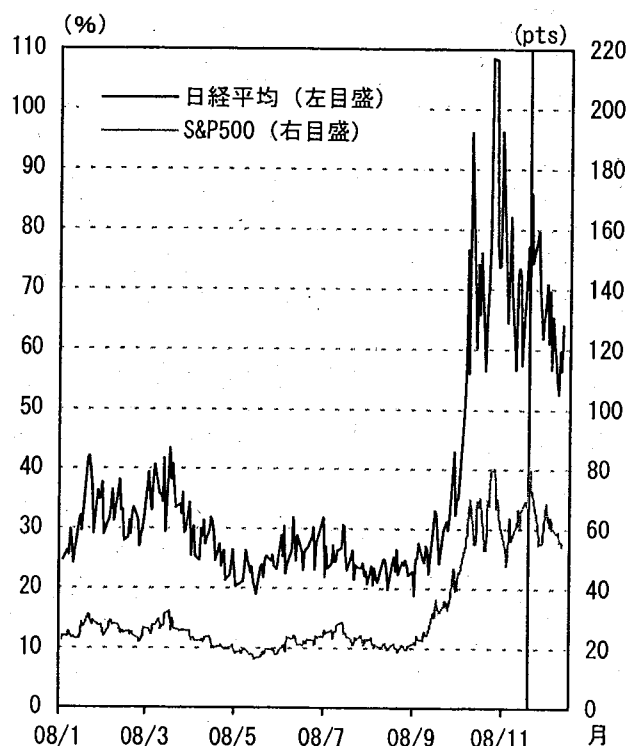
	個人		事業法人	投 信	金融機関			外国人
		うち 信用				うち 信託	うち 生・損保	
05年	▲39,955	33,717	13,523	7,553	▲59,466	▲42,307	▲5,602	103,218
06年	▲43,811	18,380	20,190	17,073	▲40,369	▲33,176	▲1,499	55,288
07年	▲32,288	14,152	15,555	▲5,448	▲17,953	▲16,834	678	54,234
08/1 ~ 3月	6,043	▲1,286	6,812	1,678	9,164	8,984	79	▲20,248
4 ~ 6月	▲5,546	2,184	2,288	▲229	▲3,947	▲759	▲1,572	24,323
7 ~ 9月	▲720	▲556	1,850	348	1,683	3,421	▲1,096	▲12,215
08/9月	2,134	723	882	▲214	▲789	717	▲950	▲5,764
10月	9,927	▲678	2,192	440	12,056	11,887	320	▲10,696
11月	3,368	22	2,213	27	11,269	11,733	▲469	▲10,500
08/11/4 ~ 11/7	597	76	332	66	3,692	3,893	▲179	▲1,960
11/10 ~ 11/14	2,502	701	528	▲264	1,159	1,248	▲61	▲3,600
11/17 ~ 11/21	1,997	118	1,222	145	4,451	4,301	49	▲5,360
11/25 ~ 11/28	▲1,729	▲874	129	78	1,966	2,289	▲278	421
12/1 ~ 12/5	1,102	156	466	241	3,744	3,638	72	▲3,449

(注) 1. 三市場（東京・大阪・名古屋）1・2部等合計。

2. 金融機関は、都銀・地銀等、その他金融、信託、生・損保。

(出所) 東京証券取引所

ボラティリティの推移



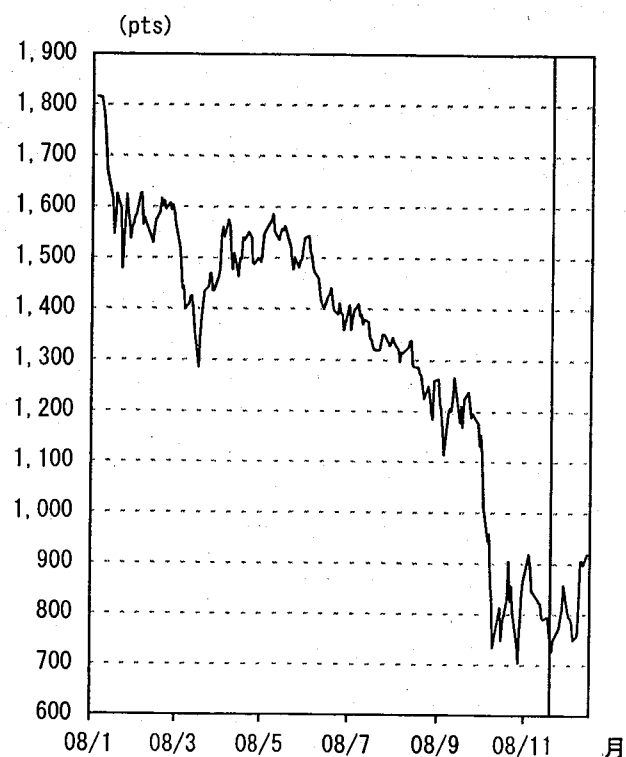
(注) 1. 日経平均はインプライド・ボラティリティ。

S&P500はVIX指数。

2. 直近は12/12日。

(出所) Bloomberg

東証REIT指数の推移



(注) 1. 東証REIT指数は、東証上場のREIT全銘柄を対象とした時価総額加重平均指数。

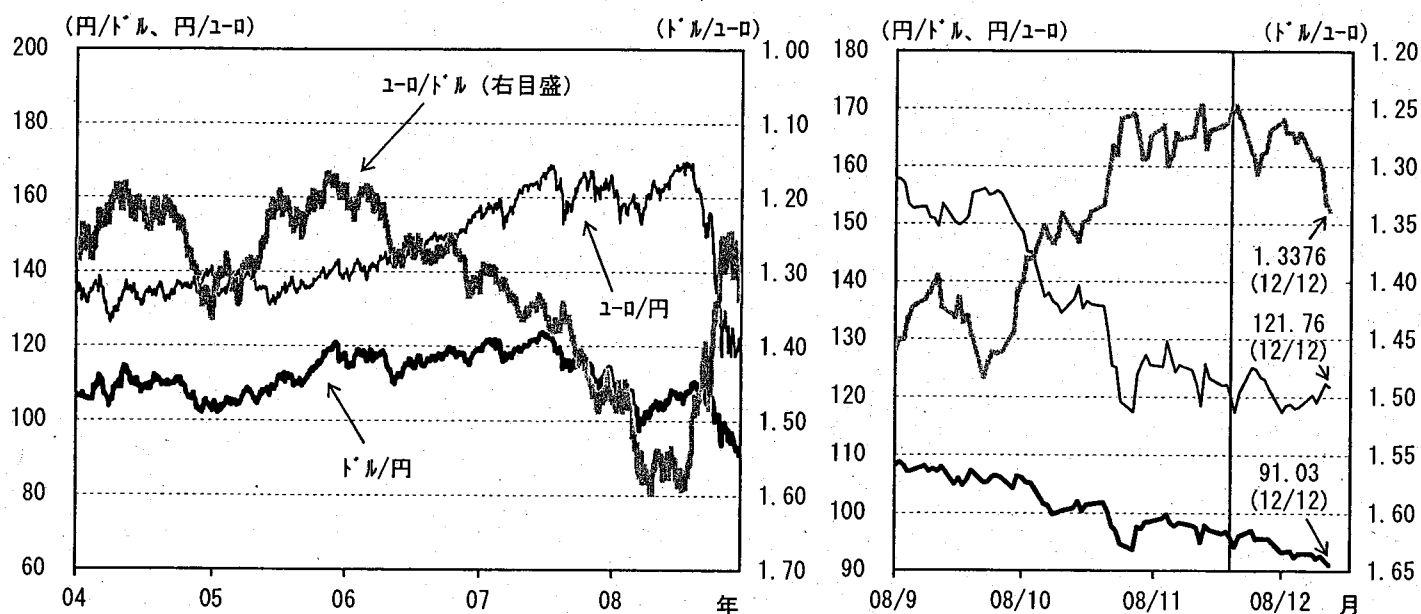
2. 直近は12/15日。

(出所) Bloomberg

(図表16)

主要為替相場の推移

(1) ドル/円、ユーロ/円、ユーロ/ドル相場の推移



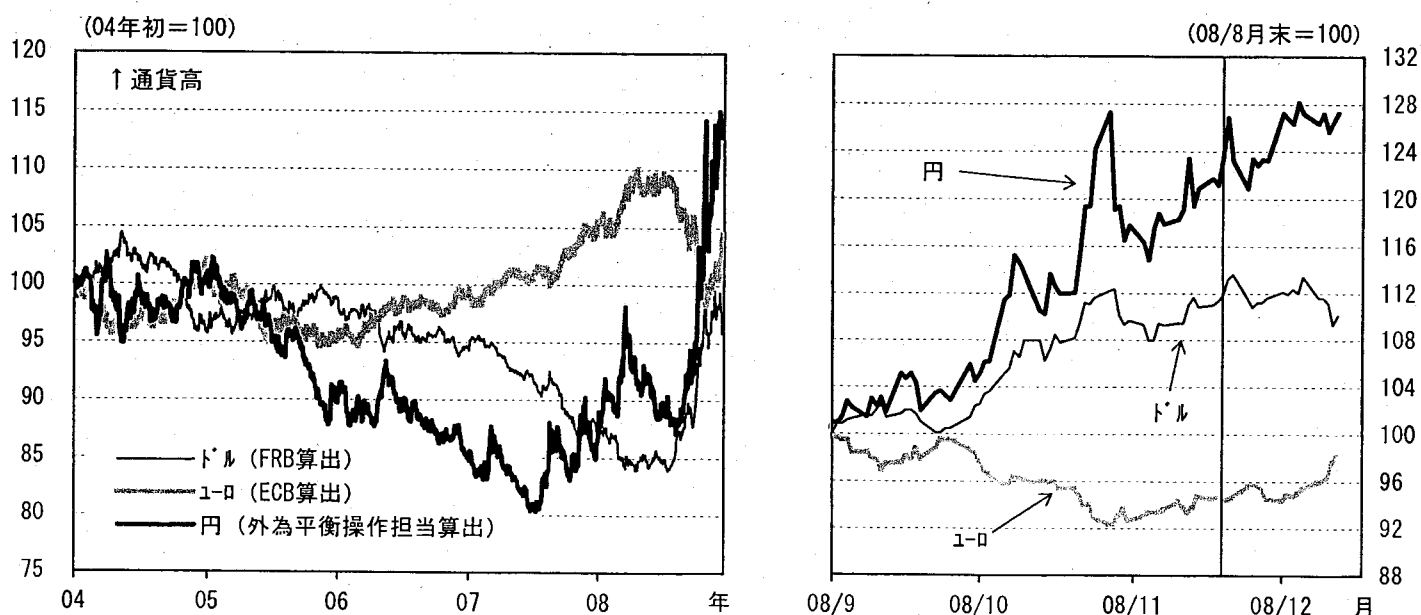
〈参考〉

	11月決定会合直前 (11/19日)	期間中ボトム	期間中ピーク	直近終値 (12/12日)
円の対ドル相場	95.70円	97.00円 (11/24日)	91.03円 (12/12日)	91.03円
円の対ユーロ相場	119.91円	125.12円 (11/24日)	117.36円 (12/1日)	121.76円
ユーロの対ドル相場	1.2530ドル	1.2474ドル (11/20日)	1.3376ドル (12/12日)	1.3376ドル

(注) 原則NY市場16時時点。

(出所) 日本銀行 (対外非公表)

(2) 名目実効為替レートの推移



(注) 直近は12/12日。

(出所) ドルはFRB (ユーロ、円、ラ米、アジア通貨等26通貨ベース)

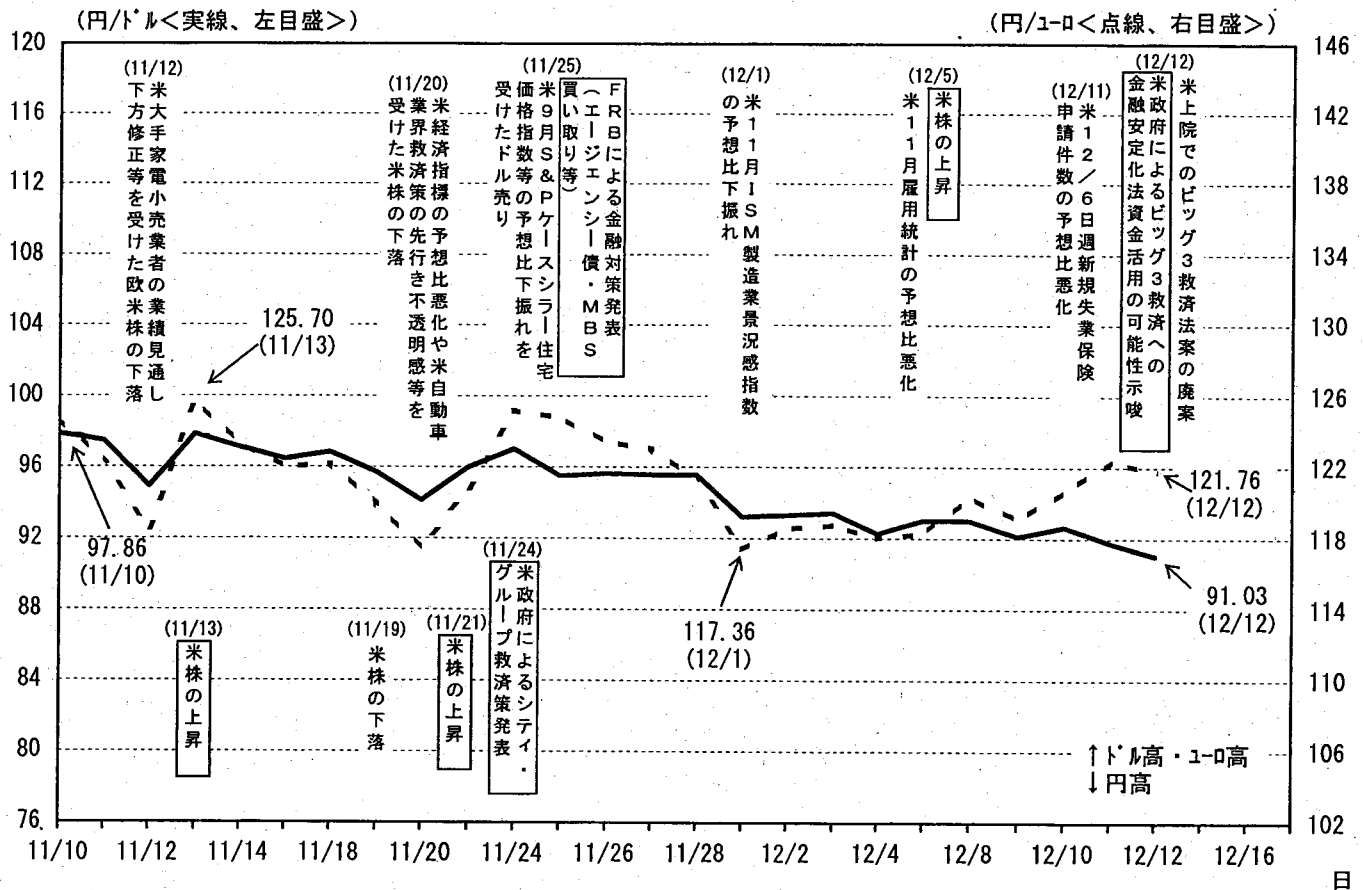
ユーロはECB (米ドル、英ポンド、円等22通貨ベース)

円は日本銀行 (米ドル、ユーロ、アジア通貨等15通貨ベース)

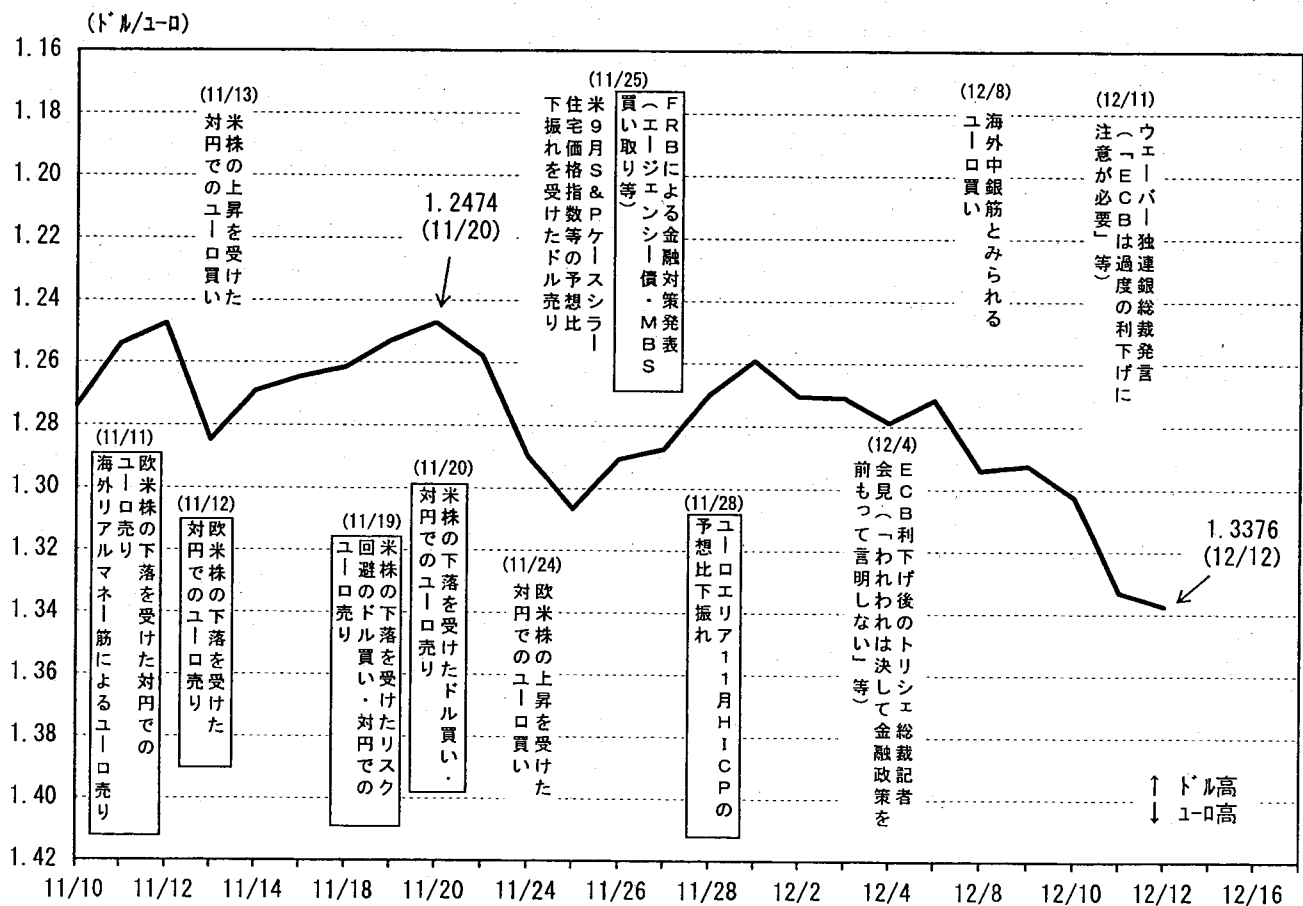
最近の為替相場動向とその変動要因

(図表17)

(1) ドル/円、ユーロ/円相場



(2) ユーロ/ドル相場

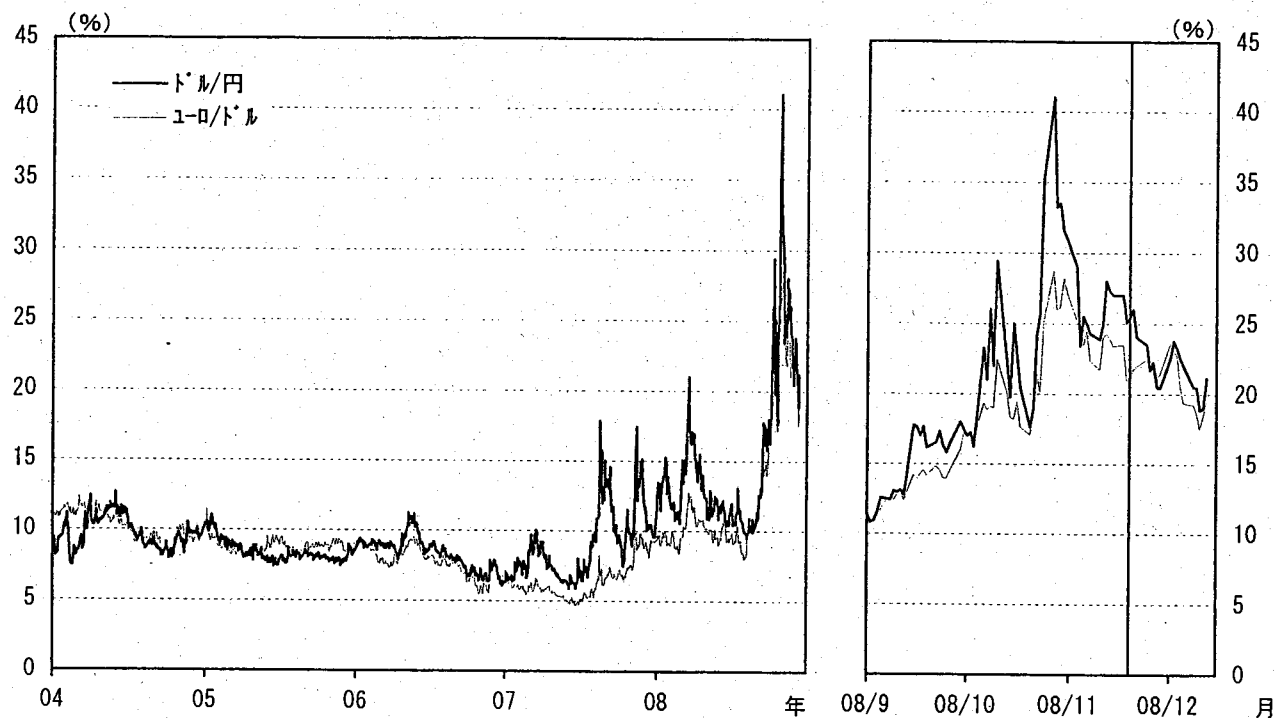


(注) 1. 原則NY市場16時時点。
2. 枠付きはドル高材料。
(出所) 日本銀行 (対外非公表)

(図表18)

通貨オプション市場の動向

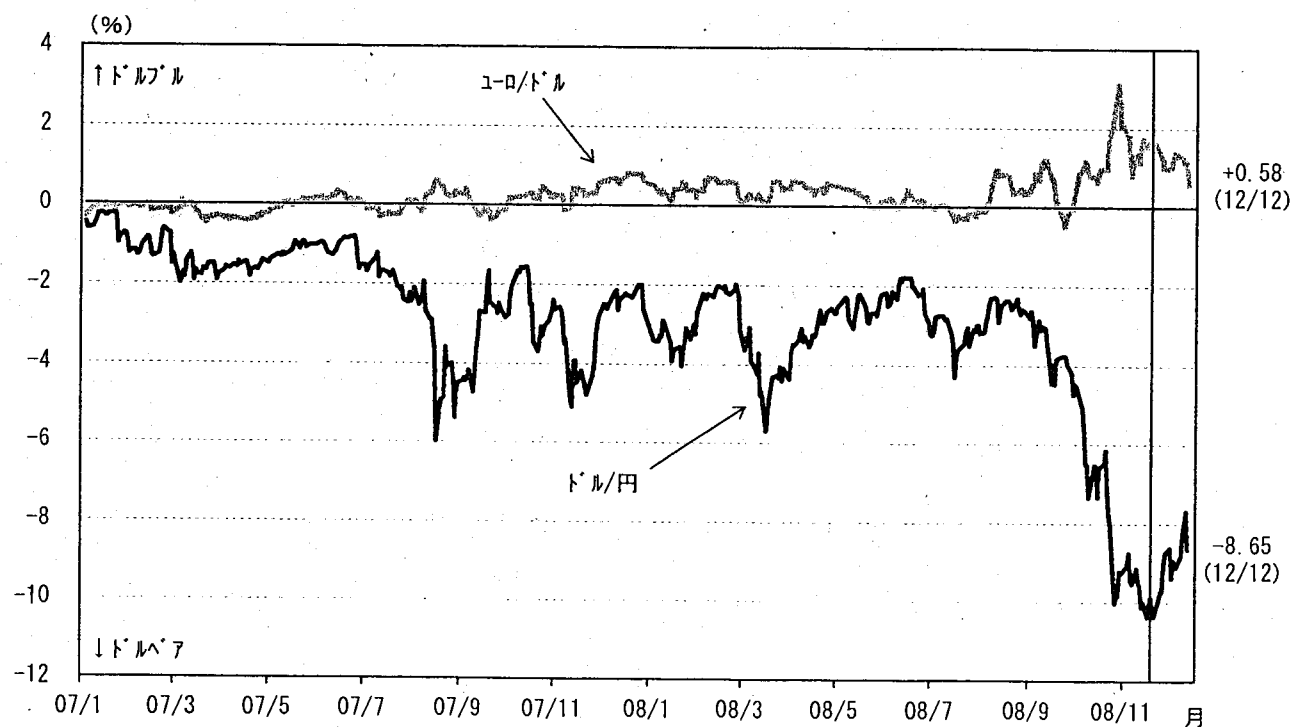
(1) インプライド・ボラティリティ (1か月) の推移



(注) 直近は12/12日。

(出所) Bloomberg

(2) リスクリバーサル (1か月) の推移



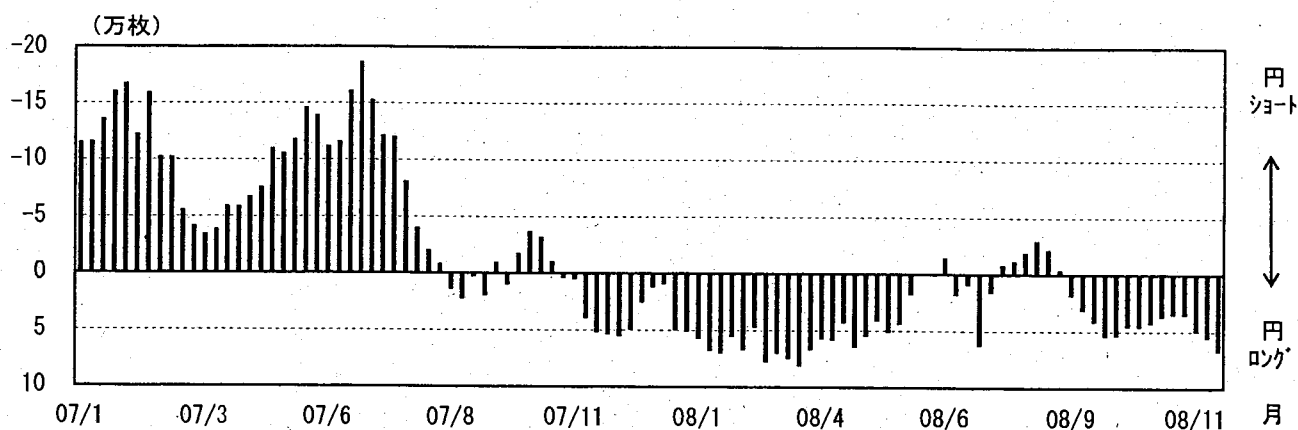
(注) リスクリバーサルは、便宜上、プラスがドル・コール・オーバー、マイナスがドル・プット・オーバー。

(出所) 日本銀行 (対外非公表)

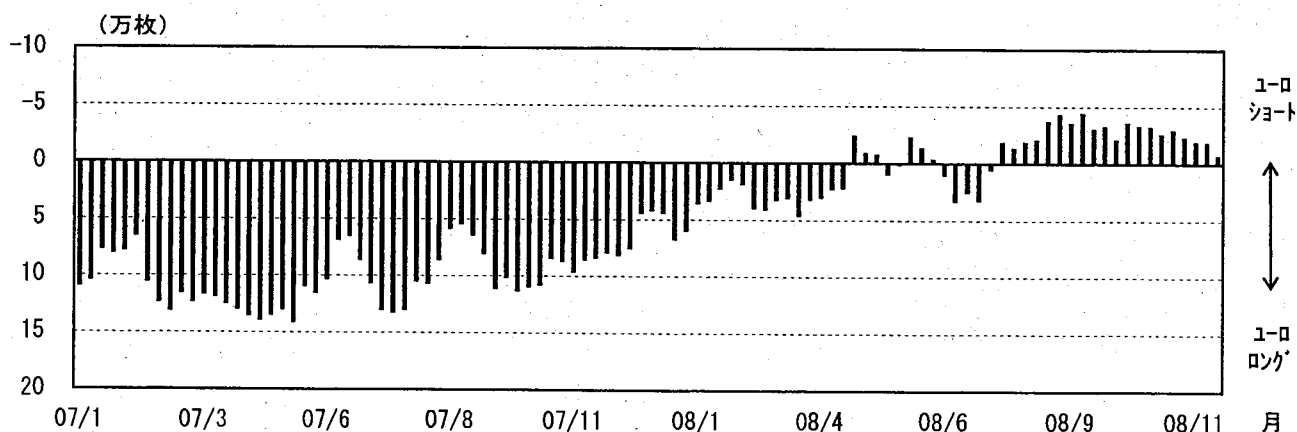
(図表19)

通貨先物、投資信託の動向

(1-1) 円のIMMネットポジション



(1-2) ユーロのIMMネットポジション

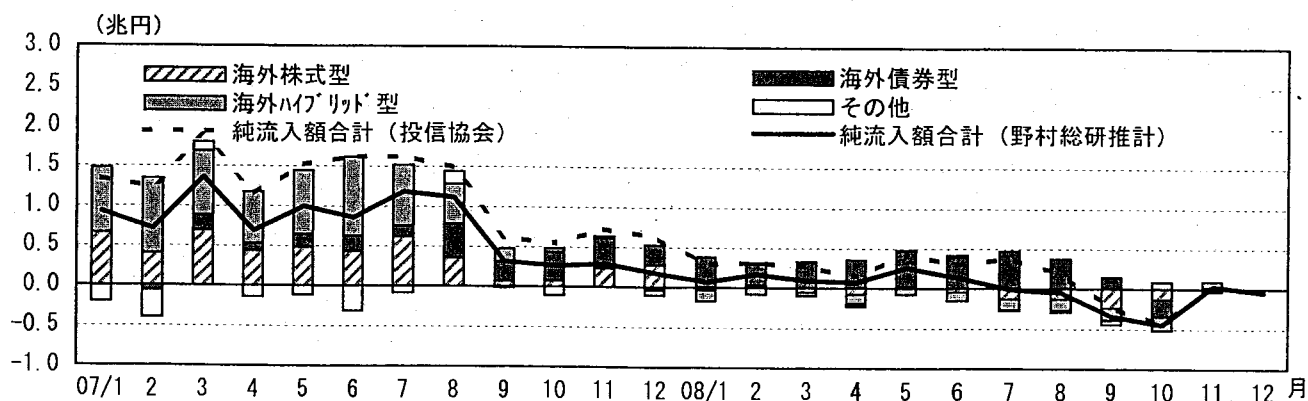


(注) 1. シカゴ・マーカント取引所の当該通貨先物取引における非商業目的および目的別計数非報告分のネット建玉の合計。

2. 直近は12/9日。

(出所) Bloomberg

(2) 公募追加型株式投信の資金純流入額



(注) 1. 「純流入額 (野村総研推計)」は各月の時点で設定後2か月以上経過したファンドのみが集計対象。

08/12月分は12/11日までの実績。

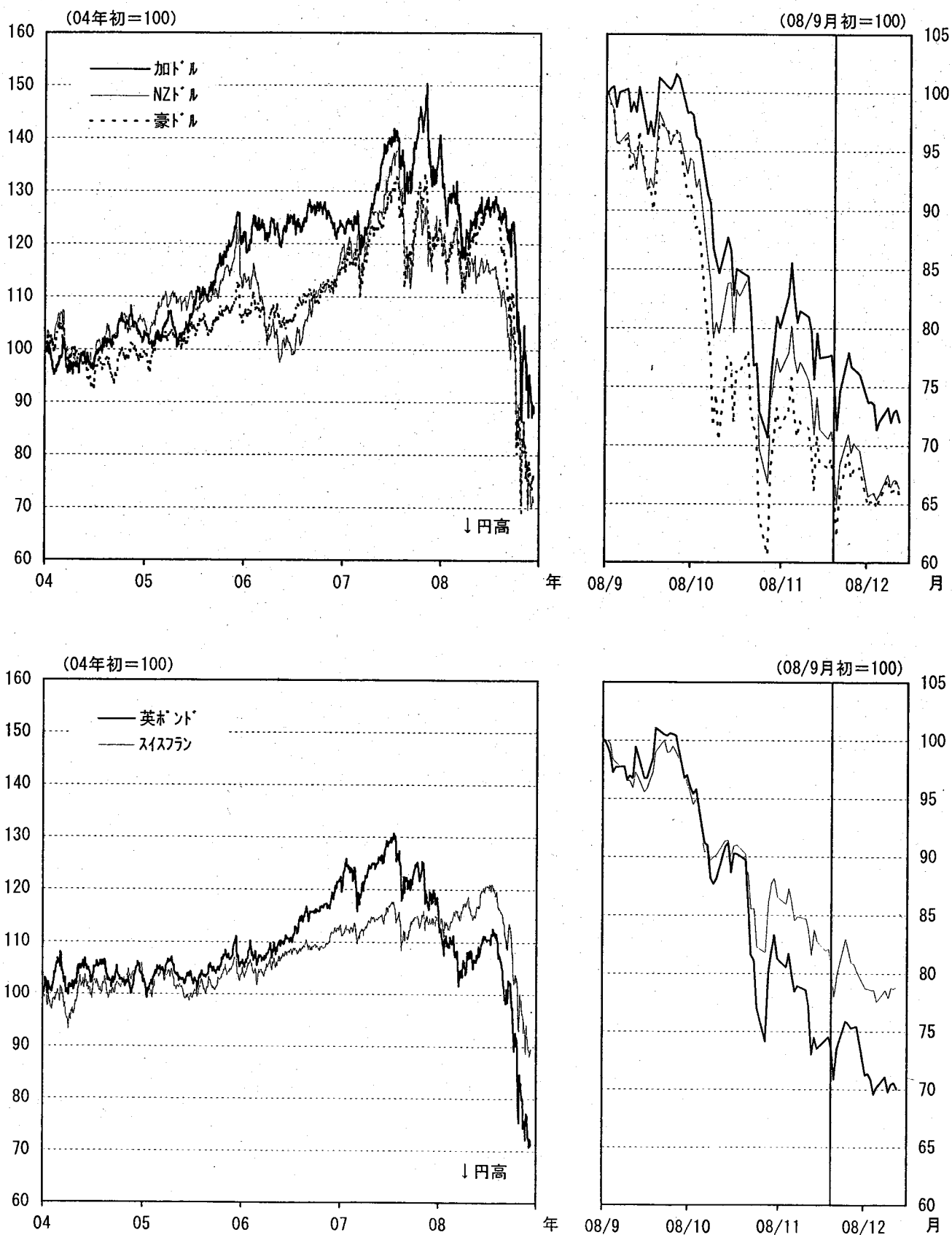
2. 棒グラフは野村総研の推計による純流入額のほか、月中の新規設定額を含む。

3. ETFを除く。

(出所) 野村総合研究所、投資信託協会

(図表20)

クロス円相場の推移



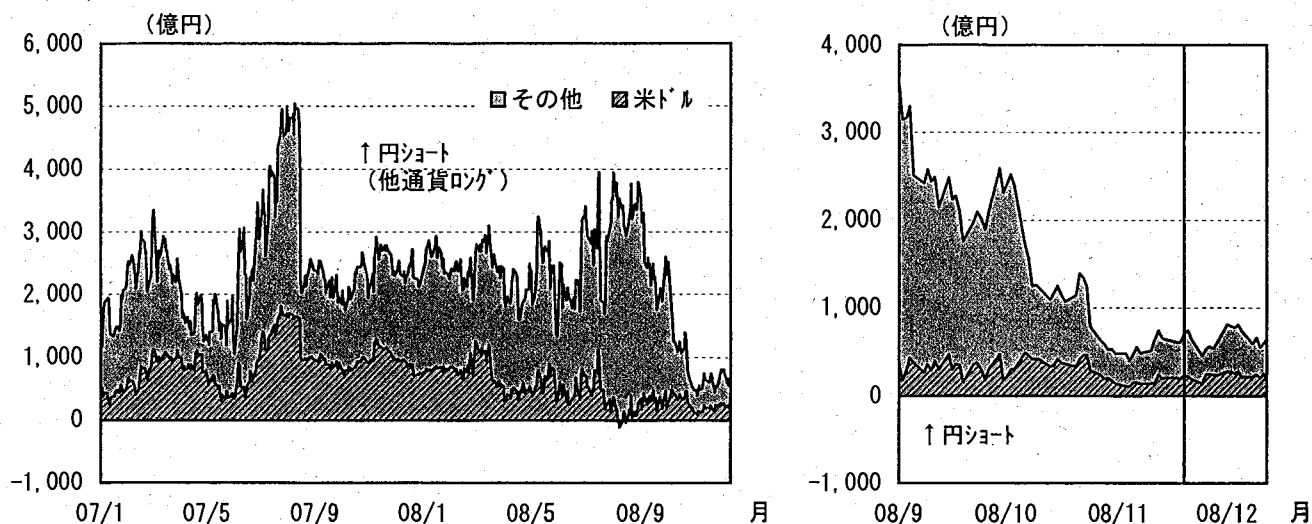
(注) 直近は12/12日。

(出所) Bloomberg

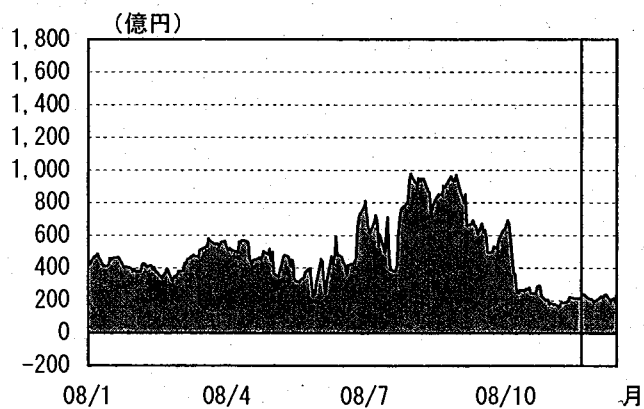
(図表21)

外為証拠金取引の動向

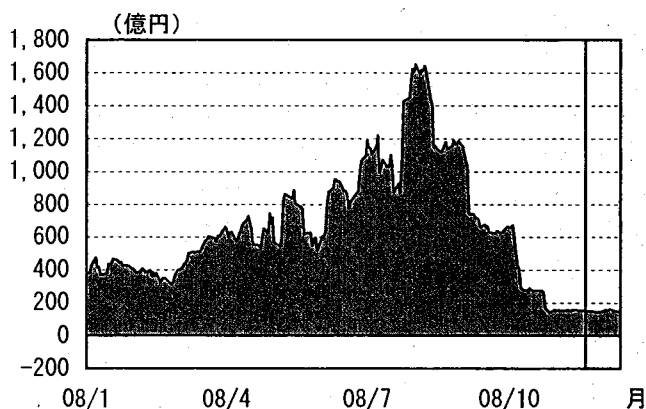
(1) 全体



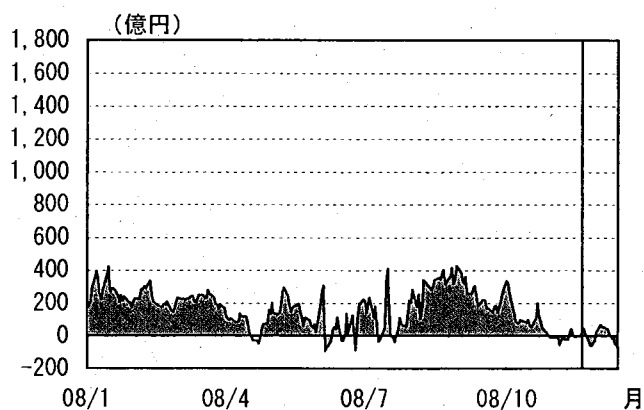
(2) 豪ドル



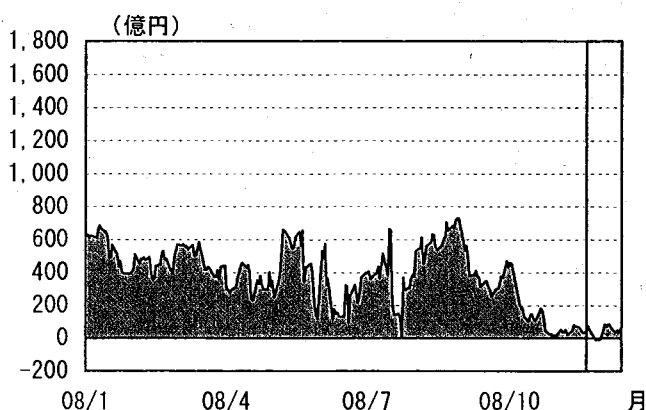
(3) NZドル



(4) ユーロ



(5) ポンド



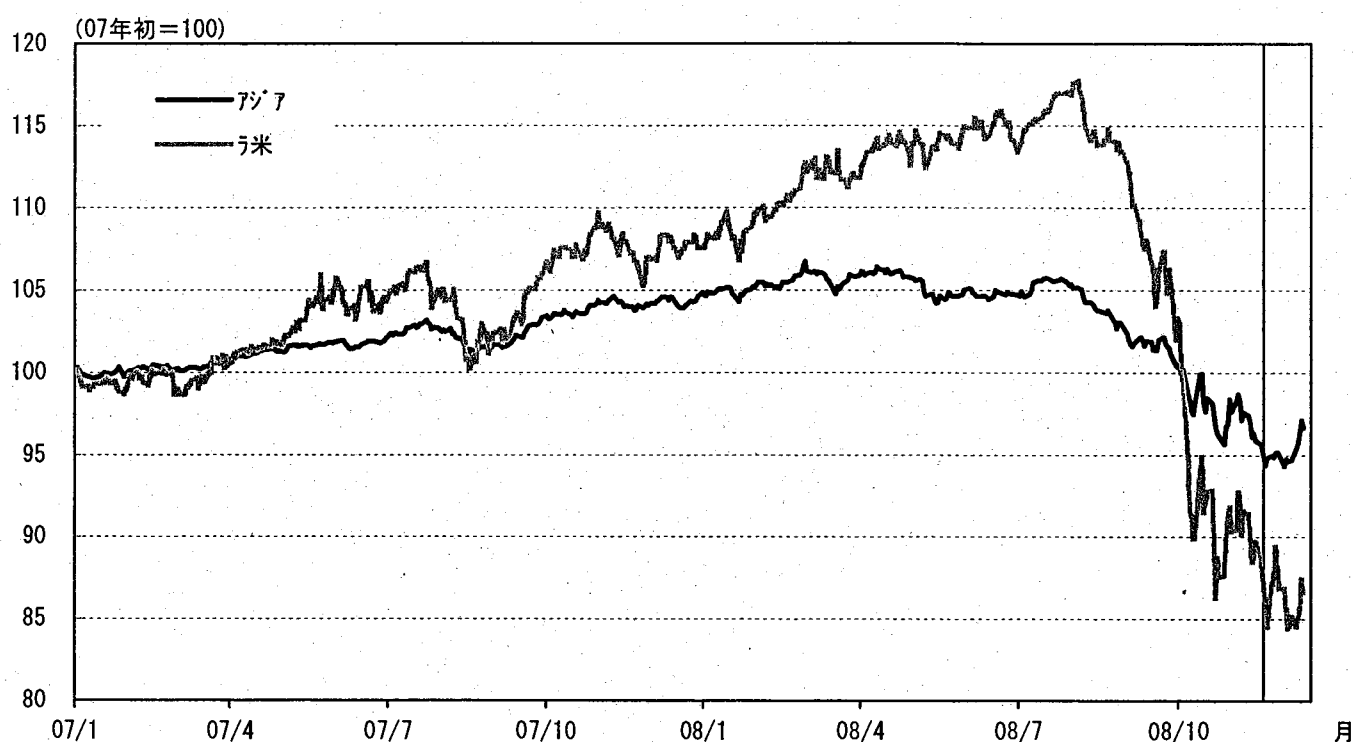
- (注) 1. 円に対する他通貨のネットロングポジション (マーケット・メーカーを除く)。
 2. その他は、豪ドル、NZドル、ユーロ、英ポンドなど11通貨の合計ポジション。
 3. 直近は12/12日。

(出所) 東京金融取引所、Bloomberg

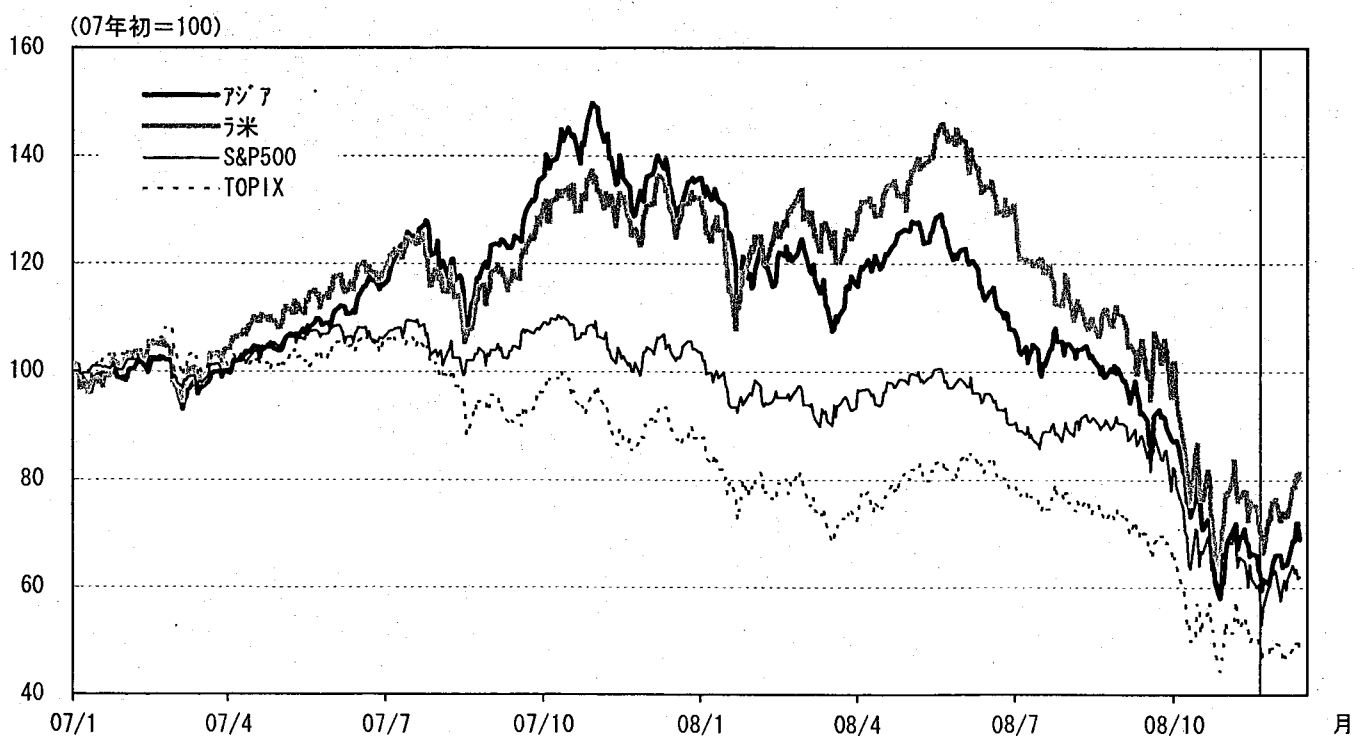
(図表22)

エマージング通貨、株の動向

(1) エマージング通貨インデックス (対ドル)



(2) MSCIエマージングインデックス (株式)



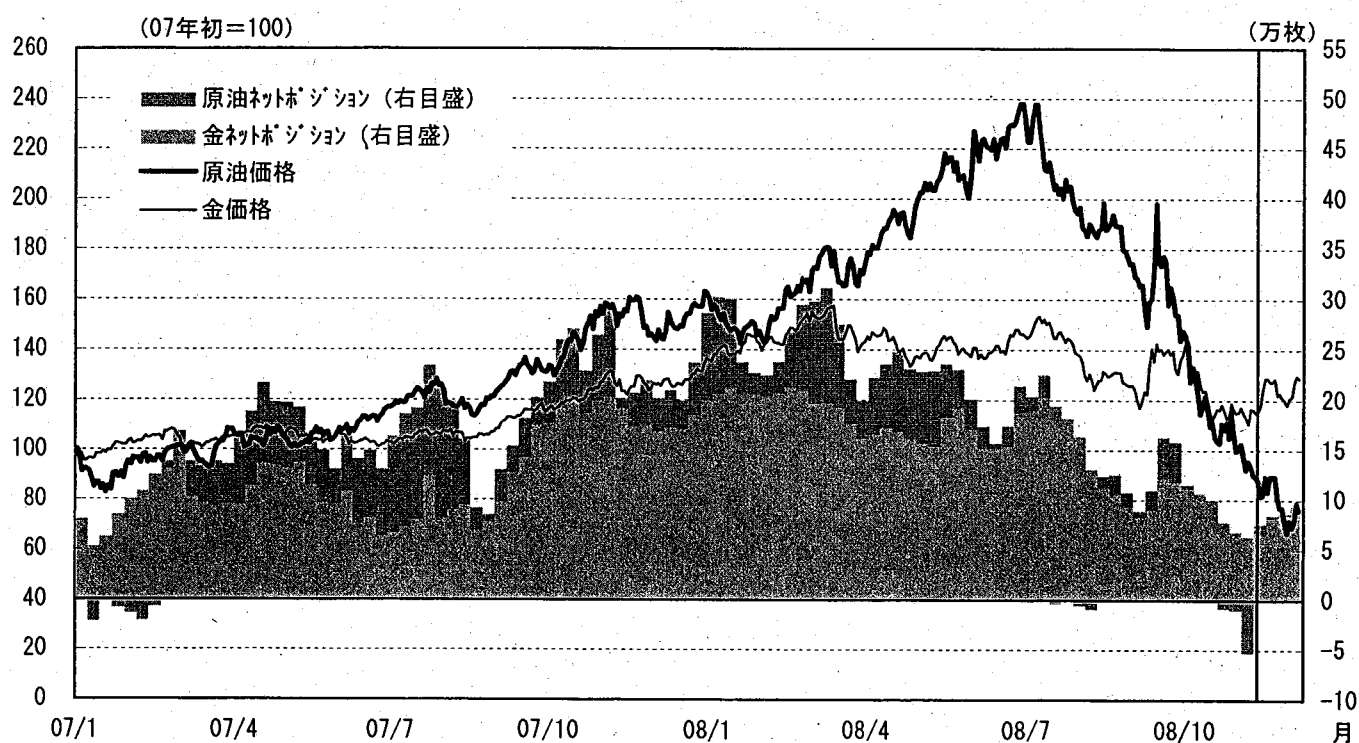
- (注) 1. (1)は、アジア (中国、香港、インド、インドネシア、韓国、マレーシア、フィリピン、シンガポール、台湾、タイ)、ラ米 (アルゼンチン、ブラジル、チリ、コロンビア、メキシコ、ペルー)。
 2. (2)は、アジア (中国、インド、インドネシア、韓国、マレーシア、パキスタン、フィリピン、台湾、タイ)、ラ米 (アルゼンチン、ブラジル、チリ、コロンビア、メキシコ、ペルー)。いずれも現地通貨建て。
 3. 直近は12/12日。

(出所) Bloomberg

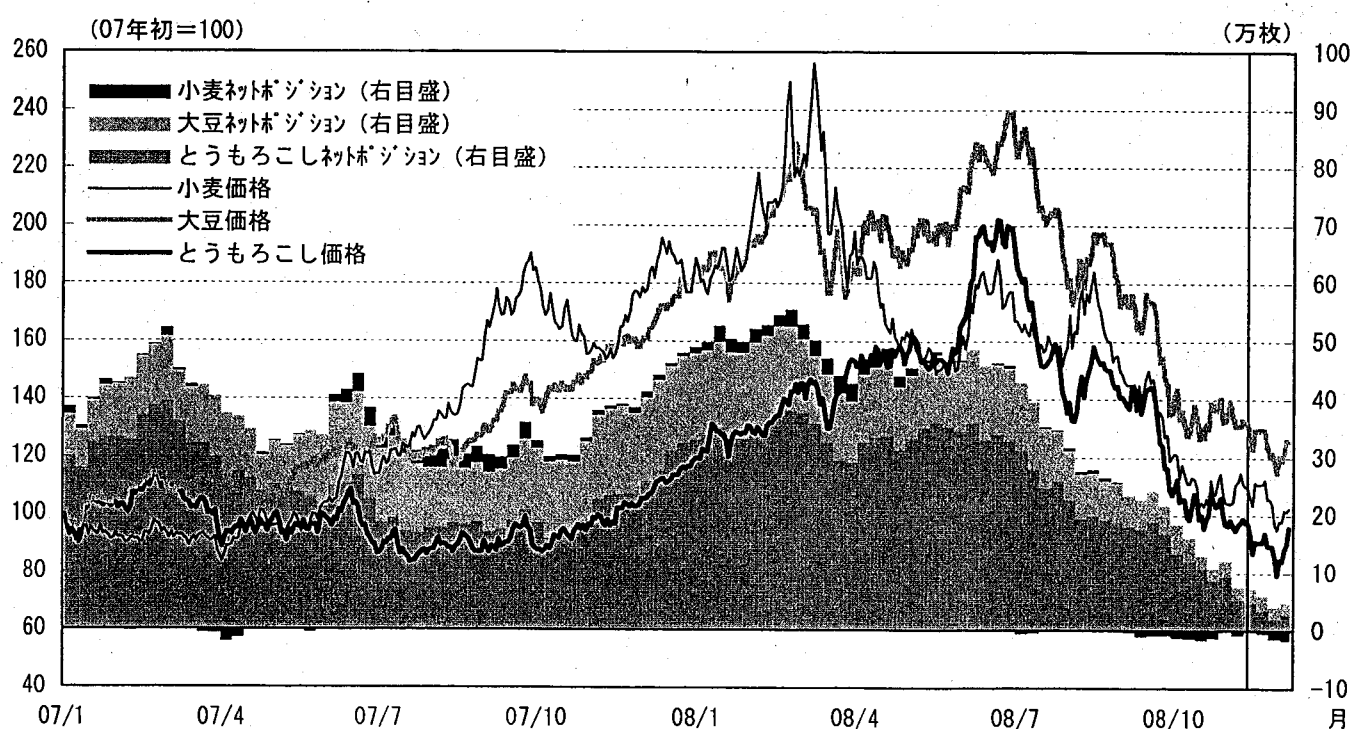
(図表23)

商品の動向

(1) 原油・金



(2) 穀物



- (注) 1. (1)は、NYMEX期近物。
 2. (2)は、CBOT期近物。
 3. 各銘柄のネットポジションは、非商業投資家ネットポジションの合計。
 4. 直近は、価格(日次データ)については、12/12日、ネットポジション(週次データ)については、12/9日。

(出所) CFTC、Bloomberg

2008.12.18

金融市場局

1. 金融調節の運営実績（資料－1 関連）

- （図表1－1） 金融調節の実績の推移
- （図表1－2） 日銀当座預金の保有状況
- （図表1－3） 08/7月積み期以降の当座預金残高
08/7月積み期以降の短期金利
- （図表1－4） 無担コール市場残高
- （図表1－5） 無担コール市場残高（O/N、T/N、S/N計）
- （図表1－6） 最近のオペ結果の推移
- （図表1－7） 資金需給の推移
- （図表1－8） 本行受入担保残高の推移
- （図表1－9） 共通担保使用状況
信用判定・適格審査の状況

2. 最近の金融・為替市場の動向（資料－2 関連）

- （図表2－1） 短期金利の推移
- （図表2－2） CP市場の動向
- （図表2－3） ターム物レートの推移
- （図表2－4） ドル調達プレミアムの推移
- （図表2－5） フォワードレート等の推移（1）
- （図表2－6） フォワードレート等の推移（2）
- （図表2－7） 長期金利の推移
- （図表2－8） イールド・カーブの動向
インプライド・ボラティリティの推移
- （図表2－9） フォワードレート・カーブの動向
長国先物の値幅・出来高比率の推移
- （図表2－10） 市場参加者が注目する債券利回り変動要因
- （図表2－11） 社債流通利回りの対国債スプレッドの推移
- （図表2－12） CDSプレミアムの推移
- （図表2－13） 株式相場の推移
- （図表2－14） 主体別売買動向等
- （図表2－15） 主要為替相場の推移
- （図表2－16） 最近の為替相場動向とその変動要因
- （図表2－17） 通貨オプション市場の動向
- （図表2－18） 通貨先物、投資信託の動向
- （図表2－19） クロス円相場の推移
- （図表2－20） 外為証拠金取引の動向
- （図表2－21） エマージング通貨、株の動向
- （図表2－22） 商品の動向

（注）図表中の縦線は、特に断りのない限り前回会合の前営業日（11/19日）を表す。

(図表1-1)

金融調節の実績の推移

(億円、%)

	無担 コール レート (O/N) 加重 平均値	日銀当座預金残高(実績値)							補完 貸付 残高	<参考> 日銀当座預金残高見込み		
		準備預金残高(含むゆうちょ銀行)	準備預金残高(除くゆうちょ銀行)	非準備先		残高	朝方 即日オペ前	9:20 定例調節後		全即日オペ 実施後		
				超 過 準 備	残り所要額 (1日平均)							
11月17日(月)	0.305	86,800	81,000		2,200	48,300	5,800	1,594.0	97,000	-	85,000	
11月18日(火)	0.306	86,400	81,000		2,000	48,000	5,400	728.0	96,000	-	86,000	
11月19日(水)	0.303	85,200	80,100		2,100	47,700	5,100	784.0	98,000	-	84,000	
11月20日(木)	0.306	91,300	86,000		3,500	47,300	5,300	718.0	104,000	-	90,000	
11月21日(金)	0.305	91,200	85,700		3,300	45,500	5,500	865.0	104,000	-	90,000	
11月25日(火)	0.307	91,200	86,100		4,200	45,000	5,100	3,858.0	97,000	-	88,000	
11月26日(水)	0.304	90,700	85,600		5,400	44,500	5,100	1,044.0	98,000	-	90,000	
11月27日(木)	0.306	99,300	86,300		5,100	43,900	13,000	1,585.0	106,000	-	98,000	
11月28日(金)	0.318	98,300	91,800		5,400	40,500	6,500	425.0	105,000	113,000	97,000	
12月1日(月)	0.299	88,500	83,400		6,600	39,100	5,100	1,435.0	95,000	-	87,000	
12月2日(火)	0.279	82,300	73,500		7,800	38,300	8,800	190.0	106,000	100,000	82,000	
12月3日(水)	0.257	81,000	73,600		8,200	38,000	7,400	403.0	112,000	102,000	80,000	
12月4日(木)	0.263	74,600	68,600		7,300	38,300	6,000	0.0	115,000	100,000	75,000	
12月5日(金)	0.256	75,000	70,000		5,700	38,400	5,000	2,071.0	102,000	87,000	73,000	
12月8日(月)	0.275	79,600	75,300		5,700	37,600	4,300	1,018.0	97,000	82,000	78,000	
12月9日(火)	0.255	80,000	74,400		8,000	37,200	5,600	4,000.0	101,000	91,000	76,000	
12月10日(水)	0.247	73,000	67,200		7,400	36,300	5,800	4,225.0	99,000	84,000	69,000	
12月11日(木)	0.229	64,100	58,800		6,600	36,400	5,300	3,550.0	101,000	81,000	61,000	
12月12日(金)	0.222	63,500	59,000		8,300	38,900	4,500	1,809.0	101,000	81,000	61,000	
12月15日(月)	0.235	79,200	73,900		15,900	-	5,300	3,437.0	110,000	90,000	75,000	
12月16日(火)	0.242	74,000	68,800		2,100	49,200	5,200	2,145.0	114,000	102,000	71,000	
12月17日(水)	0.239	79,100	74,000		3,000	49,200	5,100	4,008.0	113,000	93,000	75,000	

(注1)準備預金残高(除くゆうちょ銀行)は、対外非公表。

(注2)12月17日分は、5時同時処理終了時点。

日銀当座預金の保有状況

対外非公表

(単位:億円)

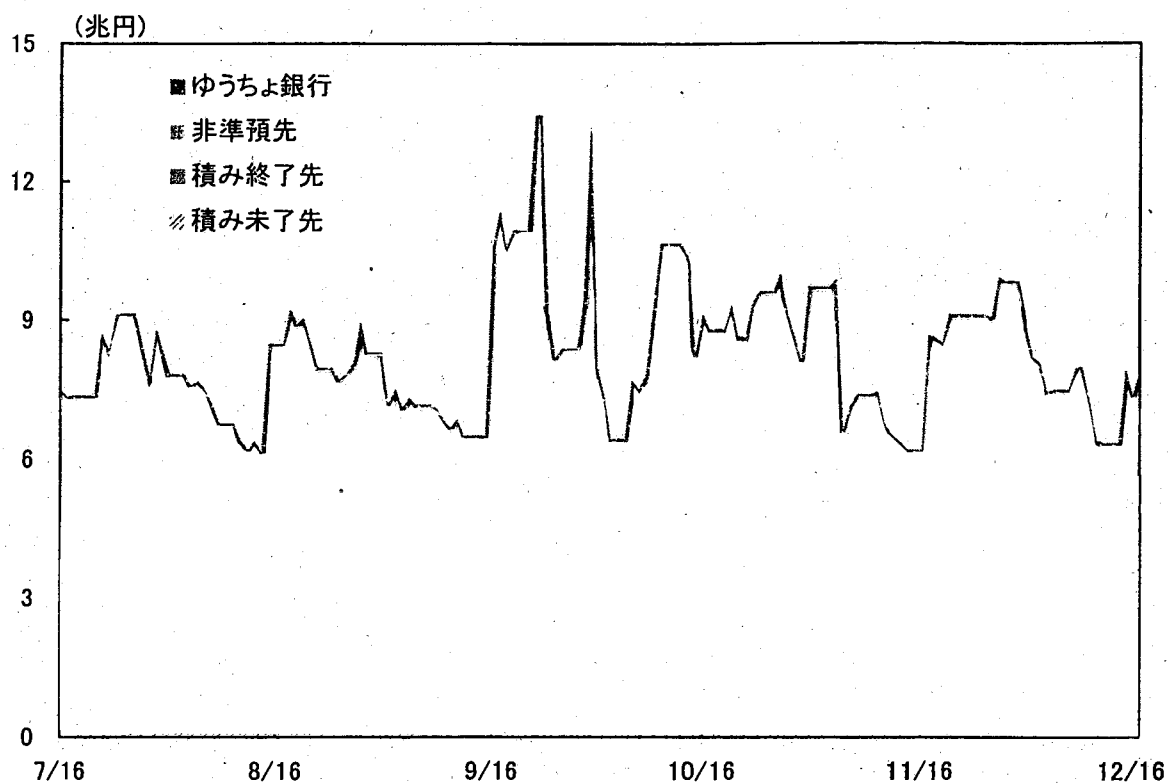
	9月積み期	10月積み期	11月積み期	12月積み期	12/17日	12月積み期 所要準備額
準預先	86,597	78,656	76,578	71,411	74,012	<70,940>
除くゆうちょ銀行						< >
都銀	29,811	29,778	30,186	24,819	26,531	<30,187>
地銀	12,548	11,764	11,499	12,655	12,537	<11,219>
地銀Ⅱ	3,967	3,705	2,662	2,534	2,466	<1,457>
外銀	3,452	3,120	2,192	2,865	2,598	<289>
ゆうちょ銀行						< >
非準預先	8,675	5,399	5,768	5,111	5,043	
短資	984	44	465	65	112	
一部系統	1,109	1,231	972	593	602	
政府系	937	281	379	772	903	
証券会社等	5,645	3,843	3,952	3,681	3,426	
当預残高	95,273	84,054	82,346	76,521	79,055	

(注1)「証券会社」は、金融商品取引法上の有価証券関連業を行う第一種金融商品取引業者。

(注2)12月積み期の計数は、12/16～12/17日の平均。12/17日は5時同時処理終了時点。

08/7月積み期以降の当座預金残高

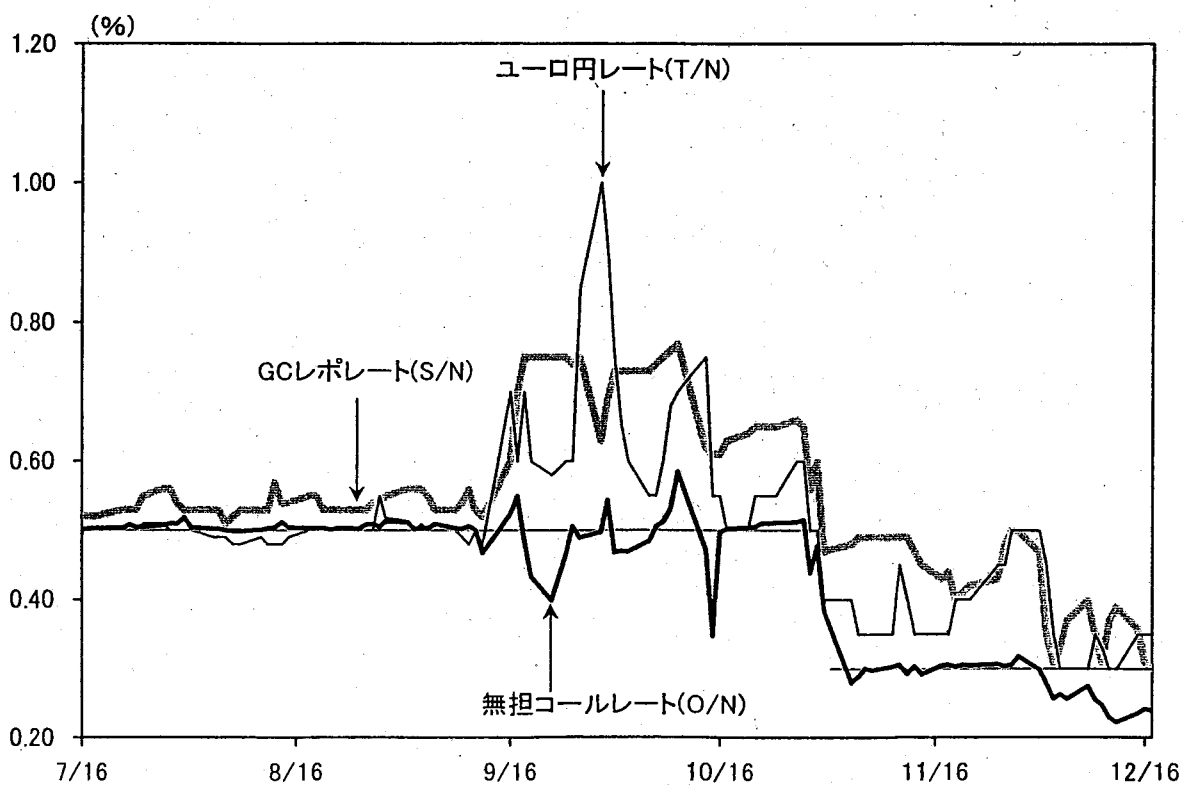
対外非公表



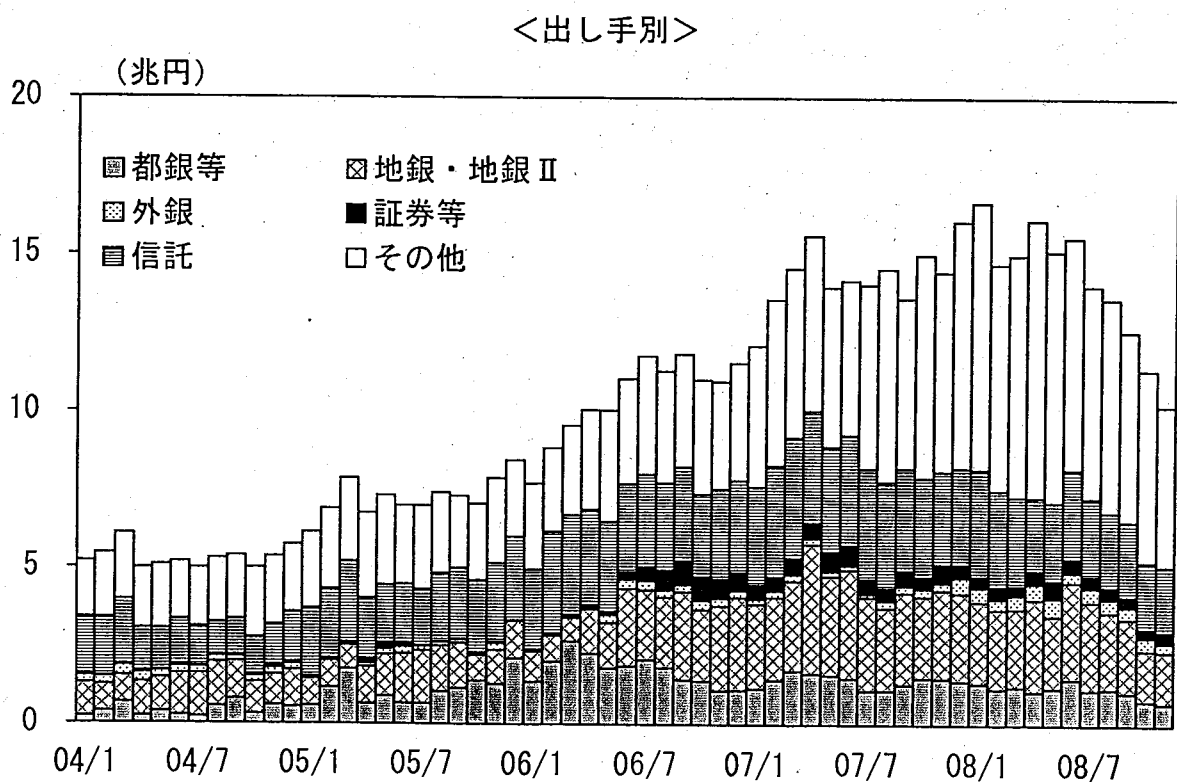
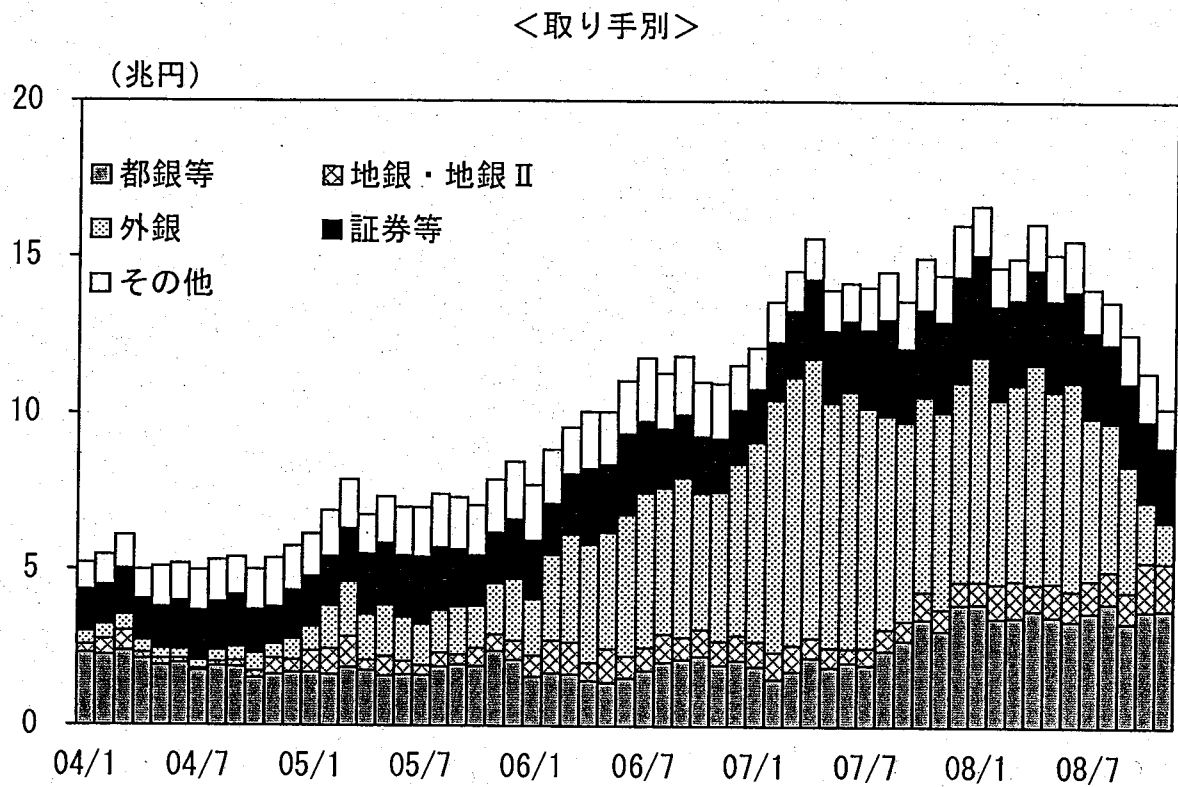
(注) 積み終了先、積み未了先及び一日当たり残り所要(前日終了時点)には、うちよ銀行の計数を含まない。

08/7月積み期以降の短期金利

対外非公表



無担コール市場残高



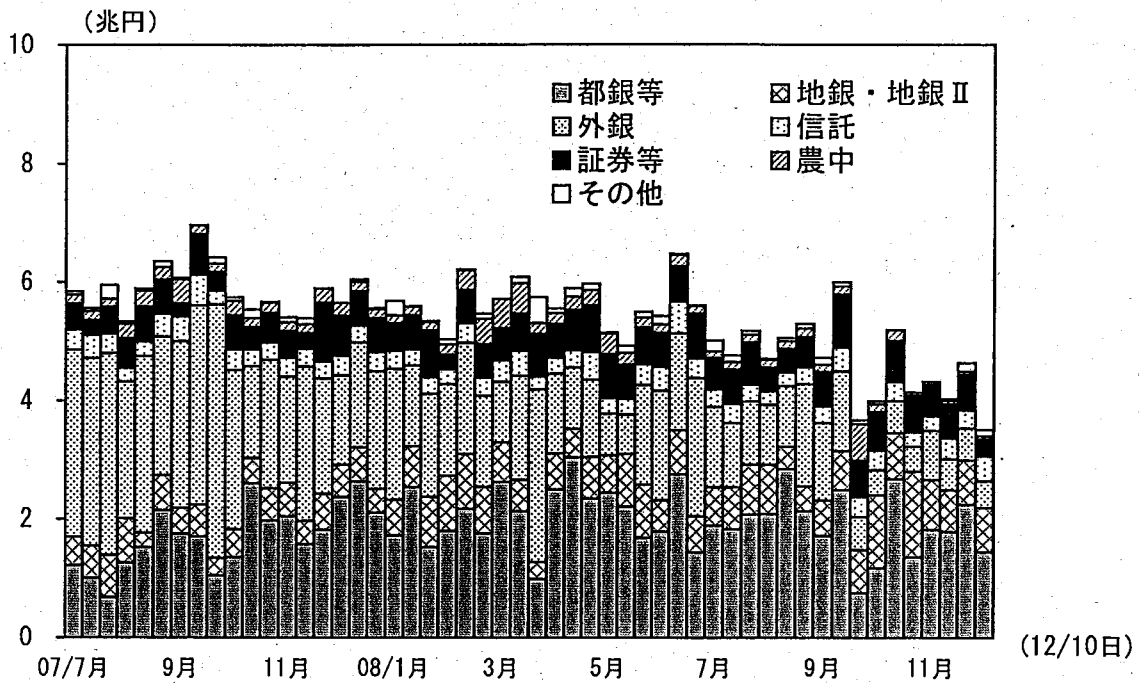
(注 1) 月中平残。

(注 2) 無担コール市場残高における「都銀等」は都銀、新生銀行、あおぞら銀行。「証券等」は金融商品取引業者（他の区分に属するものを除く）および証券金融会社。

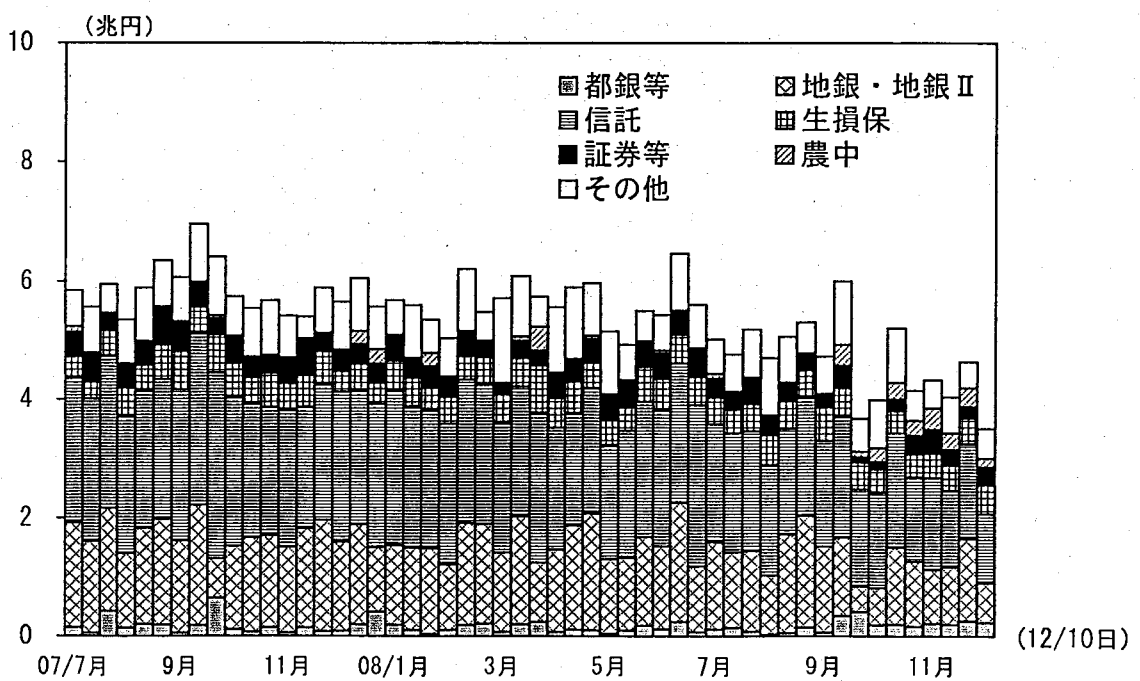
無担コール市場残高 (O/N、T/N、S/N計)

<取り手別>

対外非公表



<出し手別>



(注) 各旬末残高。

最近のオペ結果の推移(1)

(図表1-6)

(資金供給オペ)

(億円、%)

オペ手段	直近残高	オファー日	スタート	期間	オファー額	応札倍率	平均落札レート	落札決定レート
共通担保(全店)	107,061	11/21	T+2	2M	8,000	4.23	0.459	0.45
		11/28	即日	3D	8,000	2.74	0.493	0.49
		11/28	T+1	2W	8,000	4.28	0.502	0.50
		11/28	T+2	2M	8,000	4.52	0.504	0.49
		12/2	T+1	1W	8,000	2.27	0.431	0.39
		12/2	T+2	2M	8,000	3.39	0.479	0.46
		12/11	T+1	2M	8,000	4.29	0.513	0.50
		12/15	T+2	3M	8,000	3.25	0.500	0.48
共通担保(本店)	137,086	12/17	T+1	3W	8,000	2.99	0.412	0.35
		11/20	T+1	2W	6,000	5.06	0.433	0.43
		11/25	T+1	1W	10,000	5.01	0.453	0.45
		11/26	T+1	1W	8,000	3.35	0.488	0.48
		11/26	T+2	3M	8,000	4.14	0.471	0.47
		11/27	T+1	2W	8,000	6.40	0.501	0.49
		12/1	T+1	1W	10,000	1.70	0.489	0.48
		12/1	T+2	3M	8,000	3.52	0.487	0.48
		12/3	T+1	3W	10,000	2.90	0.371	0.35
		12/4	T+1	2W	8,000	2.27	0.356	0.34
		12/5	T+1	1W	8,000	2.89	0.357	0.35
		12/8	T+1	1M	10,000	3.44	0.492	0.49
		12/9	T+1	1M	10,000	3.13	0.503	0.50
		12/10	T+2	3M	8,000	3.54	0.487	0.48
		12/12	T+1	3W	8,000	3.37	0.503	0.50
CP等買現先	37,099	12/16	T+2	1M	8,000	3.50	0.494	0.49
		11/20	T+2	1M	6,000	1.12	0.275	0.11
		11/25	T+2	1M	4,000	1.20	0.207	0.12
		11/27	T+2	2W	4,000	1.79	0.526	0.42
		12/2	T+2	2M	4,000	1.86	0.539	0.50
		12/4	T+2	1W	6,000	1.13	0.186	0.13
		12/9	T+2	1M	6,000	1.56	0.533	0.49
		12/11	T+2	1M	6,000	1.39	0.486	0.42
国債買現先	107,329	12/16	T+2	3W	6,000	1.18	0.378	0.20
		11/20	T+2	1D	20,000	1.28	0.402	0.40
		11/20	T+2	1W	16,000	1.57	0.426	0.42
		11/21	T+2	1D	20,000	1.45	0.405	0.40
		11/21	T+2	1W	10,000	2.59	0.423	0.42
		11/25	T+2	1D	20,000	1.28	0.410	0.40
		11/25	T+2	1W	10,000	3.08	0.434	0.43
		11/26	T+2	3D	20,000	1.49	0.474	0.46
		11/26	T+2	1W	16,000	2.35	0.463	0.45
		11/27	T+2	1D	20,000	1.38	0.493	0.49
		11/27	T+2	1W	16,000	2.20	0.486	0.48
		11/28	T+2	1D	30,000	1.13	0.495	0.47
		11/28	T+2	1W	16,000	1.97	0.498	0.49
		12/1	T+2	1D	40,000	1.01	0.458	0.15
		12/1	T+2	1W	10,000	2.14	0.485	0.48
		12/2	T+2	1D	40,000	1.20	0.320	0.21
		12/2	T+2	1W	10,000	1.99	0.443	0.38
		12/3	T+2	3D	35,000	1.16	0.283	0.21
		12/3	T+2	1W	16,000	1.38	0.357	0.33
		12/4	T+2	1D	30,000	1.10	0.287	0.23
		12/4	T+2	1W	16,000	1.49	0.340	0.33
		12/5	T+2	1D	30,000	1.14	0.289	0.25
		12/5	T+2	1W	16,000	1.35	0.350	0.33
		12/8	T+2	1D	35,000	1.30	0.316	0.26
		12/8	T+2	1W	10,000	2.67	0.379	0.36
		12/9	T+2	1D	40,000	1.28	0.295	0.25
		12/9	T+2	1W	10,000	2.41	0.391	0.38
		12/10	T+2	3D	40,000	1.13	0.256	0.21
		12/10	T+2	1W	8,000	2.48	0.389	0.36
		12/10	T+2	3W	8,000	3.11	0.500	0.49
		12/11	T+2	1D	40,000	1.26	0.270	0.23
		12/11	T+2	1W	8,000	2.17	0.390	0.37
		12/11	T+2	3W	8,000	2.82	0.498	0.49
		12/12	T+2	1D	40,000	1.47	0.276	0.25
		12/12	T+2	1W	8,000	2.18	0.401	0.38
		12/12	T+2	3W	8,000	2.61	0.495	0.49
		12/15	T+2	1D	40,000	1.50	0.304	0.28
		12/15	T+2	3W	10,000	2.20	0.493	0.48
		12/16	T+2	1D	40,000	1.38	0.289	0.26
		12/16	T+2	1M	8,000	2.59	0.485	0.48
		12/17	T+2	3D	30,000	1.58	0.290	0.26
		12/17	T+2	1M	8,000	2.23	0.440	0.37
短国買入	92,669	11/21	T+3	-	4,000	2.35	0.011	0.003
		11/28	T+3	-	4,000	3.68	0.026	0.021
		12/4	T+3	-	4,000	3.13	0.015	0.008
		12/12	T+3	-	4,000	3.36	0.013	0.010
国債買入	-	11/25	T+3	-	3,000	4.11	0.035	0.034
		12/1	T+3	-	3,000	3.43	0.042	0.040
		12/8	T+3	-	3,000	3.17	0.030	0.030
		12/11	T+3	-	3,000	3.52	0.006	0.001

(注1) 短国買入・国債買入の平均落札レート及び落札決定レートは、利回り較差。

(注2) 短国買入の直近残高は、繰上償還等を控除していない。

(注3) シャドローは即日スタート分。

(注4) オペ直近残高は2008/12/17日現在(実行日ベース)。

(注5) 国債買現先オペによる買入国債・受入担保国債のうち、変動利付債は6,801億円、物価連動債は4,556億円、30年債は100億円(2008/12/17日現在<実行日ベース>、対外非公表)。

最近のオペ結果の推移(2)

(図表1-6)

(資金吸収オペ)		(億円、%)						
オペ手段	直近残高	オファー日	スタート	期間	オファー額	応札倍率	平均落札レート	落札決定レート
手形売出	45,806	11/20	即日	1D	8,000	1.36	0.389	0.42
		11/20	即日	1D	6,000	2.11	0.426	0.44
		11/21	即日	4D	8,000	2.00	0.389	0.40
		11/21	即日	4D	6,000	2.52	0.395	0.40
		11/25	即日	1D	6,000	2.06	0.370	0.39
		11/25	即日	1D	9,000	3.34	0.360	0.34
		11/26	即日	1D	8,000	1.32	0.376	0.40
		11/27	即日	1D	8,000	1.37	0.383	0.40
		11/28	即日	3D	8,000	2.15	0.282	0.38
		12/1	即日	1D	8,000	1.83	0.343	0.36
		12/2	即日	1D	6,000	2.57	0.333	0.34
		12/2	即日	1D	3,000	2.03	0.317	0.34
		12/2	即日	1D	10,000	1.71	0.326	0.35
		12/3	即日	1D	10,000	2.78	0.296	0.32
		12/3	即日	1D	8,000	2.22	0.300	0.31
		12/3	即日	1D	8,000	1.74	0.296	0.31
		12/3	即日	1D	6,000	2.30	0.263	0.29
		12/4	即日	1D	15,000	2.14	0.294	0.30
		12/4	即日	1D	15,000	1.40	0.293	0.30
		12/4	即日	1D	10,000	1.07	0.305	0.35
		12/5	即日	3D	15,000	1.22	0.292	0.31
		12/5	即日	3D	10,000	1.38	0.287	0.31
		12/5	即日	3D	4,000	2.19	0.280	0.30
		12/8	即日	1D	15,000	0.90	0.308	0.38
		12/8	即日	1D	5,000	2.13	0.308	0.35
		12/9	即日	1D	10,000	1.94	0.305	0.31
		12/9	即日	1D	10,000	1.44	0.301	0.32
		12/9	即日	1D	5,000	1.30	0.311	0.35
		12/10	即日	1D	15,000	1.56	0.304	0.32
		12/10	即日	1D	15,000	0.99	0.347	0.50
		12/11	即日	1D	20,000	1.57	0.316	0.35
		12/11	即日	1D	12,000	1.76	0.321	0.34
		12/11	即日	1D	8,000	1.52	0.333	0.40
		12/12	即日	3D	20,000	1.70	0.299	0.32
		12/12	即日	3D	10,000	1.64	0.314	0.34
		12/12	即日	3D	10,000	1.15	0.345	0.40
		12/15	即日	1D	20,000	0.94	0.325	0.50
		12/15	即日	1D	8,000	1.03	0.352	0.49
		12/15	即日	1D	8,000	0.94	0.379	0.50
		12/16	即日	1D	12,000	2.60	0.303	0.31
		12/16	即日	1D	15,000	1.73	0.308	0.32
		12/16	即日	1D	8,000	1.82	0.299	0.31
		12/16	T+1	1W	8,000	2.87	0.378	0.39
		12/16	即日	1D	8,000	1.22	0.336	0.40
		12/17	即日	1D	20,000	1.38	0.307	0.33
		12/17	即日	1D	10,000	1.78	0.306	0.35
		12/17	T+1	2W	12,000	1.66	0.345	0.37
		12/17	即日	1D	8,000	1.30	0.360	0.40
国債売現先	0	11/28	即日	3D	8,000	1.16	0.250	0.30

(国債補完供給)		(億円、%)		
発動日	供給額	対象銘柄	平均落札レート	落札決定レート
11/21	30	利付国債20年96回	0.200	0.20

(米ドル資金供給オペ)		(百万ドル、%)				
オペ手段	直近残高	オファー日	スタート日 (米国東部 時間)	期間	落札額	貸出利率 (固定金利)
米ドル資金供給	127,574	12/2	12/4	3M	30,584	1.420
		12/16	12/18	1M	27,893	1.280

(注1) シャドーは即日スタート分。

(注2) オペ直近残高は2008/12/17日現在(実行日ベース)。

(図表 1－7)

資金需給の推移

(単位：兆円)

		資金需給（短国調整済）		金融調節 （短国調整済）	当預残高（末残）	
		銀行券	財政等 （短国調整済）			
08／6月		+7. 2	▲0. 7	+8. 0	▲4. 7	10. 2
7月		▲9. 2	+0. 3	▲9. 4	+7. 3	8. 3
8月		▲3. 1	+0. 1	▲3. 2	+3. 1	8. 3
9月		+1. 4	+0. 4	+0. 9	+3. 6	13. 3
10月		▲2. 6	▲1. 1	▲1. 5	▲0. 9	9. 7
11月		▲2. 2	+0. 0	▲2. 3	+2. 4	9. 8
12月	(-17日)	▲2. 0	▲1. 4	▲0. 6	+0. 1	7. 9
	(18日-)	+1. 9	▲3. 7	+5. 6	▲3. 5	N. A.

(注1) ここでの資金需給は、各月の表面上の計数に、本行が買入れた短期国債の償還額を加えたもので、実力ベースの資金需給。金融調節は、短期国債の償還分も含めた計数で、短期オペ残高の増減に国債買入額を加えたものに一致する。

(注2) 12月(18日-)の資金需給は、現時点での予想。金融調節は、12/17日までにオファーしたオペのスタート・期落ち分に国債買入(0.3兆円)を加えたもの。

(注3) 四捨五入の関係で、資金需給の内訳と合計は必ずしも一致しない。

(図表1-8)

(*)は対外非公表

本行受入担保残高の推移

末残、単位：表内＝兆円、括弧内＝億円

担保種類	2008/6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月 (注8)
総計	73.1	79.7	83.6	81.6	85.0	90.7	94.1
国債	45.1	52.4	55.9	52.9	57.5	62.7	65.3
利付国債等 (注1)	31.0	36.5	40.9	36.6	41.6	45.9	(注2) 47.5
変動利付国債 (*)	7.0	7.6	8.7	8.5	10.7	11.9	11.4
物価連動国債 (*)	2.8	3.0	3.5	2.9	2.6	2.8	2.4
TB・FB	14.1	15.8	15.0	16.2	15.8	16.8	17.8
社債	0.6	0.6	0.6	0.6	0.7	0.8	0.9
短期社債等 (注3)	2.9	2.8	2.5	2.6	1.8	1.6	1.6
その他債券	4.7	4.9	5.0	5.2	5.5	5.8	6.3
手形 (注4)	0.4	0.4	0.4	0.1	0.5	0.7	1.5
証貨	19.0	18.3	18.7	19.9	18.7	18.8	18.1
企業向け	0.3	0.3	0.3	0.3	0.4	0.6	(注5) 0.7
交付税特会等 (注6)	18.7	18.0	18.4	19.5	18.2	18.2	17.4
うち民間債務分	4.4	4.3	4.0	3.9	3.5	3.9	5.0

ABS	0	139	159	159	351	354	410
ABCP (注7)	225	170	141	176	140	108	2,906
(うち特則分) (*)	(-)	(-)	(-)	(-)	(0)	(33)	(58)
社債特則分 (*)	-	-	-	-	-	-	53
企業向け証貨特則分 (*)	-	-	-	-	-	-	0

(参考) 現先オペでの買入残高

末残、単位：表内＝兆円、括弧内＝億円

オペ種類	2008/6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月 (注8)
国債買入先オペでの国債買入残高	4.9	3.6	3.4	8.4	10.9	8.8	10.6
CP等買入先オペでのCP買入残高	0.2	0.0	0.0	0.2	0.5	2.0	3.7
ABCP買入残高	210	0	0	60	325	458	6,919
(うち特則分) (*)	(-)	(-)	(-)	(-)	(0)	(0)	(6,483)

(注1) 利付国債、割引国債、承継国債および分離国債。

(注2) 分離国債は、182億円。(*)

(注3) 短期社債、保証付短期外債および資産担保短期債券。

(注4) CPを含む。

(注5) シンジケート・ローン債権は、12億円。

(注6) 交付税特会、預金保険機構および銀行等保有株式取得機構向け。

(注7) 資産担保短期債券を含む (以下同じ)。

(注8) 12月15日時点。

(図表1-9)

対外非公表

共通担保使用状況

単位：兆円

	2008/6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月 (注1)
共通担保使用額合計 (注2)	22.5	30.5	32.3	31.5	32.9	38.2	40.9
うち 共通担保オペ使用額 (注2)	21.6	29.6	31.4	25.7	22.7	25.6	24.4
当座貸越残高 日中ピーク (注3)	4.9	4.1	3.6	4.6	6.8	7.3	6.7

(注1) 12月15日時点。

(注2) 末残。

(注3) 平残 (ITC口を除く)。

(*)は対外非公表

信用判定・適格審査の状況

1. ABCPの担保適格審査状況

	件数	発行枠 (審査済分)	受入残高 (注1)
担保適格ABC (特則分) (*) (注2)	12件<14件>	8兆4,000億円	6,541億円
担保適格ABC (本則分) (*) (注2)	7件	1兆5,100億円	3,284億円
市中ABC計 (注3)	42件	16兆7,848億円	—

(注1) 「受入残高」は12月15日時点 (共通担保受入額とCP等買現先オペでの買入残高の合計)。

(注2) 「担保適格ABC (特則分)」、「同 (本則分)」は12月17日時点で審査済のもの。< >内は10月28日以降の審査依頼件数。

(注3) 「市中ABC計」は9月末の計数。

2. 信用判定の状況 (*)

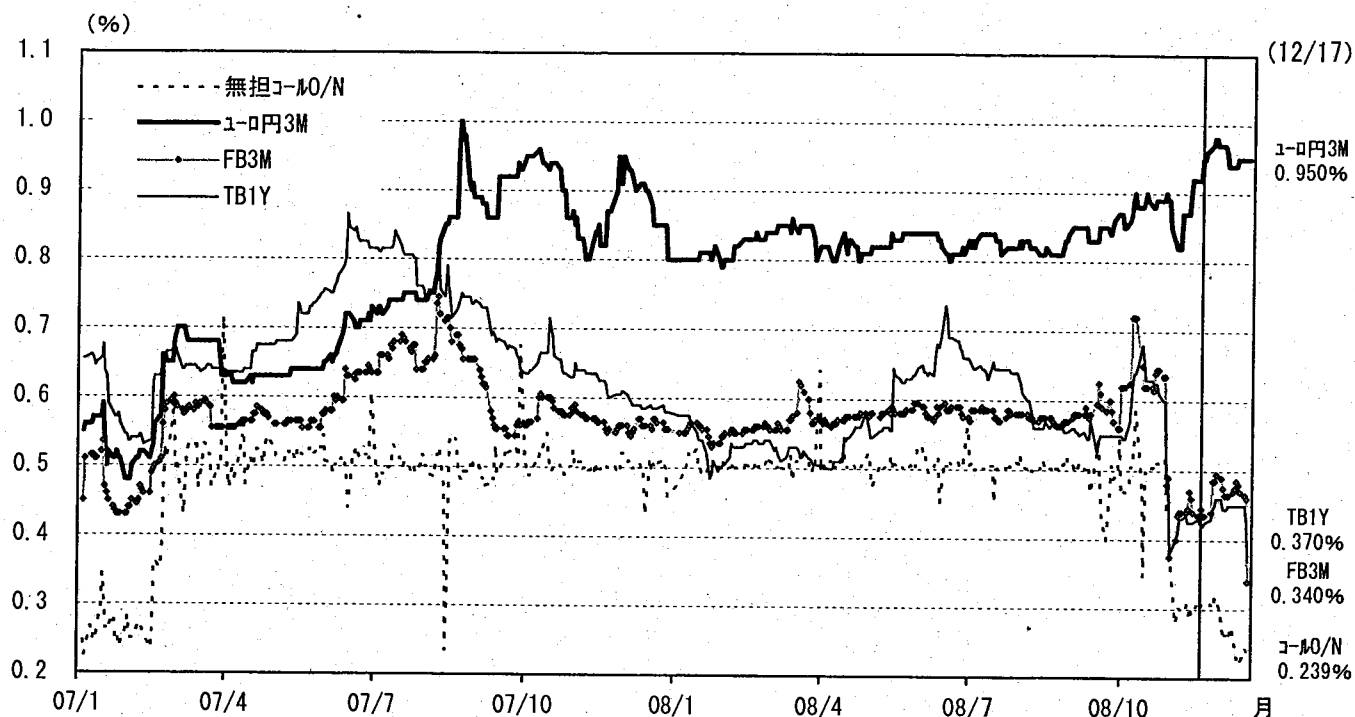
	2008/6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月 (注1)
新規適格化先数	0	1	0	0	2	3	(注2) 13 (52)
取下げ・抹消先数	4	2	0	0	5	1	0
信用判定適格先数	307	306	306	306	303	305	318

(注1) 12月17日までの実績。

(注2) かっこ内は審査依頼件数 (依頼書未受領分を含む。うち25先は、BBB格または無格付の先)。

短期金利の推移

(1) 短期金利の推移



(2) ターム物レート等の推移

(%)

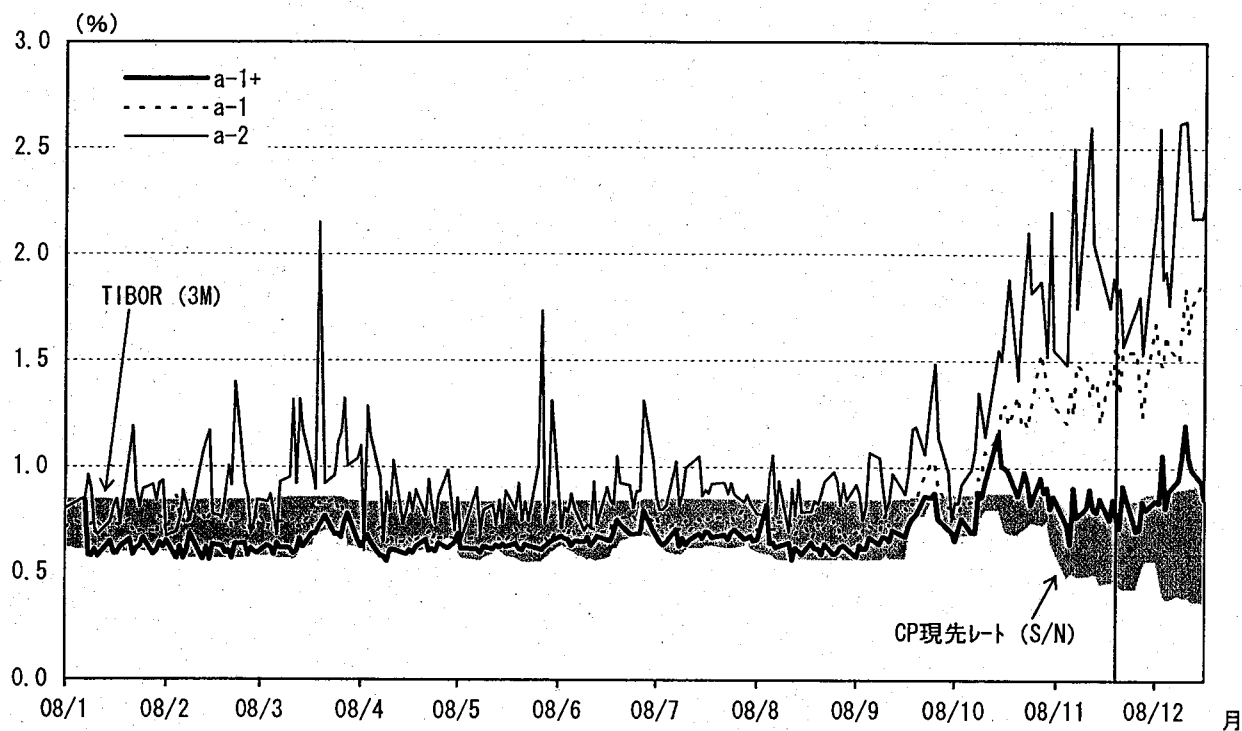
	無担コール	ユーロ円レート				短期レート			レポレート	ユーロ円金先
	O/N	1W	1M	3M	6M	3M	6M	1Y	S/N	09/3月限 (中心限月)
08/11/19	0.303	0.550	0.610	0.950	0.980	0.445	0.435	0.425	0.400	0.690
11/20	0.306	0.610	0.650	0.950	0.980	0.435	0.435	0.420	0.410	0.730
11/21	0.305	0.610	0.650	0.960	0.980	0.435	0.435	0.425	0.420	0.730
11/25	0.307	0.600	0.650	0.970	0.980	0.440	0.435	0.430	0.430	0.790
11/26	0.304	0.600	0.670	0.980	0.990	0.485	0.445	0.445	0.480	0.790
11/27	0.306	0.600	0.900	0.980	0.990	0.485	0.455	0.450	0.500	0.815
11/28	0.318	0.600	0.900	0.970	0.990	0.495	0.465	0.460	0.500	0.805
12/1	0.299	0.610	0.900	0.970	0.990	0.490	0.465	0.460	0.470	0.775
12/2	0.279	0.600	0.900	0.970	0.990	0.475	0.450	0.445	0.350	0.720
12/3	0.257	0.580	0.890	0.960	0.980	0.465	0.450	0.445	0.310	0.755
12/4	0.263	0.500	0.870	0.940	0.990	0.465	0.450	0.445	0.330	0.755
12/5	0.256	0.450	0.880	0.940	0.990	0.465	0.455	0.450	0.370	0.765
12/8	0.275	0.450	0.900	0.940	1.000	0.470	0.455	0.450	0.400	0.785
12/9	0.255	0.430	0.890	0.940	1.000	0.475	0.455	0.450	0.350	0.785
12/10	0.247	0.400	0.900	0.950	1.010	0.485	0.455	0.450	0.310	0.775
12/11	0.229	0.400	0.900	0.950	1.000	0.480	0.455	0.450	0.370	0.770
12/12	0.222	0.400	0.890	0.950	1.000	0.470	0.450	0.450	0.390	0.730
12/15	0.235	0.390	0.890	0.950	1.000	0.465	0.450	0.450	0.360	0.715
12/16	0.242	0.380	0.880	0.950	1.000	0.460	0.440	0.425	0.310	0.680
12/17	0.239	0.350	0.880	0.950	1.000	0.340	0.350	0.370	0.300	0.615

(注) ユーロ円レート・レポレートは、ヒアリングベースによるもので対外非公表。

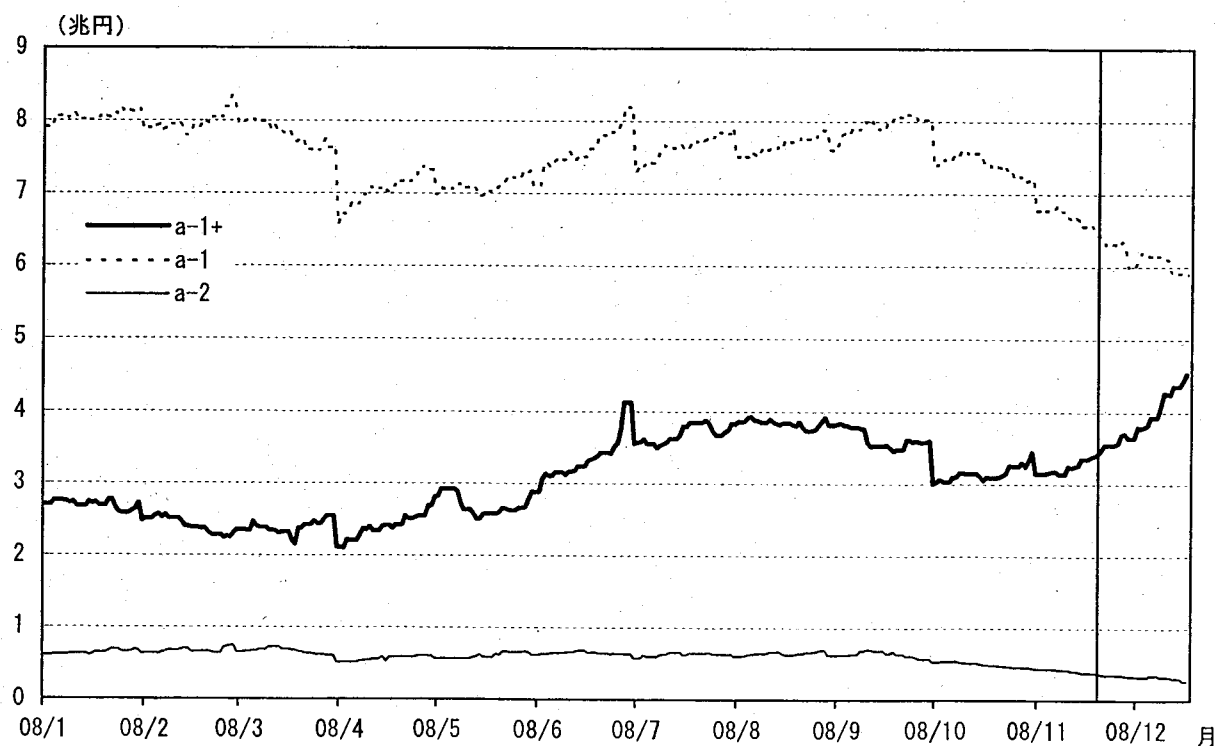
(出所) 日本相互証券、東京金融取引所、日本銀行

CP市場の動向

(1) 格付別発行レート



(2) 格付別発行残高



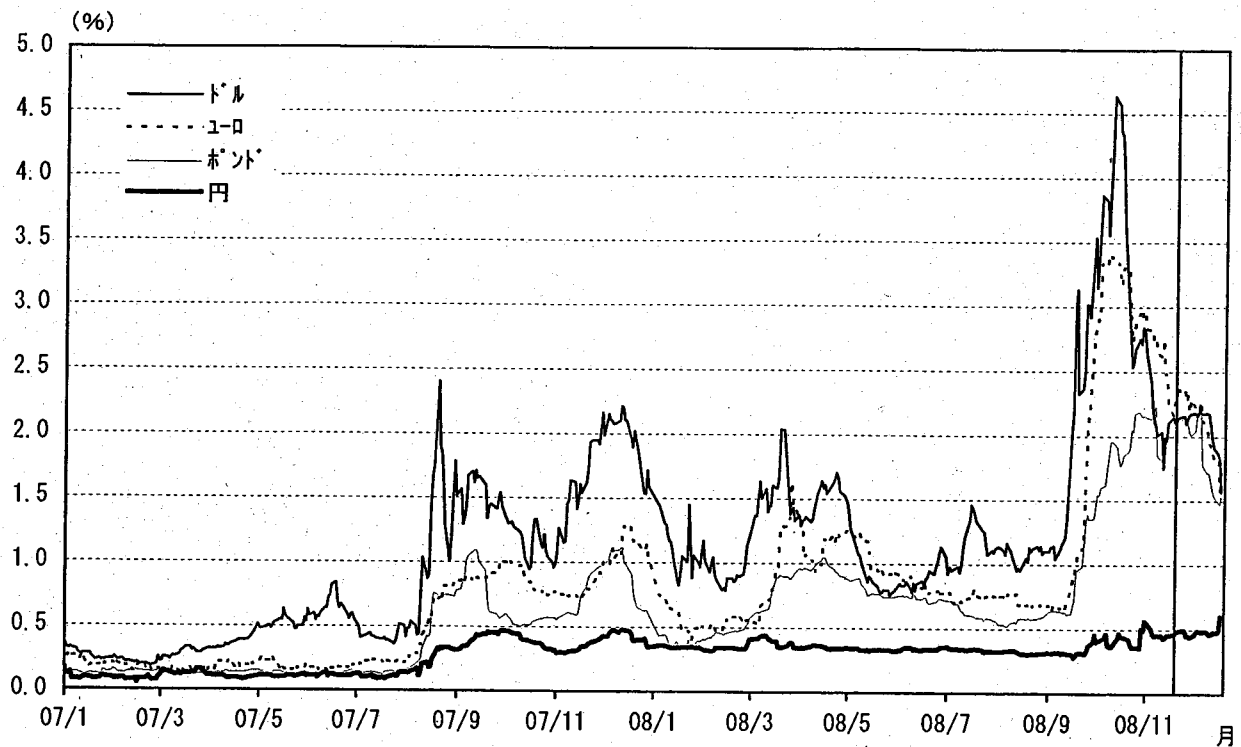
(注) 1. 集計対象は、CP等買現先オペの対象先による引受分(全ターム)。格付けは基本的にR&Iによる。

2. 対外非公表。直近は12/16日。

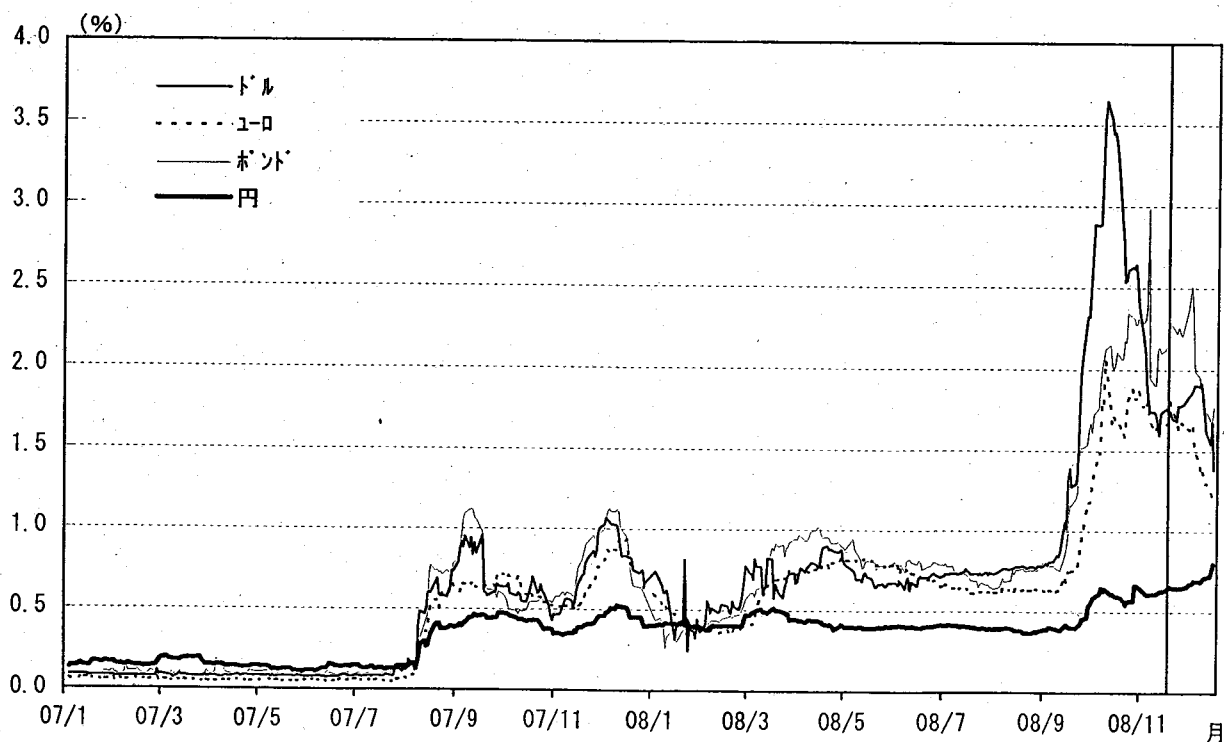
(出所) 全国銀行協会、日本銀行

ターム物レートの推移

(1) TEDスプレッド (LIBOR-FB/TB、3か月物) の推移



(2) LIBOR-OISスプレッド (3か月物) の推移



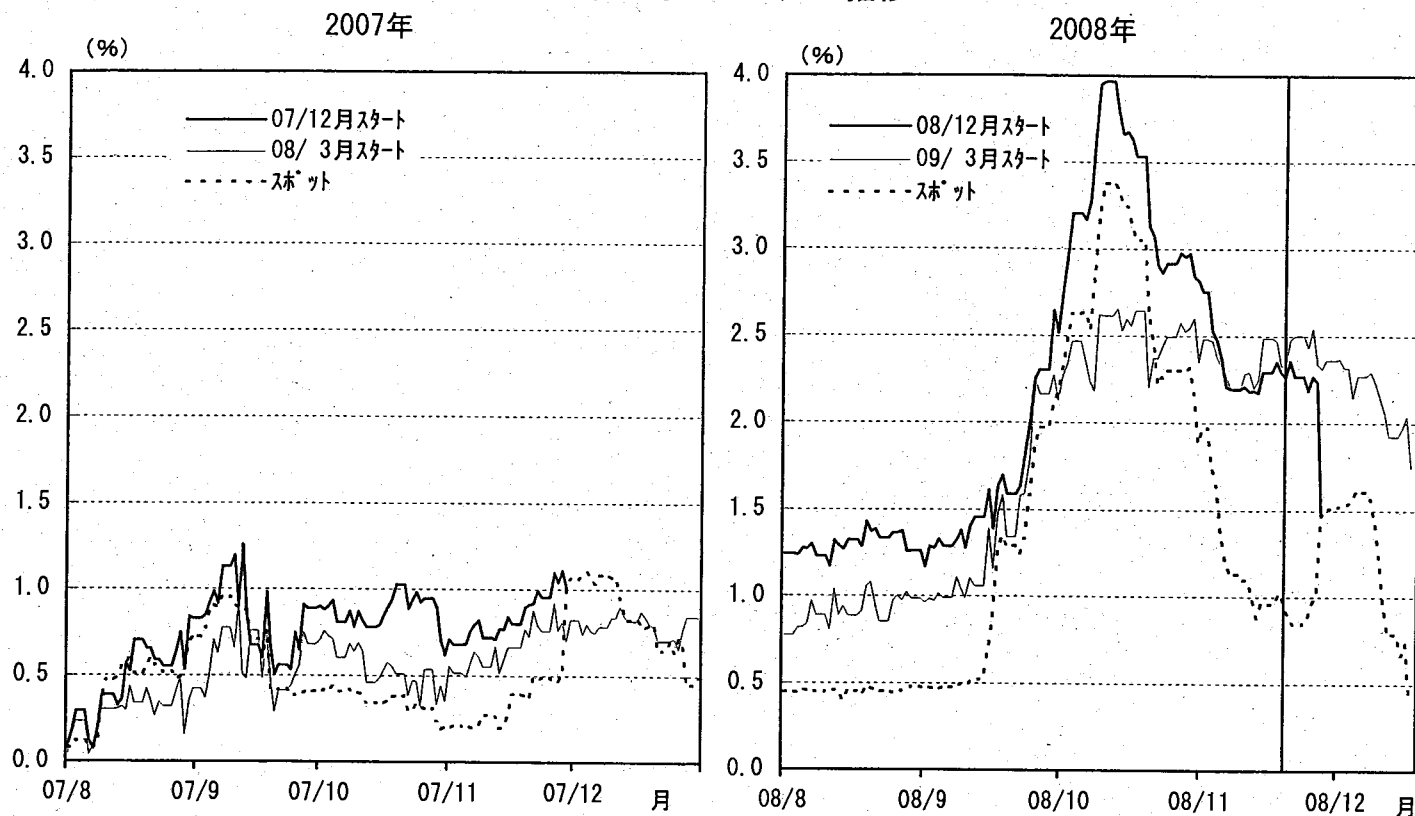
(注) 1. (1)のボンドのFB/TBは、3か月物レポレートで代用。

2. 直近は12/17日。

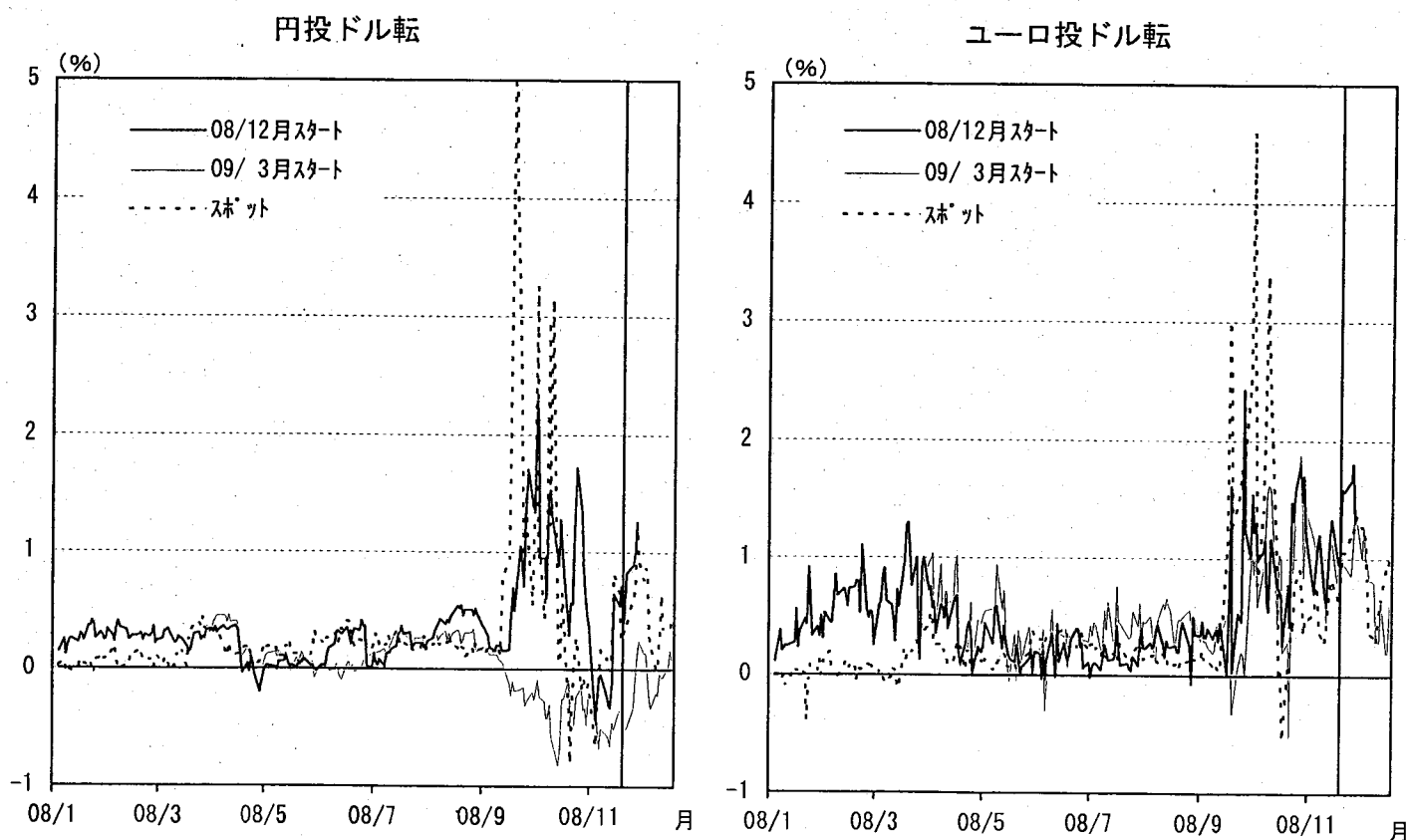
(出所) 日本相互証券、Bloomberg、ロイター、メイタン・トラディション

ドル調達プレミアムの推移

(1) ドルLIBOR-OISスプレッド(1か月物フォワード)の推移



(2) ドル転コスト対LIBORスプレッド(1か月物フォワード)の推移

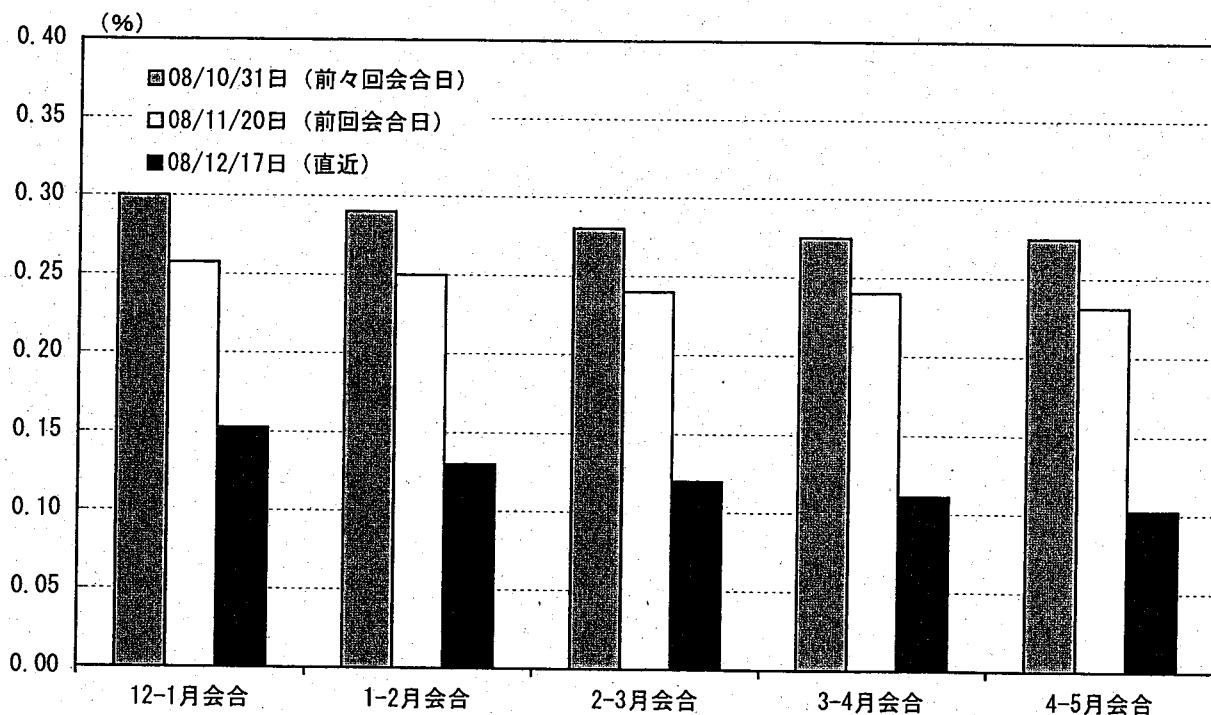


(注) 直近は12/17日。

(出所) Bloomberg、メイトン・トラディション、ロイター

フォワードレート等の推移 (1)

(1) OISレート (会合間取引) の動向

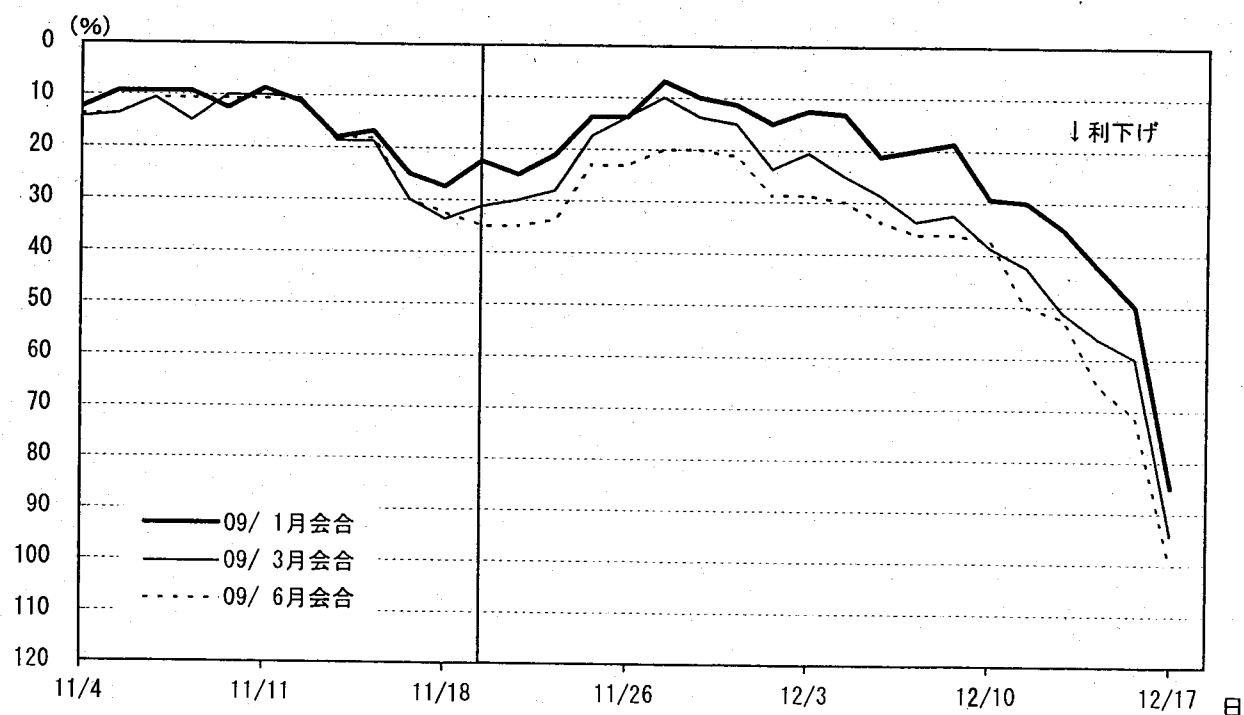


(注) 1. 会合間取引レートの仲値。

2. 直近は12/17日。

(出所) メイタン・トラディション

(2) OISレートからみた政策変更 (±20bps) の織り込み度合い



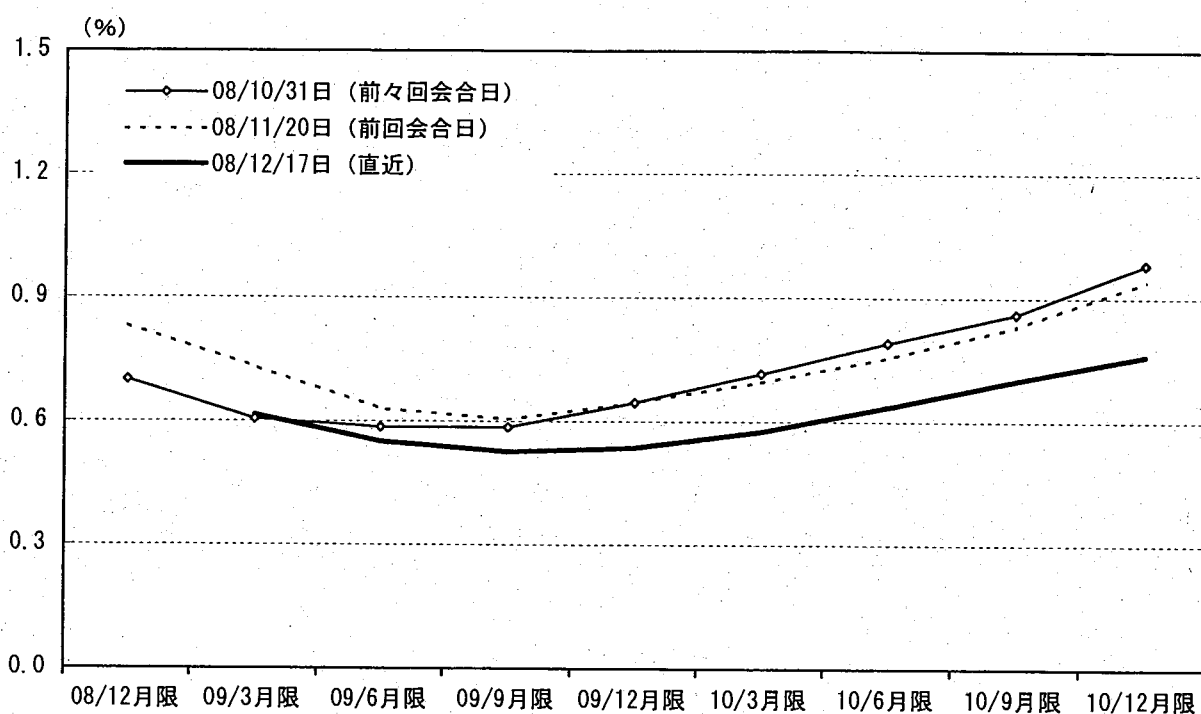
(注) 1. 会合間取引レートの仲値から算出。

2. 直近は12/17日。

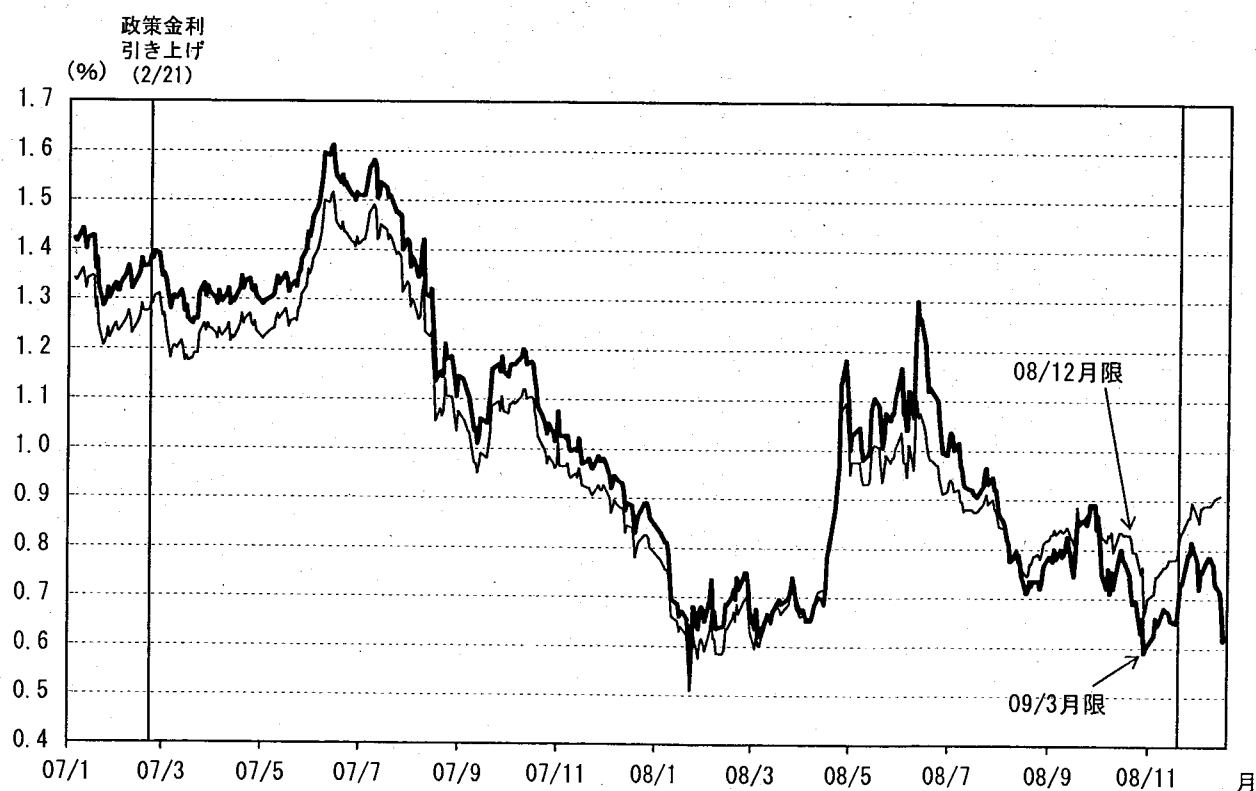
(出所) メイタン・トラディション、日本銀行

フォワードレート等の推移 (2)

(1) ユーロ円金利先物からみたフォワードレート・カーブ



(2) ユーロ円金利先物レートの推移

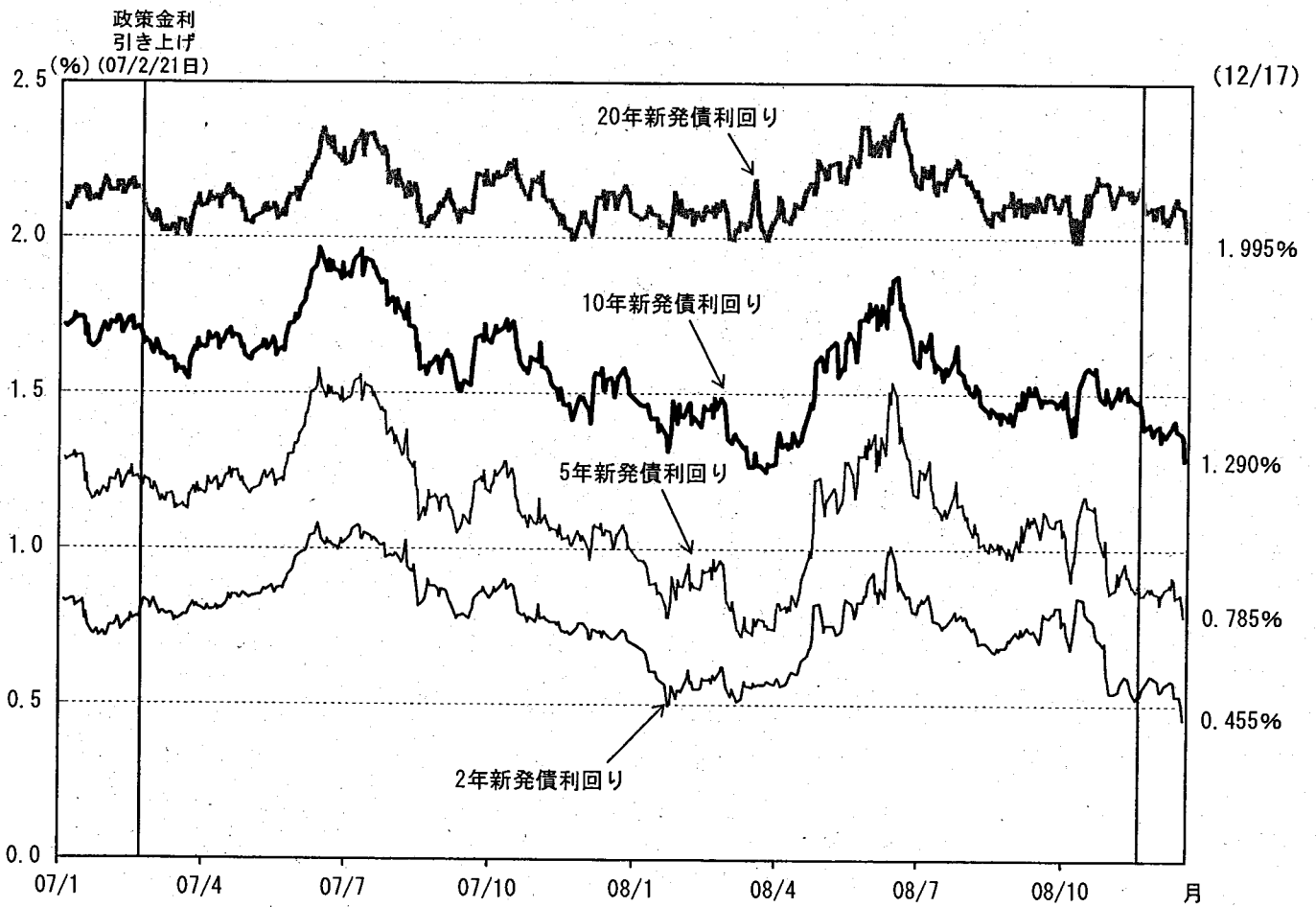


(注) 直近は12/17日。

(出所) 東京金融取引所

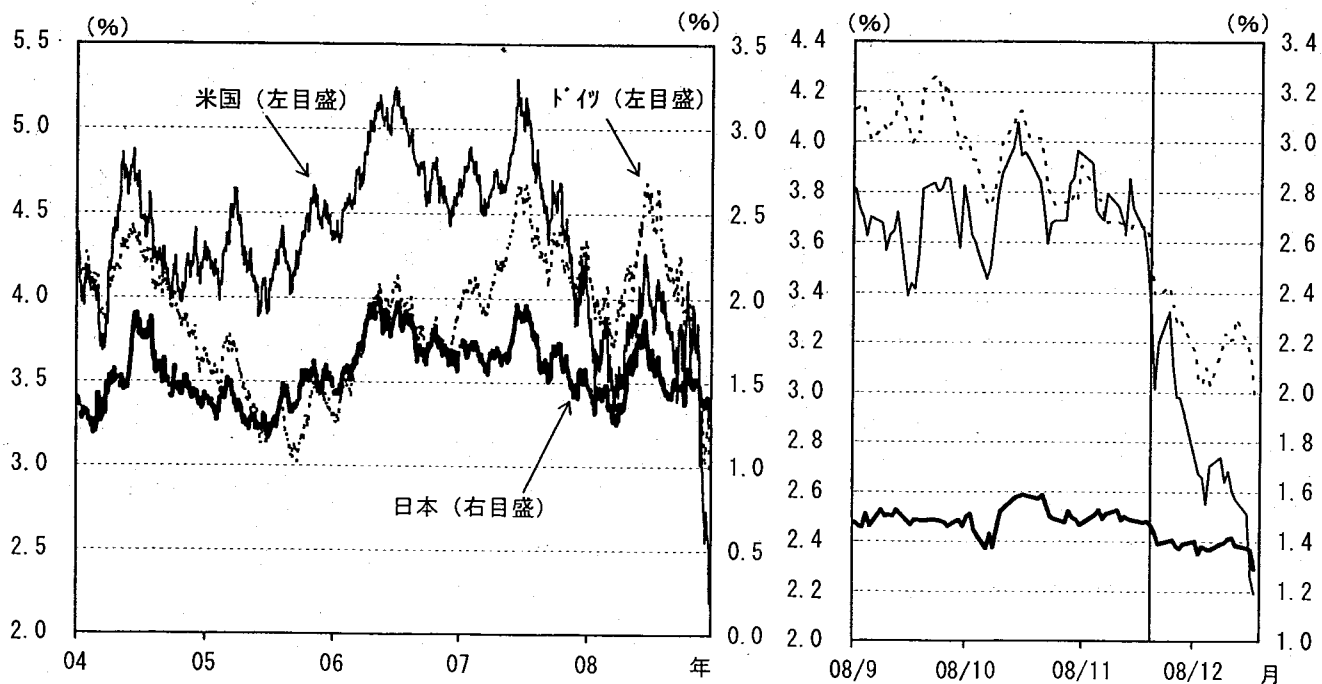
長期金利の推移

(1) 国内年限別の推移



(出所) 日本相互証券

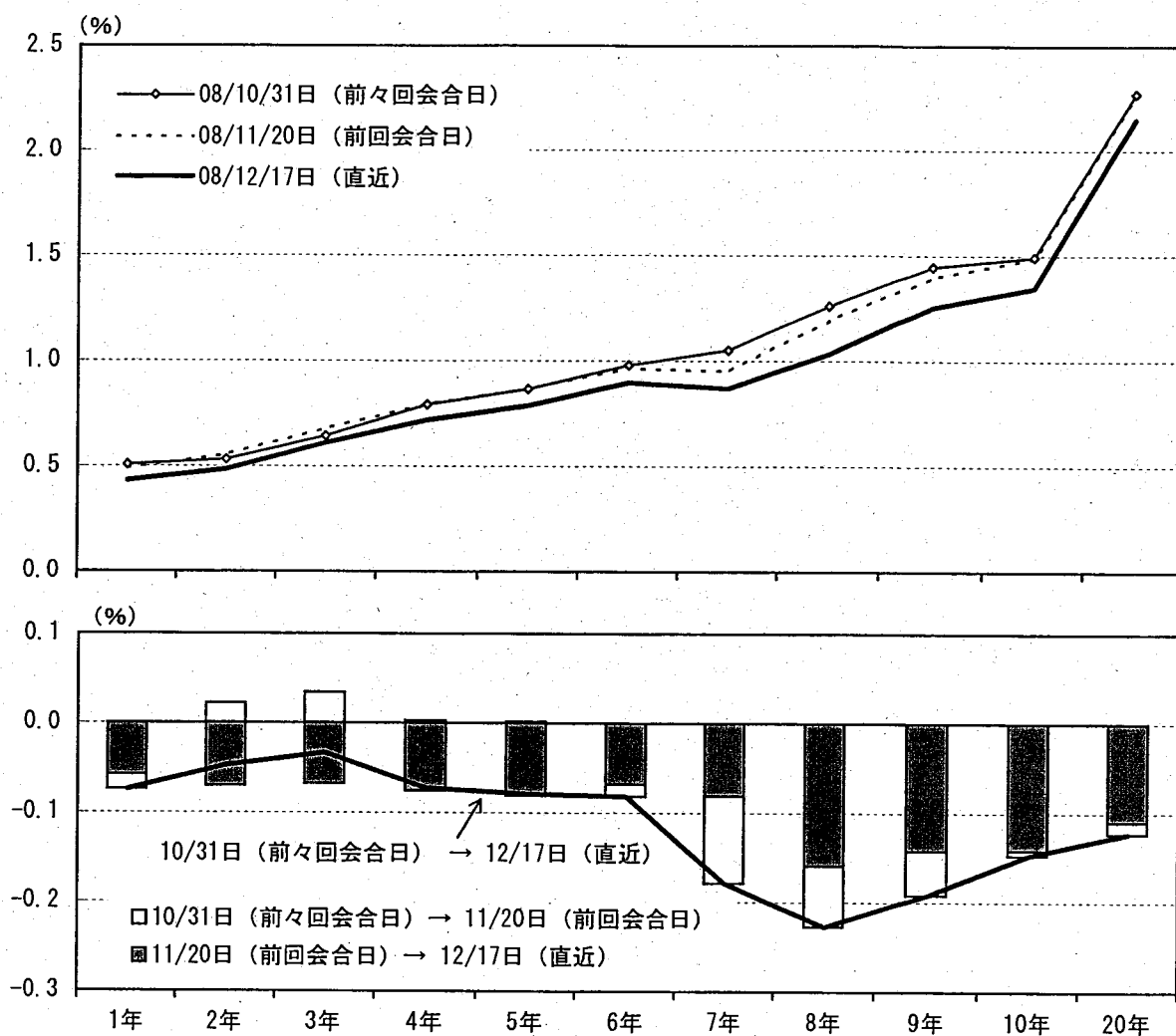
(2) 10年国債利回りの推移



(注) 直近は12/17日。

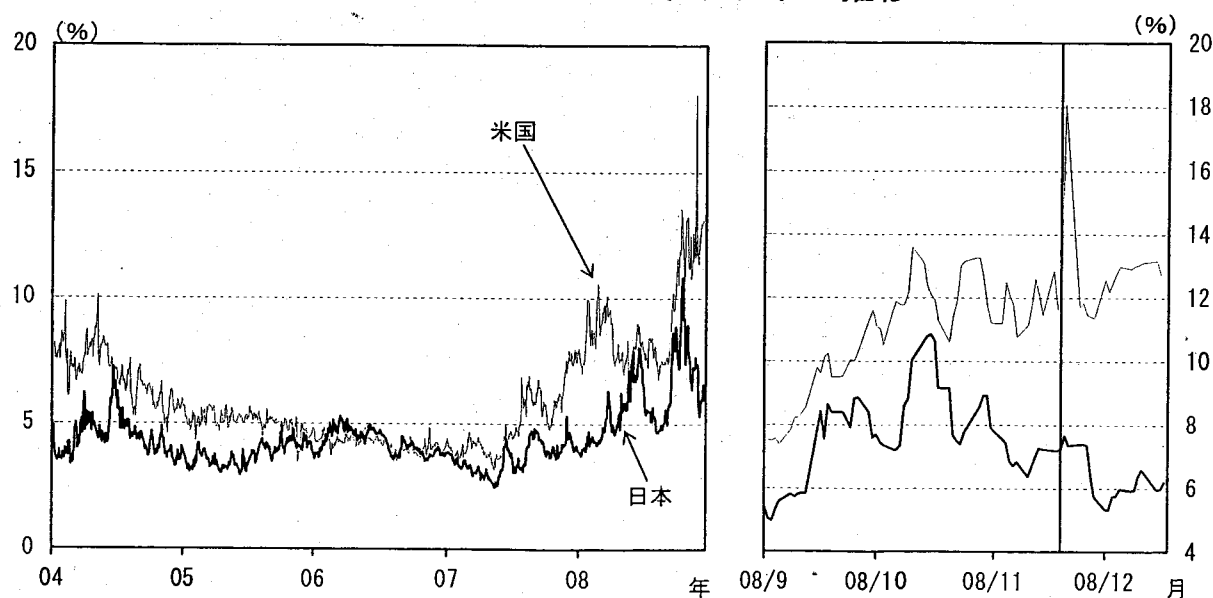
(出所) Bloomberg、日本相互証券

イールド・カーブの動向



(出所) 日本証券業協会、日本銀行

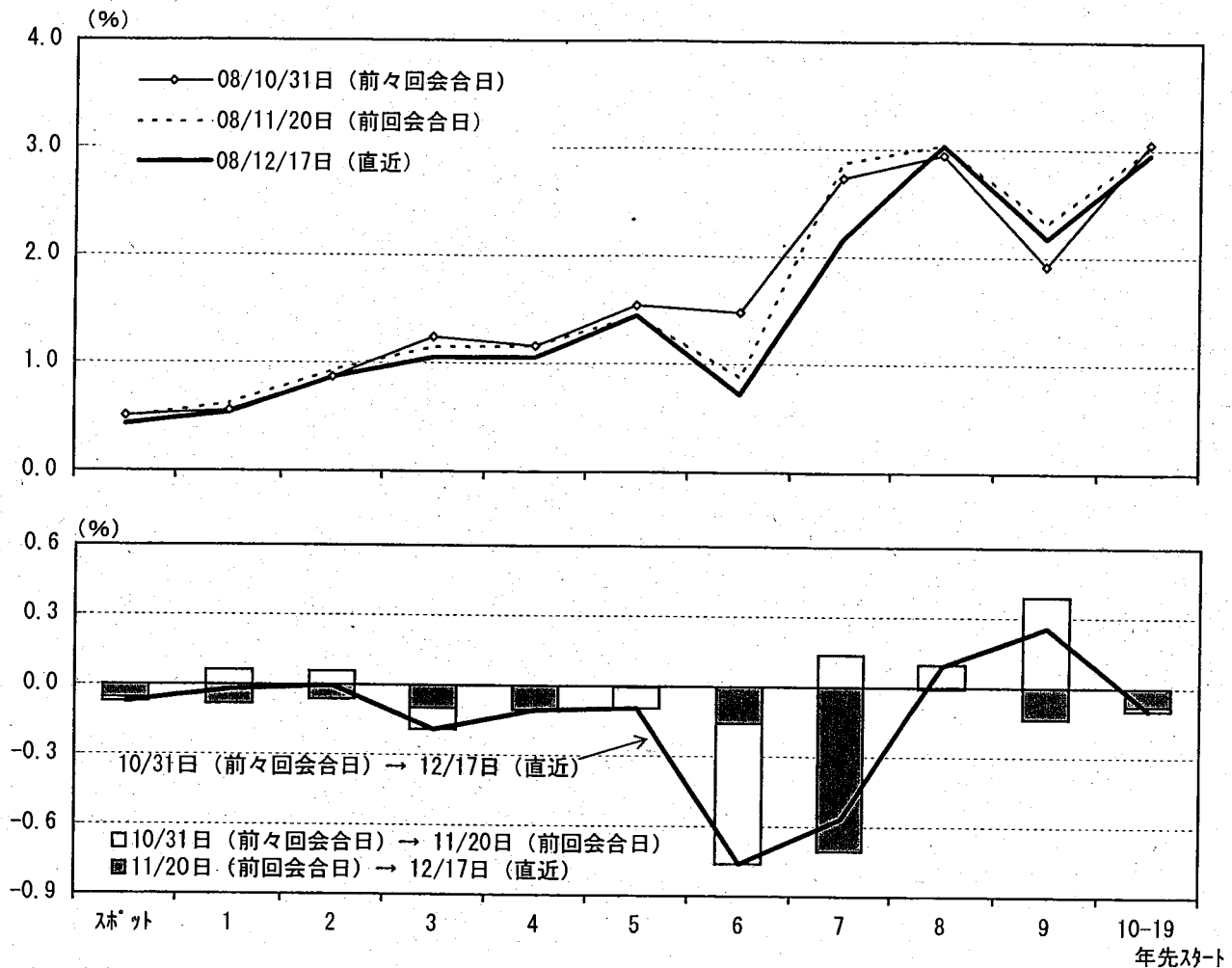
インプライド・ボラティリティの推移



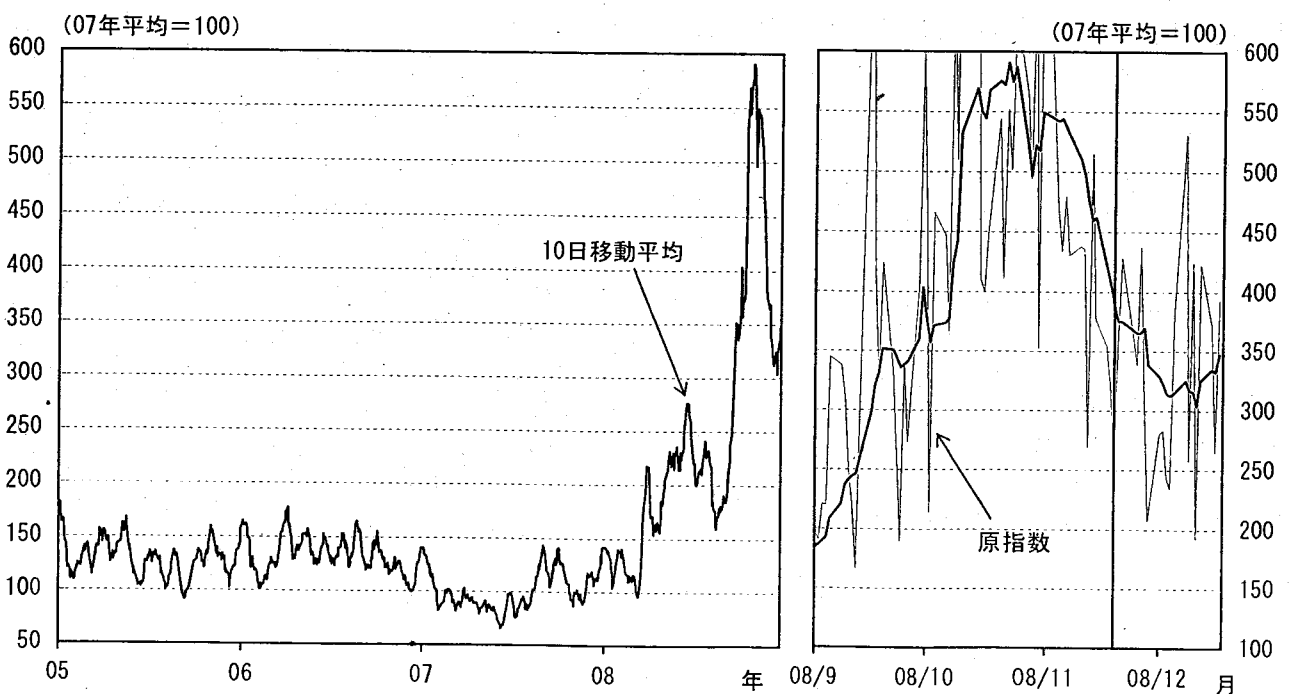
(注) 直近は、日本は12/17日、米国は12/16日。

(出所) 三菱UFJ証券、Bloomberg

フォワードレート・カーブの動向

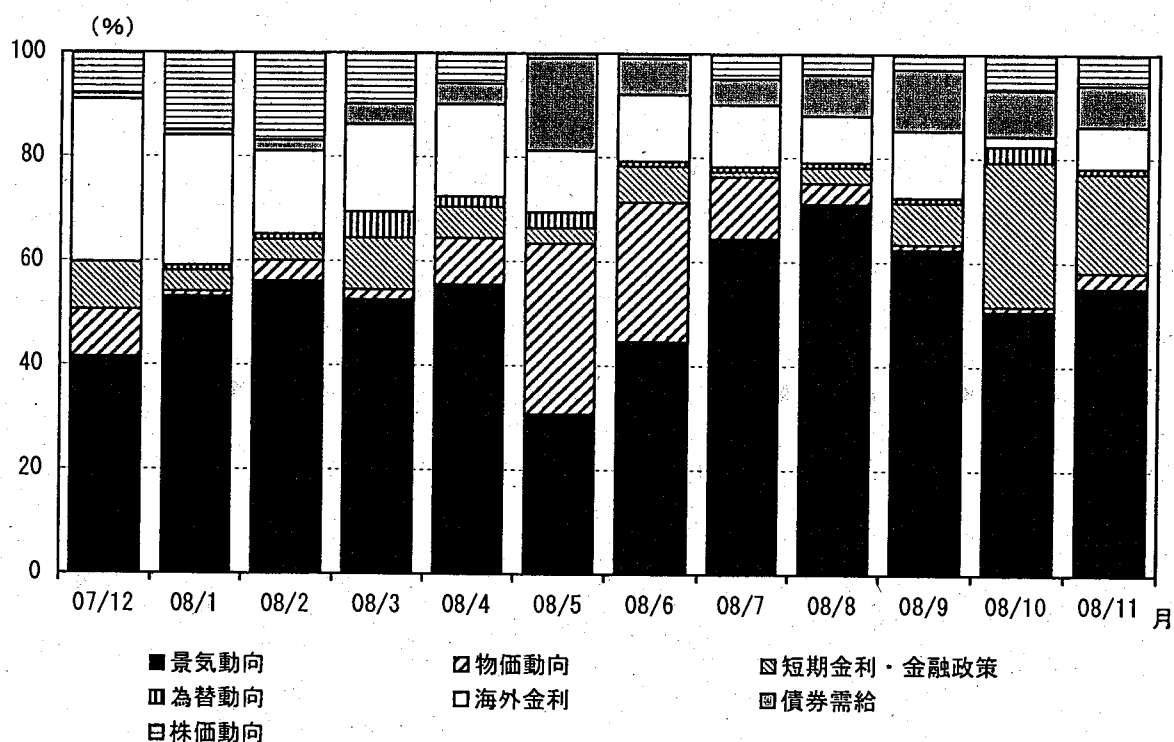


長国先物の値幅・出来高比率の推移

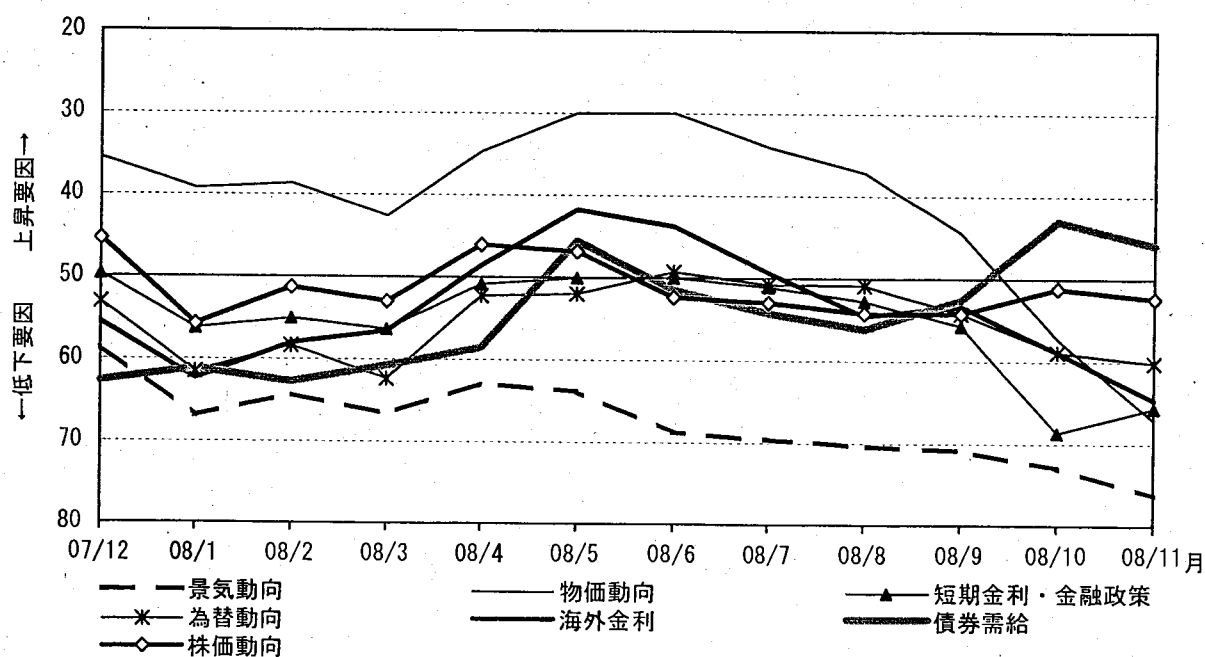


市場参加者が注目する債券利回り変動要因

(1) 注目する債券利回り変動要因



(2) 注目する変動要因の影響（各要因は利回りにどう影響するか）



(注) 各要因について、
強い低下要因=100、低下要因=75、中立・不明=50、上昇要因=25、強い上昇要因=0
として指数化。

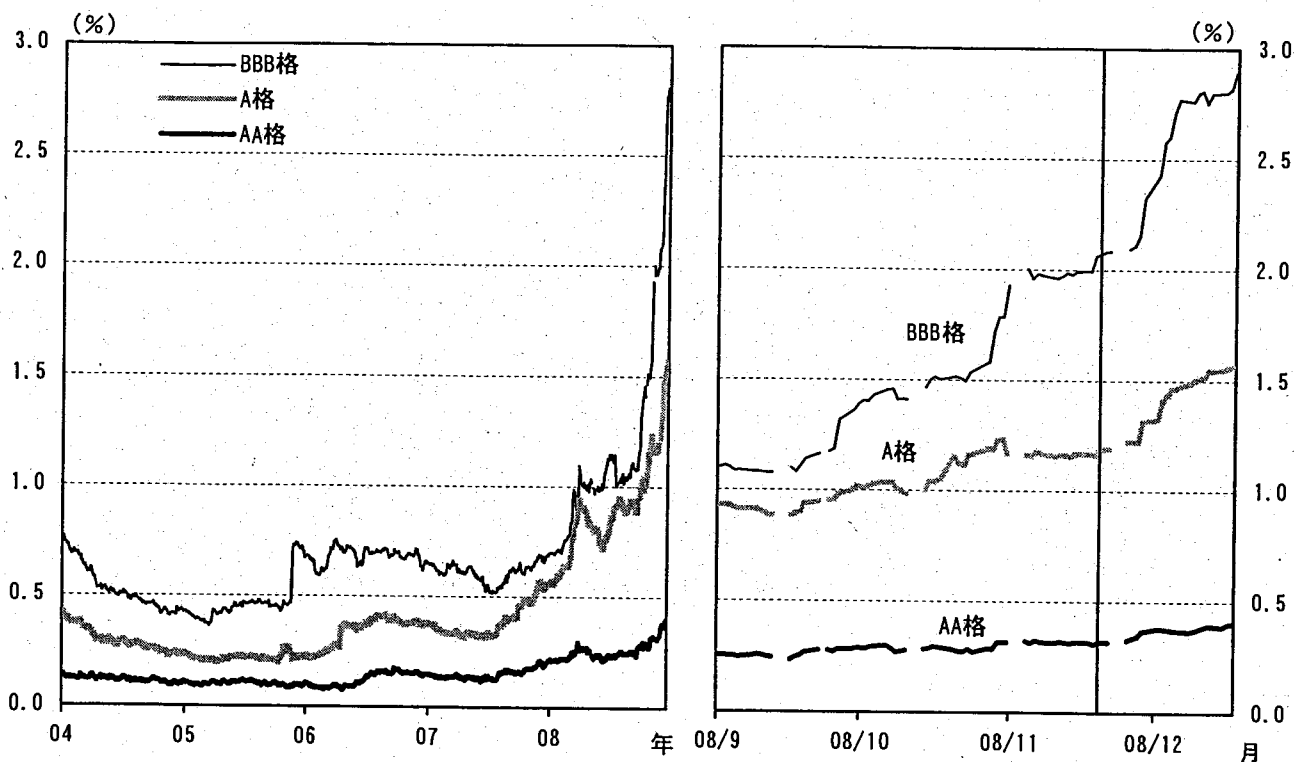
(調査方法) 調査期間：08/11/25日～08/11/27日（10年新発債利回り：1.375～1.400%）

調査対象：証券会社・機関投資家の債券担当208名（回答率 70.2%）

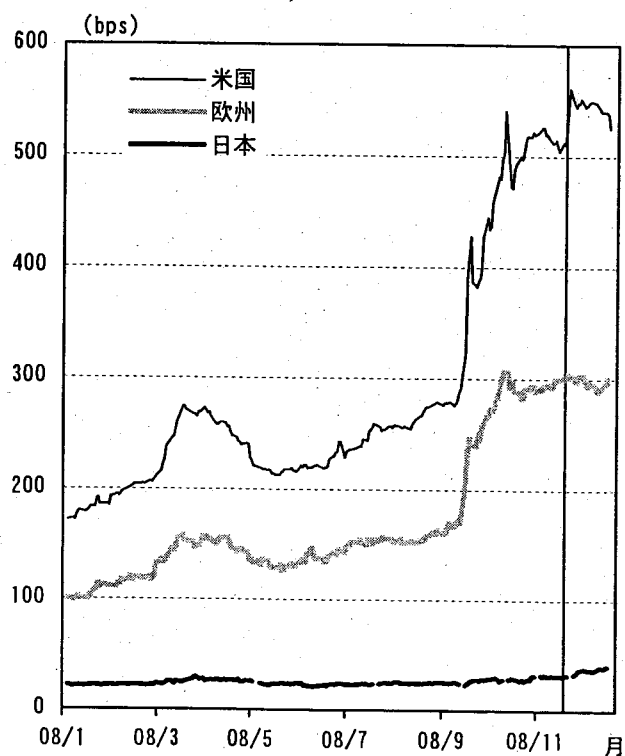
(出所) 「QSS債券月次調査」

社債流通利回りの対国債スプレッドの推移

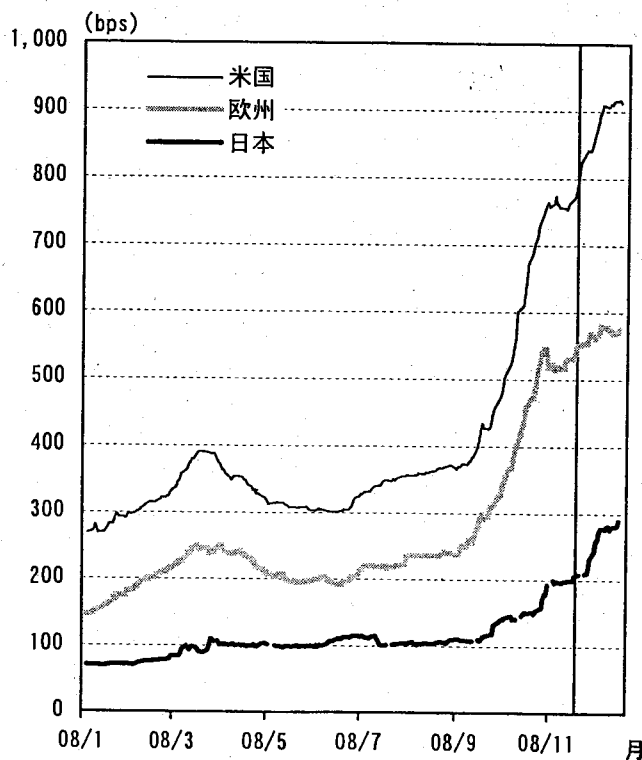
(1) 国内社債の動向



(2) 高格付社債 (AA格) の動向



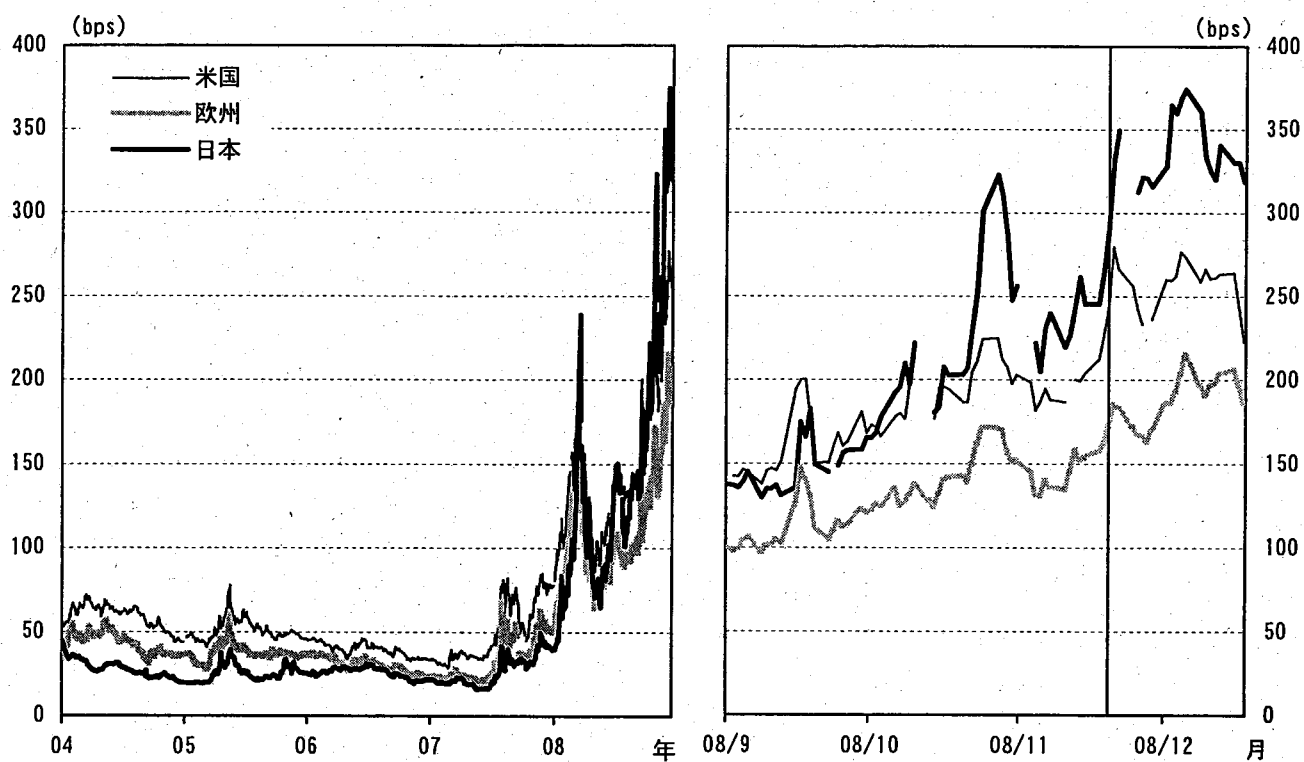
(3) 低格付社債 (BBB格) の動向



- (注) 1. 日本の社債流通利回りは売買参考統計値、格付はR&Iによる。集計対象は、残存3年以上7年未満の銘柄。
 2. 米欧はメリルリンチ算出、格付けはMoody's、S&P、Fitchによる。集計対象は、残存3年以上5年未満の銘柄。
 3. 直近は12/17日。

(出所) Bloomberg、日本証券業協会、日本銀行

CDSプレミアムの推移



(注) 1. 以下の各インデックス。年限は5年。

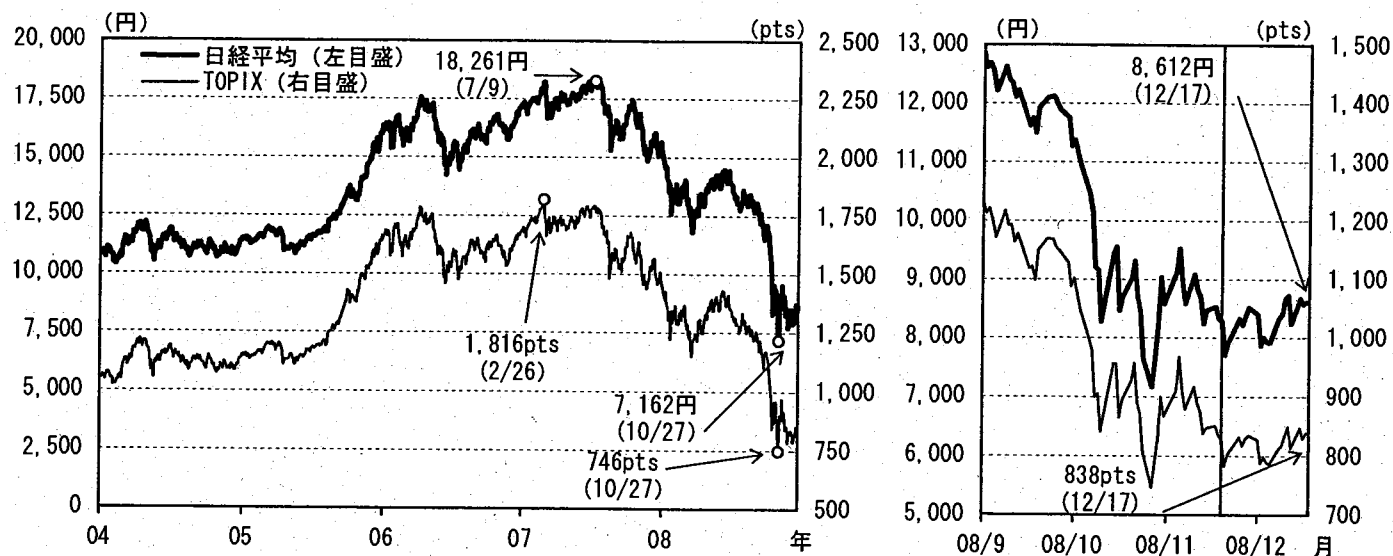
日本: iTraxx Japan 米国: CDX.NA.IG 欧州: iTraxx Europe。

2. 直近は12/17日。

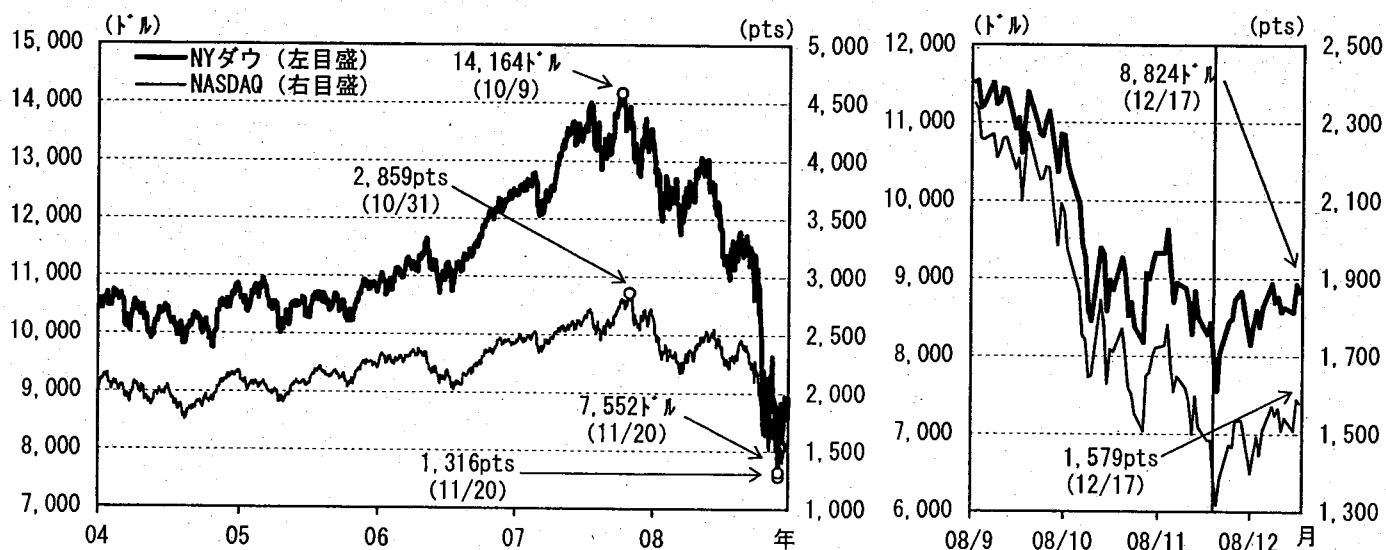
(出所) Markit、JPモルガン

株式相場の推移

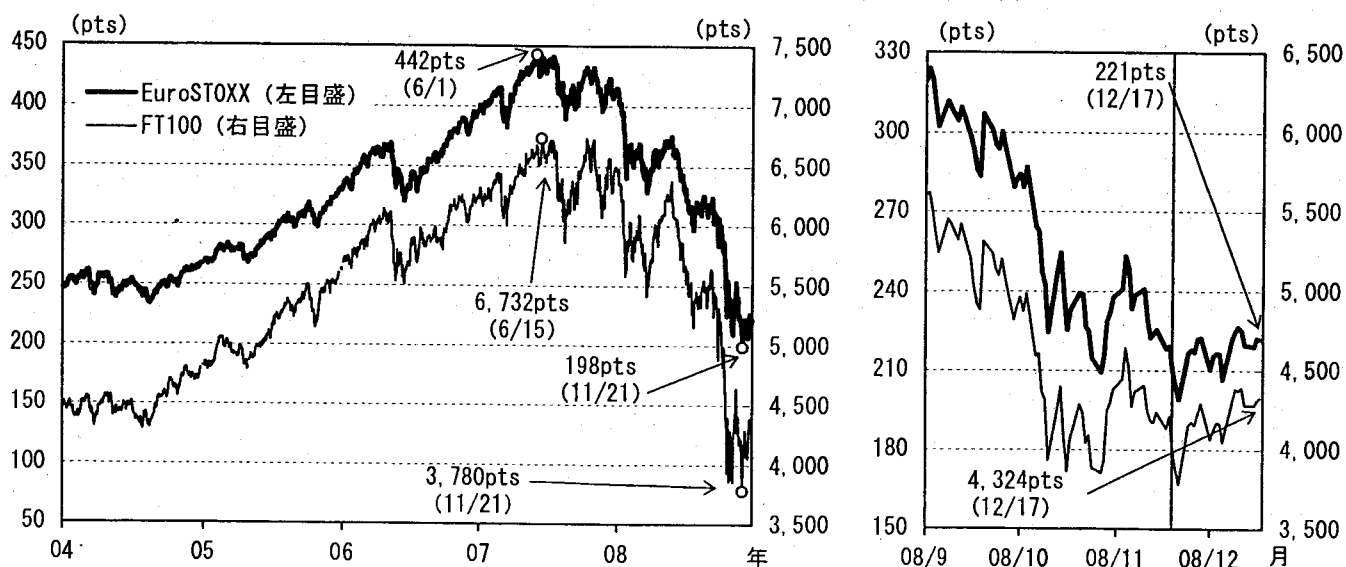
(1) 国内株価の推移



(2) 米国株価の推移



(3) 欧州株価の推移



(注) 直近は12/17日。

(出所) QUICK、Bloomberg

(図表2-14)

主体別売買動向

(▲は売り越し、億円)

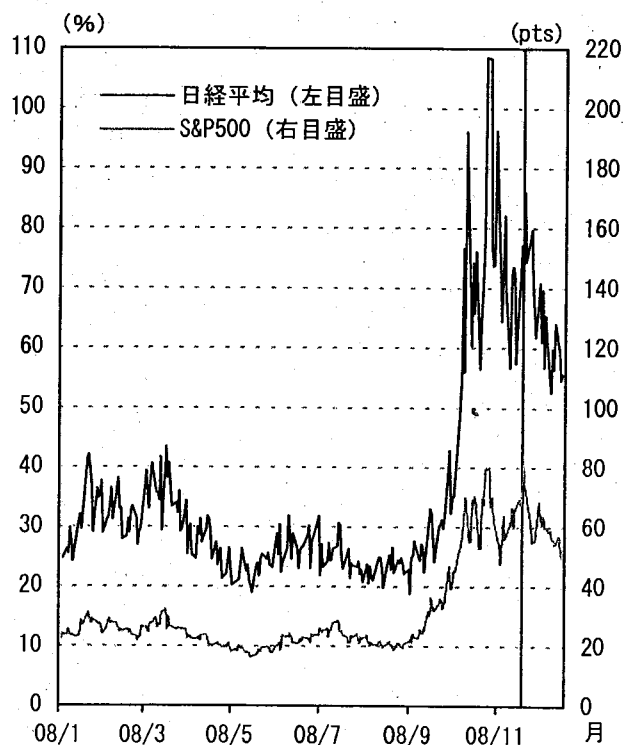
	個人		事業法人	投 信	金融機関			外国人
		うち 信用				うち 信託	うち 生・損保	
05年	▲39,955	33,717	13,523	7,553	▲59,466	▲42,307	▲5,602	103,218
06年	▲43,811	18,380	20,190	17,073	▲40,369	▲33,176	▲1,499	55,288
07年	▲32,288	14,152	15,555	▲5,448	▲17,953	▲16,834	678	54,234
08/1 ~ 3月	6,043	▲1,286	6,812	1,678	9,164	8,984	79	▲20,248
4 ~ 6月	▲5,546	2,184	2,288	▲229	▲3,947	▲759	▲1,572	24,323
7 ~ 9月	▲720	▲556	1,850	348	1,683	3,421	▲1,096	▲12,215
08/9月	2,134	723	882	▲214	▲789	717	▲950	▲5,764
10月	9,927	▲678	2,192	440	12,056	11,887	320	▲10,696
11月	3,368	22	2,213	27	11,269	11,733	▲469	▲10,500
08/11/4 ~ 11/7	597	76	332	66	3,692	3,893	▲179	▲1,960
11/10 ~ 11/14	2,502	701	528	▲264	1,159	1,248	▲61	▲3,600
11/17 ~ 11/21	1,997	118	1,222	145	4,451	4,301	49	▲5,360
11/25 ~ 11/28	▲1,729	▲874	129	78	1,966	2,289	▲278	421
12/1 ~ 12/5	1,102	156	466	241	3,744	3,638	72	▲3,449

(注) 1. 三市場（東京・大阪・名古屋）1・2部等合計。

2. 金融機関は、都銀・地銀等、その他金融、信託、生・損保。

(出所) 東京証券取引所

ボラティリティの推移



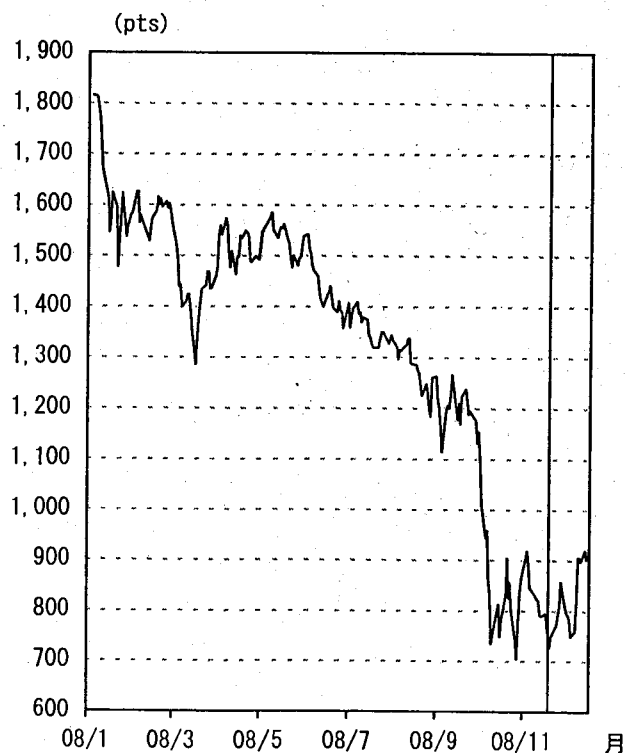
(注) 1. 日経平均はインプライド・ボラティリティ。

S&P500はVIX指数。

2. 直近は12/17日。

(出所) Bloomberg

東証REIT指数の推移



(注) 1. 東証REIT指数は、東証上場のREIT全銘柄を対象

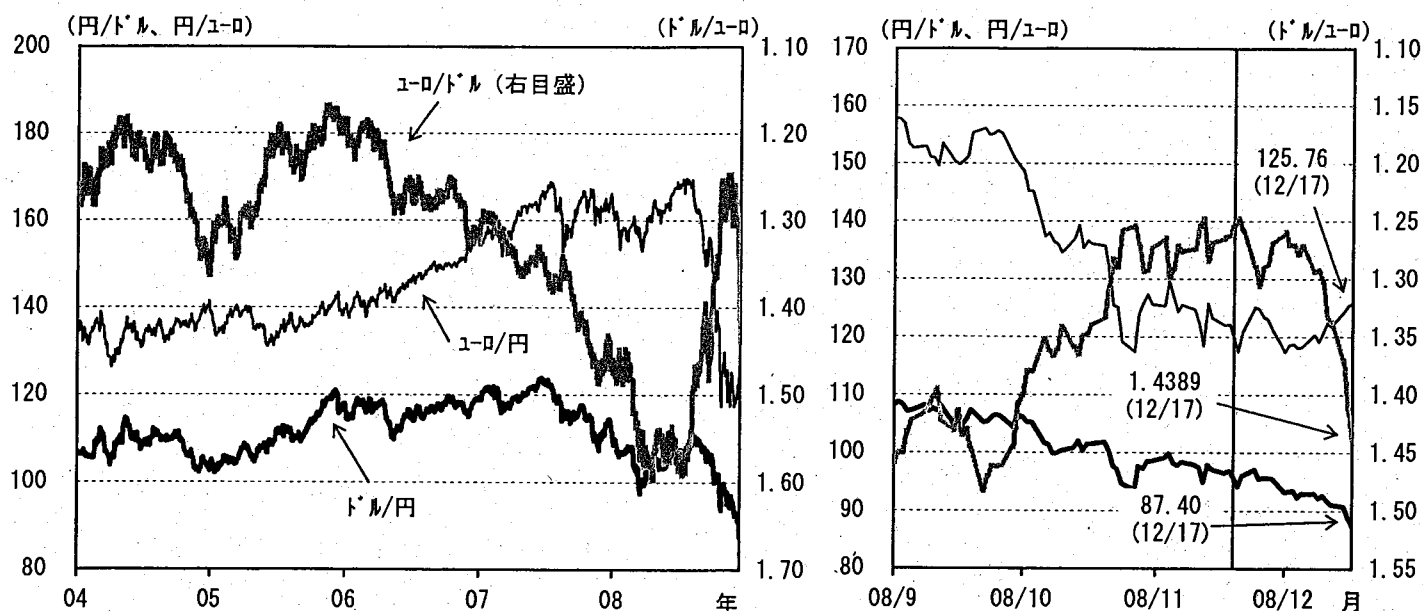
とした時価総額加重平均指数。

2. 直近は12/17日。

(出所) Bloomberg

主要為替相場の推移

(1) ドル/円、ユーロ/円、ユーロ/ドル相場の推移



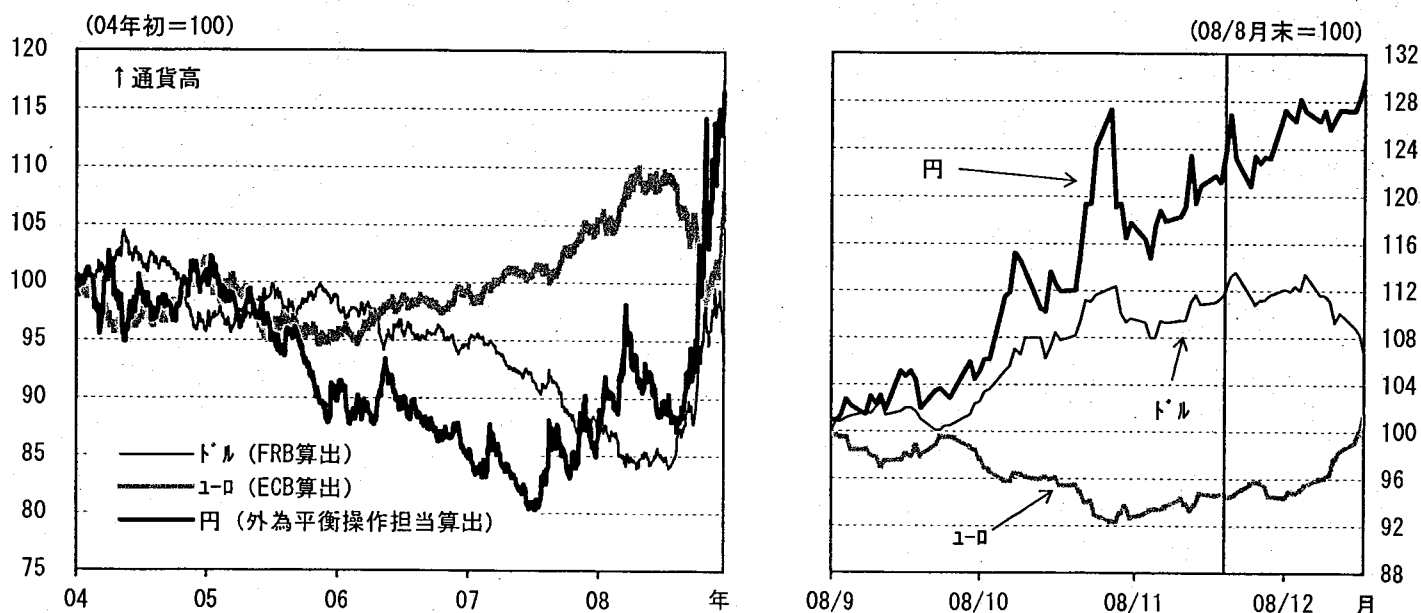
〈参考〉

	11月決定会合直前 (11/19日)	期間中ボトム	期間中ピーク	直近終値 (12/17日)
円の対ドル相場	95.70円	97.00円 (11/24日)	87.40円 (12/17日)	87.40円
円の対ユーロ相場	119.91円	125.76円 (12/17日)	117.36円 (12/1日)	125.76円
ユーロの対ドル相場	1.2530ドル	1.2474ドル (11/20日)	1.4389ドル (12/17日)	1.4389ドル

(注) 原則NY市場16時時点。

(出所) 日本銀行 (対外非公表)

(2) 名目実効為替レート推移



(注) 直近は12/17日。

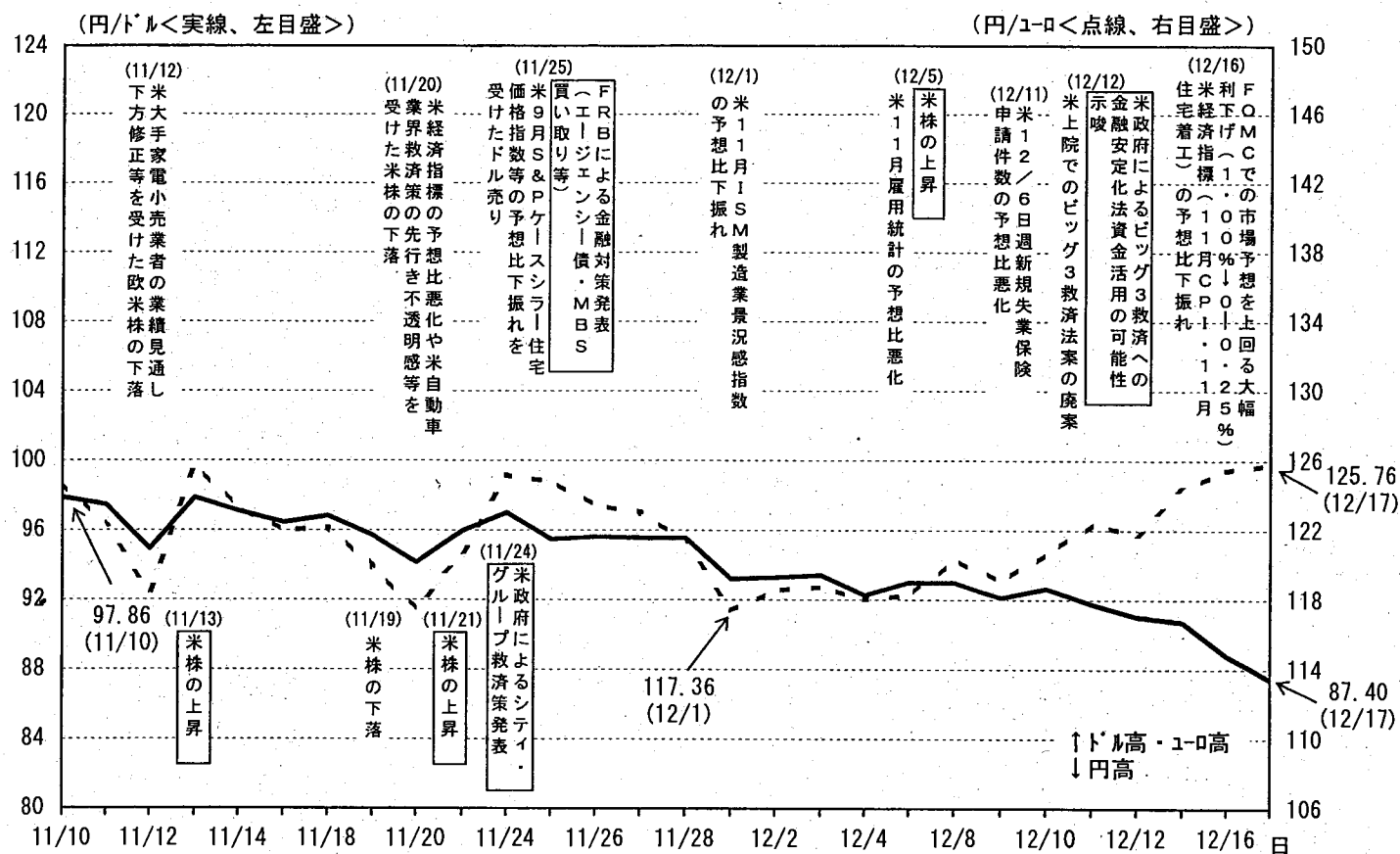
(出所) ドルはFRB (ユーロ、円、ラ米、アジア通貨等26通貨ベース)

ユーロはECB (米ドル、英ポンド、円等22通貨ベース)

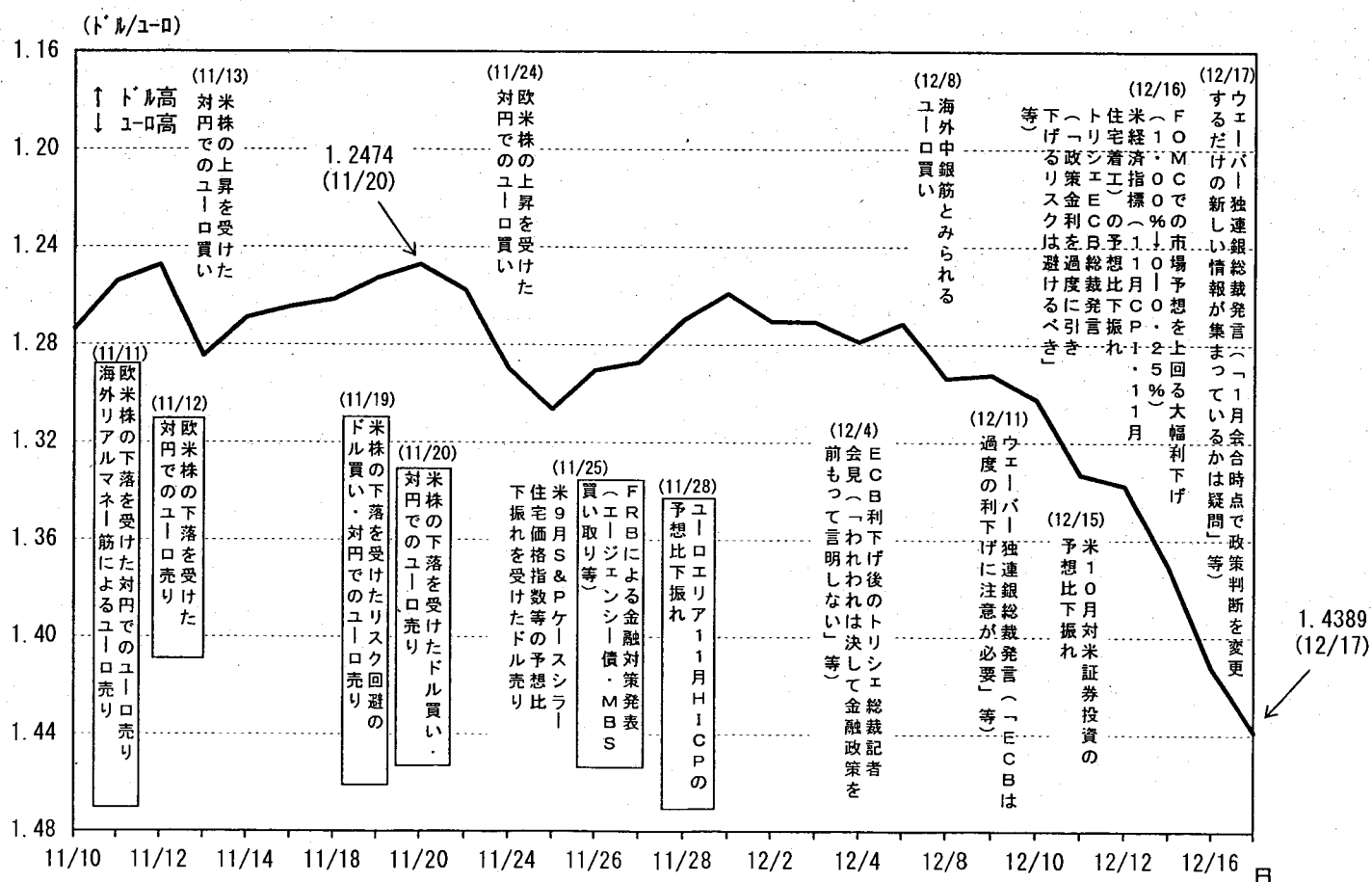
円は日本銀行 (米ドル、ユーロ、アジア通貨等15通貨ベース)

最近の為替相場動向とその変動要因

(1) ドル/円、ユーロ/円相場



(2) ユーロ/ドル相場



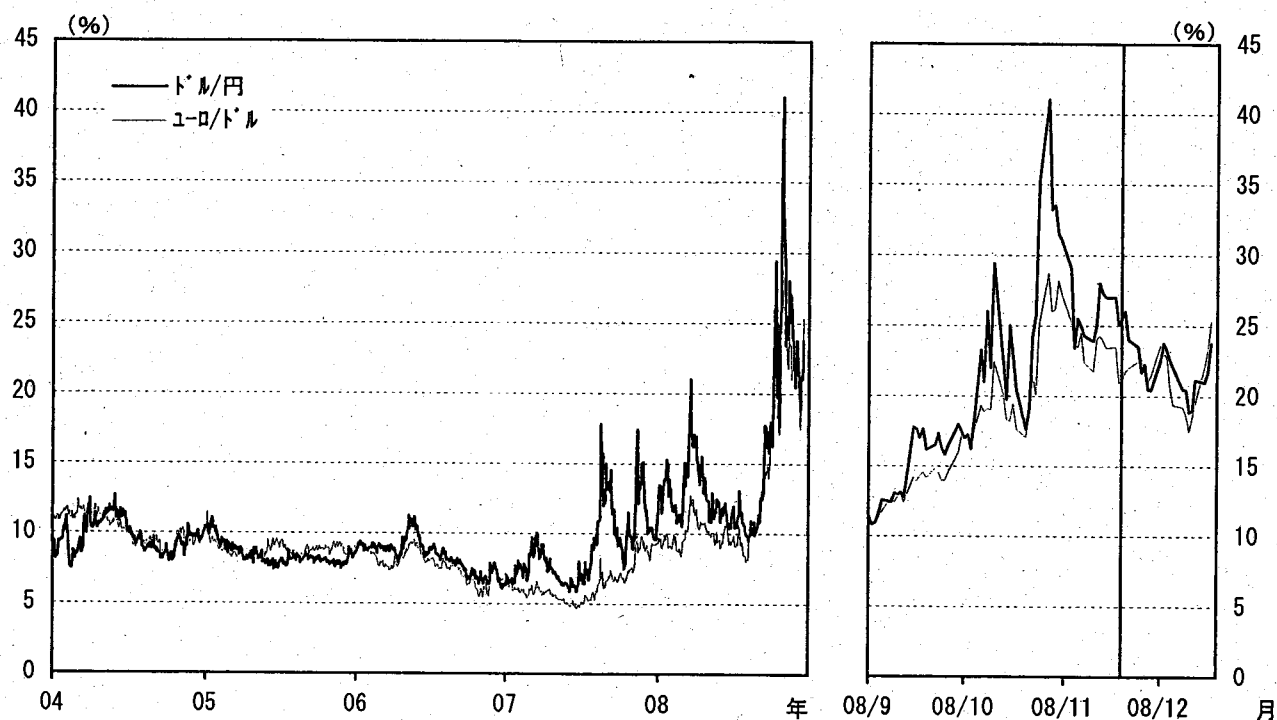
(注) 1. 原則NY市場16時時点。

2. 枠付きはドル高材料。

(出所) 日本銀行 (対外非公表)

通貨オプション市場の動向

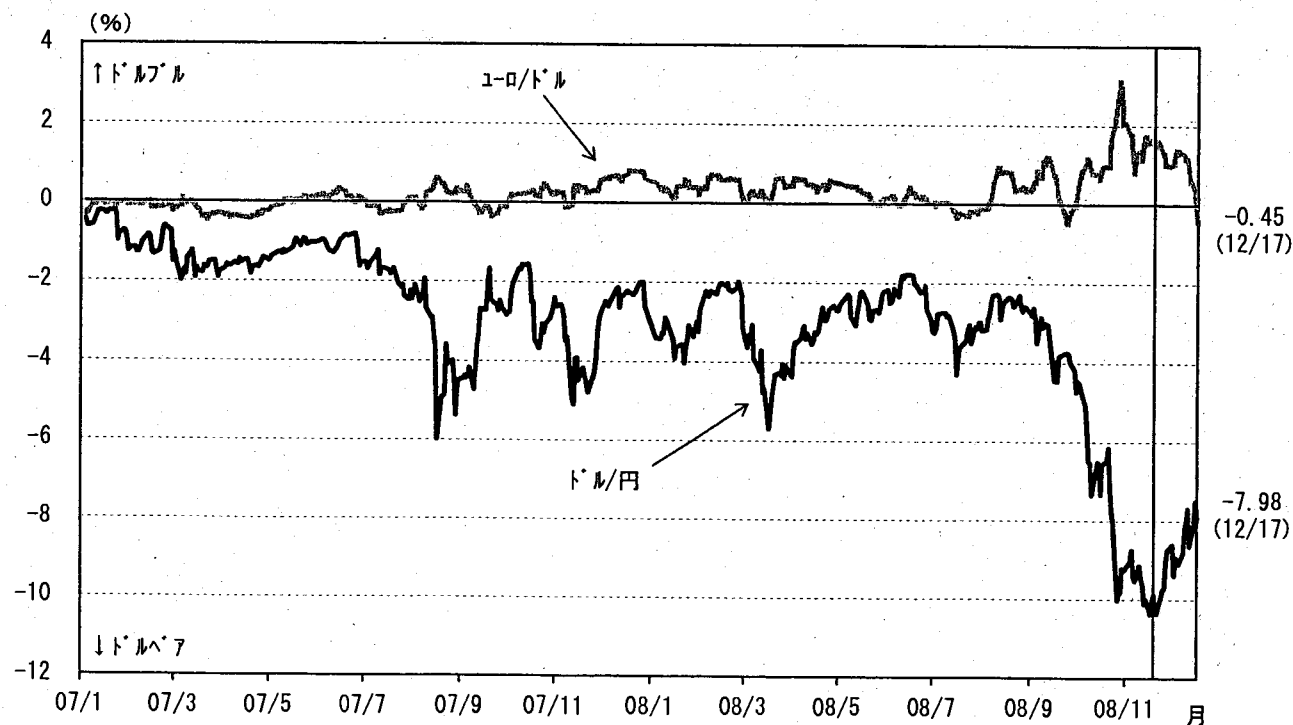
(1) インプライド・ボラティリティ (1か月) の推移



(注) 直近は12/17日。

(出所) Bloomberg

(2) リスクリバーサル (1か月) の推移

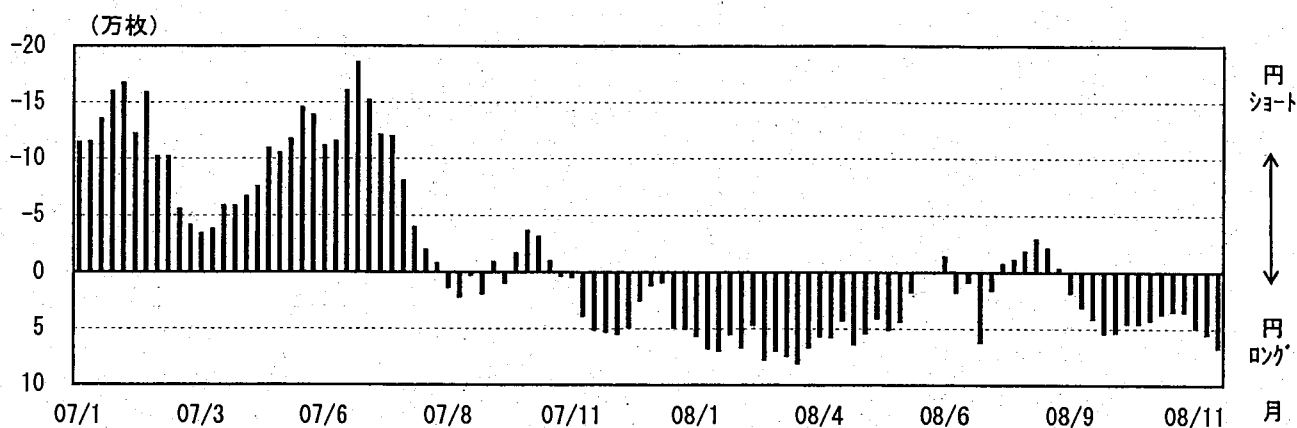


(注) リスクリバーサルは、便宜上、プラスがドル・コール・オーバー、マイナスがドル・プット・オーバー。

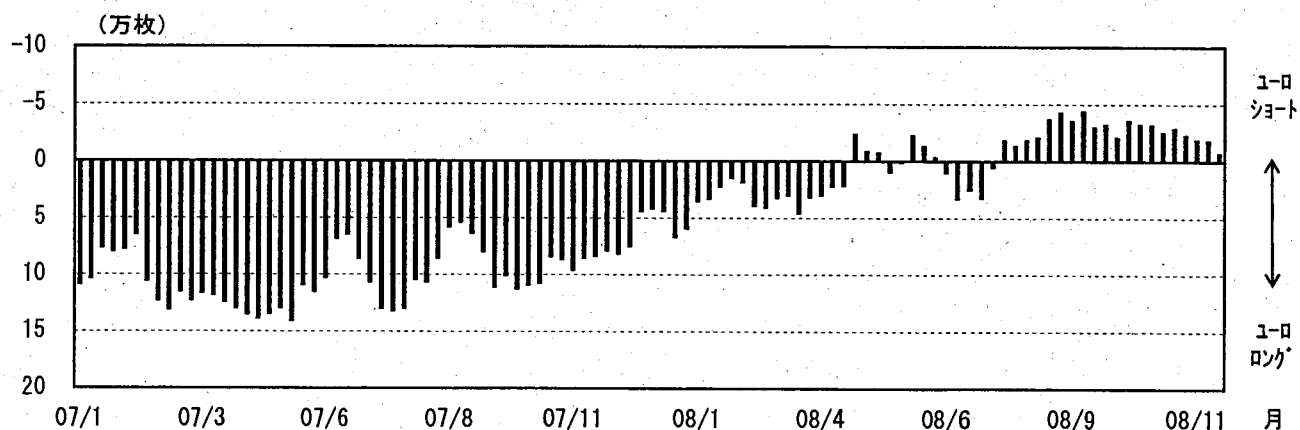
(出所) 日本銀行 (対外非公表)

通貨先物、投資信託の動向

(1-1) 円のIMMネットポジション



(1-2) ユーロのIMMネットポジション

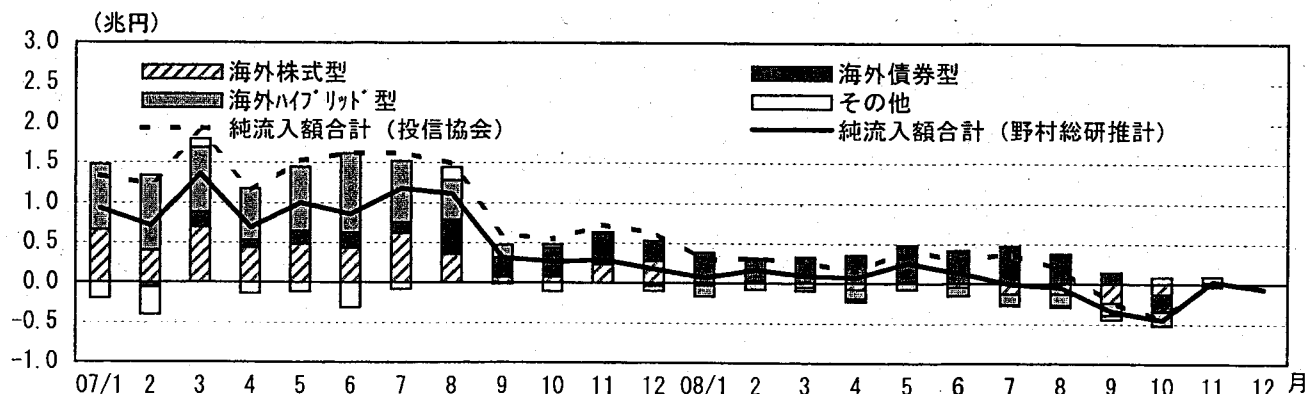


(注) 1. シカゴ・マーカント取引所の当該通貨先物取引における非商業目的および目的別計数非報告分のネット建玉の合計。

2. 直近は12/9日。

(出所) Bloomberg

(2) 公募追加型株式投信の資金純流入額



(注) 1. 「純流入額 (野村総研推計)」は各月の時点で設定後2か月以上経過したファンドのみが集計対象。

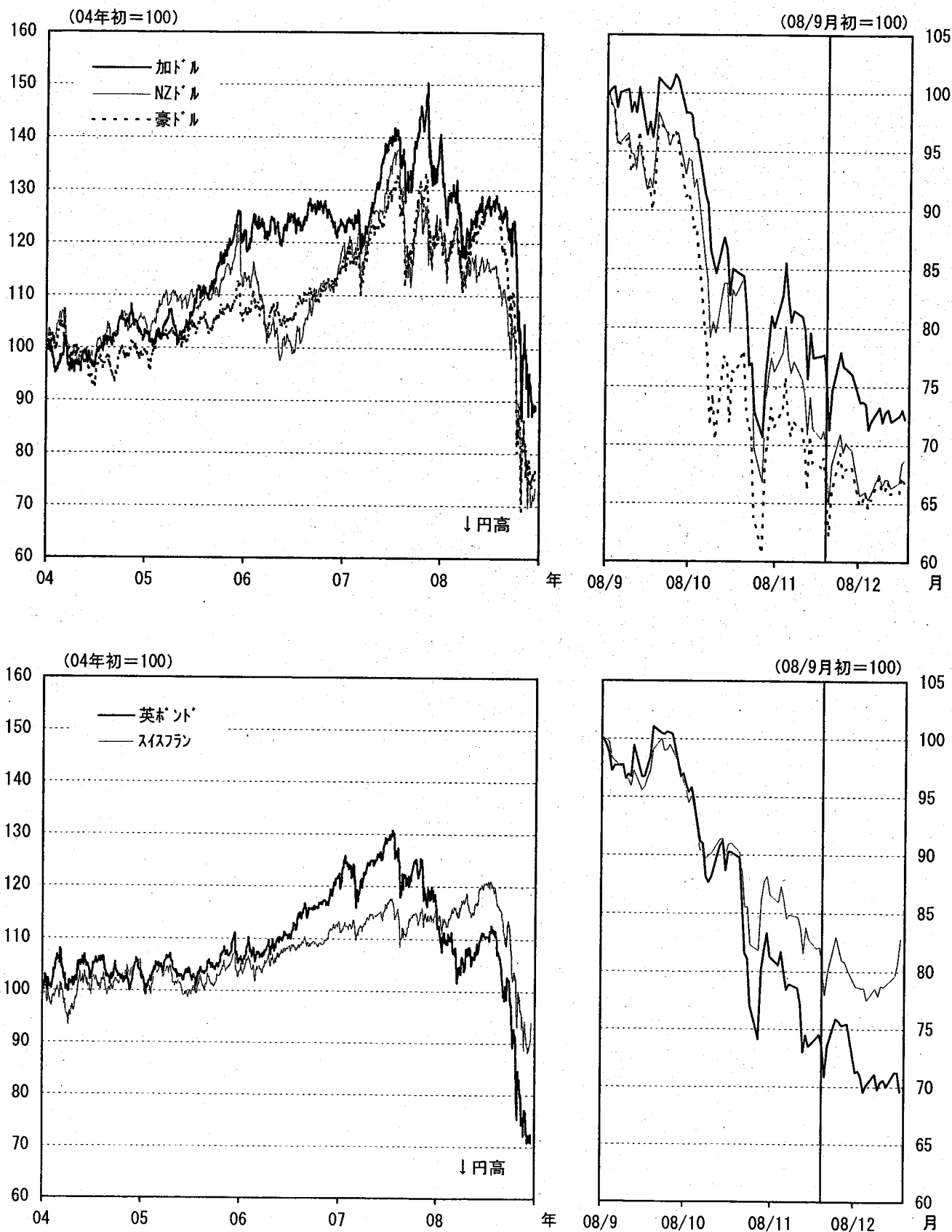
08/12月分は12/15日までの実績。

2. 棒グラフは野村総研の推計による純流入額のほか、月中の新規設定額を含む。

3. ETFを除く。

(出所) 野村総合研究所、投資信託協会

クロス円相場の推移

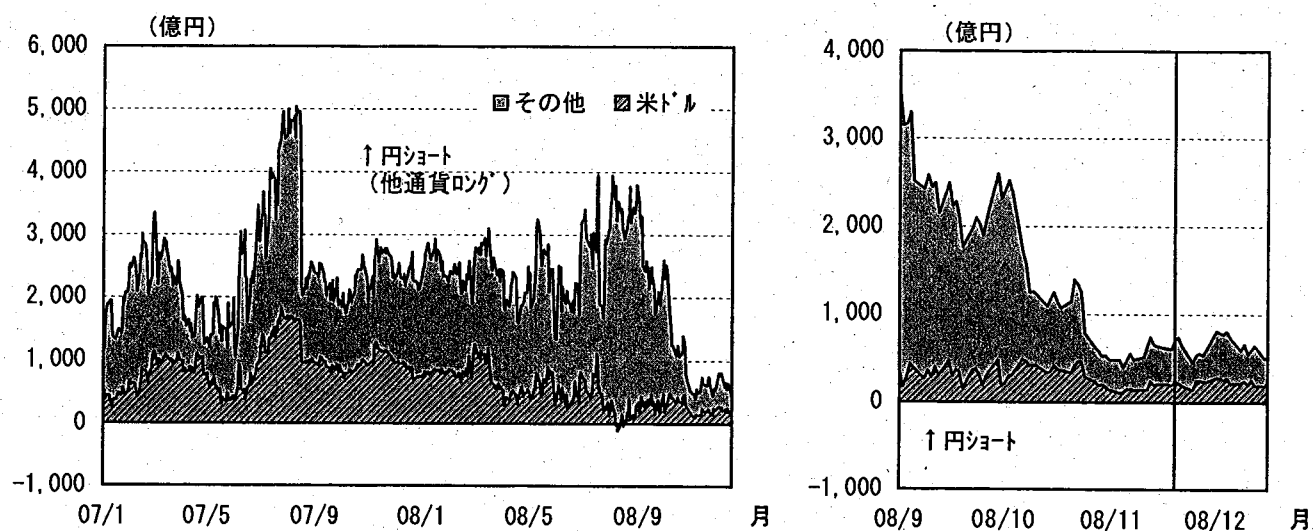


(注) 直近は12/17日。

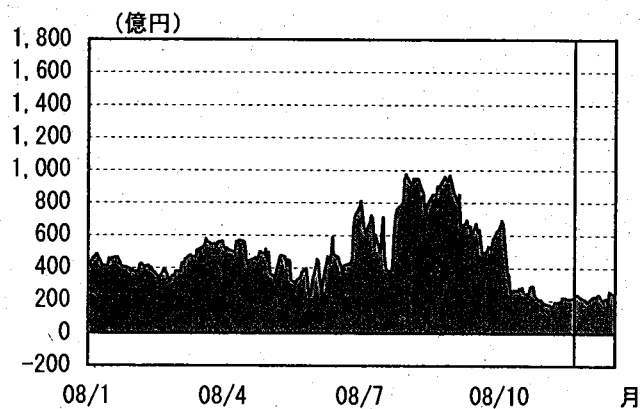
(出所) Bloomberg

外為証拠金取引の動向

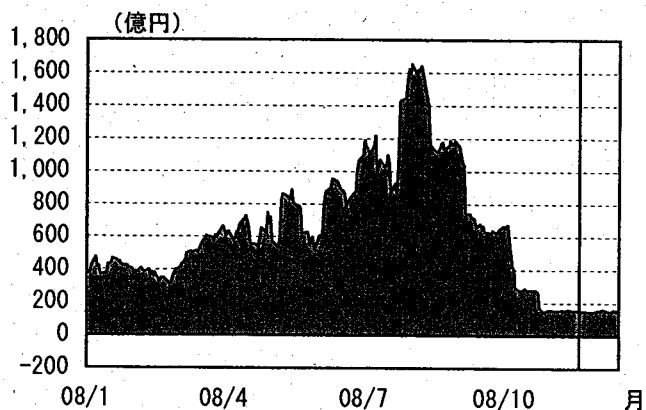
(1) 全体



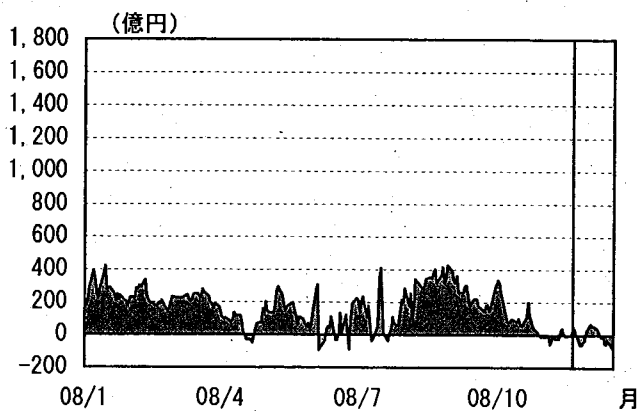
(2) 豪ドル



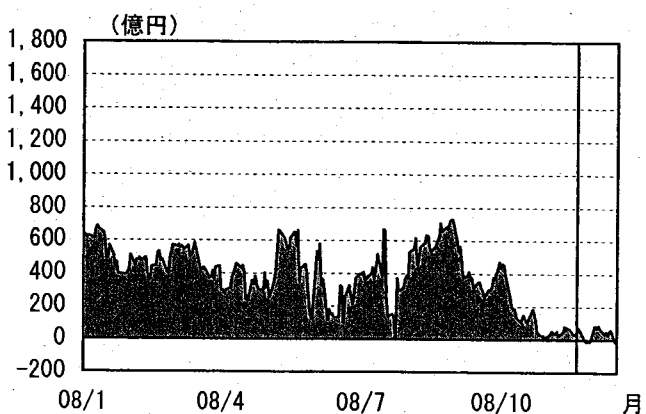
(3) NZドル



(4) ユーロ



(5) ポンド



(注) 1. 円に対する他通貨のネットロングポジション (マーケット・メーカーを除く)。

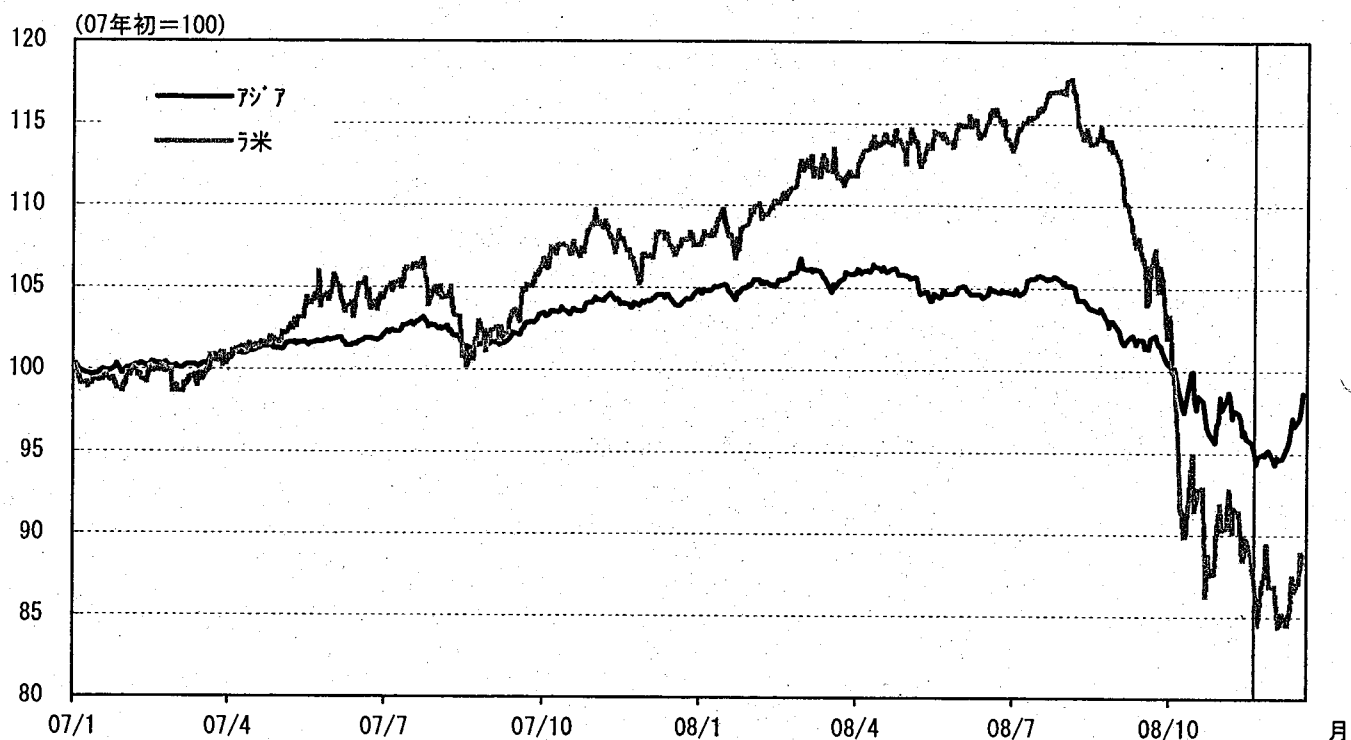
2. その他は、豪ドル、NZドル、ユーロ、英ポンドなど11通貨の合計ポジション。

3. 直近は12/16日。

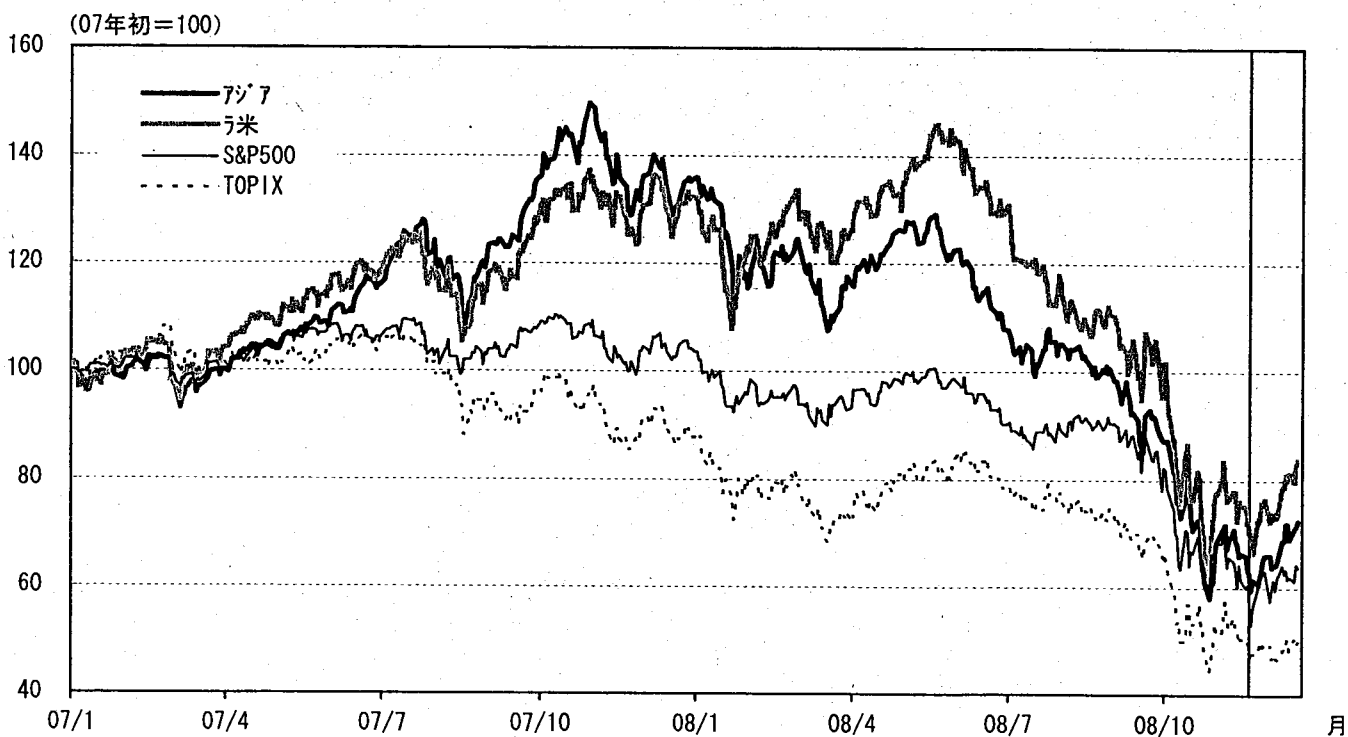
(出所) 東京金融取引所、Bloomberg

エマージング通貨、株の動向

(1) エマージング通貨インデックス (対ドル)



(2) MSCIエマージングインデックス (株式)

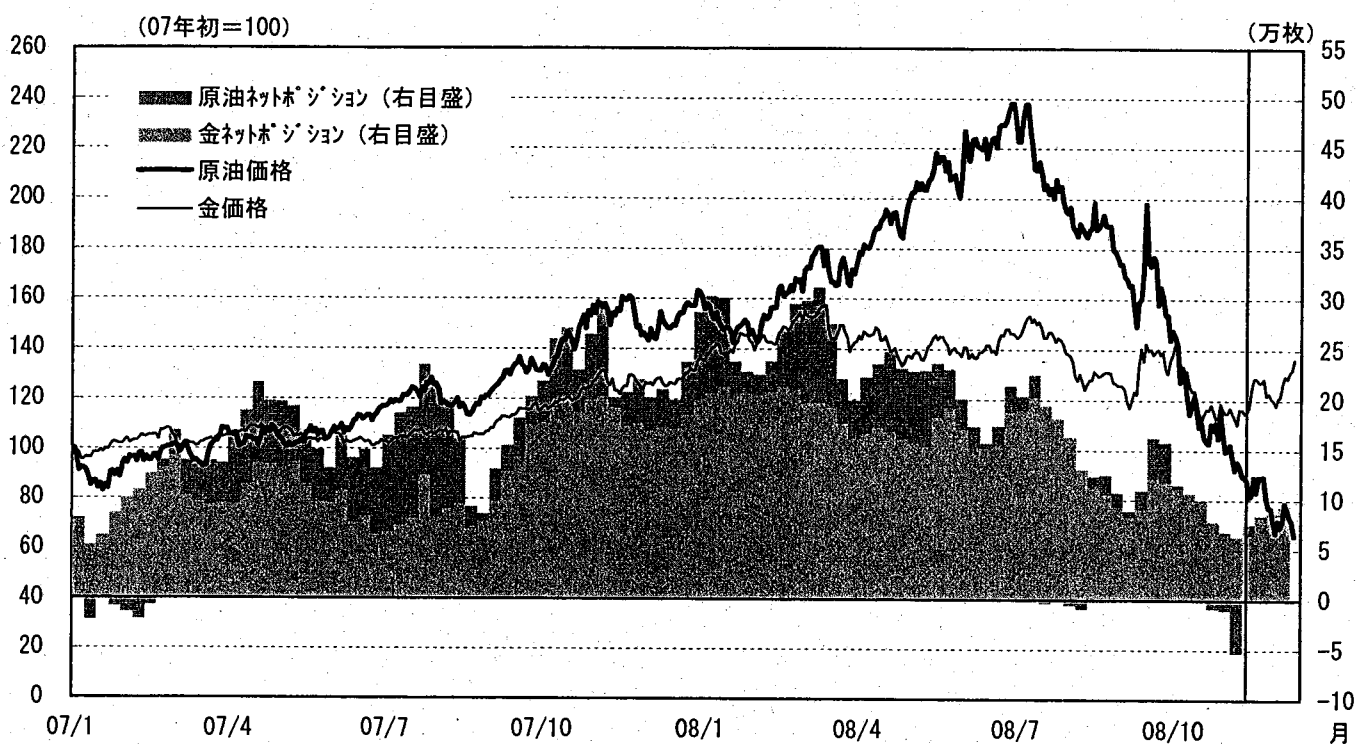


- (注) 1. (1)は、アジア（中国、香港、インド、インドネシア、韓国、マレーシア、フィリピン、シンガポール、台湾、タイ）、ラ米（アルゼンチン、ブラジル、チリ、コロンビア、メキシコ、ペルー）。
2. (2)は、アジア（中国、インド、インドネシア、韓国、マレーシア、パキスタン、フィリピン、台湾、タイ）、ラ米（アルゼンチン、ブラジル、チリ、コロンビア、メキシコ、ペルー）。いずれも現地通貨建て。
3. 直近は12/17日。

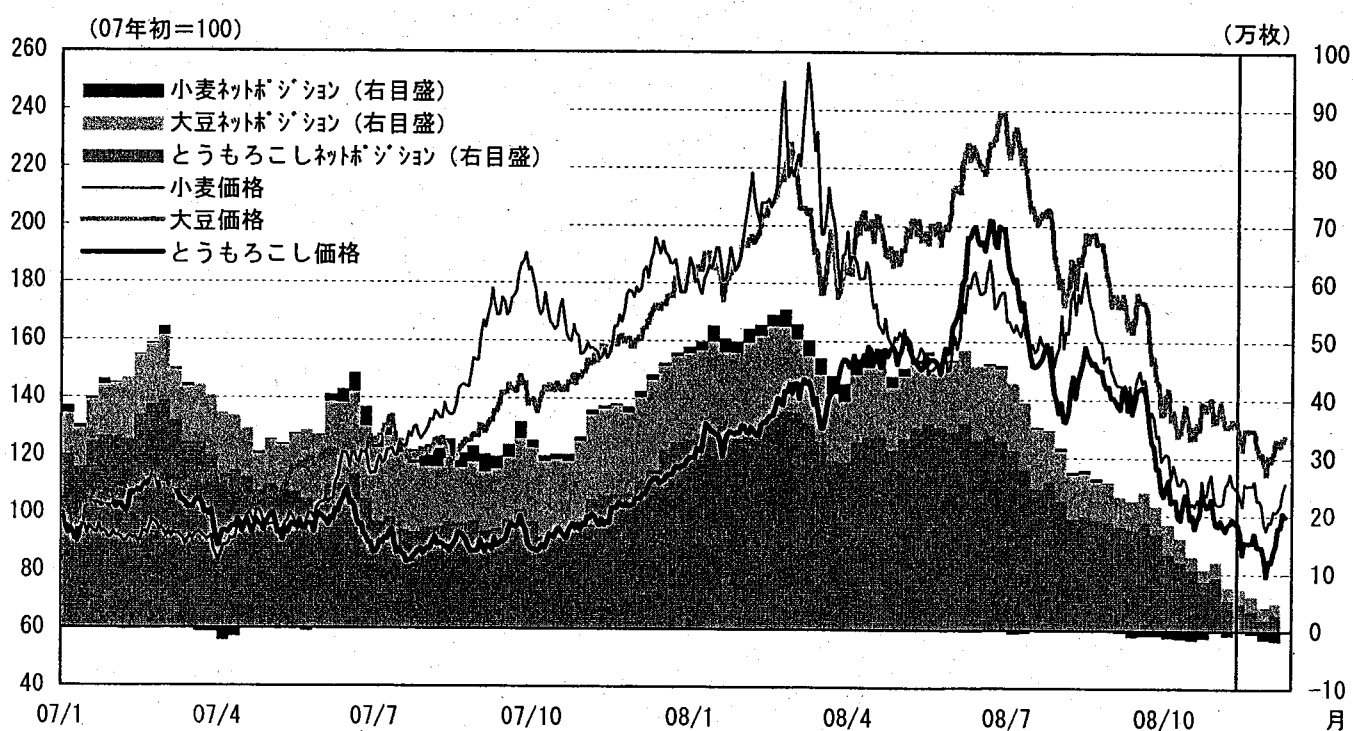
(出所) Bloomberg

商品の動向

(1) 原油・金



(2) 穀物



- (注) 1. (1)は、NYMEX期近物。
 2. (2)は、CBOT期近物。
 3. 各銘柄のネットポジションは、非商業投資家ネットポジションの合計。
 4. 直近は、価格(日次データ)については、12/17日、ネットポジション(週次データ)については、12/9日。
 (出所) CFTC、Bloomberg

議事録公表時まで対外非公表

<不開示情報：有（種類：審議・検討）>

<配付先：金融政策決定会合関係者限り>

<作成局における保管期間満了時期：2038年12月>

2008.12.15

国際局

海外経済・国際金融の現状評価

1. 概況

[海外経済の現状]（図表1～3）

実体経済面をみると、米国経済は、悪化している。住宅投資は大幅な減少を続けており、住宅価格も引き続き下落している。個人消費も減少を続け、設備投資は減少に転じるなど、景気の悪化が一段と進んでいる。そうした中、生産は減少している。労働市場では、雇用者数が大幅な減少を続け、失業率も上昇傾向にある。企業や家計の資金調達環境は引き続き厳しいほか、景気の先行きに関する高い不確実性も、企業や家計の支出行動を慎重化させている。

ユーロエリア経済は、悪化している。内需は、個人消費、設備投資、住宅投資とも減少している。輸出は、実績値では横這い圏内の動きとなっているが、サーベイ・データは足許の減少を示唆している。そうした中、生産も減少している。英国経済も、悪化している。住宅市場の大幅な調整が続き、個人消費も減少に転じる中、生産活動は減退している。企業や家計の資金調達環境は引き続き厳しい。

中国経済は、減速感が明確になっている。内需は高い伸びを続けているが、輸出は急減している。生産については、輸出の減少などを受けた減産の動きの拡大から、大幅に減速している。インド経済も、減速している。NIEs・ASEAN経済は、一段と減速している。輸出が急減する中、投資は大幅に減速し横這い圏内の動きとなっているほか、民間消費も減速傾向を辿っている。

物価面をみると、エネルギー価格の下落や食料品価格の上昇一服から、多くの国・地域で総合ベース消費者物価の前年比上昇率が低下している。米国、ユーロエリアのコアベース消費者物価の前年比は+2%台前半に低下している。

〔国際金融の現状〕

欧米の金融市場は、前回会合以降もなお強いストレス下にある。すなわち、ターム物金利のスプレッドは、依然高水準で推移している。米国 CP 市場では、発行残高は引き続き増加したが、低格付け物の金利は依然高水準で推移している。社債市場については、対国債スプレッドが高止まりないし拡大しているほか、新規の資金調達は依然低調であるなど、状況は改善していない。

この間、米国の株価は、弱めの実体経済指標を受けて下落する場面はあったものの、景気刺激策への期待や、政府・FRB による追加の金融システム安定化策もあって上昇した。長期金利は、弱めの実体経済指標が相次いだことや、FRB による長期国債購入の可能性が意識されたことなどから、低下した。欧州の株価、長期金利は概ね米国に連れる動きとなった。

エマージング諸国・地域の金融市場をみると、米欧の株価が上昇する中で、投資家のリスク回避姿勢が幾分和らいだことから、多くの国で、株価、通貨ともに上昇した。株価については、各国による相次ぐ景気刺激策の発表や市場予想を上回る追加利下げも支援材料となった。この間、対米国債スプレッドは小幅縮小した。

原油価格（WTI スポット、1 バレル当たり）は、世界経済の減速に伴う需要減退懸念から、この間通してみれば若干下落した。他の商品市況も需要減退懸念から下落するものが多かった。

〔先行きの展望〕

米国では、住宅市場の大幅な調整がなお続くとみられる。金融市場が強い緊張下にあることから、企業・家計の厳しい資金調達環境も続く可能性が高い。また、世界経済の減速などから外需の押し上げ効果も減衰していくとみられる。さらに、景気の先行きに関する高い不確実性も、支出行動の制約要因になり得る。こうした状況下、先行きは、個人消費、設備投資の減少が続くとともに、大幅な雇用調整も継続することが予想される。このため、当面の景気は、悪化を続けると考えられる。

その後の景気については、住宅市場の調整が進み、金融市場が次第に安定化すれば、緩やかな回復基調を辿り始めると考えられる。また、財政面でも、景気刺激策が大型なものになり、かつ、速やかに実行されれば、景気の下支え効果が期待できる。

もっとも、以上のようなシナリオは、住宅市場や金融市場における大幅な調整圧力がいつ収束に向かうかに大きく依存しており、先行きの不確実性やダウンサイド・リスクは引き続き高い。住宅価格の下落が継続する中で、金融市場が不安定な

状況にあることを踏まえれば、金融機関の与信姿勢の厳格化が一層進むなど、企業・家計の資金調達環境がさらに悪化する、あるいはタイトな状況が長期化するリスクは高いと考えられる。こうした状況は、クレジットのタイト化が景気をさらに下押しし、これがまた金融環境の悪化に繋がるという、金融と実体経済の負の相乗作用のリスクに繋がっている。

ユーロエリア経済は、内外需ともに減少する中、悪化を続ける見通し。米国と同様、金融機関の与信姿勢のタイト化や景気の先行きに関する高い不確実性は、企業や家計の支出活動を一層抑制する方向に作用することから、景気の下振れリスクを高めている。また、主要輸出先の一つである欧州周辺国から資金流出が進み、同経済が一層減速することに伴う外需の下振れリスクも存在する。

一方、中国経済は、外需が下振れし、この影響が生産面にも波及していくことなどから、当面減速する見通し。一方、政府が打ち出した大型の景気対策については、その効果の程度は幅をもってみる必要があるが、今後実行に移されていくに連れて、景気下支えに寄与すると考えられる。インド経済も、当面減速する見通し。また、資源国（ロシア、中東など）の経済も、エネルギー価格の下落もあって、減速傾向を辿るとみられる。

NIEs・ASEAN 経済は、当面、減速が続くと考えられる。先進国の景気下振れを受け、輸出の減少が続く見通し。内需についても、輸出の不振などに伴う所得形成メカニズムの弱まりから、全体として減速が続くとみられる。

また、投資家のリスク回避姿勢は依然強いことから、エマージング諸国には、金融市場の動揺を通じた景気の下振れリスクも存在する。

以上をまとめると、世界経済は当面、米国経済、欧州経済ともに悪化を続けるとみられるほか、新興国経済も減速が続く可能性が高い。また、目先は、世界経済全体として、一段と減速のテンポが速まるとみられる。この間、物価面では、商品市況の下落と世界経済の減速が相俟って、インフレ率を引き続き押し下げていくとみられる。

2. 米国の経済・金融動向

2-1. 米国の実体経済（図表4）

○ 米国経済は、悪化している。

—— 実質 GDP（7～9月、暫定推計値）は、前期比年率▲0.5%と事前推計値（同▲0.3%）から下方改訂された。改訂状況の内訳をみると、個人消費が下方改

訂されたほか、設備投資と政府支出が小幅の下方改訂となった。純輸出は輸出、輸入ともに下方改訂された結果、僅かな下方改訂となった。一方、在庫投資は上方改訂されたほか、住宅投資も小幅の上方改訂となった。

- 住宅投資は大幅な減少を続けている。住宅販売は減少傾向に歯止めがかかる兆しもみられるが、在庫は引き続き高水準にある。このため、住宅価格の下落も続いている。

- 住宅着工件数（10 月）は、4 か月連続の減少となり（前月比▲4.5%）、現行統計の開始（1959 年）以来の最低水準となった（季調済年率 791 千戸）。住宅着工許可件数（同）も、減少した（前月比▲12.0%）。

- 新築一戸建て住宅販売件数（10 月）は、減少した（前月比▲5.3%）。四半期に均してみても減少を続けている（7～9 月前期比▲9.0%→10 月の 7～9 月対比▲8.3%）。中古住宅販売件数（10 月）は振れを伴いつつも、横這い圏内の動きとなっている（10 月前月比▲3.1%、10 月の 7～9 月対比▲0.9%）。在庫率（10 月）は、依然高水準にある（新築：9 月 10.9 か月分→10 月 11.1 か月分、中古：同 10.0 か月分→10.2 か月分）。

- 住宅建築業者の景況感を表す NAHB 指数（11 月）は低下し、既往最低水準を更新した（10 月 14→11 月 9）。

- ケース・シラー住宅価格指数（10 大都市、9 月）は前月比マイナスを続けた（8 月▲1.1%→9 月▲1.9%）。また、前年比マイナス幅も拡大した（同▲17.7%→▲18.6%）。FHFA 住宅価格指数（リファイナンスを除くベース、9 月）も前月比マイナスを続けた（8 月▲0.8%→9 月▲1.3%）。また、前年比マイナス幅も拡大した（8 月▲6.1%→9 月▲7.0%）。

- 個人消費は、減少している。

- 小売売上高（11 月、除く自動車、ガソリン、建築資材）は、3 か月連続で減少した後、増加した（10 月前月比▲0.7%→11 月同+0.5%）。内訳をみると、幅広い項目で増加した。感謝祭明けのセールにおける値引きが前年比大きく、需要の先食いがあった可能性もある。

- 新車販売台数（11 月）は、引き続き減少し、1982 年 10 月（1,014 万台）以来の低水準となった（10 月 1,079 万台→11 月 1,042 万台）。所得の伸びの鈍化や、クレジット環境の悪化が影響しており、メーカー、車種を問わず減少傾向にある。

—— 消費者コンフィデンス（コンファレンス・ボード指数、11月）は、上昇したが、歴史的にみれば依然相当低い水準にある（10月 38.8→11月 44.9）¹。

—— 実質可処分所得（10月）は、増加した（9月前月比+0.0%→10月同+1.0%）。実質個人消費（10月）は5か月連続で減少した（前月比▲0.5%）。

○ 設備投資は、減少している。

—— 非居住用建設支出（10月）は前月に3か月振りに増加した後、減少した（9月前月比+1.1%→10月同▲0.7%）。均してみても、前期に減速した後、横這いとなっている（4～6月前期比+4.9%→7～9月同+1.4%→10月の7～9月対比▲0.0%）。

—— 非国防資本財受注（除く航空機、10月）は、3か月連続で減少した（前月比▲5.0%）。内訳をみると、幅広い品目で減少している。

○ 対外収支を財・サービス貿易収支でみると、高水準の赤字が続いている。

—— 財・サービス貿易収支（10月）をみると、輸出の減少幅が、輸入の減少幅を上回ったため、赤字幅は3か月振りに拡大した。輸出については、幅広い品目で減少が続いている。価格変動の影響を除いた実質値ベースでみると、財の輸出は減少している一方、輸入については、ハリケーンによる前月の原油輸入減少の反動増もあって増加している。

○ 製造業の生産は減少している。非製造業の生産活動も減退している。

—— 鉱工業生産（10月）は、ハリケーンの影響が剥落したことから、増加した（前月比+1.3%）。ただし、統計作成当局の計算によれば、ハリケーンの影響を除くと減少している（前月比▲0.7%）。

—— ISM 指数（11月）は、製造業が引き続き悪化したほか、非製造業が大幅に悪化した（製造業 10月 38.9→11月 36.2、非製造業 10月 44.4→11月 37.3）。製造業は 1982 年 5 月（35.5）以来の低水準となったほか、非製造業は統計開始（97 年 7 月）以来の最低水準を更新した。

○ 労働市場では、雇用者数が大幅な減少を続けているほか、失業率も上昇傾向にある。

—— 非農業部門の雇用者数（11月）の減少幅は大きく拡大した（8月▲12.7万

¹ 統計開始（1967年）以来の最低水準は10月の38.8。

人→9月▲40.3万人→10月▲32.0万人→11月▲53.3万人)。減少幅は1974年12月(▲60.2万人)以来の水準となっている²。業種別にみると、製造業が大幅なマイナスを続けているほか、非製造業が建設、小売、専門ビジネス(人材派遣など)を中心にマイナス幅を大きく拡大した。

—— 失業率(11月)は上昇し、1993年10月(6.8%)以来の高水準となった(10月6.5%→11月6.7%)³。新規失業保険申請件数(12月6日週まで)は上昇を続けており、直近週(57.3万人)は1982年11月(61.2万人)以来の高水準となっている。時間当たり賃金(11月)の伸びは2か月連続で小幅上昇した(9月前年比+3.4%→10月同+3.6%→11月同+3.7%)。

○ エネルギー価格の下落や食料品価格の上昇一服から、総合ベース消費者物価の前年比上昇率は低下している。コアベースの前年比上昇率は、+2%台前半に低下している。期待インフレ率も低下している。

—— 消費者物価・総合(10月)は、下落した(前月比▲1.0%)。前年比上昇率も、前月から低下した(9月+4.9%→10月+3.7%)。コアベース(同)も、衣料品の下落幅拡大などもあり、下落に転じた(9月前月比+0.1%→10月同▲0.1%)。前年比上昇率は+2%台前半に低下した(9月+2.5%→10月+2.2%)。

—— ガソリン小売価格(レギュラー、1ガロン当たり、米国エネルギー省調査)は低下を続けており、2004年2月以来の水準になった(12月8日週1.7ドル)。

—— 家計サーベイでみた期待インフレ率(ミシガン大学調査、12月時点)は、1年先の前年比でみると、大きく低下した(11月時点+2.9%→12月時点+1.7%)。低下は5か月連続。5～10年先の前年比も低下した(同+2.9%→+2.7%)。

2-2. 米国の金融市場(図表5)

○ 市場の政策金利観をみると、民間エコノミストの間では、大半が12月FOMCにおける50bpsの利下げを見込んでいるほか、一部に75bpsの利下げを見込む先も

² 9、10月の値は大幅に下方改訂されている。改訂前の減少幅は9月が▲28.4万人、10月が▲24.0万人であった。

³ 労働参加率の低下(10月66.1%→11月65.8%)により、失業率の上昇幅が抑えられた部分もある。労働参加率が10月と同水準にとどまったと仮定した場合に上乗せされる労働力人口が失業者となっていれば、失業率は7.1%まで上昇していた計算。

ある。

—— この間、FF 実効レートは依然、誘導目標（1%）を大きく下回って推移している。

○ 金融システムを巡る動きは、以下の通り。

—— 財務省、FRB、FDIC は、11 月 23 日、共同でシティグループに対する支援策を発表した。具体的には、①モーゲージ関連資産等（3,060 億ドル）に既存の引き当てを超えて追加で発生する損失に関し、一部をシティグループ、財務省、FDIC が共同で負担するほか、FRB は残りの資産を担保にノンリコースローンを提供すること、②優先株のかたちで 200 億ドルの追加的な資本注入を行うこと、といった内容が盛り込まれている⁴。

—— FRB は、11 月 25 日、エージェンシー債（上限 1,000 億ドル）およびエージェンシーMBS（上限 5,000 億ドル）の買入プログラムの導入を発表した（前者の買入は翌週開始、後者については年末までに開始予定）。また、FRB、財務省は同日、ABS 担保貸付ファシリティ（タム・アセットバックト・セキュリティーズ・ローン・ファシリティ（TALF））の創設を発表した。具体的にはニューヨーク連銀が、学生ローン、自動車ローン、クレジットカード及び中小企業向けローン（中小企業庁の保証付き）を裏付けとする ABS の保有者に対し、2,000 億ドルを上限に貸付を実施する⁵。

—— この間、地銀 6 行が新たに破綻し、年初来の破綻行数は 25 行になった。

○ 株価は、景気悪化を示す経済指標を受けて下落する場面もみられたが、政府・FRB の政策対応や、オバマ新大統領がラジオ演説（12 月 6 日）で打ち出した大型の景気刺激策への期待から上昇した。政策面では、前述のシティグループ支援策が打ち出されたことや、FRB によるエージェンシー債・エージェンシーMBS の買入プログラムの発表を受けてモーゲージ金利が低下したことなどが好感された。ビッグ 3 の支援策についても、上院での調整が決裂し事実上廃案になったものの、足許、TARP 資金を用いた支援策を検討する旨政府高官が発言していることもあり、

⁴ 具体的な損失負担は、最初の 290 億ドルをシティが負担、290 億ドルを超える損失のうち、10%をシティが、90%を米国政府（財務省、FDIC）が負担。残る資産について FRB がノンリコースローンを提供。また、シティへの資本注入額は今回の措置により計 450 億ドルとなった。

⁵ 財務省は、担保資産買い取りのため設立する SPV に対し、最初の 200 億ドルの資産買い取りのためのファイナンスを実行（TARP 資金より）。同額を超える買い取りが発生した場合、NY 連銀が貸し付け。

この間通してみれば株価の押し上げ要因になった⁶。長期金利（国債 10 年物利回り）は、景気悪化を示す経済指標や、バーナンキ FRB 議長による長期国債購入の可能性への言及、FRB の対策を受けたエージェンシー債・エージェンシーMBS の利回り低下に連れる動き、などから低下した。

- TED スプレッド（ユーロドル 3 か月物－TB3 か月物）は、足許若干低下しているが、依然高水準で横這い圏内の動きとなっている。企業金融面をみると、CP レートは、高格付け物については一頃に比べ低水準となっているものの、低格付け物については依然高水準で推移している。社債の対国債スプレッドは、低格付け物で拡大を続けたほか、高格付け物も高水準で推移している。
- 資金調達動向をみると、銀行貸出（12 月、3 日週まで）は、商工業向け、不動産向け、個人向けのいずれも伸びが鈍化した。社債発行額（11 月）は若干増加したが、非常に低い水準にあるほか、IPO（11 月）は 1 件のみであった。一方、CP 発行残高（12 月、10 日週まで）は、FRB による CP 買い取りの開始（10 月 27 日）に伴い、金融機関 CP を中心として引き続き増加している。
- TIPS スプレッド（国債利回り－物価インデックス債利回り）は、振れを伴いつつも、この間通してみればほぼ横這いとなった。

3. 欧州の経済・金融動向

3-1. 欧州の実体経済（図表 6）

（1）ユーロエリア経済

- ユーロエリア経済は、悪化している。

—— ユーロエリアの実質 GDP（7～9 月、改訂値）は、速報値と同じ前期比年率 ▲0.8%であった（4～6 月同 ▲0.7%）。今回明らかになった内訳をみると、総固定資本形成が 2 期連続で減少したほか、個人消費も 2 期連続で減少した後、横這いとなった。

- 輸出は、これまでのところは横這い圏内の動きとなっているが、サーベイ・データをみると足許の減少を示唆している。

⁶ 140 億ドルの繋ぎ融資を柱とした支援策は、12 月 10 日に下院を通過したものの、上院における共和党・民主党間の交渉が労働コストの引き下げなどを巡って不調に終わり、採決に至らず事実上廃案となった。なお、GM は、S&P で CCC+ から CC に（12 月 4 日）、ムーディーズで Caal から Ca に（12 月 3 日）、それぞれ格下げされた。

- ドイツの輸出（10 月）は前月に増加した後、減少した（9 月前月比+0.8%→10 月同▲0.5%）。均してれば横這い圏内の動きとなっている（4～6 月前期比▲0.1%→7～9 月同+0.0%→10 月の 7～9 月対比▲0.0%）。フランスの輸出（10 月）は大幅に減少し、均してみても 2 期連続で減少した後、引き続き減少している（4～6 月前期比▲2.5%→7～9 月同▲1.5%→10 月の 7～9 月対比▲6.1%）。
- ドイツの海外受注（ユーロ域外向け、10 月）は、本年 1～3 月以降、3 四半期連続で減少した後、引き続き大幅な減少を続けている（4～6 月前期比▲3.0%→7～9 月同▲5.5%→10 月の 7～9 月対比▲10.5%）。
- ユーロエリアの製造業 PMI・輸出受注（11 月）は、大幅に低下し、統計開始（97 年 6 月）以来最低の水準を更新した（10 月 38.5→11 月 31.8）。中でも、ドイツの低下が目立つ（同 38.4→28.5）。
- ユーロエリアの域外輸出（9 月）は増加したが、このところ振れが大きい（7 月前月比+3.2%→8 月同▲2.1%→9 月同+2.2%）。

○ 設備投資は減少している。住宅投資はスペインなどでの調整から、全体として減少傾向にある。個人消費は、所得環境の悪化や景気・雇用面の先行き不透明感などを受けて、減少している。

- ドイツの国内投資財受注（10 月）は、本年 1～3 月以降 3 四半期連続で減少した後、大幅な減少を続けている（7～9 月前期比▲3.9%→10 月の 7～9 月対比▲8.6%）。
- ユーロエリアの消費者コンフィデンス（11 月）は、金融システム混乱の影響もあって大幅に悪化した 10 月から、さらに若干悪化した（9 月▲19→10 月▲24→11 月▲25）。ユーロエリアの小売売上数量（自動車を含まない、10 月）は減少した（前月比▲0.8%）。均してみても減少している（10 月の 7～9 月対比▲0.7%）。
- ユーロエリアの失業率（10 月）は、改訂もあって、2 か月連続で上昇する姿となった（8 月 7.5%→9 月 7.6%〈改訂前 7.5%〉→10 月 7.7%）。フランスの失業率（10 月）は、均してみれば上昇している（7 月 7.9%→8 月 8.1%→9 月 8.0%→10 月 8.2%）。ドイツの失業率（11 月）は横這いとなった（7.5%）。

○ 製造業の生産は減少しており、非製造業の生産活動も減退している。

- ユーロエリアの鉱工業生産（除く建設、10 月）は減少し、均してみても、

引き続き減少幅を拡大する姿となった（4～6 月前期比▲0.9%→7～9 月同▲1.2%→10 月の 7～9 月対比▲2.2%）。

—— ユーロエリアの製造業 PMI（11 月）は大きく低下し、サービス業 PMI 事業活動指数（同）⁷も低下した（製造業：10 月 41.1→11 月 35.6、サービス業：10 月 45.8→11 月 42.5）。ドイツの IFO 景況感指数（同）も低下し、1993 年 2 月（84.8）以来の低水準となった（10 月 90.2→11 月 85.8）。

○ エネルギー価格の下落や食料品価格の上昇一服から、消費者物価の前年比上昇率は低下している。

—— 消費者物価（11 月速報、内訳未公表）の前年比上昇率は、前月から大きく低下した（10 月+3.2%→11 月+2.1%）。

（2）英国経済

○ 英国経済は、悪化している。住宅市場の大幅な調整が続き、個人消費も減少に転じる中、生産活動は減退している。企業や家計の厳しい資金調達環境も続いている。

—— 実質 GDP（7～9 月、改訂値）は、前期比年率▲2.0%とマイナス転化した速報値と同じであった。今回判明した内訳をみると、個人消費、輸出がマイナス幅を拡大させつつ 2 期連続で減少したほか、総固定資本形成が 3 期連続で大幅に減少した。

—— 住宅ローン承認件数（10 月）は、前年比マイナス幅を若干縮小した（9 月▲67.0%→10 月▲63.6%）。住宅価格（ネーションワイド指数、11 月）は下落した（前月比▲0.4%）。前年比でみたマイナス幅は若干縮小した（10 月▲14.6%→11 月▲13.9%）⁸。

—— 消費者コンフィデンス（11 月）は、金融システム混乱の影響もあって低下した 10 月からほぼ横這いとなった（9 月▲31→10 月▲35→11 月▲34）。

—— 小売売上数量（10 月）は、2 か月連続で減少した（9 月前月比▲0.5%→10 月同▲0.1%）⁹。

—— サービス業 PMI 事業活動指数（11 月）は悪化し、統計開始（1996 年 7 月）

⁷ ここでのサービス業の調査対象には金融仲介業（金融機関）も含まれる。

⁸ ハリファックスでみると前月比マイナスが続くとともに、前年比のマイナス幅も依然拡大している（11 月前月比▲2.6%、10 月前年比▲15.1%→11 月同▲16.1%）。

⁹ なお、内訳中の食料品の増加について、統計当局は実態を正確に反映しておらず、今後リバイスされる可能性があるとしている。現時点で食料品の寄与を除くと▲0.5%。

以来の最低水準を更新した（10月 42.4→11月 40.1）。

—— 消費者物価（10月）は、ガソリン価格の下落を主因に、前年比上昇率が低下した（9月+5.2%→10月+4.5%）。

3-2. 欧州の金融市場（図表7）

○ 金融政策面をみると、ECB は、12月4日の定例政策理事会で、政策金利を75bps 引き下げ、2.5%とした（事前のエコノミスト予想は50bps の引き下げが大半）。声明では「インフレ率は、先行き、物価の安定に沿った水準になると期待される」とともに、「海外需要とユーロエリアの需要は長期に亘って押し下げられる可能性が高い」と説明した。また、BOE も同日、政策金利を、100bps 引き下げ、2.0%とした（事前のエコノミスト予想通り）。

—— ECB から同時に公表されたユーロシステム・スタッフ経済見通しは、実質GDP 成長率が2008年+1.0%→2009年▲0.5%→2010年+1.0%、HICP 上昇率が同+3.3%→+1.4%→+1.8%であった（それぞれ中央値）。

○ 市場の政策金利観をみると、ECB の金融政策について、民間エコノミストの間では、2009年第1四半期中における50bps の追加利下げを見込む向きと75bps 以上の利下げを見込む向きがほぼ拮抗している。また、BOE の金融政策については、同時期における100bps の追加利下げを見込む向きが、50bps を見込む向きをやや上回っている。

○ 株価は、米国株に連れて上昇した。長期金利（国債10年物利回り）は、米国債金利の低下に連れられ、11月のユーロエリアPMI など経済指標の悪化もあって、この間通してみれば低下した。足許は、株価の上昇もあって、小幅上昇している。

○ 短期金融市場におけるターム物金利の対 OIS スプレッドは、幾分低下した。一方、社債の対国債スプレッドは、拡大している。

○ 資金調達動向をみると、銀行貸出（10月）の前年比伸び率は低下した。企業向け、住宅取得向け、消費者信用のいずれも伸びが低下している。社債発行額（11月）は6か月連続で減少した後、若干増加した。

○ 物価インデックス債のスプレッド（対フランス国債）は、振れを伴いつつも、この間通してみればほぼ横這いとなった。

4. エマージング諸国・地域の経済・金融動向

4-1. アジア諸国・地域の実体経済（図表8）

（1）中国経済

○ 中国経済は、減速感が明確になっている。内需は高い伸びを続けているが、輸出は急減している。生産については、輸出の減少などを受けた減産の動きの拡大から、大幅に減速している。

—— 工業生産（11月）の前年比伸び率は、引き続き大幅に低下した（9月+11.4%→10月+8.2%→11月+5.4%）。輸出の減少などを受けて、減産の動きが拡大しているとみられる。生産の減速は5か月連続。

—— 小売売上（11月）の前年比伸び率は、引き続き高水準となった（10月+22.0%→11月+20.8%）。

—— 輸出（11月）の前年比伸び率はマイナスに転じた（10月+19.2%→11月▲2.2%）。輸出の前年比マイナスは、2001年6月（▲0.6%）以来である。輸入（同）の伸びも大幅なマイナスに転じた（10月+15.6%→11月▲17.9%）。こうした中、貿易黒字は過去最高を更新した。

—— 消費者物価（11月）の前年比上昇率は7か月連続で低下した（10月+4.0%→11月+2.4%）。食料品、除く食料品のいずれも伸びが低下した。

—— 貸出（11月）の前年比伸び率は上昇した（10月+14.6%→11月+16.0%）。政府による貸出総量規制の撤廃といった貸出促進策が主に影響したとみられる。M2（11月）の前年比伸び率は高水準で推移している（同+15.0%→+14.8%）。

（2）インド経済

○ インド経済は、減速している。

—— 実質 GDP（7～9月）の前年比伸び率は、若干低下した（4～6月+7.9%→7～9月+7.6%）。内訳をみると、総固定資本形成が伸びを高める一方、個人消費や輸出が大幅に減速している。

—— 鉱工業生産（10月）の前年比伸び率は、減少に転じた（9月+5.5%→10月▲0.4%）。鉱工業生産の前年比マイナスは1993年4月（▲0.5%）以来である。業種別内訳をみると、伸び率の低下ないしマイナス幅の拡大が幅広くみられるが、足許では、自動車などの急減が目立つ。

—— 輸入（10月）の前年比伸び率は、生産が減少する中、原油価格の下落もあり、急低下している（8月+51.2%→9月+43.3%→10月+10.6%）。

- 卸売物価（11月）の前年比上昇率は、燃料の価格下落を主因に、低下している（10月+11.0%→11月+8.7%）。
- M3（11月）、貸出（10月）の前年比伸び率は引き続き高水準で推移している（M3：10月+20.2%→11月+19.2%、貸出：9月+24.8%→10月+30.8%）。

（3）NIEs・ASEAN 経済

○ NIEs・ASEAN 経済は、一段と減速している。

- 台湾の実質 GDP（7～9月）は、大幅な減少に転じた（4～6月前期比年率+3.3%→7～9月同▲10.5%）。内訳をみると、輸出がマイナス幅を大きく拡大したほか、民間消費支出もマイナス幅を拡大。また、総固定資本形成も2期連続で減少した。
- タイの実質 GDP（7～9月）は、輸出のマイナス転化などから減速した（4～6月前期比年率+3.1%→7～9月同+2.3%）。内需をみると、民間消費支出は、7月下旬実施の減税や公共料金の一部無料化を受けて伸びが高まったほか、総固定資本形成は前期に減少した後、若干増加した。
- インドネシアの実質 GDP（7～9月）は、減速した（4～6月前期比年率+7.0%→7～9月同+5.3%）。内訳をみると、民間消費支出や総固定資本形成が一頃に比べれば低い伸びながらも堅調に推移する中、輸出が減少に転じた。
- マレーシアの実質 GDP（7～9月）は、減速した（4～6月前期比年率+3.7%→7～9月同+1.3%）。内訳をみると、総固定資本形成は増加に転じたものの、民間消費支出が減速したほか、輸出が減少に転じた。
- フィリピンの実質 GDP（7～9月）は、減速した（4～6月前期比年率+7.9%→7～9月同+3.4%）。内訳をみると、民間消費支出は増加したものの、輸出が減少に転じたほか、総固定資本形成が減速した。

○ 輸出は、急減している。内需は、輸出の不振などを受けた所得形成メカニズムの弱まりから、民間消費が減速傾向を辿っているほか、総固定資本形成が大幅に減速し横這い圏内の動きとなっている。

- NIEs・ASEANの輸出合成指数¹⁰（10月）は、大幅な減少に転じた（7～9月前期比+0.4%→10月の7～9月対比▲14.2%）。IT関連は、減少幅を拡大し

¹⁰ 輸出合成指数は、NIEs・ASEAN8 各国・地域（韓国、台湾、シンガポール、香港、タイ、インドネシア、マレーシア、フィリピン）の輸出金額を合算したもの（国際局試算、対外非公表）。

た。各国統計をみると、韓国の輸出（11月）と台湾の輸出（同）は、IT関連、非IT関連ともに減少幅を拡大し、全体でも大きく減少した（韓国：10月前月比▲6.5%→11月同▲21.4%、台湾：同▲2.1%→▲23.5%）。タイの輸出（10月）やインドネシアの輸出（同）も減少幅を拡大している（タイ：9月前月比▲1.9%→10月同▲7.5%、インドネシア：同▲3.6%→▲13.1%）。シンガポールの新規輸出受注 D.I.（11月）は、全体、IT関連ともに大きく低下し、改善・悪化の分岐点である 50 を引き続き下回った（全体 10月 44.8→11月 41.1、IT関連 10月 48.4→11月 44.8）。

—— 台湾の小売指数（10月）は、大幅な前年比マイナスを続けている（4～6月前年比▲2.5%→7～9月同▲8.4%→10月同▲5.3%）。同国の消費者コンフィデンス（11月）は7か月連続で低下した（50.0）。

—— 韓国の小売数量指数（10月）は、2か月連続で低下した（9月前月比▲3.6%→10月同▲1.4%）。同国の消費者信頼感指数（11月）も低下を続けている（9月 96.0→10月 88.0→11月 84.0）。また、同国の機械投資推計指数（10月）は3か月連続の低下となった（8月前月比▲0.1%→9月同▲2.9%→10月同▲11.0%）。

—— タイの民間消費指数（10月）は、7月下旬実施の減税や公共料金の一部無料化による押し上げ効果が剥落したこともあり、低下した（7～9月前期比+2.4%→10月の7～9月対比▲0.5%）¹¹。同国の民間投資指数（10月）は、減速を続けている（1～3月前年比+5.9%→4～6月同+4.7%→7～9月同+3.7%→10月同+1.9%）。

○ 内外需の動きを反映して、生産は減少している。

—— NIEs・ASEANの生産合成指数¹²（7～9月）は、低下した（4～6月前期比+0.1%→7～9月同▲1.0%）。台湾の生産（10月）は減少幅を大きく拡大している（9月前月比▲4.8%→10月同▲8.3%）。韓国の生産（10月）は4か月連続で減少した（10月前月比▲2.3%）。同国の企業景気実査指数（11月）は、景気減速を受けて、大幅な低下を続けている（9月 75.7→10月 63.5→11月 51.9）。タイの生産（10月）は9月に減少した後、若干の増加にとどまった

¹¹ 同国政府は、原油高への時限的な対策として、7月25日以降随時、燃料にかかる物品税の引き下げや、家庭向け水道・電気料金、バス運賃の一部無料化を実施した（1月下旬まで）。

¹² 生産合成指数は、NIEs・ASEAN6か国・地域（香港、インドネシアについては利用可能な統計がない）の生産指数を各国GDPウェイトで加重平均したもの（国際局試算、対外非公表）。

(9 月前月比▲2.7%→10 月同+0.3%)¹³。

○ エネルギー価格の下落や食料品価格の上昇一服を受け、多くの国・地域で消費者物価の前年比上昇率は低下している。

—— 韓国の消費者物価 (11 月) をみると、燃料価格の下落から総合ベースの前年比上昇率が低下した (10 月+4.8%→11 月+4.5%)。コアベースでは、外食費などを中心に、若干伸びが拡大した (同+5.2%→+5.3%)。

—— 台湾の消費者物価 (11 月) の前年比上昇率をみると、食料品 (野菜を除く) の上昇幅縮小や、原油価格に連動している公定燃料価格の下落から、総合ベース (10 月+2.4%→11 月+1.9%)、コアベース (同+2.9%→+2.4%) ともに、前月から縮小した。

—— タイの消費者物価 (11 月) をみると、燃料価格の下落から、総合ベースの前年比上昇率が縮小した (10 月+3.9%→11 月+2.2%)。コアベースも、公共交通運賃の値下がりにより、前年比上昇率が縮小した (同+2.4%→+2.0%)。

—— インドネシアの消費者物価 (総合ベース) (11 月) の前年比上昇率は、燃料価格が統制されていることもあり、高水準で推移している (10 月+11.8%→11 月+11.7%)¹⁴。

4-2. エマージング諸国・地域の金融市場 (図表 9)

○ 米欧で株価が上昇する中、投資家のリスク回避姿勢が幾分和らいだことから、全体としてみれば、株価、通貨が上昇するとともに、国債も若干買われた。また、株価については、各国による相次ぐ景気刺激策の発表 (韓国、台湾、アルゼンチン、インドなど) や市場予想を上回る追加利下げ (後述) も支援材料となった。

○ この間におけるエマージング金融市場の動向のうち、個別国で目立ったものは以下の通り。

—— 中国の株価は、中央経済工作会议 (12 月 8 日～10 日) などを通じた追加的な景気対策への期待から上昇した¹⁵。同会議では 2009 年の経済運営方針として「内需拡大によって経済の安定的な高成長を維持」することを挙げるとと

¹³ タイの 9 月の生産の計数については統計当局により修正された (修正前 0.0%)。

¹⁴ 12 月の計数には、インドネシア政府によるガソリン価格引き下げ (12 月 1 日▲8.3%、5 日▲9.1%) と軽油価格引き下げ (5 日▲12.7%) が影響するとみられる。

¹⁵ 同会議は、共産党中央および国务院の共催により、翌年の経済運営方針を決定する重要な会議。

もに、「積極的な財政政策と適度に緩和的な金融政策を採る」ことや、「人民元相場を合理的な均衡水準で安定させる」ことなどを確認した。この間、通貨（元）は下落している。

—— 韓国では、政府・中央銀行の景気対策や日中韓スワップ協定の増額を受けて、株価、通貨（ウォン）ともに上昇した¹⁶。具体的な景気対策をみると、韓国銀行が適格担保の拡大や準備預金への利払いなど金融機関への追加支援策を決定したほか、追加利下げ（後述）を行った。政府も、減税などの中小企業支援策の策定方針を表明した。

—— インドでは株価、通貨（ルピー）とも、ムンバイでの同時テロ発生を受けて一旦下落したが、インド準銀による追加利下げ（後述）や政府による景気刺激策発表を受けて、この間通してみれば上昇した。

—— タイの株価は、反政府デモ隊による国際空港封鎖が嫌気され一旦下落したが、裁判所による与党への解党命令と現首相の失職に伴い、デモ隊が撤退したことや、タイ中銀が利下げを行ったこと（後述）などから、この間通してみれば上昇した。12月15日には野党民主党のアピシット党首が首相に選出された。

—— エクアドルのコレア大統領は、12月12日、一部グローバル債の利払い（15日期限）について履行しないと、事実上のデフォルトを宣言した。主要産品である原油の価格下落に伴う歳入減が背景とみられる。これに伴い、アルゼンチンやベネズエラなどラ米各国のCDSスプレッドが足許拡大している。

○ また、金融政策面をみると、多くの国で市場予想を上回る追加利下げが行われた。一方、ロシア中銀は、通貨防衛のため引き続き大幅な利上げを行った。

—— マレーシア中銀は、11月24日、景気の下振れリスクの高まりなどから、25bpsの利下げを行った（3.50%→3.25%、事前予想は据え置きが優勢）。利下げは2003年以来。

—— ハンガリー中銀は、IMFの支援承認（11月6日）に伴い通貨（フォリン

¹⁶ 12月12日、韓国銀行は、日本銀行との間の円＝ウォン・スワップの取極について、引出限度額拡大（30億ドル相当→200億ドル相当）で合意した（2009年4月までの時限措置）。この結果、既存の米ドル＝ウォン・スワップ取極（100億ドル）と合わせると、日韓間の二国間通貨スワップ取極の引出限度額は合計300億米ドルとなった。また、中国人民銀行との間でも、260億米ドル相当の人民元＝ウォン・スワップ取極が新たに設定された（3年間の時限措置（但し、2国間の合意により延長が可能））。この結果、既存の40億米ドル相当の人民元＝ウォン・スワップ取極と合わせると、中韓間の二国間通貨スワップ取極の引出限度額は合計300億米ドル相当となった。

ト) が安定したことなどを踏まえ、11 月 24 日と 12 月 8 日の 2 回、それぞれ 50bps の利下げを行った。同中銀は、10 月には、通貨防衛のため 300bps の利上げを行っていた。

- 中国人民銀行は、11 月 26 日、貸出基準金利、預金基準金利、預金準備率の引き下げを発表した（貸出基準金利〈1 年物〉：6.66%→5.58%、預金基準金利〈1 年物〉：3.60%→2.52%、預金準備率の下げ幅：大手行▲1%・中小金融機関▲2%）。貸出基準金利の引き下げは 3 か月連続、預金基準金利の引き下げは 2 か月連続。利下げ幅は、このところの利下げ幅である 27bps の 4 倍と大幅なものであった。なお、同時に、準備預金に対する金利も、法定準備に対する金利が 2002 年 2 月以来 6 年 9 か月振りに、超過準備に対する金利が 2005 年 3 月以来 3 年 8 か月振りに、それぞれ引き下げられた。
- ロシア中銀は、11 月 28 日、通貨防衛のため、11 月 11 日に続き、政策金利の 100bps 引き上げと、ルーブルの対通貨バスケット（ドル、ユーロ）の許容変動幅拡大を発表した。許容変動幅の拡大は 12 月 5 日、11 日にも実施した。
- オーストラリア準備銀行は、12 月 2 日、先行きの内需減退見通しなどを踏まえ、100bps の利下げを行った（5.25%→4.25%、事前予想は 75bps の利下げが大勢）。利下げは 4 か月連続。
- タイ中銀は、12 月 3 日、100bps の利下げを行った（3.75%→2.75%、事前予想は 50bps の利下げと 25bps の利下げが拮抗）。利下げは 2007 年 7 月以来。
- ニュージーランド準備銀行は、12 月 4 日、世界経済見通しの下振れなどを映じた景気見通しの悪化を受けて、150bps の利下げを行った（6.5%→5.0%、事前予想も 150bps の利下げが大勢）。利下げは 7、9、10 月に続き 4 回目。
- インドネシア中銀は、12 月 4 日、25bps の利下げを行った（9.5%→9.25%、事前予想は据え置きが大勢）。利下げは 2007 年 12 月以来。
- インド準備銀行は、12 月 6 日、100bps の利下げを発表した（レポレート：7.5%→6.5%、リバースレポレート：6%→5%）。レポレートの引き下げは 3 か月連続。リバースレポレートの引き下げは 2003 年 8 月以来。
- 韓国銀行は、12 月 11 日、国内景気の減速を受けて、定例会合により 100bps の利下げを行った（4%→3%、事前予想は 50bps の利下げが大勢）。利下げは 3 か月連続。
- 台湾中銀は、12 月 11 日、輸出減が国内経済に悪影響を及ぼしているなどとして、定例会合により 75bps の利下げを行った（2.75%→2.00%、事前予想は

50bps の利下げが大勢)。利下げは 4 か月連続。

以 上

2008.12.15
国際局

「海外経済・国際金融の現状評価」図表一覧

（図表1）	米国の主要経済指標	1
（図表2）	欧州の主要経済指標	2～3
（図表3）	アジア諸国・地域の主要経済指標	4～6
（図表4）	米国の実体経済	7～13
（図表5）	米国の金融市場	14～20
（図表6）	欧州の実体経済	21～26
（図表7）	欧州の金融市場	27～30
（図表8）	アジア諸国・地域の実体経済	31～38
（図表9）	エマージング諸国・地域の金融市場	39～45
（図表10）	国際機関及び民間の海外経済・物価見通し	46

米国の主要経済指標

シャドーを付した計数は、前回会合（11月20日）以降に判明したもの。

	2006年	2007年	2008/2Q	3Q	4Q	9月	10月	11月
1. 実質GDP ＜前期比年率、％＞	2.8	2.0	2.8	<11/25改訂> ▲ 0.5				
2. 実質可処分所得 ＜前期比、％＞	3.5	2.8	2.6	▲ 2.4	0.6	0:0	<11/26公表> 1.0	
3. 実質個人消費 ＜前期比、％＞	3.0	2.8	0.3	▲ 0.9	▲ 0.8	▲ 0.4	<11/26公表> ▲ 0.5	
4. 家計貯蓄率 ＜対可処分所得比、％＞	0.7	0.6	2.5	1.1	2.4	1.0	<11/26公表> 2.4	
5. 小売売上高 (除く自動車、ガソリン、建築資材) ＜前期比、％＞	6.2	5.0	1.9	▲ 0.1	▲ 1.1	▲ 0.7	▲ 0.7	<12/12公表> 0.5
6. 自動車販売 (年率、万台) ＜前期比、％＞	1,705 ▲ 2.3	1,646 ▲ 3.4	1,443 ▲ 7.1	1,317 ▲ 8.7	1,061 ▲ 19.5	1,274 ▲ 8.8	1,079 ▲ 15.3	<12/3公表> 1,042 ▲ 3.4
7. 消費者コンフィデンス指数	105.9	103.3	57.3	57.3	41.9	61.4	38.8	<11/25公表> 44.9
8. 住宅着工 (年率、千戸) ＜前期比、％＞	1,801 ▲ 12.9	1,355 ▲ 24.8	1,025 ▲ 2.7	877 ▲ 14.4	791 ▲ 9.8	828 ▲ 3.0	791 ▲ 4.5	
9. FHFA指数 (除くリファイナンス) ＜前期比、％＞ (前年比、％)	6.2	1.5	▲ 1.4 ▲ 4.8	▲ 1.8 ▲ 6.0		<11/25公表> ▲ 1.3 ▲ 7.0		
10. 非国防資本財受注 (除く航空機) ＜前期比、％＞ (前年比、％)	10.5	▲ 2.6	2.5 3.2	▲ 1.3 2.0	▲ 8.0 ▲ 6.4	▲ 3.4 0.1	<12/4改訂> ▲ 5.0 ▲ 6.4	
11. 財・サービス貿易収支 (億ドル)	▲ 627.7	▲ 583.5	▲ 600.3	▲ 588.5	▲ 571.9	▲ 565.6	<12/11公表> ▲ 571.9	
12. ISM 製造業指数	53.1	51.1	49.5	47.8	37.6	43.5	38.9	<12/1公表> 36.2
非製造業指数	55.7	53.5	50.6	50.1	40.9	50.2	44.4	<12/5公表> 37.3
13. 鉱工業生産 ＜前期比、％＞ (前年比、％)	2.2	1.7	▲ 0.9 0.3	▲ 2.0 ▲ 2.6	▲ 1.7 ▲ 4.3	▲ 3.7 ▲ 5.8	1.3 ▲ 4.3	
14. 失業率 (除く軍人、％)	4.6	4.6	5.3	6.0	6.6	6.1	6.5	<12/5公表> 6.7
15. 非農業部門雇用者数 (増減数、千人/月) うち民間部門	175 159	91 71	▲ 71 ▲ 100	▲ 199 ▲ 210	▲ 427 ▲ 451	▲ 403 ▲ 384	▲ 320 ▲ 362	<12/5公表> ▲ 533 ▲ 540
16. CPI ＜前期比、％＞ (前年比、％)	3.2	2.9	1.2 4.4	1.6 5.3	▲ 1.0 3.7	▲ 0.0 4.9	▲ 1.0 3.7	
コア＜前期比、％＞ (前年比、％)	2.5	2.3	0.5 2.3	0.8 2.5	0.1 2.2	0.1 2.5	▲ 0.1 2.2	
17. 非農業部門労働生産性 ＜前期比年率、％＞ (前年比、％)	1.0	1.4	3.6 3.2	<12/3改訂> 1.3 2.1				
18. ユニット・レーバー・コスト ＜前期比年率、％＞ (前年比、％)	2.8	2.7	▲ 2.6 0.1	<12/3改訂> 2.8 1.4				

※ 直近四半期の計数については、公表済月までの平均を用いて算出。

(注) ・前期(月)比は季調済みベース。

・財・サービス貿易収支の年計数および四半期計数は月平均に換算。

・雇用者増減数(期末差)の年計数および四半期計数は月平均に換算。

・CPIコアは食料品、エネルギーを除いたベース。

(図表2-1)

ユーロエリアの主要経済指標

シャドーを付した計数は、前回会合(11月20日)以降に判明したもの。

※

	2006年	2007年	2008/2Q	3Q	4Q	2008/8月	9月	10月	11月
1. 実質GDP	<前期比年率、%>	3.0	2.6	▲0.7	▲0.8				
独 実質GDP	<前期比年率、%>	3.2	2.6	▲1.7	▲2.1				
仏 実質GDP	<前期比年率、%>	2.4	2.1	▲1.1	0.6				
2. 輸出	<前期比、%>			0.2	1.2	▲2.1	2.2		
	(前年比、%)	11.7	8.6	7.4	5.1	▲3.3	9.1		
3. 独 海外受注(域外)	<前期比、%>			▲3.0	▲5.5	▲10.5	13.8	▲13.6	<12/6公表>
	(前年比、%)	14.3	10.6	0.4	▲6.2	▲19.0	1.7	▲12.2	▲19.0
4. 独 国内投資財受注	<前期比、%>			▲1.9	▲3.9	▲8.6	6.1	▲6.6	<12/3公表>
	(前年比、%)	7.4	9.3	0.7	▲3.3	▲13.9	1.7	▲5.1	▲13.9
5. 輸入	<前期比、%>			1.1	4.4	▲2.5	2.1		
	(前年比、%)	13.7	6.4	10.4	12.1	5.5	16.2		
6. 小売売上数量	<前期比、%>			▲0.8	0.0	▲0.7	0.1	0.0	<12/3公表>
	(前年比、%)	1.5	0.9	▲1.5	▲1.5	▲2.1	▲1.7	▲1.4	▲2.1
7. 新車登録台数	(年率、万台)	1,162	1,157	1,085	1,069	1,024	1,081	1,063	1,024
	<前期比、%>	3.0	▲0.4	▲4.3	▲1.5	▲4.2	1.7	▲1.6	▲3.7
8. 消費者コンフィデンス	(DI、%)	▲9	▲5	▲15	▲19	▲24	▲19	▲19	▲24
9. 鉱工業生産(除く建設)	<前期比、%>			▲0.9	▲1.2	▲2.2	0.8	▲1.8	<12/12公表>
	(前年比、%)	4.0	3.4	1.1	▲1.6	▲5.3	▲0.7	▲2.7	▲5.3
10. 製造業PMI(購買担当者指数)	(DI、%)	56.3	54.3	50.2	46.6	38.3	47.6	45.0	41.1
サービス業PMI事業活動指数	(DI、%)	57.9	56.6	50.6	48.4	44.1	48.5	48.4	45.8
11. 失業率	(%)	8.2	7.4	7.4	7.5	7.7	7.5	7.6	7.7
12. 消費者物価	(前年比、%)	2.2	2.1	3.6	3.8	2.6	3.8	3.6	3.2
コア	(前年比、%)	1.5	2.0	2.5	2.5	2.4	2.6	2.5	2.4

※ 直近四半期の計数については、公表済月までの平均をベースに算出。

(出所) 欧州委員会(Eurostat)、ECB、Deutsche Bundesbank、Statistisches Bundesamt、INSEE、Datastream、REUTERS

(注) ・ユーロエリアに関する計数・図表のうち、消費者物価・M3・貸出は各時期のユーロ構成国ベース。

(但し、7.新車登録台数は13か国ベース)。

・実質GDPの年率換算値は、当局計算による。

・前期(月)比は季調済みベース。

・消費者物価コアは、エネルギー、非加工食料品を除いたベース。

・消費者物価の直近11月は、速報値。また全体以外は未公表。

英国の主要経済指標

シャドーを付した計数は、前回会合(11月20日)以降に判明したもの。

※

	2006年	2007年	2008/2Q	3Q	4Q	2008/8月	9月	10月	11月
1. 実質GDP <前期比年率、%>	2.8	3.0	0.0	▲2.0					
2. 小売売上数量 <前期比、%> (前年比、%)	3.2	4.3	0.5	0.0	▲0.1	1.1	▲0.5	▲0.1	
3. 消費者コンフィデンス (DI、%)	▲6	▲7	▲30	▲36	▲35	▲36	▲31	▲35	▲34
4. サービス業PMI事業活動指数 (DI、%)	58.5	56.3	49.1	47.5	41.2	49.2	46.0	42.4	40.1
5. 失業率(失業保険ベース) (%)	2.9	2.7	2.6	2.8	3.0	2.8	2.9	3.0	
6. CPI (前年比、%)	2.3	2.3	3.4	4.8	4.5	4.7	5.2	4.5	
7. 住宅価格(Nationwide指数) (前年比、%)	6.4	9.2	▲3.9	▲10.3	▲14.3	▲10.5	▲12.4	▲14.6	▲13.9

※直近四半期の計数については、公表済月までの平均をベースに算出。

(注) 実質GDPの年率換算値と、消費者コンフィデンスの季調値は、当局計算による。

(図表 3-1)

アジア諸国・地域の主要経済指標

シャドーを付した計数は、前回会合（11月20日）以降に判明したもの。

1. 中国

(前年比、%)

	2006年	2007年	2008/2Q	3Q	4Q	2008/9月	10月	11月
1. 実質GDP <>内は季調済前期比年率	11.6	11.9	10.1 < 10.9 >	9.0 < 6.4 >				
2. 工業生産	16.6	18.5	15.9	13.0	6.8	11.4	8.2	5.4
3. 消費財小売売上総額	13.7	16.8	22.2	23.2	21.4	23.2	22.0	20.8
4. 固定資産投資								
年初来累計	24.5	25.8	26.8	27.6	27.2	27.6	27.2	
当期			27.2	28.7	24.3	28.7	24.3	
5. 輸出 <>内は前期比	27.2	25.7	22.2 < 7.5 >	23.1 < 5.9 >	8.0 ▲ 8.4 >	21.5 ▲ 4.7 >	19.2 ▲ 0.3 >	▲ 2.2 ▲ 11.8 >
6. 輸入 <>内は前期比	19.9	20.8	32.6 < 16.1 >	25.9 ▲ 0.9 >	▲ 2.2 ▲ 15.2 >	21.3 ▲ 9.8 >	15.6 < 3.8 >	▲ 17.9 ▲ 25.0 >
7. CPI	1.5	4.8	7.8	5.3	3.2	4.6	4.0	2.4
8. M2	16.9	16.7	17.4	15.3	14.8	15.3	15.0	14.8
9. 人民元貸出	15.1	16.1	14.1	14.5	16.0	14.5	14.6	16.0

(注1) 直近四半期の計数については、公表済月までの平均をベースに算出。M2、人民元貸出の年、四半期計数は期末月の前年比。

(注2) 実質GDPの季調値は、JPモルガンによる試算値。輸出入の季調値は、X-12-ARIMAによる当局算出値。

(注3) 固定資産投資は、都市部。「当期」の値は、中国国家统计局が公表する年初来累計値と同前年比伸び率を用いて当局で試算。

2. インド

(前年比、%)

	2006年	2007年	2008/2Q	3Q	4Q	2008/9月	10月	11月
1. 実質GDP	9.8	9.3	7.9	7.6				
個人消費	7.4	7.9	8.0	5.0				
総固定資本形成	16.1	14.6	9.0	13.8				
2. 鉱工業生産	10.5	9.9	5.3	4.4		5.5	▲ 0.4	
3. 輸入	20.9	25.4	36.8	50.8		43.3	10.6	
4. 卸売物価	4.8	4.8	9.6	12.5	9.8	12.3	11.0	8.7
5. M3	19.3	22.6	20.8	19.0	19.2	19.0	20.2	19.2
6. 貸出	30.3	21.4	25.9	24.8		24.8	30.8	

(注1) 直近四半期の計数については、公表済月までの平均をベースに算出。M3、貸出の年、四半期計数は期末月の前年比。

(注2) 貸出は指定商業銀行ベース。

(出所) CEIC

(図表3-2)

3. NIEs、ASEAN諸国・地域

(1) 実質GDP

(季調済前期比年率、()内は前年比、%)

	2005年	2006年	2007年	2007/3Q	4Q	2008/1Q	2Q	3Q
韓 国	4.2	5.1	5.0	6.0 (5.1)	6.4 (5.7)	3.3 (5.8)	3.4 (4.8)	2.1 (3.8)
台 湾	4.2	4.8	5.7	11.7 (7.0)	0.9 (6.4)	2.7 (6.2)	3.3 (4.6)	▲ 10.5 (▲ 1.0)
香 港	7.1	7.0	6.4	8.7 (6.8)	6.1 (6.9)	8.2 (7.3)	▲ 5.5 (4.2)	▲ 2.0 (1.7)
シンガポール	7.3	8.2	7.7	5.1 (9.5)	▲ 4.8 (5.4)	15.7 (6.9)	▲ 5.3 (2.3)	▲ 6.8 (▲ 0.6)
タ イ	4.6	5.2	4.9	7.3 (5.1)	6.3 (5.7)	4.8 (6.0)	3.1 (5.3)	2.3 (4.0)
インドネシア	5.7	5.5	6.3	7.1 (6.5)	5.6 (6.3)	6.2 (6.3)	7.0 (6.4)	5.3 (6.1)
マレーシア	5.3	5.8	6.3	9.2 (6.7)	7.0 (7.3)	7.0 (7.4)	3.7 (6.7)	1.3 (4.7)
フィリピン	5.0	5.4	7.2	3.3 (7.1)	5.1 (6.4)	1.3 (4.7)	7.9 (4.4)	3.4 (4.6)

(注1) 季節調整値は、韓国、香港、シンガポール、タイ、フィリピンが現地統計。その他はX-11による当局算出値。

(注2) 実質GDPの年率換算値は、当局計算による。

(2) 輸出

(名目米ドルベース、季調済前期比、()内は前年比、%)

	2006年	2007年	2008/2Q	3Q	4Q	2008/9月	10月	11月
輸出合成指数	14.4	11.5	9.7	0.4	▲ 14.2			
うちIT関連寄与度			2.6	▲ 1.2	▲ 2.7			
韓 国 <29.0>	14.4	14.1	11.5 (23.1)	4.1 (27.1)	▲ 19.3 (▲ 5.1)	▲ 0.4 (27.7)	▲ 6.5 (8.5)	▲ 21.4 (▲ 18.3)
台 湾 <19.3>	12.9	10.1	9.0 (18.6)	▲ 2.7 (8.0)	▲ 21.1 (▲ 15.6)	▲ 14.3 (▲ 1.6)	▲ 2.1 (▲ 8.3)	▲ 23.5 (▲ 23.3)
タ イ <11.9>	16.9	17.2	10.0 (25.2)	2.7 (25.2)	▲ 11.0 (5.2)	▲ 1.9 (19.4)	▲ 7.5 (5.2)	
インドネシア <8.9>	17.7	13.2	3.4 (29.6)	▲ 1.2 (27.7)	▲ 14.5 (4.9)	▲ 3.6 (28.5)	▲ 13.1 (4.9)	

(参考)

	2006年	2007年	2008/2Q	3Q	4Q	2008/9月	10月	11月
シンガポール 新規輸出受注D.I.*	51.8	53.7	48.7	48.8	43.0	48.9	44.8	41.1
うちIT関連*	52.6	56.3	52.1	54.2	46.6	56.3	48.4	44.8

(注1) 直近四半期の計数については、公表済月までの平均をベースに算出。

(注2) 合成指数は、直近は10月の値。直近月まで公表されていないデータは、前月の前年比で横置きしている。

(注3) 輸出の季節調整値は、X-12-ARIMAによる当局算出値。

(注4) 輸出の< >内は、合成指数に占めるシェア(%)、2007年)。

(注5) 輸出、輸出合成指数はともに金額ベース。

(注6) 合成指数のIT関連は、標準国際貿易分類における、事務機器、データ処理機械、通信機器、音響機器、電気機械、家電製品、光学機器などの項目、また他分類ではこれらに該当する項目で定義。

(注7) *印は、50を上回れば「改善」、下回れば「悪化」。

(出所) CEIC

(図表 3-3)

(3) 生産関連

(季調済前期比、() 内は前年比、%)

	2006年	2007年	2008/2Q	3Q	4Q	2008/9月	10月	11月
生産合成指数	7.0	6.1	0.1	▲ 1.0				
うちIT関連寄与度			0.2	0.1				
韓国 鉱工業生産指数	8.4	6.8	1.3 (8.6)	▲ 2.1 (5.6)	▲ 3.4 (▲ 2.4)	▲ 0.5 (6.2)	▲ 2.3 (▲ 2.4)	
企業景気実査指数 [†] (季調済)	96.0	99.8	90.8	84.5	57.7	75.7	63.5	51.9
台湾 鉱工業生産指数	4.7	7.8	0.1 (6.8)	▲ 2.6 (0.4)	▲ 11.2 (▲ 12.5)	▲ 4.8 (▲ 1.2)	▲ 8.3 (▲ 12.5)	
タイ 製造業生産指数	7.3	8.2	▲ 0.0 (10.1)	1.6 (7.6)	▲ 1.7 (1.9)	▲ 2.7 (4.3)	0.3 (1.9)	

(注1) 直近四半期の計数については、公表済月までの平均をベースに算出。

(注2) 合成指数は、直近は9月の値。直近月まで公表されていないデータは、前月の値で横置きしている。

(注3) 生産指数の季節調整値は、現地統計またはX-12-ARIMAによる当局算出値。

(注4) 生産、生産合成指数はともに数量ベース。

(注5) 合成指数のIT関連は、標準国際貿易分類における、事務機器、データ処理機械、通信機器、音響機器、電気機械、家電製品、光学機器などの項目、また他分類ではこれらに該当する項目で定義。

(注6) †印は、100を上回れば「改善」、下回れば「悪化」。

(4) 内需関連

(季調済前期比、() 内は前年比、%)

	2006年	2007年	2008/2Q	3Q	4Q	2008/9月	10月	11月
韓国 小売数量指数	4.1	5.3	▲ 1.1 (2.5)	0.1 (1.1)	▲ 3.8 (▲ 3.7)	▲ 3.6 (▲ 1.8)	▲ 1.4 (▲ 3.7)	
消費者信頼感指数 [†]	101.0	107.3	86.0	92.0	86.0	96.0	88.0	81.0
機械投資推計指数	8.9	8.6	1.4 (0.1)	3.2 (6.1)	▲ 12.8 (▲ 7.7)	▲ 2.9 (7.1)	▲ 11.0 (▲ 7.7)	
台湾 小売指数	1.2	1.6	(▲ 2.5)	(▲ 8.4)	(▲ 5.3)	(▲ 7.8)	(▲ 5.3)	
消費者コンフィデンス [†]	68.7	66.2	63.3	55.4	51.1	54.3	52.2	50.0
タイ 民間消費指数 (PCI)	2.3	1.5	▲ 0.1 (4.0)	2.4 (5.2)	▲ 0.5 (2.8)	1.0 (5.9)	▲ 1.1 (2.8)	
民間投資指数 (PII)	2.2	▲ 0.5	(4.7)	(3.7)	(1.9)	(3.3)	(1.9)	

(注1) 直近四半期の計数については、公表済月までの平均をベースに算出。

(注2) †印は、100を上回れば「改善」、下回れば「悪化」。

(注3) タイの民間投資指数 (PII) は、後方3ヶ月移動平均。

(5) 消費者物価指数 (CPI)

(前年比、%)

	2006年	2007年	2008/2Q	3Q	4Q	2008/9月	10月	11月
韓国 () 内はコア	2.2 (1.8)	2.5 (2.3)	4.8 (3.9)	5.5 (4.8)	4.7 (5.3)	5.1 (5.1)	4.8 (5.2)	4.5 (5.3)
台湾 () 内はコア	0.6 (0.5)	1.8 (1.4)	4.2 (3.4)	4.5 (3.7)	2.1 (2.6)	3.1 (3.3)	2.4 (2.9)	1.9 (2.4)
タイ () 内はコア	4.6 (2.3)	2.2 (1.0)	7.5 (2.8)	7.2 (3.0)	3.0 (2.2)	6.0 (2.6)	3.9 (2.4)	2.2 (2.0)
インドネシア	13.1	6.4	9.9	12.0	11.7	12.1	11.8	11.7

(注1) 直近四半期の計数については、公表済月までの平均をベースに算出。

(注2) 韓国のCPIコアは、CPI総合から穀物以外の農産物、石油関連製品を控除。台湾のCPIコアは、CPI総合から生鮮食料品およびエネルギーを控除。タイのCPIコアは、CPI総合から非加工食品、エネルギーを控除。

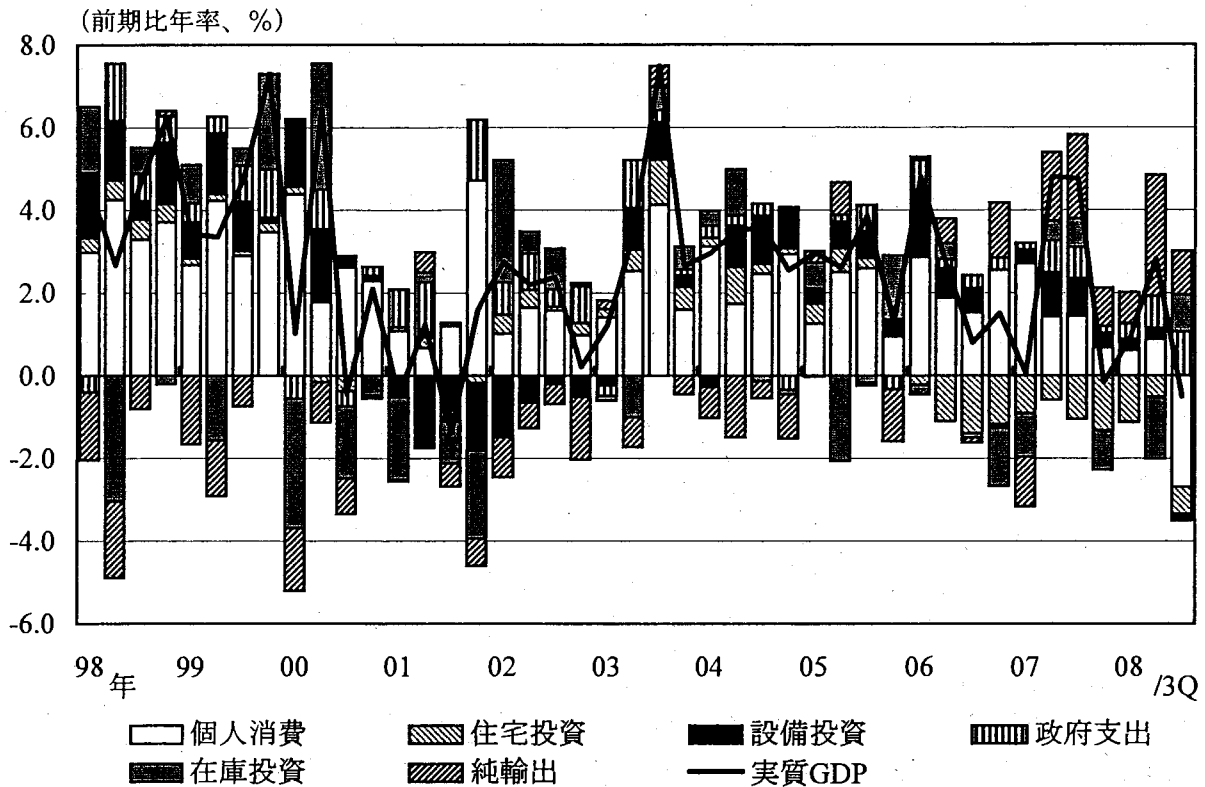
(注3) インドネシアは、新基準年データの利用可能範囲が限定されるため、6月以降の計数は2007年基準、その他は2002年基準。

(出所) CEIC

米国の実体経済

① 米国の実質GDP

(1) 実質GDPの需要項目別寄与度



(2) 需要項目別計数

実質・年率、% ()内は前期比増減、10億ドル

	2007年 対比	寄与度分解					前期比年率				
		2007年	2008年				2007年	2008年			
		通年	1Q	2Q	3Q	(改訂前)	通年	1Q	2Q	3Q	(改訂前)
実質GDP	100	2.0	0.9	2.8	▲0.5	▲0.3	2.0	0.9	2.8	▲0.5	▲0.3
個人消費	72	2.0	0.6	0.9	▲2.7	▲2.3	2.8	0.9	1.2	▲3.7	▲3.1
住宅投資	4	▲1.0	▲1.1	▲0.5	▲0.7	▲0.7	▲17.9	▲25.1	▲13.3	▲17.6	▲19.1
設備投資	12	0.5	0.3	0.3	▲0.2	▲0.1	4.9	2.4	2.5	▲1.5	▲1.0
在庫投資	0	▲0.4	▲0.0	▲1.5	0.9	0.6	(▲44.8)	(▲2.1)	(▲40.4)	(21.5)	(12.1)
純輸出	▲5	0.6	0.8	2.9	1.1	1.1	(69.2)	(22.5)	(80.7)	(29.0)	(31.3)
<輸出>	12	1.0	0.6	1.5	0.5	0.8	8.4	5.1	12.3	3.4	5.9
<輸入>	17	▲0.4	0.1	1.4	0.6	0.4	2.2	▲0.8	▲7.3	▲3.2	▲1.9
政府支出	17	0.4	0.4	0.8	1.1	1.2	2.1	1.9	3.9	5.4	5.8
最終需要	100	2.4	0.9	4.4	▲1.4	▲0.8	2.4	0.9	4.4	▲1.4	▲0.8

年率、%

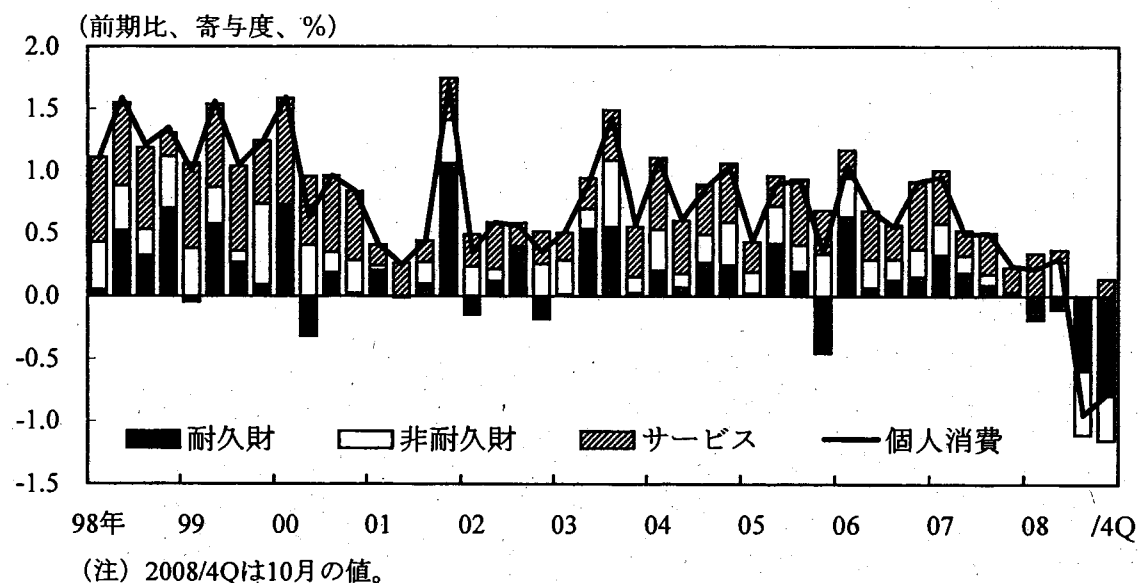
個人消費デフレーター (総合)	2.6	3.6	4.3	5.2	5.4
個人消費デフレーター (コア)	2.2	2.3	2.2	2.6	2.9

(注) 最終需要は、実質GDPから在庫投資を除いたもの。

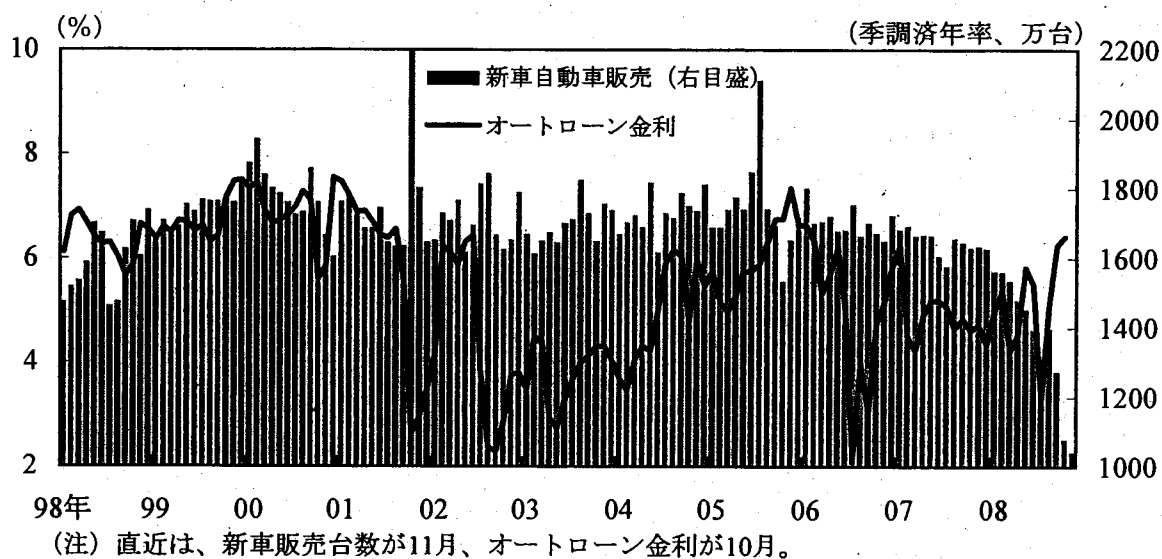
② 米国の個人消費関連

(図表4-2)

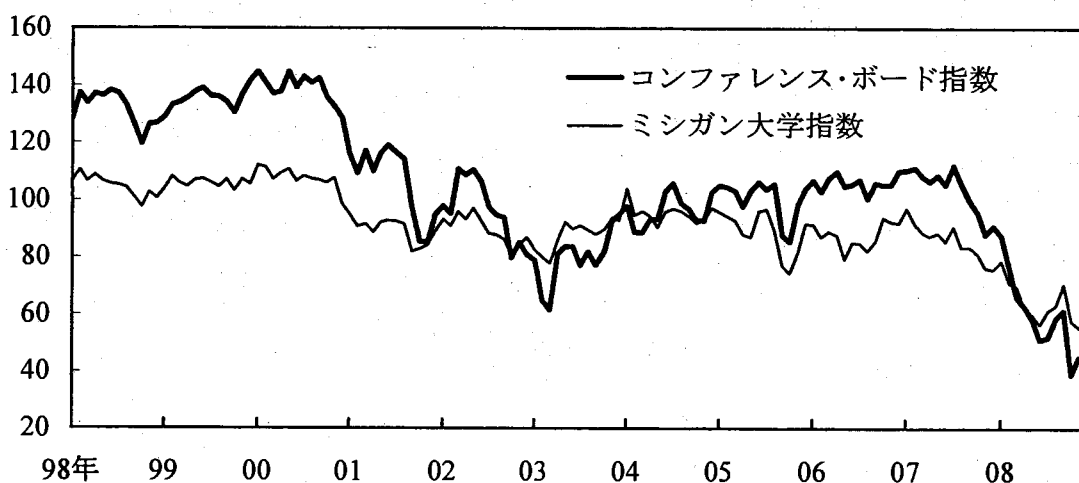
(1) 個人消費



(2) 自動車販売



(3) 消費者コンフィデンス



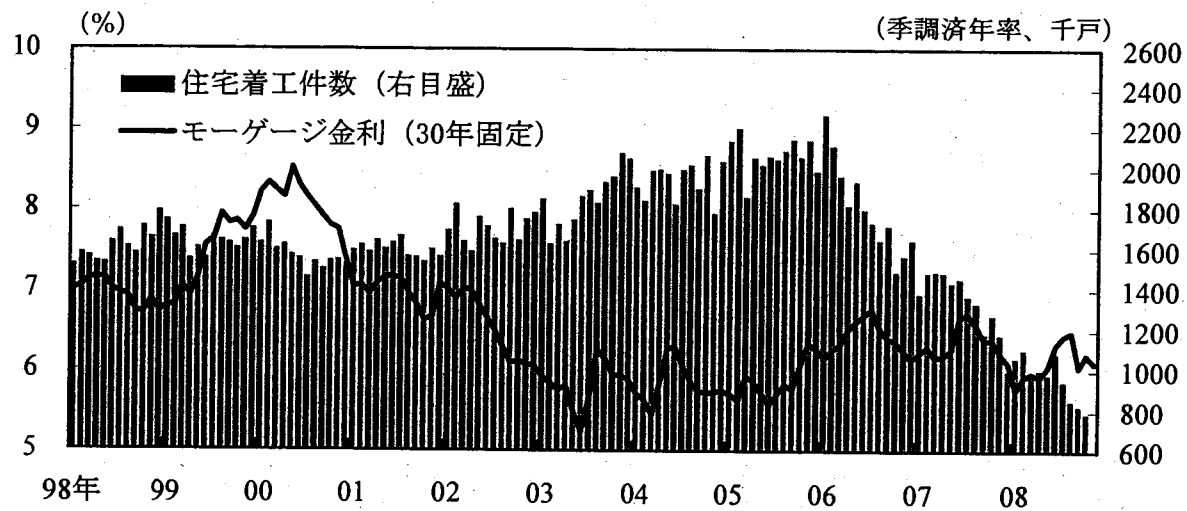
(注1) コンファレンス・ボード指数は1985年=100、ミシガン大学指数は1966/1Q=100。

(注2) 直近は、コンファレンス・ボード指数が11月、ミシガン大学指数が12月(速報値)。

③ 米国の住宅投資

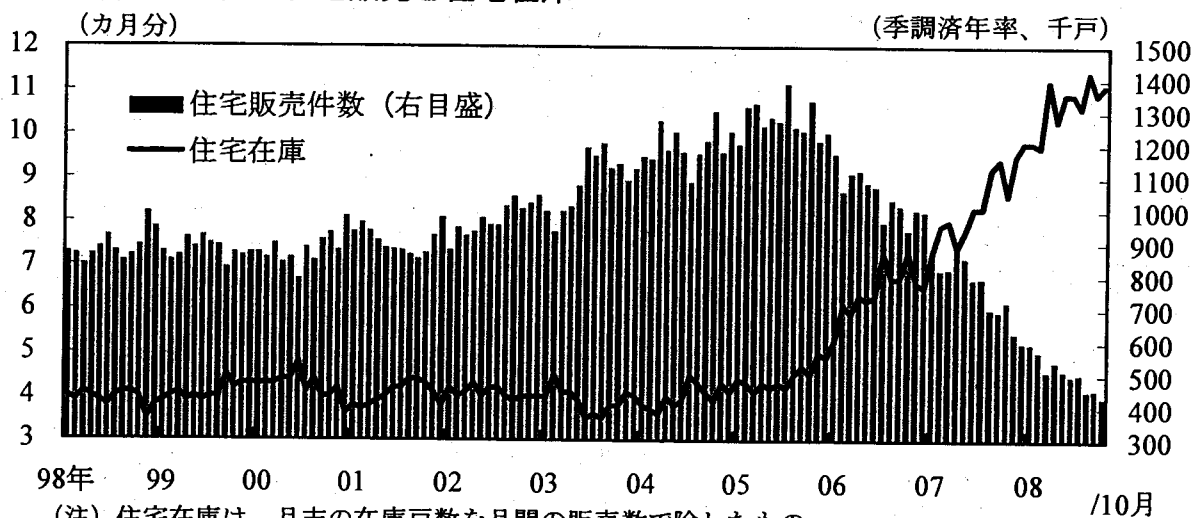
(図表4-3)

(1) モーゲージ金利と住宅着工



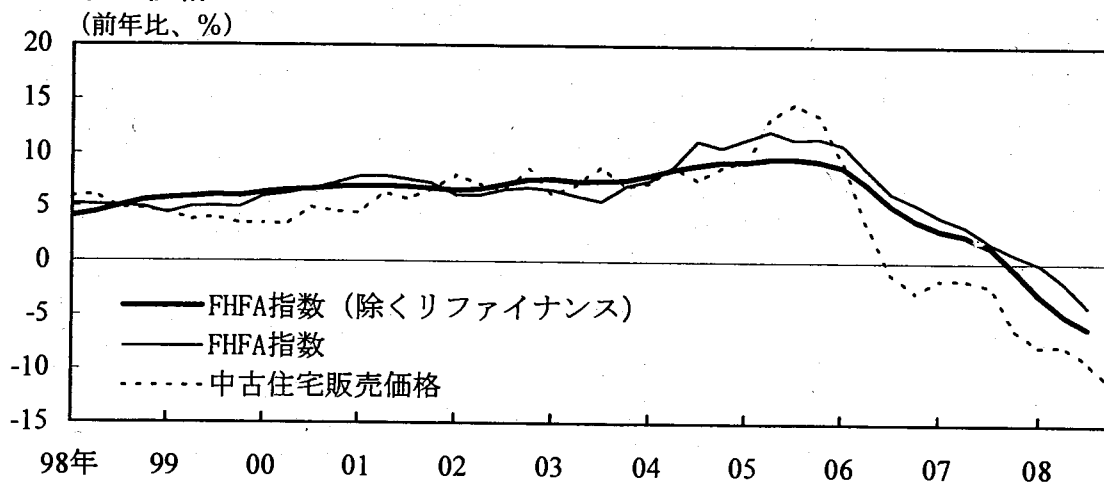
(注) 直近は、住宅着工件数が10月、モーゲージ金利が11月。

(2) 新築一戸建て住宅販売と住宅在庫



(注) 住宅在庫は、月末の在庫戸数を月間の販売数で除したもの。

(3) 住宅価格



(注1) 除くリファイナンスは、FHFA指数の対象物件のうち、リファイナンスに伴い再評価された物件を除き、実際に購入された物件のみを対象とした価格指数。

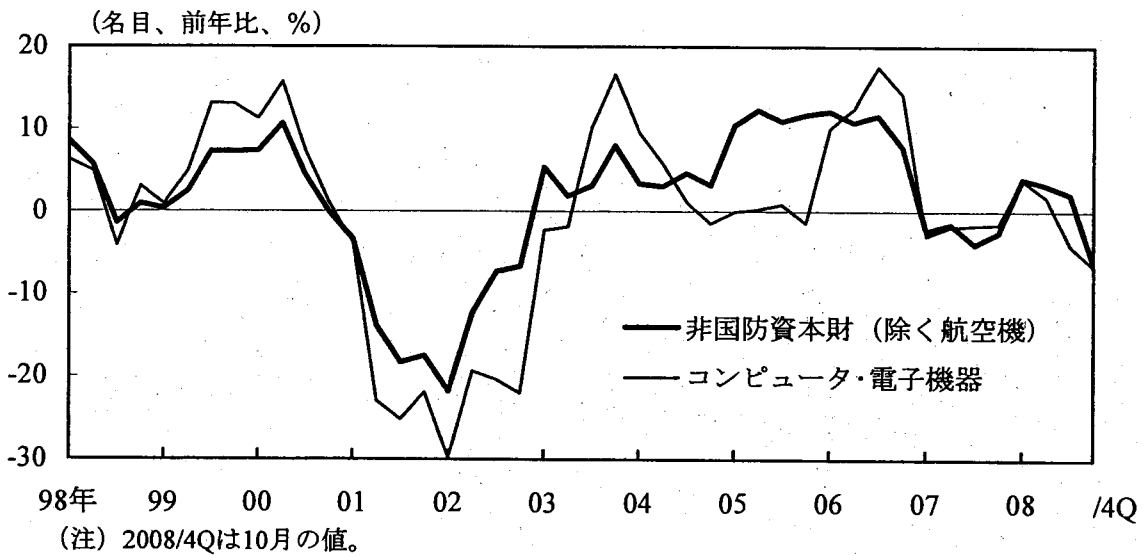
(注2) 中古住宅販売価格は、不動産業者から報告された中古一戸建て住宅の販売物件の平均単価を集計したもの(中央値)。

(注3) 直近は、FHFA指数、FHFA指数(除くリファイナンス)が3Q、中古住宅販売価格が4Q(10月)の値。

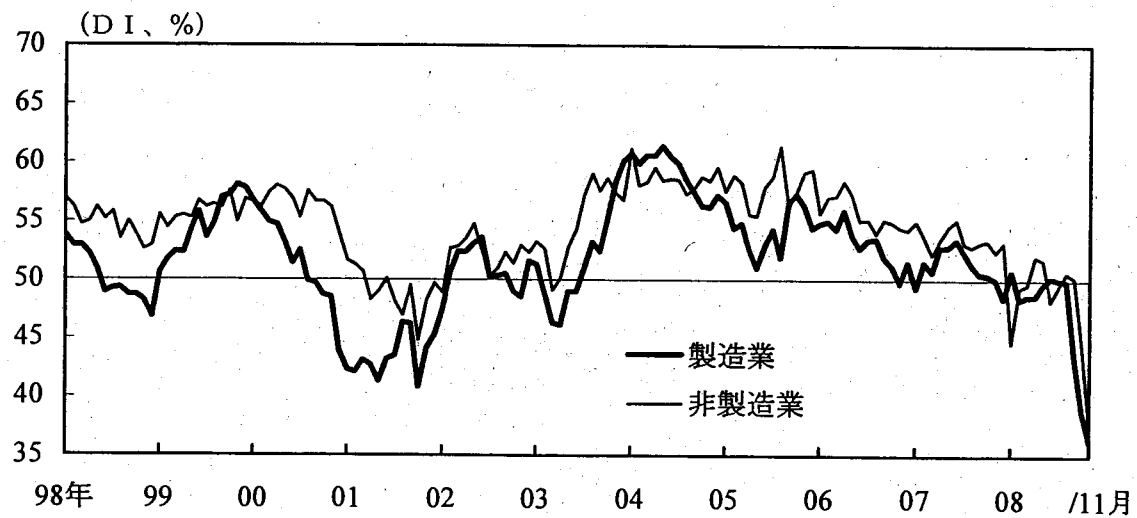
④ 米国の設備投資と生産

(図表4-4)

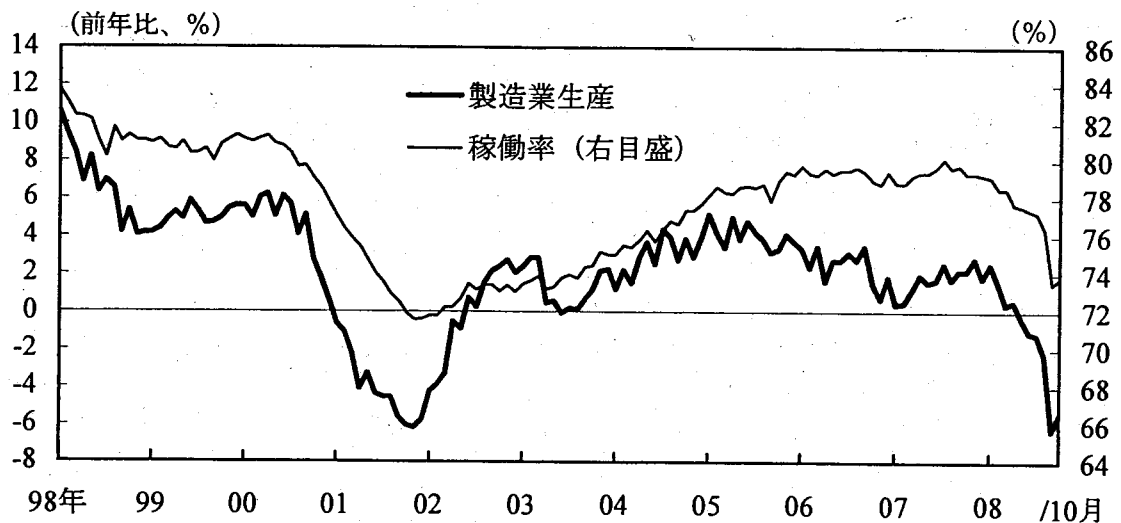
(1) 非国防資本財（除く航空機）とコンピュータ・電子機器受注



(2) 企業コンフィデンス (ISM指数)



(3) 製造業生産・稼働率



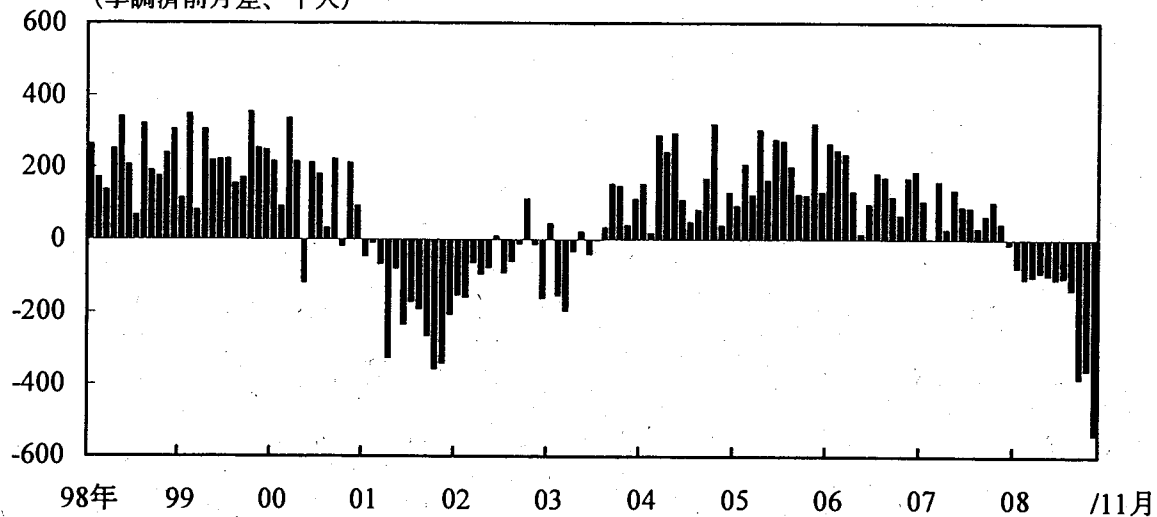
⑤ 米国の雇用

(図表4-5)

(1) 民間部門雇用者数

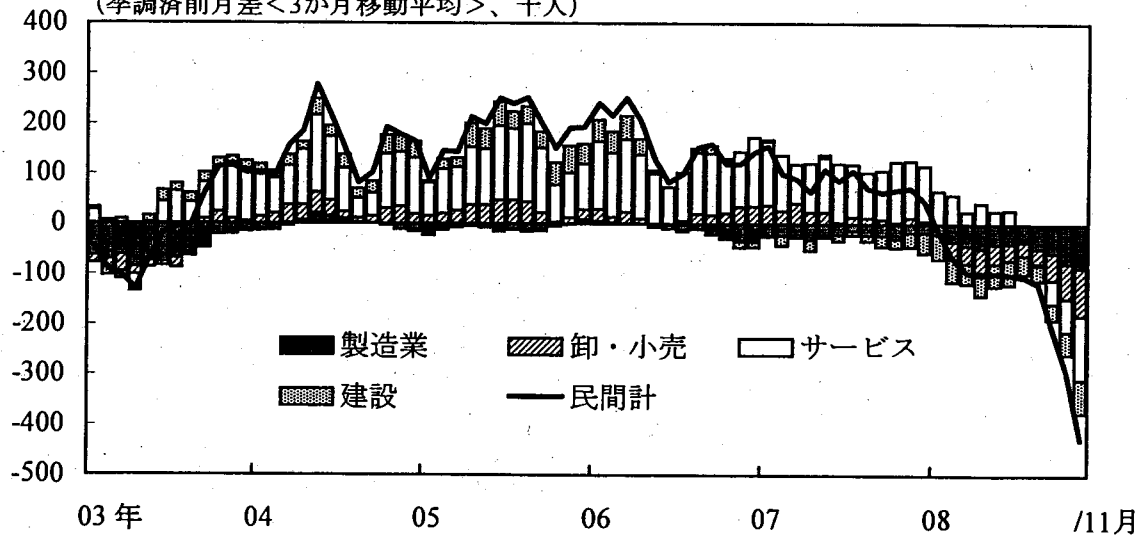
① 全体

(季調済前月差、千人)



② 業種別

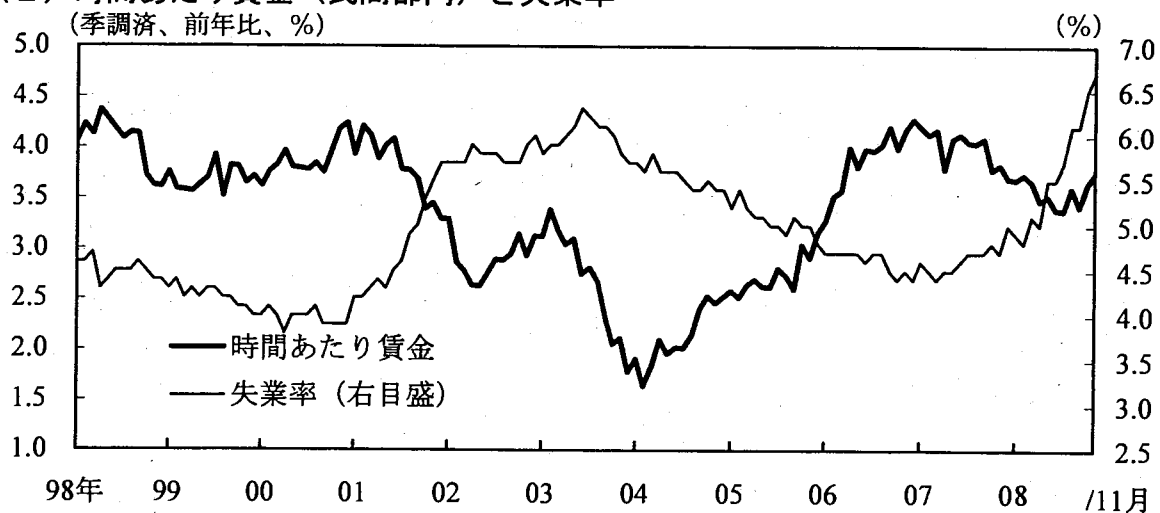
(季調済前月差<3か月移動平均>、千人)



(注) 棒線の合計と折れ線の差はその他の項目(金融等)。

(2) 時間あたり賃金(民間部門)と失業率

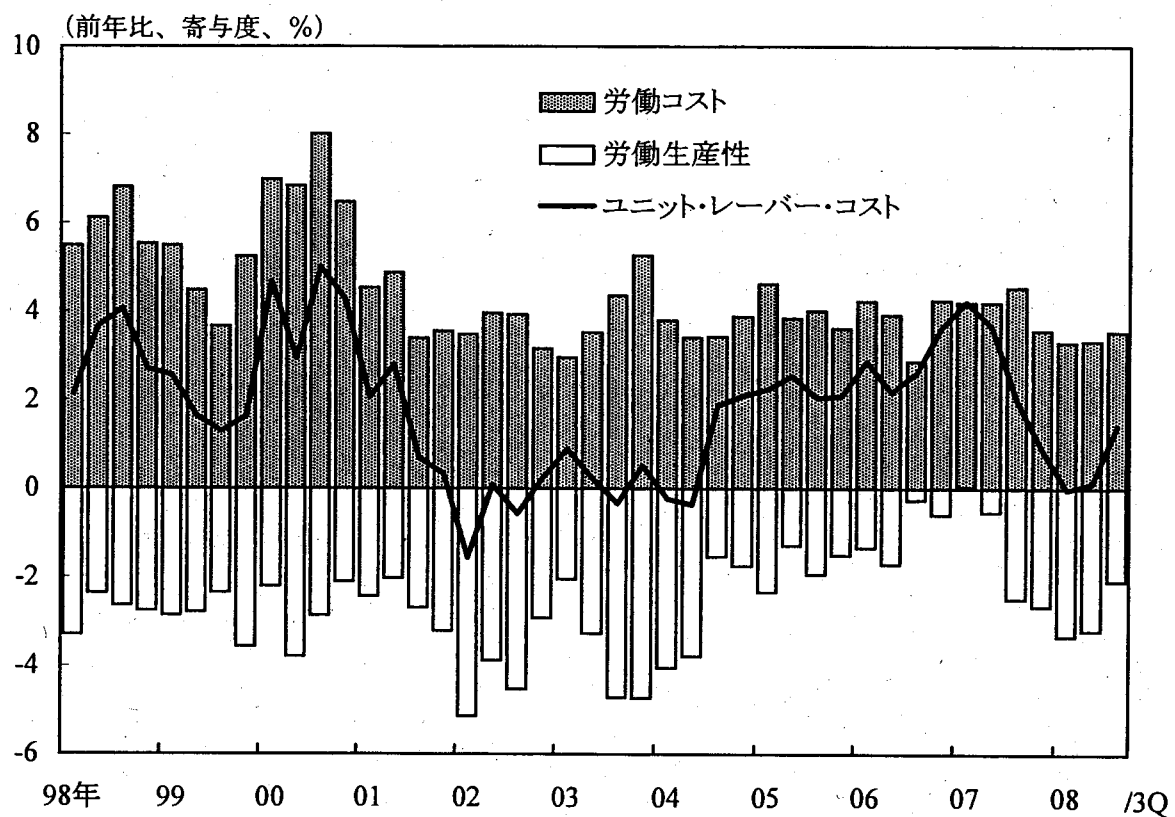
(季調済、前年比、%)



⑥ 米国の労働コスト、物価

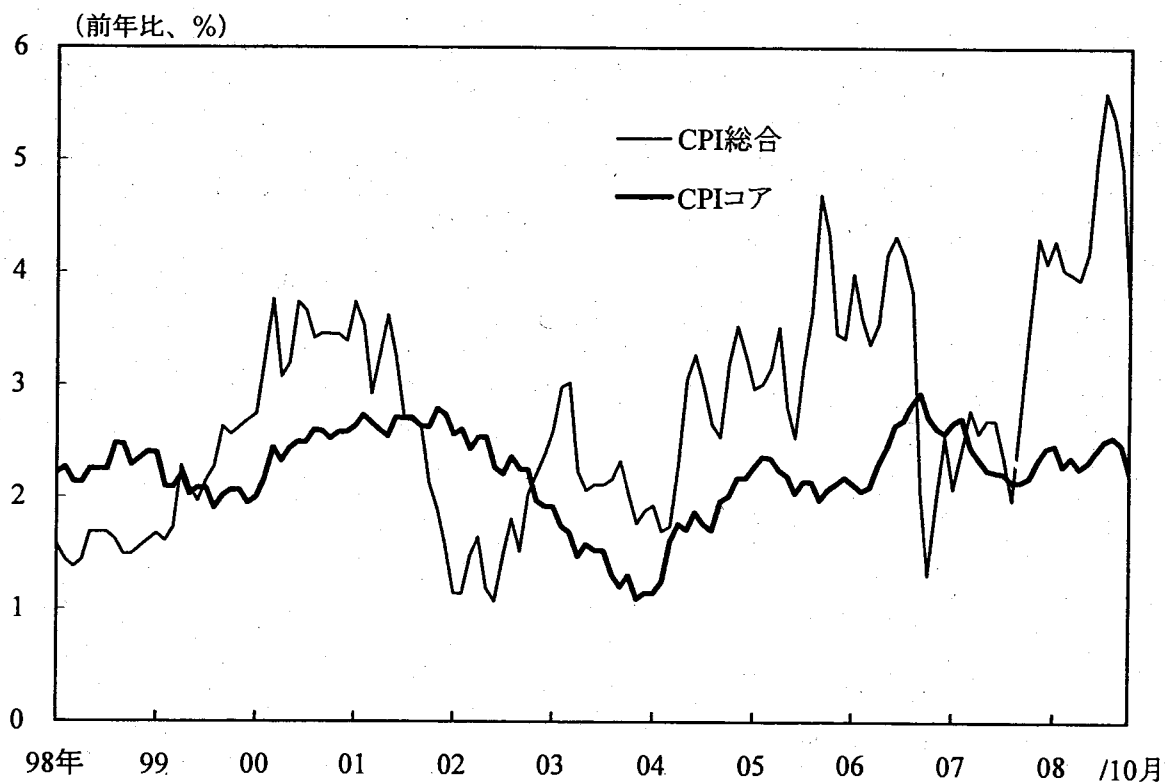
(図表4-6)

(1) ユニット・レーバー・コスト



(注) 労働コストは、賃金と福利厚生費の合計。

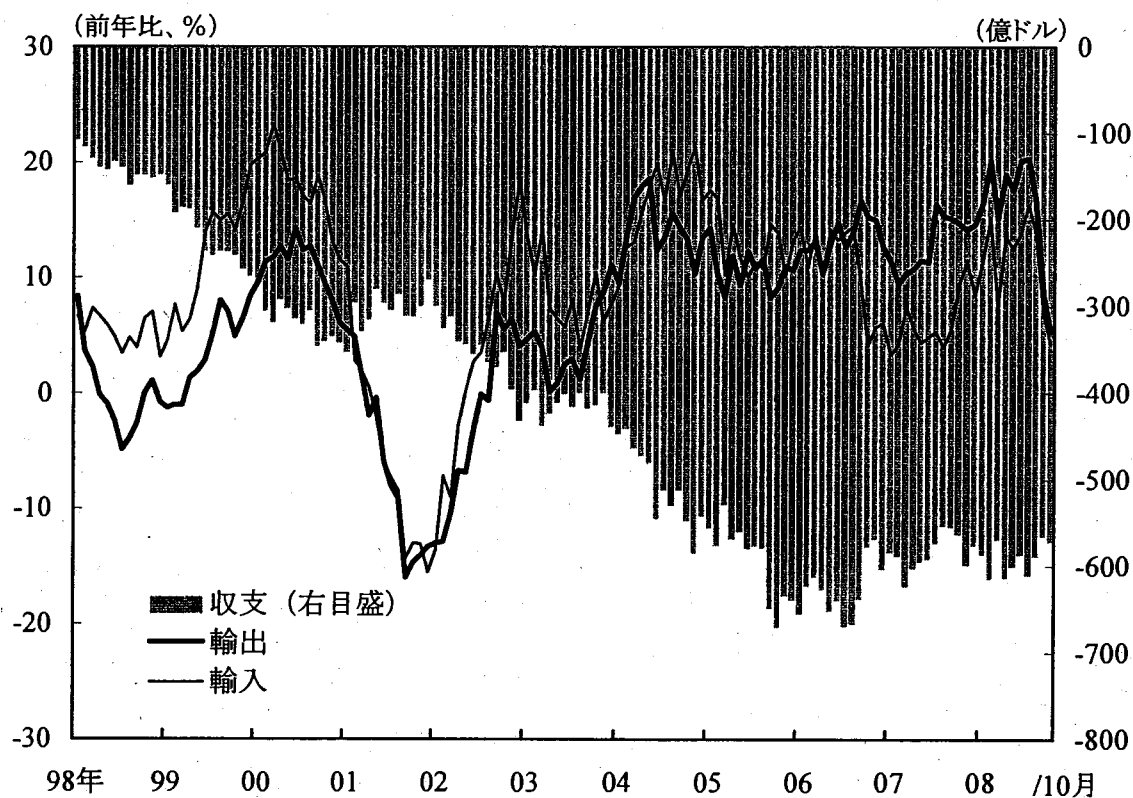
(2) CPI



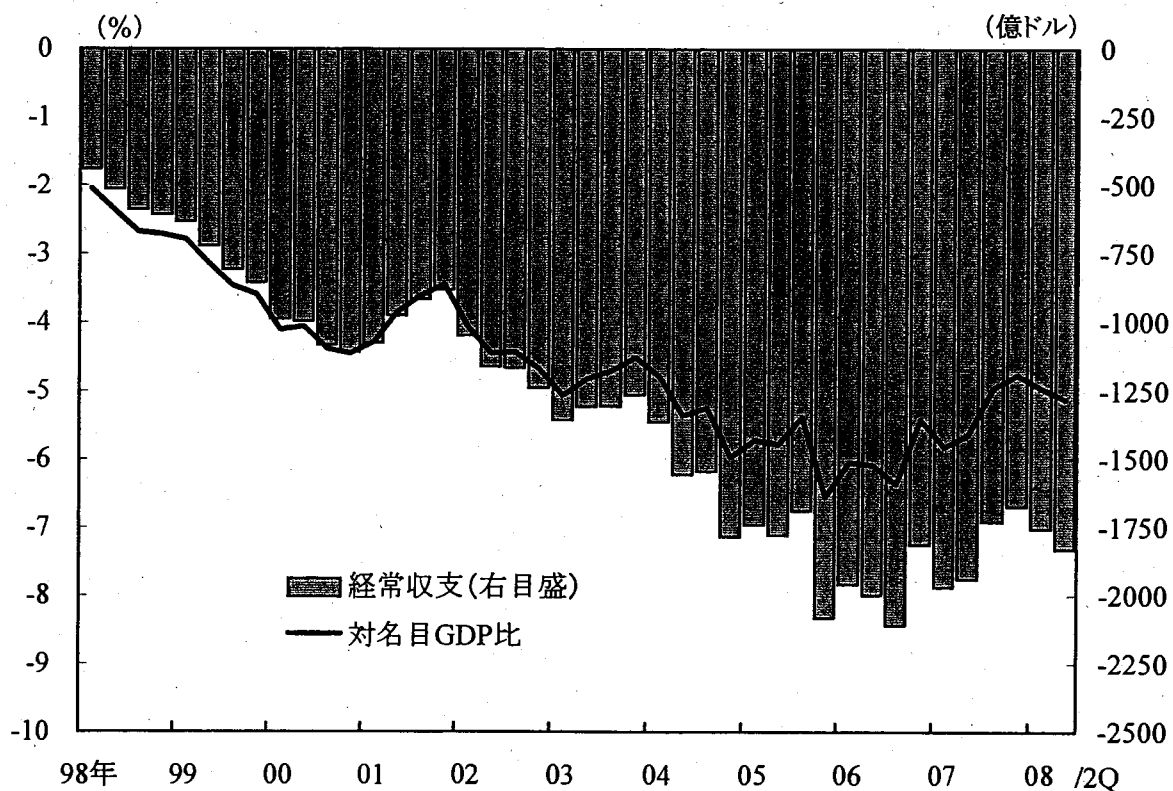
⑦ 米国の対外バランス

(図表4-7)

(1) 財・サービス収支



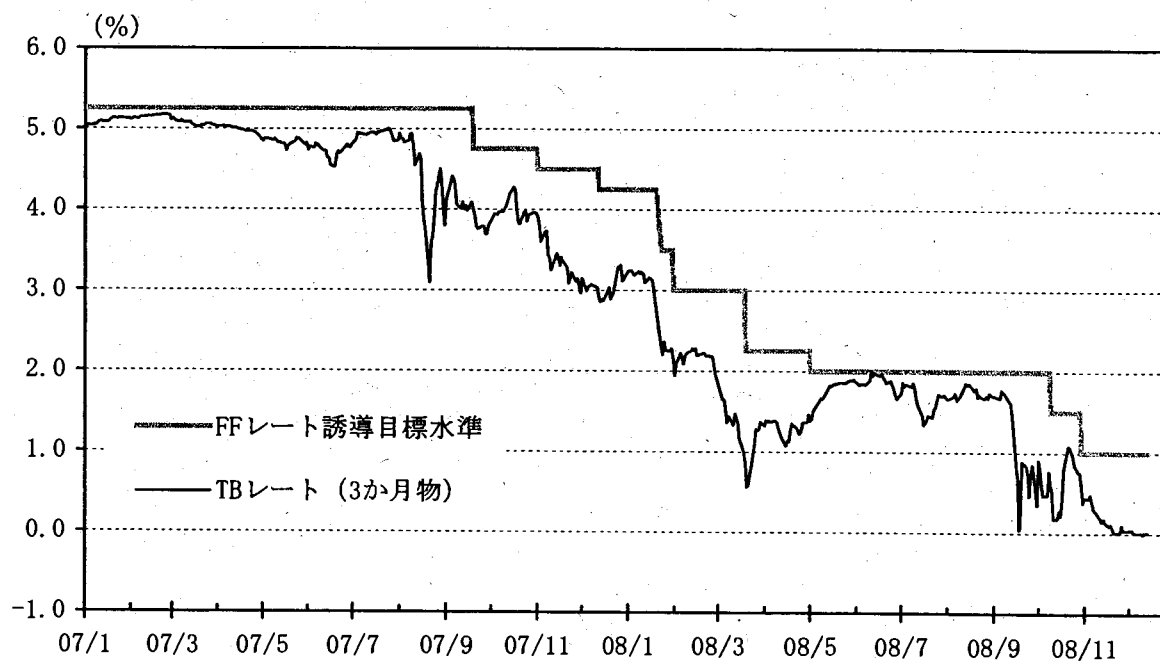
(2) 経常収支



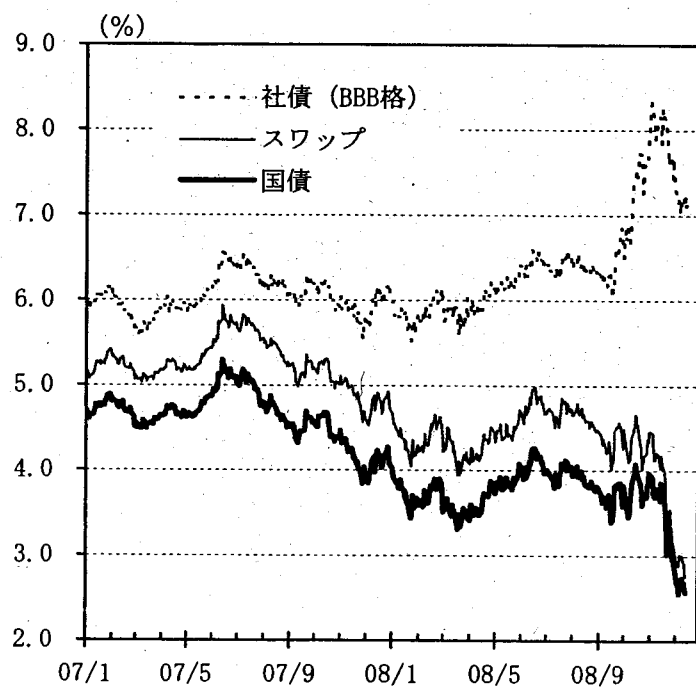
米国の金融市場

金利(米国)

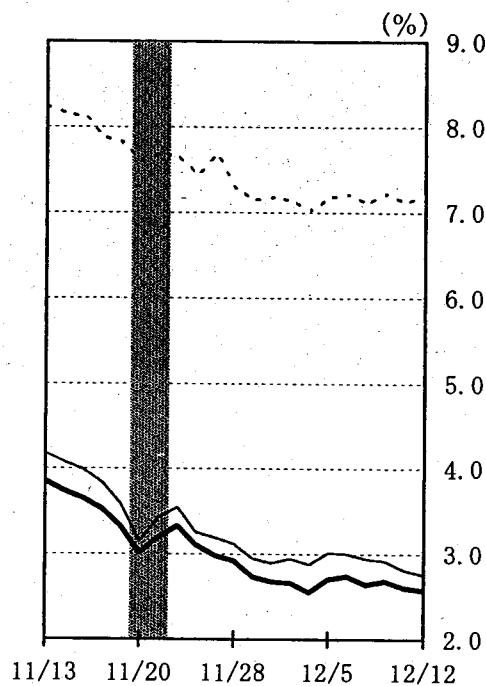
(1) 政策金利・短期金利



(2) 長期金利(10年物)



<最近の動き>



(注1) シャドーは前回会合。

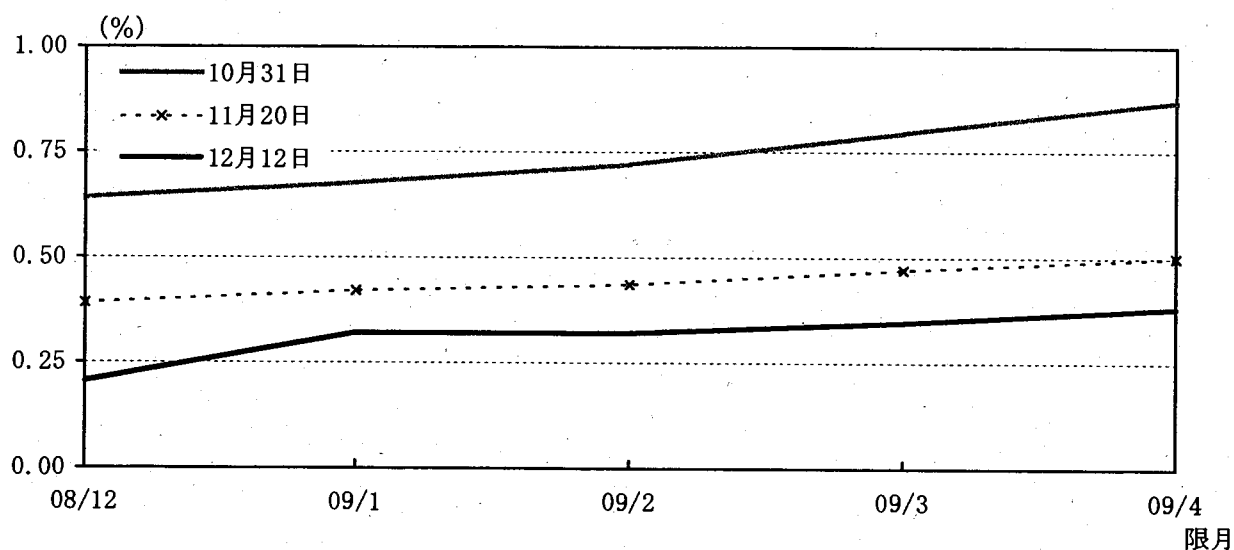
(注2) 社債金利は、BloombergがMoody's、S&Pの格付けを基に合成したBBBを使用。
因みに、BloombergのBBBは、Moody'sのBaa2、S&PのBBBに対応。

(出所) Bloomberg

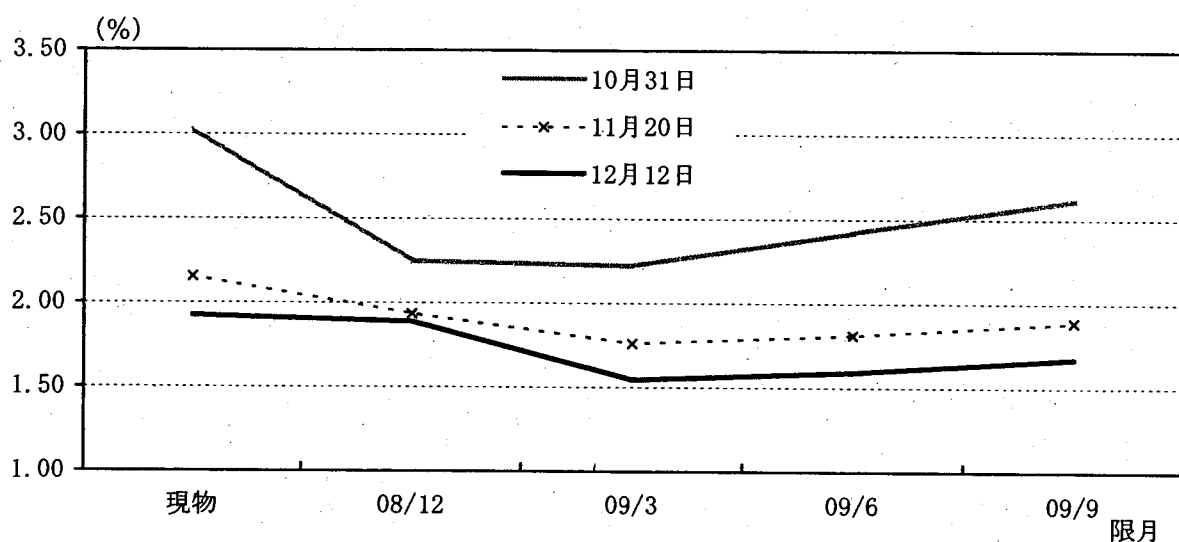
いずれも直近は12月12日

先行きの金利観 (米国)

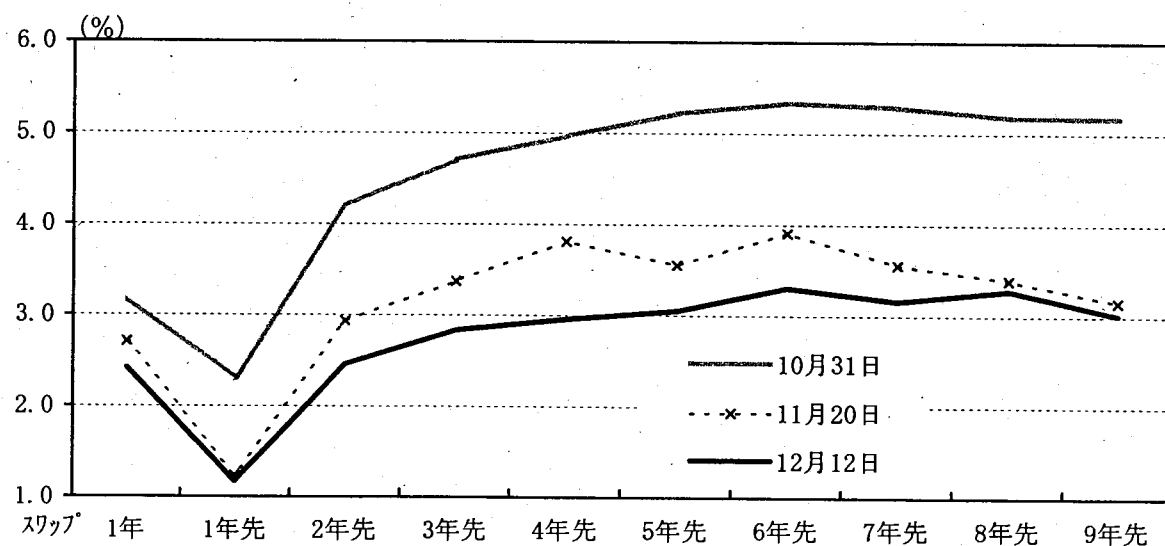
(1) FF先物金利



(2) ユーロドル先物金利 (3か月物)



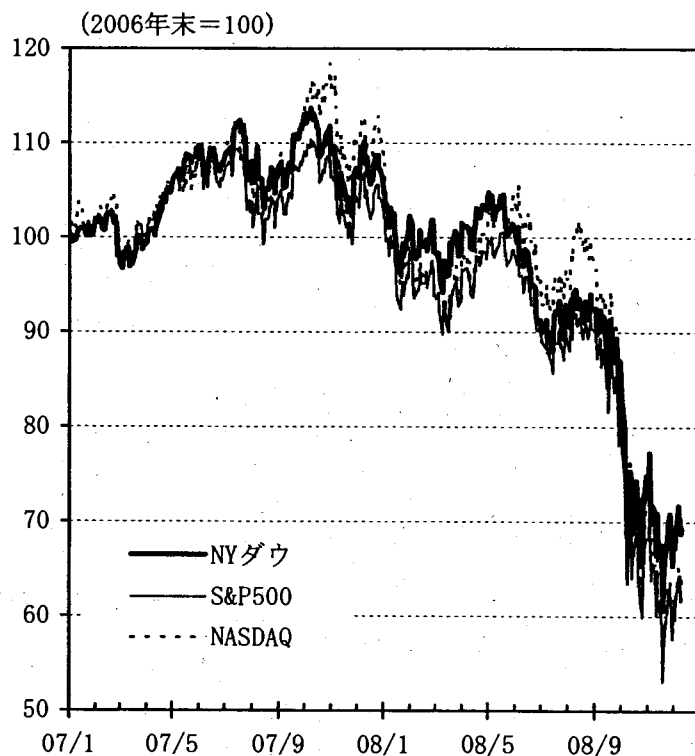
(3) インプライド・フォワード・レート (米ドル・スワップ、1年物)



(出所) Bloomberg

株価 (米国)

(1) 株価 (NYダウ・S&P500・NASDAQ)



<最近の動き>

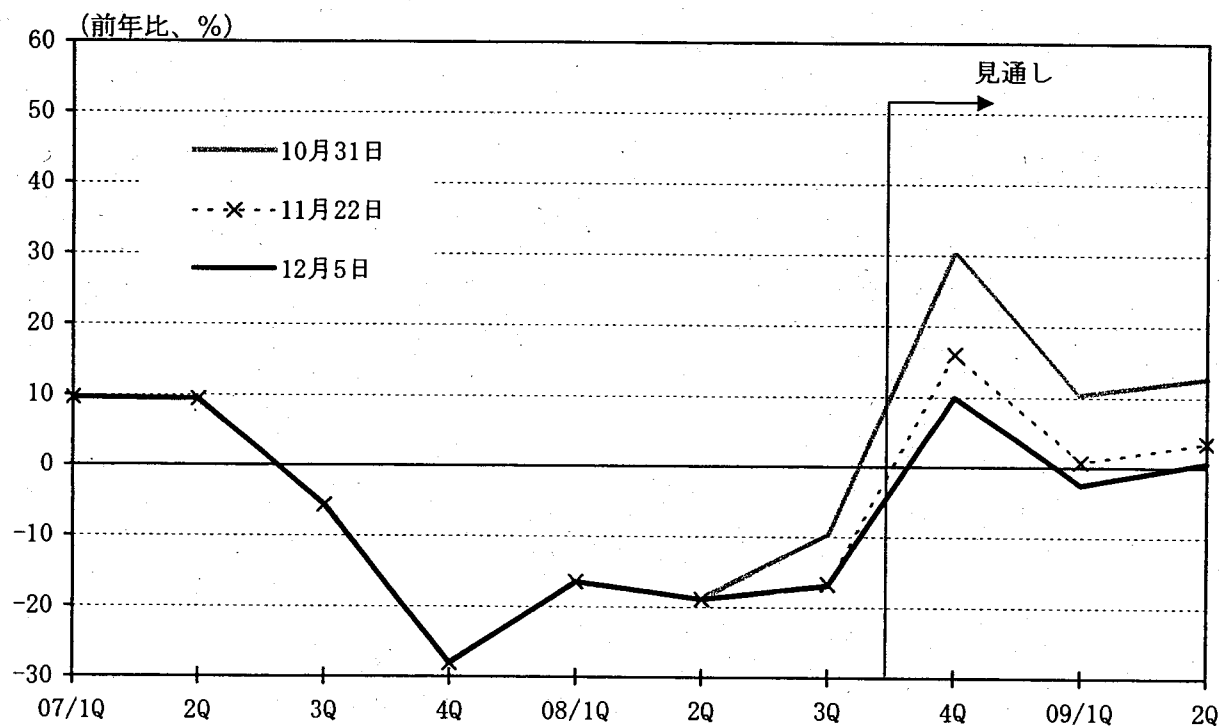


(注) シャドーは前回会合。

(出所) Bloomberg

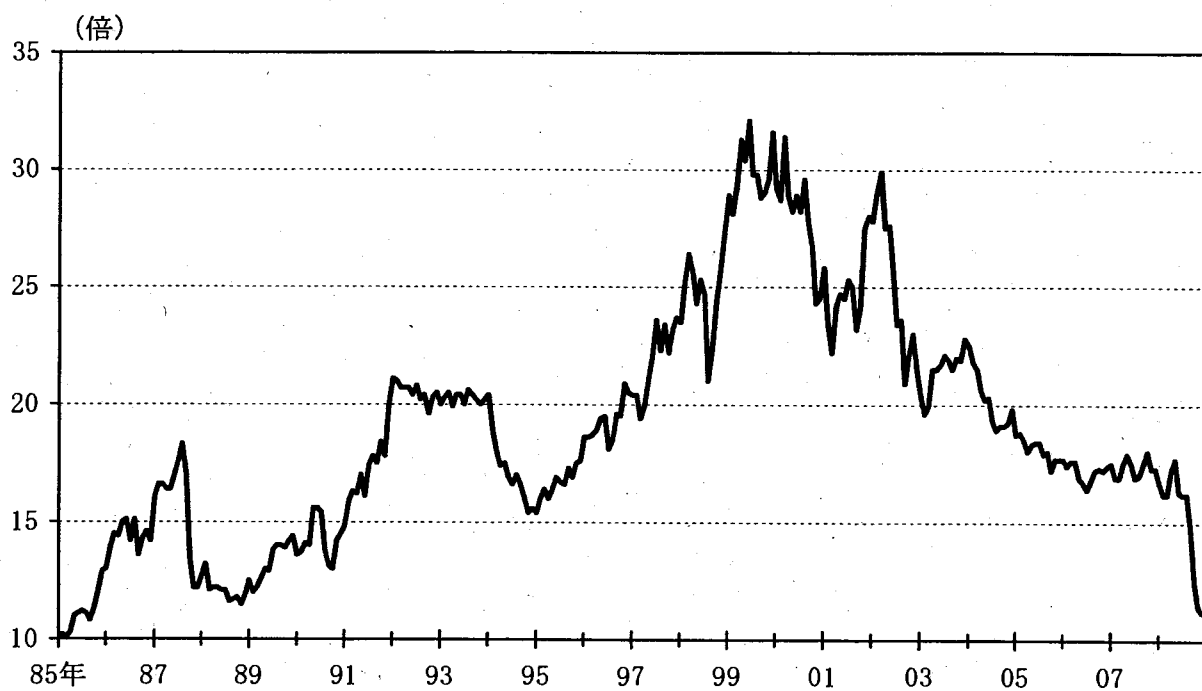
いずれも直近は12月12日

(2) アナリストのEPS (一株当たり利益) 成長率見通し (S&P500社ベース)



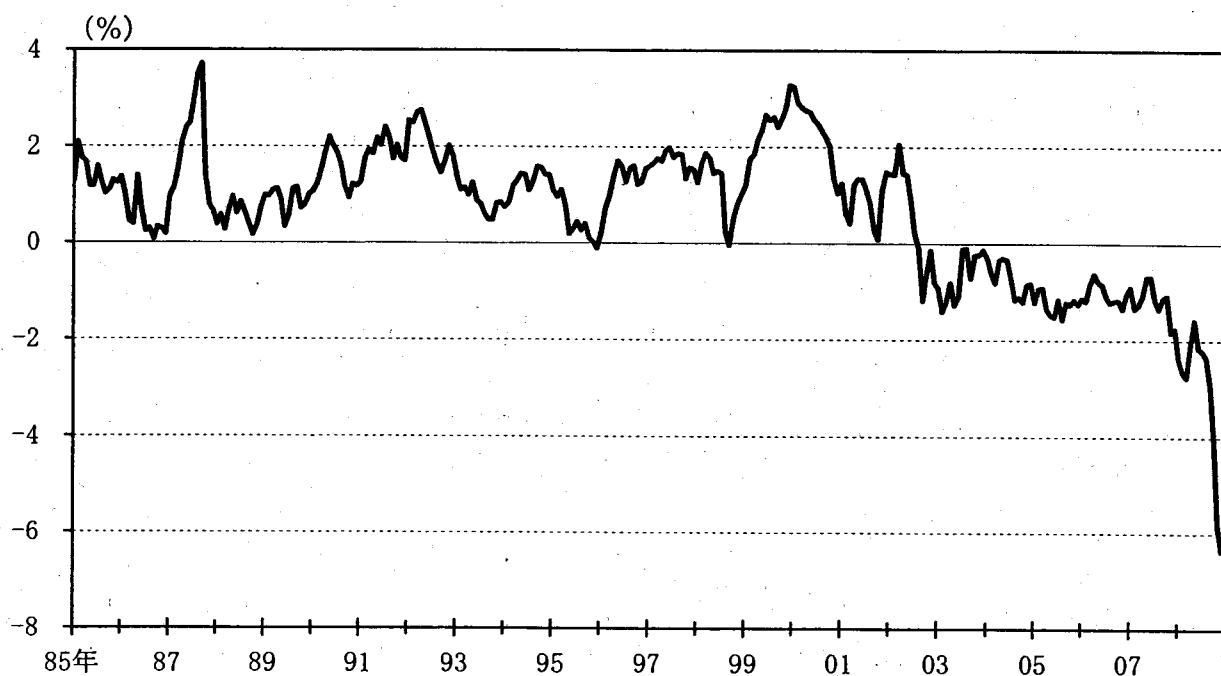
(出所) Thomson Financial I/B/E/S

(3) 株価収益率 (PER、S&P500)



(注) 株価収益率 (PER) = 株価 / 一株当たり利益 (EPS)。
S&P500実績利益ベース。

(4) イールド・スプレッド (S&P500ベース)



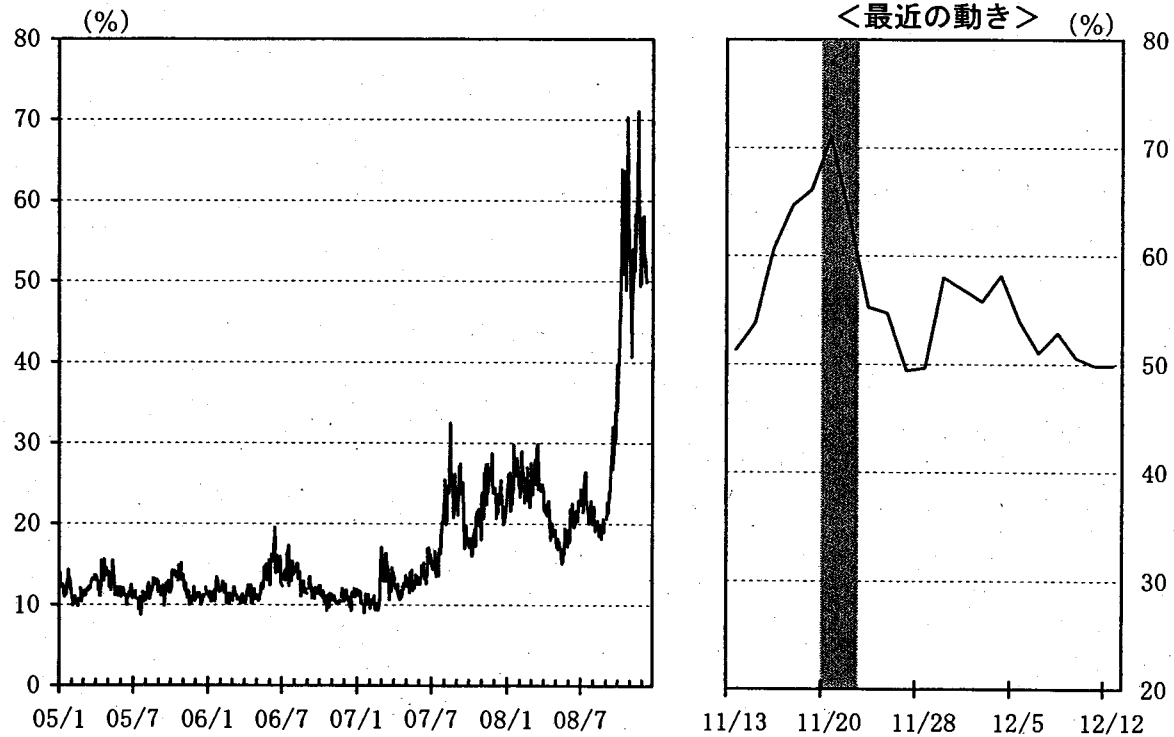
(注) イールド・スプレッド = 国債10年物利回り - 株式益回り (=1/PER)。

(出所) Datastream

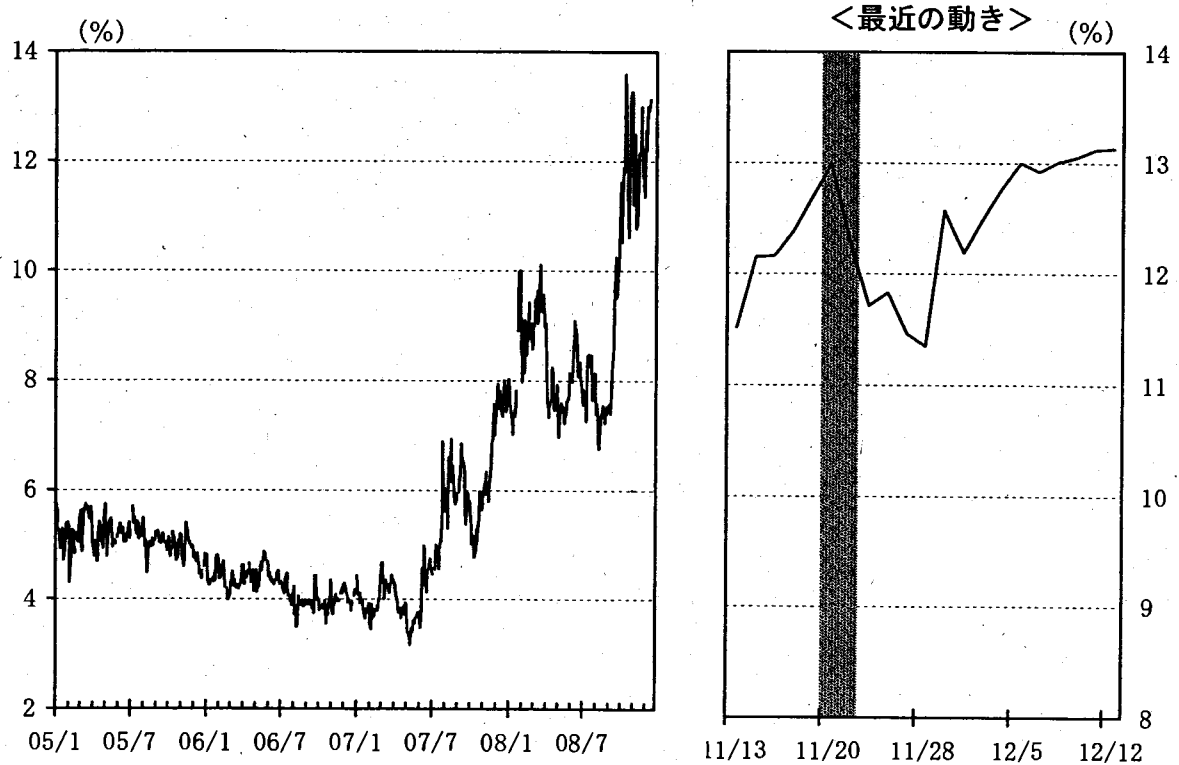
いずれも直近は12月12日

金融市場のリスク関連指標（米国）

(1) 株価オプションのインプライド・ボラティリティ (S&P500)



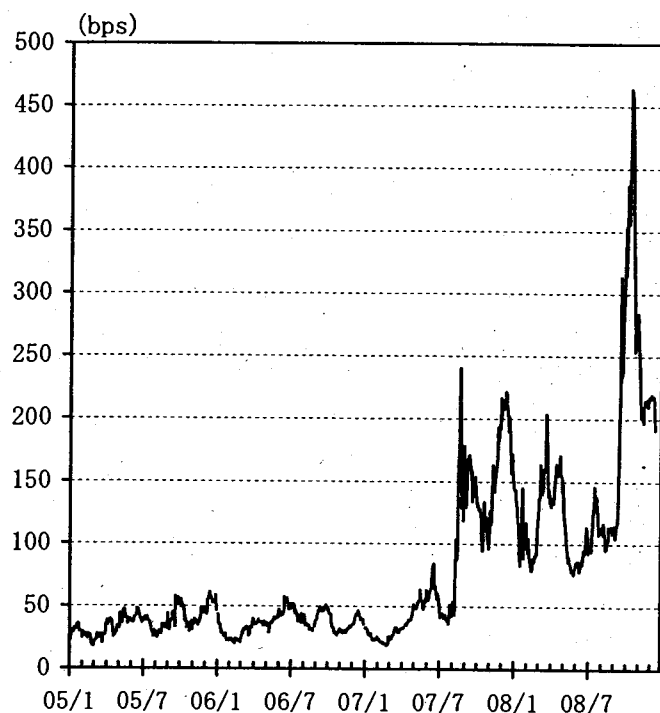
(2) 米国債先物オプションのインプライド・ボラティリティ



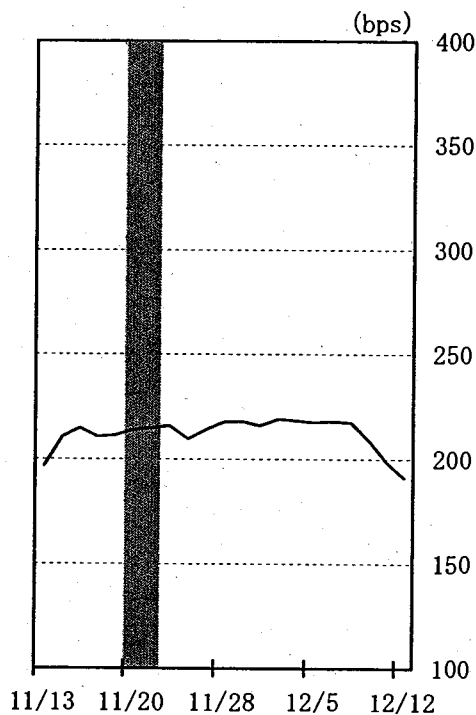
（出所） Bloomberg

いずれも直近は12月12日

(3) TEDスプレッド

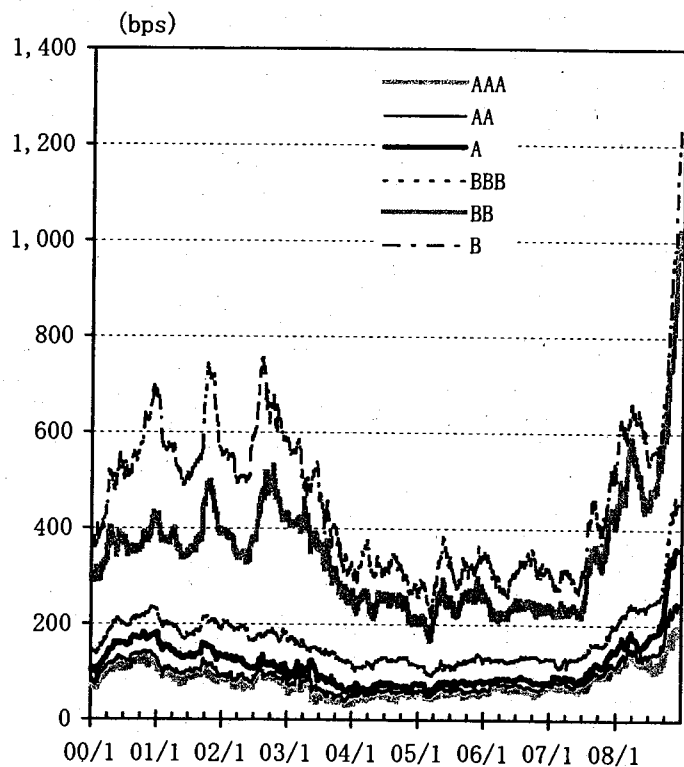


<最近の動き>

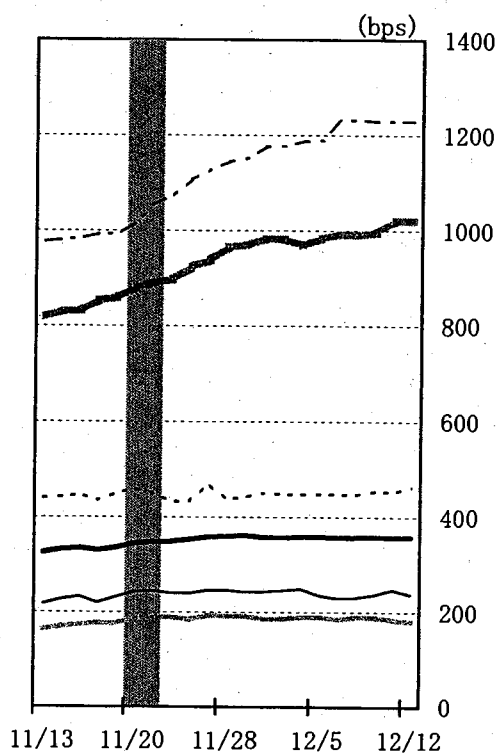


(注) ユーロドル3か月物-TB3か月物。

(4) 米国社債の対国債スプレッド (10年物)



<最近の動き>



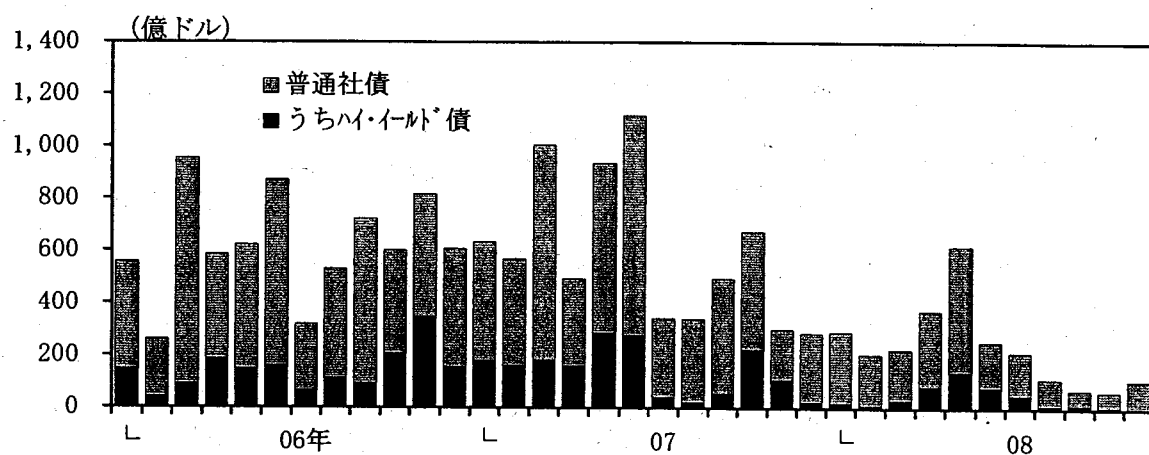
(注) 社債金利は、BloombergがMoody's、S&Pの格付けを基に合成。例えば、AAはMoody'sのAa2、S&PのAAに対応。

(出所) Bloomberg

いずれも直近は12月12日

企業の資金調達(米国)

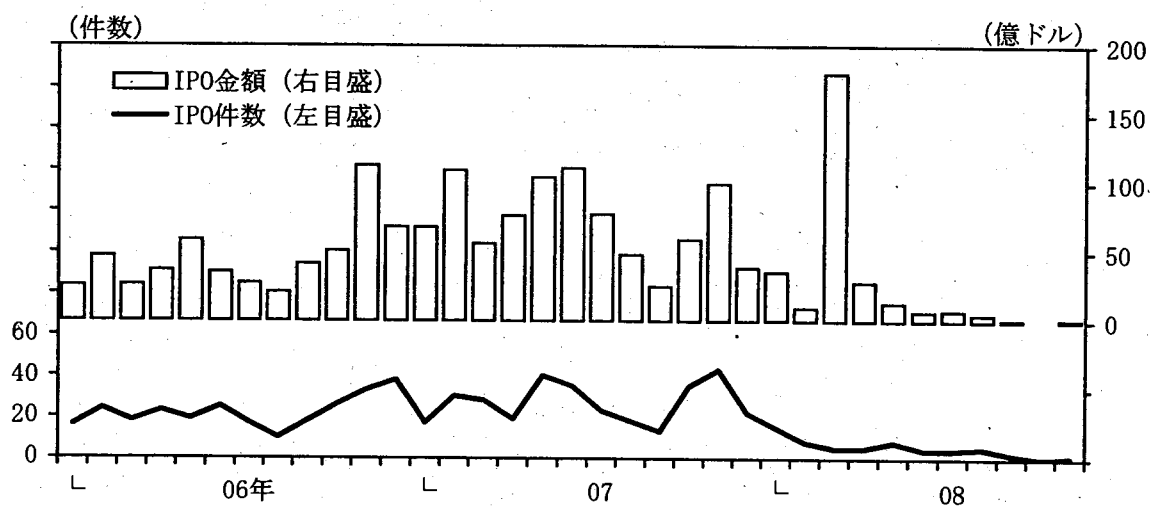
(1) 社債発行額(普通社債)



(出所) Thomson Financial

直近は11月

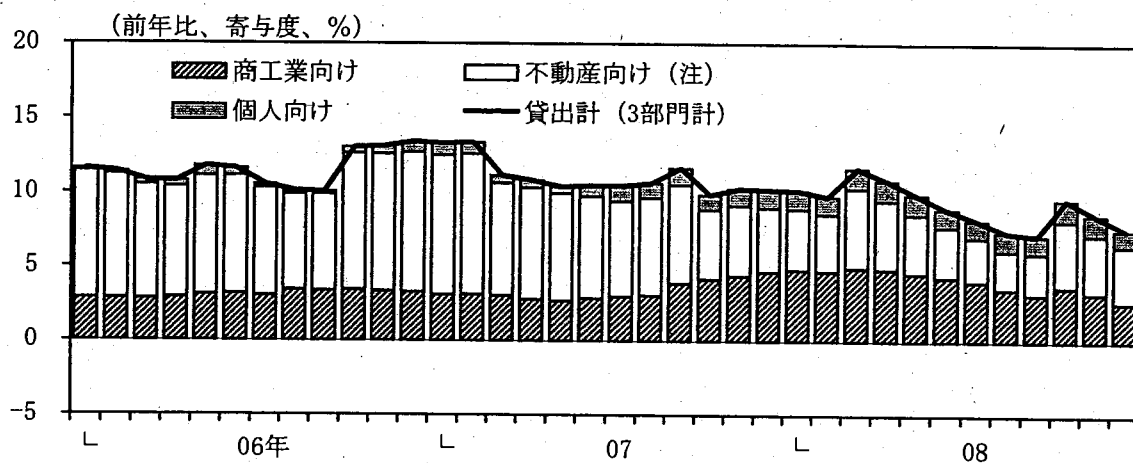
(2) IPO金額・件数



(出所) Bloomberg

直近は11月

(3) 銀行貸出



(注) 商銀+外銀ベース。不動産向けはホームエクイティ・ローンを含む。

貸出計は、商工業、不動産、個人の3部門向け貸出の合計。「その他」(レポ取引等)は含まない。

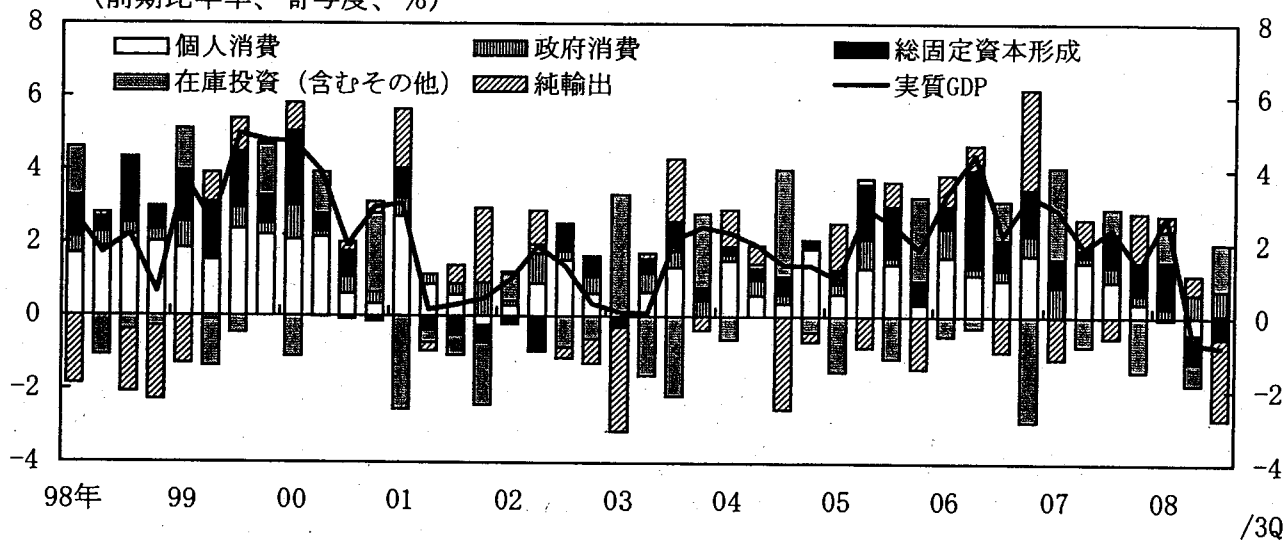
(出所) FRB

直近は12月3日週

欧州の実体経済

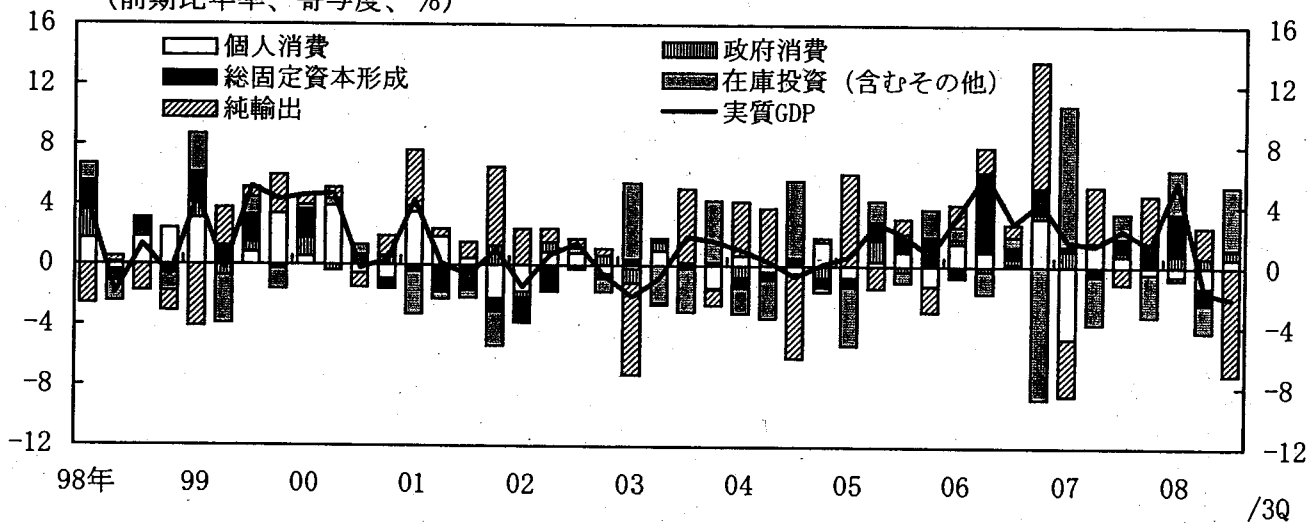
(1) ユーロエリアの実質GDP成長率

(前期比年率、寄与度、%)



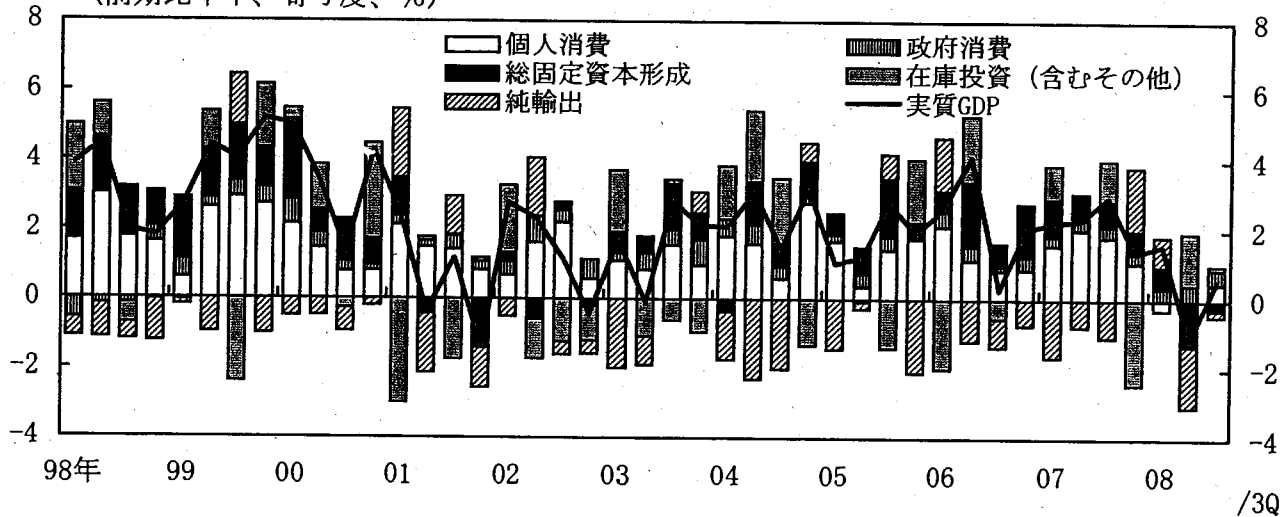
(2) ドイツの実質GDP成長率

(前期比年率、寄与度、%)



(3) フランスの実質GDP成長率

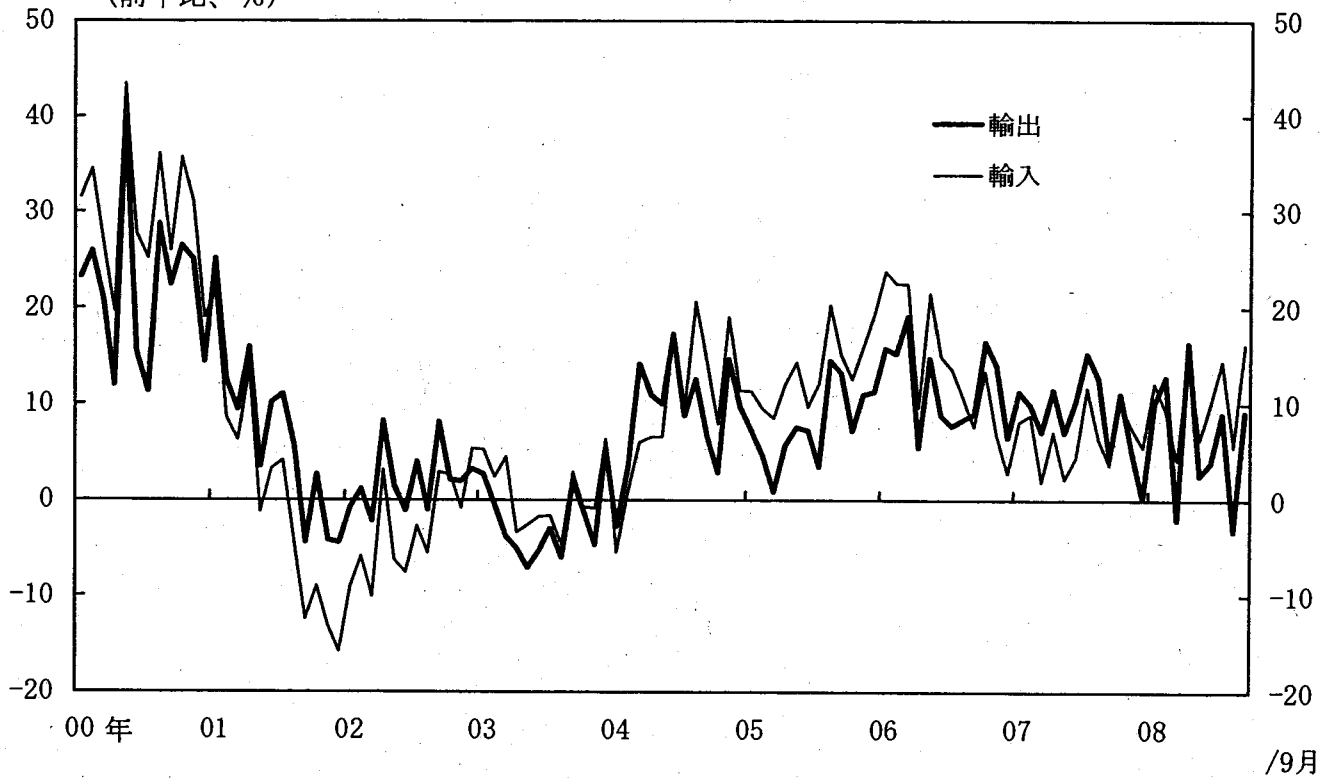
(前期比年率、寄与度、%)



(図表 6-2)

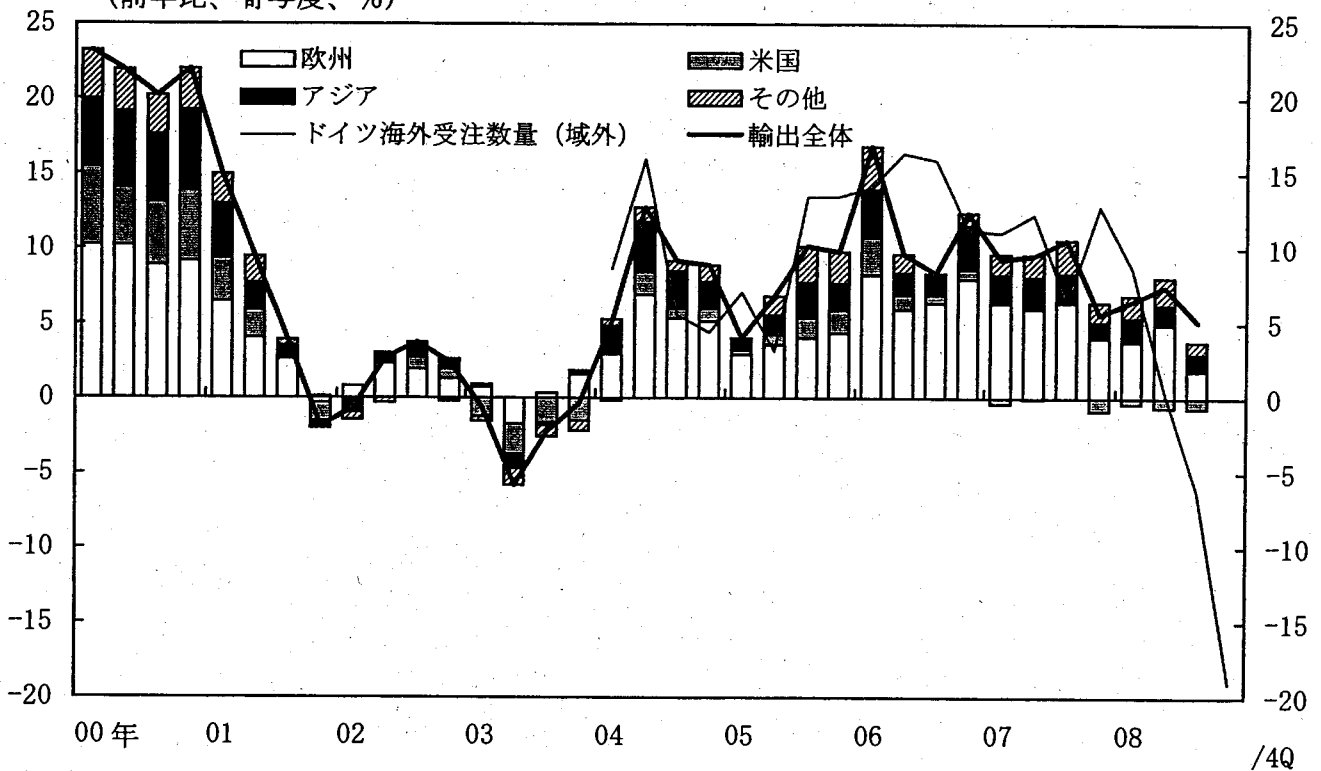
(4) ユーロエリアの域外貿易

(前年比、%)



(5) ユーロエリア域外輸出（地域別寄与度）とドイツ海外受注数量（域外）

(前年比、寄与度、%)



(注1) 欧州はトルコ、ロシアなど、アジアは中東などを含む。

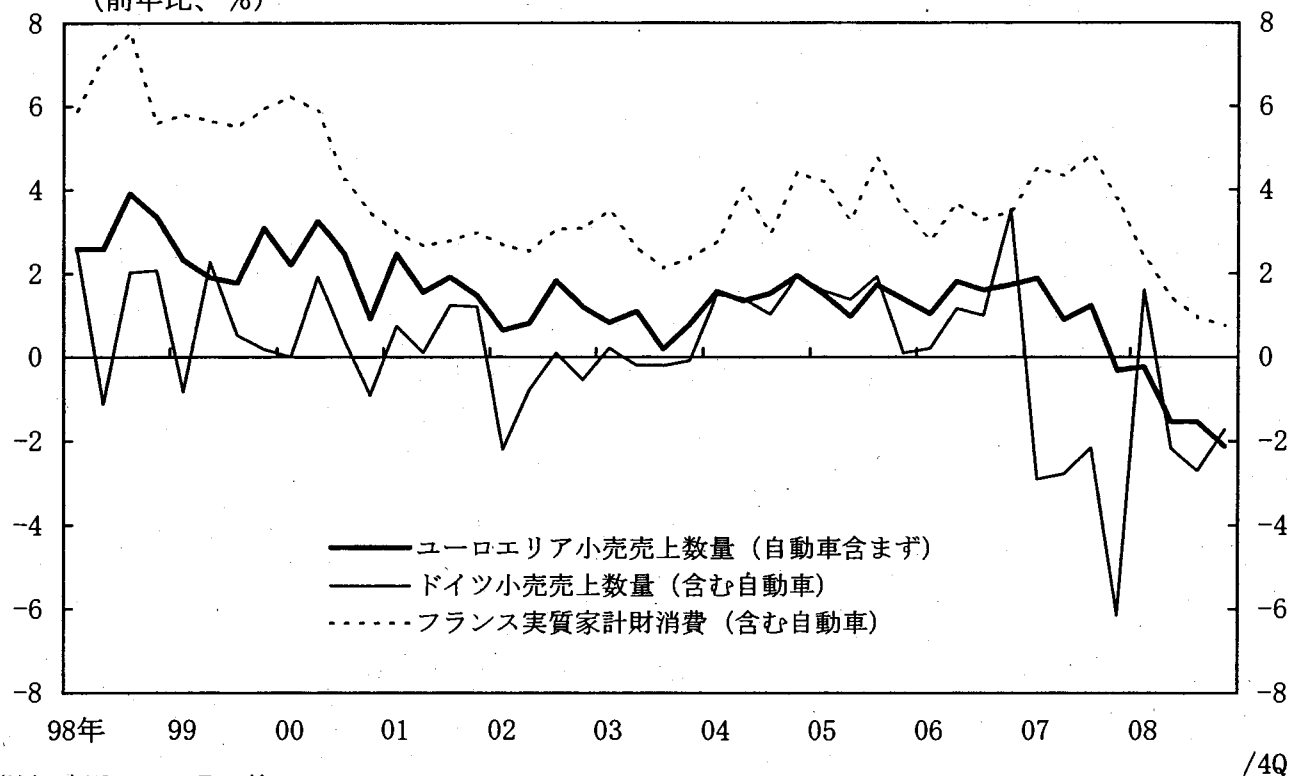
(注2) ドイツ海外受注数量の直近4Qは10月の値。

輸出全体の直近3Qは7-9月の値。輸出の地域別寄与度は7-8月の値であり、積み上げと全体が一致しない。

(図表6-3)

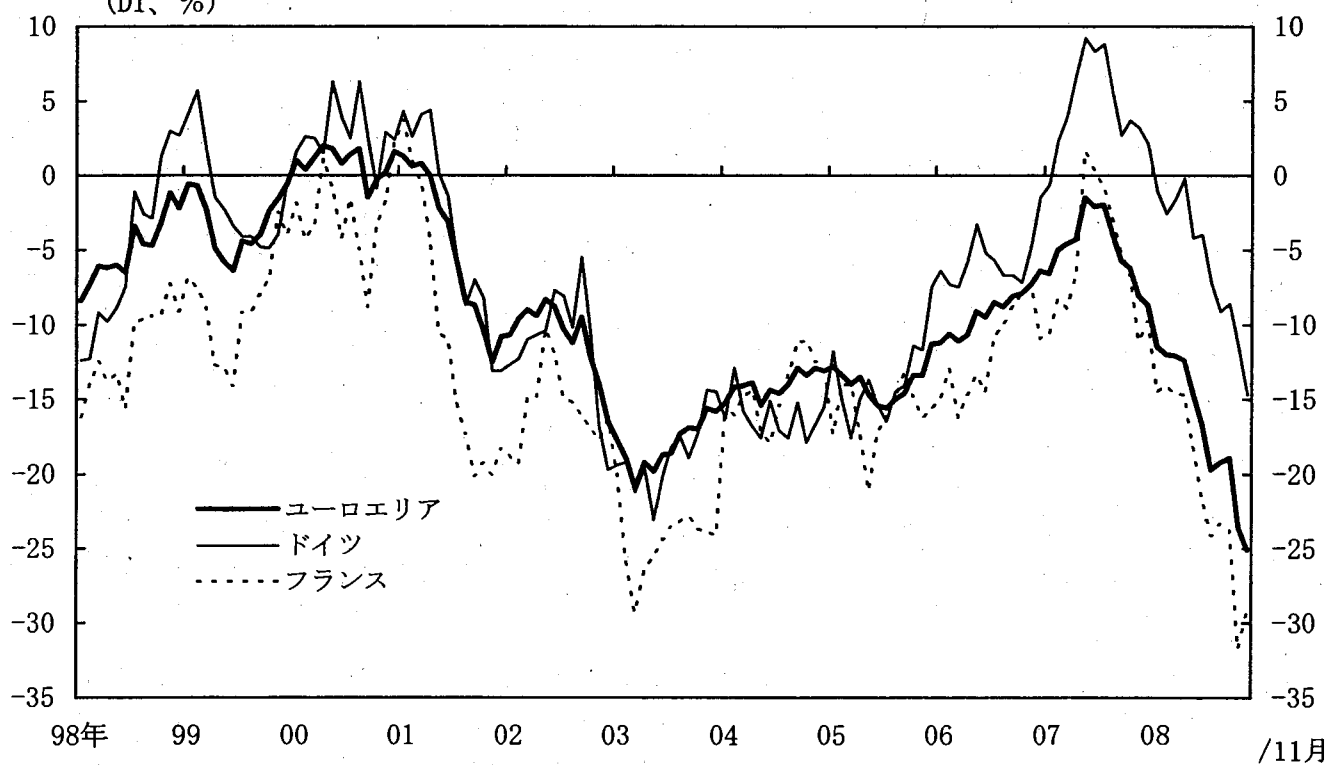
(6) 小売関連指標

(前年比、%)



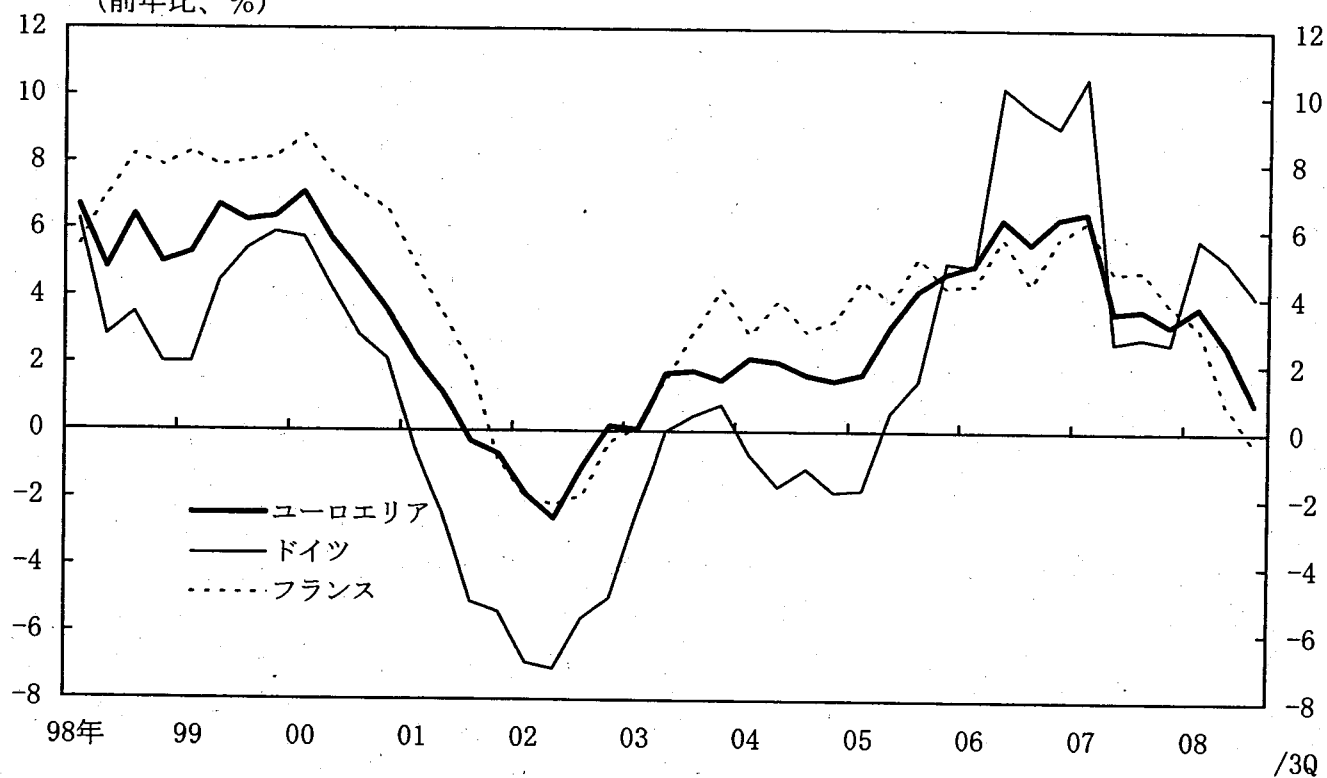
(7) 消費者コンフィデンス

(DI、%)



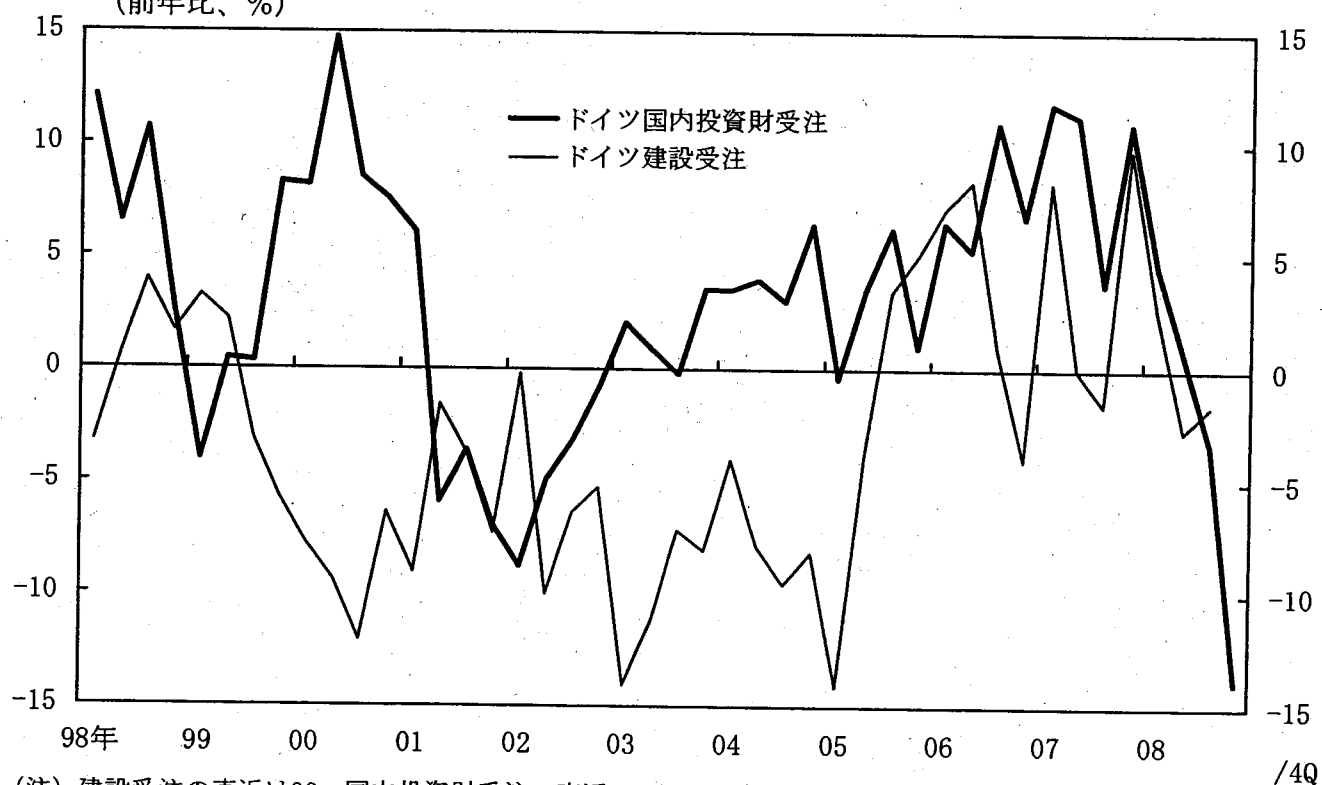
(8) 総固定資本形成

(前年比、%)



(9) ドイツの国内投資財受注、建設受注

(前年比、%)

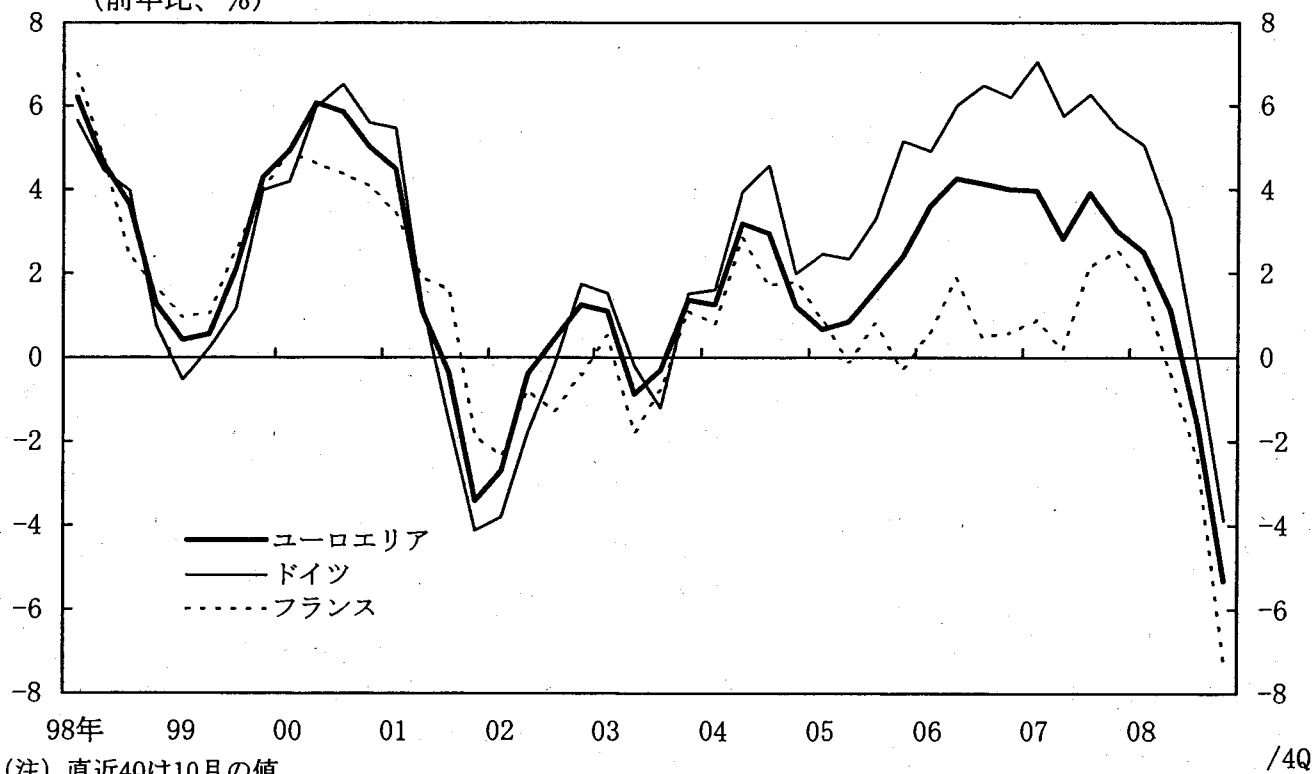


(注) 建設受注の直近は3Q、国内投資財受注の直近4Qは10月の値。

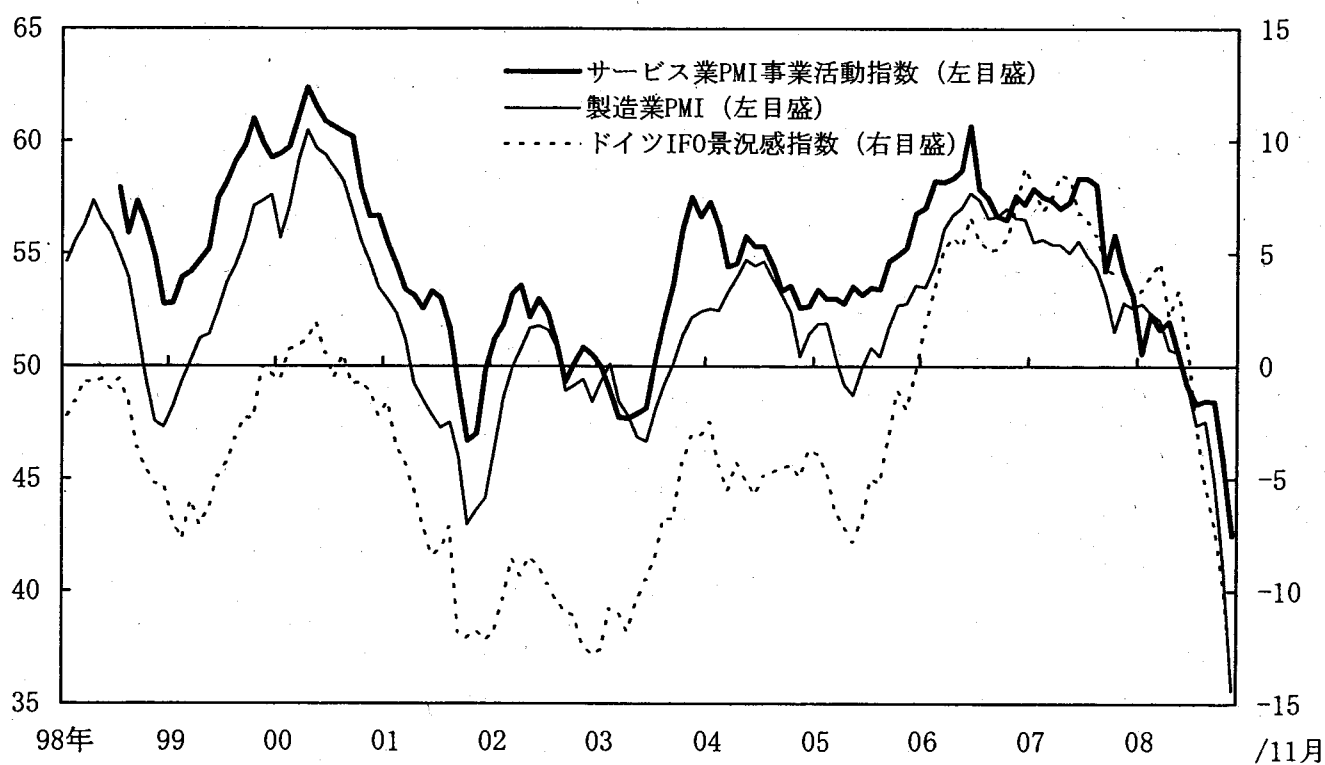
(図表 6-5)

(10) 鉱工業生産

(前年比、%)

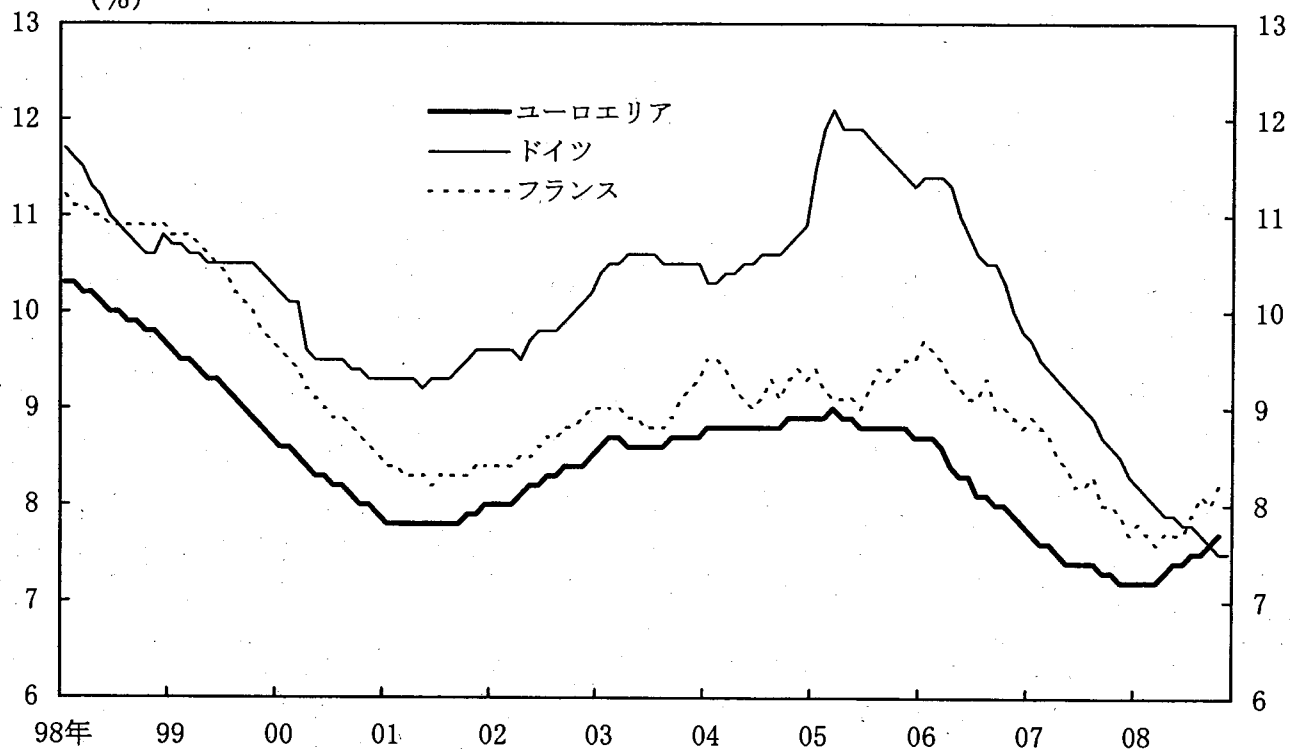


(11) PMI (購買担当者指数) と企業コンフィデンス



(12) 失業率

(%)

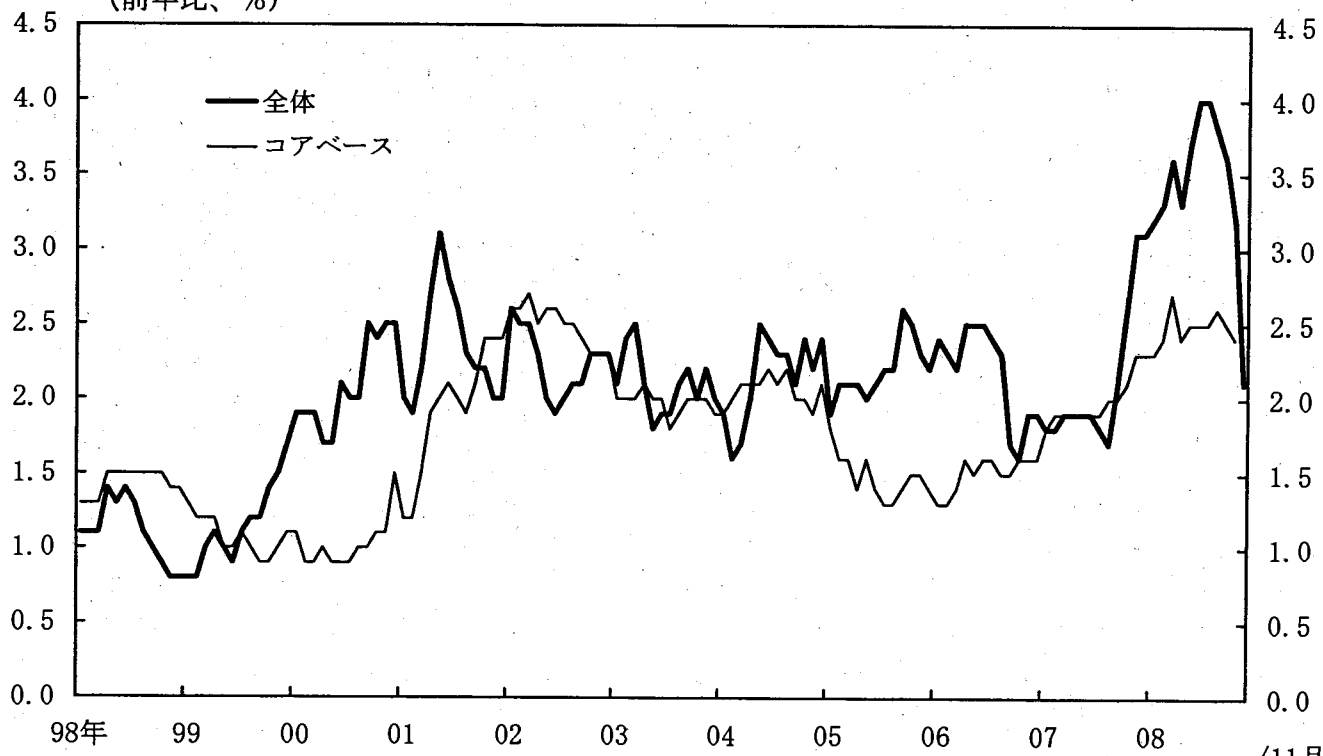


(注) ユーロエリアとフランスの直近は10月。

/11月

(13) 消費者物価 (HICP)

(前年比、%)



(注1) コアベースは、除くエネルギー、非加工食料品。

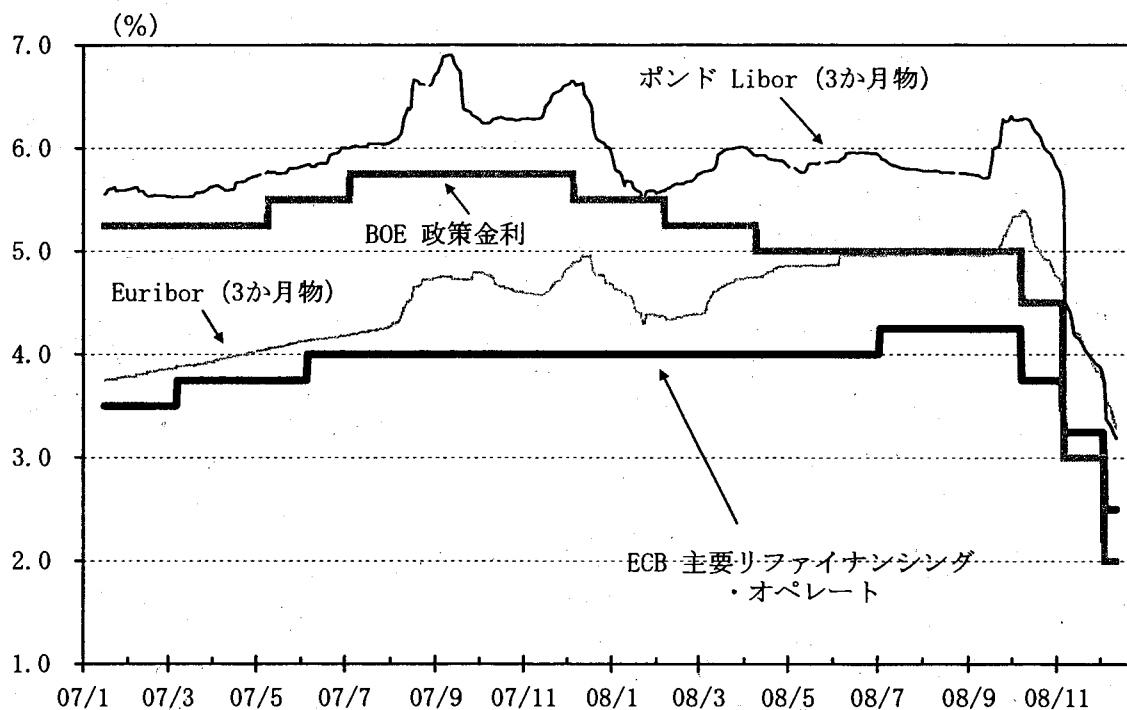
(注2) コアベースの直近は10月。なお、11月の全体は速報値。

/11月

欧州の金融市場

金利 (欧州)

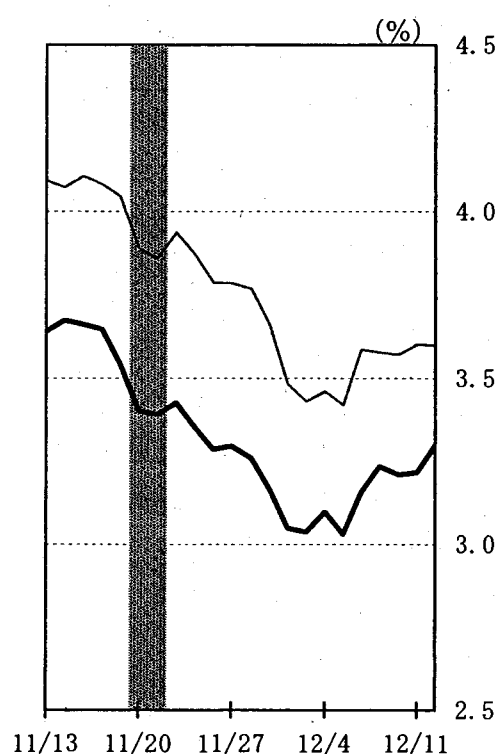
(1) 政策金利・短期金利 (ユーロエリア・英)



(2) 長期金利 (10年物国債利回り、独・英)



<最近の動き>



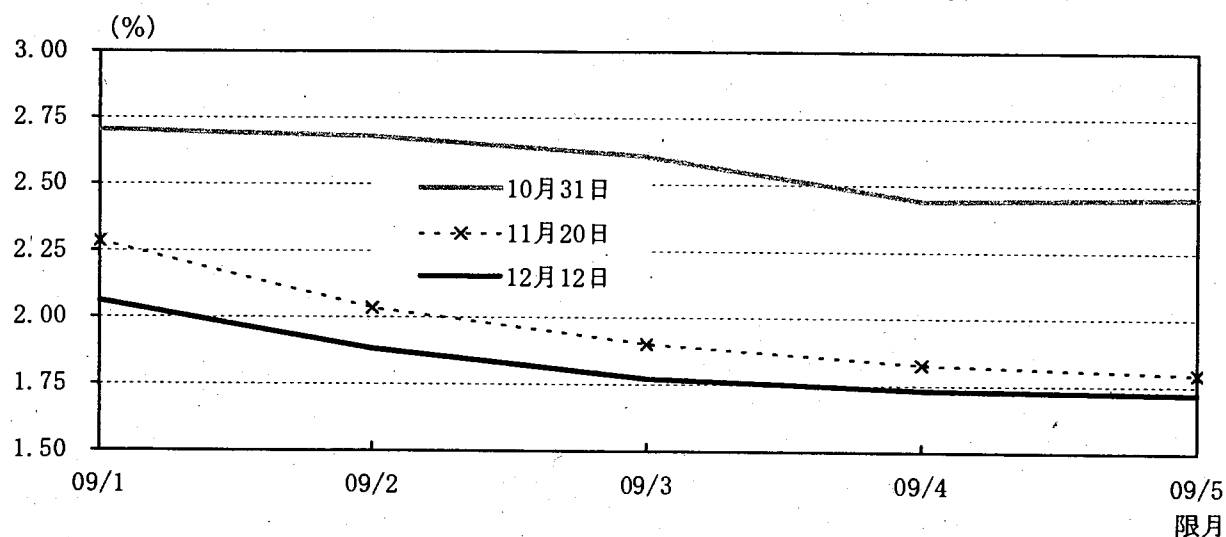
(注) シャドーは前回会合。

(出所) Bloomberg

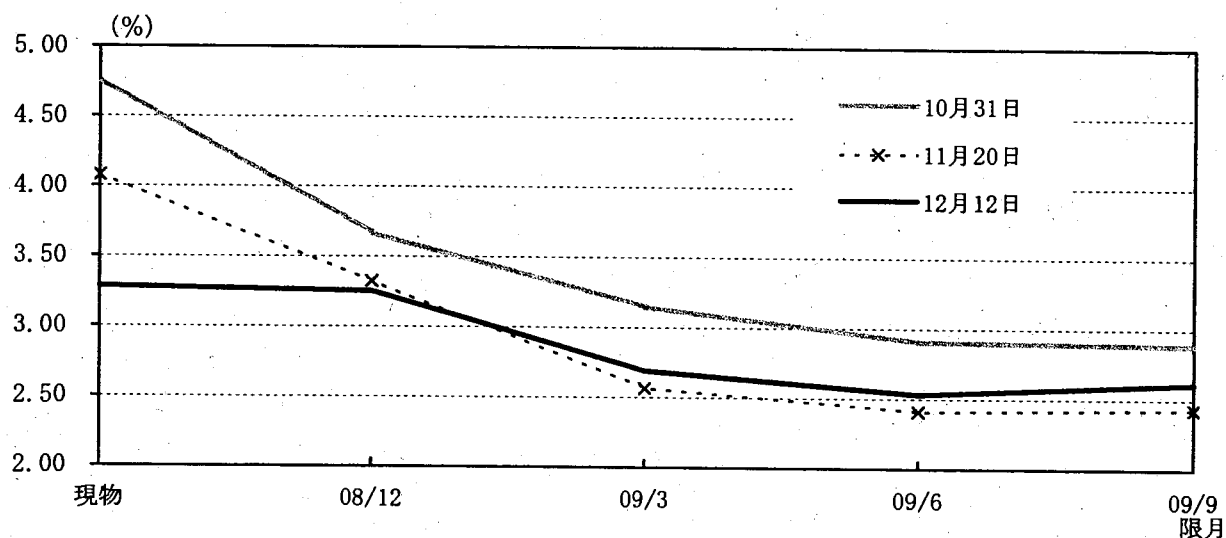
いずれも直近は12月12日

先行きの金利観 (ユーロエリア)

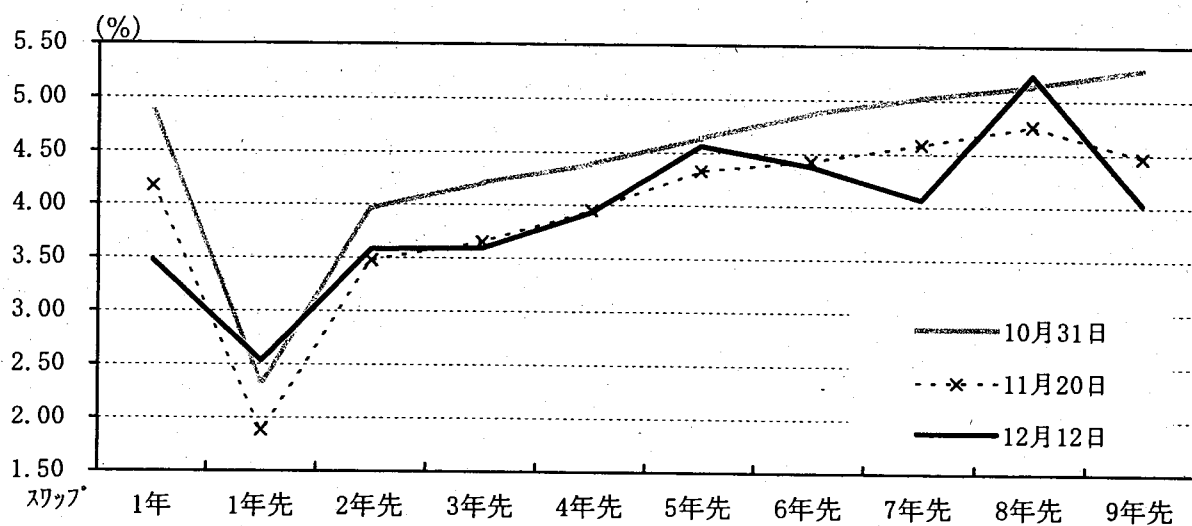
(1) EONIAスワップのインプライド・フォワード・レート (1か月物)



(2) Euribor先物金利 (3か月物)



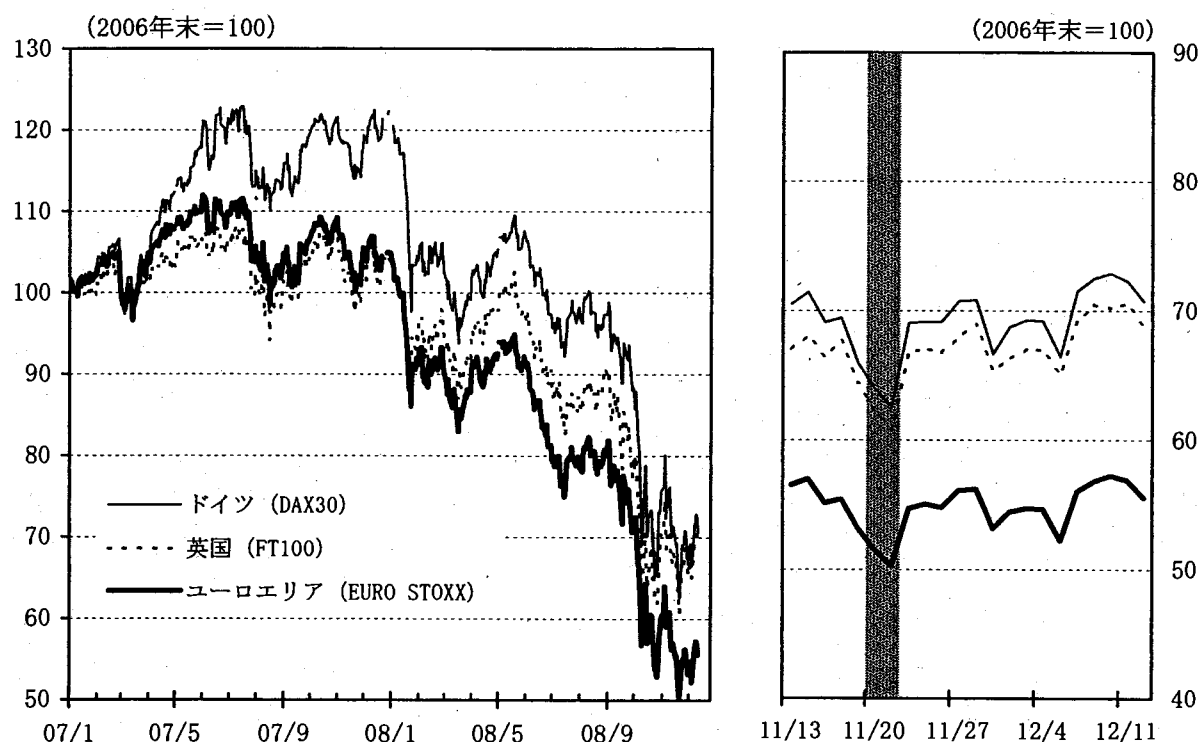
(3) インプライド・フォワード・レート (ユーロ・スワップ、1年物)



(出所) Bloomberg

株価 (欧州)

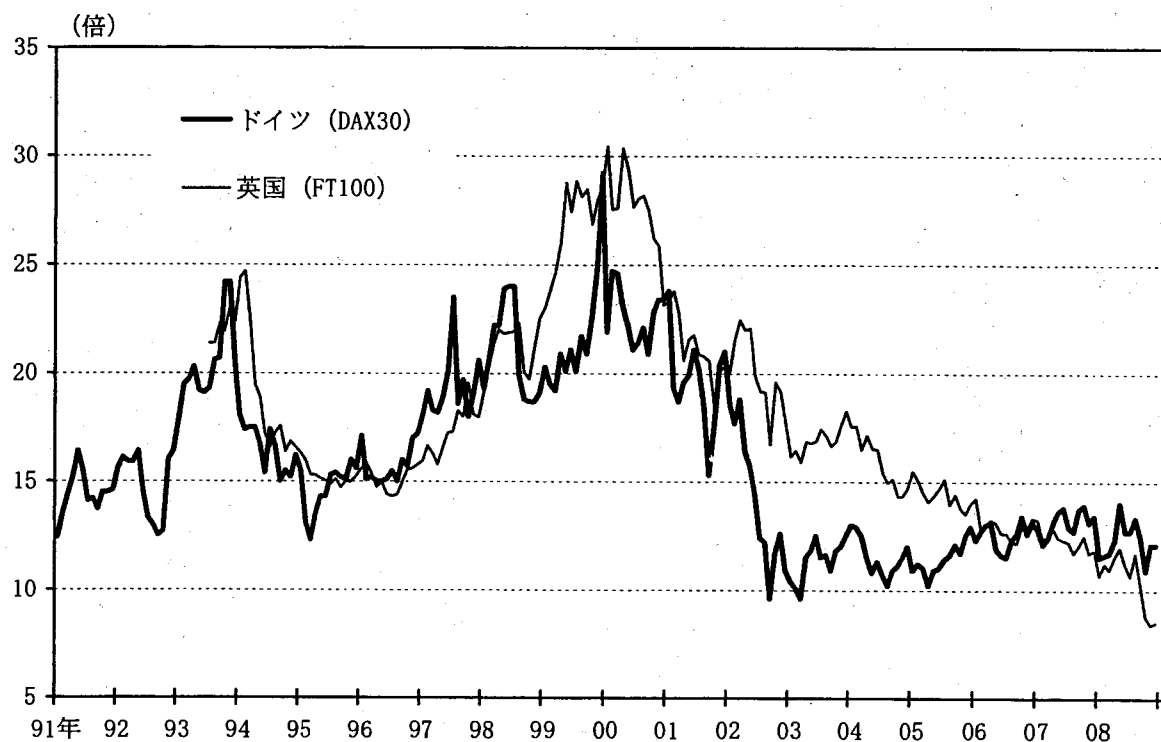
(1) 株価 (ユーロエリア・独・英)



(注) シャドーは前回会合。

(出所) Bloomberg

(2) 株価収益率 (PER、DAX30・FT100)



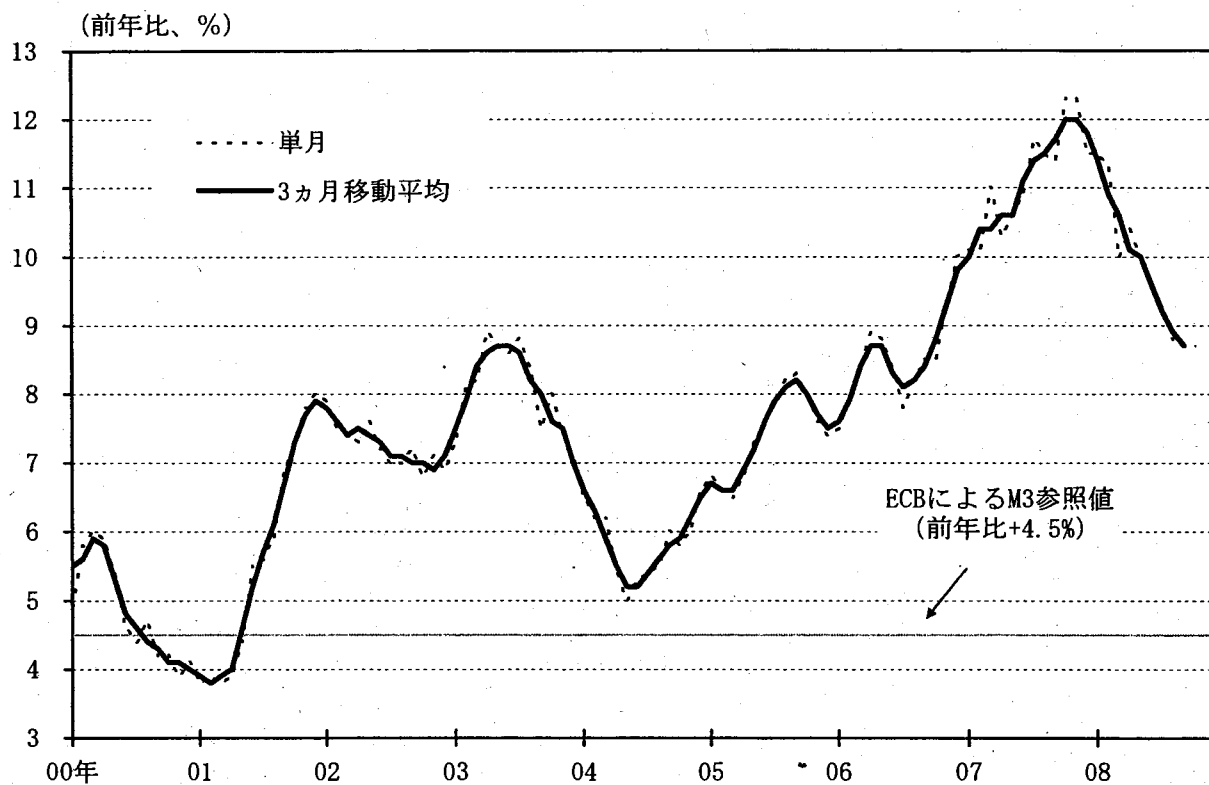
(注) DAX30のPERは予想収益ベース、FT100のPERは実績収益ベース。

(出所) Datastream

いずれも直近は12月12日

M3・貸出 (ユーロエリア)

(1) M3伸び率



(2) 対民間貸出伸び率

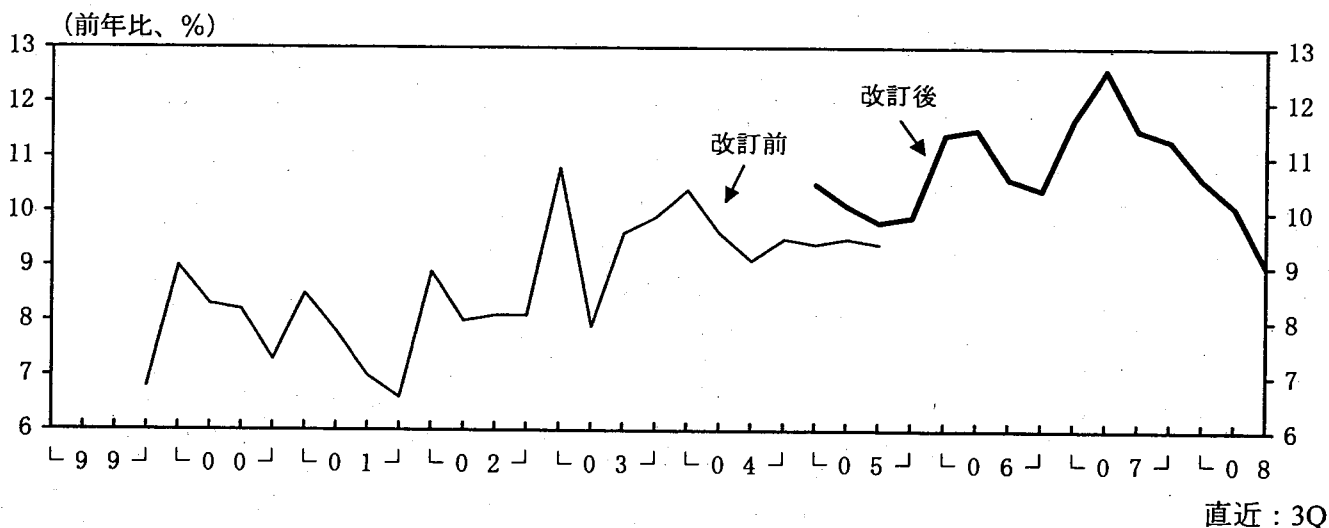


(出所) ECB

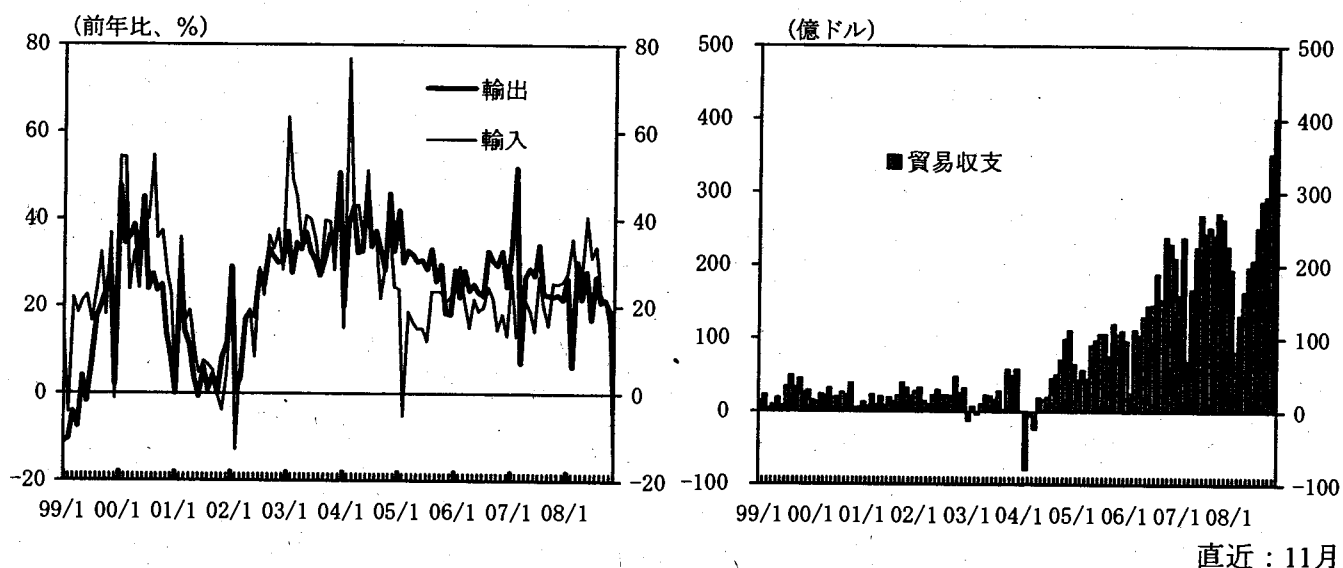
いずれも直近は10月

アジア諸国・地域の実体経済 中国 (1)

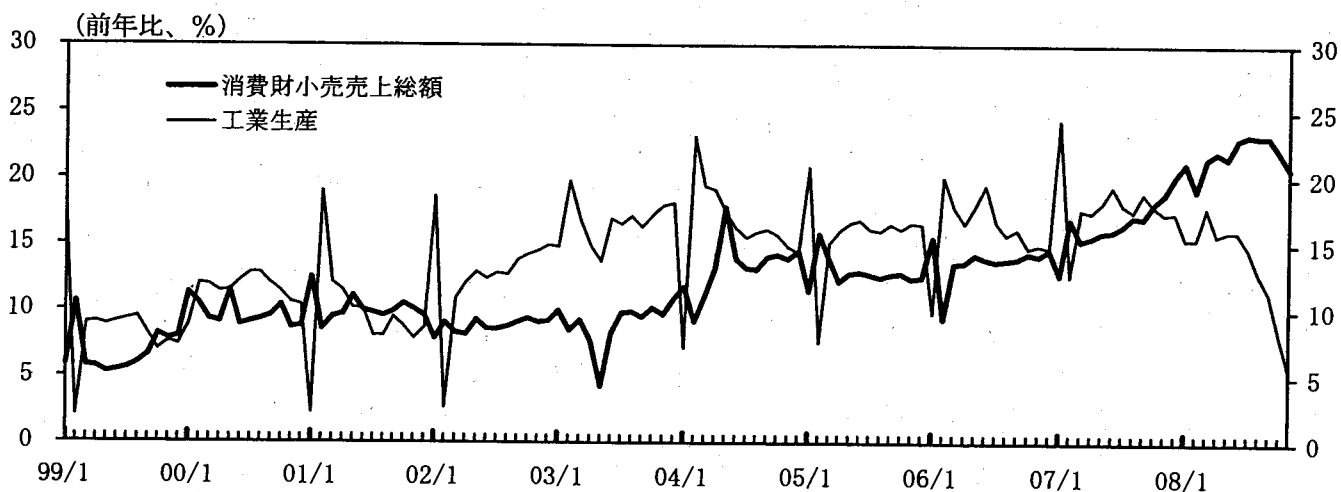
(1) 実質GDP



(2) 貿易



(3) 生産、個人消費



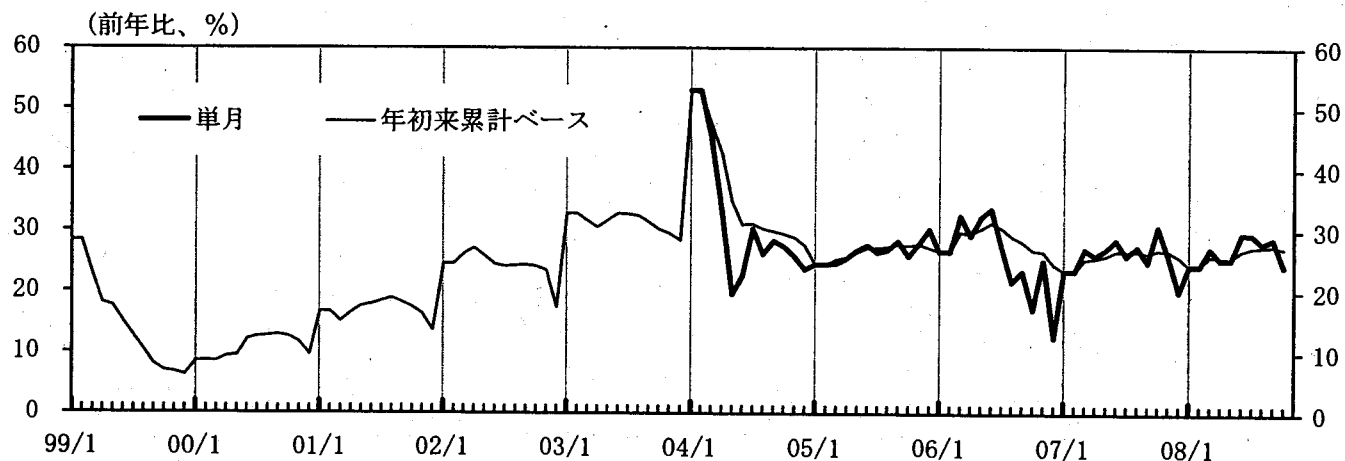
(注1) 1、2月の工業生産が大きく変動しているのは、旧正月要因。

直近：11月

(注2) 工業生産の2007、2008/1月は、中国国家统计局が公表する1-2月累計値の前年比伸び率と2月の前年比伸び率を用いて当局で試算。

中国(2)

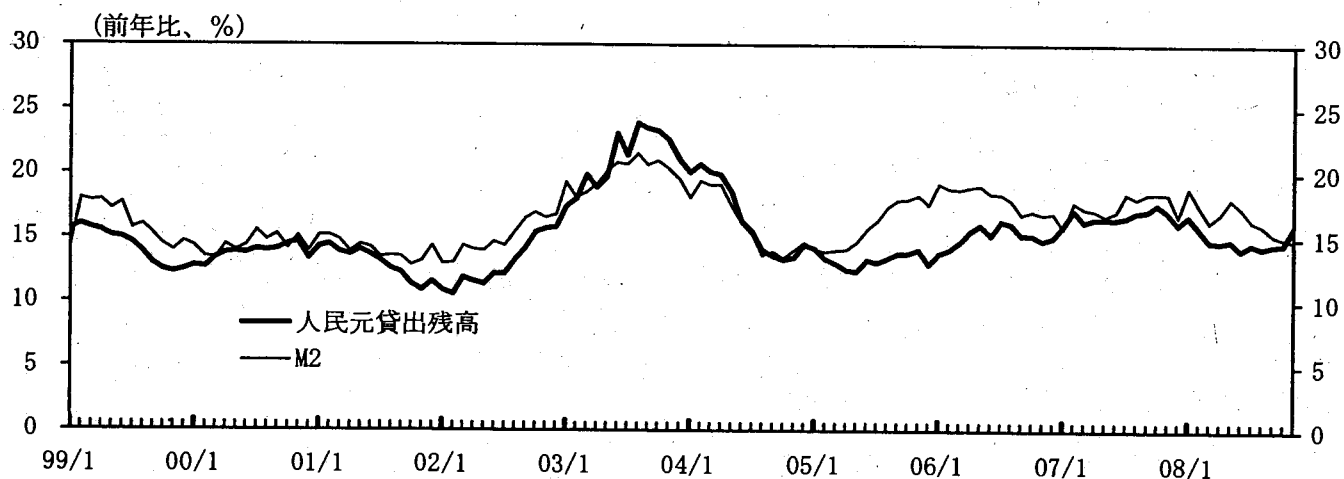
(1) 固定資産投資



直近：10月

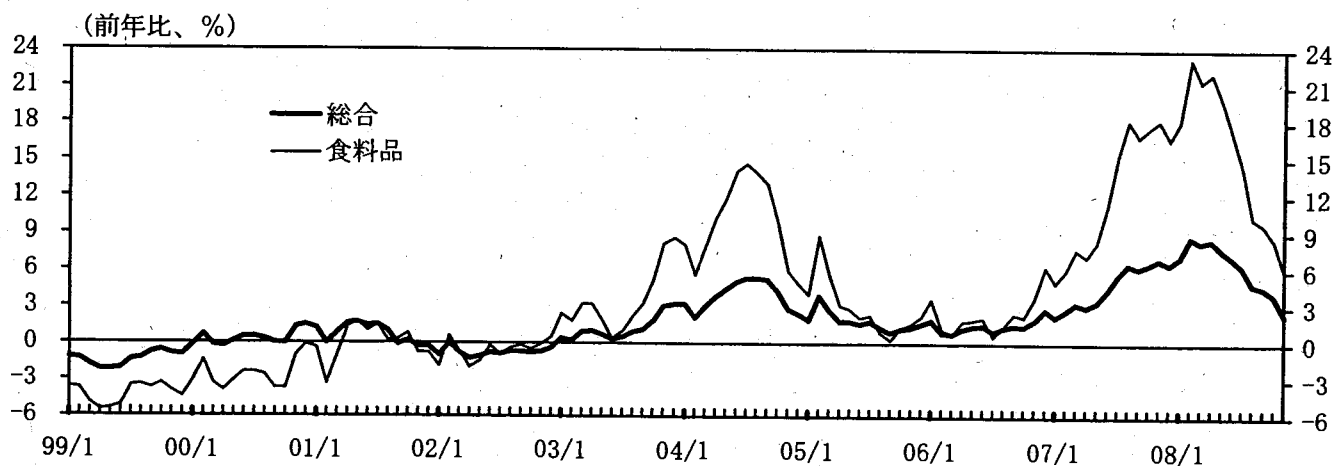
(注) 固定資産投資は、都市部。2003年までは、不動産開発を除き、都市部及び農村部の集団所有制企業と個人による投資を除外している。2004年以降は、都市部における50万元以上の全ての投資、不動産開発投資、都市の鉱工業区における民間住宅建設を含む。なお、1月単月の数値は公表されていないため、1～2月は等速と仮定している。

(2) M2と貸出



直近：11月

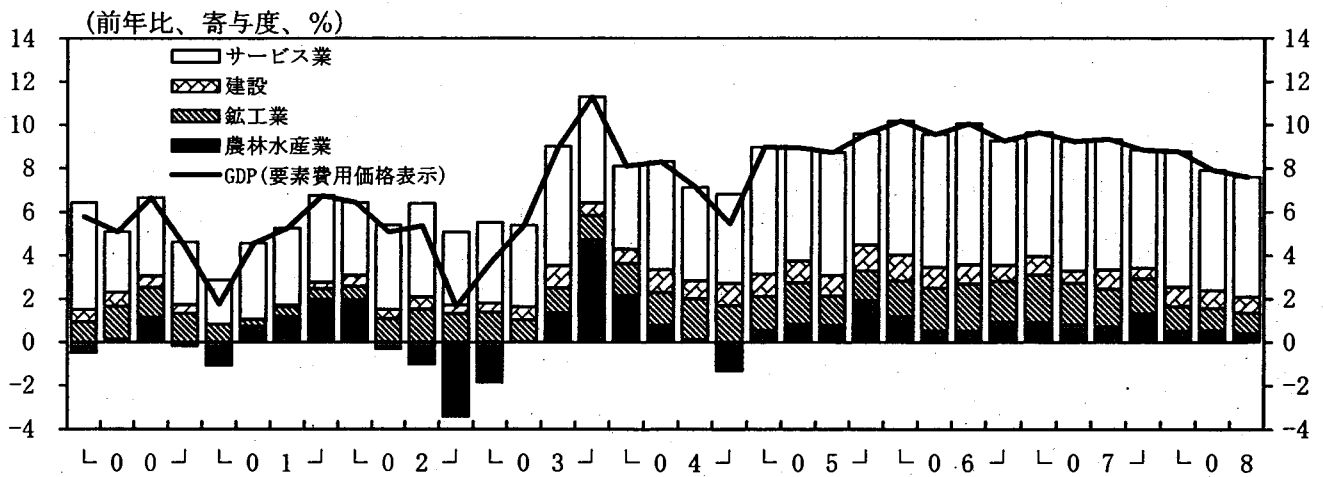
(3) 消費者物価



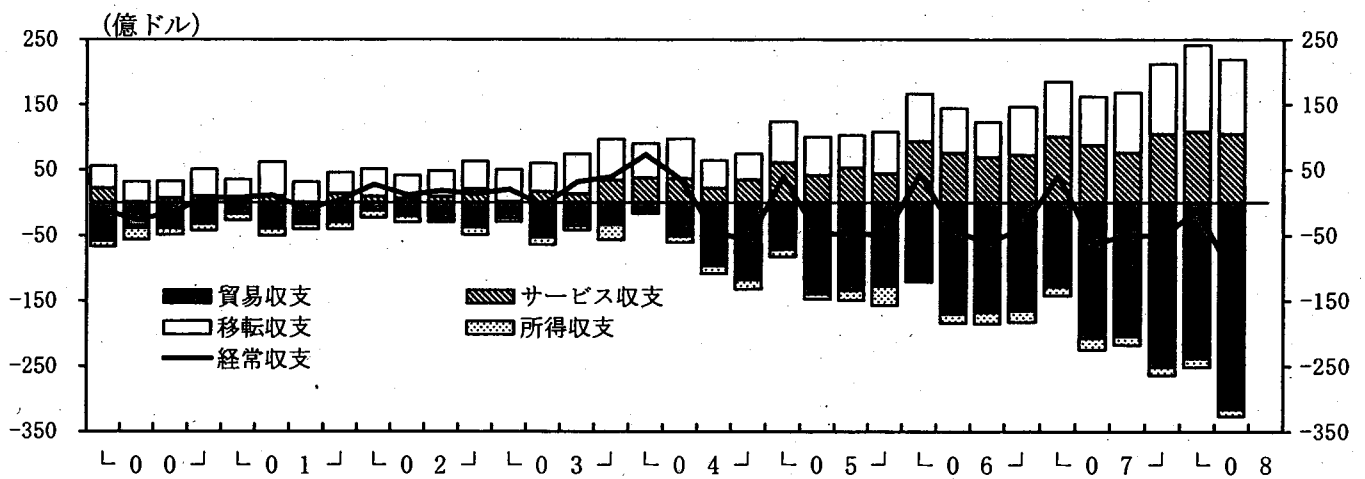
直近：11月

インド

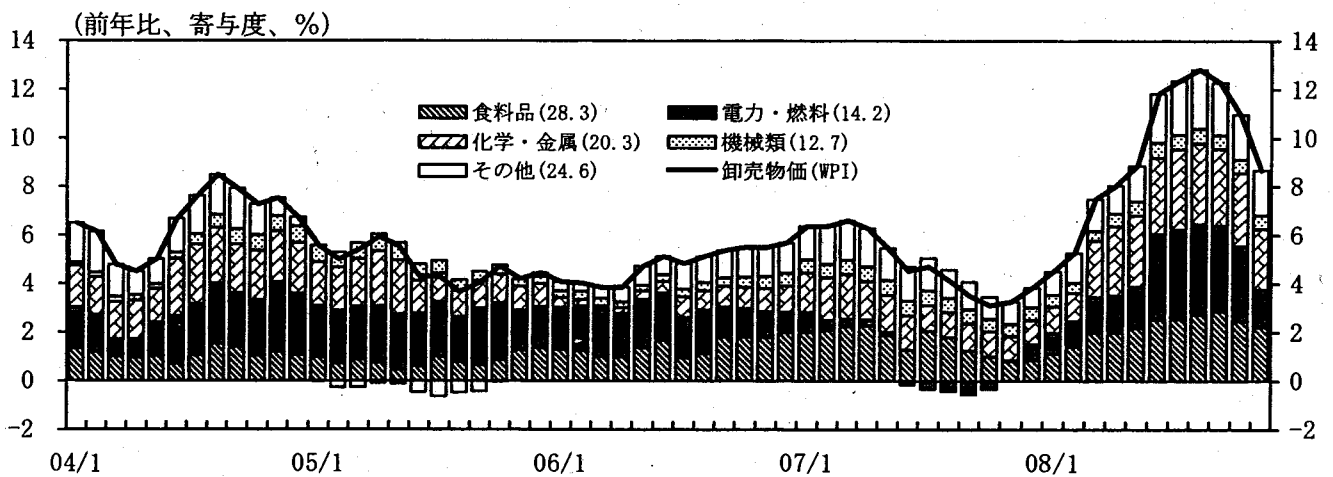
(1) 実質GDP (産業別寄与度)



(2) 経常収支



(3) 卸売物価 (WPI)

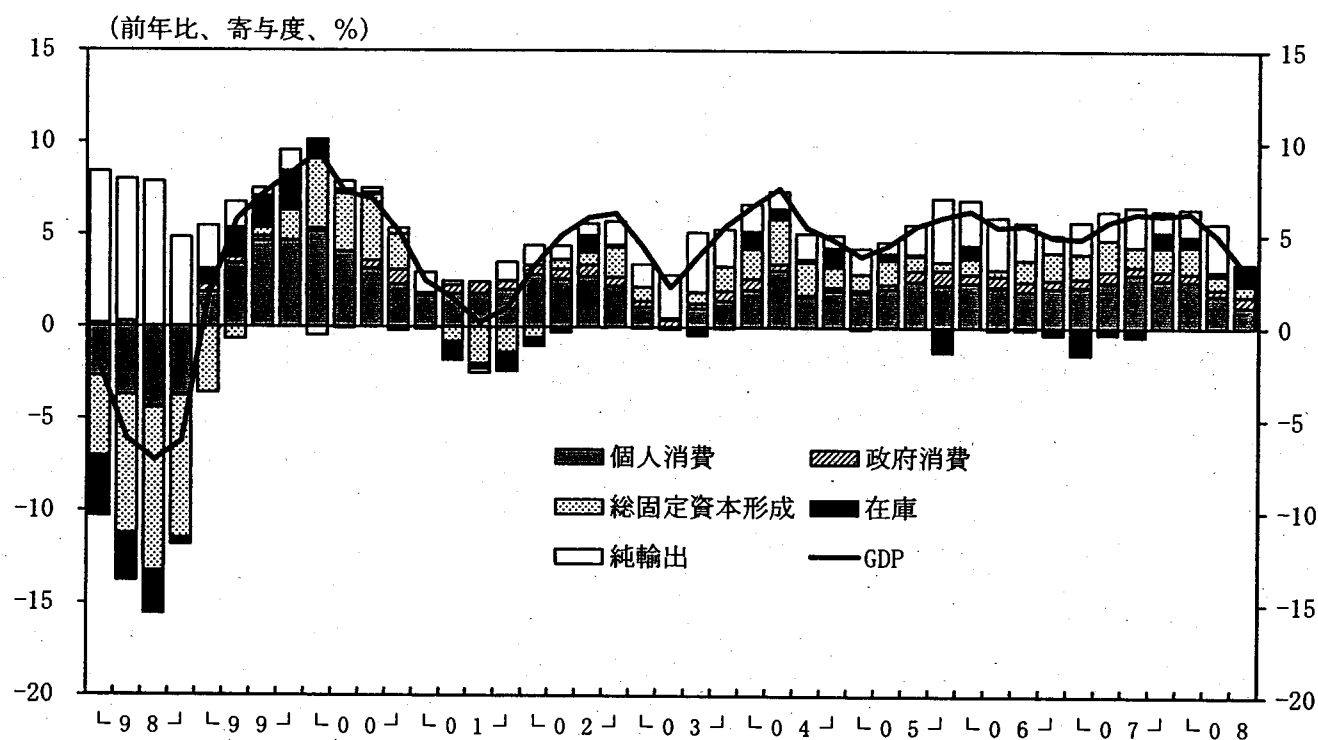


(注) 食料品には加工食品、飲料・タバコを含む。カッコ内はウェイト。

(図表8-4)

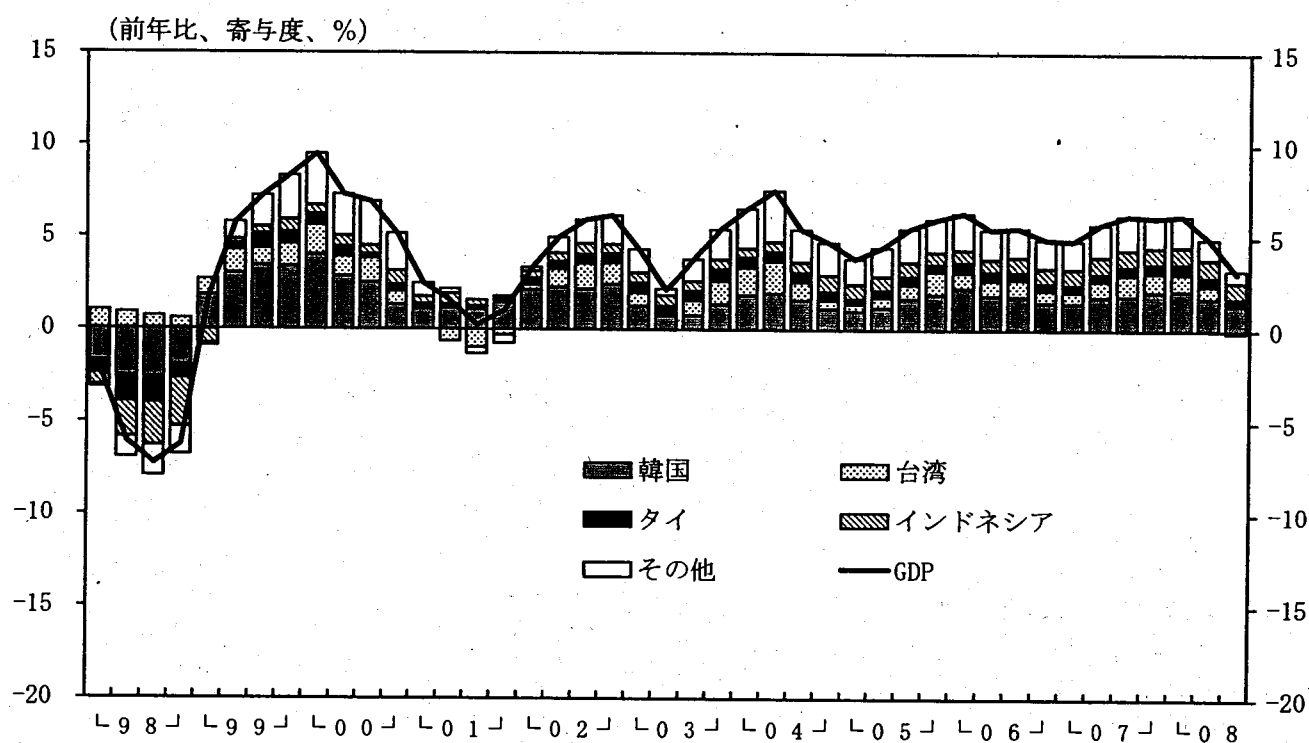
NIEs、ASEAN諸国・地域の実質GDP成長率

(1) NIEs、ASEAN (需要項目別寄与度)



直近: 3Q

(2) NIEs、ASEAN (国・地域別寄与度)



直近: 3Q

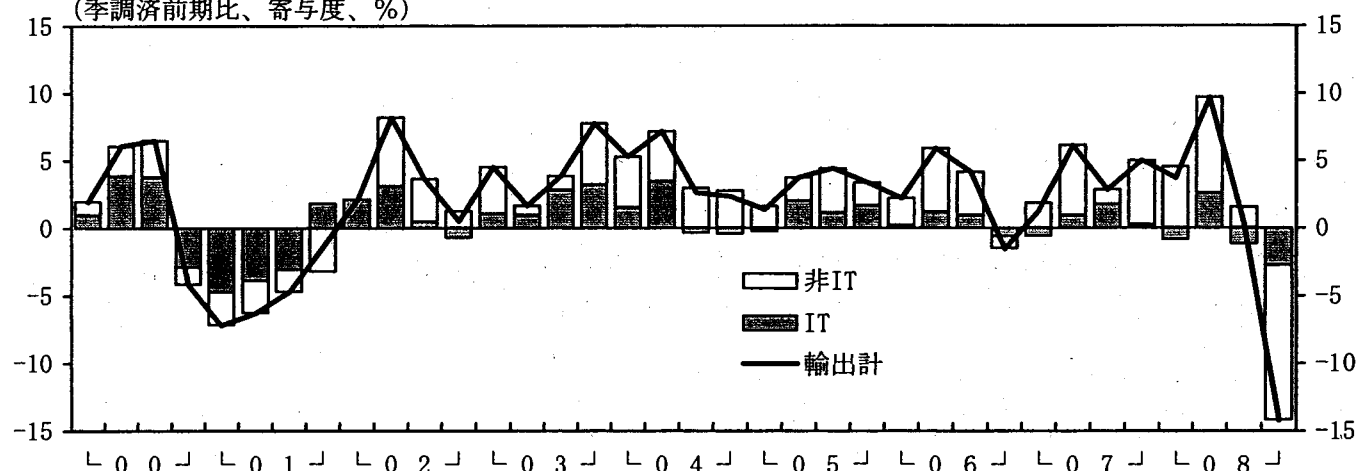
(注1) NIEs、ASEANは、韓国、台湾、香港、シンガポール、タイ、マレーシア、インドネシア、フィリピンの前年比を各国の名目GDPウェイト(ドル建名目GDPの世界計に対する各国シェアの後方3年移動平均を用いて算出)で加重平均した値。

(注2) GDP総額と需要項目別内訳合計の差は、誤差脱漏。

NIEs、ASEAN諸国・地域の輸出合成指数 (NIEs4・ASEAN4)

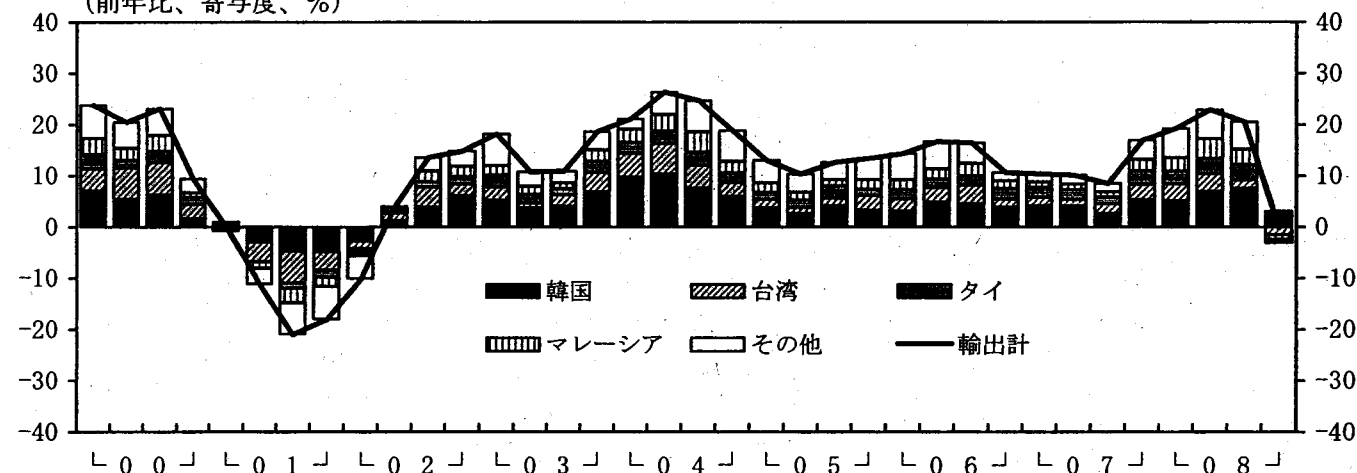
(1) 輸出全体 (前期比)

(季調済前期比、寄与度、%)



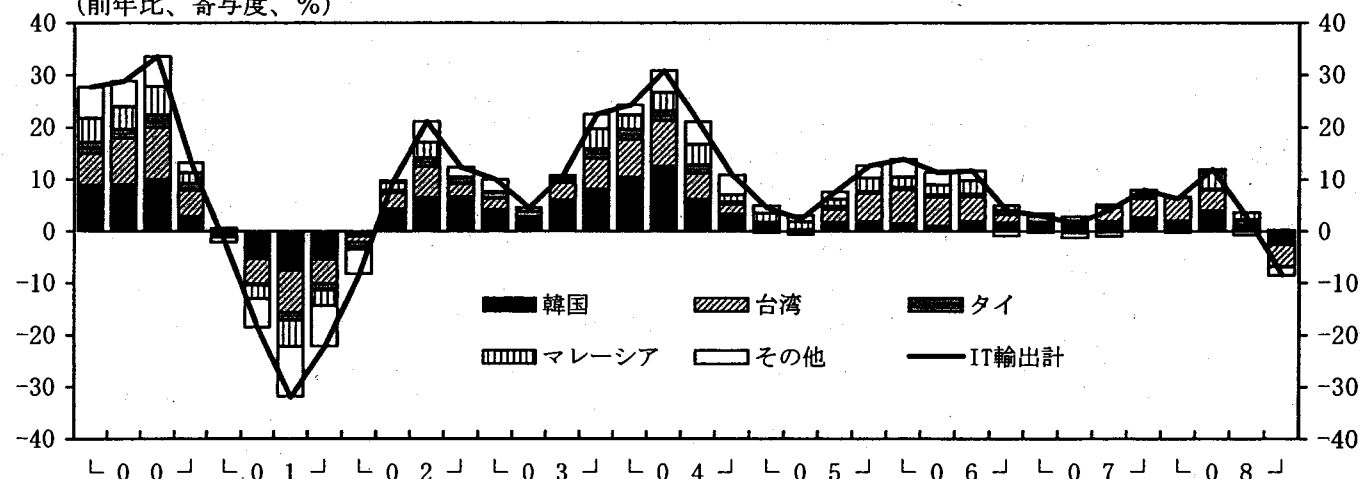
(2) 輸出全体 (前年比)

(前年比、寄与度、%)



(3) IT関連輸出 (前年比)

(前年比、寄与度、%)



(注1) 直近4Qは、10月の値。なお、直近月まで公表されていないデータに関しては、前月の前年比で横置きしている。

(注2) NIEs4は、韓国、台湾、シンガポール、香港、ASEAN4は、タイ、インドネシア、マレーシア、フィリピン。

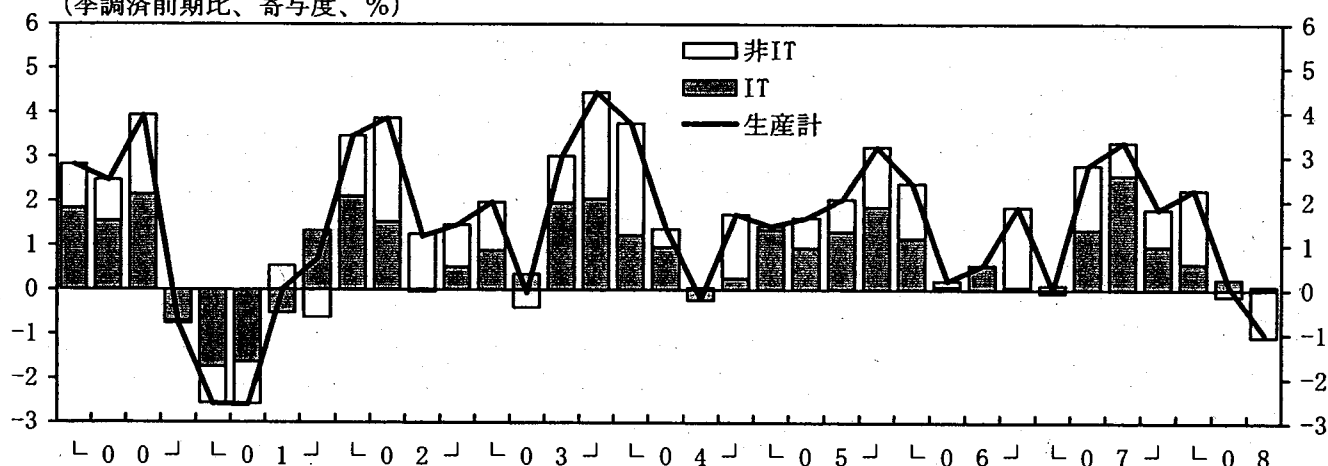
(注3) 季調済前期比は、X-12-ARIMAによる。IT輸出の寄与度は、X-12-ARIMAによる季調済のIT輸出金額を用いて算出し、非ITは輸出全体からIT輸出の寄与度を差し引いて算出した。

(注4) 全て金額ベース。

NIEs、ASEAN諸国・地域の生産合成指数 (NIEs3・ASEAN3)

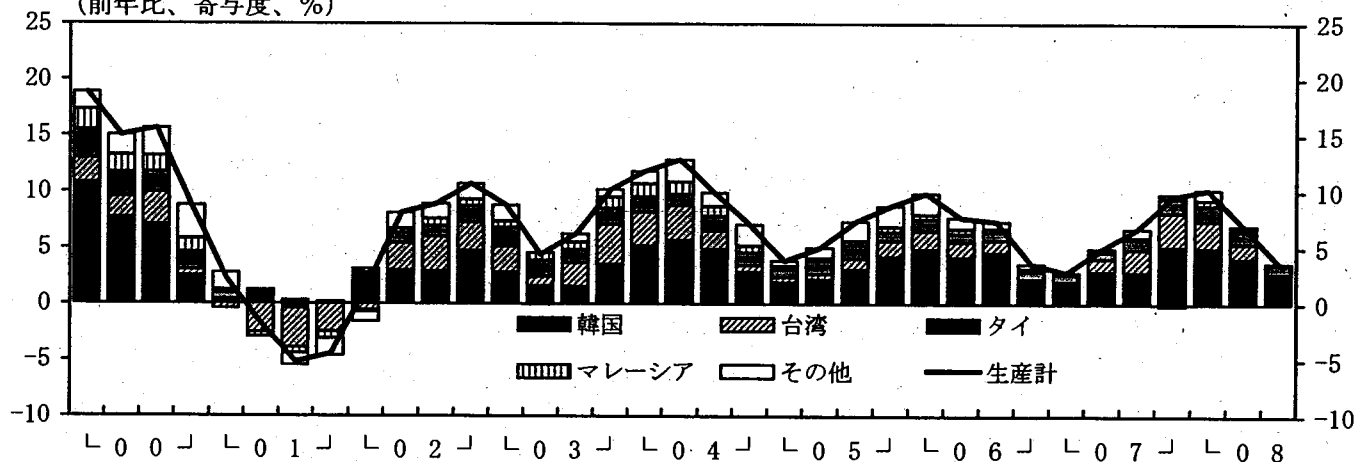
(1) 生産全体 (前期比)

(季調済前期比、寄与度、%)



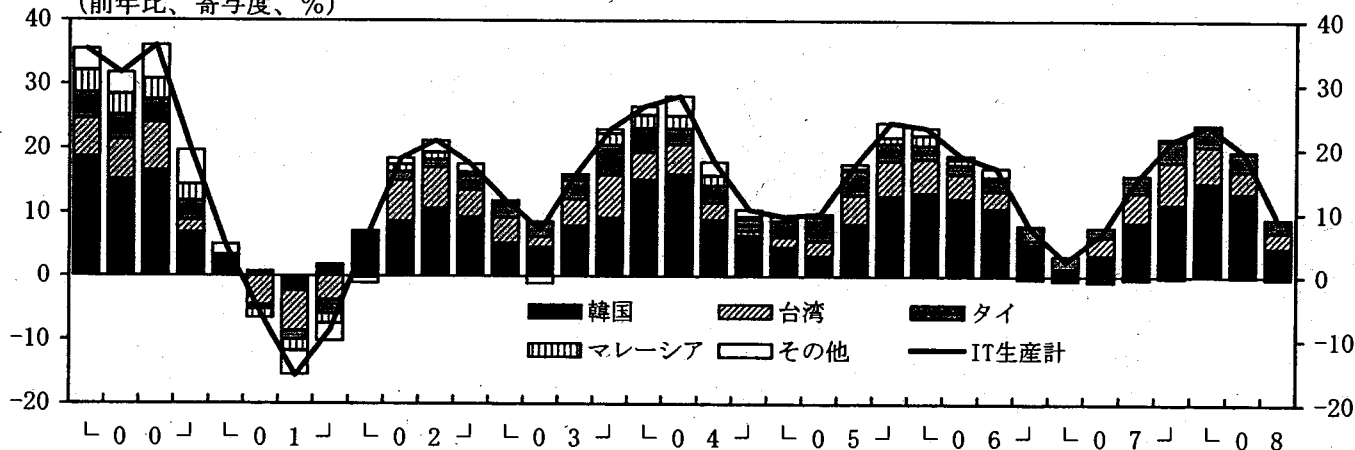
(2) 生産全体 (前年比)

(前年比、寄与度、%)



(3) IT関連生産 (前年比)

(前年比、寄与度、%)



(注1) 直近3Qは、9月の値。なお、直近月まで公表されていないデータに関しては、未季調値は前月の前年比、季調値は前月の値で横置きしている。

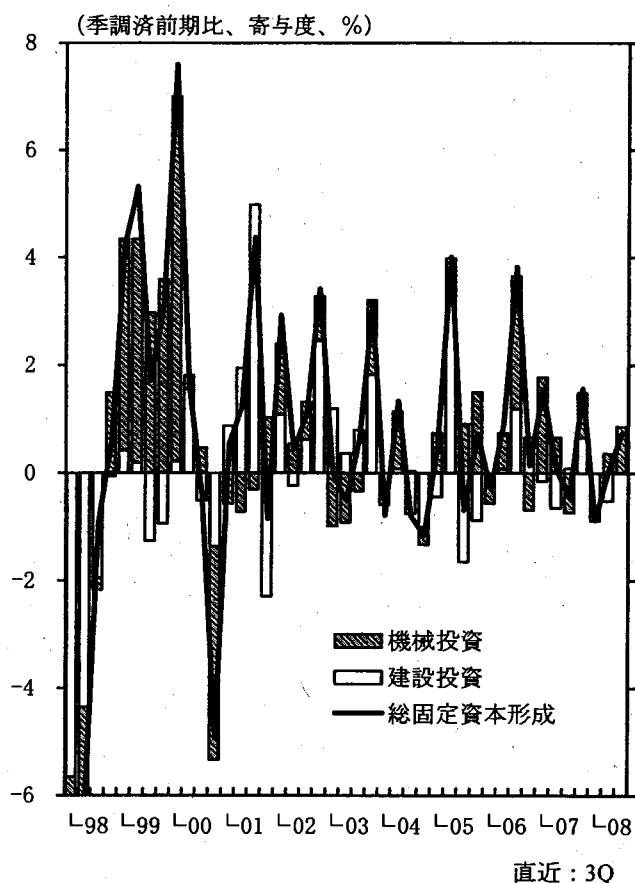
(注2) NIEs3は、韓国、台湾、シンガポール、ASEAN3は、タイ、マレーシア、フィリピン。

(注3) 全体の前期比は、各国・地域の季調済前期比を名目GDPウェイト(ドル建名目GDPの世界計に対する各国シェアの後方3年移動平均を用いて算出)で加重平均した値。現地統計で季調値が公表されていないデータは、X-12-ARIMAによる当局算出値。生産全体に対するITの内訳寄与度は、各国・地域の生産指数のIT関連品目の伸び率およびウェイトを用いて寄与度を計算し、それを名目GDPウェイトで加重平均して算出した。

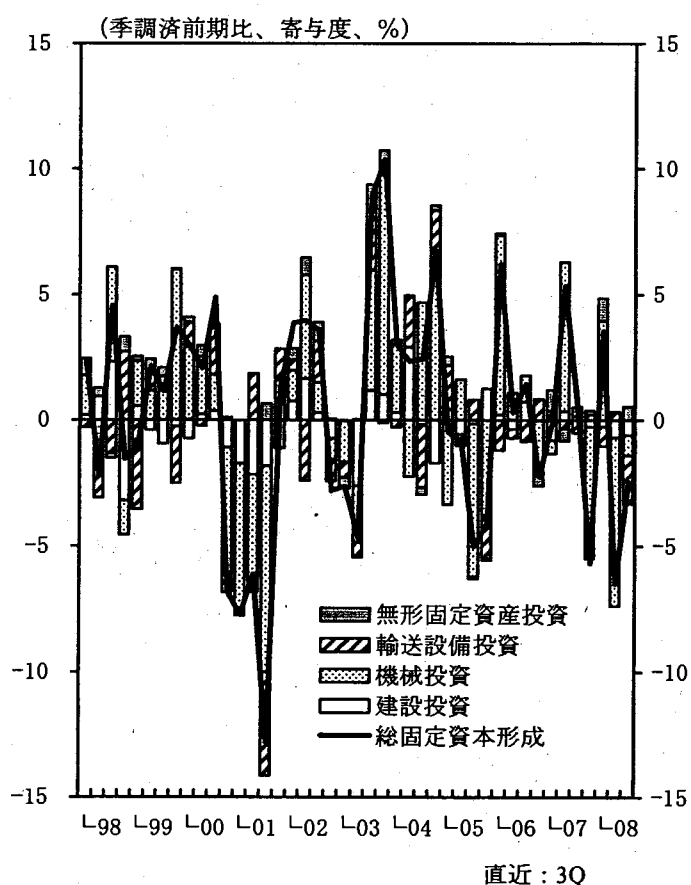
(注4) 全て数量ベース。

NIEs、ASEAN諸国・地域の総固定資本形成、家計支出関連指標

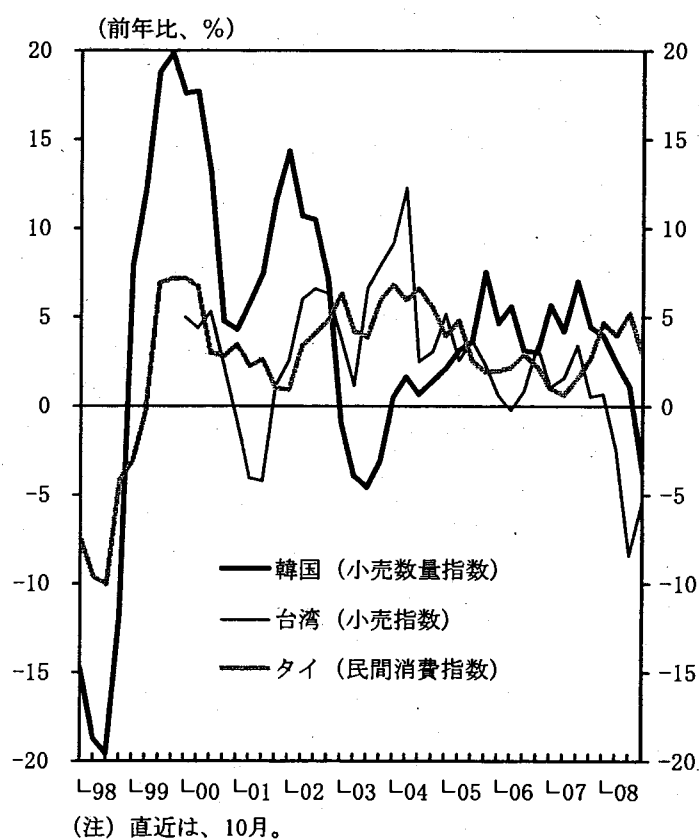
(1) 韓国の総固定資本形成



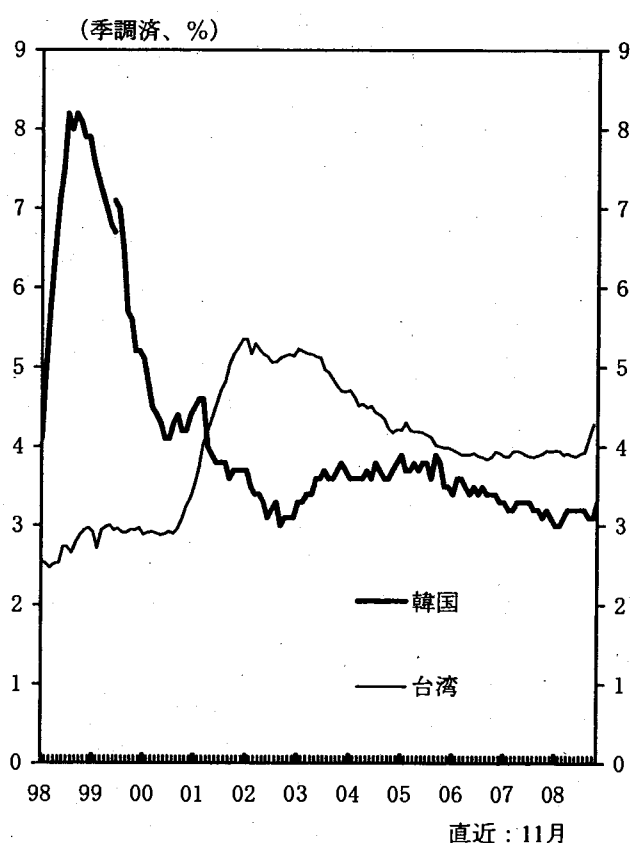
(2) 台湾の総固定資本形成



(3) 個人消費関連指標



(4) 失業率



(注1) 季節調整値は、台湾の総固定資本形成はX-11を用いて当局で算出、その他は現地統計。

(注2) 韓国の失業率は、調査内容の変更により、1999/5月時点で不連続となっている。1999/5月までは調査日から過去1週間の、それ以降は過去4週間の求職活動の有無について調査している。

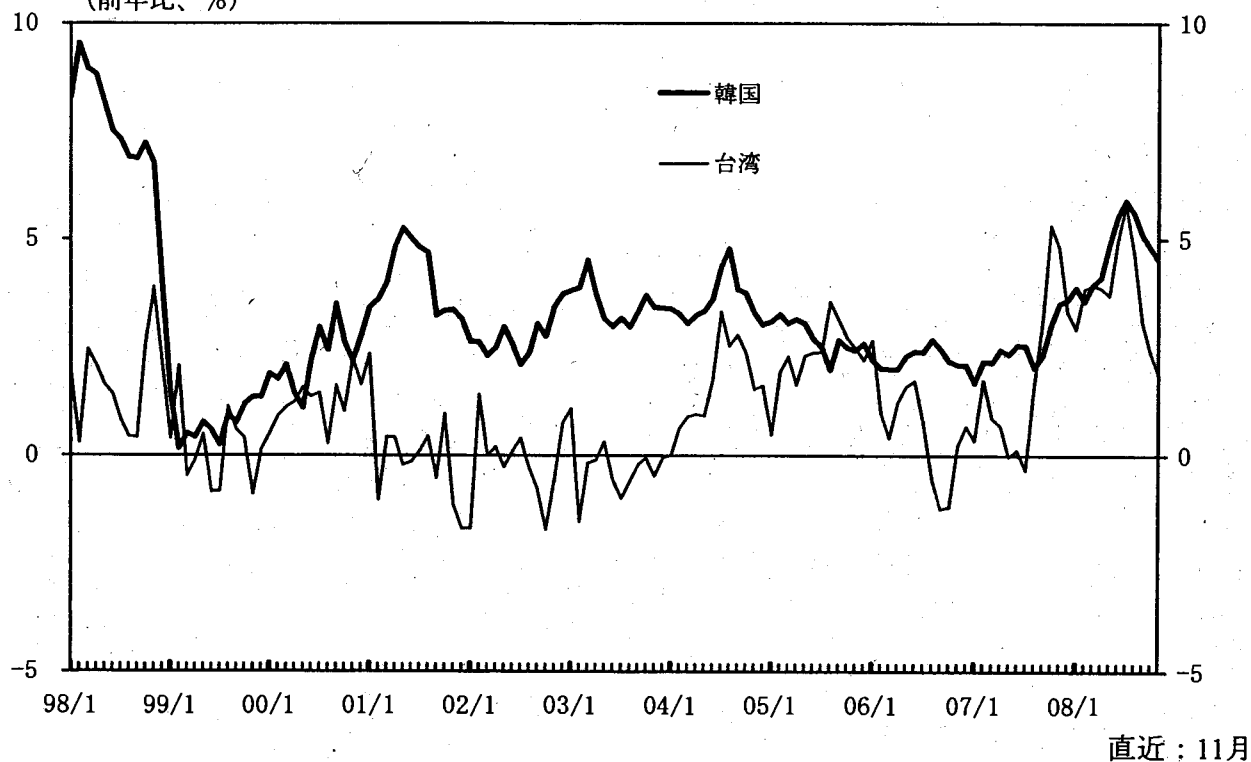
(注3) タイの個人消費は、1999年までは1995年基準値、2000年以降は2000年基準値。

(図表 8-8)

NIEs、ASEAN諸国・地域の消費者物価

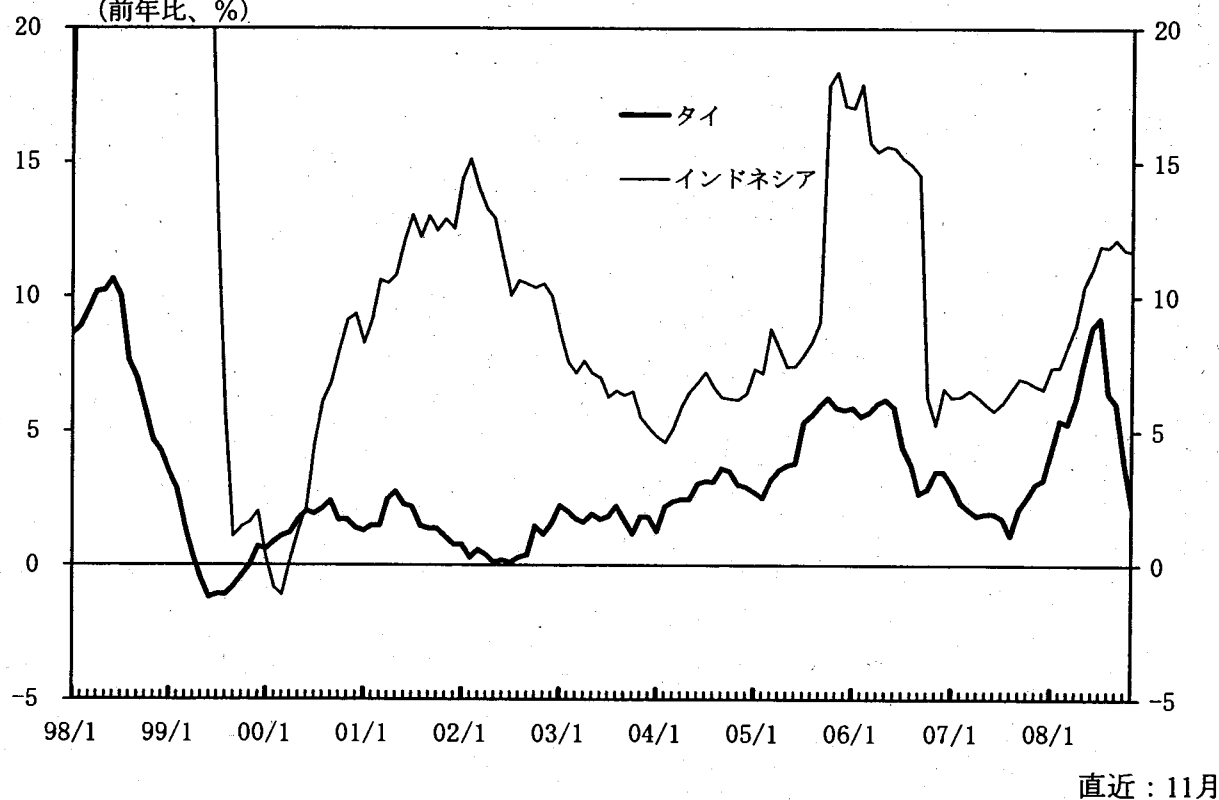
(1) NIEs (韓国・台湾)

(前年比、%)



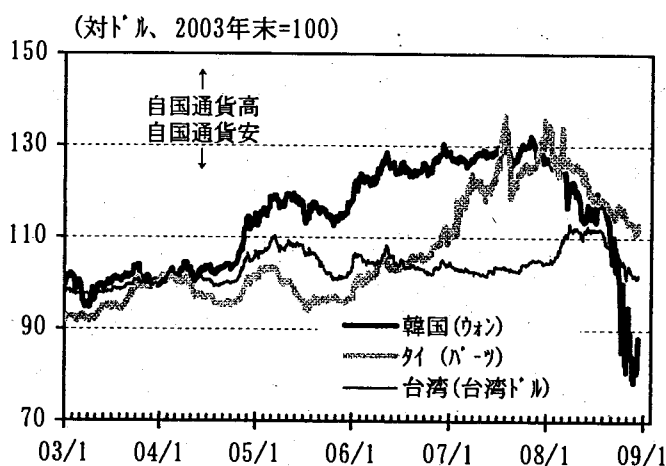
(2) ASEAN (タイ・インドネシア)

(前年比、%)

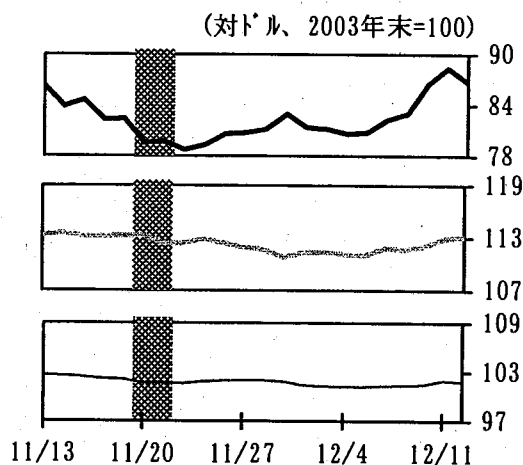


エマージング諸国・地域の金融市場 通貨(1)

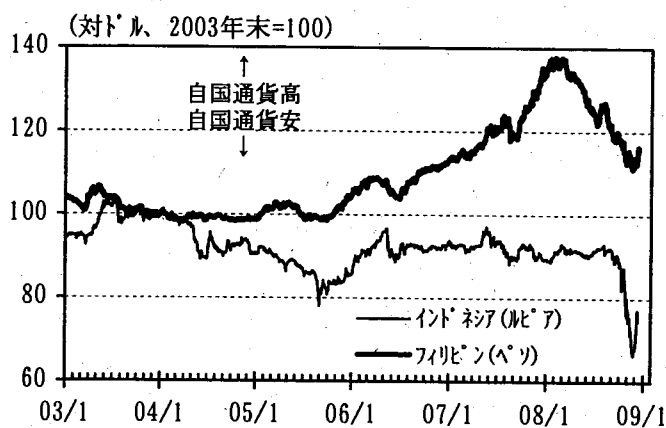
(1) 韓国、台湾、タイ



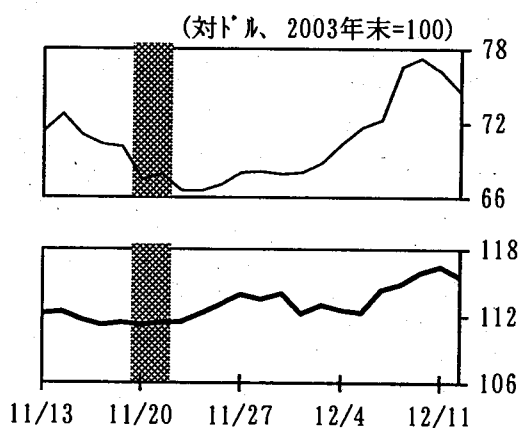
<最近の動き>



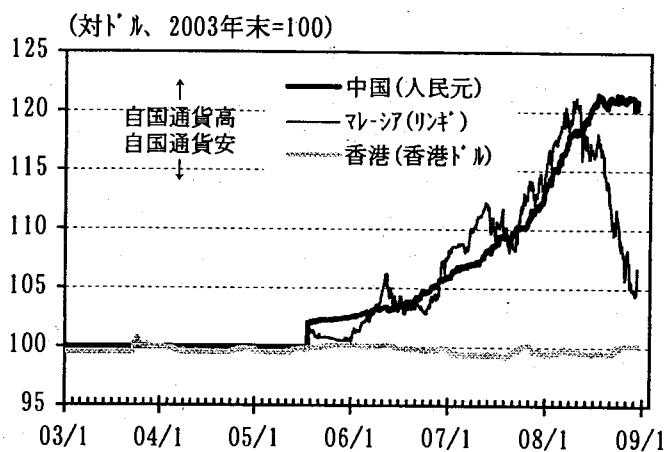
(2) インドネシア、フィリピン



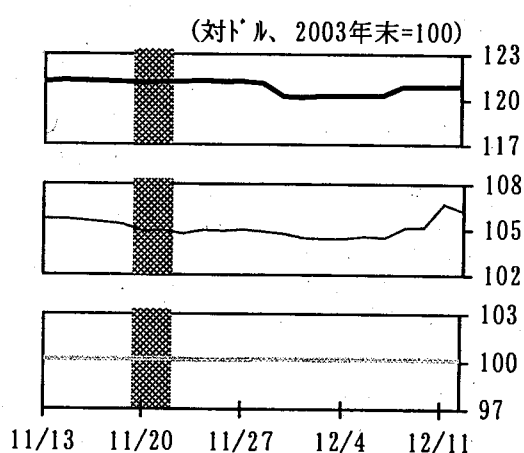
<最近の動き>



(3) 中国、香港、マレーシア



<最近の動き>



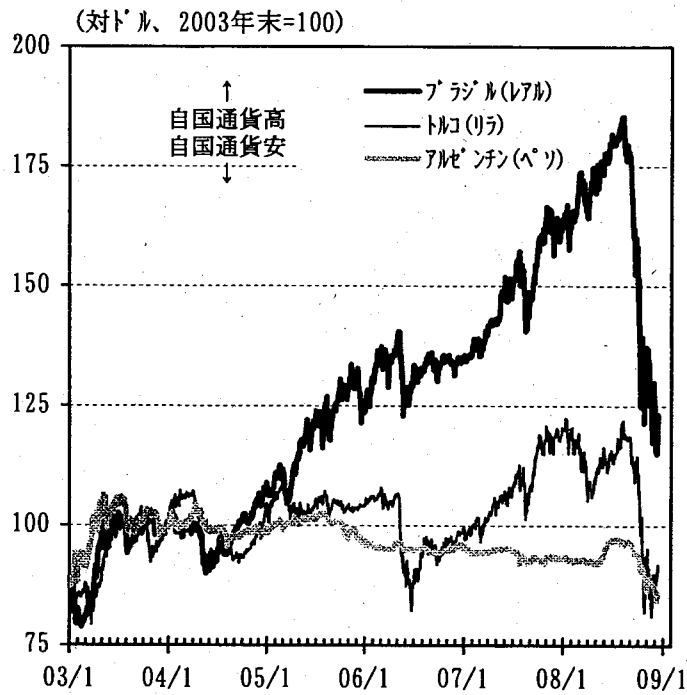
(出所) Bloomberg (注1) シャドーは前回会合。

(注2) タイ・バーツは07年1月31日よりオフショア市場でのレートを用いている。

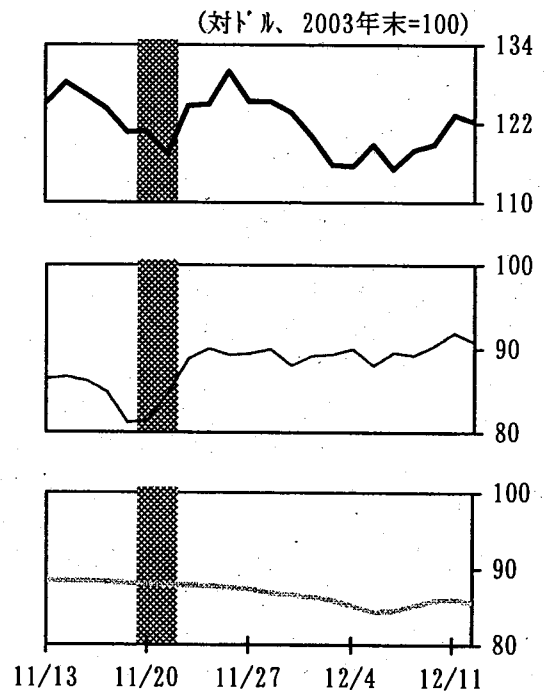
いずれも直近は12月12日

通貨(2)

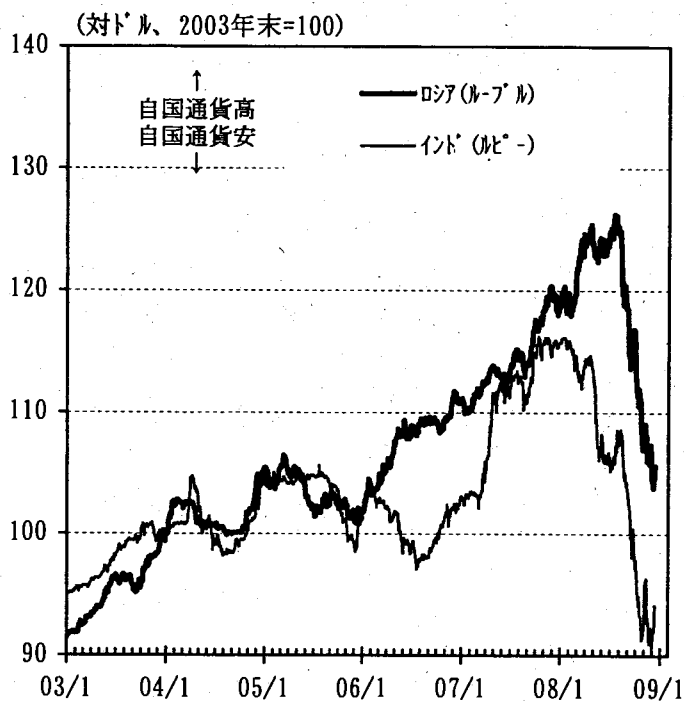
(4) ブラジル、アルゼンチン、トルコ



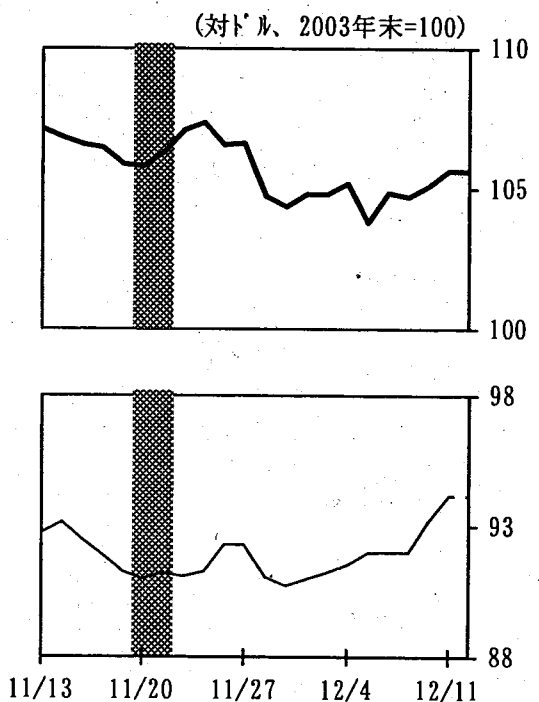
<最近の動き>



(5) ロシア、インド



<最近の動き>

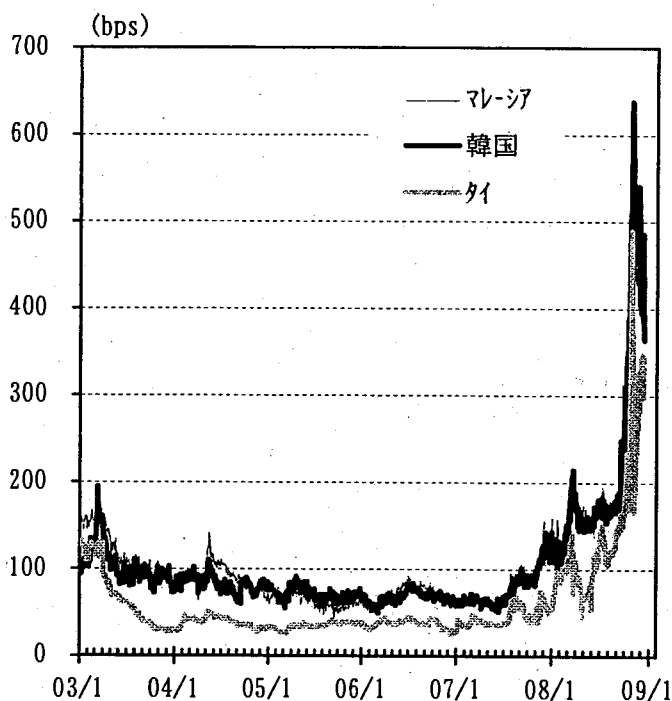


(出所) Bloomberg (注) シャドーは前回会合。

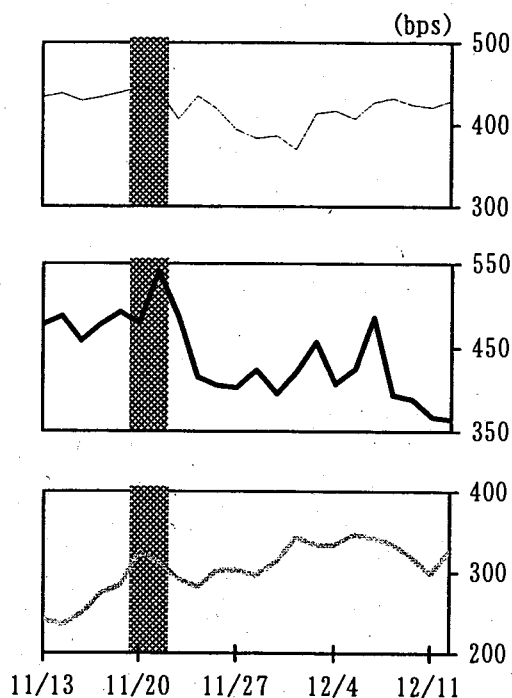
いずれも直近は12月12日

対米国債スプレッド (1)

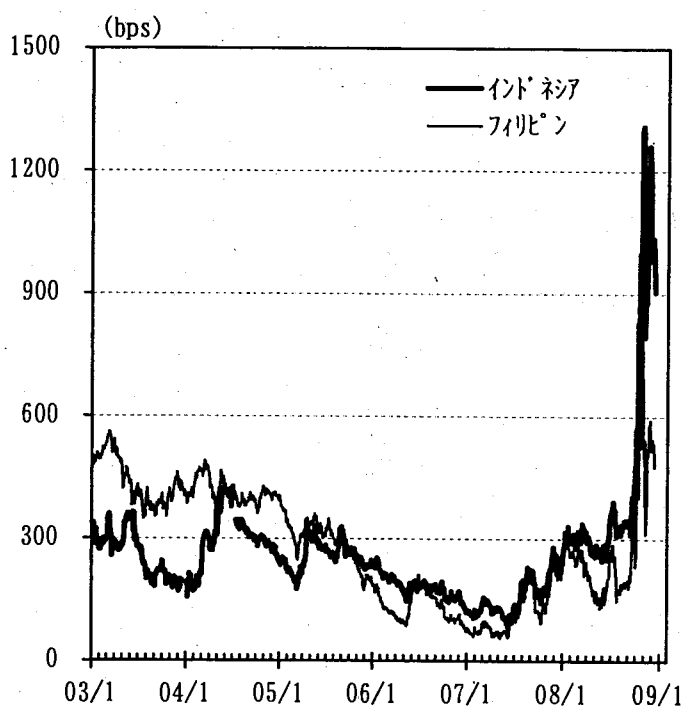
(1) 韓国、タイ、マレーシア



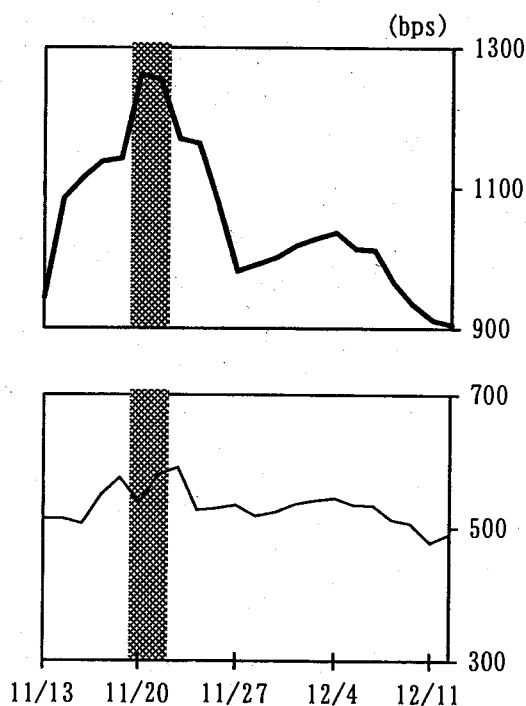
<最近の動き>



(2) インドネシア、フィリピン



<最近の動き>



(出所) Bloomberg (注1)シャドーは前回会合。

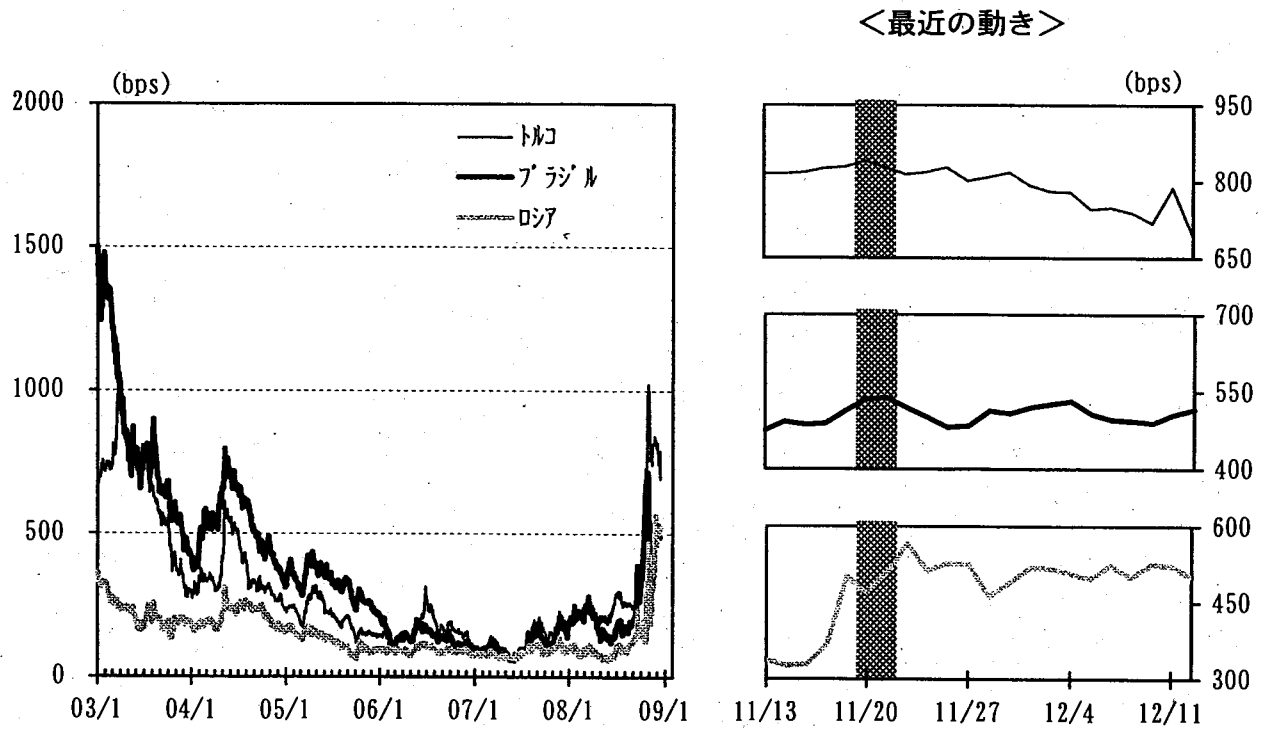
(注2) 03年1月1日～04年3月2日までのインドネシア国債利回りはメリルリンチ社のデータによる。

(注3) タイは5年物CDSで代用。

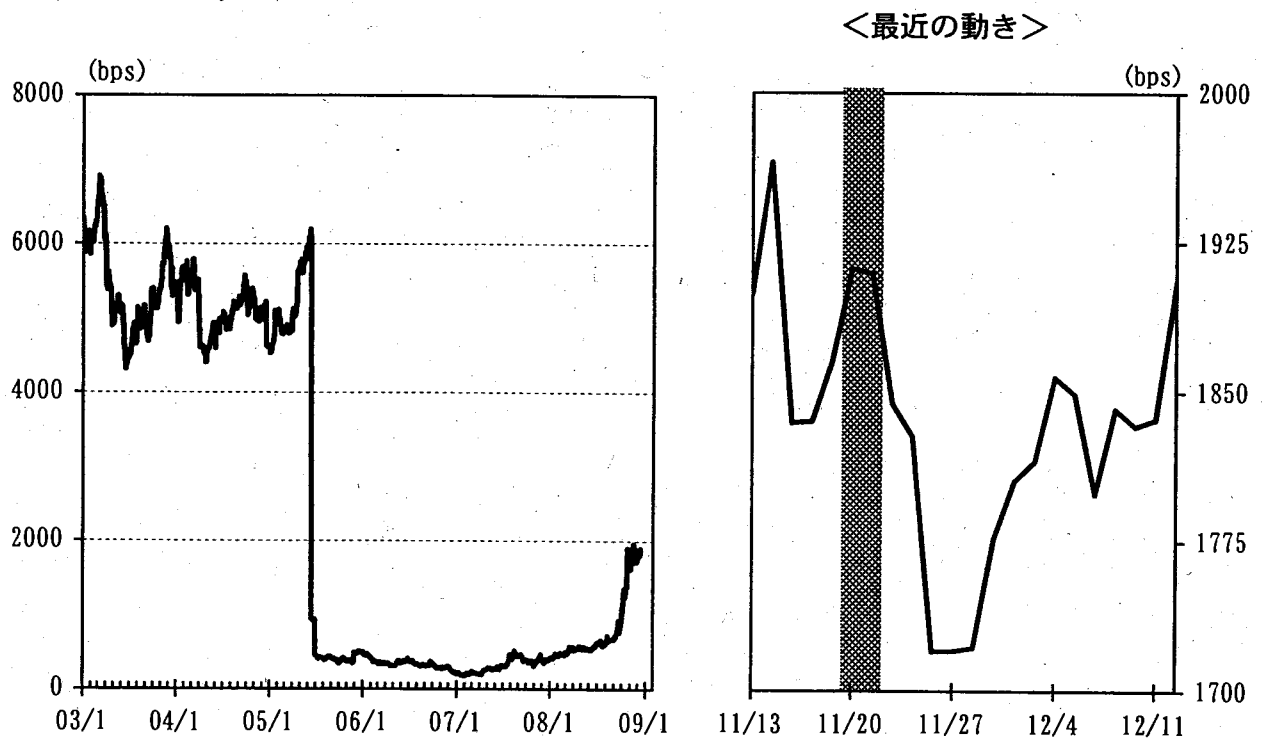
いずれも直近は12月12日

対米国債スプレッド (2)

(3) ブラジル、ロシア、トルコ



(4) アルゼンチン

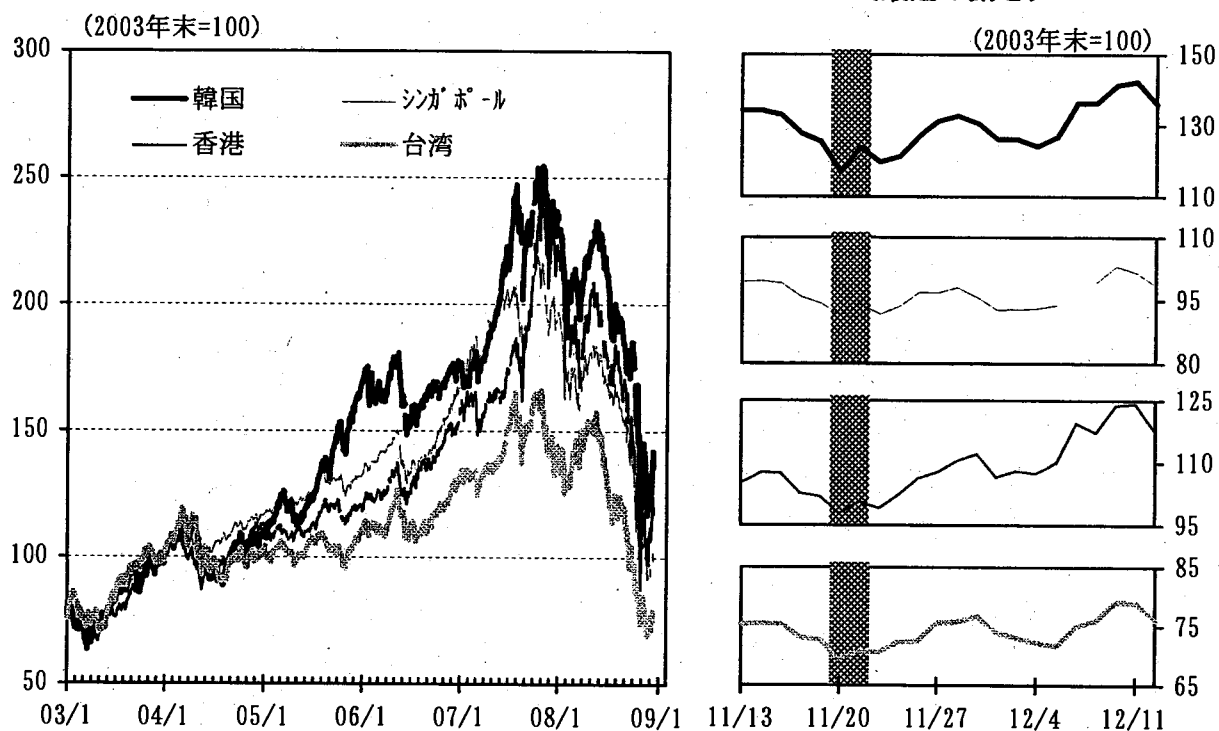


(出所) Bloomberg, J.P. Morgan (注1) シャドーは前回会合。
(注2) アルゼンチンはEMBI Global。

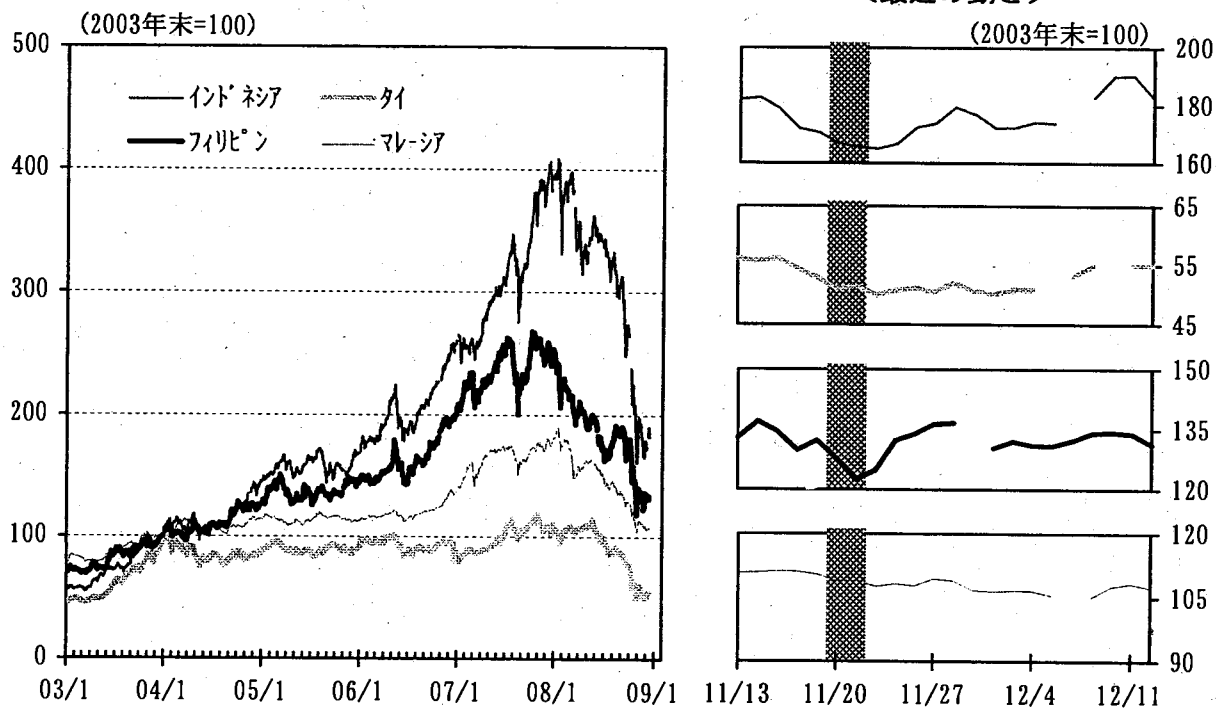
いずれも直近は12月12日

株価(1)

(1) NIEs



(2) ASEAN



(出所) Datastream

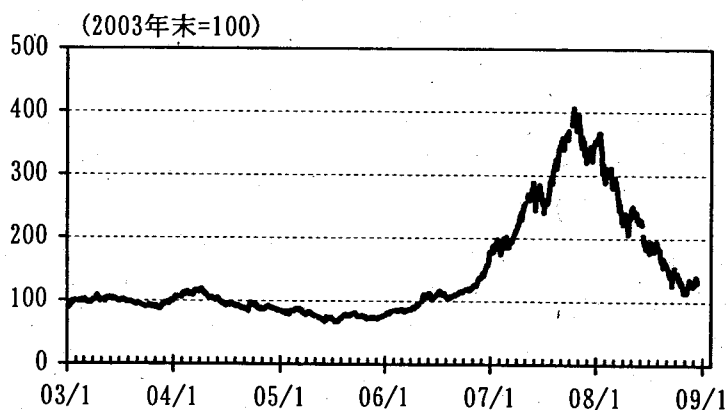
(注) シャドーは前回会合。

いずれも直近は12月12日

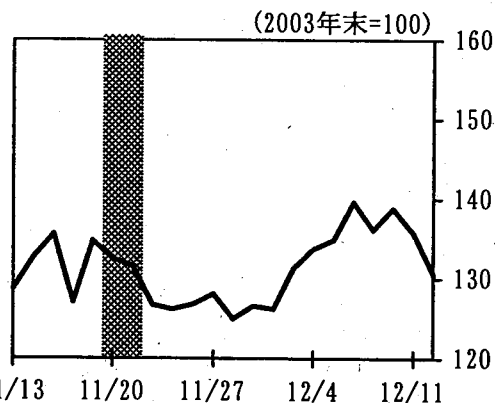
(休場: フィリピン12/1、タイ12/5、10、シンガポール、インドネシア、マレーシア12/8)

株価(2)

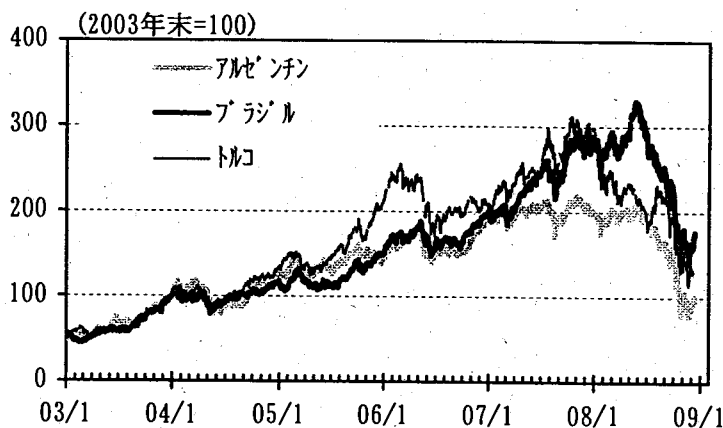
(3) 中国(上海総合)



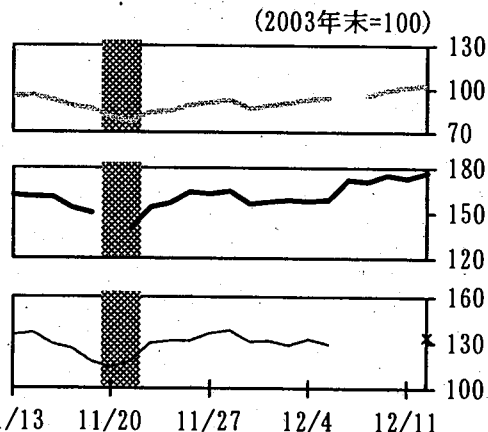
<最近の動き>



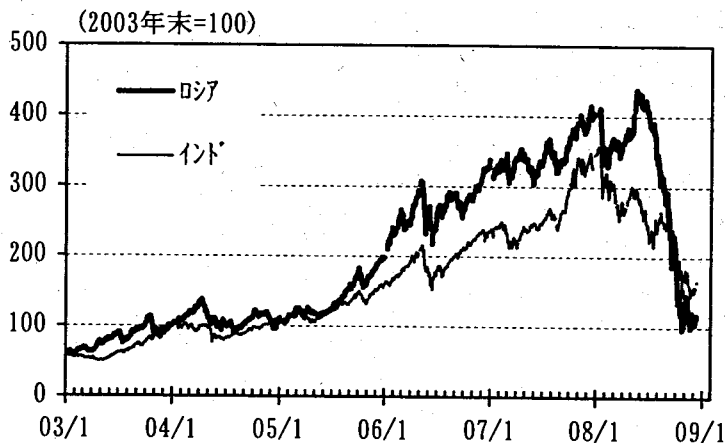
(4) ブラジル、アルゼンチン、トルコ



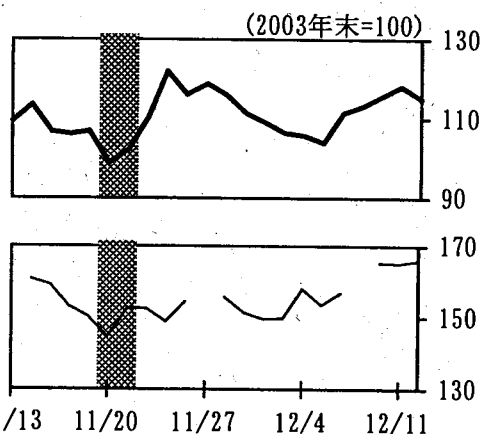
<最近の動き>



(5) ロシア、インド



<最近の動き>

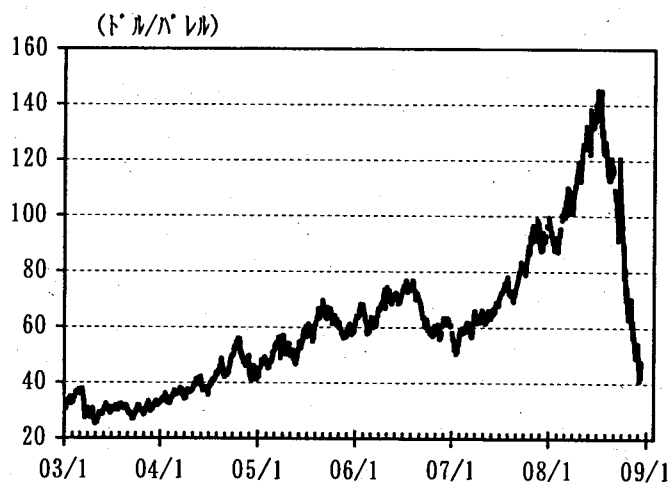


(出所) Datastream (注) シャドーは前回会合。

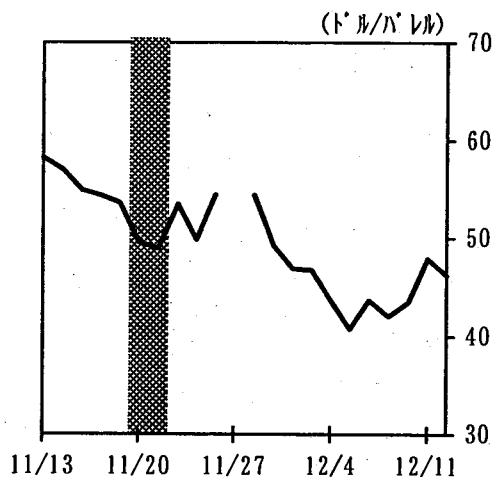
いずれも直近は12月12日
(休場: ブラジル11/20、インド11/13, 27, 12/9、アルゼンチン12/8、トルコ12/8-11)

商品

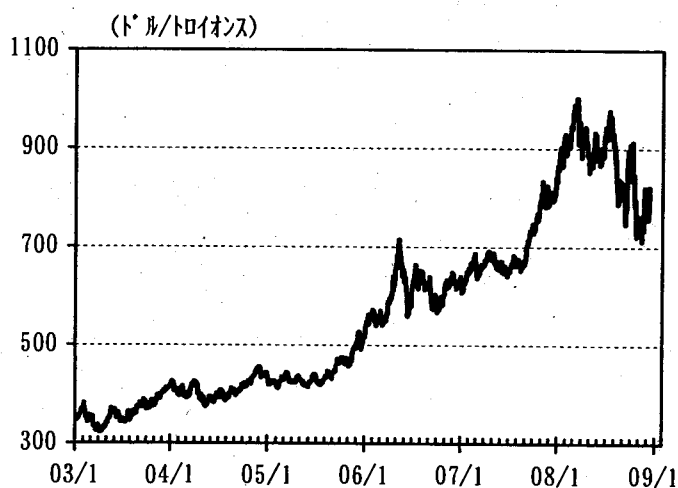
(1) 原油 (WTI)



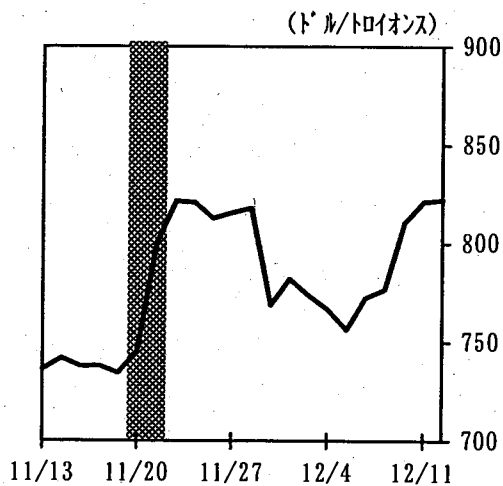
<最近の動き>



(2) 金



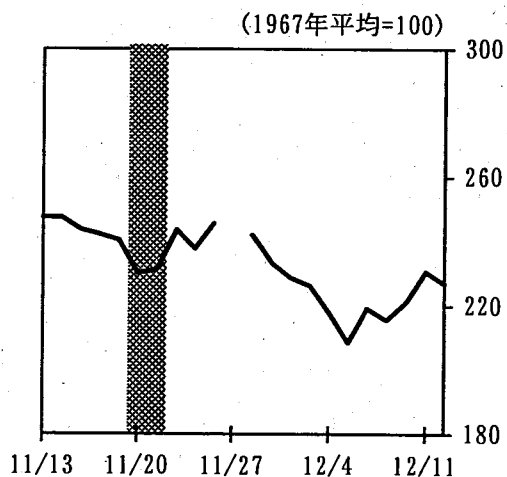
<最近の動き>



(3) CRB商品先物指数



<最近の動き>



(出所) Bloomberg (注) シャドーは前回会合。

いずれも直近は12月12日
(休場：原油、CRB商品先物指数11/27)

国際機関及び民間の海外経済・物価見通し

(1) 実質GDP

(前年比、%)

	2007年 実績	2008年			2009年		
		IMF 見通し (2008/11月)	民間 見通し		IMF 見通し (2008/11月)	民間 見通し	
			9月時点	12月時点		9月時点	12月時点
米 国	2.0	1.4	1.8	1.3	▲0.7	1.5	▲1.1
E U	2.9	1.5	1.6	1.2	▲0.2	1.1	▲0.7
ユーロエリア	2.6	1.2	1.3	1.0	▲0.5	0.9	▲0.9
ドイツ	2.6	1.7	1.9	1.6	▲0.8	0.8	▲1.2
フランス	2.1	0.8	1.1	0.9	▲0.5	1.0	▲0.6
英 国	3.0	0.8	1.2	0.8	▲1.3	0.6	▲1.5
NIEs	5.6	3.9	4.4	3.1	2.1	4.3	0.8
ASEAN	6.1	5.4	5.4	5.2	4.2	5.1	3.3
中 国	11.9	9.7	9.9	9.3	8.5	9.1	7.8
日 本	2.4	0.5	0.9	0.4	▲0.2	0.9	▲0.9

(2) 消費者物価指数

(前年比、%)

	2007年 実績	2008年			2009年		
		IMF 見通し (2008/10月)	民間 見通し		IMF 見通し (2008/10月)	民間 見通し	
			9月時点	12月時点		9月時点	12月時点
米 国	2.9	4.2	4.4	4.0	1.8	2.9	0.6
E U	2.4	3.9	3.6	3.5	2.4	2.7	1.6
ユーロエリア	2.1	3.5	3.5	3.3	1.9	2.4	1.4
ドイツ	2.3	2.9	2.9	2.7	1.4	2.1	1.1
フランス	1.6	3.4	3.1	3.0	1.6	2.1	1.4
英 国	2.3	3.8	3.8	3.6	2.9	2.9	1.2
NIEs	2.2	4.8	4.7	4.5	3.5	3.6	2.2
ASEAN	4.0	9.6	8.7	8.3	7.2	6.6	5.1
中 国	4.8	6.4	6.8	6.1	4.3	4.6	1.7
日 本	0.0	1.6	1.6	1.6	0.9	1.2	0.1

(注1) IMF見通しは、WEO (World Economic Outlook) による。

(注2) 民間見通しは、米国はブルーチップ、EU・東アジア・日本はコンセンサス・フォーキャストによる。

(注3) ASEANのIMF見通しはタイ、インドネシア、マレーシア、フィリピン、ベトナムの5か国ベース。その他はベトナムを除く4か国ベース。

(注4) NIEsは韓国、台湾、香港、シンガポール。

(注5) NIEs、ASEANの計数は、購買力平価換算 (IMF算出) によるGDPウェイトを使用。

2008.12.18
国際局

「海外経済・国際金融の現状評価」図表一覧（追加分）

（図表 1）	米国の主要経済指標……………	1
（図表 2）	欧州の主要経済指標……………	2～ 3
（図表 3）	アジア諸国・地域の主要経済指標……………	4～ 6
（図表 4）	中国の経済指標……………	7～ 9
（図表 5）	インドの鉱工業生産……………	10

米国の主要経済指標

シャドーを付した計数は、前回会合（11月20日）以降に判明したもの。

	2006年	2007年	2008/2Q	3Q	4Q	9月	10月	11月
1. 実質GDP ＜前期比年率、％＞	2.8	2.0	2.8	<11/25改訂> ▲ 0.5				
2. 実質可処分所得 ＜前期比、％＞	3.5	2.8	2.6	▲ 2.4	0.6	0.0	<11/26公表> 1.0	
3. 実質個人消費 ＜前期比、％＞	3.0	2.8	0.3	▲ 0.9	▲ 0.8	▲ 0.4	<11/26公表> ▲ 0.5	
4. 家計貯蓄率 ＜対可処分所得比、％＞	0.7	0.6	2.5	1.1	2.4	1.0	<11/26公表> 2.4	
5. 小売売上高 (除く自動車、ガソリン、建築資材) ＜前期比、％＞	6.2	5.0	1.9	▲ 0.1	▲ 1.1	▲ 0.7	▲ 0.7	<12/12公表> 0.5
6. 自動車販売 (年率、万台) ＜前期比、％＞	1,705 ▲ 2.3	1,646 ▲ 3.4	1,443 ▲ 7.1	1,317 ▲ 8.7	1,061 ▲ 19.5	1,274 ▲ 8.8	1,079 ▲ 15.3	<12/3公表> 1,042 ▲ 3.4
7. 消費者コンフィデンス指数	105.9	103.3	57.3	57.3	41.9	61.4	38.8	<11/25公表> 44.9
8. 住宅着工 (年率、千戸) ＜前期比、％＞	1,801 ▲ 12.9	1,355 ▲ 24.8	1,025 ▲ 2.7	876 ▲ 14.6	698 ▲ 20.3	824 ▲ 3.5	771 ▲ 6.4	<12/16公表> 625 ▲ 18.9
9. FHFA指数 (除くリファイナンス) ＜前期比、％＞ (前年比、％)	6.2	1.5	▲ 1.4 ▲ 4.8	▲ 1.8 ▲ 6.0		<11/25公表> ▲ 1.3 ▲ 7.0		
10. 非国防資本財受注 (除く航空機) ＜前期比、％＞ (前年比、％)	10.5	▲ 2.6	2.5 3.2	▲ 1.3 2.0	▲ 8.0 ▲ 6.4	▲ 3.4 0.1	<12/4改訂> ▲ 5.0 ▲ 6.4	
11. 財・サービス貿易収支 (億ドル)	▲ 627.7	▲ 583.5	▲ 600.3	▲ 588.5	▲ 571.9	▲ 565.6	<12/11公表> ▲ 571.9	
12. ISM 製造業指数	53.1	51.1	49.5	47.8	37.6	43.5	38.9	<12/11公表> 36.2
非製造業指数	55.7	53.5	50.6	50.1	40.9	50.2	44.4	<12/3公表> 37.3
13. 鉱工業生産 ＜前期比、％＞ (前年比、％)	2.2	1.7	▲ 0.9 0.3	▲ 2.3 ▲ 3.0	▲ 2.1 ▲ 5.2	▲ 4.1 ▲ 6.4	1.5 ▲ 4.8	<12/15公表> ▲ 0.6 ▲ 5.7
14. 失業率 (除く軍人、％)	4.6	4.6	5.3	6.0	6.6	6.1	6.5	<12/5公表> 6.7
15. 非農業部門雇用者数 (増減数、千人/月) うち民間部門	175 159	91 71	▲ 71 ▲ 100	▲ 199 ▲ 210	▲ 427 ▲ 451	▲ 403 ▲ 384	▲ 320 ▲ 362	<12/5公表> ▲ 533 ▲ 540
16. CPI ＜前期比、％＞ (前年比、％)	3.2	2.9	1.2 4.4	1.6 5.3	▲ 1.9 2.4	▲ 0.0 4.9	▲ 1.0 3.7	<12/16公表> ▲ 1.7 1.1
コア＜前期比、％＞ (前年比、％)	2.5	2.3	0.5 2.3	0.8 2.5	0.1 2.1	0.1 2.5	▲ 0.1 2.2	<12/16公表> 0.0 2.0
17. 非農業部門労働生産性 ＜前期比年率、％＞ (前年比、％)	1.0	1.4	3.6 3.2	<12/3改訂> 1.3 2.1				
18. ユニット・レーバー・コスト ＜前期比年率、％＞ (前年比、％)	2.8	2.7	▲ 2.6 0.1	<12/3改訂> 2.8 1.4				

※ 直近四半期の計数については、公表済月までの平均を用いて算出。

(注) ・前期（月）比は季調済みベース。

・財・サービス貿易収支の年計数および四半期計数は月平均に換算。

・雇用者増減数（期末差）の年計数および四半期計数は月平均に換算。

・CPIコアは食料品、エネルギーを除いたベース。

(図表 2-1)

ユーロエリアの主要経済指標

シャドーを付した計数は、前回会合(11月20日)以降に判明したもの。

※

	2006年	2007年	2008/2Q	3Q	4Q	2008/9月	10月	11月	12月
1. 実質GDP <前期比年率、%>	3.0	2.6	▲0.7	<12/4改訂> ▲0.8					
独 実質GDP <前期比年率、%>	3.2	2.6	▲1.7	<11/25改訂> ▲2.1					
仏 実質GDP <前期比年率、%>	2.4	2.1	▲1.1	0.6					
2. 輸出 <前期比、%>			0.2	1.2		2.2			
(前年比、%)	11.7	8.6	7.4	5.1		9.1			
3. 独 海外受注(域外) <前期比、%>			▲3.0	▲5.5	▲10.5	▲13.6	<12/5公表> ▲5.2		
(前年比、%)	14.3	10.6	0.4	▲6.2	▲19.0	▲12.2	▲19.0		
4. 独 国内投資財受注 <前期比、%>			▲1.9	▲3.9	▲8.6	▲6.6	<12/5公表> ▲6.2		
(前年比、%)	7.4	9.3	0.7	▲3.3	▲13.9	▲5.1	▲13.9		
5. 輸入 <前期比、%>			1.1	4.4		2.1			
(前年比、%)	13.7	6.4	10.4	12.1		16.2			
6. 小売売上数量 <前期比、%>			▲0.8	0.0	▲0.7	0.0	<12/3公表> ▲0.8		
(前年比、%)	1.5	0.9	▲1.5	▲1.5	▲2.1	▲1.4	▲2.1		
7. 新車登録台数 (年率、万台)	1,168	1,158	1,085	1,069	986	1,041	1,009	<12/16公表> 964	
<前期比、%>	3.3	▲0.9	▲3.8	▲1.5	▲7.7	▲6.0	▲3.1	▲4.4	
8. 消費者コンフィデンス (DI、%)	▲9	▲5	▲15	▲19	▲24	▲19	▲24	<11/27公表> ▲25	
9. 鉱工業生産(除く建設) <前期比、%>			▲0.9	▲1.2	▲2.2	▲1.8	<12/12公表> ▲1.2		
(前年比、%)	4.0	3.4	1.1	▲1.6	▲5.3	▲2.7	▲5.3		
10. 製造業PMI(購買担当者指数)(DI、%)	56.3	54.3	50.2	46.6	37.1	45.0	41.1	<12/1改訂> <12/16公表> 35.6 34.5	
サービス業PMI事業活動指数 (DI、%)	57.9	56.6	50.6	48.4	43.4	48.4	45.8	<12/3改訂> <12/16公表> 42.5 42.1	
11. 失業率 (%)	8.2	7.4	7.4	7.5	7.7	7.6	<11/28公表> 7.7		
12. 消費者物価 (前年比、%)	2.2	2.1	3.6	3.8	2.6	3.6	3.2	<12/17改訂> 2.1	
コア (前年比、%)	1.5	2.0	2.5	2.5	2.3	2.5	2.4	<12/17公表> 2.2	

※ 直近四半期の計数については、公表済月までの平均をベースに算出。

(出所) 欧州委員会(Eurostat)、ECB、Deutsche Bundesbank、Statistisches Bundesamt、INSEE、Datastream、REUTERS

(注) ・ユーロエリアに関する計数・図表のうち、消費者物価・M3・貸出は各時期のユーロ構成国ベース。

(但し、7.新車登録台数は13か国ベース)。

・実質GDPの年率換算値は、当局計算による。

・前期(月)比は季調済みベース。

・消費者物価コアは、エネルギー、非加工食料品を除いたベース。

・製造業PMIとサービス業PMI事業活動指数の直近12月は、速報値。

英国の主要経済指標

シャドーを付した計数は、前回会合(11月20日)以降に判明したもの。

※

	2006年	2007年	2008/2Q	3Q	4Q	2008/8月	9月	10月	11月
1. 実質GDP									
<前期比年率、%>	2.8	3.0	0.0	▲2.0					
2. 小売売上数量									
<前期比、%>			0.5	0.0	▲0.1	1.1	▲0.5	▲0.1	
(前年比、%)	3.2	4.3	4.2	2.2	1.9	3.0	1.7	1.9	
3. 消費者コンフィデンス									
(DI、%)	▲6	▲7	▲30	▲36	▲35	▲36	▲31	▲35	▲34
4. サービス業PMI事業活動指数									
(DI、%)	58.5	56.3	49.1	47.5	41.2	49.2	46.0	42.4	40.1
5. 失業率(失業保険ベース)									
(%)	2.9	2.7	2.6	2.8	3.2	2.8	2.9	3.1	3.3
6. CPI									
(前年比、%)	2.3	2.3	3.4	4.8	4.3	4.7	5.2	4.5	4.1
7. 住宅価格(Nationwide指数)									
(前年比、%)	6.4	9.2	▲3.9	▲10.3	▲14.3	▲10.5	▲12.4	▲14.6	▲13.9

※直近四半期の計数については、公表済月までの平均をベースに算出。

(注) 実質GDPの年率換算値と、消費者コンフィデンスの季調値は、当局計算による。

アジア諸国・地域の主要経済指標

シャドーを付した計数は、前回会合(11月20日)以降に判明したもの。

1. 中国

(前年比、%)

	2006年	2007年	2008/2Q	3Q	4Q	2008/9月	10月	11月
1. 実質GDP 〈内は季調済前期比年率〉	11.6	11.9	10.1 < 10.9 >	9.0 < 6.4 >				
2. 工業生産	16.6	18.5	15.9	13.0	6.8	11.4	8.2	5.4
3. 消費財小売売上総額	13.7	16.8	22.2	23.2	21.4	23.2	22.0	20.8
4. 固定資産投資								
年初来累計	24.5	25.8	26.8	27.6	26.8	27.6	27.2	26.8
当期			27.2	28.7	24.0	28.7	24.3	23.7
5. 輸出 〈内は前期比〉	27.2	25.7	22.2 < 7.5 >	23.1 < 5.9 >	8.0 ▲ 8.4	21.5 ▲ 4.7	19.2 ▲ 0.3	▲ 2.2 < ▲ 11.8 >
6. 輸入 〈内は前期比〉	19.9	20.8	32.6 < 16.1 >	25.9 ▲ 0.9	▲ 2.2 ▲ 15.2	21.3 ▲ 9.8	15.6 < 3.8 >	▲ 17.9 < ▲ 25.0 >
7. CPI	1.5	4.8	7.8	5.3	3.2	4.6	4.0	2.4
8. M2	16.9	16.7	17.4	15.3	14.8	15.3	15.0	14.8
9. 人民元貸出	15.1	16.1	14.1	14.5	16.0	14.5	14.6	16.0

(注1) 直近四半期の計数については、公表済月までの平均をベースに算出。M2、人民元貸出の年、四半期計数は期末月の前年比。

(注2) 実質GDPの季調値は、JPモルガンによる試算値。輸出入の季調値は、X-12-ARIMAによる当局算出値。

(注3) 固定資産投資は、都市部。「当期」の値は、中国国家統計局が公表する年初来累計値と同前年比伸び率を用いて当局で試算。

2. インド

(前年比、%)

	2006年	2007年	2008/2Q	3Q	4Q	2008/9月	10月	11月
1. 実質GDP	9.8	9.3	7.9	7.6				
個人消費	7.4	7.9	8.0	5.0				
総固定資本形成	16.1	14.6	9.0	13.8				
2. 鉱工業生産	10.5	9.9	5.3	4.4		5.5	▲ 0.4	
3. 輸入	20.9	25.4	36.8	50.8		43.3	10.6	
4. 卸売物価	4.8	4.8	9.6	12.5	9.8	12.3	11.0	8.7
5. M3	19.3	22.6	20.8	19.0	19.2	19.0	20.2	19.2
6. 貸出	30.3	21.4	25.9	24.8		24.8	30.8	

(注1) 直近四半期の計数については、公表済月までの平均をベースに算出。M3、貸出の年、四半期計数は期末月の前年比。

(注2) 貸出は指定商業銀行ベース。

(出所) CEIC

3. NIEs、ASEAN諸国・地域

(1) 実質GDP

(季調済前期比年率、()内は前年比、%)

	2005年	2006年	2007年	2007/3Q	4Q	2008/1Q	2Q	3Q
韓国	4.2	5.1	5.0	6.0 (5.1)	6.4 (5.7)	3.3 (5.8)	3.4 (4.8)	2.1 (3.8)
台湾	4.2	4.8	5.7	11.7 (7.0)	0.9 (6.4)	2.7 (6.2)	3.3 (4.6)	▲ 10.5 (▲ 1.0)
香港	7.1	7.0	6.4	8.7 (6.8)	6.1 (6.9)	8.2 (7.3)	▲ 5.5 (4.2)	▲ 2.0 (1.7)
シンガポール	7.3	8.2	7.7	5.1 (9.5)	▲ 4.8 (5.4)	15.7 (6.9)	▲ 5.3 (2.3)	▲ 6.8 (▲ 0.6)
タイ	4.6	5.2	4.9	7.3 (5.1)	6.3 (5.7)	4.8 (6.0)	3.1 (5.3)	2.3 (4.0)
インドネシア	5.7	5.5	6.3	7.1 (6.5)	5.6 (6.3)	6.2 (6.3)	7.0 (6.4)	5.3 (6.1)
マレーシア	5.3	5.8	6.3	9.2 (6.7)	7.0 (7.3)	7.0 (7.4)	3.7 (6.7)	1.3 (4.7)
フィリピン	5.0	5.4	7.2	3.3 (7.1)	5.1 (6.4)	1.3 (4.7)	7.9 (4.4)	3.4 (4.6)

(注1) 季節調整値は、韓国、香港、シンガポール、タイ、フィリピンが現地統計。その他はX-11による当局算出値。

(注2) 実質GDPの年率換算値は、当局計算による。

(2) 輸出

(名目米ドルベース、季調済前期比、()内は前年比、%)

	2006年	2007年	2008/2Q	3Q	4Q	2008/9月	10月	11月
輸出合成指数	14.4	11.5	9.7	0.4	▲ 14.2			
うちIT関連寄与度			2.6	▲ 1.2	▲ 2.7			
韓国 <29.0>	14.4	14.1	11.5 (23.1)	4.1 (27.0)	▲ 19.8 (▲ 5.8)	▲ 0.4 (27.7)	▲ 6.9 (8.0)	▲ 21.6 (▲ 19.0)
台湾 <19.3>	12.9	10.1	9.0 (18.6)	▲ 2.7 (8.0)	▲ 21.1 (▲ 15.6)	▲ 14.3 (▲ 1.6)	▲ 2.1 (▲ 8.3)	▲ 23.5 (▲ 23.3)
タイ <11.9>	16.9	17.2	10.0 (25.2)	2.7 (25.2)	▲ 11.0 (5.2)	▲ 1.9 (19.4)	▲ 7.5 (5.2)	
インドネシア <8.9>	17.7	13.2	3.4 (29.6)	▲ 1.2 (27.7)	▲ 14.5 (4.9)	▲ 3.6 (28.5)	▲ 13.1 (4.9)	

(参考)

	2006年	2007年	2008/2Q	3Q	4Q	2008/9月	10月	11月
シンガポール 新規輸出受注D.I.*	51.8	53.7	48.7	48.8	43.0	48.9	44.8	41.1
うちIT関連*	52.6	56.3	52.1	54.2	46.6	56.3	48.4	44.8

(注1) 直近四半期の計数については、公表済月までの平均をベースに算出。

(注2) 合成指数は、直近は10月の値。直近月まで公表されていないデータは、前月の前年比で横置きしている。

(注3) 輸出の季節調整値は、X-12-ARIMAによる当局算出値。

(注4) 輸出の< >内は、合成指数に占めるシェア(%, 2007年)。

(注5) 輸出、輸出合成指数はともに金額ベース。

(注6) 合成指数のIT関連は、標準国際貿易分類における、事務機器、データ処理機械、通信機器、音響機器、電気機械、家電製品、光学機器などの項目、また他分類ではこれらに該当する項目で定義。

(注7) *印は、50を上回れば「改善」、下回れば「悪化」。

(出所) CEIC

(図表3-3)

(3) 生産関連

(季調済前期比、() 内は前年比、%)

		2006年	2007年	2008/2Q	3Q	4Q	2008/9月	10月	11月
生産合成指数		7.0	6.1	0.1	▲ 1.0				
うちIT関連寄与度				0.2	0.1				
韓国	鉱工業生産指数	8.4	6.8	1.3 (8.6)	▲ 2.1 (5.6)	▲ 3.4 (▲ 2.4)	▲ 0.5 (6.2)	▲ 2.3 (▲ 2.4)	
	企業景気実査指数 [†] (季調済)	96.0	99.8	90.8	84.5	57.7	75.7	63.5	51.9
台湾	鉱工業生産指数	4.7	7.8	0.1 (6.8)	▲ 2.6 (0.4)	▲ 11.2 (▲ 12.5)	▲ 4.8 (▲ 1.2)	▲ 8.3 (▲ 12.5)	
タイ	製造業生産指数	7.3	8.2	▲ 0.0 (10.1)	1.6 (7.6)	▲ 1.7 (1.9)	▲ 2.7 (4.3)	0.3 (1.9)	

(注1) 直近四半期の計数については、公表済月までの平均をベースに算出。

(注2) 合成指数は、直近は9月の値。直近月まで公表されていないデータは、前月の値で横置きしている。

(注3) 生産指数の季節調整値は、現地統計またはX-12-ARIMAによる当局算出値。

(注4) 生産、生産合成指数はともに数量ベース。

(注5) 合成指数のIT関連は、標準国際貿易分類における、事務機器、データ処理機械、通信機器、音響機器、電気機械、家電製品、光学機器などの項目、また他分類ではこれらに該当する項目で定義。

(注6) †印は、100を上回れば「改善」、下回れば「悪化」。

(4) 内需関連

(季調済前期比、() 内は前年比、%)

		2006年	2007年	2008/2Q	3Q	4Q	2008/9月	10月	11月
韓国	小売数量指数	4.1	5.3	▲ 1.1 (2.5)	0.1 (1.1)	▲ 3.8 (▲ 3.7)	▲ 3.6 (▲ 1.8)	▲ 1.4 (▲ 3.7)	
	消費者信頼感指数 [†]	101.0	107.3	86.0	92.0	86.0	96.0	88.0	84.0
	機械投資推計指数	8.9	8.6	1.4 (0.1)	3.2 (6.1)	▲ 12.8 (▲ 7.7)	▲ 2.9 (7.1)	▲ 11.0 (▲ 7.7)	
台湾	小売指数	1.2	1.6	(▲ 2.5)	(▲ 8.4)	(▲ 5.3)	(▲ 7.8)	(▲ 5.3)	
	消費者コンフィデンス [†]	68.7	66.2	63.3	55.4	51.1	54.3	52.2	50.0
タイ	民間消費指数(PCI)	2.3	1.5	▲ 0.1 (4.0)	2.4 (5.2)	▲ 0.5 (2.8)	1.0 (5.9)	▲ 1.1 (2.8)	
	民間投資指数(PII)	2.2	▲ 0.5	(4.7)	(3.7)	(1.9)	(3.3)	(1.9)	

(注1) 直近四半期の計数については、公表済月までの平均をベースに算出。

(注2) †印は、100を上回れば「改善」、下回れば「悪化」。

(注3) タイの民間投資指数(PII)は、後方3ヶ月移動平均。

(5) 消費者物価指数(CPI)

(前年比、%)

		2006年	2007年	2008/2Q	3Q	4Q	2008/9月	10月	11月
韓国 ()内はコア		2.2 (1.8)	2.5 (2.3)	4.8 (3.9)	5.5 (4.8)	4.7 (5.3)	5.1 (5.1)	4.8 (5.2)	4.5 (5.3)
台湾 ()内はコア		0.6 (0.5)	1.8 (1.4)	4.2 (3.4)	4.5 (3.7)	2.1 (2.6)	3.1 (3.3)	2.4 (2.9)	1.9 (2.4)
タイ ()内はコア		4.6 (2.3)	2.2 (1.0)	7.5 (2.8)	7.2 (3.0)	3.0 (2.2)	6.0 (2.6)	3.9 (2.4)	2.2 (2.0)
インドネシア		13.1	6.4	9.9	12.0	11.7	12.1	11.8	11.7

(注1) 直近四半期の計数については、公表済月までの平均をベースに算出。

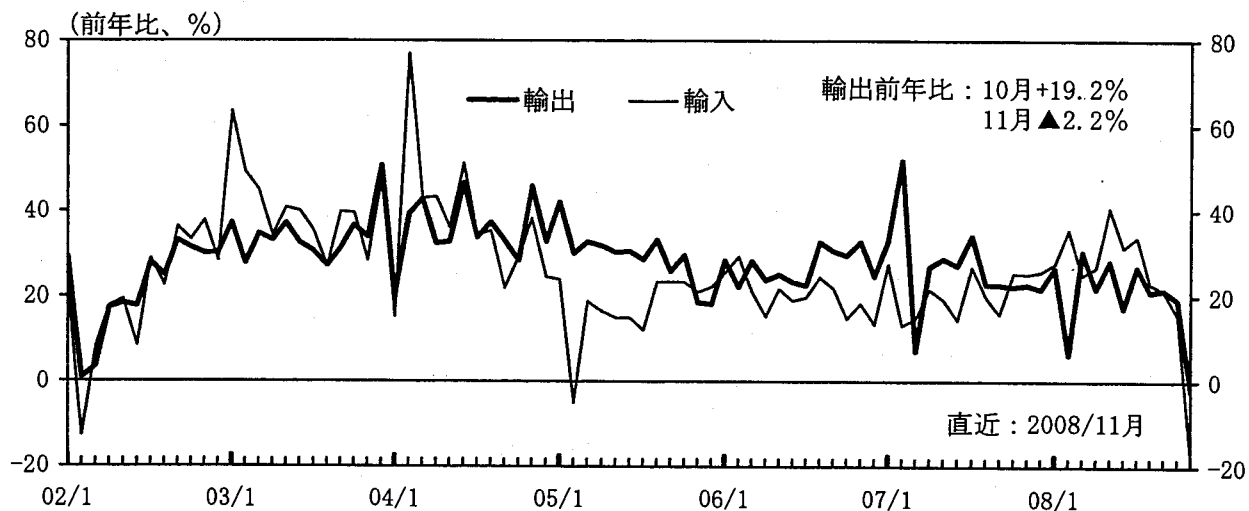
(注2) 韓国のCPIコアは、CPI総合から穀物以外の農産物、石油関連製品を控除。台湾のCPIコアは、CPI総合から生鮮食料品およびエネルギーを控除。タイのCPIコアは、CPI総合から非加工食品、エネルギーを控除。

(注3) インドネシアは、新基準年データの利用可能範囲が限定されるため、6月以降の計数は2007年基準、その他は2002年基準。

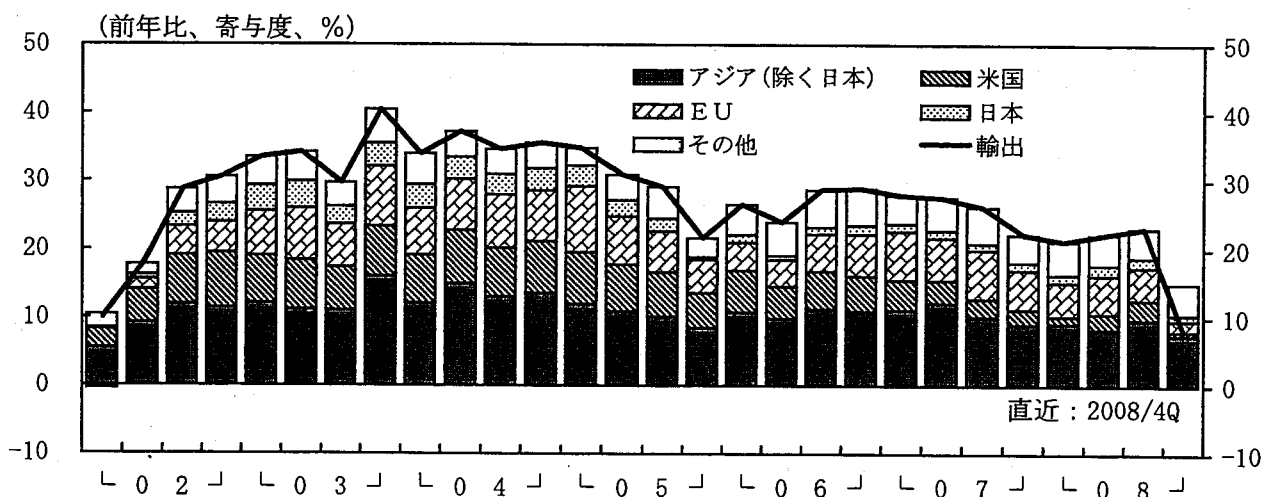
(出所) CEIC

中国の経済指標

1. 輸出入

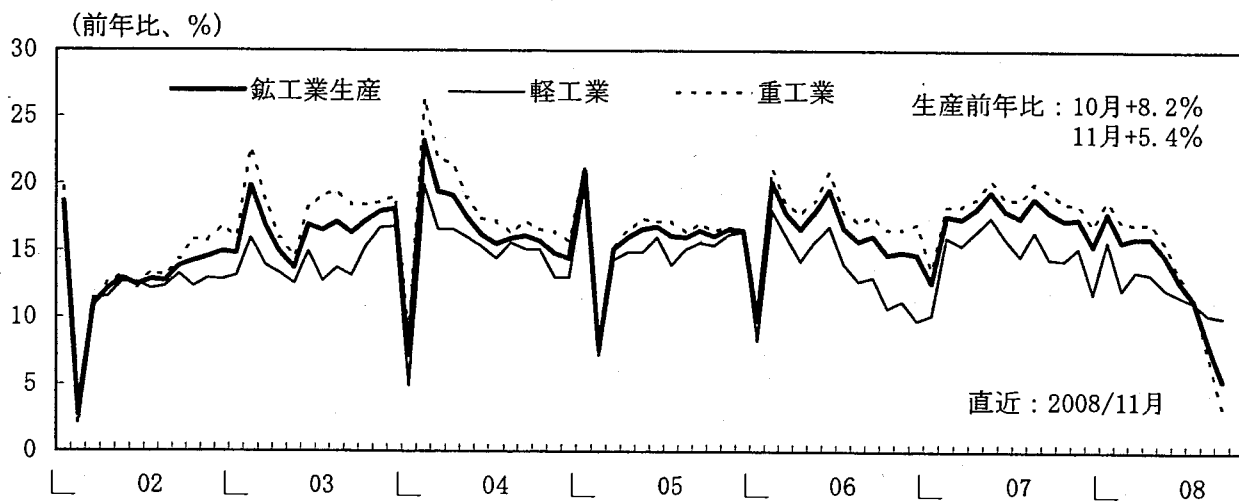


(参考) 輸出の国別内訳



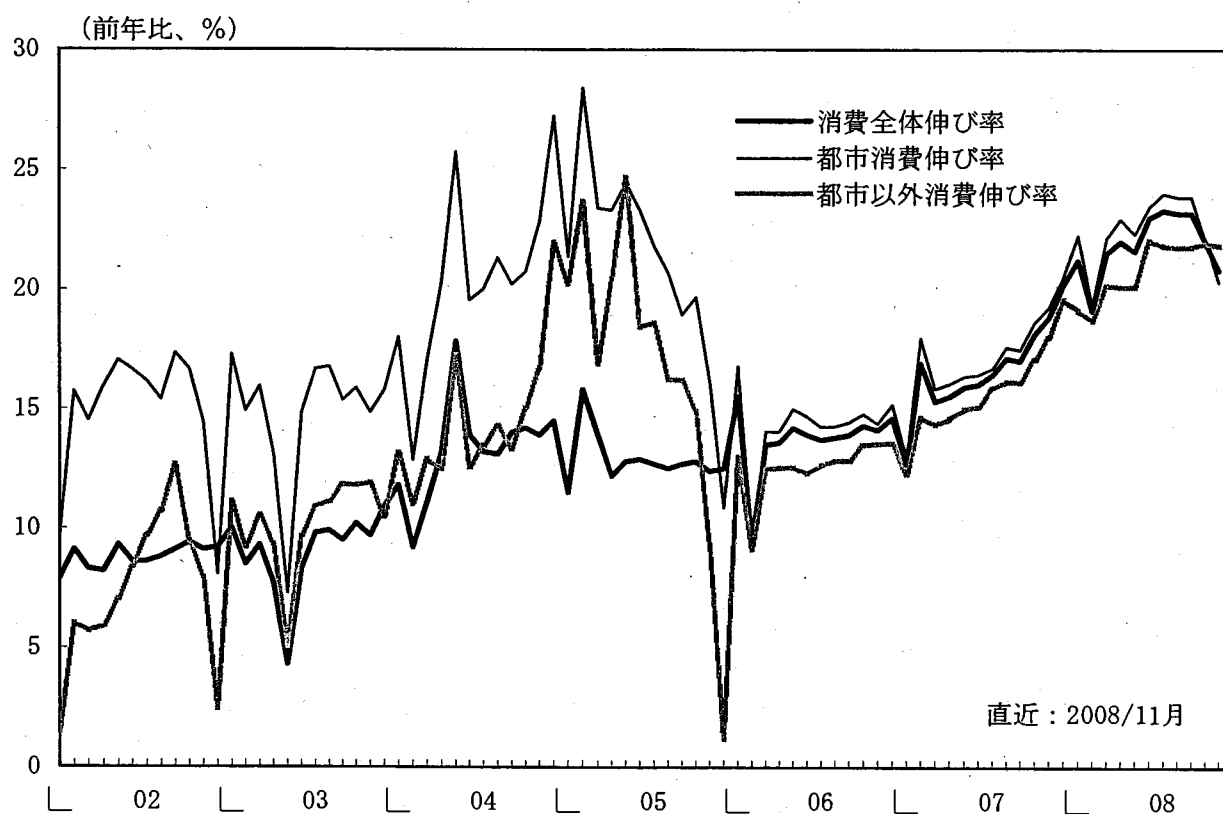
(注) 直近4Qは、10～11月の値。ただし、アジア(除く日本)、その他は、10月の値。

2. 工業生産

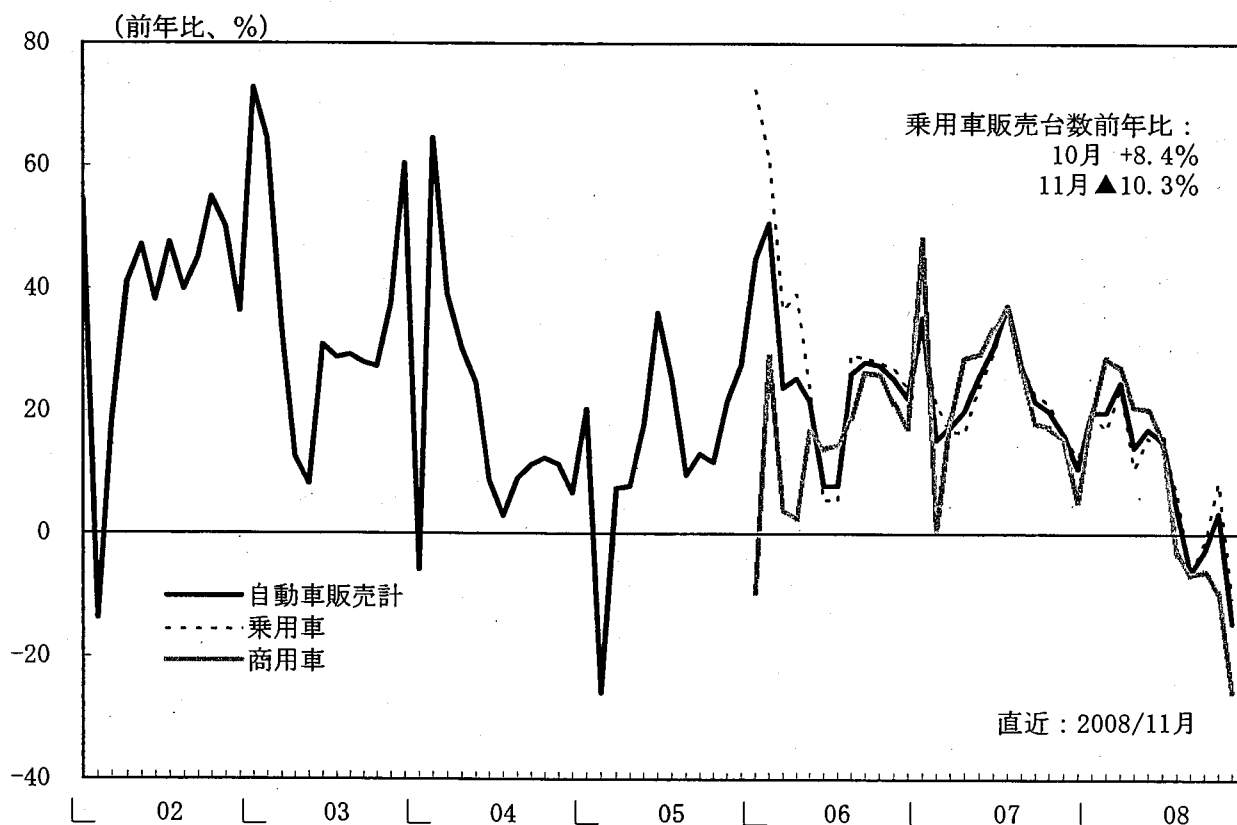


(資料) CEIC

3. 消費財小売上総額（名目ベース）



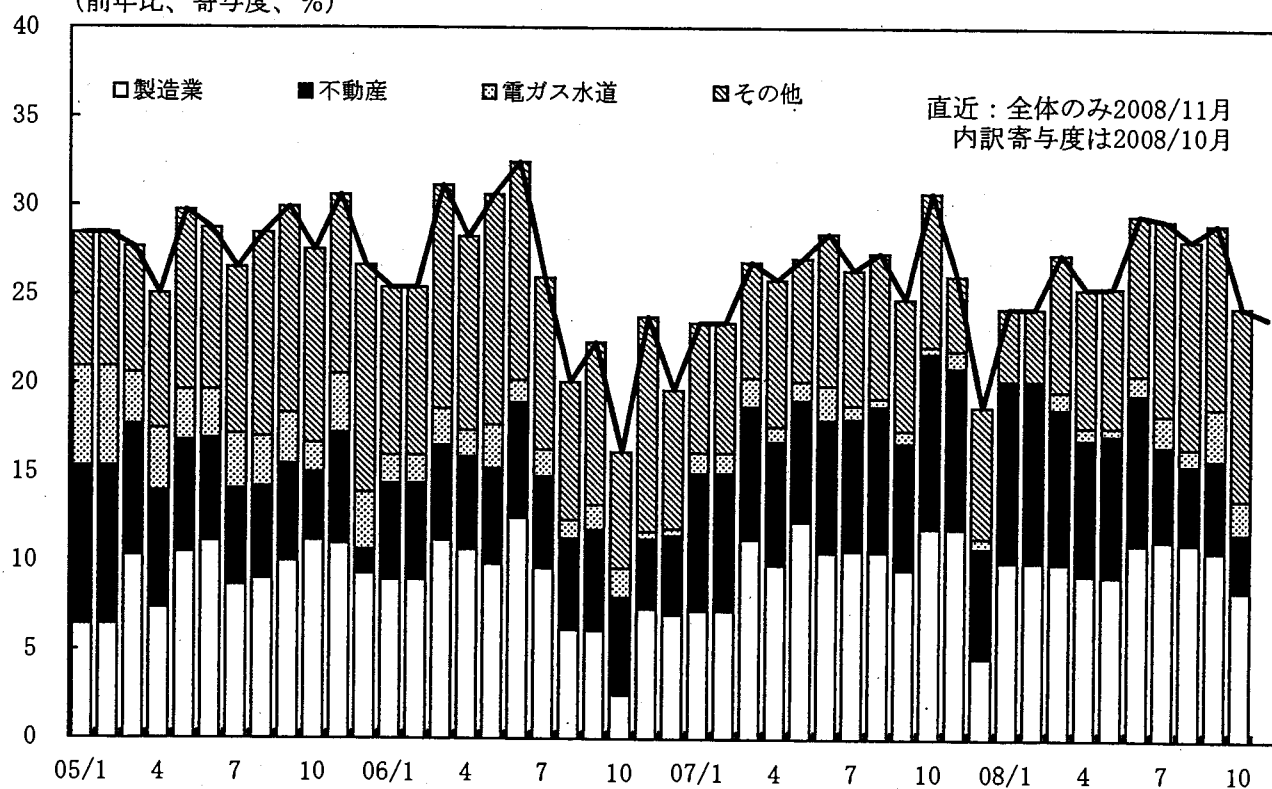
4. 自動車販売台数



(資料) CEIC

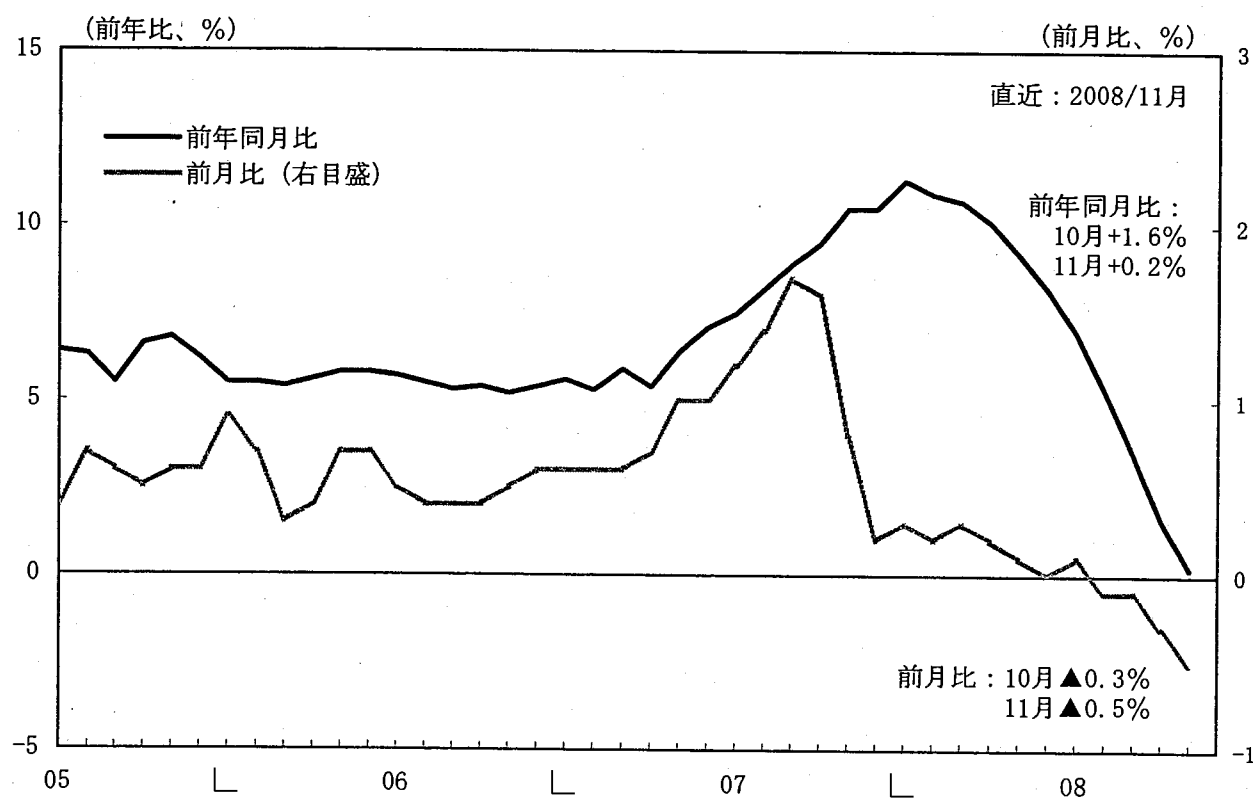
5. 固定資産投資

(前年比、寄与度、%)



(注) 1月単月の値が公表されないため、1、2月は等速と仮定。

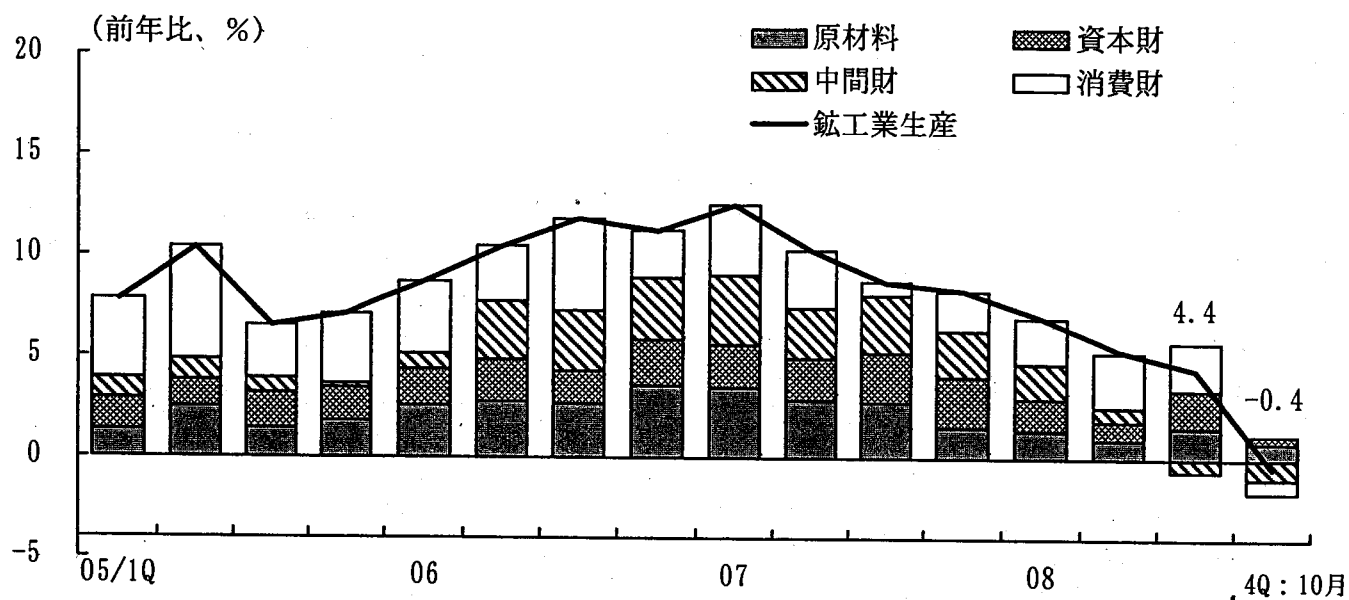
6. 不動産価格指数 (建物、主要70都市)



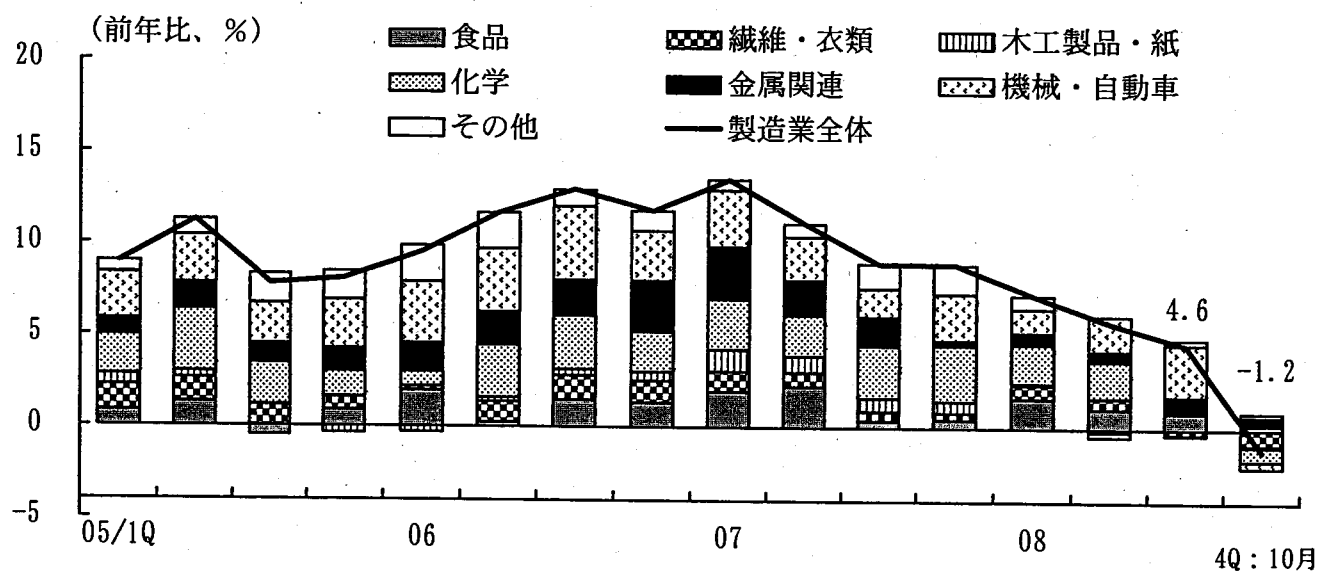
(資料) CEIC

(図表5)

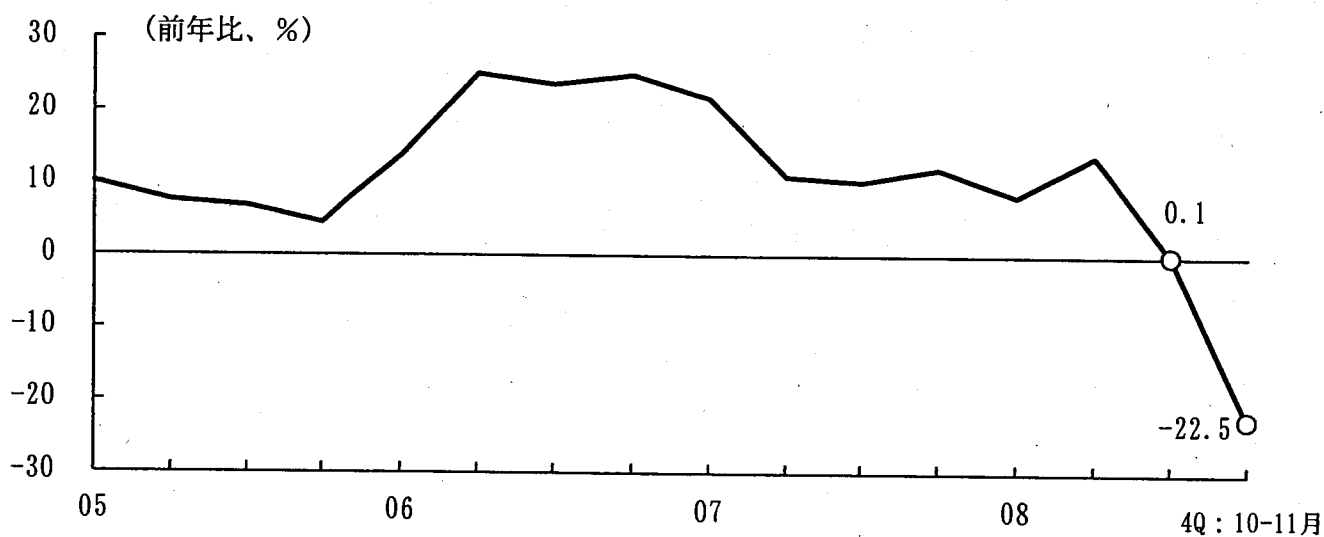
インドの鉱工業生産



(参考1) 製造業の内訳



(参考2) 四輪自動車販売台数



<不開示情報：有（種類：審議・検討）>
<配布先：金融政策決定会合関係者限り>
<作成局における保管期間満了時期：2038年12月>

2008.12.15

調査統計局

経済活動の現状評価

1. 概況

（現状認識）

わが国の経済をみると、輸出は減少している。企業収益は減少を続けており、企業の業況感も悪化している。そうしたもとで、設備投資も減少している。個人消費は、雇用・所得環境が厳しさを増す中で、弱まっている。また、住宅投資は横ばい圏内で推移している。この間、公共投資は低調に推移している。以上のような内外需要を反映し、生産は大幅に減少している。

以上を踏まえると、「わが国の景気は悪化している」と判断される。

—— 前回決定会合以降の1か月間に公表された経済指標の特徴をまとめると、以下の通り。

- ① 実質輸出は、7～9月に前期比+1.7%といった小幅の増加となったが、10月の7～9月対比は-3.8%と再び減少した。実質輸出は円高が進む局面では統計上強めに出る傾向があり、実勢はさらに弱いと考えられる。また、ミクロ情報などを踏まえると、目先は一段の落ち込みが予想され、落ち込み幅はかなり大きくなる可能性もある。
- ② 設備投資は、資本財総供給や機械受注などの動きからみて、減少傾向がより鮮明になってきていると判断される。12月短観をみると、企業収益が大幅に下方修正され、業況感も、中小企業で「悪い」超幅がさらに拡大し（全産業、9月調査-21%ポイント→12月調査-28%ポイント）、大企業でも大幅な「悪い」超に転じる（同、0ポイント→-16%ポイント）など、悪化が鮮明になっている（図表1）。こうした状況を受けて、2008年度の設備投資計画も、はっきりと下方修正されている。ミクロ情報等を踏まえると、企業収益はさらに下方修正される可能性が高く、2009年度の設備投資はかなり減少する可能性が高い。
- ③ 個人消費は、このところ弱さが目立ってきている。雇用・所得環境が厳しさを増す中で、マイナード関連指標は一段と悪化しており、自動車販売が大幅に落ち込んでいるほか、これまで好調を続けてきた家電販売にも息切れ感が

出てきている。

④ 以上の内外需要を反映し、鉱工業生産の減少幅は拡大しており、10～12月の前期比マイナス幅は1割前後に達する可能性が高い。出荷・在庫バランスの悪化は幅広い業種に広がっており、1～3月も生産の大幅な減少が続く見通しである。この結果、1～3月の生産は前年比で2割減に迫り、2002年頃の水準まで低下する可能性が高い。

⑤ 実質GDPの2次速報をみると、7～9月の前期比は、在庫投資の下振れなどにより、1次速報の-0.1%（年率換算-0.4%）から-0.5%（同-1.8%）に下方修正された（図表2）¹。また、前年比では、-0.5%と一次速報（-0.1%）対比で下振れ、はっきりしたマイナスとなった。潜在成長率を大きく下回る成長率が続いているため、需給ギャップは急ピッチでマイナス幅を拡大している（当局試算、1～3月+0.1%→4～6月-0.5%→7～9月-1.3%）。このところの経済活動の落ち込みの急激さを踏まえると、10～12月の需給ギャップは-2%を下回る見込みであり、1～3月には-3%を下回る水準まで低下していく可能性がある²。

所得形成を表す実質GNIの前年比をみると、7～9月は、交易利得の下押し寄与の拡大が続く中、実質GDPがマイナスに転じたことから、-2.8%と大幅なマイナスとなった（図表3）。

—— 以上のように、実物経済面での負の循環メカニズムが急速に強まり、需給ギャップのマイナス幅もはっきりと拡大していることなどを踏まえると、景気の基調判断については、「停滞色が強まっている」から「悪化している」への変更が適当と考えられる。

物価の現状をみると、国内企業物価は、国際商品市況の下落を主因に、3か月前比でみて大幅に下落している。消費者物価（除く生鮮食品）の前年比は+2%程度となっており、石油製品価格の下落を主因にプラス幅が縮小している。

—— 10月の全国の消費者物価（除く生鮮食品）の前年比は、石油製品のプラス幅縮小を背景に、9月の+2.3%から0.4%ポイント低下し+1.9%となった。除く食料・エネルギーの前年比は引き続きゼロ近傍で推移している（7月+0.2%→8月0.0%→9月+0.2%→10月+0.2%）。

（先行き）

景気の先行きについて、当面の動向を需要項目別にみると、輸出は、海外経済の一段の減速や為替円高を背景に、大幅に減少するとみられる。国内民間需要も、

¹ 2次速報値公表に先立って、2006年度の計数が確々報に、2007年度の計数が確報に、それぞれ改定された。この結果、2006年度の実質GDP成長率は個人消費の下振れから-0.2%ポイントの下方修正、2007年度は設備投資や政府消費の上振れから+0.2%ポイントの上方修正となった（2006年度：改定前+2.5%→改定後+2.3%、2007年度：同、+1.7%→+1.9%）。

² ちなみに、第12循環の需給ギャップのボトムは1999年4～6月の-3.6%、第13循環のボトムは2002年1～3月の-3.3%。

企業の収益や資金調達環境が悪化し、雇用・所得環境も厳しさを増すもとで、さらに弱まっていく可能性が高い。この間、公共投資は低調に推移すると考えられる。以上の需要動向と在庫調整圧力を背景に、生産は大幅な減少を続けるとみられる。

以上を総合すると、「景気は、当面、悪化のテンポが速まる可能性が高い」と予想される。

—— 外部環境についてみると、グローバルな規模で、金融・実体経済の負の相乗作用が強まっている。米欧では、金融資本市場の緊張が続き、金融機関や投資家のリスクテイク力が大きく低下するもとで、景気が悪化している。新興国や資源国でも、米欧の景気悪化に伴う輸出の減速や資金の海外流出等に伴う金融環境の悪化により、減速傾向が強まっている。先行きは、各国の金融・財政政策が景気悪化を和らげる方向に作用していくことが期待されるが、当面については、先進国、新興国ともに景気の更なる下振れリスクに警戒が必要であると考えられる。

—— 日本経済については、政府の各種対策や本行による金融面の措置は景気下支えに寄与すると期待されるが、世界経済が様々な不均衡を抱えるだけに、その調整が進捗し、日本経済の回復の条件が整うには、相応の時間を要すると考えられる。当面については、輸出・生産の急速な減少、家計の所得およびマインドの悪化、企業の資金繰りの厳しさなどを踏まえると、金融・実体経済の負の相乗作用が強まっていくリスクについて、注意が必要である。

当面の物価動向についてみると、国内企業物価は、国際商品市況の下落を主因に、下落を続けるとみられる。消費者物価（除く生鮮食品）の前年比は、石油製品価格の下落や食料品価格の落ち着きを反映して、低下していくと予想される。

—— 消費者物価（除く生鮮食品）の前年比については、除く食料・エネルギーに目立った変化がみられないため、エネルギー・食料品の価格動向如何という面が大きく、当面は特に石油製品価格に左右されやすい。石油製品価格の下落や食料品価格の落ち着きを反映して、11月は+1%程度、12月は+0%台前半、1～3月にはゼロ%近傍まで低下すると見込まれる。また、来年度にかけては、マクロ的な需給悪化に伴う物価下落圧力の高まりについても、注意が必要である。

2. 最終需要

（1）外生需要

（公共投資）

公共投資は低調に推移している。先行きについても、国・地方の厳しい財政状況を背景に、低調に推移すると考えられる（図表4、5）。

- 工事進捗を反映する公共工事出来高、発注の動きを示す公共工事請負金額ともに、振れを均してみると、低調に推移している³。
- GDPベースの公共投資（2次速報）をみると、2期連続で減少したあと、7～9月は概ね横ばいの動きとなった（図表2（2）、5（1））。
- 先行きについては、補正予算による上積みなどを踏まえると、減少傾向には歯止めがかかり、低水準横ばい圏内で推移するとみられる。

（輸出入）

実質輸出は減少している（図表6、7（1））。

- 実質輸出は、4～6月に前期比－3.3%と減少したあと、7～9月は同＋1.7%といったん小幅の増加となったが、10月は7～9月対比で－3.8%と再び減少した。なお、円高が進む局面では実質輸出が統計上強めに出るため、10月の実勢はより弱めであると考えられる⁴。

地域別にみると（図表8（1））、米国向けは、自動車の落ち込みを主因に、4～6月、7～9月と前期比で大幅に減少したあと、10月も7～9月対比で減少した（図表9）。EU向けやNIEs向けは、4～6月に大幅に減少したあと、7～9月にいったん増加したが、10月は再び大幅に減少した。ASEAN向けは、4～6月、7～9月に続き、10月もほぼ横ばいにとどまった。中国向けは、7～9月に小幅の増加にとどまったあと、10月は小幅の減少となるなど、頭打ちとなってきている。その他地域（中東、中南米、ロシアなど）向けについても、均してみると、増加テンポが緩やかになってきている（図表10）。

財別にみると（図表8（2））、自動車関連は、米国向けの落ち込みが続いていることに加え、EU向けも減少に転じていることなどから、全体として減少がより鮮明となってきている。情報関連は、4～6月、7～9月に増加したあと、10月はNIEs向け中心に大幅な減少となった。消費財も、7～9月に小幅の減少となったあと、10月は大きく減少した。資本財・部品や中間財については、均してみると、増勢が鈍化してきている。

先行きの輸出については、当面、海外経済の一段の減速や為替円高を背景に、大幅に減少するとみられる。

- 輸出を取り巻く環境をみると、米国については、住宅市場の調整が続く中

³ 請負金額の4～11月累計の前年比は－1.7%。

⁴ 貿易統計の輸出入金額（円ベース）は、外貨建て分の円貨換算に際して、実勢よりも2週間遅れる税関長公示レートを用いて作成されている。ところが、実質輸出入は、以上のようにして作成された輸出入金額を、概ね実勢レートを反映した輸出入物価指数で割り込むことによって、算出されている。その結果、実質輸出入は、期中で円高が進むときには強くなる方向に、円安が進むときには弱くなる方向に、それぞれ統計上のバイアスを持つ。10月は、7～9月対比で円高が進み、税関長公示レートが実勢レートの円高化を反映仕切れていないため、実質輸出入は実勢対比で幾分強めとなっている。

で、景気は悪化している。金融環境のタイト化が景気を下押ししており、そのもとで、わが国の輸出への影響が大きい自動車の販売が大幅に減少している。EUでも、金融機関の貸出姿勢の厳格化などが影響し、景気は悪化している。新興国や資源国の経済も、米欧景気の悪化に伴う輸出の減速や資金流出等に伴う金融環境の悪化により、減速傾向が強まっている。こうした海外経済全体の減速は、目先、一段と鮮明になるとみられる⁵。また、米欧の金融市場におけるストレスの強まりや雇用・所得環境の悪化などを踏まえると、海外経済の下振れリスクに注意が必要である。

- 情報関連を取り巻く環境をみると（図表 11）、最終製品の世界需要は、全般に増勢が鈍化してきており、年末需要も総じて盛り上がりを欠いている模様である。半導体の海外市況も、供給圧力が強いこともあって、下落が続いている。
- 為替相場について物価上昇率の内外格差を勘案した実質実効レートは、対欧州や対NIEsを中心に、このところ円高方向に振れている（図表 12）。
- 企業ヒアリングによると、このところ、米欧での需要が一段と減少していることに加え、新興国や資源国からの需要鈍化も明確になってきているとの情報が増えている。こうした点や上記為替円高の影響も踏まえると、当面の輸出ははっきりとした減少を続ける可能性が高い。

実質輸入は横ばい圏内の動きとなっている（図表 6、7 (1)）。

- 実質輸入は、4～6月に前期比-3.2%とかなり減少したあと、7～9月は同+2.9%となり、10月も7～9月対比で+3.3%と増加した。ただし、足もとの増加には、素原料や食料品などの一時的とみられる大幅増加が寄与している。
- 財別にみると（図表 13(2)）、情報関連や消費財は、4～6月に減少したあと、7～9月にいったん増加したが、10月は7～9月対比で再び減少した。資本財・部品（除く航空機）は、7～9月に減少したあと、10月は再び増加したが、均してみると、増勢が鈍化してきている。素原料や中間財、食料品については、10月は7～9月対比で大幅に増加したが、基調としては、横ばい圏内の動きとみられる。

先行きの輸入については、円高がプラスに作用するものの、国内景気の悪化が続くことなどから、当面、横ばい圏内の動きにとどまると考えられる。

純輸出の動きを表す実質貿易収支をみると、上記輸出入の動きを反映して、減少している（図表 6、7 (2)）。先行きについては、当面、減少が続く可能性が高い。

⁵ 12月短観をみると、海外での製商品需給判断DIは、供給超幅が急速に拡大しており、先行きも更なる拡大が見込まれている（製造業、9月調査-6%ポイント→12月調査-28%ポイント→先行き-34%ポイント）。

- 名目貿易・サービス収支は、7～9月に赤字化したあと、10月は原油価格の下落などによる交易条件の改善から、赤字幅が縮小した。現状の原油価格を前提とすると、当面は、交易条件の改善が実質貿易収支の減少を上回っていくため、名目貿易・サービス収支は黒字に転じる可能性が高い。経常収支の黒字幅についても、横ばい圏内で推移から持ち直しに転じていくとみられる。

(2) 内生需要

(企業収益、設備投資)

企業収益は減少を続けており、企業の業況感も悪化している（図表 14）。

- 法人企業統計の売上高経常利益率は引き続き低下している（図表 14、15）。7～9月は、エネルギー・原材料価格の上昇に加えて、数量も落ち込んだことから、全産業・全規模ベースで、3.11%と、4～6月（3.85%）に比べて0.74%ポイント低下した。業種別・規模別にどの区分でみても、利益率は概ね2003年末頃の水準まで低下している。
- 12月短観の事業計画で経常利益（全産業・全規模）をみると、2008年度については、2年連続で減益となる見通しである（同-19.1%）。これを規模別にみると（図表 16）、大企業では、前回から大幅に下方修正され、2割程度の減益が見込まれている（減益は7年振り）。中小企業についても、2年連続での減益となり、減益幅が大きく拡大する見通しとなっている。
- 企業の業況感は悪化している。業況判断DIをみると（前掲図表 1）、製造業大企業では、内外需要の急速な鈍化などを背景に、5期連続で悪化し、「悪い」超幅を大幅に拡大した（変化幅の-21%ポイントは1974年8月<-26%ポイント>以来の大きさ）。先行きについても、さらに「悪い」超が拡大する予想となっている。特に、自動車や電気機械、一般機械といった、加工業種の悪化が目立っている。非製造業大企業は、6期連続の悪化となり、「悪い」超に転じた。先行きは、さらに「悪い」超幅を拡大する予想となっている。
- 一方、中小企業の業況判断についてみると、製造業中小企業では、2006年末をピークに悪化傾向にあり、足もとでは「悪い」超幅がかなり拡大している。先行きについては、悪化が加速する見通しとなっている。非製造業中小企業では、建設業や消費関連業種を中心に構造的な調整圧力がかかり続けるもとで、マクロ経済の減速の影響が加わり、7期連続で「悪い」超幅が拡大しており、先行きも一段の悪化を見込んでいる。

設備投資は減少している（図表 17）。先行きについては、海外経済の一段の減速や企業収益の減少が続き、企業の資金調達環境も悪化するもとで、当面、大幅に減少する可能性が高い。

- 法人季報でみた設備投資は、昨年10～12月以降4四半期連続で減少している（図表 17）。業種別にみると（図表 18）、非製造業は、ファイナンス・

リースに関する会計基準の変更の影響から⁶、リース業が大幅に減少しているが、リース業以外も弱い動きとなってきた。製造業は、これまで増加していた大企業も含めて、7～9月は減少した。

GDPベースの実質設備投資（2次速報）も、4～6月に続き、7～9月もはっきりと減少した（図表2(2)）⁷。

—— 機械投資の同時指標である資本財総供給（全体および除く輸送機械）は、減少を続けている（図表17、19(1)）。内訳をみると、半導体製造装置の減少が続いているほか、建設機械や工作機械なども減少している。

—— 機械投資の先行指標である機械受注（民需、除く船舶・電力）は、7～9月に続き、10月の7～9月対比も大幅な減少となった（図表17、20(1)）。落ち込みは幅広い業種・品目でみられている⁸。

建設投資の先行指標である建築着工床面積（民間非居住用）は、大型案件の計上もあって7～9月に横ばいとなったあと、10月は7～9月対比ではっきりと減少した。内訳をみると、製造業は幾分弱い動き、非製造業は減少傾向となっている（図表17、20(2)）。

—— 12月短観で2008年度設備投資計画（ソフトウェア除く、土地投資額含む）をみると（図表17、21）、大企業では前年比-0.2%と、製造業を中心に、前回調査比-1.8%ポイント下方修正され、2002年度以来の前年比マイナスとなった。今後も、景気の急速な悪化が続くもとで、下方修正の動きは続く可能性が高い。

中小企業の2008年度設備投資計画（同）は、9月対比ではごく小幅の上方修正にとどまり（+1.5%）、前年比-11.6%とかなり大幅のマイナスとなっている。この時期としては1999年度（-16.6%）以来の低い計画。

この間、ソフトウェア投資は、中小企業では前年比プラスとなっているが、大企業が大幅に下方修正され前年比マイナスとなったことから、全体では、前年並みの計画となっている。

これらを総合するかたちで、2008年度の全産業・全規模の投資計画をGD

⁶ ファイナンス・リースにおけるリース物件については、従来は貸し手側（リース業）で固定資産（設備投資）として計上され、借り手側（一般企業）ではオフバランス処理されることが多かった。これが、2008年4月1日以降開始する事業年度から適用される新しいリース会計基準により、貸し手側では流動資産として計上され、借り手側で固定資産に計上されることになった。設備投資をどちらでカウントするかの違いであるため、原則として、設備投資の集計値に影響は出ないはずであるが、例外規定の影響がある。すなわち、中小企業が借り手になっている場合やリース物件が小額の場合などには、借り手側では会計処理を変更しなくてもよいとの例外規定があるため、全体ではリース業側のマイナス効果が残る。また、会計処理の変更時期が全企業同時ではないことも、集計値に影響を及ぼしている。

⁷ 2007年度の実質設備投資の前年比は、速報の-0.1%から確報の+2.3%へと上振れたが、これには、速報の推計に用いられる法人季報の2007年度計数が、サンプル要因から低めに出ていたことが影響しているとみられる。

⁸ 10月の機械受注の前年比は、民需、除く船舶・電力でみると-15.5%、船舶・電力を含むベースでは-15.2%となる。外需が-44.2%の大幅マイナスとなっており、これを合わせた受注総額では-27.2%となっている。

Pの概念に近いベース（ソフトウェア含む、土地投資除く）でみると、前年比0.0%となっている⁹。

この間、生産・営業用設備判断DIをみると、製造業を中心に「過剰超」幅がはっきりと拡大している（前掲図表19(2)）。

（個人消費）

個人消費は、雇用・所得環境が厳しさを増す中で、弱まっている（図表22）。先行きは、当面、雇用・所得環境が厳しさを増すもとで、引き続き弱まっていく可能性が高い。

- 耐久消費財についてみると（図表23(2)）、乗用車の新車登録台数は、足もと落ち込みがさらに大きくなっており、除く軽自動車でみると、11月は前年比-27.9%の大幅減少となっている。家電販売額は、猛暑の影響（エアコンや冷蔵庫など）や北京オリンピック関連需要（薄型テレビなど）が剥落したこともあって、9、10月と、2か月連続で前月比減少した。ミクロ情報によると、堅調な増加を続けてきた薄型テレビなどのデジタル家電も、勢いがなくなってきている模様である。
- 全国百貨店売上高や全国スーパー売上高は（図表22、24(1)）、家計の節約志向の強まりを反映し、弱めの動きが続いている。一方、コンビニエンスストア売上高は、天候要因による振れを伴いつつも、基調としては、たばこの特殊要因（「タスポ」効果）などから、強めの動きとなっている。
- サービス消費をみると（図表24(2)）、旅行取扱額は、航空運賃の燃油サーチャージが高止まりする中、海外旅行中心に、弱い動きが続いている。外食産業売上高は、天候要因等で振れを伴いつつも、均してみると、伸び悩みが続いている。
- 以上の動きを、販売統計合成指数でみると、このところ弱さが目立ってきている（図表25(1)）。各種財の国内向け出荷と輸入を合計した消費財総供給も、耐久財の落ち込みから、足もと減少している（図表25(2)）。
- 需要側から個人消費を捉えた、家計調査の消費水準指数（GDPの推計に利用される品目にほぼ限定した「除く住居等」ベース）でみると、4～6月、7～9月と減少したあと、10月の7～9月対比も減少した。家計消費状況調査の支出総額（二人以上の世帯、実質ベース）についても、4～6月、7～9月に続き、10月の7～9月対比も減少した（図表22、23(1)）。
- GDPベース（2次速報）の個人消費をみると、7～9月は前期比+0.3%と増加したが、これには4～6月の減少（-0.7%）に対する反動という面もある（図表2(2)、25(3)）¹⁰。形態別には、引き続き、耐久財が高い伸び

⁹ 金融機関の設備投資も足し上げたベースでは+0.1%と、小幅のプラスになっている。

¹⁰ 消費水準指数（除く住居等）が低下しているにもかかわらず、GDPベースの個人消費が

を示している一方、半耐久財や非耐久財、サービスは伸び悩んでいる。

需要・供給両面の月次統計をGDPに近い方法で合成した消費包括指数をみると¹¹、10月は7～9月対比で-0.3%と再び減少した（図表25(3)）。

—— この間、消費者コンフィデンスは、株価の下落や雇用不安の高まりなどを背景に悪化しており、前回ボトム並み、ないしはそれを下回る水準となっている（図表26）。

（住宅投資）

住宅投資は横ばい圏内で推移している。先行きの住宅投資については、着工戸数の動きなどからみて、当面は横ばいないし弱含みで推移すると予想される。

—— GDPベース（2次速報）の住宅投資は、4～6月は前期比-2.6%と減少したが、7～9月は、昨年度後半の着工の持ち直しがラグをもって寄与したため、+3.9%と増加した（図表2(2)）。

—— 先行指標である新設住宅着工戸数をみると（図表27、28(1)）、本年初から横ばい圏内で推移してきたが、10月は水準が切り下がった。

—— 首都圏新築マンション販売は（図表27、28(2)）、減少を続けている。10～11月の全売却戸数（年率）は3.7万戸と低水準であり、マンション価格の先安観や雇用・所得環境の悪化などを背景に、新規契約率は好不調の目安とされる70%をはっきりと下回っている。

—— 政府では過去最大規模の住宅ローン減税を打ち出しており、その下支え効果が期待されるが、最終決定され実施に移されるまでの間は、かえって買い控えの動きが強まる可能性もある。

3. 生産・出荷・在庫

鉱工業生産は大幅に減少している（図表29、30）。

—— 生産は、3四半期連続で前期比-1%前後の減少となったあと、10月の7～9月対比は-3.6%と大幅に減少した（図表30）。10月の7～9月対比を業種別にみると、多くの業種が7～9月に続き減少しており、とりわけ輸送機械（除く船舶・鉄道車両）、電子部品・デバイス、一般機械、化学などの落ち込みが大きくなっている。

増加した要因としては、①消費水準指数の低下はGDPの算出に使われていない項目（教育など）の落ち込みによる部分が多いこと、②GDPの実質化は、名目値を品目毎に対応する物価指数でデフレートすることにより算出しているのに対し、消費水準指数の実質値は、簡便法として全体を消費者物価の総合指数でデフレートすることにより算出していること、③供給サイドの統計が強めであったこと、などが考えられる。

¹¹ 消費包括指数（CCI）は、「生産動態統計」、「特定サービス産業動態統計調査」、「家計調査」、「家計消費状況調査」などを用い、GDP個人消費にできるだけ近い方法で調査統計局が試算している指標（対外非公表）。

—— 出荷も、3 四半期連続で減少したあと、10 月の7～9 月対比は-4.0%の大幅減少となった。財別にみると（図表 31）、資本財は、半導体製造装置のほか、建設機械、工作機械など多くの品目で減少している。耐久消費財は、自動車を中心に、足もと落ち込みが大きくなっている。非耐久消費財は、横ばい圏内で推移している。建設財は、改正建築基準法施行の影響が薄れるに連れていったん下げ止まったが、このところ再び減少している。この間、生産財は、電子部品・デバイスに加え、化学、非鉄、鉄鋼などの落ち込みもはつきりとしてきている。

在庫は、出荷が大幅に減少するもとで、増加が目立ってきており、両者のバランスは悪化している（図表 29、32）。

—— 財別にみると、資本財（除く輸送機械）や耐久消費財は、出荷の減少幅が拡大する中で、在庫調整圧力が高まっている。生産財については、電子部品・デバイスに加え、それ以外（化学、非鉄、鉄鋼など）でも、出荷が大きく減少し、在庫は積み上がっている。この間、建設財は、出荷・在庫バランスが崩れているわけではないが、出荷、在庫ともに減少が続いている。このように、出荷・在庫バランスの悪化は幅広い業種に広がっており、当面の生産に下押し圧力を加える要因となっている。

当面の生産については、内外需要の弱さが鮮明になり、在庫調整圧力も高まっていることから、大幅な減少を続けるとみられる。

—— 内外需要の落ち込みが目立っているもとで、在庫削減の動きが広がってきているため、企業の生産計画は大幅に下方修正されている。11、12 月の生産予測指数を用いて前期比を計算すると、10～12 月は-8.6%の減少となり、仮にこれが実現すると過去にない大幅な減少となる¹²。ヒアリングによると、10～12 月がこのような大幅な落ち込みとなったあと、来年1～3 月もかなり大幅な減少が続く見通しである。業種別には、輸送機械が内外販売の下振れなどから、電子部品・デバイスが内外セットメーカーの発注姿勢慎重化から、一般機械が設備投資先送りの動きの広範化等から、それぞれ大幅な減少となるほか、鉄鋼などの素材業種でも、自動車を中心とした加工業種の減産の影響を受けて、減少が続く見通し。

4. 雇用・所得

雇用・所得環境は厳しさを増している。

—— 労働需給に関連する指標をみると（図表 33、34）、10 月の有効求人倍率（有効求人数／有効求職数）は、0.80 倍と、9 か月連続で低下した。12 月

¹² 四半期ベースでみると、現在公表されている接続指数で遡れる 1953 年以降で最大のマイナス幅は 1975 年 1～3 月の-6.7%。1990 年代以降で最大のマイナス幅は 2001 年 7～9 月の-4.4%。

短観の雇用判断D I をみると、過剰超に転じている（図表 36）¹³。一方、10月の完全失業率は、前月に続き低下して3.7%となった。足もとの低下については、基本的に統計の振れとみられるが、就業機会の減少に伴う職探しの消極化も影響している可能性がある。

- 雇用面についてみると（図表 33、35(1)）、労働力調査の雇用者数は、前年比ゼロ%近傍の動きが続いている。業種別にみると、製造業や建設業などが弱い。また、企業規模別には、中小企業の弱さが目立っている。雇用者に自営業主・家族従業者を加えた就業者数は、2008年2月以降、前年比マイナスで推移している。
- 毎月勤労統計の常用労働者数の前年比は、10月は+1.3%となった（9月+1.4%）。2007年末頃（11月+2.2%）をピークに、伸び率の鈍化が続いている。なお、パート比率は、改正パートタイム労働法施行（2008年4月）の前後にいったん低下したが、その後上昇しており、均してみれば横ばい圏内で推移している（図表 35(2)）。この間、所定外労働時間は、製造業を中心に、このところ前年をはっきりと下回ってきている（図表 35(3)）。
- 一人当たり名目賃金をみると、10月速報は前年比-0.1%と、10か月振りに再びマイナスとなった（図表 33、37(1)）。最近の傾向からみて確報で多少上方修正されるとみられるが、企業収益が減少するもとで、賃金にも下方圧力がかかり始めている。内訳をみると、所定内給与は小幅のプラスを維持しているが¹⁴、所定外給与がマイナスに転じており、特別給与も弱めに推移している。なお、冬季賞与について、日本経団連（11月21日時点の第2回集計）、日本経済新聞社（12月1日時点の最終集計）のアンケート調査をみると、6年振りのマイナスが予想されている（それぞれ前年比、昨年+0.63%→本年-0.07%、昨年+0.71%→本年-0.80%）¹⁵。
- 雇用者所得は、以上のような雇用・賃金動向を反映し、伸び悩んでいる（図表 37(3)）。毎月勤労統計ベースの雇用者所得は、前年比プラス幅が縮小してきている。SNA雇用者報酬と同様に労働力調査を用いた雇用者所得は、前年比ゼロ%近傍の動きを続けている。

先行きの雇用者所得については、企業収益や生産の減少などを反映して、当面、弱含んでいく可能性が高い。

¹³ 短観で新卒採用計画（前年比）をみると、全産業・全規模ベースでみて、2007年度実績+6.6%のあと、2008年度計画+0.8%、2009年度計画-3.7%と、企業の採用意欲が急速に減退している姿がうかがわれる。規模別にみると、中小企業の2009年度計画の下方修正がかなり大幅なものとなっている（前年比-5.6%、修正率-8.7%）。

¹⁴ パートの所定内給与を時間当たりでみると、前年比伸び率がむしろ上昇傾向にある（図表 37(2)）。その理由は必ずしもはっきりしないが、改正パートタイム労働法の施行を受けた待遇改善が、足もとまではまだ続いている可能性がある。

¹⁵ これら調査の集計対象は、今春に夏と冬のボーナスの合計額を決めた企業が大半であり、今冬に交渉した企業に限ってみると、大幅な前年比マイナスとなっている。

- 製造業では大企業・中小企業を問わず、業績が大幅に悪化し、人員削減の動きが急速に広まっている。また、内需産業も含めて、企業倒産は増加傾向にある。これらが雇用・賃金面へ及ぼす悪影響は、今後さらに強まっていくとみられる。

5. 物価

（物価を取り巻く環境）

国際商品市況は大幅に下落している（図表 39）。

- 原油価格（WTI）は、7月中旬に145ドル程度まで急上昇したあと、世界経済減速が明確になる中で、投資家のリスク回避の動きもあって、下落が続いており、足もとは40ドル台半ばとピーク時の3割程度、2005年初頃の水準まで下落している。ドバイは40ドル前後まで下落している。非鉄金属や穀物も大幅な下落が続いている。半導体の海外市況についてみると、メモリ（DRAM、フラッシュメモリ）、液晶パネルとも、在庫放出圧力の増大等から、一段と軟化している。

輸入物価（円ベース）を3か月前比でみると、国際商品市況の下落を受けて、大幅に下落している（図表 39、40）。

- 為替円高を受けて輸出価格も下落しているが、輸入価格の下落がより大幅であるため、交易条件は改善している。

国内需給環境は、悪化している（図表 41）。

- 国内の需給環境について12月短観をみると、製商品・サービス需給判断は、国内・海外ともに供給超幅が急速に拡大している。また、設備判断と雇用判断の加重平均DIは、4四半期連続で悪化しており、足もとは供給超過に転じている。こうした中、販売価格判断は、製造業、非製造業とも下落超となった。

国内商品市況は、国際商品市況の動きや為替円高などを反映し、大幅に下落している（図表 42）。

- 石油製品や非鉄金属は、国際商品市況安などを背景に、大きく下落している。化学も、原油安や需要鈍化を背景に、反落している。鋼材は、原材料価格高の転嫁の動きなどから、年初から夏にかけて大幅に上昇したが、このところは、建設用を中心とする内外需要の低迷やスクラップ価格の急落を受けて、反落している¹⁶。

（物価指数）

国内企業物価（夏季電力料金調整後）を3か月前比でみると、国際商品市況の

¹⁶ 鉄スクラップの市況は、ごく足もとでは反発している。

下落を主因に、大幅に下落している（図表 38、43）。先行きについては、当面、国際商品市況の下落を主因に、下落が続けるとみられる。

—— 国内企業物価は3か月連続で前月比低下しており、11月の3か月前比は-3.7%と前月の-1.8%から下落幅を拡大した¹⁷。

内訳をみると（図表 43）、「為替・海外市況連動型」は石油・石炭製品や非鉄金属の下落から、「鉄鋼・建材関連」は鉄鋼やスクラップ類の下落から、それぞれマイナス幅を拡大している。「素材（その他）」は、化学製品の動向を反映し、マイナスに転じている。「その他」は、加工食品の落ち着きや農林水産物の下落などを受けて、一頃に比べるとプラス幅が縮小している。一方、「電力・都市ガス・水道」は、これまでの燃料高などを背景に、上昇を続けている。「機械類」も、輸送用機器を中心に、既往のコスト高の転嫁の動きから、このところプラスとなっている。

—— 輸入品を含む国内需要財全体でみると（図表 44）、素原材料は、国際商品市況安や為替円高などを反映し、下落幅を拡大している。中間財や最終財も、石油製品の動向などを反映し、下落幅を拡大している。

—— 12月には、3か月前比でみて引き続き大幅な下落となる見込みである。

企業向けサービス価格（除く海外要因）の前年比は、ゼロ%近傍で推移している（図表 38、45）。

—— 10月の前年比は、広告や情報サービスがマイナス幅を大きく縮小したことなどから、前月-0.2%のあと、+0.3%となった。広告や情報サービスのマイナス幅縮小には、前年の裏や平均価格の振れなどが影響しており、均してみれば、引き続きゼロ%近傍で推移していると判断される。

—— 最近の動きを業種別にみると、不動産は、東京圏での事務所賃貸料の値上げなどから、プラスで推移している。一方、諸サービスについては、企業の経費抑制スタンスを受けて、プラス幅が縮小傾向にある。情報サービスは、当月は前年並みとなったが、基調としては、企業のソフトウェア投資抑制の動きから、弱めの推移となっている。広告は、企業の抑制的な出稿スタンスの強まりから、振れを伴いつつ、大きめのマイナスとなっている。また、リース・レンタルは、OA機器の価格下落の影響などから、マイナスを続けている。この間、金融・保険は、自賠責保険の保険料引き下げから損害保険が引き続きマイナスとなっていることなどから、ゼロ近傍ないしは小幅のマイナスで推移している。

—— 海外要因を含む総平均ベースは、2007年初以降、運輸の上昇からはっきりとした前年比プラスが続いてきたが、10月は、外航貨物用船料がマイナス幅を拡大したことに加えて、外航貨物輸送がマイナスに転じたことなどから、

¹⁷ 3か月前比の-3.7%、前月比-1.9%は、ともに夏季電力料金調整後ベースで遡及可能な1990年1月以降、最大のマイナス幅である（夏季電力料金調整前の3か月前比-3.9%、同前月比-1.9%は、遡及可能な1960年1月以降で最大のマイナス幅）。

前年比はマイナスに転じた（-1.4%）。

消費者物価（除く生鮮食品）の前年比は+2%程度となっており、石油製品価格の下落を主因にプラス幅が縮小している（図表 38、46）。

—— 10 月の全国の消費者物価（除く生鮮食品）の前年比は+1.9%となった。内訳をみると、財は石油製品や食料工業製品を中心に、一般サービスは外食などを中心に、公共料金は電気・都市ガス代を中心に、それぞれ前年比プラスで推移している。もっとも、石油製品の押し上げ寄与の縮小から、2 か月連続で前年比プラス幅が縮小した。

—— 品目別価格変動分布の両端の一定割合を機械的に控除した刈込平均指数（いわば大きな相対価格変動を除去したコア指数）の前年比は、昨年末頃からプラス幅が緩やかに拡大してきたが、足もとは+1%程度で頭打ちとなっている（図表 47）。除く食料・エネルギーの前年比は、引き続きゼロ%近傍で推移している（7 月+0.2%→8 月 0.0%→9 月+0.2%→10 月+0.2%）。

消費者物価（除く生鮮食品）前年比は、当面、石油製品価格の下落や食料品価格の落ち着きを反映して、低下していくと予想される。

—— 11 月の東京の消費者物価（除く生鮮食品）の前年比は、石油製品の寄与のマイナス転化や外国パック旅行のプラス寄与縮小などから、前月から 0.4%ポイント低下し+1.1%となった（図表 48）。除く食料・エネルギーの前年比は、9、10 月と強含んでいたが、11 月はゼロ%近傍までプラス幅を縮小した（8 月+0.2%→9 月+0.5%→10 月+0.4%→11 月+0.2%）。

—— 全国の消費者物価（除く生鮮食品）の前年比については、石油製品の価格下落を主因に、11 月は+1%程度、12 月は+ゼロ%台前半、1～3 月にはゼロ%近傍まで低下すると見込まれる。その後も、国際商品市況や為替相場が横ばい圏内で推移する場合は、消費者物価の前年比はマイナスに転じていくと予想される。経済全体の需給バランスの悪化や個人消費の弱さも、今後の消費者物価を押し下げる方向に働くとみられる。

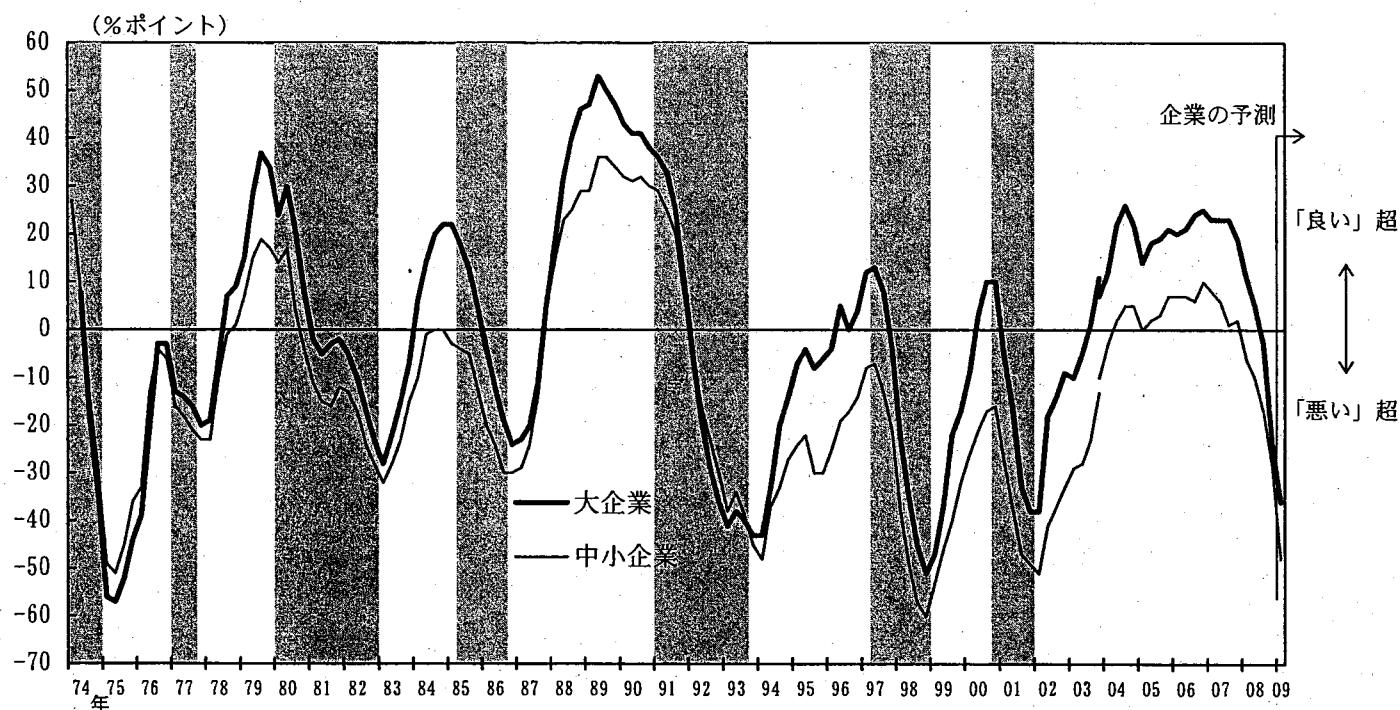
以 上

「経済活動の現状評価」 図表一覧

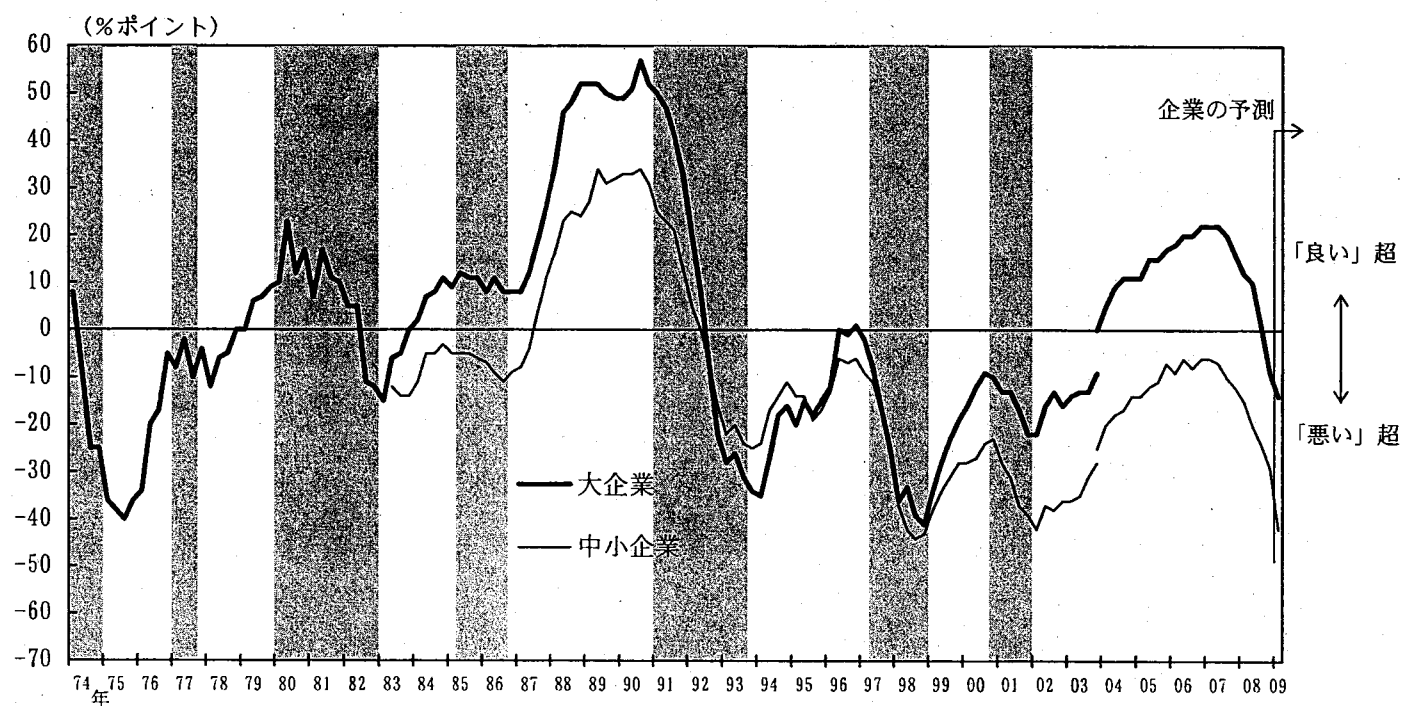
(図表 1) 業況判断（12月短観）	(図表 27) 住宅関連指標
(図表 2) 実質GDPと景気動向指数	(図表 28) 住宅投資関連指標
(図表 3) GDPデフレーターと所得形成	(図表 29) 生産・出荷・在庫関連指標
(図表 4) 公共投資関連指標	(図表 30) 生産
(図表 5) 公共投資	(図表 31) 財別出荷
(図表 6) 輸出入関連指標	(図表 32) 在庫循環
(図表 7) 輸出入	(図表 33) 雇用関連指標
(図表 8) 実質輸出の内訳	(図表 34) 労働需給（1）
(図表 9) 米国向け輸出の動向	(図表 35) 労働需給（2）
(図表 10) その他地域向け輸出の動向	(図表 36) 雇用の過不足感（12月短観）
(図表 11) 情報関連輸出の動向	(図表 37) 雇用者所得
(図表 12) 実質実効為替レート	(図表 38) 物価関連指標
(図表 13) 実質輸入の内訳	(図表 39) 国際商品市況と輸入物価
(図表 14) 企業収益関連指標	(図表 40) 輸入物価
(図表 15) 業種別・規模別の企業収益	(図表 41) 国内需給環境（12月短観）
(図表 16) 経常利益（12月短観）	(図表 42) 国内商品市況
(図表 17) 設備投資関連指標	(図表 43) 国内企業物価
(図表 18) 業種別・規模別の設備投資	(図表 44) 企業物価指数の需要段階別推移
(図表 19) 設備投資一致指標	(図表 45) 企業向けサービス価格
(図表 20) 設備投資先行指標	(図表 46) 消費者物価（全国）
(図表 21) 設備投資計画（12月短観）	(図表 47) 消費者物価における食料・エネルギーの影響
(図表 22) 個人消費関連指標	(図表 48) 消費者物価（東京）
(図表 23) 個人消費（1）	(図表 49) 地価関連指標
(図表 24) 個人消費（2）	
(図表 25) 個人消費（3）	
(図表 26) 消費者コンフィデンス	

業況判断 (12月短観)

(1) 製造業



(2) 非製造業

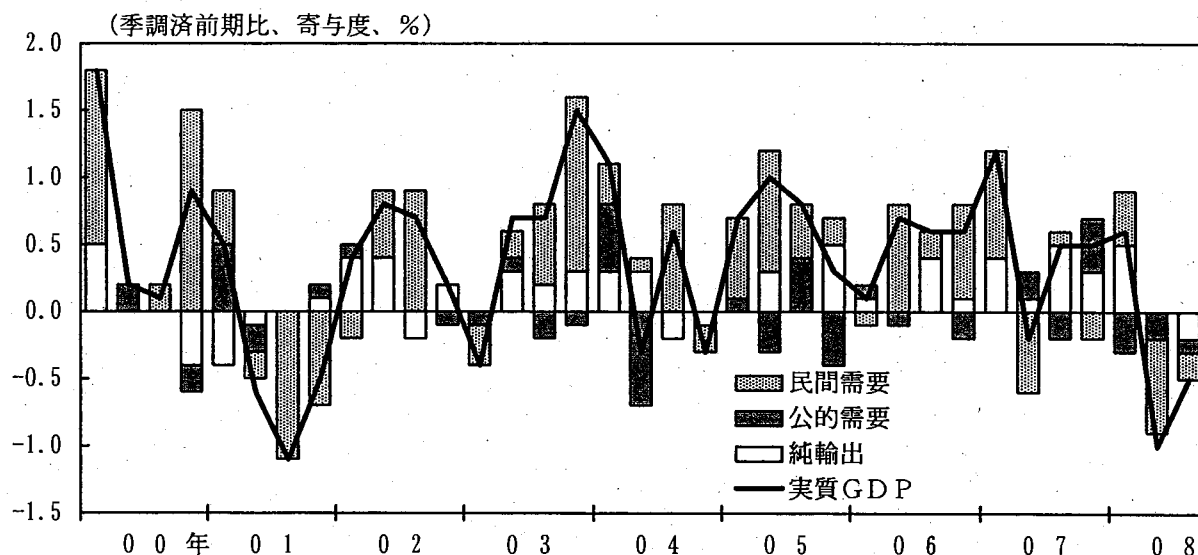


- (注) 1. 2004/3月調査より見直しを実施。
 旧ベースは2003/12月調査まで、新ベースは2003/12月調査から。
 2. 非製造業大企業の1983/2月以前のデータは主要企業。
 3. シャドー部分は景気後退局面。

(資料) 日本銀行「全国企業短期経済観測調査」

実質GDPと景気動向指数

(1) 実質GDP



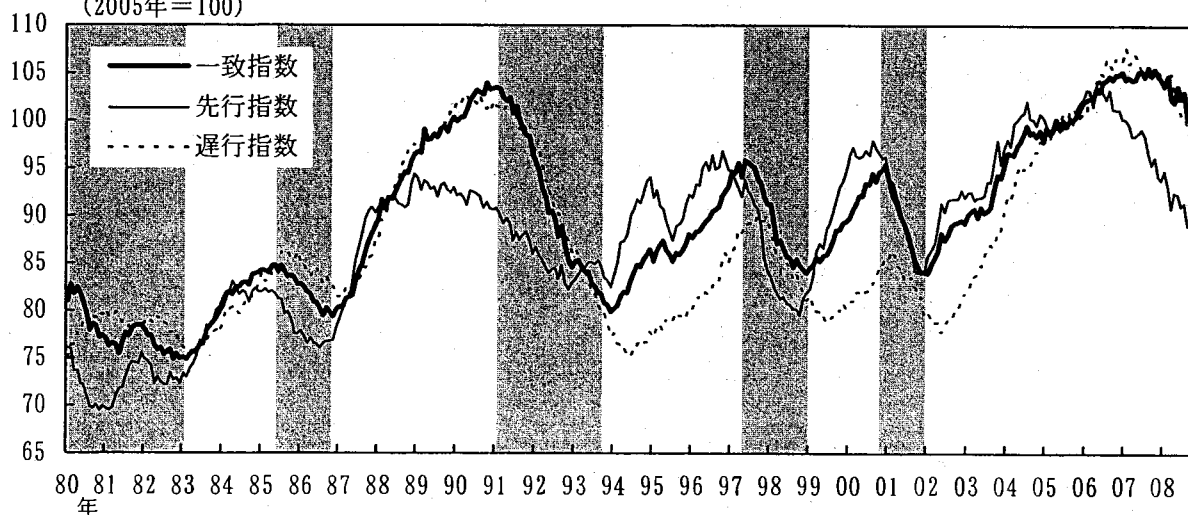
(2) 需要項目別の動向

(季調済前期比、内訳は寄与度、%)

	2007年		2008年			1次QE 08/7~9
	7~9月	10~12	1~3	4~6	7~9	
実質GDP	0.5	0.5	0.6	-1.0	-0.5	-0.1
国内需要	-0.0	0.2	0.1	-0.9	-0.3	0.1
民間需要	0.1	-0.2	0.4	-0.7	-0.2	0.1
民間最終消費支出	0.0	0.0	0.5	-0.4	0.2	0.2
民間企業設備	0.4	0.0	0.1	-0.3	-0.3	-0.3
民間住宅	-0.3	-0.3	0.1	-0.1	0.1	0.1
民間在庫品増加	0.0	0.1	-0.3	0.0	-0.2	0.0
公的需要	-0.2	0.4	-0.3	-0.2	-0.1	0.0
公的固定資本形成	-0.1	0.0	-0.2	-0.0	0.0	0.0
純輸出	0.5	0.3	0.5	-0.0	-0.2	-0.2
輸出	0.4	0.5	0.6	-0.5	0.2	0.1
輸入	0.1	-0.1	-0.2	0.5	-0.4	-0.3
名目GDP	0.3	-0.2	0.4	-1.4	-0.7	-0.5

(3) 景気動向指数 (CI)

(2005年=100)



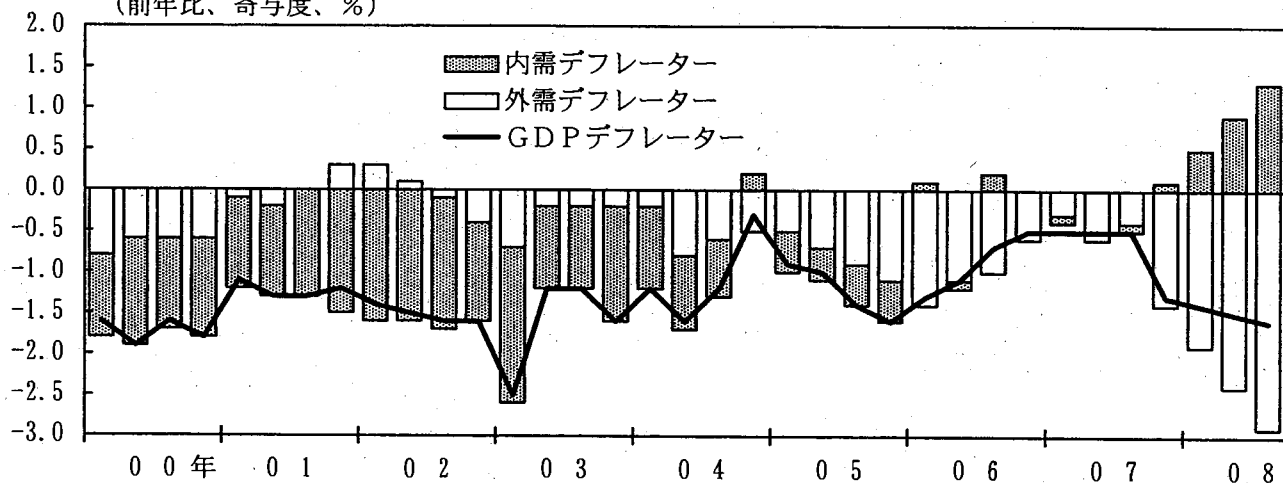
(注) シャドー部分は景気後退局面。

(資料) 内閣府「国民経済計算」「景気動向指数」

GDPデフレーターと所得形成

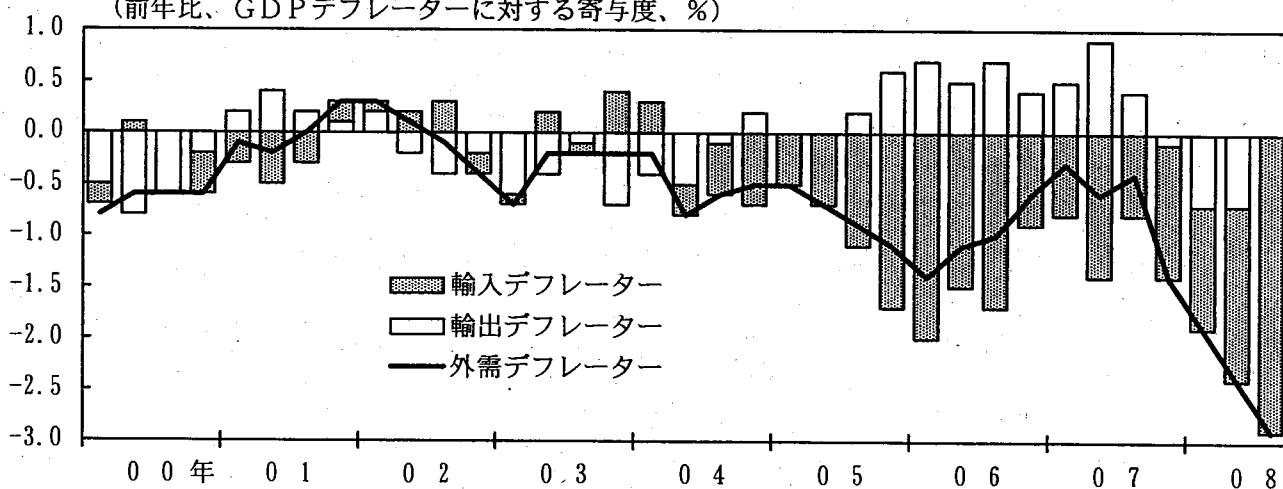
(1) GDPデフレーター

(前年比、寄与度、%)



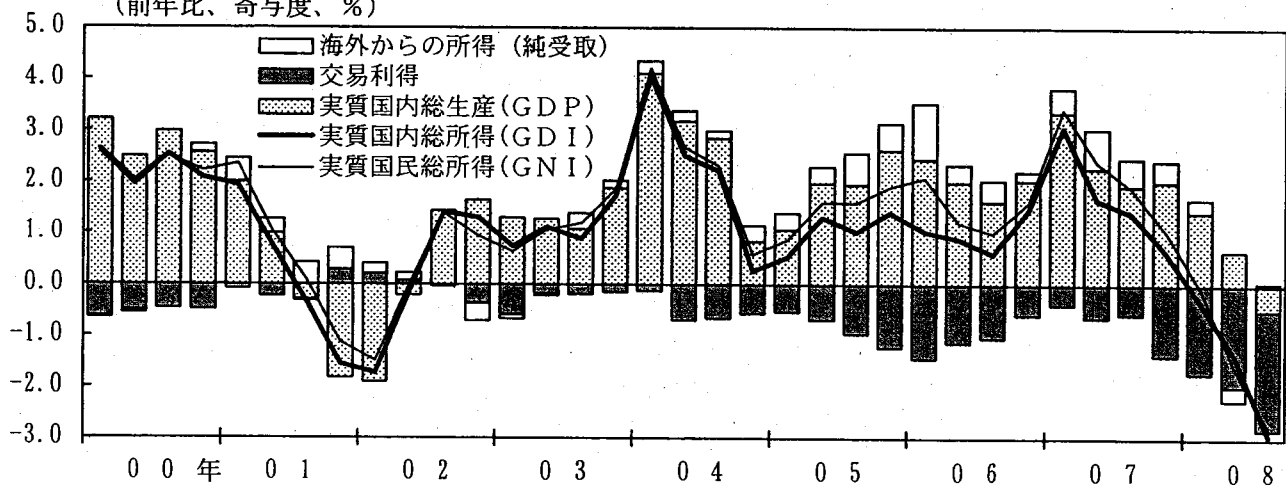
(2) 外需デフレーター

(前年比、GDPデフレーターに対する寄与度、%)



(3) マクロの所得形成

(前年比、寄与度、%)



(注) 内訳は実質国民総所得(GNI)に対する寄与度。

交易利得は以下のとおり定義される。

交易利得 = 名目純輸出 / 輸出・輸入デフレーター加重平均 - 実質純輸出

(資料) 内閣府「国民経済計算」

公 共 投 資 関 連 指 標

＜公共工事出来高金額＞

— 季調済年率換算：兆円、＜ ＞内は前期(月)比、()内は前年比：％

	07年度	08/1～3月	4～6	7～9	08/7月	8	9
公共工事出来高金額	17.0	16.8	16.5	17.1	17.0	17.3	17.0
	(-3.2)	(-2.8)	(-4.1)	(-0.4)	(-1.9)	(0.6)	(-0.2)
		< -0.7>	< -1.8>	< 3.6>	< 1.1>	< 1.9>	< -1.4>

(注) 1. X-12-ARIMAによる季節調整値。

2. 国土交通省「建設総合統計」の総合表ベース。

＜公共工事請負金額＞

— 季調済年率換算：兆円、＜ ＞内は前期(月)比、()内は前年比：％

	07年度	08/4～6月	7～9	10～12	08/9月	10	11
公共工事請負金額	11.8	10.9	12.1	12.0	11.6	11.5	12.6
	(-4.1)	(-8.4)	(4.7)	(-1.4)	(5.5)	(-0.4)	(-2.8)
		< -8.3>	< 11.3>	< -0.6>	< -2.7>	< -0.6>	< 9.0>
うち国等の発注	4.2	3.6	4.4	4.6	4.1	4.1	5.2
＜ウエイト 35.8%＞	(2.5)	(-10.6)	(4.8)	(9.9)	(-0.5)	(2.1)	(20.8)
		< -21.1>	< 20.7>	< 6.5>	< -9.1>	< 0.3>	< 26.6>
うち地方の発注	7.6	7.3	7.8	7.4	7.5	7.4	7.4
＜ウエイト 64.2%＞	(-7.4)	(-6.9)	(4.7)	(-5.4)	(8.2)	(-1.3)	(-10.9)
		< -0.3>	< 6.6>	< -4.5>	< 1.3>	< -1.0>	< -0.7>

(注) 1. 「ウエイト」は、合計に占める各発注主体別計数のウエイト（2007年度）。

2. X-12-ARIMAによる季節調整値。

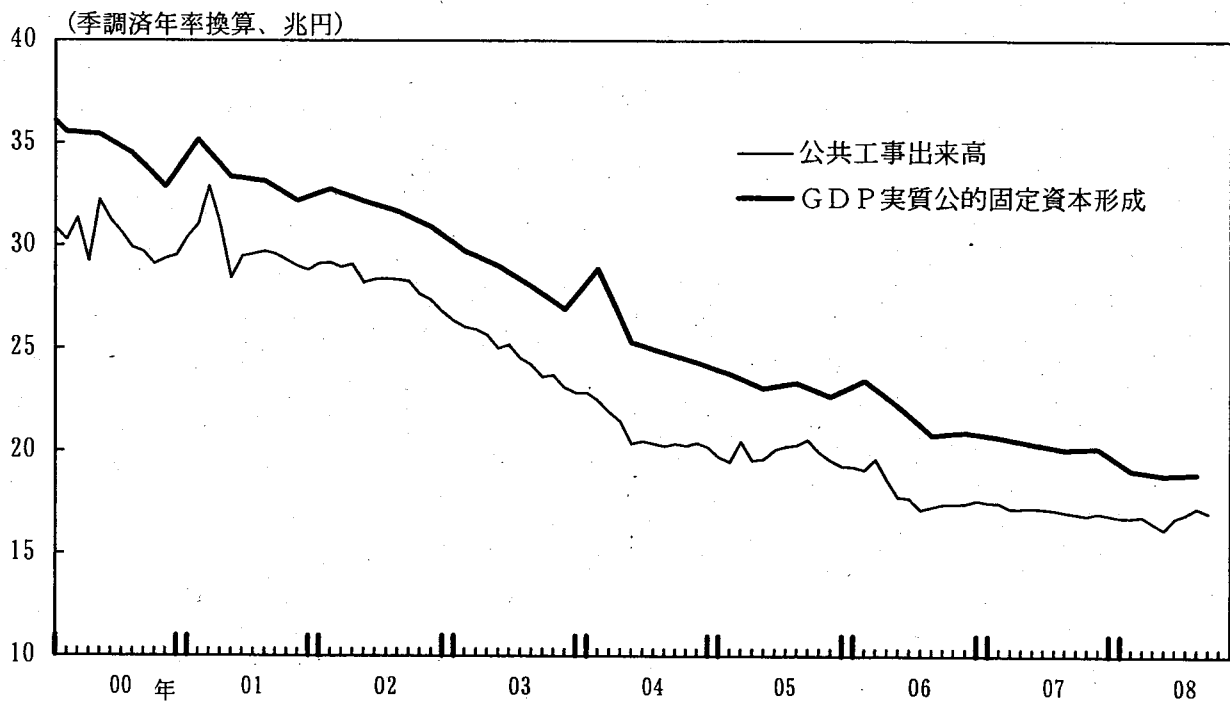
3. 公共工事請負金額の「地方」は、「都道府県」・「市区町村」・「地方公社」の合計。
「国等」は「国」・「独立行政法人等」・「その他」の合計。

4. 2008/10～12月の季調済年率換算金額は10～11月の値、季調済前期比は10～11月の7～9月対比、前年比は10～11月の前年同期比。

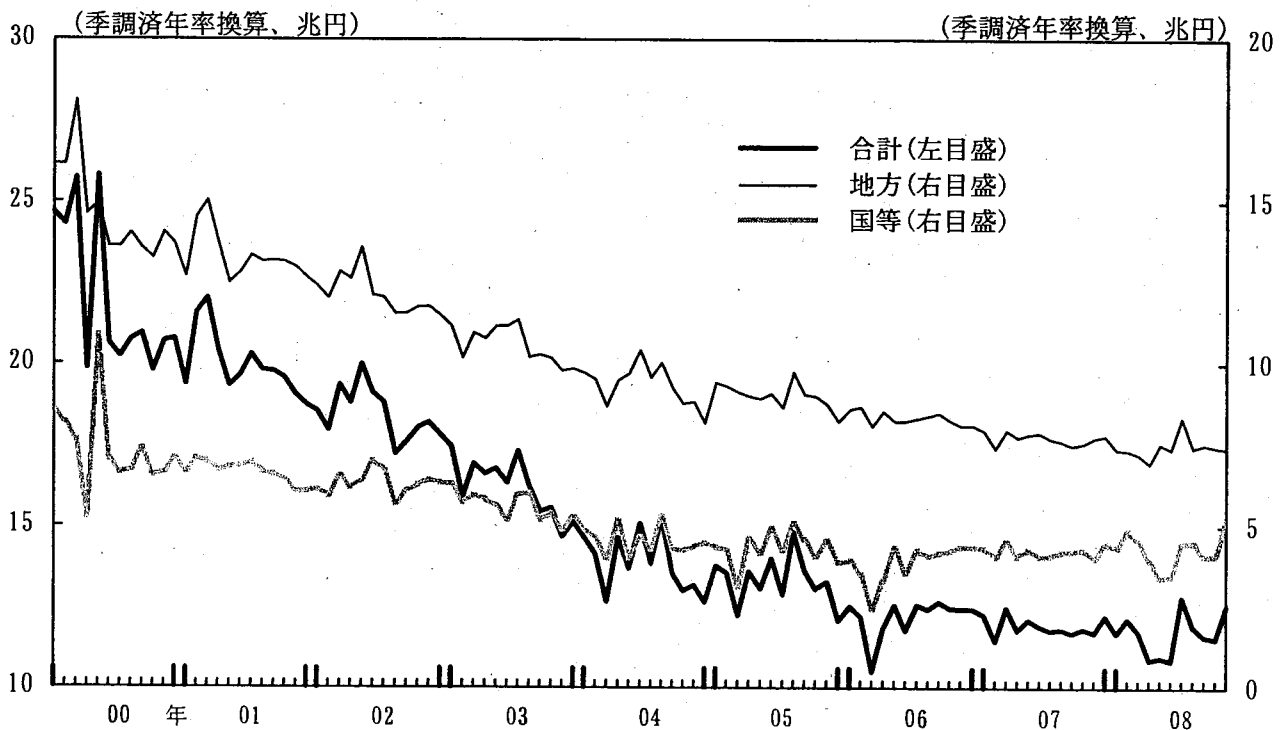
(資料) 国土交通省「建設総合統計」、東日本建設業保証株式会社他「公共工事前払金保証統計」

公 共 投 資

(1) 公共工事出来高とGDP実質公的固定資本形成



(2) 公共工事請負金額



- (注) 1. GDP実質公的固定資本形成は、四半期の値を中心月にプロット。
 2. 公共工事出来高は、国土交通省「建設総合統計」の総合表ベース。なお、2000/3月以前の計数については、総合表の旧分類による時系列の前年比の伸び率を用いて遡及した。
 3. 公共工事請負金額の「地方」は、「都道府県」・「市区町村」・「地方公社」の合計。「国等」は「国」・「独立行政法人等」・「その他」の合計。
 4. 公共工事請負金額及び公共工事出来高は、X-12-ARIMAによる季節調整値。

(資料) 内閣府「国民経済計算」、東日本建設業保証株式会社他「公共工事前払金保証統計」、国土交通省「建設総合統計」

輸出入関連指標

<実質輸出入>

— <>内は季調済前期(月)比、()内は前年比：％

	07年度	08/4～6月	7～9	10～12	08/8月	9	10
実質輸出	(9.9)	<-3.3> (7.0)	< 1.7> (4.1)	<-3.8> (0.3)	<-1.4> (-0.8)	<-0.3> (2.6)	<-3.2> (0.3)
実質輸入	(1.3)	<-3.2> (-0.9)	< 2.9> (0.6)	< 3.3> (4.9)	< 1.3> (-6.4)	< 3.6> (10.1)	< 0.5> (4.9)
実質貿易収支	(41.9)	<-3.8> (31.7)	<-1.0> (13.5)	<-21.4> (-11.6)	<-7.4> (17.1)	<-9.8> (-12.2)	<-13.3> (-11.6)

(注) 1. X-12-ARIMAによる季節調整値。

2. 2008/10～12月の季調済前期比は10月の7～9月対比、前年比は10月の前年同月比。

<国際収支>

— 季調済金額：兆円(名目GDP比率は％)、<>内は前期(月)比：％

	07年度	08/4～6月	7～9	10～12	08/8月	9	10
経常収支	24.54	4.81 <-14.0>	3.43 <-28.7>	3.34 <-2.6>	0.90 <-41.9>	0.97 < 7.5>	1.11 < 14.7>
[名目GDP比率]	[4.8]	[3.8]	[2.7]				
貿易・サービス収支	9.09	1.14 <-30.1>	-0.32 <-128.1>	-0.06 <-82.6>	-0.30 <-233.2>	-0.25 <-17.3>	-0.02 <-92.4>

(注) 1. X-12-ARIMAによる季節調整値。

2. 2008/10～12月の季調済金額は10月の四半期換算値、季調済前期比は10月の7～9月対比。

<数量指数>

— <>内は季調済前期(月)比、()内は前年比：％

	07年度	08/4～6月	7～9	10～12	08/8月	9	10
輸出数量	(6.3)	<-1.6> (5.3)	<-0.3> (2.6)	<-8.2> (-6.4)	< 1.4> (-0.8)	<-4.7> (-0.2)	<-5.6> (-6.4)
輸入数量	(-0.0)	<-0.2> (2.2)	<-1.9> (1.2)	< 0.6> (-2.1)	<-1.4> (-4.4)	<-0.4> (6.2)	< 1.3> (-2.1)

(注) 2008/10～12月の季調済前期比は10月の7～9月対比、前年比は10月の前年同月比。

<為替相場>

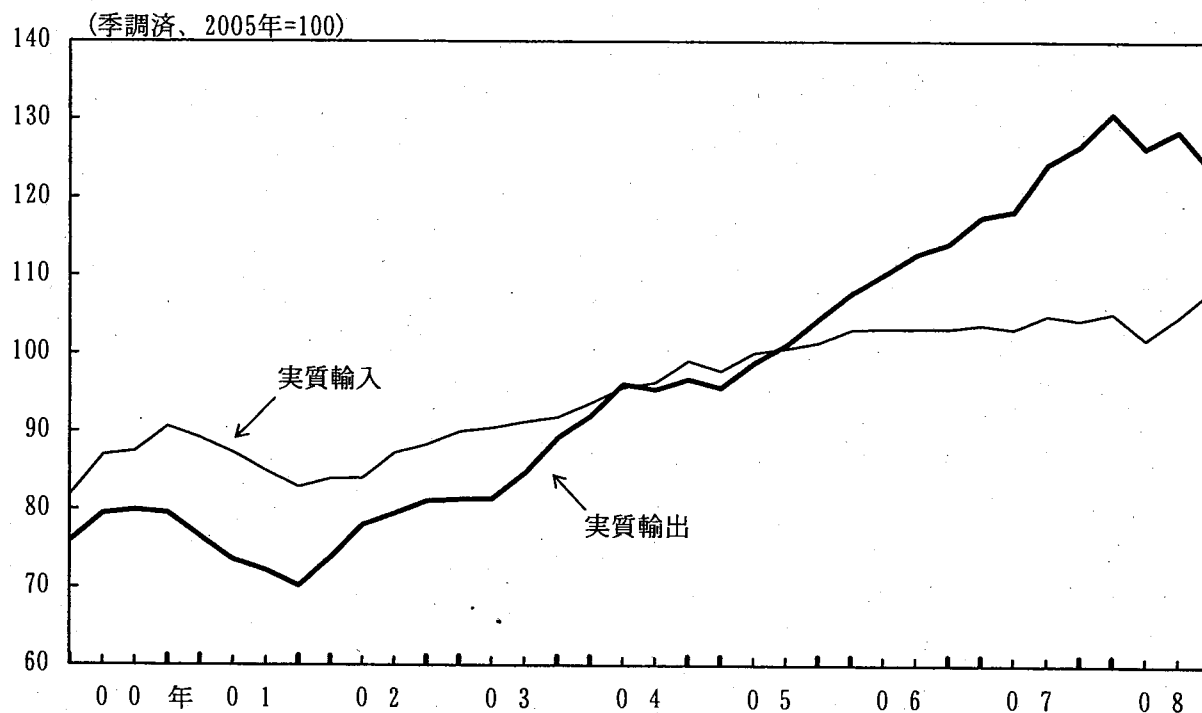
	05年末	06	07	08/7月末	8	9	10	11
ドル＝円	117.48	118.92	113.12	108.13	108.80	104.76	97.01	95.31
ユーロ＝円	139.38	156.69	165.70	168.87	160.38	150.49	123.23	123.32

(資料) 財務省「外国貿易概況」、内閣府「国民経済計算」、

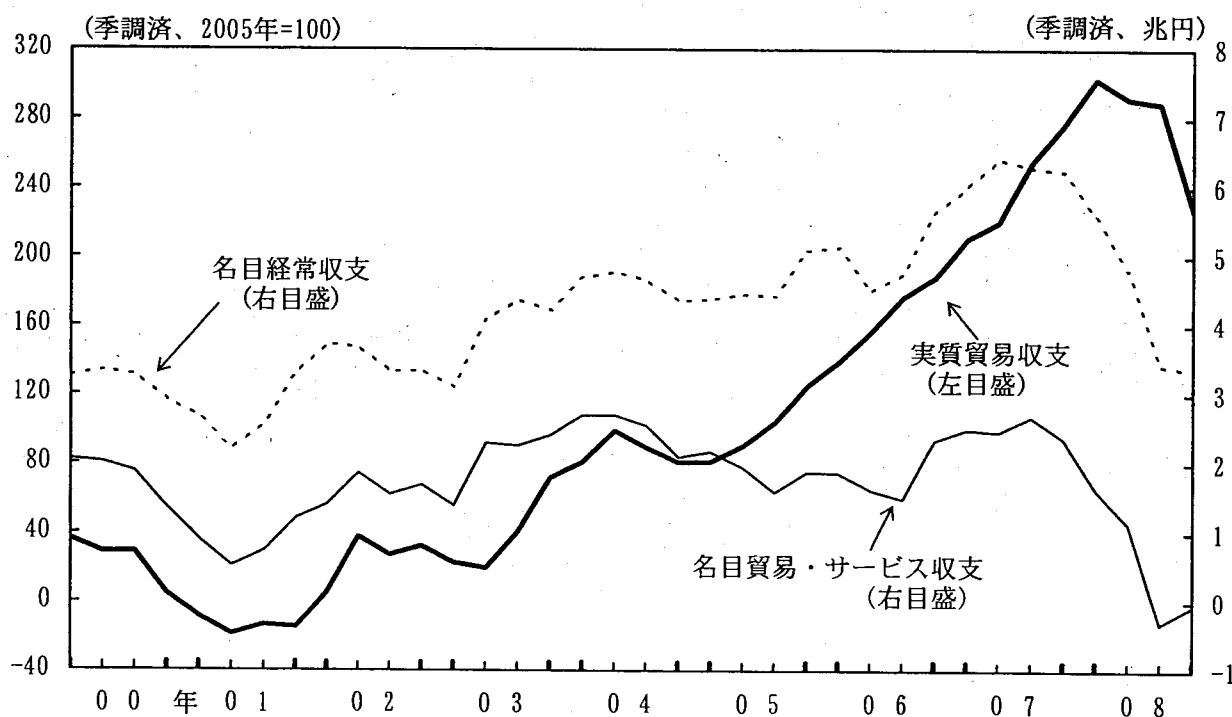
財務省・日本銀行「国際収支状況」、日本銀行「金融経済統計月報」「企業物価指数」

輸 出 入

(1) 実質輸出入



(2) 対外収支



(注) 1. 実質輸出(入)は、通関輸出(入)金額を輸出(入)物価指数で各々デフレートし、指数化したもの。
実質貿易収支は、実質輸出(入)の差を指数化したもの。

2. 各計数は、X-12-ARIMAによる季節調整値。

3. 2008/4Qの実質輸出入、実質貿易収支は10月の値。

4. 2008/4Qの名目経常収支、名目貿易・サービス収支は10月の四半期換算値。

(資料) 財務省「外国貿易概況」、財務省・日本銀行「国際収支状況」、日本銀行「企業物価指数」

実質輸出の内訳

(1) 地域別

		(前年比、%)		(季調済前期比、%)					(季調済前月比、%)		
		暦年 2006年	2007	2007年 4Q	2008 1Q	2Q	3Q	4Q	2008年 8月	9	10
米国	<20.1>	11.7	-1.2	-1.3	-0.2	-6.9	-4.0	-1.5	-3.4	6.6	-4.5
EU	<14.8>	11.1	13.0	2.6	4.2	-7.4	2.1	-6.8	-1.5	-2.8	-4.6
東アジア	<46.0>	8.9	10.3	2.9	4.9	-2.4	1.8	-4.4	2.4	-6.5	-0.8
中国	<15.3>	18.8	16.8	2.0	5.1	1.7	0.9	-1.0	1.0	-8.6	4.9
NIEs	<22.4>	6.3	5.2	2.0	5.3	-5.9	3.1	-9.0	2.1	-5.5	-6.2
韓国	<7.6>	9.6	5.3	4.7	3.6	-4.9	6.0	-13.2	4.4	1.5	-15.2
台湾	<6.3>	2.7	0.0	-3.8	8.7	-8.9	0.5	-12.1	8.6	-11.6	-7.1
香港	<5.4>	5.2	7.3	4.2	3.8	-5.0	-0.1	-7.7	2.5	-8.4	-2.9
シンガポール	<3.1>	8.5	12.5	-1.8	16.0	-6.8	6.8	-4.3	-7.2	-7.3	3.4
ASEAN4	<8.3>	1.8	13.2	6.4	3.6	-0.7	0.2	0.5	5.6	-5.3	2.3
タイ	<3.6>	4.1	9.8	2.1	5.1	-6.9	4.8	3.0	10.0	-7.5	5.1
その他	<19.1>	20.2	19.9	9.2	4.8	-0.1	4.1	1.0	-7.0	7.2	-1.1
実質輸出計		11.2	9.1	1.9	3.2	-3.3	1.7	-3.8	-1.4	-0.3	-3.2

- (注) 1. < >内は、2007年通関輸出額に占める各地域・国のウェイト。
 2. ASEAN4はタイ、マレーシア、フィリピン、インドネシア。
 3. 各計数は、X-12-ARIMAによる季節調整値。なお、2008/4Qは10月の7～9月対比。

(2) 財別

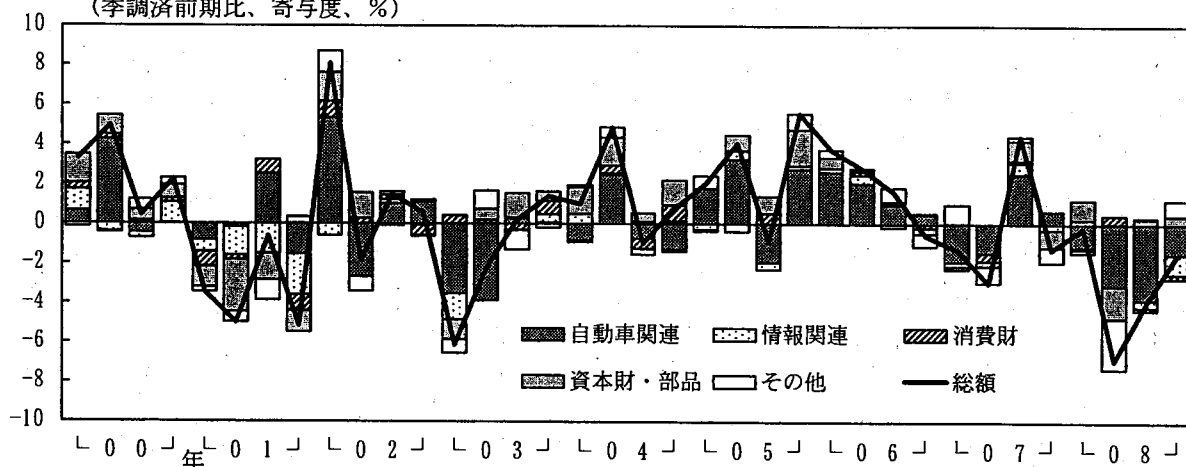
		(前年比、%)		(季調済前期比、%)					(季調済前月比、%)		
		暦年 2006年	2007	2007年 4Q	2008 1Q	2Q	3Q	4Q	2008年 8月	9	10
中間財	<18.4>	6.9	5.3	1.6	2.1	-6.0	2.1	-1.8	2.8	-1.0	-2.0
自動車関連	<24.1>	14.2	13.2	6.6	3.1	-4.8	0.0	-4.4	-6.0	2.1	-3.7
消費財	<4.5>	9.8	6.4	-0.2	4.3	3.1	-1.1	-6.8	6.3	0.6	-9.0
情報関連	<11.0>	7.5	12.2	2.5	-1.3	4.4	2.4	-9.6	1.9	-1.3	-9.4
資本財・部品	<28.4>	13.3	8.0	2.8	4.3	-2.0	1.7	0.8	-2.5	3.0	-0.3
実質輸出計		11.2	9.1	1.9	3.2	-3.3	1.7	-3.8	-1.4	-0.3	-3.2

- (注) 1. < >内は、2007年通関輸出額に占める各財のウェイト。
 2. 「消費財」は、自動車を除く。
 3. 「情報関連」は、電算機類、通信機、IC等電子部品、科学光学機器。
 4. 「資本財・部品」は、情報関連、原動機、自動車部品を除く。
 5. 各計数は、X-12-ARIMAによる季節調整値。なお、2008/4Qは10月の7～9月対比。

米国向け輸出の動向

(1) 米国向け輸出の財別内訳

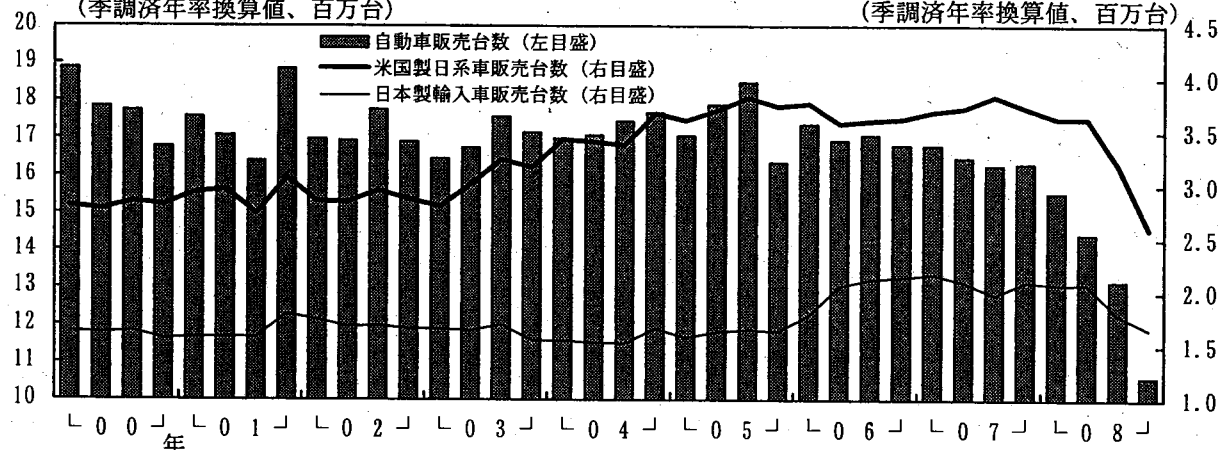
(季調済前期比、寄与度、%)



(2) 米国の自動車販売台数

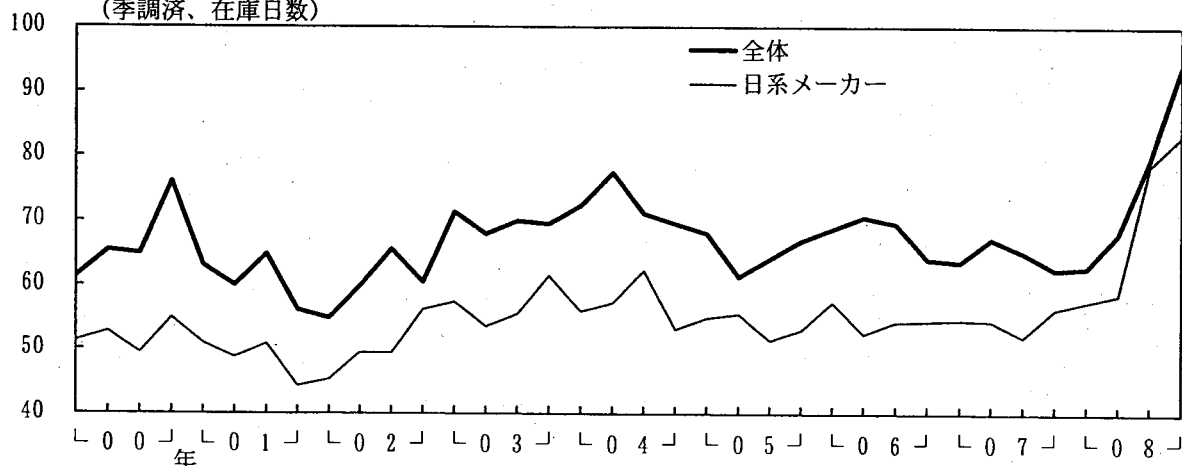
(季調済年率換算値、百万台)

(季調済年率換算値、百万台)



(3) 米国の自動車在庫

(季調済、在庫日数)



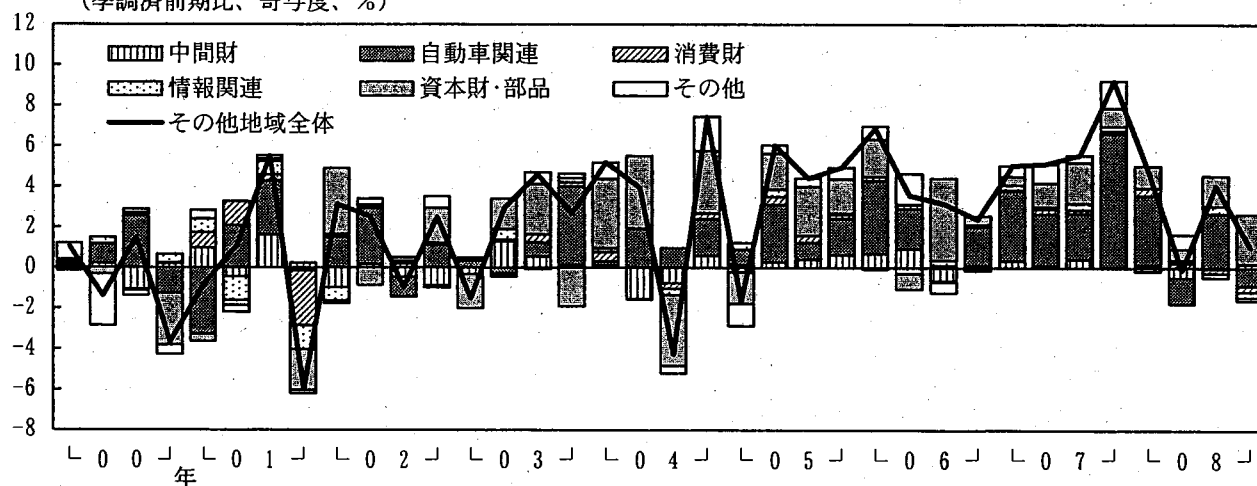
- (注) 1. (1) の各計数は、X-12-ARIMAによる季節調整値。実質値。なお、2008/4Qは10月の7～9月対比。
 2. (2) の自動車販売台数の2008/4Qは、10～11月の平均値。
 米国製日系車販売台数と日本製輸入車販売台数の2008/4Qは10月の値。
 3. (3) の在庫日数は、X-12-ARIMAによる季節調整値。期末値。なお、2008/4Qは10月の値。
 在庫日数＝当月末時点での在庫/当月の1日平均販売台数。

(資料) 財務省「外国貿易概況」、日本銀行「企業物価指数」、U.S. Department of Commerce, "Sales, production, imports, exports, and inventories, in units", Reuters News Service, 日本自動車工業会「自動車統計月報」、Automotive News Inc., "Automotive News"

その他地域向け輸出の動向

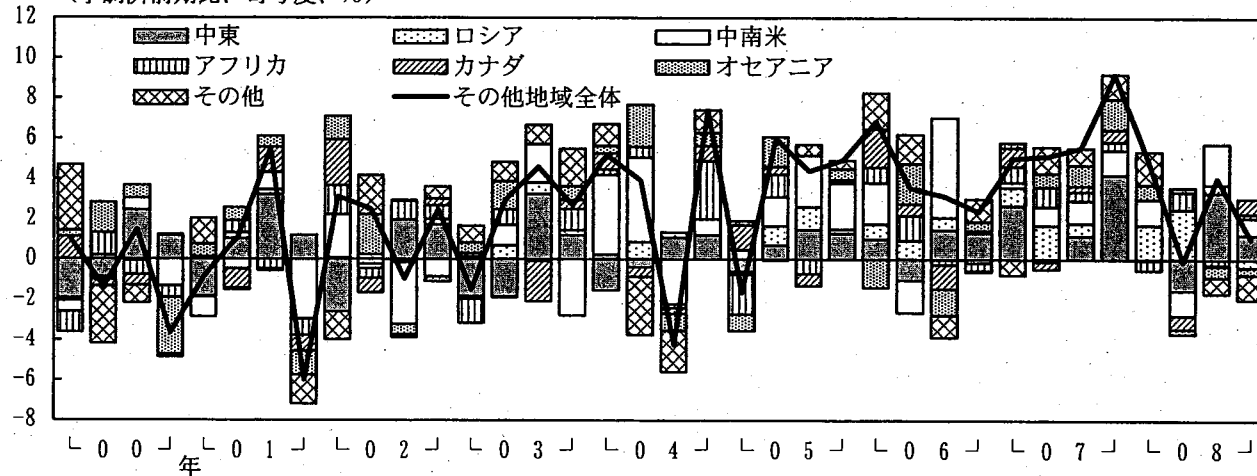
(1) その他地域向け輸出（実質、財別）

（季調済前期比、寄与度、％）



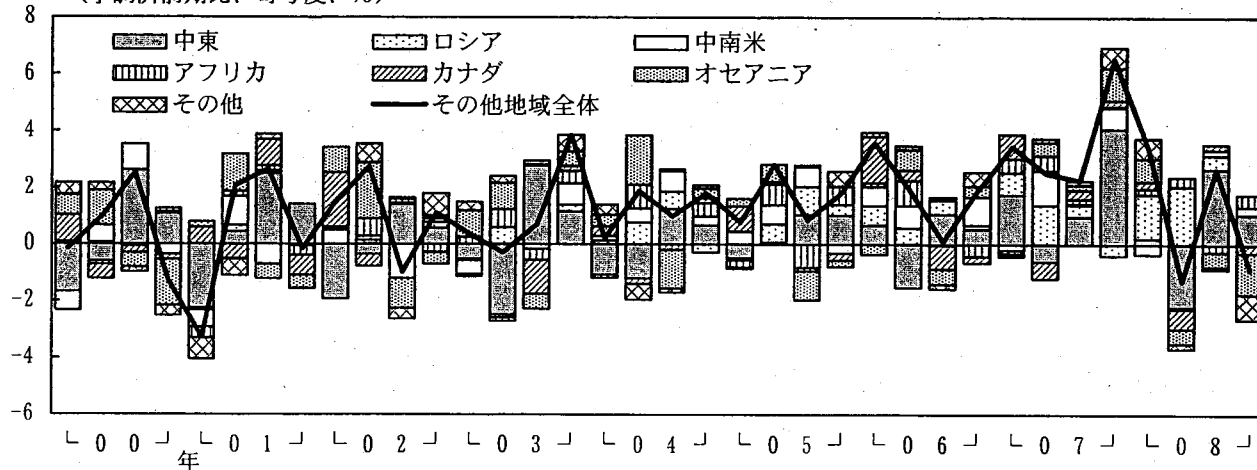
(2) その他地域向け輸出（実質、地域別）

（季調済前期比、寄与度、％）



(3) その他地域向け自動車関連輸出（実質、地域別）

（季調済前期比、寄与度、％）



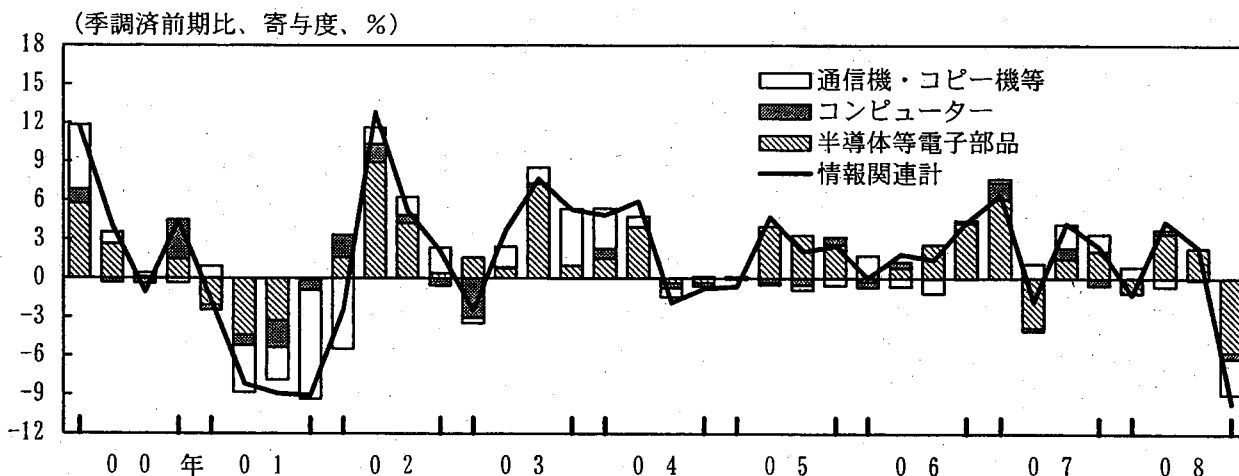
（注）1. (1) の各計数は、X-12-ARIMAによる季節調整値。2008/4Qは10月の7～9月対比。

2. (2) および (3) の地域別季調済計数は、(1) その他地域全体の季節要素を用いて計算している。

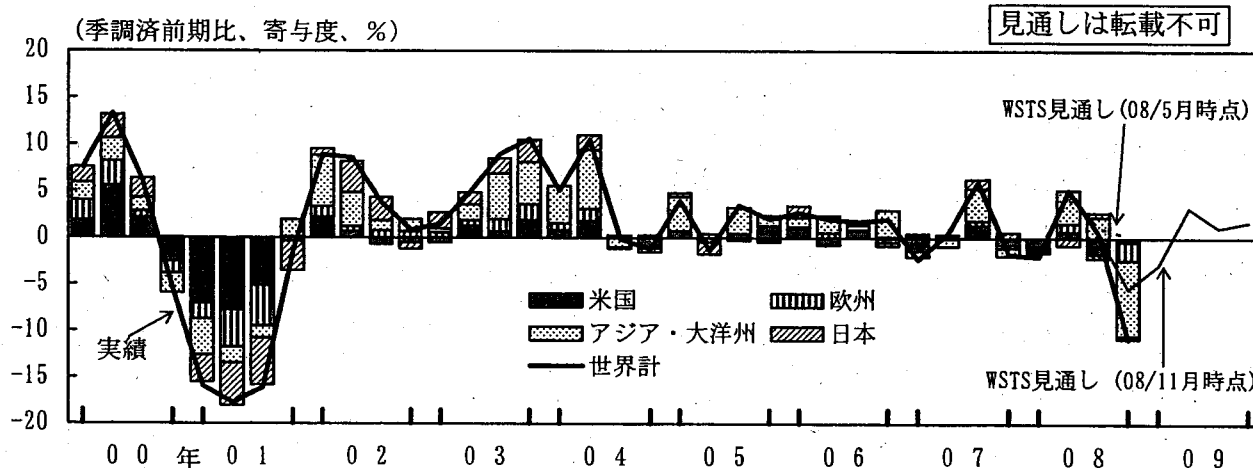
（資料）財務省「外国貿易概況」、日本銀行「企業物価指数」

情報関連輸出の動向

(1) 情報関連輸出 (実質、品目別)

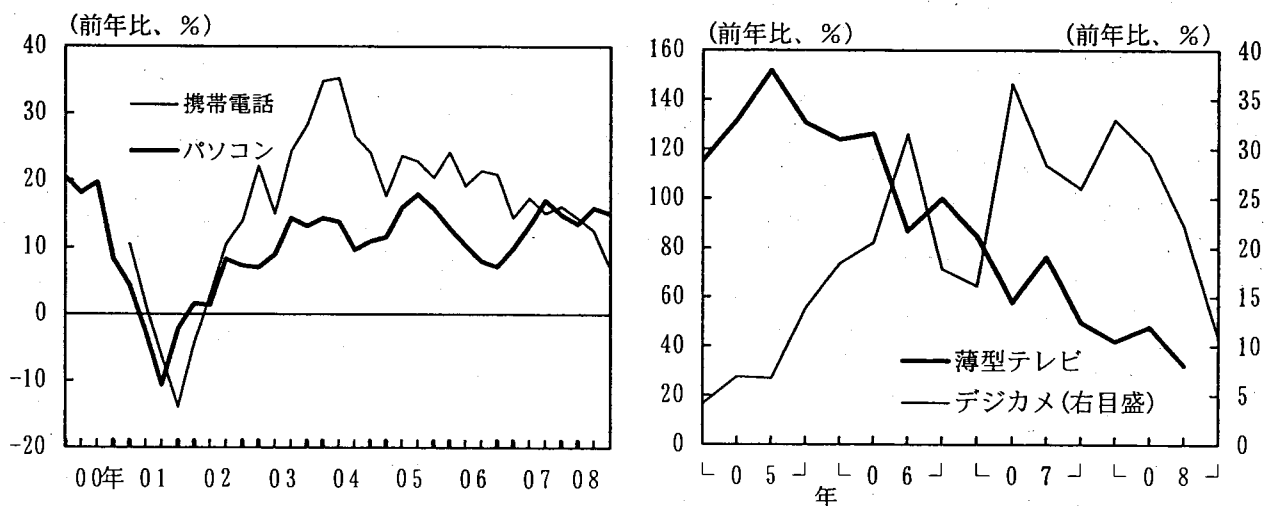


(2) 世界半導体出荷 (名目、地域別)



(3) 情報関連最終製品の世界需要

転載不可



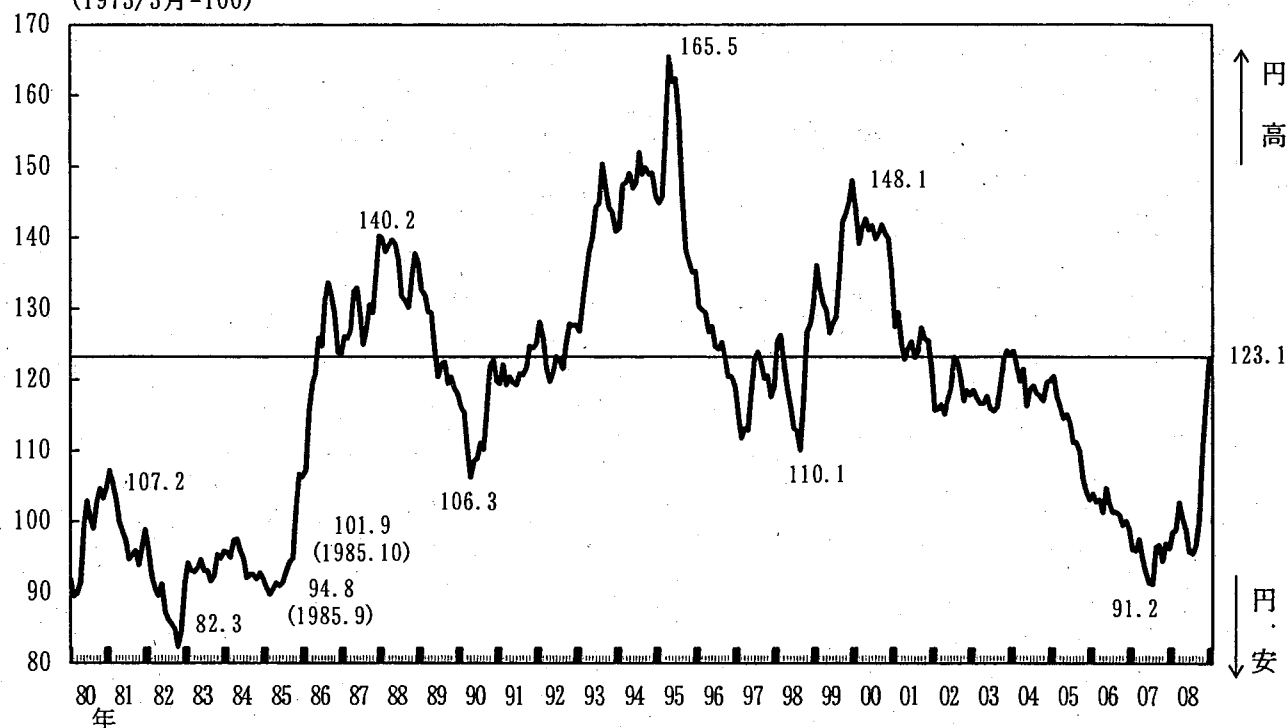
- (注) 1. (1) および (2) の計数はX-12-ARIMAによる季節調整値。なお、2008/4Qは10月の7～9月対比。
2. (3) のパソコンの2008/4Qは、プレスリリースによる速報値。
3. (3) のデジカメの2008/4Qは10月の前年同月比。

(資料) 財務省「外国貿易概況」、日本銀行「企業物価指数」、WSTS「世界半導体市場予測」、
ガートナー・データキャスト、ガートナー・プレスリリース、ディスプレイサーチ、ディスプレイサーチ・プレスリリース、
カメラ映像機器工業会

実質実効為替レート

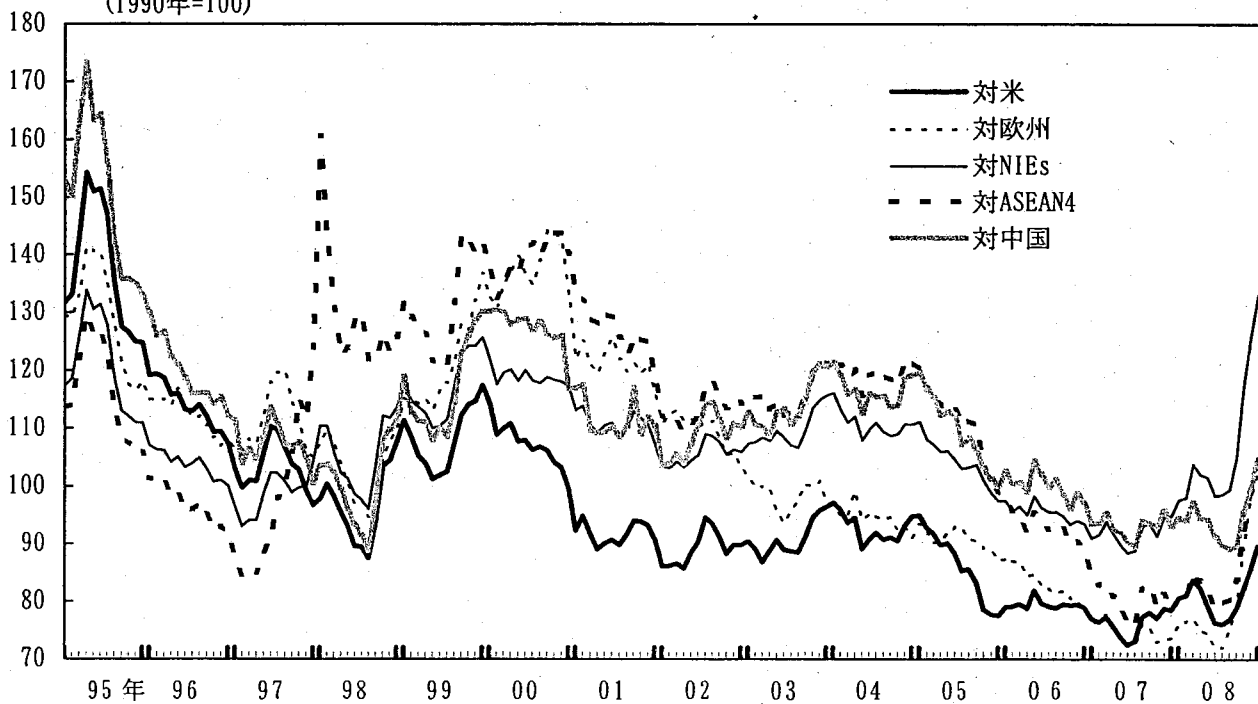
(1) 円の実質実効レート

(1973/3月=100)



(2) 相手地域別

(1990年=100)



(注) 1. 日本銀行調査統計局試算値。2008/12月は12日までの平均値。

2. 主要輸出相手国通貨(15通貨、29カ国・地域)に対する為替相場(月中平均)を、当該国・地域の物価指数で実質化したうえ、通関輸出金額ウェイトで加重平均したもの。また、算出の際に使用した各国の物価指数のうち実績値のない部分については、直近実績値横這いとした。

(図表 13)

実質輸入の内訳

(1) 地域別

		(前年比、%)		(季調済前期比、%)					(季調済前月比、%)		
		暦年 2006年	2007	2007年 4Q	2008 1Q	2Q	3Q	4Q	2008年 8月	9	10
米国	<11.4>	5.2	-1.5	3.3	-1.1	-3.9	2.3	2.2	11.9	1.2	-2.1
EU	<10.5>	0.8	4.0	-3.3	-1.0	0.2	-3.0	-2.0	2.9	1.0	-3.6
東アジア	<40.9>	8.7	3.3	0.1	2.2	-3.0	4.2	4.7	0.6	3.8	2.0
中国	<20.6>	10.9	5.7	-0.1	0.8	-0.9	7.2	3.6	-0.7	5.0	0.6
NIEs	<8.9>	12.2	-3.8	0.5	3.0	-4.4	1.8	-1.2	0.3	-1.9	-0.1
韓国	<4.4>	10.6	-3.3	0.5	3.3	-9.2	1.3	-3.9	-0.3	-4.1	-1.1
台湾	<3.2>	15.6	-3.0	-1.7	4.2	1.6	3.2	0.3	3.0	-3.6	1.8
香港	<0.2>	-1.8	-7.7	5.5	2.2	-3.1	-8.5	-6.8	-4.5	10.7	-11.5
シンガポール	<1.1>	12.1	-6.5	0.9	4.1	3.8	-7.1	4.7	-1.8	-4.1	8.3
ASEAN4	<11.4>	2.5	4.8	0.0	4.1	-5.5	0.8	11.5	3.5	5.8	6.2
タイ	<2.9>	8.7	4.4	-0.5	1.2	-3.2	5.4	6.2	5.0	11.5	-2.6
その他	<37.2>	2.5	-0.1	-0.4	0.9	-3.8	3.4	3.7	2.2	1.6	1.8
実質輸入計		3.4	0.7	-0.5	0.8	-3.2	2.9	3.3	1.3	3.6	0.5

(注) 1. < >内は、2007年通関輸入額に占める各地域・国のウェイト。
 2. ASEAN4はタイ、マレーシア、フィリピン、インドネシア。
 3. 各計数は、X-12-ARIMAによる季節調整値。なお、2008/4Qは10月の7～9月対比。

(2) 財別

		(前年比、%)		(季調済前期比、%)					(季調済前月比、%)		
		暦年 2006年	2007	2007年 4Q	2008 1Q	2Q	3Q	4Q	2008年 8月	9	10
素原料	<35.4>	0.7	0.7	-0.3	1.6	-5.9	3.3	5.7	2.8	-1.1	5.5
中間財	<14.8>	3.1	2.0	-1.8	-1.7	2.3	1.3	5.9	1.1	5.3	2.0
食料品	<8.3>	-4.0	-9.6	-6.2	-1.0	-0.7	2.4	15.5	9.6	4.1	9.2
消費財	<8.1>	4.3	-0.1	-2.8	0.6	-3.2	2.3	-0.8	0.6	1.6	-2.0
情報関連	<11.3>	17.2	4.2	1.7	4.1	-2.3	4.7	-1.4	-0.2	-1.9	-0.0
資本財・部品	<12.8>	16.8	8.5	4.5	1.2	-1.3	2.4	-5.2	3.0	8.2	-10.9
うち除く航空機	<11.8>	17.7	7.9	1.9	0.0	2.5	-2.1	1.5	-1.6	7.7	-2.8
実質輸入計		3.4	0.7	-0.5	0.8	-3.2	2.9	3.3	1.3	3.6	0.5

(注) 1. < >内は、2007年通関輸入額に占める各財のウェイト。
 2. 「素原料」は、原料品、鉱物性燃料。
 3. 「消費財」は、食料品を除く。
 4. 「情報関連」は、電算機類・部分品、通信機、IC等電子部品、科学光学機器。
 5. 「資本財・部品」は、情報関連を除く。
 6. 各計数は、X-12-ARIMAによる季節調整値。なお、2008/4Qは10月の7～9月対比。

(資料) 財務省「外国貿易概況」、日本銀行「企業物価指数」

企業収益関連指標

<全国短観（12月）・大企業>

— 売上高経常利益率、（ ）内は経常利益前年同期比、修正幅（経常利益は修正率）は9月調査比：％・％ポイント

	2007年度 実績	2008年度 計画	修正幅	2007/上期 実績	2007/下期 実績	2008/上期 実績	2008/下期 計画
製造業	6.42 (0.8)	4.83 (-24.2)	-0.68 (-15.4)	7.13 (11.1)	5.77 (- 8.8)	5.59 (-18.3)	4.08 (-30.9)
非製造業	4.12 (0.3)	3.28 (-16.7)	-0.33 (- 9.1)	4.58 (3.0)	3.69 (- 2.6)	3.70 (-14.8)	2.89 (-18.8)

<全国短観（12月）・中小企業>

— 売上高経常利益率、（ ）内は経常利益前年同期比、修正幅（経常利益は修正率）は9月調査比：％・％ポイント

	2007年度 実績	2008年度 計画	修正幅	2007/上期 実績	2007/下期 実績	2008/上期 実績	2008/下期 計画
製造業	3.33 (-12.3)	2.75 (-18.2)	-0.43 (-15.7)	3.35 (- 9.4)	3.32 (-14.8)	2.97 (- 8.8)	2.54 (-27.0)
非製造業	2.40 (- 1.6)	2.04 (-16.5)	-0.23 (-11.1)	2.20 (5.1)	2.58 (- 6.3)	1.66 (-24.3)	2.41 (-10.4)

（資料）日本銀行「全国企業短期経済観測調査」

<法人季報・売上高経常利益率>

— 季調済、％

		2007年 7～9月	10～12月	2008年 1～3月	4～6月	7～9月
全産業	全規模	3.97	3.67	3.48	3.85	3.11
製造業	大企業	6.37	6.21	5.13	5.83	4.74
	中堅中小企業	3.96	3.99	3.92	3.99	3.21
非製造業	大企業	4.69	4.39	4.13	4.94	3.46
	中堅中小企業	2.58	2.30	1.97	2.55	2.35

（注）1. 大企業は資本金10億円以上、中堅中小企業は資本金1000万円以上10億円未満。金融業、保険業は除く。

2. 製造業、非製造業の計数は、X-11による季節調整値。

（資料）財務省「法人企業統計季報」

<民間調査機関の経常利益（連結ベース）見通し（2008年12月時点）>

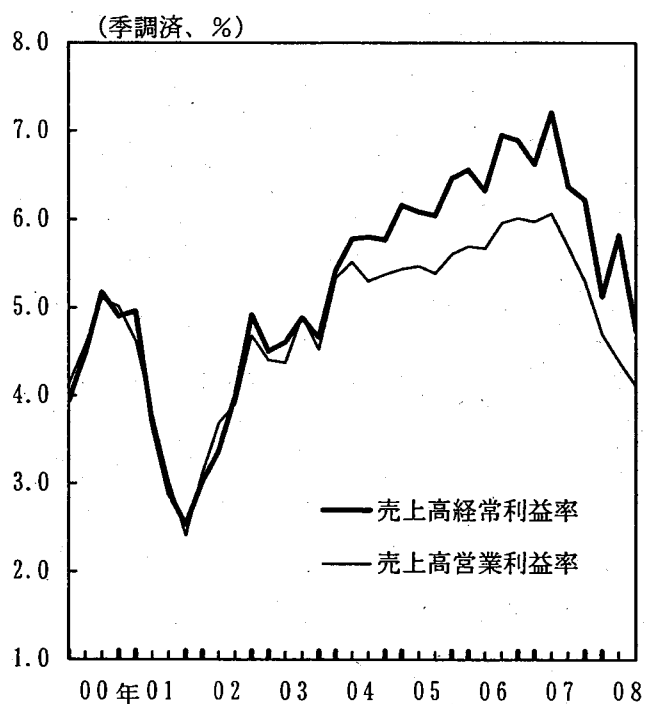
— 前年比、％、（ ）内は前回<2008年9月時点>

	2006年度実績	2007年度実績	2008年度予想	2009年度予想
全産業	10.9 8.3	4.6 6.2	-25.4 (- 6.0) -29.0 (- 7.3)	0.5 (15.8) - 3.0 (15.4)
製造業	11.5 11.4	7.0 6.4	-35.8 (- 7.8) -39.2 (- 9.4)	- 6.3 (11.7) - 8.0 (11.4)
非製造業	9.8 2.2	- 0.1 5.6	- 3.1 (- 2.1) - 6.5 (- 2.5)	10.3 (24.1) 4.1 (23.6)

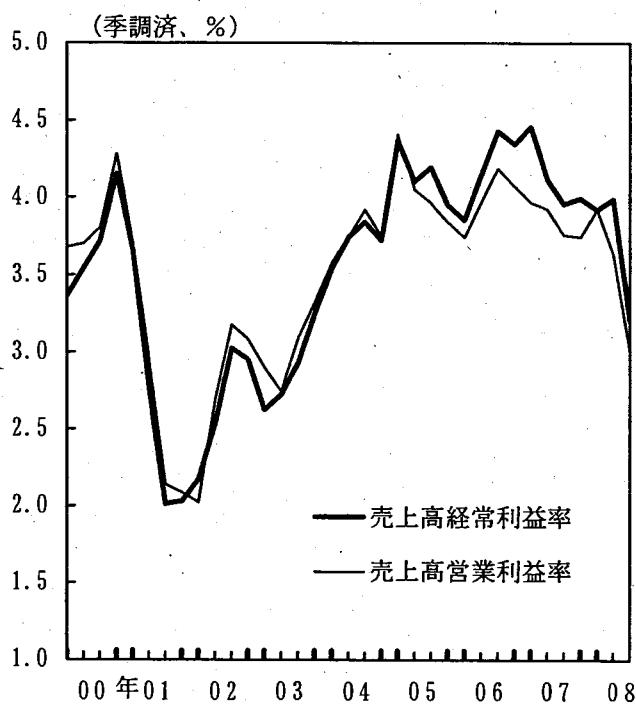
（注）上段は野村證券、下段は大和総研の各調べ。野村證券は全上場・公開企業（除く金融）の348社、大和総研は東証1部上場企業（除く金融）の300社を対象。

業種別・規模別の企業収益

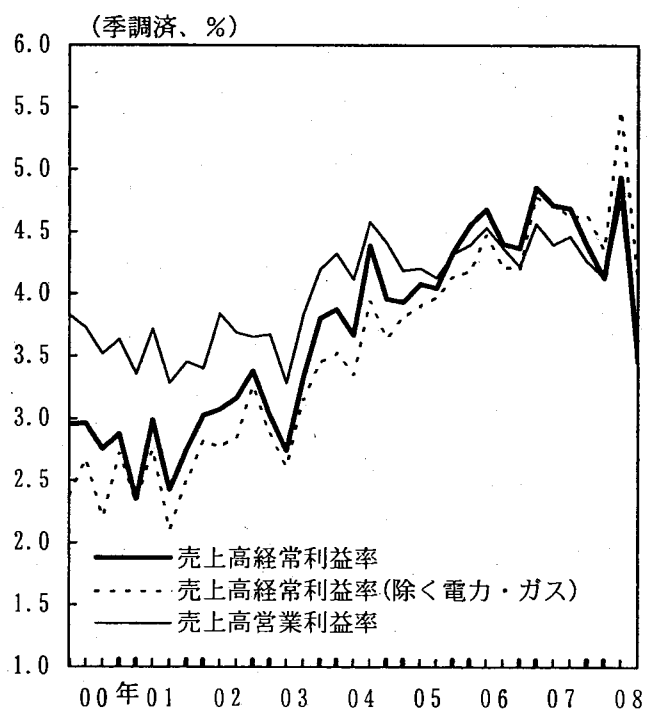
(1) 製造業大企業



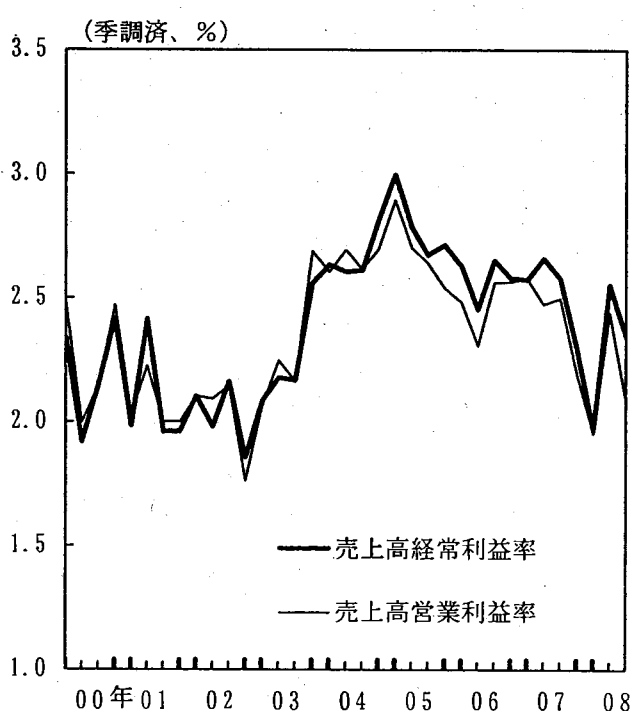
(2) 製造業中堅中小企業



(3) 非製造業大企業



(4) 非製造業中堅中小企業

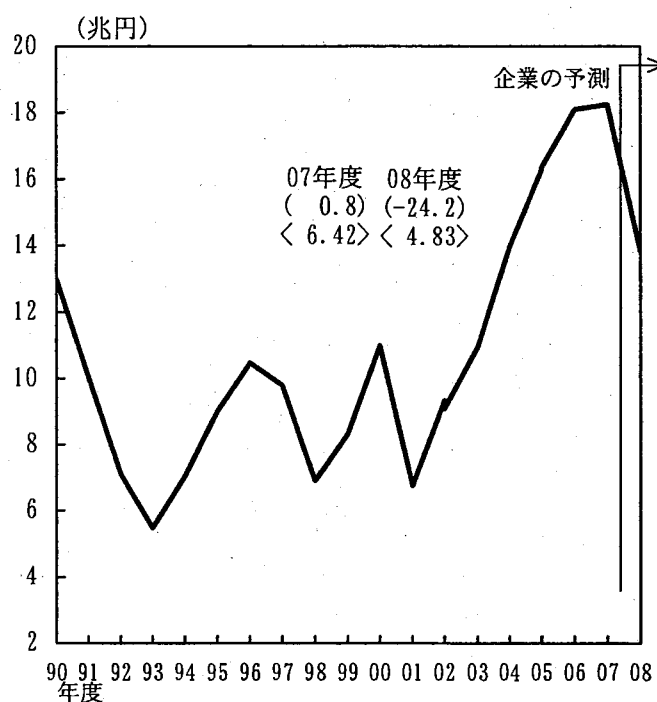


(注) 1. 大企業は資本金10億円以上、中堅中小企業は資本金1,000万円以上10億円未満。
2. 金融業、保険業を除く。
3. 計数は、X-11による季節調整値。

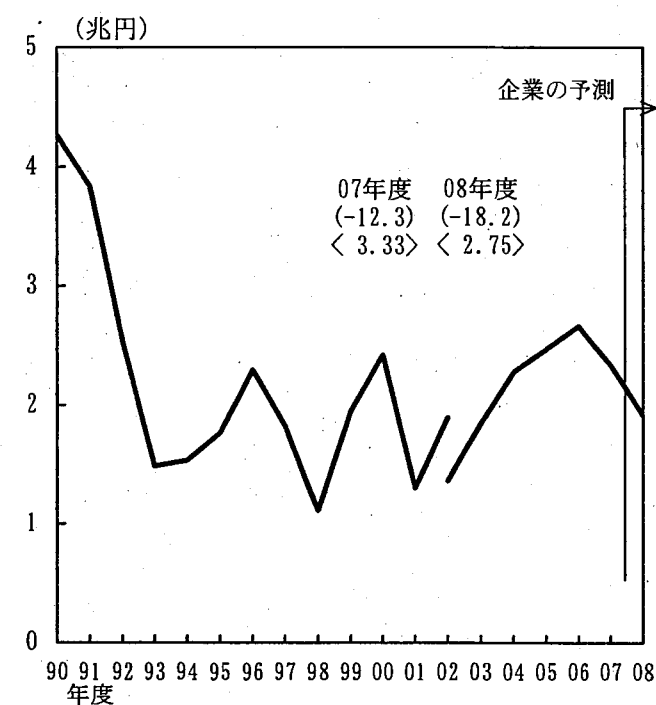
(資料) 財務省「法人企業統計季報」

経常利益（12月短観）

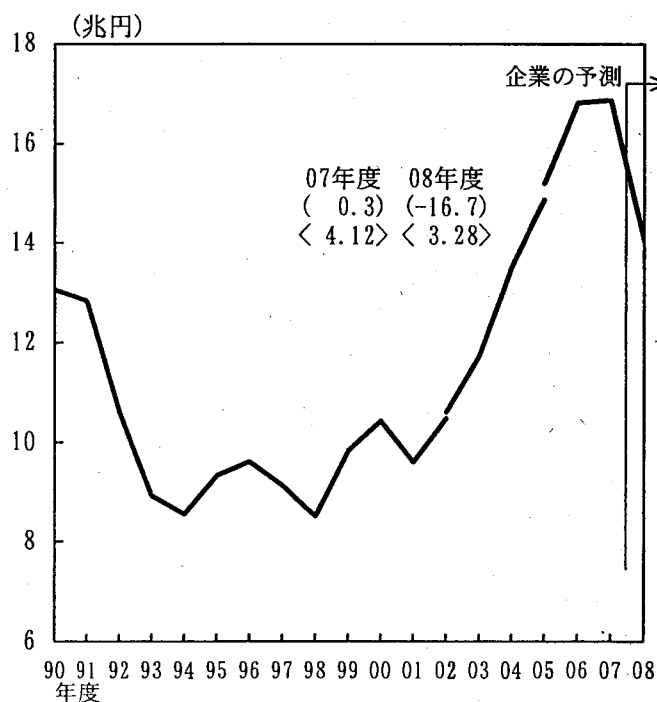
(1) 製造業大企業



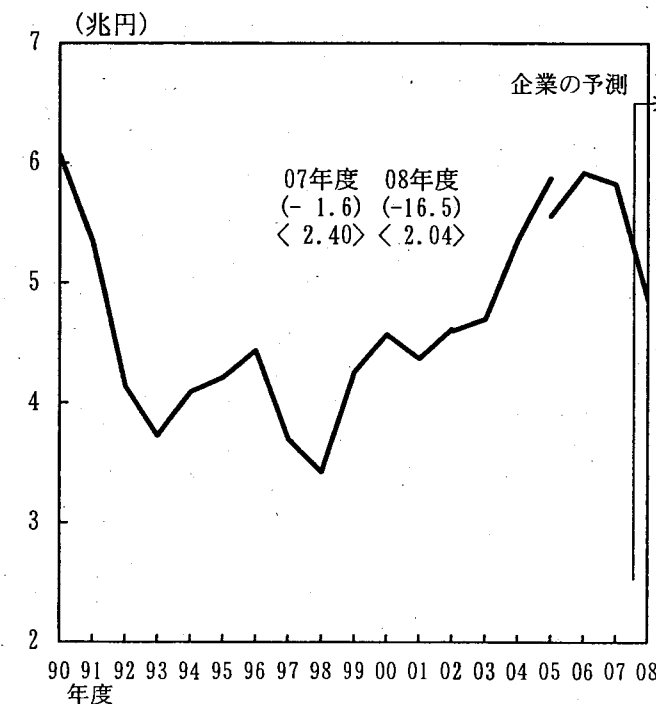
(2) 製造業中小企業



(3) 非製造業大企業



(4) 非製造業中小企業



- (注) 1. ()内は経常利益前年度比(%)、< >内は売上高経常利益率(%)。
2. 2004/3月調査より、調査対象企業の拡充を含む幅広い見直しを実施した。また、2007/3月調査では、定例の調査対象企業の見直しを行った。このため、これらのタイミングで計数には不連続(段差)が生じている。

(資料) 日本銀行「全国企業短期経済観測調査」

設備投資関連指標

<先行指標等>

— < >内は季調済前期(月)比、()内は前年比: %

	07年度	08/4~6月	7~9	10~12	08/8月	9	10
機械受注	(- 3.0)	< 0.6>	<-10.4>	<- 6.1>	<-14.5>	< 5.5>	<- 4.4>
[民需、除く船舶・電力]		(5.3)	(- 6.9)	(-15.5)	(-13.0)	(- 4.2)	(-15.5)
製造業	(- 3.8)	< 2.7>	<-10.9>	<- 1.2>	<-13.9>	< 9.7>	<- 2.2>
非製造業(除く船舶・電力)	(- 2.0)	< 1.0>	<-12.0>	<- 8.5>	<-14.9>	<- 1.3>	<- 2.3>
建築着工床面積	(-12.2)	<- 2.8>	< 0.2>	<- 9.9>	<- 4.2>	<-10.9>	<- 1.1>
[民間非居住用]		(-28.7)	(38.7)	(29.4)	(43.5)	(67.6)	(29.4)
うち鉱工業	(-22.4)	< 7.6>	< 10.0>	<- 8.3>	<-22.5>	<-24.8>	< 23.6>
うち非製造業	(- 8.1)	<- 5.4>	<- 1.2>	<-12.1>	<- 1.5>	<- 1.9>	<-10.5>
資本財総供給	< 0.8>	<- 2.2>	<- 5.6>	<- 0.3>	<- 2.1>	< 5.1>	<- 2.8>
資本財総供給(除く輸送機械)	<- 1.5>	<- 3.6>	<- 6.1>	< 1.6>	<- 1.1>	< 6.4>	<- 2.1>

(注) 1. 機械受注の2008/10~12月の見通し(季調済前期比)は、民需(除く船舶・電力)+1.2%、製造業+2.5%、非製造業(除く船舶・電力)+3.6%となっている。

2. 建築着工床面積は、X-12-ARIMAによる季節調整値。

3. 資本財総供給は、国内向けの国産品と輸入品を合わせたもの。また、年度の値は季調済前年比。

4. 2008/10~12月の前期比は10月の7~9月対比、前年比は10月の前年同月比。

<法人企業統計・設備投資>

— < >内は季調済前期比、()内は前年比: %

	06年度	07年度	07/10~12月	08/1~3	4~6	7~9
全産業	(13.5)	(1.2)	<- 3.0>	<- 0.1>	<- 7.0>	<- 3.5>
うち製造業	(9.8)	(11.1)	<- 0.1>	< 1.6>	<- 0.1>	<- 2.0>
うち非製造業	(15.7)	(- 4.3)	<- 4.7>	<- 1.1>	<-11.4>	<- 4.6>

(注) 年度の計数は、法人企業統計年報(資本金1千万円未満を含む)、四半期の計数は、法人企業統計季報(資本金1千万円以上)を使用。金融業、保険業を除く。

<設備投資アンケート調査>

— 前年比: %、()内は2008年9月調査時点

		2007年度実績	2008年度計画	修正率
全国短観(12月調査)	全産業	3.6	- 2.8 (- 1.3)	- 1.5 (0.1)
	製造業	2.9	0.0 (3.0)	- 2.9 (0.6)
	非製造業	4.0	- 4.3 (- 3.6)	- 0.7 (- 0.2)
うち大企業・全産業	全産業	4.9	- 0.2 (1.7)	- 1.8 (- 0.7)
	製造業	4.6	2.4 (5.6)	- 3.1 (- 1.0)
	非製造業	5.0	- 1.7 (- 0.7)	- 1.0 (- 0.5)
うち中小企業・全産業	全産業	2.1	-11.6 (-12.9)	1.5 (9.1)
	製造業	- 3.5	- 7.6 (- 7.2)	- 0.5 (11.3)
	非製造業	5.1	-13.5 (-15.7)	2.6 (8.0)

(注) 土地投資額を含み、ソフトウェア投資額は含まない。

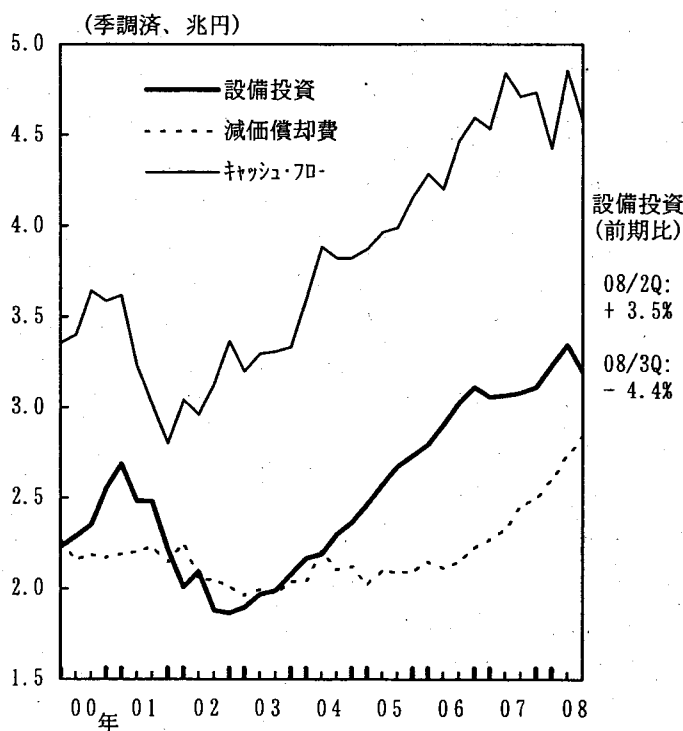
— 前年比: %、()内は2007年6月調査時点

	2006年度実績	2007年度実績	2008年度計画	2009年度計画
日本政策投資銀行(2008年6月調査)	7.7	7.7 (11.0)	4.1 (- 8.8)	- 0.9
うち製造業	12.0	6.6 (13.5)	6.8 (-19.4)	- 8.6
うち非製造業	4.9	8.5 (9.2)	2.4 (- 4.6)	1.4

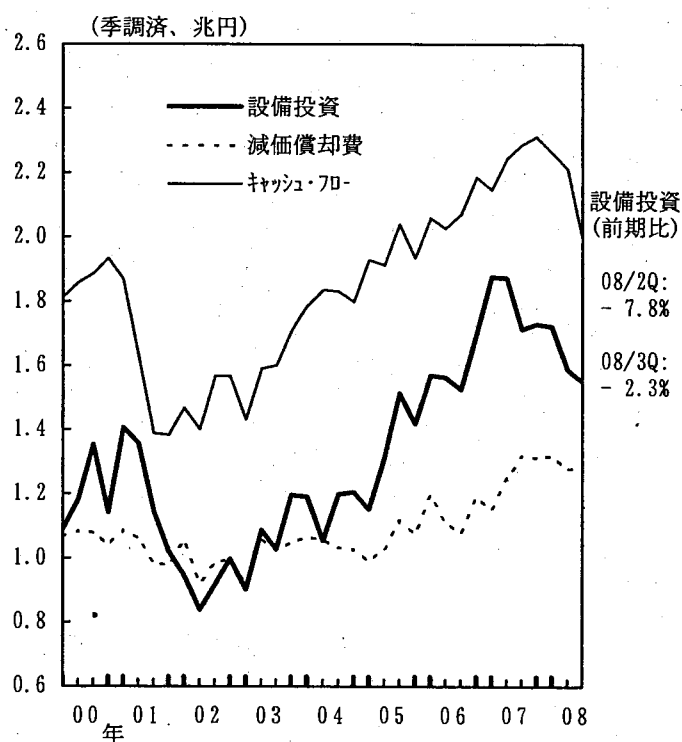
(資料) 経済産業省「鉱工業総供給表」、内閣府「機械受注統計」、国土交通省「建築着工統計」、財務省「法人企業統計季報」「法人企業統計年報」、日本政策投資銀行「設備投資計画調査」、日本銀行「全国企業短期経済観測調査」

業種別・規模別の設備投資

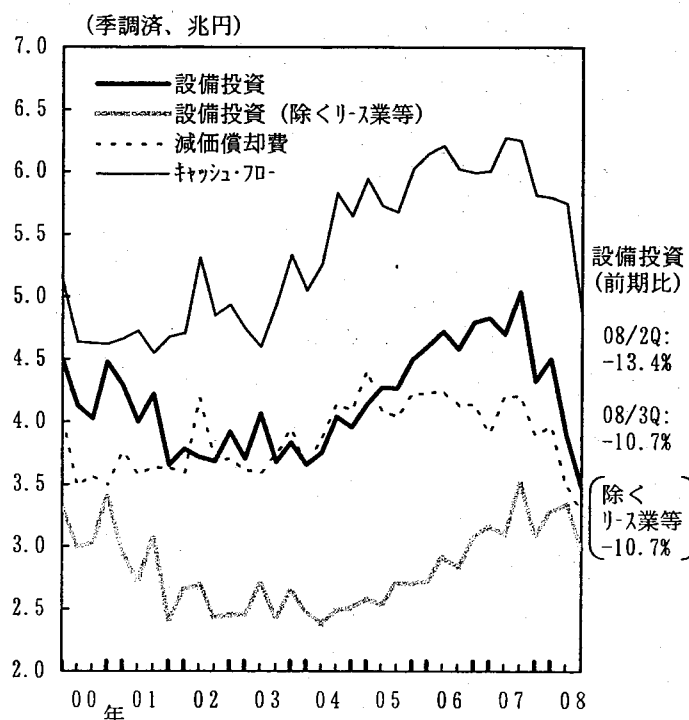
(1) 製造業大企業



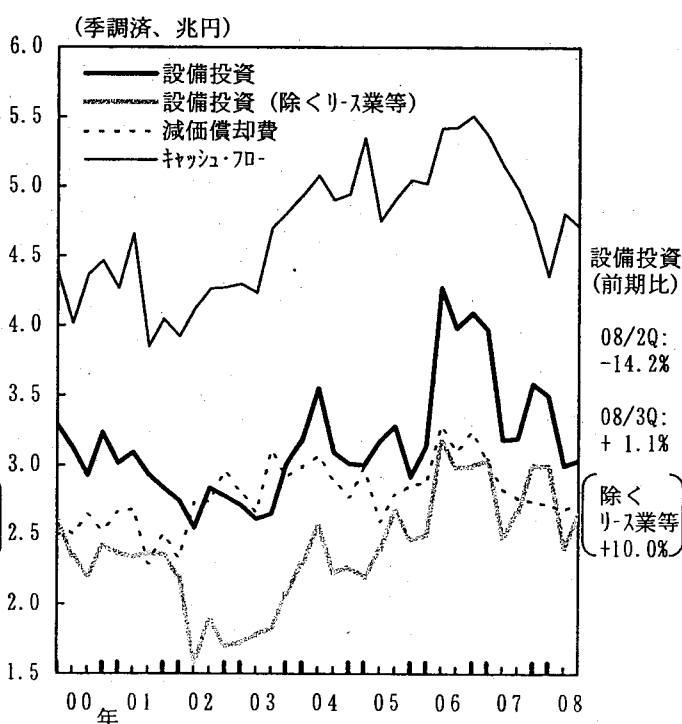
(2) 製造業中堅中小企業



(3) 非製造業大企業



(4) 非製造業中堅中小企業



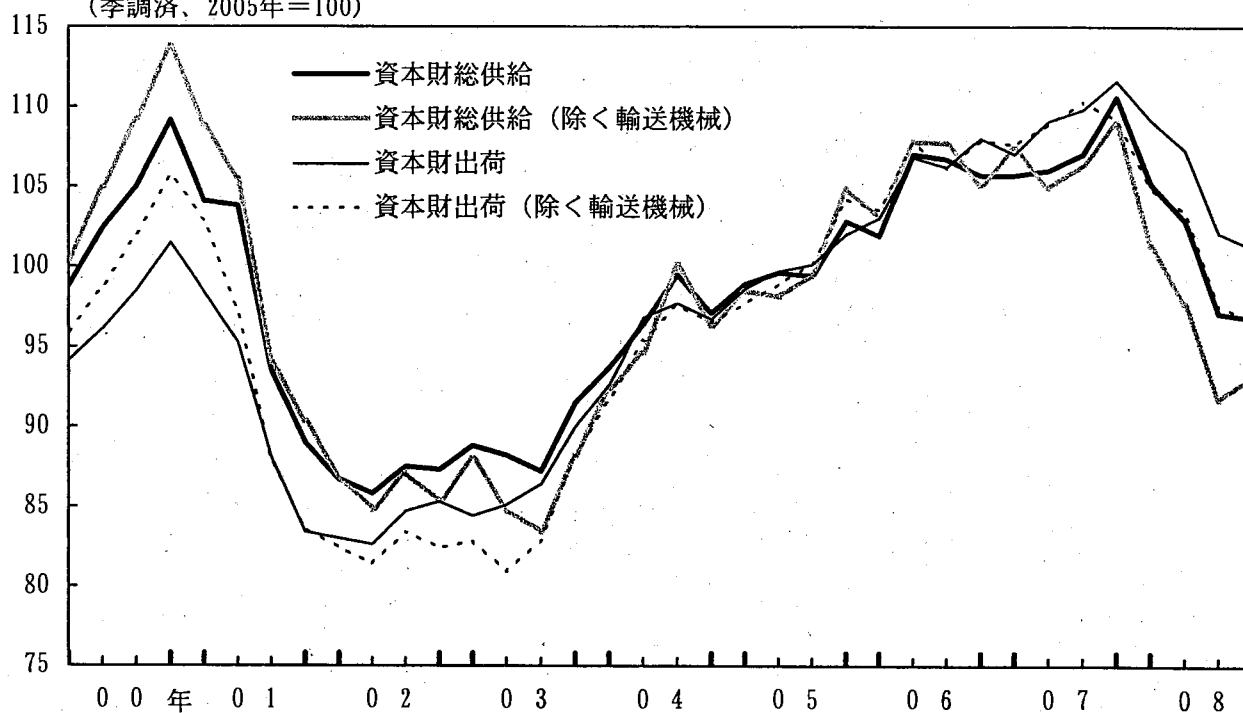
- (注) 1. 大企業は資本金10億円以上、中堅中小企業は資本金1,000万円以上10億円未満。
 2. キャッシュ・フローは、(減価償却費+経常利益×1/2)として算出。
 3. 計数は、X-11による季節調整値。
 4. 計数は全て金融業、保険業を除く。設備投資(除くリース業等)は、04/2Q以降はリース業、その他の物品賃貸業、広告・その他の事業サービス業を除く。04/1Q以前は、事業所サービス業を除く。

(資料) 財務省「法人企業統計季報」

設備投資一致指標

(1) 資本財の総供給・出荷

(季調済、2005年=100)

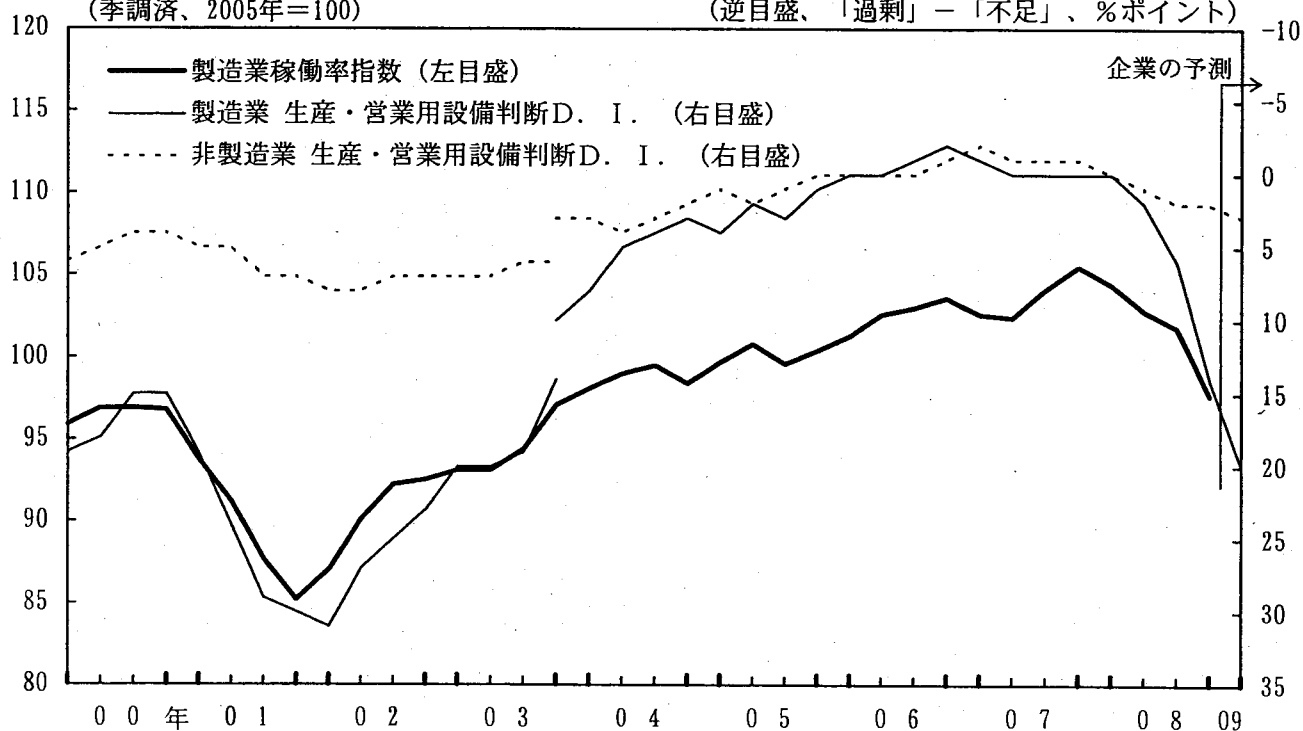


- (注) 1. 資本財総供給は、国内向けの国産品と輸入品を合わせたもの。
 2. 資本財出荷は、国内向けの国産品と輸出品を合わせたもの。
 3. 2008/4Qは10月の計数。

(2) 稼働率と設備判断D. I.

(季調済、2005年=100)

(逆目盛、「過剰」－「不足」、%ポイント)

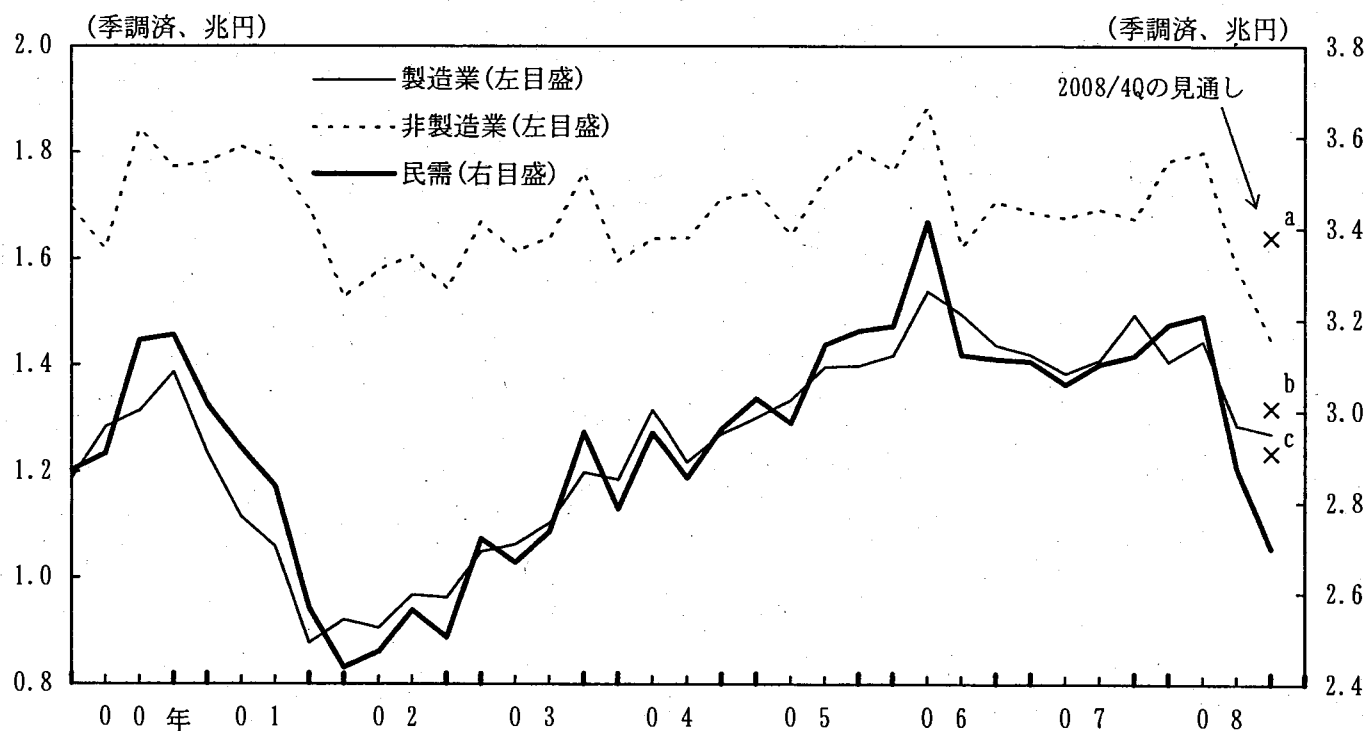


- (注) 1. 生産・営業用設備判断D. I. は全規模合計。
 2. 生産・営業用設備判断D. I. は、2004/3月調査より見直しを実施。
 旧ベースは2003/12月調査まで、新ベースは2003/12月調査から。
 3. 製造業稼働率指数の2008/4Qは10月の計数。

(資料) 経済産業省「鉱工業指数統計」「鉱工業総供給表」、
 日本銀行「全国企業短期経済観測調査」

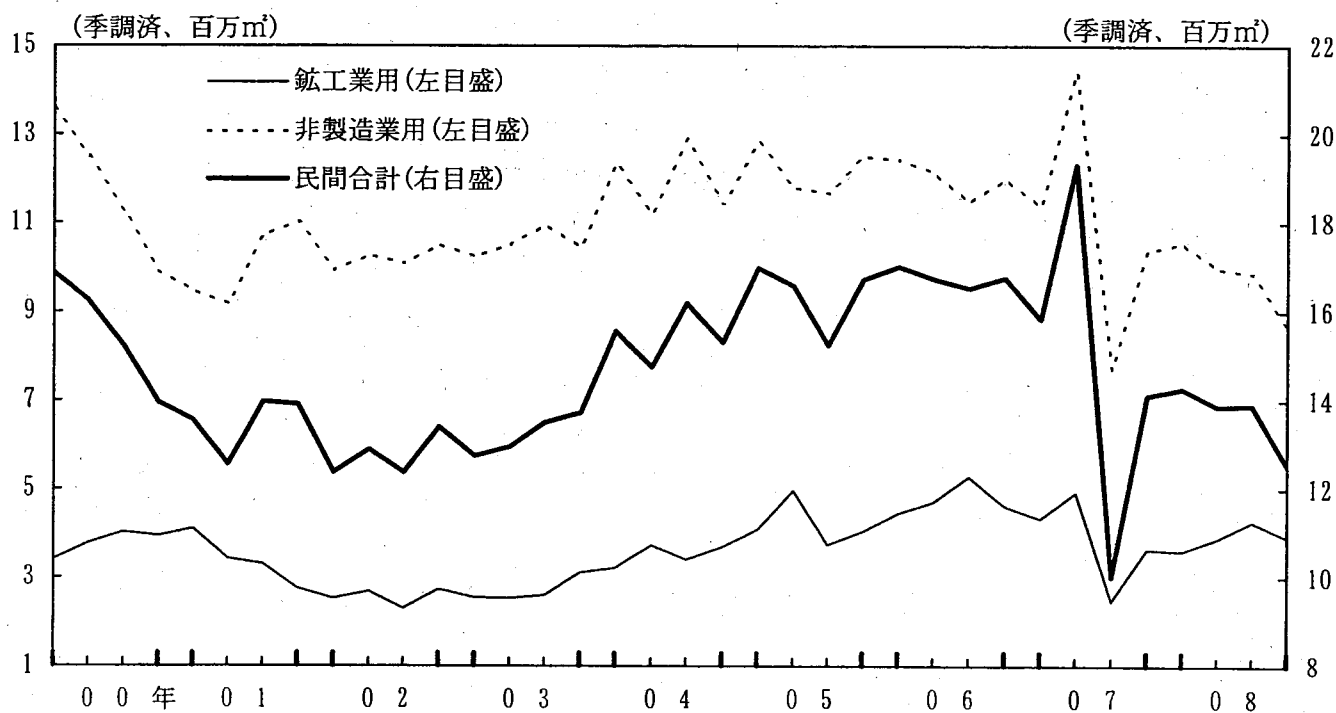
設備投資先行指標

(1) 機械受注



- (注) 1. 民需と非製造業は、それぞれ船舶・電力を除く。
 2. 2008/4Qの見通しは、aは非製造業、bは製造業、cは民需の見通し。
 3. 2008/4Qは、10月の計数を四半期換算。

(2) 建築着工床面積 (民間非居住用)

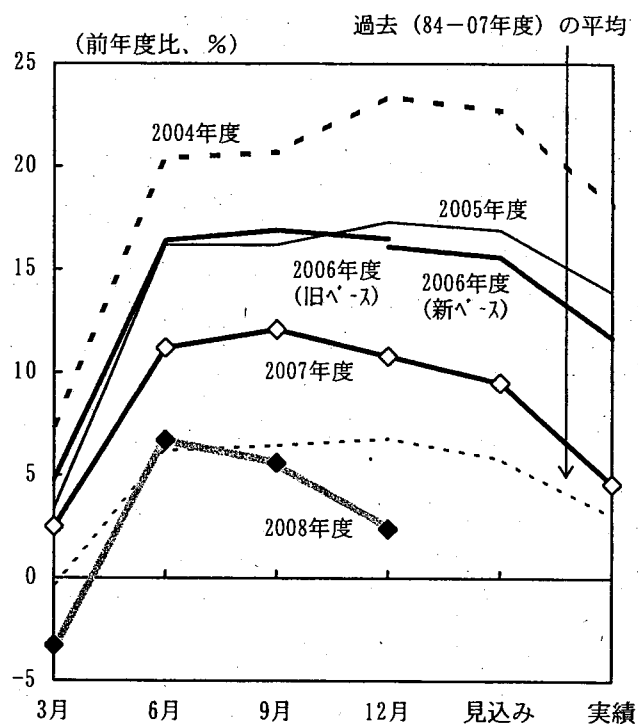


- (注) 1. X-12-ARIMAによる季節調整値。
 2. 新産業分類に対応し、2003年度以降、新聞・出版業が鉱工業から非製造業に分類変更となった。そのため、リンク係数を算出のうえ、2002年度以前を水準調整している。
 3. 2008/4Qは、10月の計数を四半期換算。

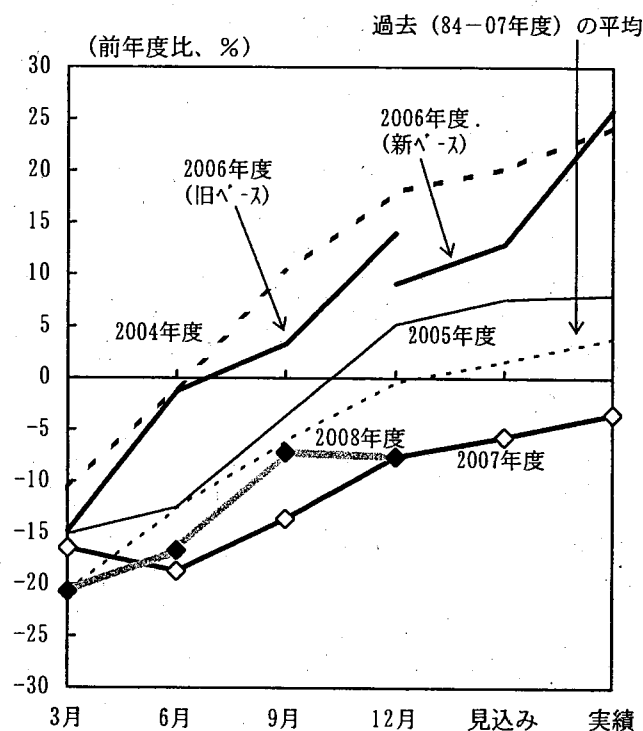
(資料) 内閣府「機械受注統計」、国土交通省「建築着工統計」

設備投資計画（1 2 月短観）

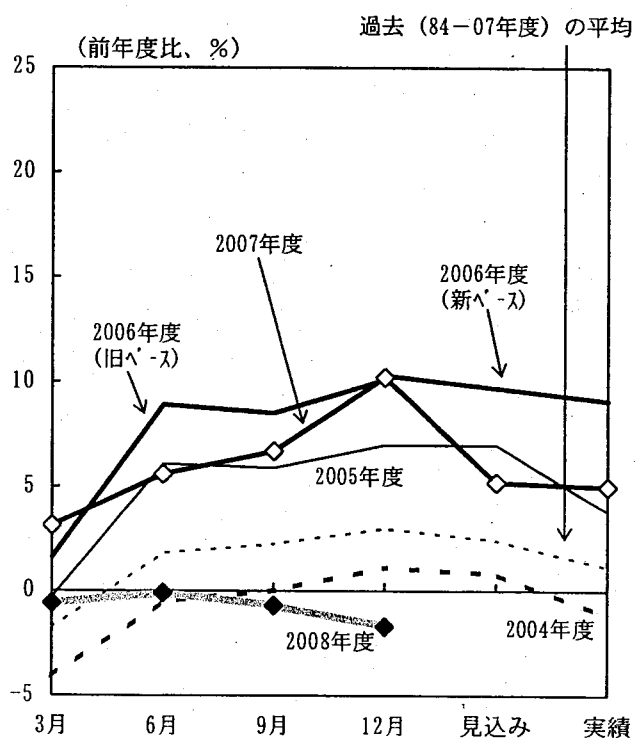
(1) 製造業大企業



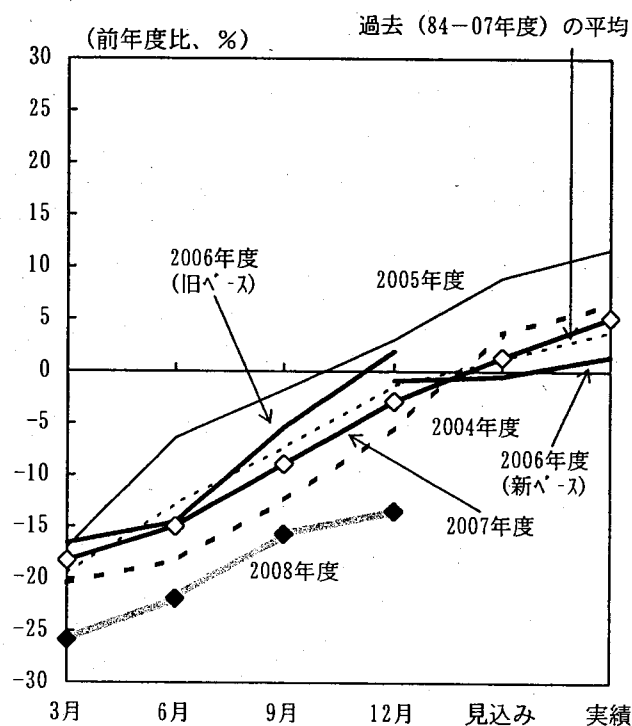
(2) 製造業中小企業



(3) 非製造業大企業



(4) 非製造業中小企業



(注) 1. 土地投資額を含み、ソフトウェア投資額は含まない。

2. 2007/3月調査では定例の調査対象企業の見直しを行ったため、計数には不連続（段差）が生じている。

(資料) 日本銀行「全国企業短期経済観測調査」

個人消費関連指標

— ()内は前年比、< >内は季調済前期(月)比：％
 — []内の計数は2007年度売上高(名目、兆円、除く消費税)

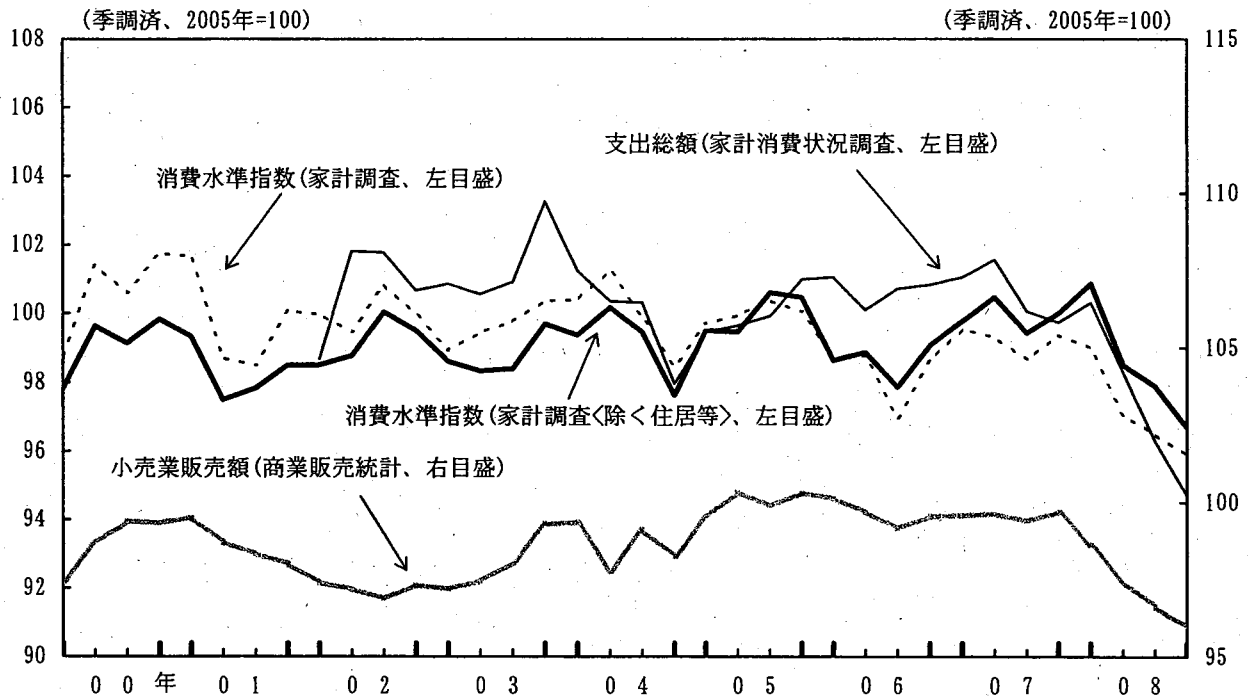
	07年度	08/4～6月	7～9	10～12	08/8月	9	10	11
家計調査報告								
消費水準指数(実質)	(0.6)	(-2.2)	(-2.2)	(-3.4)	(-4.0)	(-2.2)	(-3.4)	
		< -2.0>	< -0.5>	< -0.6>	< -3.3>	< 1.7>	< -0.6>	
消費水準指数(実質・除く住居等)	(1.3)	< -2.4>	< -0.6>	< -1.2>	< -2.9>	< 3.5>	< -2.5>	
消費支出(実質)	(0.9)	< -3.2>	< -0.2>	< -1.4>	< -3.4>	< 1.7>	< -1.4>	
平均消費性向(％)	73.6	74.4	74.1	69.6	71.0	74.3	69.6	
家計消費状況調査								
支出総額(実質)	(-0.3)	(-3.2)	(-3.8)	(-5.0)	(-4.3)	(-3.6)	(-5.0)	
		< -2.0>	< -2.0>	< -1.6>	< -1.4>	< 0.7>	< -1.6>	
乗用車新車登録台数(含む軽)	(-3.7)	(-0.5)	(-1.5)	(-12.8)	(-8.0)	(-4.5)	(-6.3)	(-18.9)
[439万台]		< -2.0>	< -2.2>	< -7.5>	< -6.0>	< -3.9>	< 0.6>	< -7.2>
乗用車新車登録台数(除く軽)	(-2.1)	(0.7)	(-2.4)	(-21.0)	(-12.8)	(-5.7)	(-13.4)	(-27.9)
[296万台]		< -1.9>	< -3.5>	< -13.8>	< -11.6>	< -0.9>	< -4.9>	< -9.6>
商業販売統計								
小売業販売額(実質)	(0.0)	(-2.2)	(-3.0)	(-3.5)	(-3.0)	(-3.8)	(-3.5)	
[129.2]		< -1.2>	< -0.8>	< -0.7>	< -0.3>	< -0.0>	< -0.6>	
家電販売額(実質)	(12.8)	(13.7)	(17.7)	(13.4)	(18.7)	(13.1)	(13.4)	
[7.3]		< 1.8>	< 7.2>	< -4.3>	< 4.9>	< -4.3>	< -3.0>	
全国百貨店売上高	(-0.9)	(-4.5)	(-3.2)	(-6.9)	(-2.9)	(-4.6)	(-6.9)	
[8.0]		< -3.0>	< 0.7>	< -3.9>	< -2.7>	< 0.8>	< -3.6>	
全国スーパー売上高	(-1.1)	(-1.6)	(-1.2)	(-2.6)	(-1.8)	(-2.5)	(-2.6)	
[12.2]		< -1.7>	< 0.3>	< -2.3>	< -2.4>	< 1.1>	< -2.2>	
コンビニエンスストア売上高	(1.3)	(4.1)	(9.2)	(9.8)	(6.7)	(7.5)	(9.8)	
[7.2]		< 3.2>	< 5.5>	< 0.6>	< -5.4>	< 1.3>	< 1.6>	
旅行取扱額	(2.0)	(-1.5)	(-4.2)	(-2.0)	(-6.4)	(-6.6)	(-2.0)	
[5.7]		< -2.9>	< -1.6>	< 0.3>	< -2.7>	< -3.2>	< 3.5>	
外食産業売上高	(3.4)	(-0.3)	(0.8)	(1.3)	(2.1)	(-2.4)	(1.3)	
		< 0.1>	< 1.2>	< -1.1>	< -1.5>	< -0.2>	< -0.4>	

- (注) 1. 消費水準指数は、二人以上の世帯・世帯人員及び世帯主の年齢分布調整ベース。消費水準指数(除く住居等)は、消費支出合計から「住居」、「自動車等購入」、「贈与金」、「仕送り金」を除いている。
 2. 消費支出、支出総額は、二人以上の世帯ベース。平均消費性向は二人以上の世帯のうち勤労者世帯ベース。
 3. 全国百貨店・全国スーパー売上高の前年比及び前期比は、店舗調整後。コンビニエンスストア・外食産業売上高の前年比及び前期比は店舗調整前。
 4. 支出総額、小売業販売額、家電販売額は、調査統計局において実質化。
 5. 2008/10～12月の新車登録台数は10～11月の値、その他は10月の値を使用。

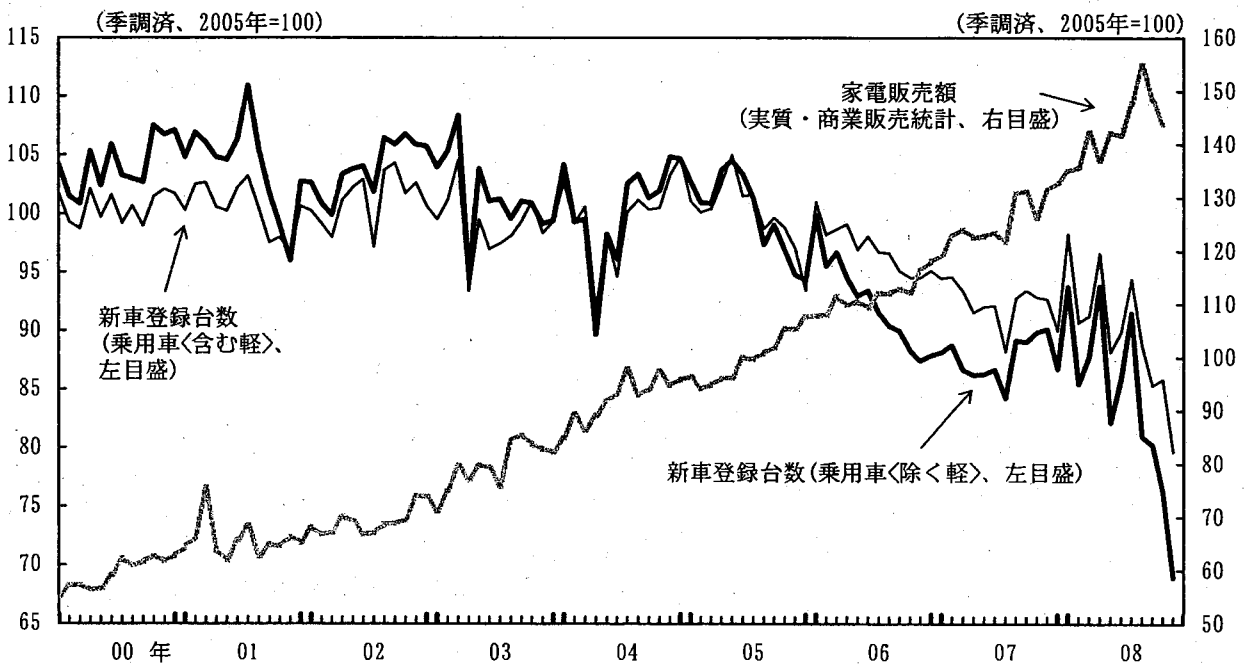
(資料) 総務省「家計調査報告」「家計消費状況調査」「消費者物価指数」、経済産業省「商業販売統計」、日本自動車販売協会連合会「自動車国内販売」、全国軽自動車協会連合会「軽自動車新車販売速報」、観光庁「旅行取扱状況」、日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」

個人消費 (1)

(1) 家計調査・家計消費状況調査・商業販売統計 (実質)



(2) 耐久消費財



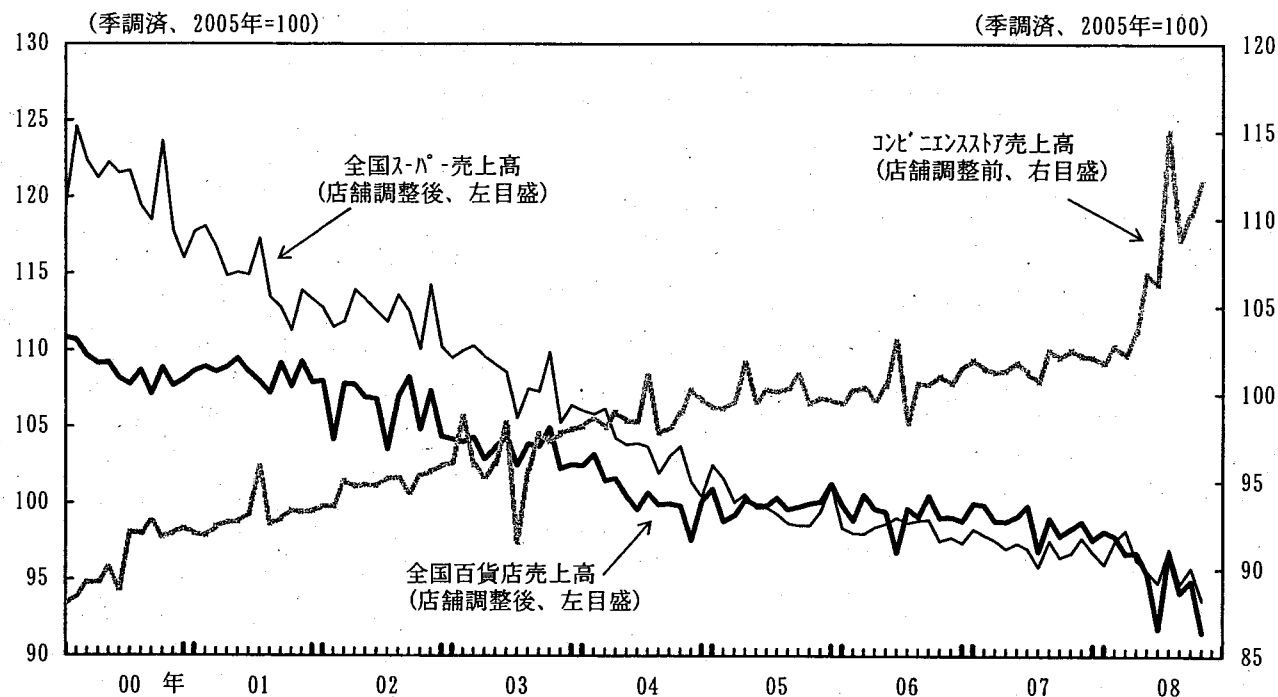
- (注) 1. 支出総額はX-11、それ以外はX-12-ARIMAによる季節調整値。但し、消費水準指数は総務省による季節調整値。
 2. 消費水準指数は、二人以上の世帯(世帯人員及び世帯主の年齢分布調整済)ベース。
 3. 支出総額は二人以上の世帯ベース。CPI「持家の帰属家賃を除く総合」で実質化。
 4. 小売業販売額は、CPI(「財」から「電気・都市ガス・水道」を除いたもの)で実質化。家電販売額は、商業販売統計の機械器具小売業販売額指数を、各種家電関連商品のCPI(但し、2002年以前のパソコン用プリンタはCPIで代用)を幾何平均して算出したデフレーターで実質化。
 5. 2008/4Qは10月の値。

(資料) 総務省「家計調査報告」「家計消費状況調査」「消費者物価指数」、経済産業省「商業販売統計」、日本銀行「企業物価指数」、日本自動車販売協会連合会「自動車国内販売」、全国軽自動車協会連合会「軽自動車新車販売速報」

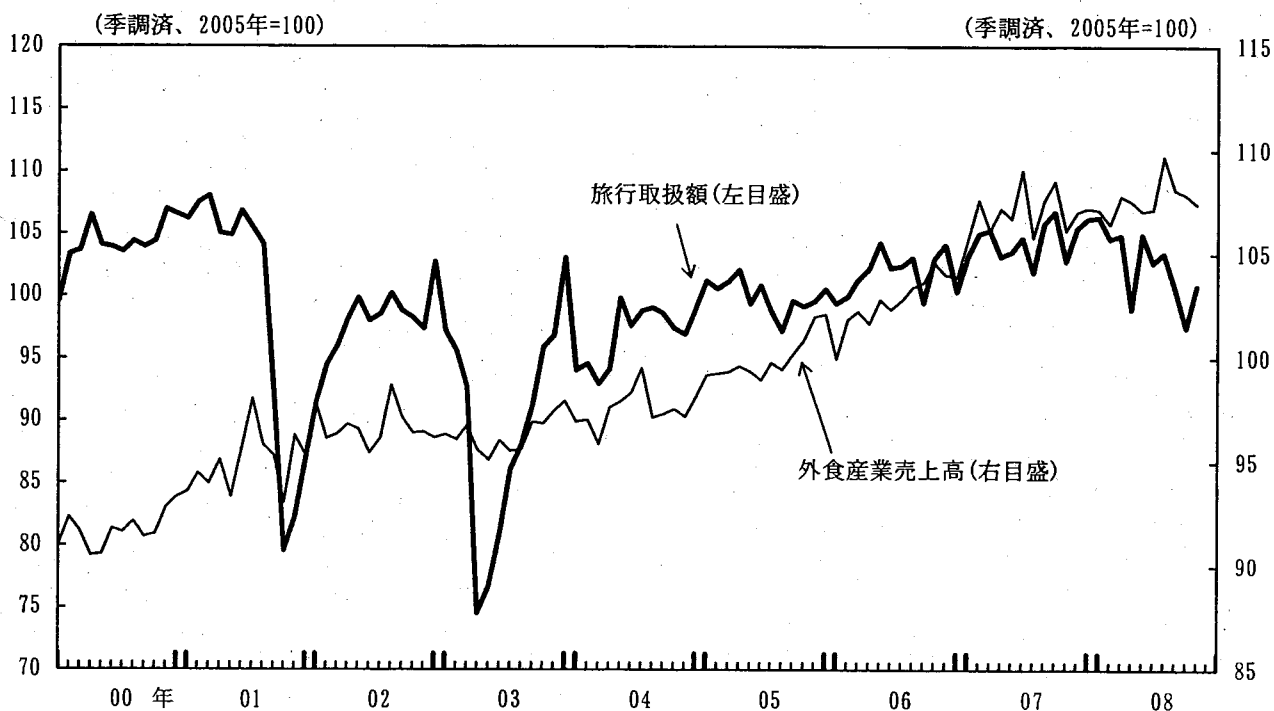
(図表 2 4)

個人消費 (2)

(1) 小売店販売 (名目)



(2) サービス消費 (名目)



(注) 1. X-12-ARIMAによる季節調整値。

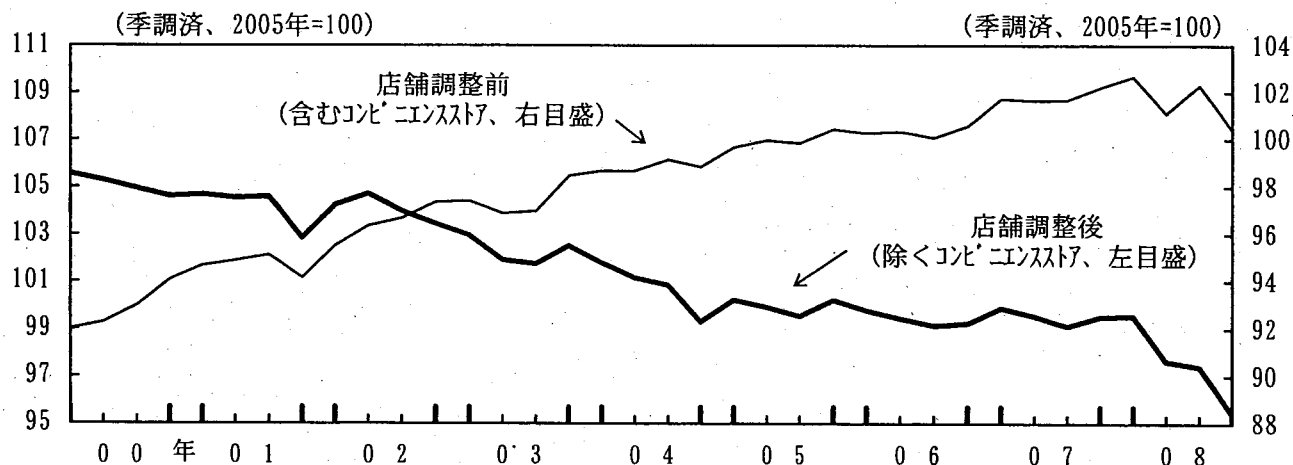
2. 旅行取扱額については、2007/4月に、調査対象が変更された結果、原データに断層が生じている。2007/4月以降の系列は、新ベースの前年比を用いて接続している。

3. 外食産業売上高は、1993年の外食総研のデータを基準とし、日本フードサービス協会の前年比で延長。

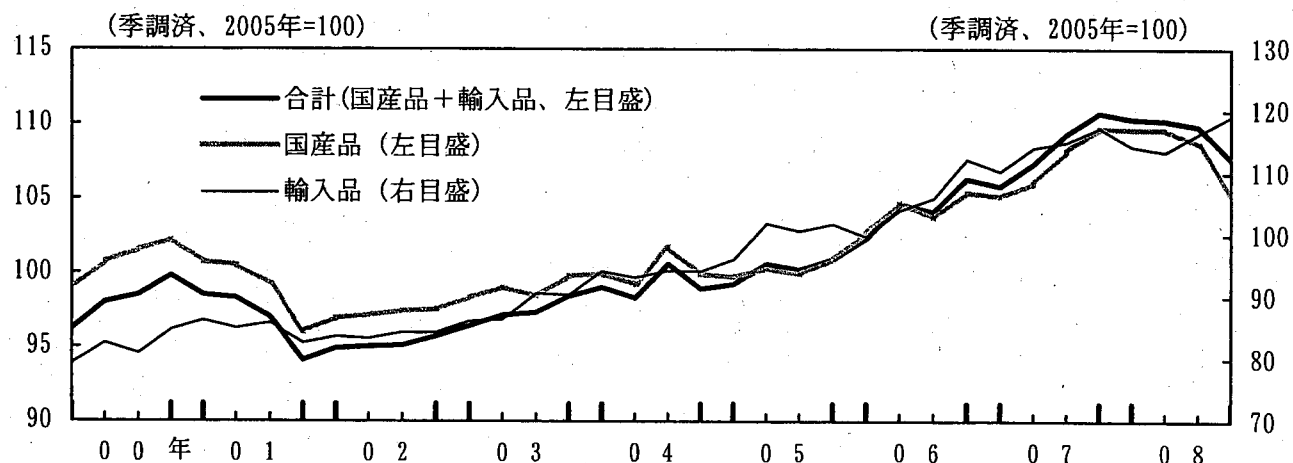
(資料) 経済産業省「商業販売統計」、観光庁「旅行取扱状況」、
外食総研「月次売上動向調査」、日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」

個人消費 (3)

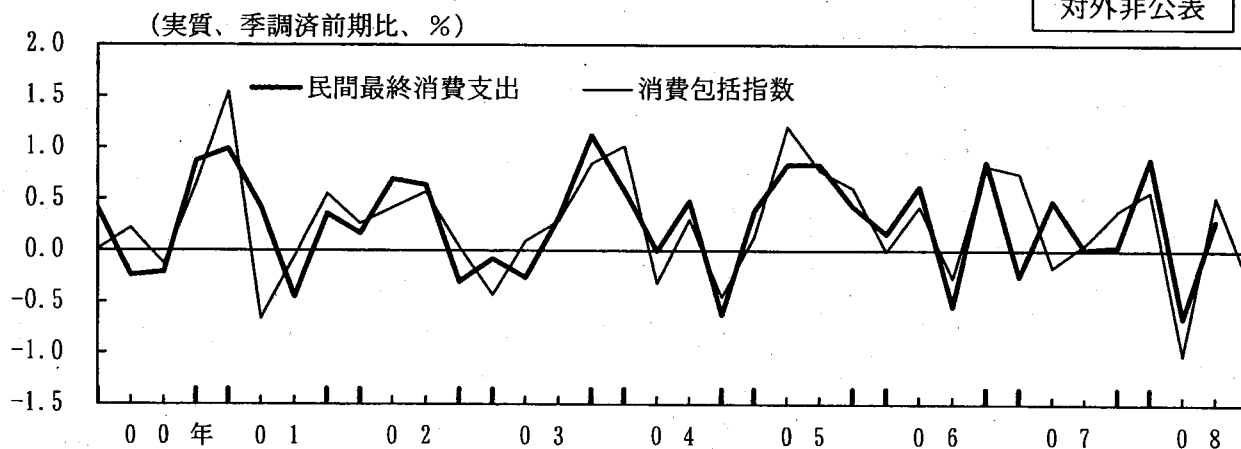
(1) 販売統計合成指数 (実質)



(2) 消費財総供給



(3) 消費包括指数とGDP消費



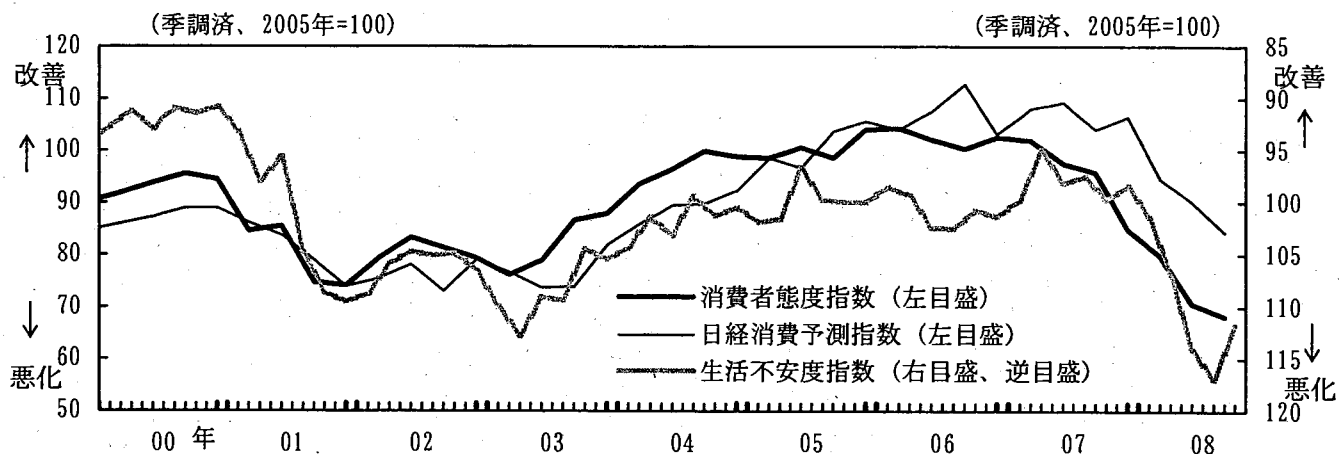
- (注) 1. 販売統計合成指数は、全国百貨店・全国スーパー売上高、新車登録台数、家電販売額、旅行取扱額、
 外食産業売上高の各統計を合成することにより作成。さらに、店舗調整前の指数には、コンビニ
 エンスストア売上高も合算している。
2. 消費包括指数は、GDPの推計方法にならい、各種の消費関連統計を幅広く加重平均して算出
 したもの。また、毎月季節調整替えを行うため、過去に遡って改訂される。
3. 消費包括指数は12/5日までに公表された統計をもとに算出。
4. 販売統計合成指数及び消費財総供給の2008/4Qは、10月の値。

(資料) 経済産業省「鉱工業総供給表」、内閣府「国民経済計算」、
 日本銀行「販売統計合成指数」など

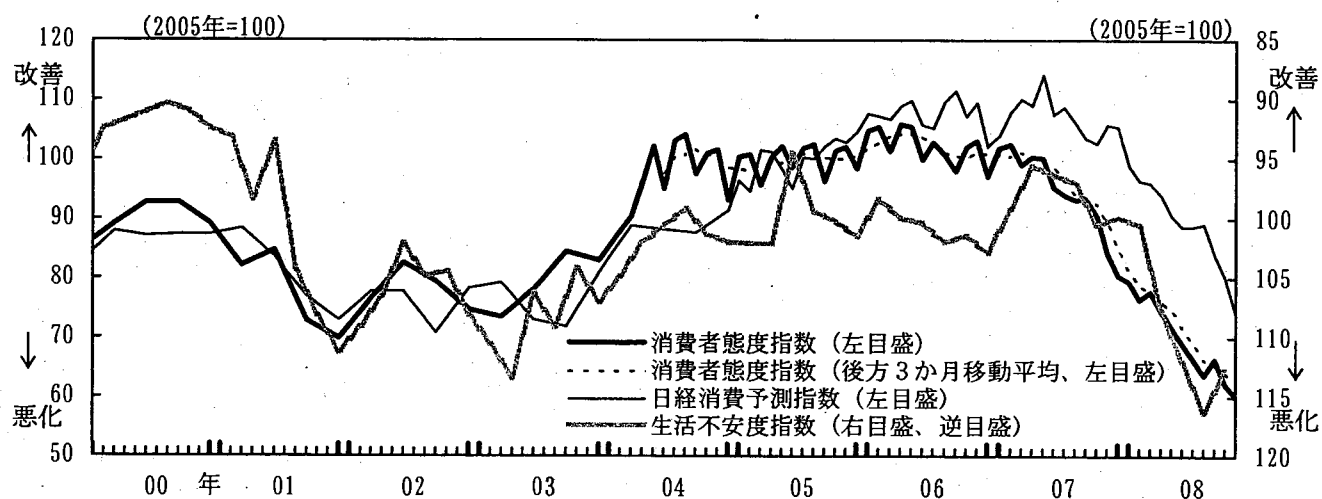
(図表 26)

消費者コンフィデンス

(1) 季調済系列

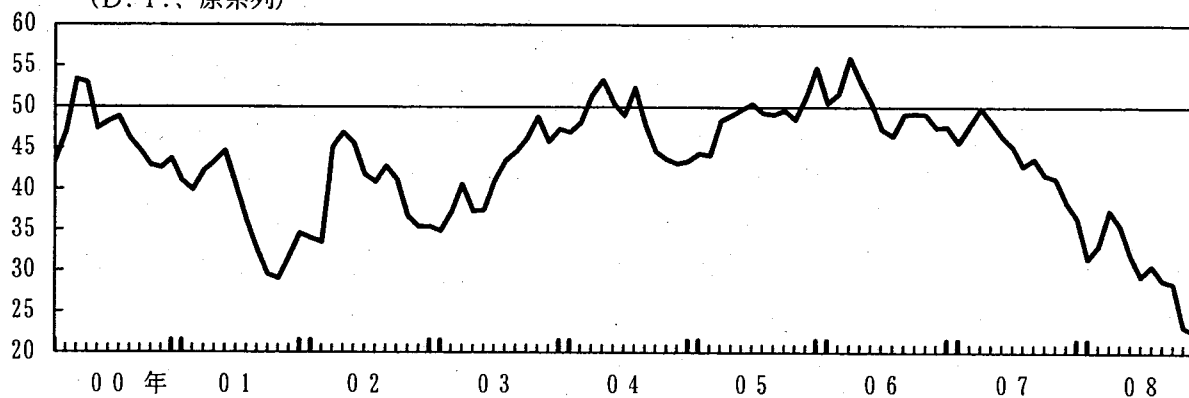


(2) 原系列



<参考> 景気ウォッチャー調査 (家計動向関連、現状判断D.I.)

(D.I.、原系列)



- (注) 1. 消費者態度指数 (調査客体：全国一般 5,000世帯弱)、日経消費予測指数 (同：首都圏 600人)、生活不安度指数 (同：全国 1,200人) はいずれも消費者意識を尋ねたアンケート調査。
2. 調査が実施されていない月については、線形補間を実施。
3. (1) はX-11による季節調整値。但し、消費者態度指数は、内閣府による季節調整値。なお、日経消費予測指数は、2004年まで四半期調査であったため、四半期の値で季節調整を実施。

(資料) 内閣府「消費動向調査」「景気ウォッチャー調査」、日本経済新聞社「日経消費予測指数」、日本リサーチ総合研究所「消費者心理調査」

住宅関連指標

<新設住宅着工戸数>

— 季調済年率換算戸数：万戸、〈 〉内は季調済前期（月）比、（ ）内は前年比：％

	07年度	08/4～6月	7～9	10～12	08/8月	9	10
総戸数	103.6	111.7	113.4	102.7	113.0	112.6	102.7
		< -2.1>	< 1.4>	< -9.4>	< -1.2>	< -0.4>	< -8.9>
	(-19.4)	(-11.0)	(40.2)	(19.8)	(53.6)	(54.2)	(19.8)
持家	31.2	30.6	34.1	31.6	35.5	34.8	31.6
		< -6.4>	< 11.4>	< -7.2>	< 10.6>	< -2.1>	< -9.0>
	(-12.3)	(-6.7)	(26.0)	(-4.3)	(35.6)	(19.9)	(-4.3)
分譲	28.3	32.2	30.6	25.1	32.8	30.9	25.1
		< -2.6>	< -5.0>	< -17.9>	< 16.8>	< -5.7>	< -18.7>
	(-26.1)	(-14.5)	(50.9)	(28.9)	(73.7)	(82.8)	(28.9)
貸家系	44.1	49.2	48.4	46.8	46.4	48.1	46.8
		< 3.4>	< -1.7>	< -3.3>	< -8.3>	< 3.7>	< -2.7>
	(-19.4)	(-11.4)	(46.0)	(35.7)	(58.2)	(74.0)	(35.7)

(注) 2008/10～12月の季調済年率換算戸数は10月の値、季調済前期比は10月の7～9月対比、前年比は10月の前年同月比。

<首都圏新築マンション関連指標 —不動産経済研究所調べ—>

— 〈 〉内は季調済前期（月）比、（ ）内は前年比：％

	07年度	08/4～6月	7～9	10～12	08/9月	10	11
全売却戸数（年率、万戸）	5.4	4.8	3.7	3.7	3.2	4.3	3.1
		< 5.2>	< -23.5>	< 0.6>	< -19.9>	< 32.1>	< -26.7>
	(-21.7)	(-23.3)	(-41.8)	(-22.3)	(-47.5)	(-24.5)	(-19.3)
期末在庫（戸）	10,890	10,984	11,011	11,078	11,011	10,877	11,078
新規契約率（％）	66.3	66.7	59.9	63.1	60.1	63.0	63.2

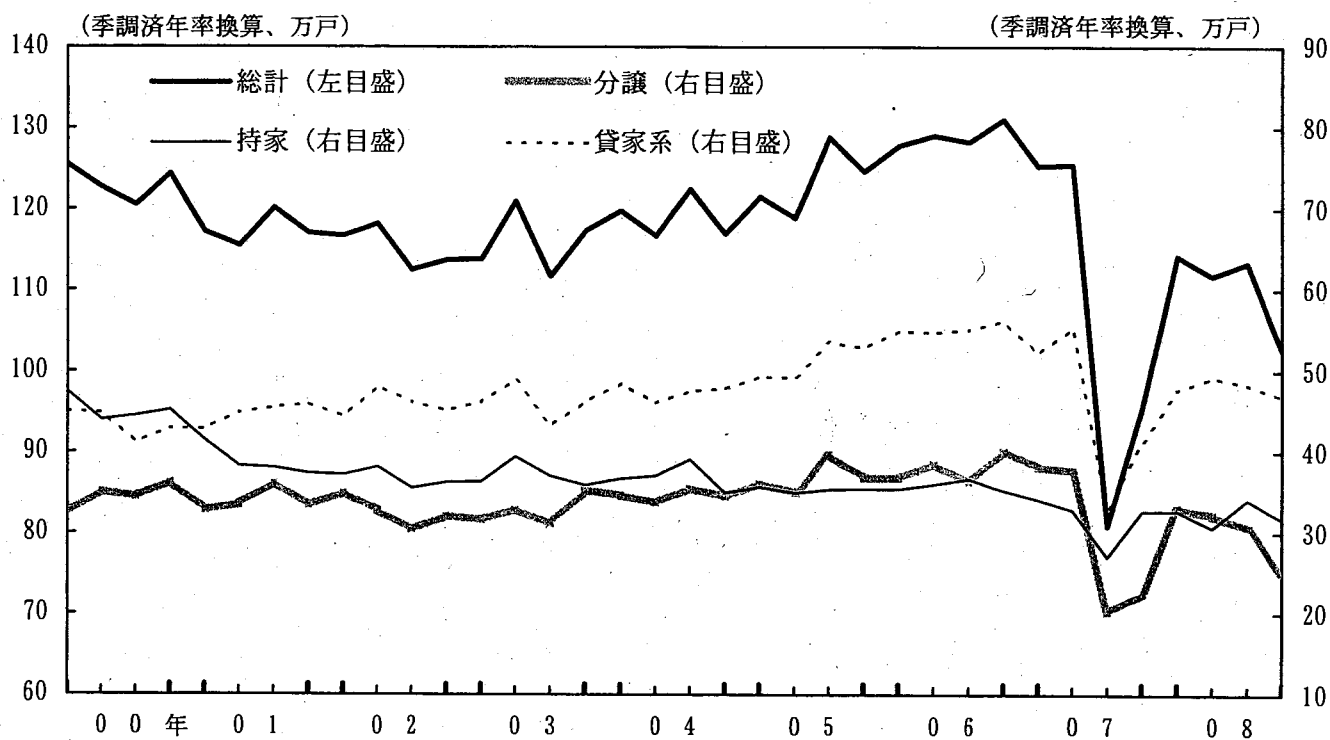
(注) 1. 全売却戸数（契約成立戸数）の月次・四半期計数および期末在庫（年度計数を含む）は、X-12-ARIMAによる季節調整値。新規契約率はすべて原計数。

2. 2008/10～12月の全売却戸数・新規契約率は10～11月の平均値、期末在庫は11月の値、前期比は10～11月の7～9月対比、前年比は10～11月の前年同期比。

(資料) 国土交通省「建築着工統計」、不動産経済研究所「不動産経済調査月報」

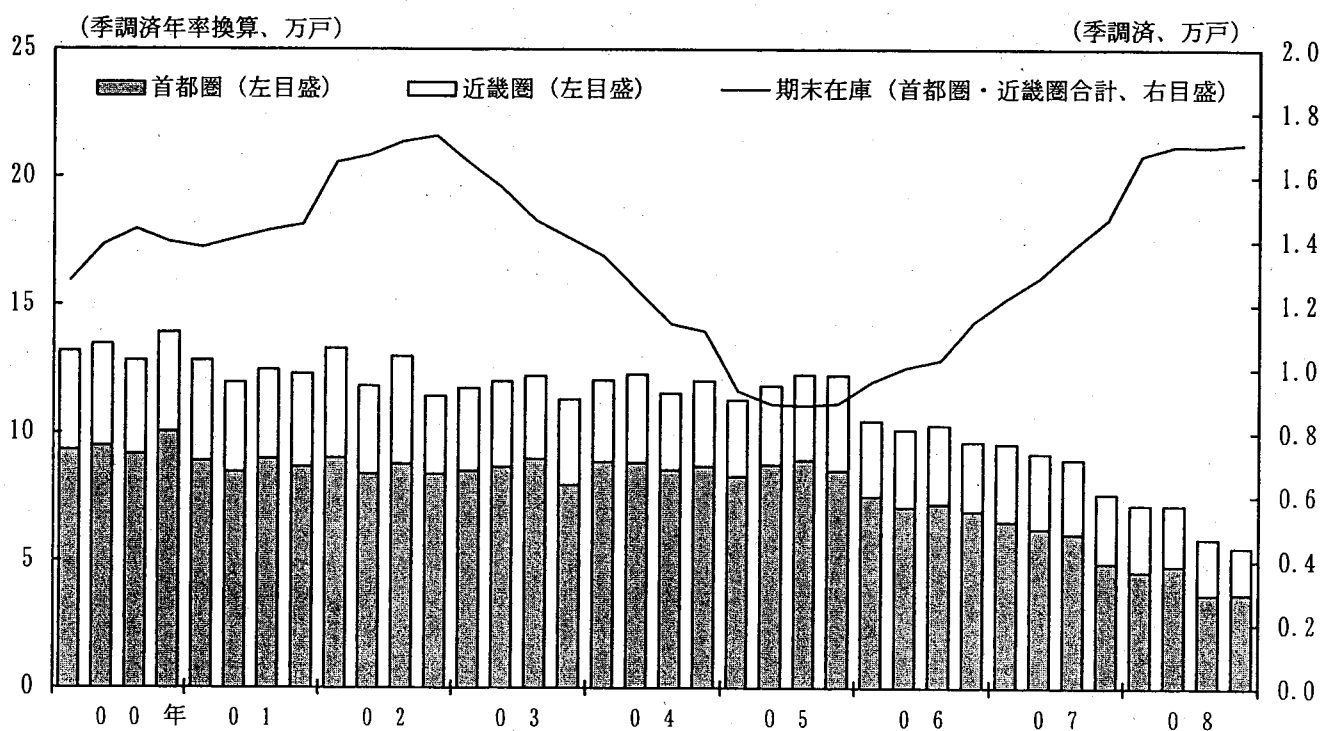
住宅投資関連指標

(1) 新設住宅着工戸数



(注) 2008/4Qは10月の値。

(2) マンション販売動向 (全売却戸数)



(注) 1. X-12-ARIMAによる季節調整値。

2. 2008/4Qの全売却戸数(契約成立戸数)は10～11月の平均値、期末在庫戸数は11月の値。

(資料) 国土交通省「建築着工統計」、不動産経済研究所「不動産経済調査月報」

生産・出荷・在庫関連指標

＜鉱工業指数統計＞

- 〈〉内は季調済前期（月）比、（）内は前年比：％
 — 在庫、在庫率は期末値。
 — 在庫率、稼働率は指数水準：季調済、2005年＝100

	07年度	08/4～6月	7～9	10～12	08/8月	9	10	11	12
生産	(2.6)	<-0.8> (1.0)	<-1.3> (-1.4)	<-3.6> (-7.1)	<-3.5> (-6.9)	< 1.1> (0.2)	<-3.1> (-7.1)	<-6.4> (-15.0)	<-2.9> (-14.7)
出荷	(3.1)	<-0.9> (1.2)	<-1.8> (-1.4)	<-4.0> (-7.3)	<-3.7> (-6.8)	< 0.4> (-0.6)	<-3.0> (-7.3)		
在庫	(2.1)	< 0.4> (2.7)	< 1.6> (3.2)	< 1.8> (4.4)	<-0.3> (1.7)	< 2.0> (3.2)	< 1.8> (4.4)		
在庫率	105.3	105.0	108.3	112.5	109.0	108.3	112.5		
稼働率	104.1	102.8	101.8	97.7	100.1	101.7	97.7		

- (注) 1. 生産の 2008/11、12 月は予測指数。
 予測指数を用いて算出した生産の 2008/10～12 月は、前期比 -8.6%、前年比 -12.2%。
 2. 2008/10～12 月は 10 月の値を用いて算出。

＜第 3 次産業・全産業活動指数＞

- 〈〉内は季調済前期（月）比、（）内は前年比：％

	07年度	08/1～3月	4～6	7～9	08/6月	7	8	9
第3次産業 活動指数	(1.1)	<-1.1> (0.6)	< 0.9> (-0.2)	<-0.6> (-0.8)	<-1.0> (-1.0)	< 1.2> (0.7)	<-1.3> (-2.2)	<-0.6> (-0.8)
全産業 活動指数	(0.9)	<-0.9> (0.4)	< 0.5> (-0.5)	<-0.8> (-1.2)	<-1.0> (-1.3)	< 0.8> (0.3)	<-1.7> (-3.3)	<-0.1> (-0.7)

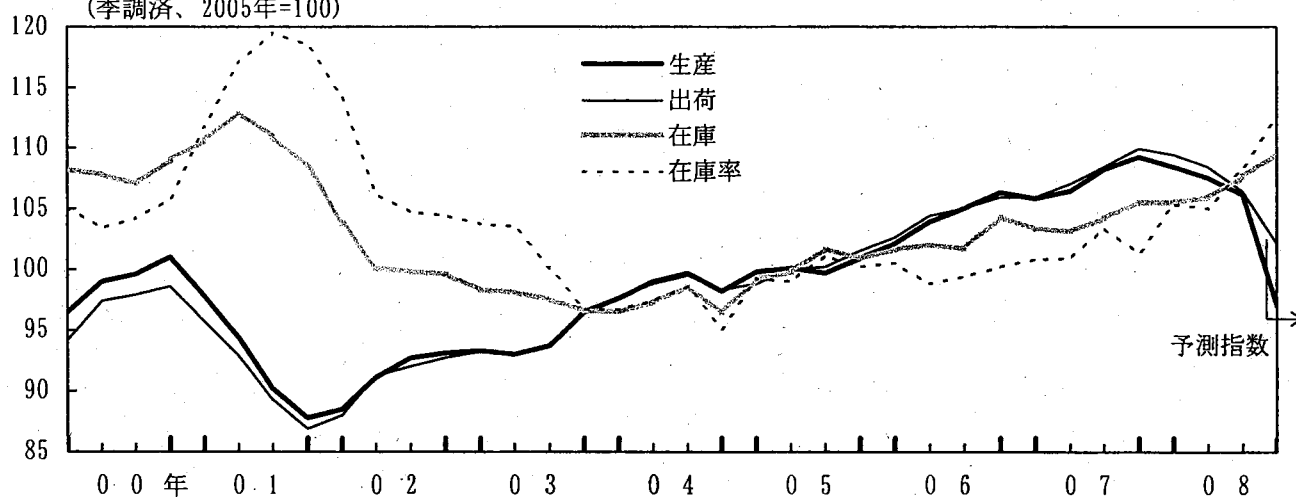
- (注) 全産業活動指数は農林水産業生産指数を除いたベース。

(資料) 経済産業省「鉱工業指数統計」「第 3 次産業活動指数」「全産業活動指数」

生 産

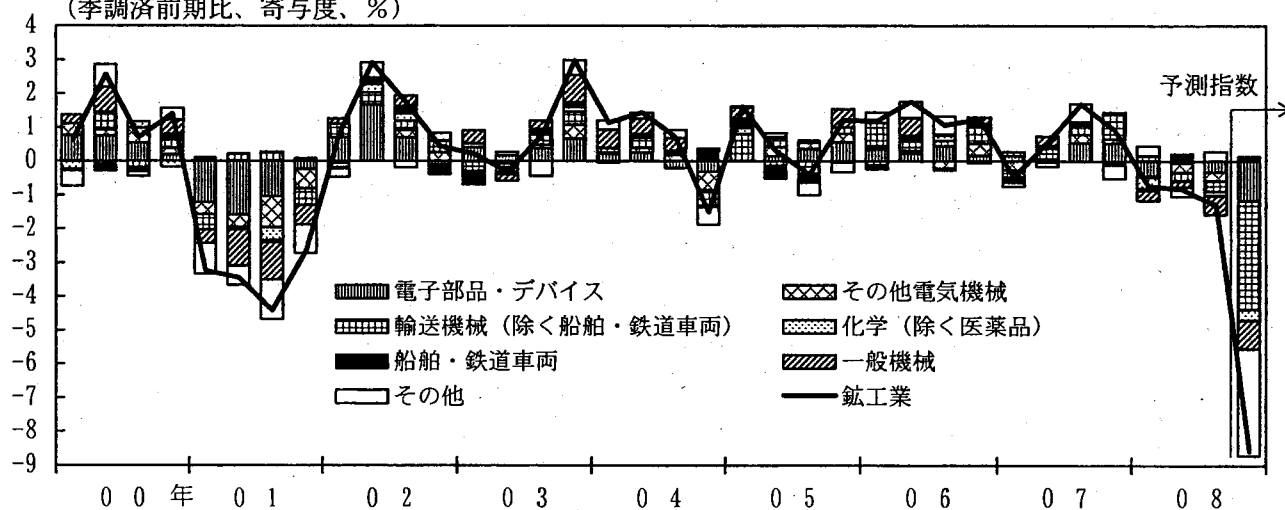
(1) 鉱工業生産・出荷・在庫

(季調済、2005年=100)



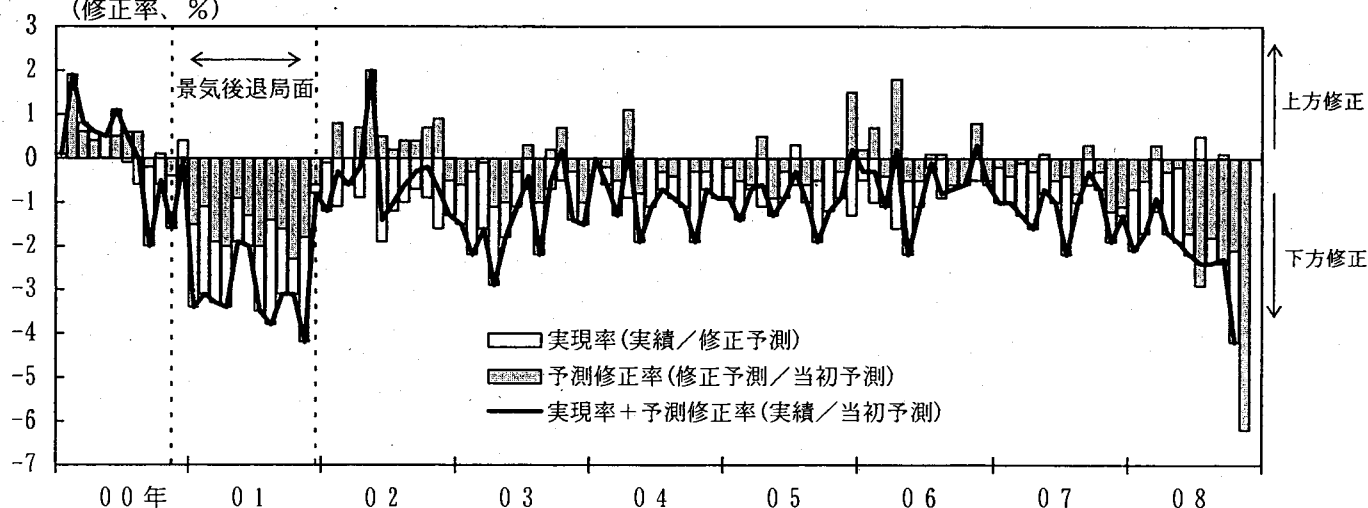
(2) 生産の業種別寄与度

(季調済前期比、寄与度、%)



(3) 生産予測指数の修正状況

(修正率、%)

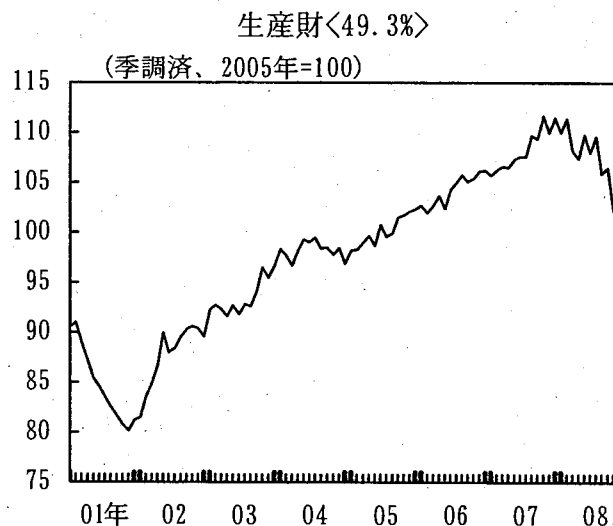
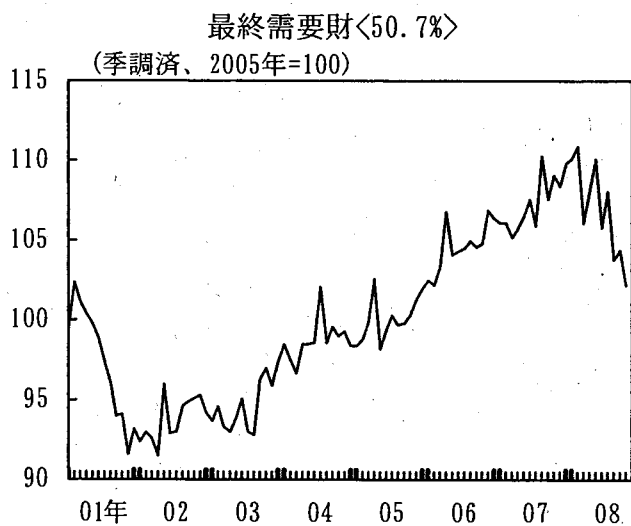


- (注) 1. その他電気機械は電気機械、情報通信機械を合成したもの。
 2. 2008/4Qの生産は、予測指数を用いて算出。出荷、在庫、在庫率は、10月の値。
 3. (2) の2003/1Q以前は、2000年基準の指数を用いて算出。
 (3) の2003年1月以前は2000年基準の値を使用。

(資料) 経済産業省「鉱工業指数統計」

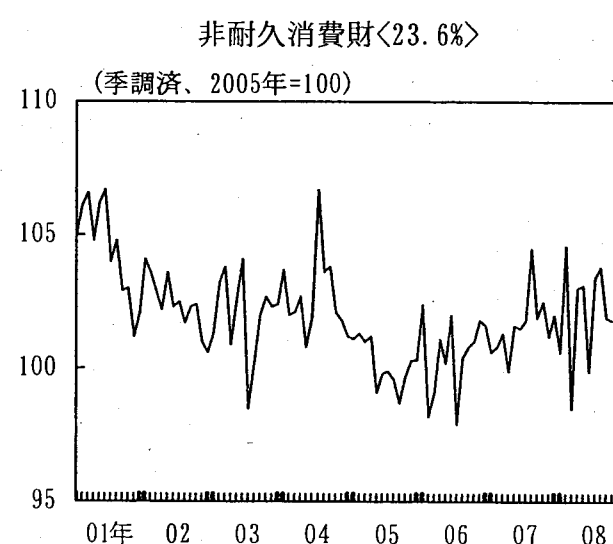
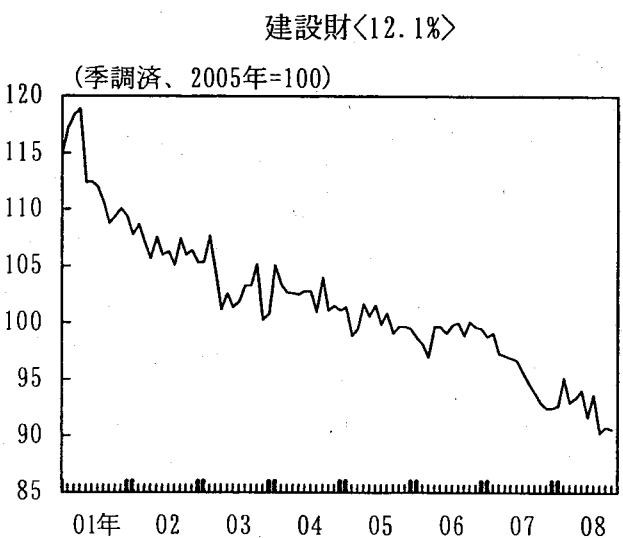
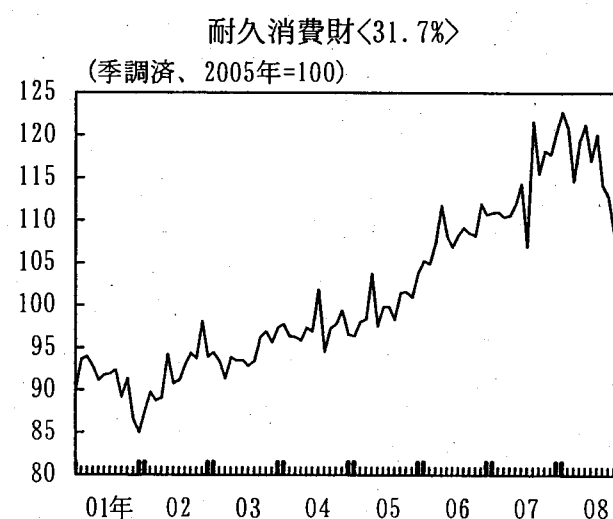
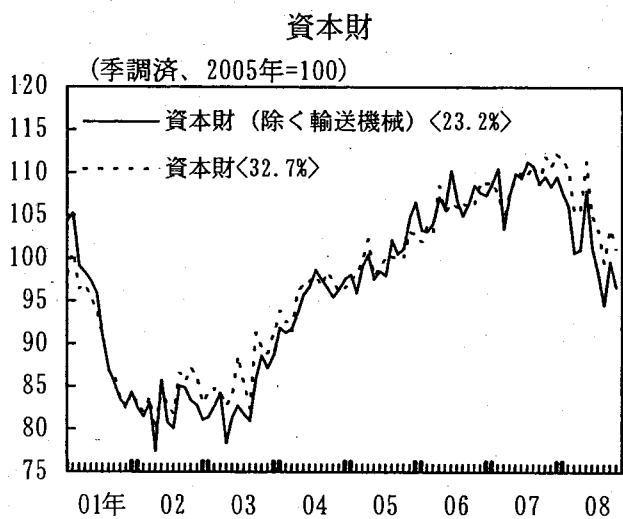
財別出荷

(1) 最終需要財と生産財



(注) < >内は鉱工業出荷に占めるウェイト。

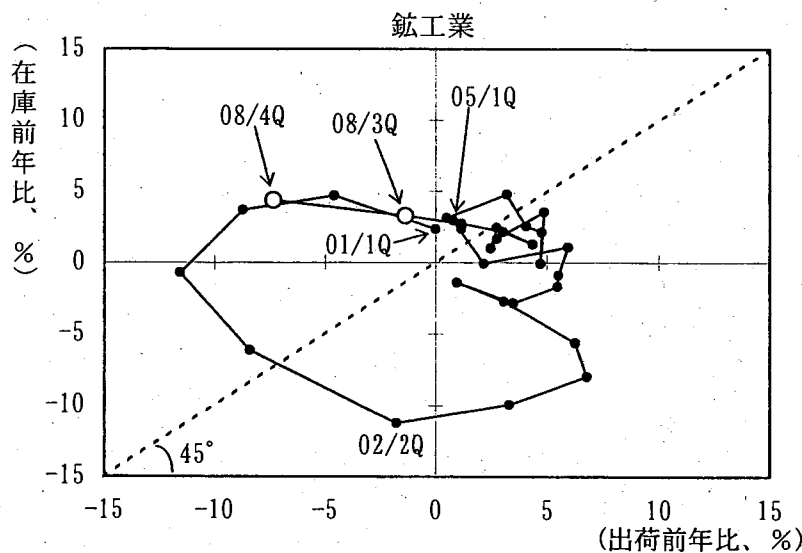
(2) 最終需要財の内訳



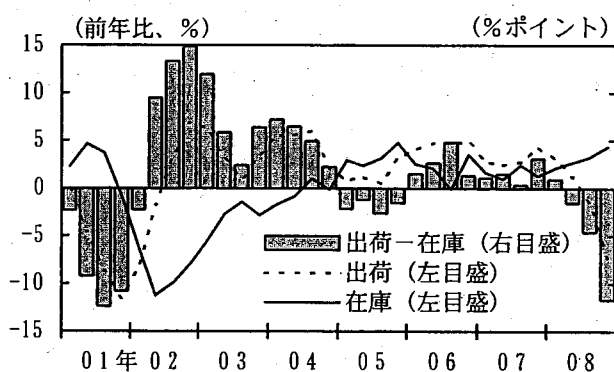
(注) < >内は最終需要財に占めるウェイト。

(資料) 経済産業省「鉱工業指数統計」

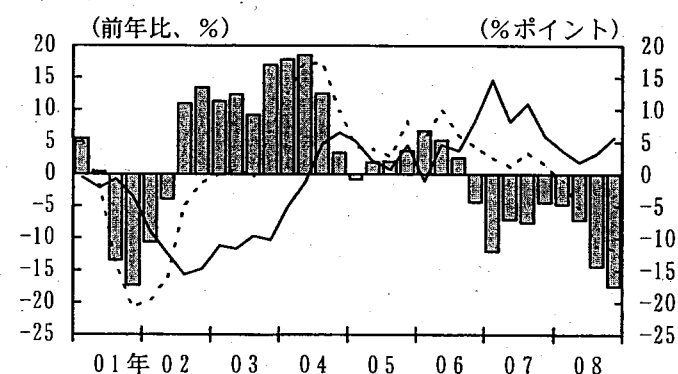
在庫循環



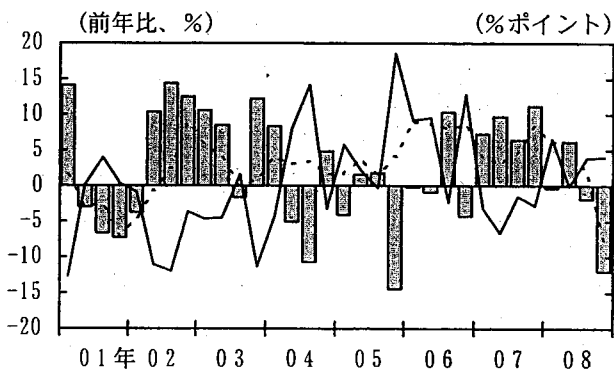
(1) 鉱工業



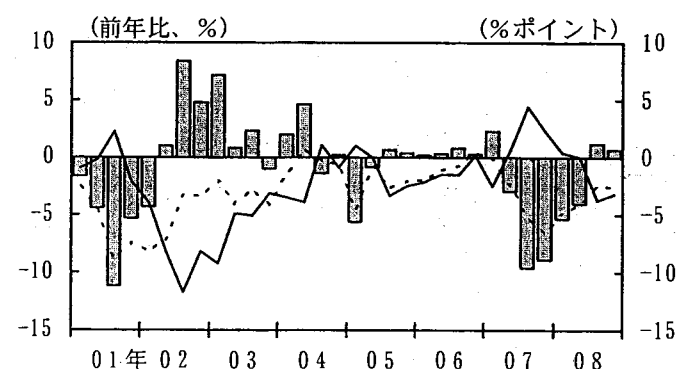
(2) 資本財 (除く輸送機械)



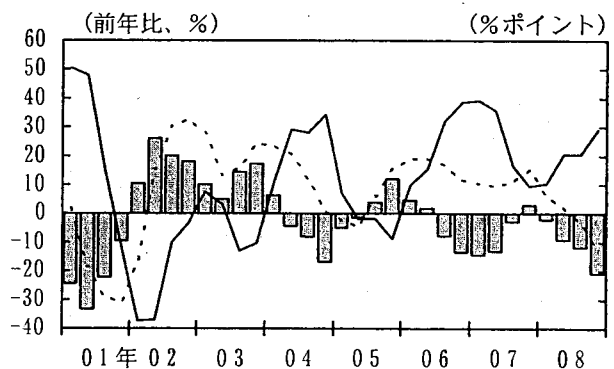
(3) 耐久消費財



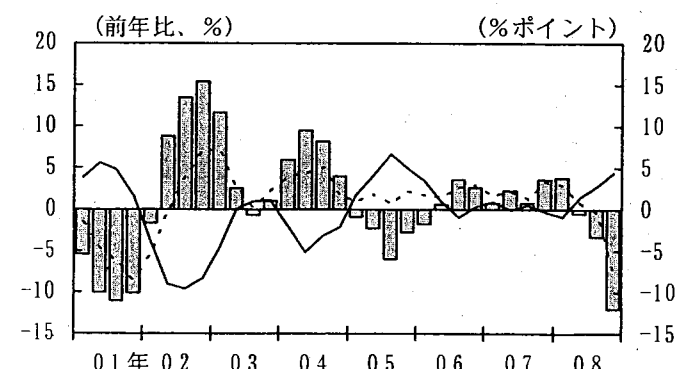
(4) 建設財



(5) 電子部品・デバイス



(6) その他生産財



(注) 2008/4Qは10月の値を用いて算出。

(資料) 経済産業省「鉱工業指数統計」

雇 用 関 連 指 標

<職業安定業務統計>

— () 内は前年比、< >内は季調済前期(月)比：%

	07年度	08/4~6月	7~9	10~12	08/8月	9	10
有効求人倍率(季調済、倍)	1.02	0.92	0.86	0.80	0.86	0.84	0.80
有効求職	(-3.4)	<-0.2>	<3.0>	<2.7>	<1.0>	<0.6>	<2.0>
有効求人	(-7.7)	<-4.9>	<-3.7>	<-4.3>	<-1.7>	<-2.5>	<-2.1>
新規求人倍率(季調済、倍)	1.47	1.33	1.24	1.14	1.24	1.21	1.14
新規求職	(-3.7)	<0.9>	<2.1>	<3.4>	<1.4>	<-0.3>	<3.1>
新規求人	(-9.0)	<-2.8>	<-4.5>	<-4.8>	<-1.7>	<-2.9>	<-2.3>
		(-15.3)	(-16.1)	(-18.1)	(-21.3)	(-13.4)	(-18.1)
うち製造業	(-11.4)	(-16.8)	(-22.1)	(-30.7)	(-26.4)	(-22.0)	(-30.7)
うち非製造業	(-8.6)	(-15.1)	(-15.2)	(-16.0)	(-20.5)	(-12.0)	(-16.0)
パートの有効求人倍率 (季調済、倍)	1.40	1.28	1.22	1.17	1.22	1.20	1.17

<労働力調査>

	07年度	08/4~6月	7~9	10~12	08/8月	9	10
労働力人口	(0.1)	(-0.2)	(-0.4)	(-0.8)	(-0.3)	(-0.4)	(-0.8)
		<0.0>	<-0.7>	<-0.4>	<0.2>	<-0.3>	<-0.2>
就業者数	(0.4)	(-0.4)	(-0.6)	(-0.6)	(-0.6)	(-0.5)	(-0.6)
		<-0.1>	<-0.7>	<-0.0>	<0.0>	<-0.2>	<0.1>
雇用者数	(0.7)	(-0.0)	(0.1)	(0.3)	(0.0)	(0.4)	(0.3)
		<0.1>	<-0.1>	<0.1>	<0.4>	<-0.3>	<0.2>
完全失業者数(季調済、万人)	255	267	268	244	275	266	244
非自発的離職者数(季調済、万人)	81	90	86	82	92	84	82
完全失業率(季調済、%)	3.8	4.0	4.1	3.7	4.2	4.0	3.7
労働力率(季調済、%)	60.4	60.4	59.9	59.7	60.0	59.9	59.7

<毎月勤労統計>

	07年度	08/4~6月	7~9	10~12	08/8月	9	10
常用労働者数(a)	(1.8)	(1.7)	(1.5)	(1.3)	(1.5)	(1.4)	(1.3)
		<0.2>	<0.2>	<0.2>	<-0.1>	<0.2>	<0.1>
製造業	(1.1)	(1.0)	(1.0)	(0.7)	(0.9)	(0.9)	(0.7)
非製造業	(2.0)	(1.8)	(1.6)	(1.4)	(1.6)	(1.5)	(1.4)
名目賃金(b)	(-0.3)	(0.7)	(0.2)	(-0.1)	(0.1)	(0.2)	(-0.1)
所定内給与	(0.1)	(0.4)	(0.6)	(0.2)	(0.5)	(0.6)	(0.2)
所定外給与	(1.1)	(0.2)	(-1.4)	(-3.1)	(-1.7)	(-3.1)	(-3.1)
特別給与	(-2.0)	(1.4)	(-1.2)	(-6.2)	(-3.7)	(-4.2)	(-6.2)
雇用者所得(a×b)	(1.5)	(2.3)	(1.7)	(1.1)	(1.6)	(1.6)	(1.1)

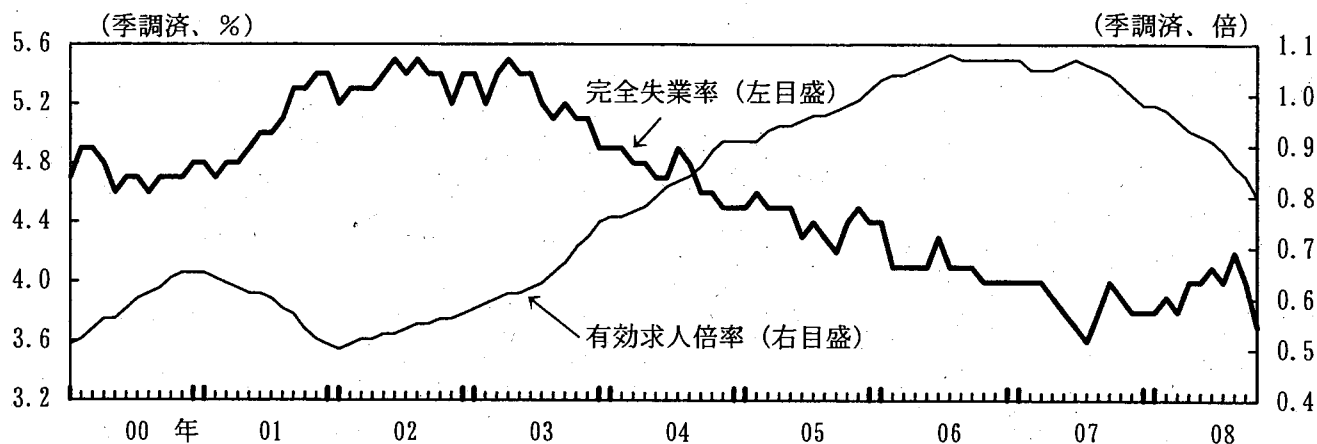
(注) 1. 毎月勤労統計の値は事業所規模5人以上。

2. 2008/10~12月の季節調整値は10月の値、季調済前期比は10月の7~9月対比、前年比は10月の前年同月比。

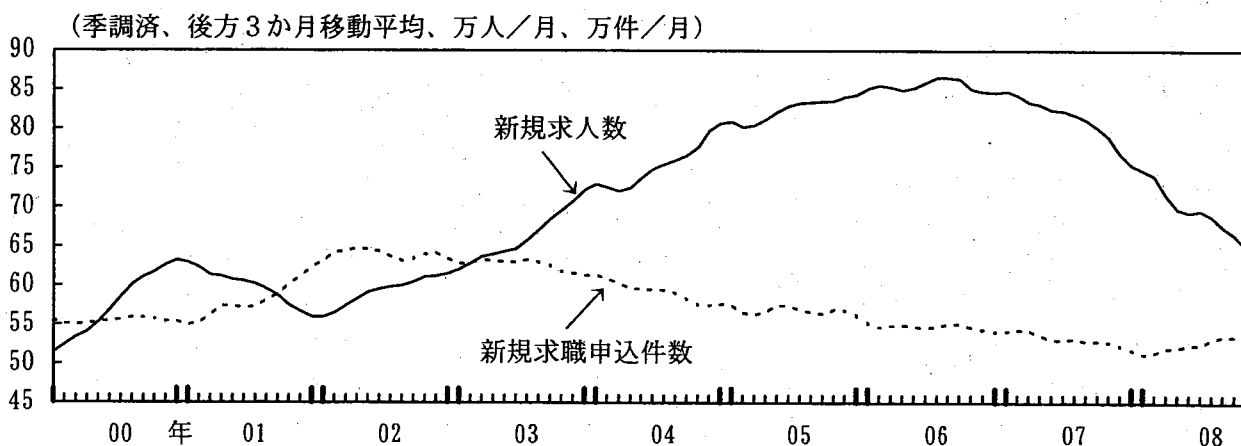
(資料) 厚生労働省「毎月勤労統計」「職業安定業務統計」、総務省「労働力調査」

労働需給 (1)

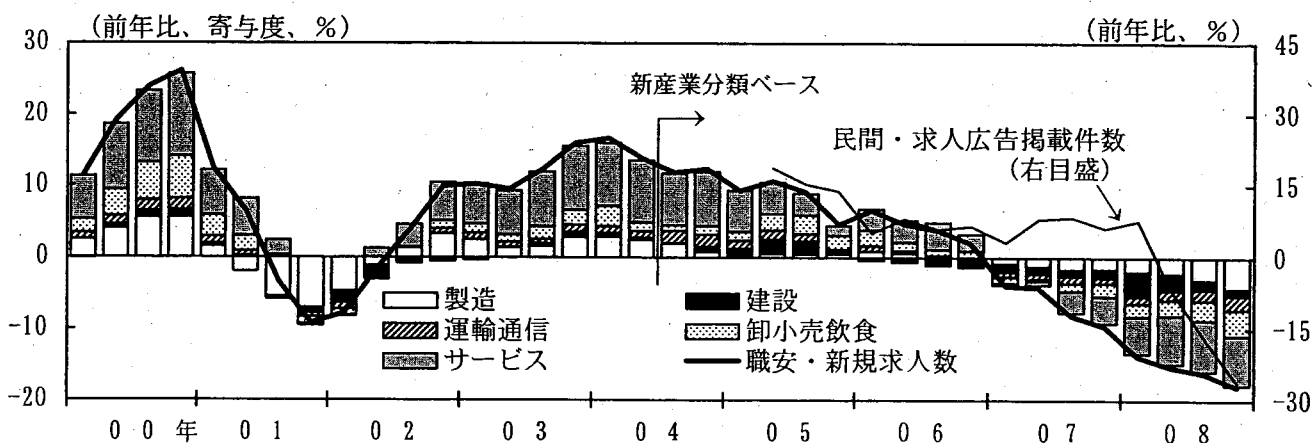
(1) 失業率と有効求人倍率



(2) 新規求人と新規求職



(3) 求人の動向



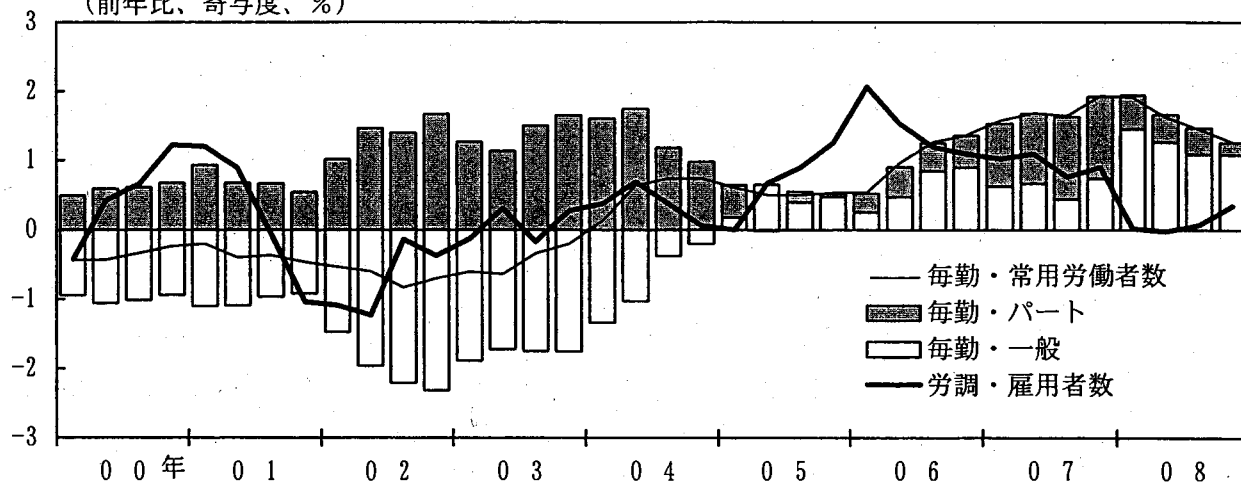
- (注) 1. 新規求人数、新規求職申込件数は、新規学卒者を除きパートタイムを含む。
 2. 新規求人数の2004/2Q以前は旧産業分類ベース、2004/3Q以降は新産業分類ベースのもの。なお、旧ベースとの連続性を保つ観点から、図中の新産業分類ベースにおける「運輸通信」は「電気・ガス+情報通信+運輸業」として、「卸小売飲食」は「卸小売+飲食・宿泊業」として、「サービス」は「医療福祉+教育学習支援+複合サービス事業+その他サービス業」として算出。
 3. 求人広告掲載件数は、全国求人情報協会に加盟している企業が発行している求人メディア（有料求人情報誌、フリーペーパー、折込求人紙、求人サイト）に掲載された求人広告件数の集計値。
 4. 2008/4Qは10月の前年同月比。

(資料) 総務省「労働力調査」、厚生労働省「職業安定業務統計」、
 社団法人全国求人情報協会「求人広告掲載件数」

労働需給 (2)

(1) 労調・雇用者数と毎勤・常用労働者数

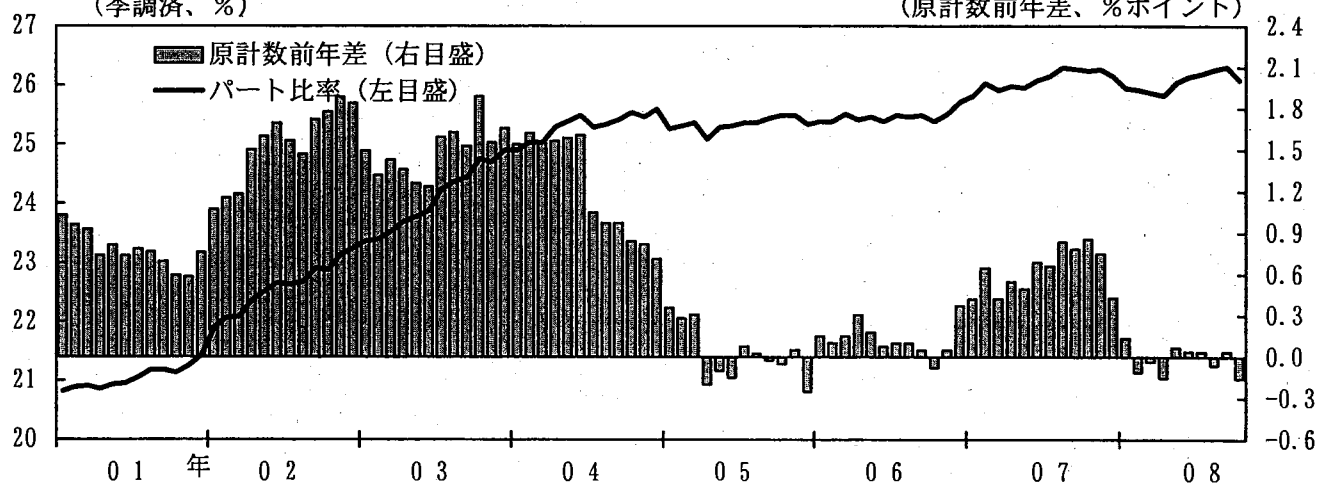
(前年比、寄与度、%)



(2) パート比率

(季調済、%)

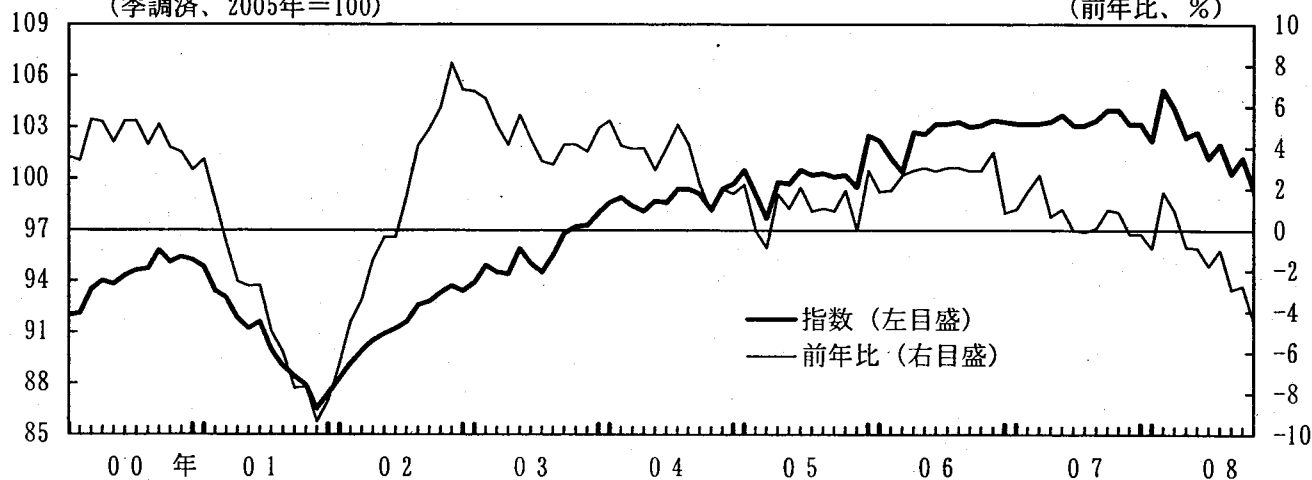
(原計数前年差、%ポイント)



(3) 所定外労働時間

(季調済、2005年=100)

(前年比、%)

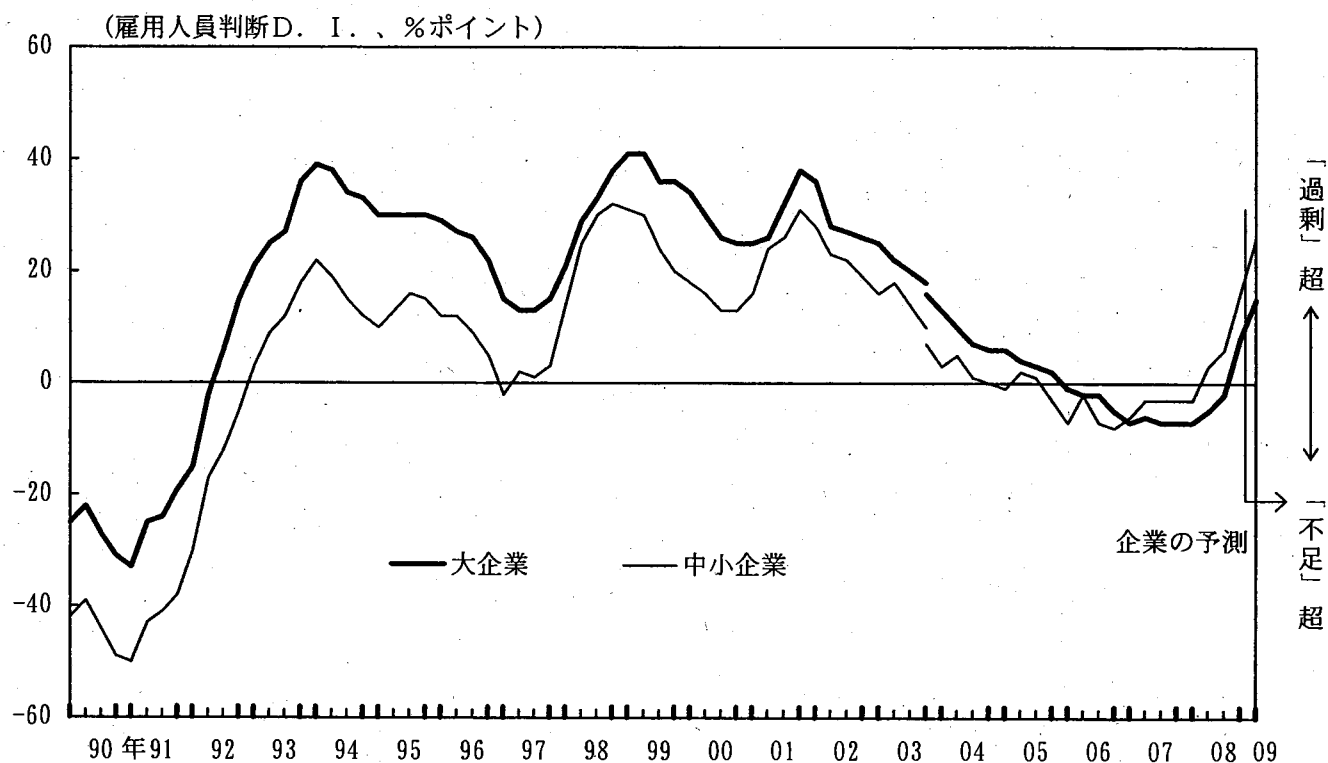


- (注) 1. 毎月勤労統計の計数は、事業所規模5人以上。
 2. パート比率は、パート労働者数/常用労働者数×100として算出。
 3. 2008/4Qは10月の前年同月比。

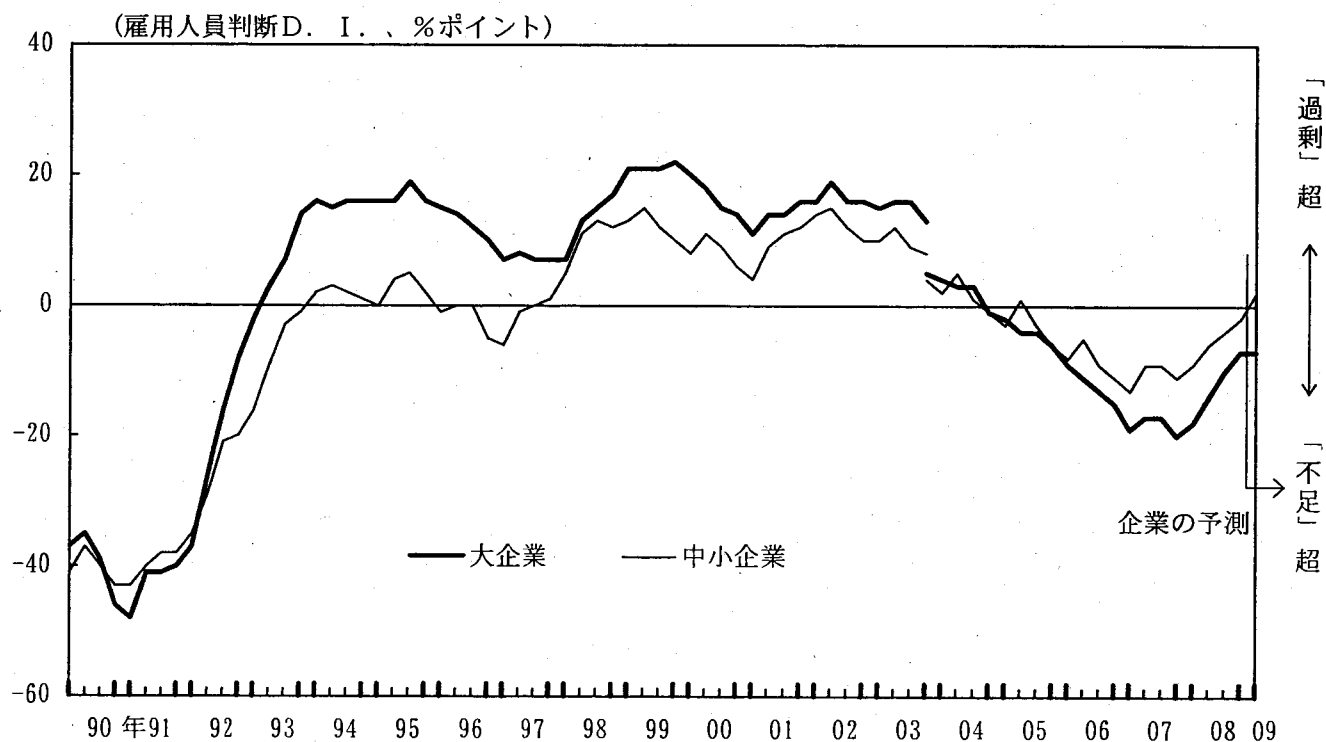
(資料) 厚生労働省「毎月勤労統計」、総務省「労働力調査」

雇用の過不足感（12月短観）

(1) 製造業



(2) 非製造業



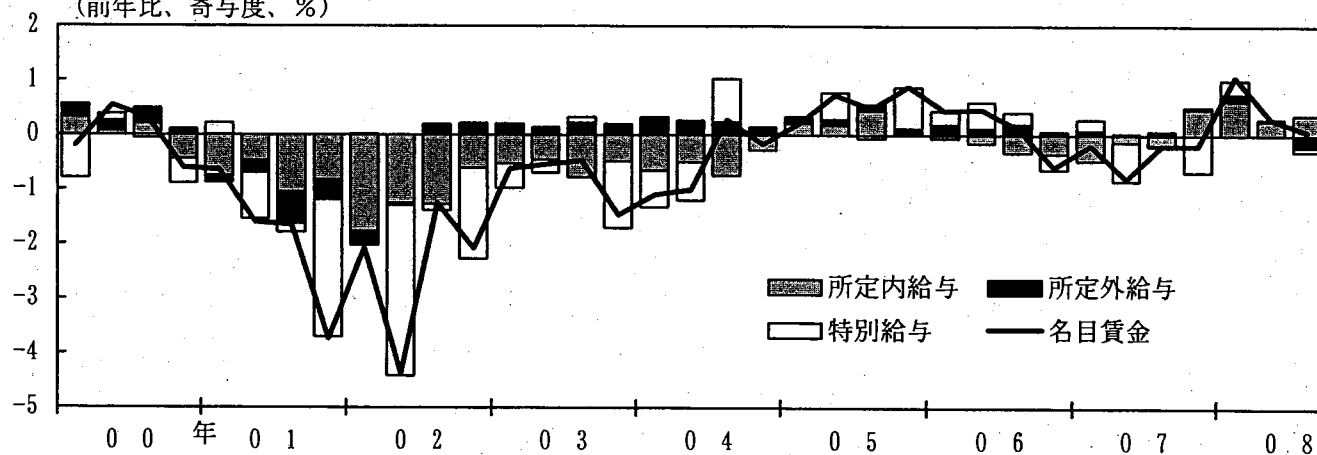
(注) 2004/3月調査より見直しを実施。旧ベースは2003/12月調査まで。
新ベースは2003/12月調査から。

(資料) 日本銀行「全国企業短期経済観測調査」

雇用者所得

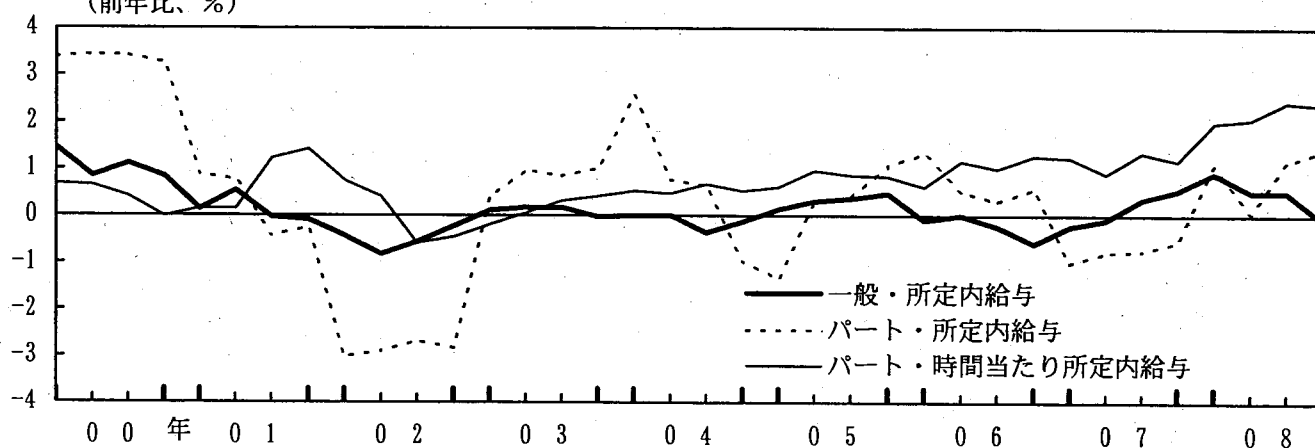
(1) 名目賃金

(前年比、寄与度、%)



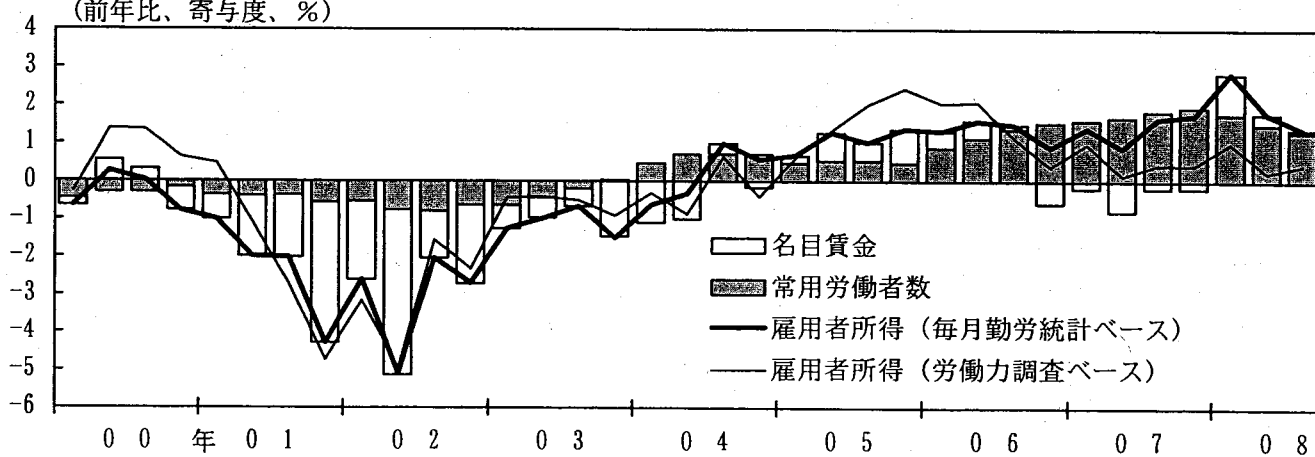
(2) 就業形態別・所定内給与

(前年比、%)



(3) 雇用者所得

(前年比、寄与度、%)



(注) 1. 毎月勤労統計の計数は、事業所規模5人以上。

2. (1) および (3) の四半期は以下のように組替えている。

第1四半期：3～5月、第2：6～8月、第3：9～11月、第4：12～2月。

2008/3Qは、9～10月の前年同期比。

3. (3) の雇用者所得は以下のように算出。

雇用者所得 (毎月勤労統計ベース) = 常用労働者数 (毎月勤労統計) × 名目賃金 (毎月勤労統計)

雇用者所得 (労働力調査ベース) = 雇用者数 (労働力調査) × 名目賃金 (毎月勤労統計)

4. (2) の2008/4Qは、10月の前年同月比。

(資料) 厚生労働省「毎月勤労統計」、総務省「労働力調査」

物価関連指標

— ()内は前年比、< >内は前期(月)比、[]内は3か月前比：%

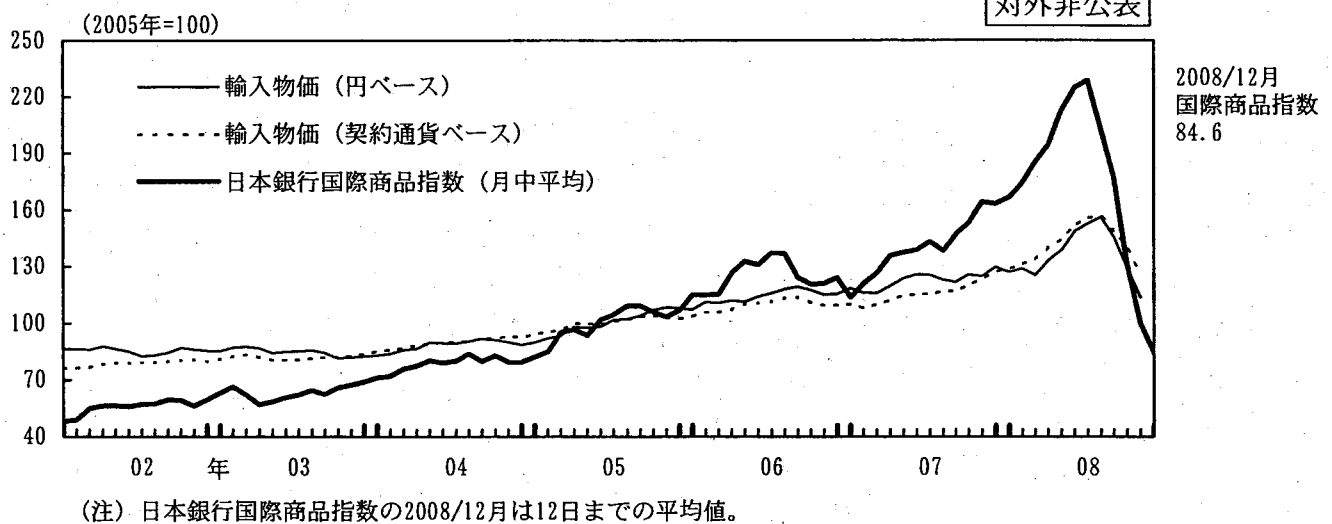
	07年度	08/4~6月	7~9	10~12	08/8月	9	10	11
輸出物価(円ベース)	(-0.2)	(-5.1)	(-1.2)	(-9.6)	(0.6)	(-1.3)	(-8.7)	(-10.4)
		< 2.7>	< 2.7>	< -10.6>	< 0.2>	< -2.9>	< -6.8>	< -4.4>
同(契約通貨ベース)	(0.2)	(3.0)	(4.3)	(1.3)	(4.3)	(3.7)	(1.8)	(0.8)
		< 2.7>	< 1.3>	< -3.3>	< -0.8>	< -0.8>	< -1.9>	< -1.3>
輸入物価(円ベース)	(8.0)	(13.8)	(23.0)	(-2.6)	(27.2)	(19.9)	(3.3)	(-8.6)
		< 10.2>	< 8.2>	< -19.6>	< 2.3>	< -6.7>	< -11.0>	< -12.2>
					[12.7]	[-2.0]	[-15.0]	[-27.0]
同(契約通貨ベース)	(9.9)	(27.5)	(32.1)	(9.5)	(34.1)	(27.4)	(16.5)	(2.8)
		< 10.9>	< 5.8>	< -13.5>	< 0.4>	< -4.7>	< -6.2>	< -9.6>
日本銀行国際商品指数	(23.0)	< 19.9>	< -10.5>	< -46.9>	< -9.0>	< -16.9>	< -32.7>	< -14.4>
日経商品指数(42種)	(12.3)	< 8.1>	< 2.3>	< -15.9>	< -1.4>	< -3.8>	< -9.3>	< -8.6>
国内企業物価	(2.3)	(4.9)	(7.1)	(3.9)	(7.4)	(6.8)	(5.0)	(2.8)
		< 2.4>	< 2.8>	< -2.5>	< 0.1>	< -0.6>	< -1.3>	< -1.9>
					[2.9]	[1.4]	[-1.8]	[-3.7]
CSP I 総平均	(1.4)	(1.0)	(1.0)	(-1.4)	(1.4)	(0.1)	(-1.4)	
総平均 除く海外要因	(0.1)	(-0.2)	(0.1)	(0.3)	(0.2)	(-0.2)	(0.3)	
全国CPI 総合	(0.4)	(1.4)	(2.2)	(1.7)	(2.1)	(2.1)	(1.7)	
総合 除く生鮮食品 [9588]	(0.3)	(1.5)	(2.3)	(1.9)	(2.4)	(2.3)	(1.9)	
うち 財 除く農水畜産物 [3731]	(0.3)	(2.7)	(4.6)	(3.6)	(4.7)	(4.5)	(3.6)	
一般サービス [3775]	(0.1)	(0.6)	(0.7)	(0.8)	(0.7)	(0.7)	(0.8)	
公共料金 [1778]	(0.4)	(0.5)	(1.0)	(0.8)	(0.9)	(0.9)	(0.8)	
東京CPI 総合	(0.1)	(1.0)	(1.5)	(1.1)	(1.3)	(1.4)	(1.2)	(1.1)
総合 除く生鮮食品 [9600]	(0.1)	(0.9)	(1.6)	(1.3)	(1.5)	(1.7)	(1.5)	(1.1)
うち 財 除く農水畜産物 [3023]	(-0.5)	(1.2)	(2.7)	(1.7)	(2.6)	(3.0)	(2.4)	(1.1)
一般サービス [4507]	(0.2)	(0.7)	(0.9)	(0.9)	(0.9)	(0.9)	(1.0)	(0.8)
公共料金 [1806]	(0.6)	(1.0)	(1.7)	(1.7)	(1.7)	(1.7)	(1.7)	(1.6)

- (注) 1. 国内企業物価の前期(月)比、3か月前比は夏季電力料金を調整。
 2. CSP Iの海外要因とは、国際航空貨物輸送、外航貨物用船料、外航タンカー、不定期船、定期船、国際航空旅客輸送。
 3. CPIの内訳[]内は、構成比(万分比)。
 4. 東京CPIの2008年11月のデータは中旬速報値。
 5. 2008/10~12月のCSP I、全国CPIは10月のデータを、それ以外は10~11月平均のデータを使用。

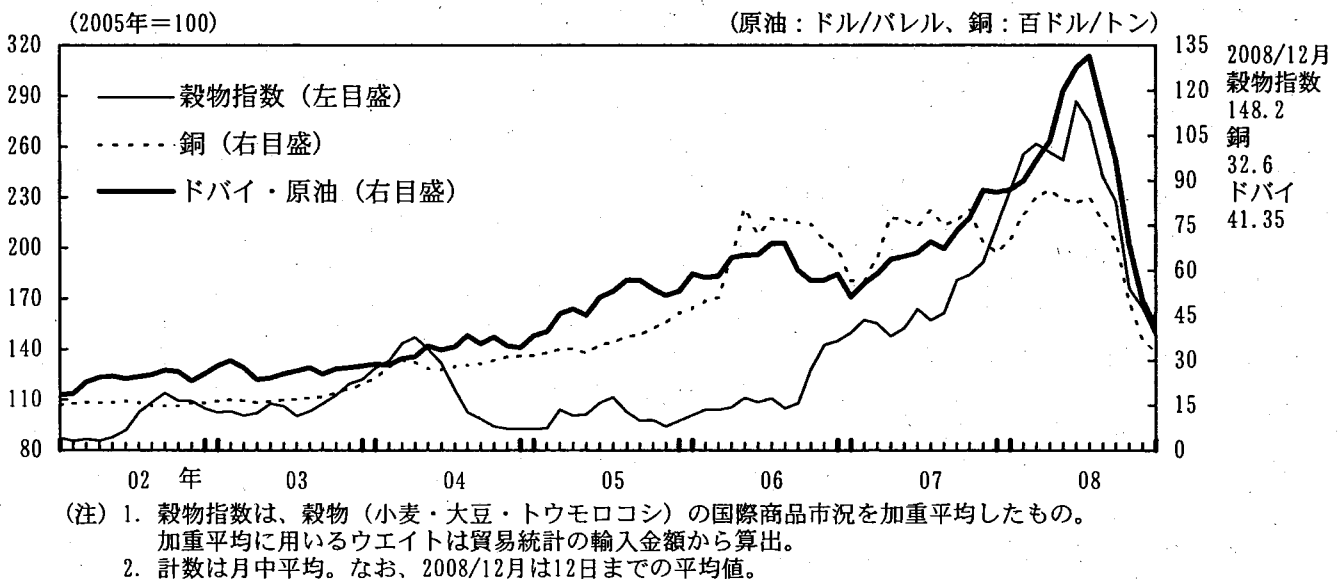
(資料) 総務省「消費者物価指数」、日本銀行「企業物価指数」「企業向けサービス価格指数」
 「日本銀行国際商品指数」、日本経済新聞社「日経主要商品価格指数」

国際商品市況と輸入物価

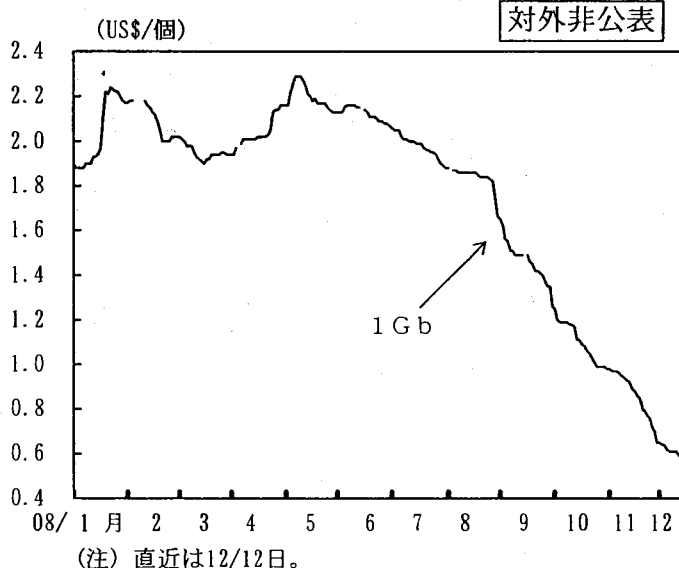
(1) 輸入物価 (契約通貨ベース、円ベース)



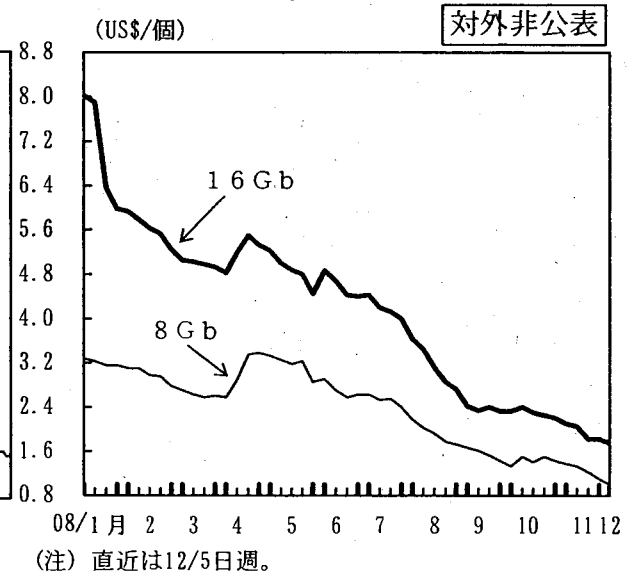
(2) 原油・非鉄金属・穀物



(3) DRAM



(4) NANDフラッシュメモリ



(資料) 日本銀行「企業物価指数」「日本銀行国際商品指数」、日本経済新聞社、Bloomberg、Gartner 等

輸入物価

(円ベース)

(1) 前年比

(四半期)

(月次)

(前年比, %)					(前年比, %)				
		08/1Q	2Q	3Q	4Q	08/8月	9	10	11
輸 入 物 価	[100.0]	8.8	13.8	23.0	-2.6	27.2	19.9	3.3	-8.6
機械器具	[31.8]	-7.4	-7.9	-7.0	-10.8	-5.8	-7.0	-10.9	-10.6
金属・同製品	[9.5]	1.8	4.1	8.1	-17.0	11.3	5.3	-14.3	-19.8
石油・石炭・天然ガス	[27.6]	35.0	48.1	68.8	11.4	77.2	61.5	27.7	-4.4
化学製品	[6.9]	2.4	6.0	14.8	1.2	17.3	14.2	6.1	-3.7
食料品・飼料	[8.2]	16.0	15.5	13.9	-10.0	17.4	8.6	-7.1	-12.7
その他	[16.1]	-4.8	-3.8	1.5	-4.8	3.5	2.1	-4.5	-5.2

— []はウェイト (%)

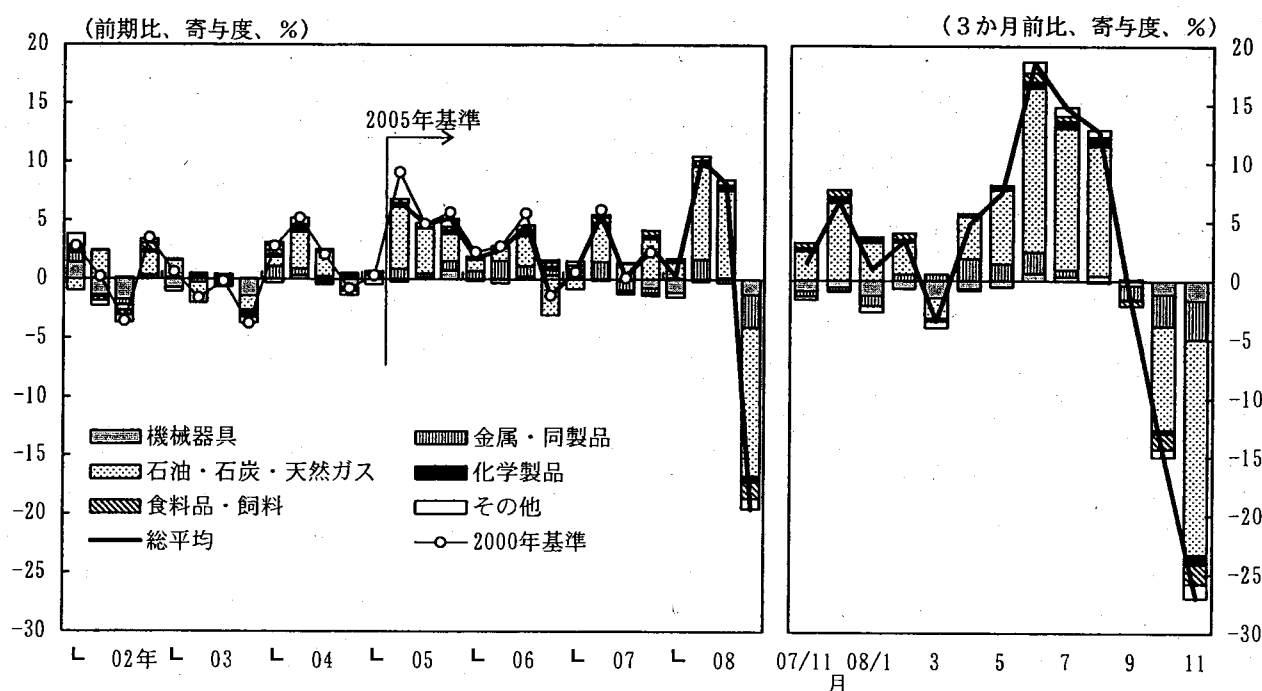
(2) 前期比、3か月前比

(四半期)

(月次)

(前期比, %)					(3か月前比, %)				
		08/1Q	2Q	3Q	4Q	08/8月	9	10	11
輸 入 物 価	[100.0]	0.3	10.2	8.2	-19.6	12.7	-2.0	-15.0	-27.0
機械器具	[31.8]	-4.4	-0.6	0.6	-6.3	2.0	-1.7	-5.4	-8.3
金属・同製品	[9.5]	0.7	14.2	-2.6	-25.1	-1.4	-10.3	-23.8	-30.6
石油・石炭・天然ガス	[27.6]	4.1	22.7	19.1	-29.6	28.6	-0.1	-20.8	-41.8
化学製品	[6.9]	1.1	1.4	7.3	-8.9	9.8	2.2	-4.8	-14.2
食料品・飼料	[8.2]	2.8	5.0	0.1	-17.7	2.2	-6.6	-16.7	-21.8
その他	[16.1]	-2.9	2.6	3.6	-7.6	5.0	0.2	-5.7	-10.2

— []はウェイト (%)

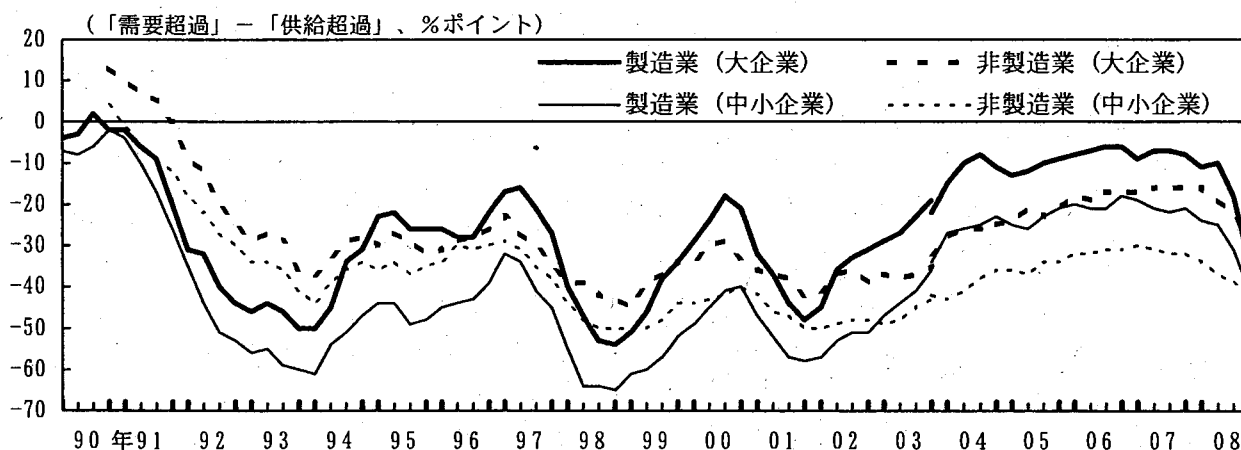


(注) 1. 機械器具：一般機器、電気・電子機器、輸送用機器、精密機器
 2. 2008/4Qは、10～11月の平均値を用いて算出。なお、2000年基準の2007/4Qは10月の値。

(資料) 日本銀行「企業物価指数」

国内需給環境（12月短観）

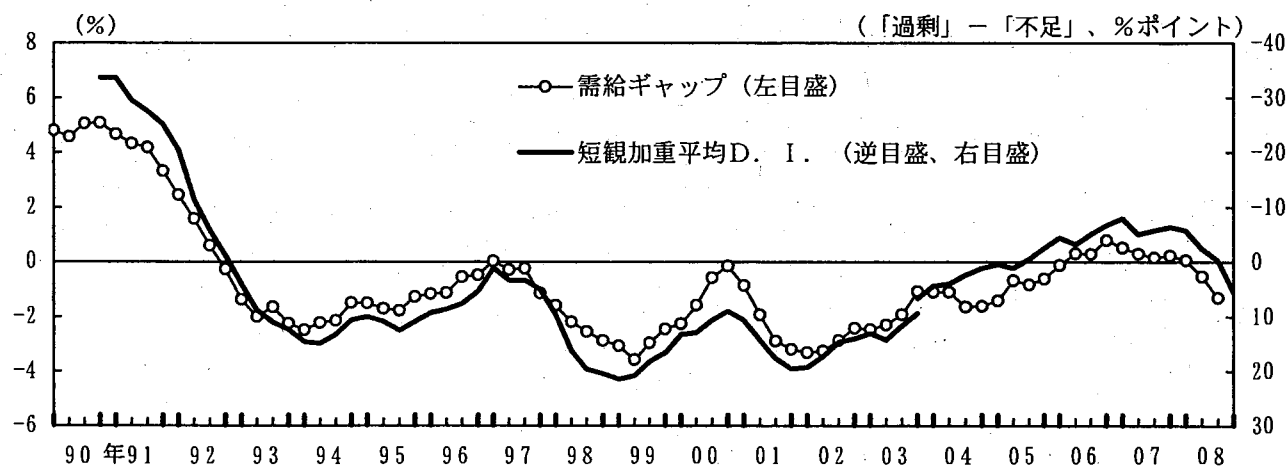
(1) 国内での製商品・サービス需給判断D. I.



(注) 2004年3月調査より見直しを実施。

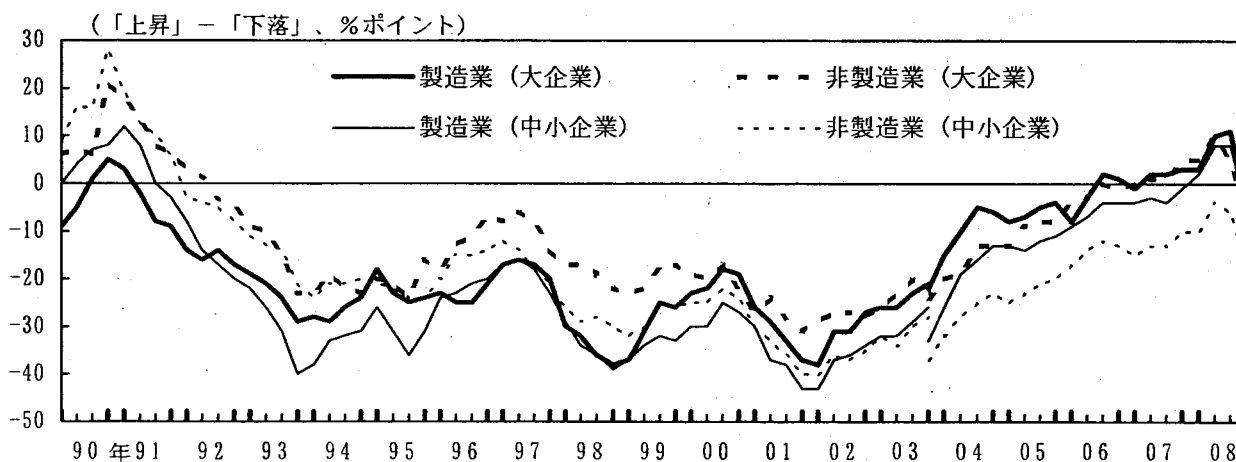
旧ベースは2003年12月調査まで、新ベースは2003年12月調査から（下の図表も同じ）。

(2) 短観加重平均D. I.（全産業全規模合計）と需給ギャップ



- (注) 1. 短観加重平均D. I. は、生産・営業用設備判断D. I.と雇用人員判断D. I.を資本・労働分配率（1990～2006年度平均）で加重平均したもの。生産・営業用設備判断D. I.の調査対象は、1990/3Q以前は製造業に限られていた。このため、非製造業にまで調査対象が拡大された1990/4Q以降について、上記計数を算出。
2. 需給ギャップは、日本銀行調査統計局による試算。需給ギャップの推計には様々な推計誤差が含まれるため、十分な幅を持って評価する必要がある。

(3) 販売価格判断D. I.

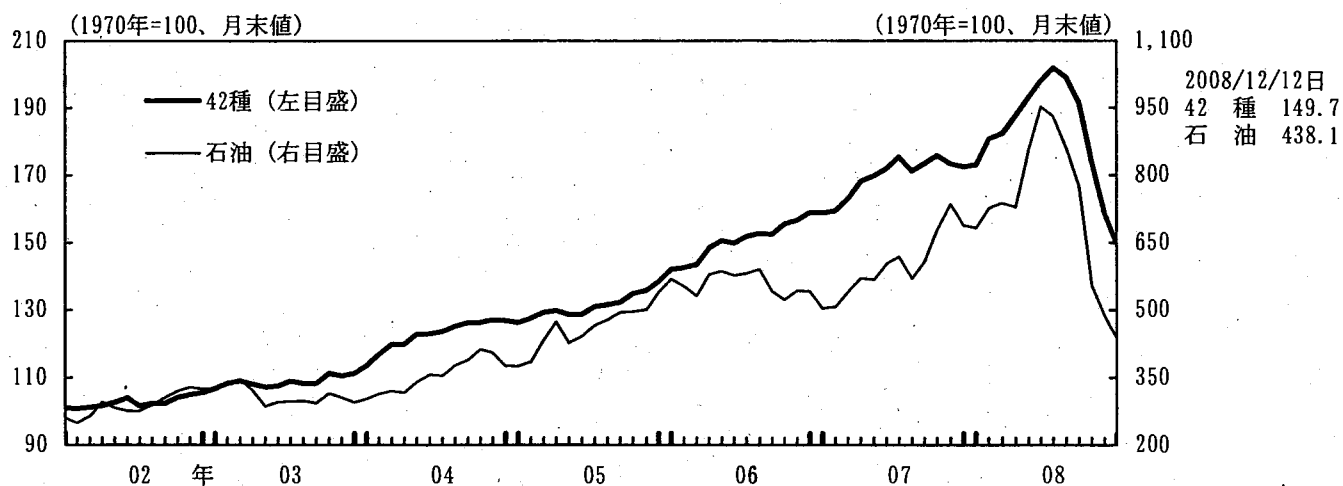


(資料) 日本銀行「全国企業短期経済観測調査」、内閣府「国民経済計算」、
 内閣府・財務省「法人企業景気予測調査」、総務省「労働力調査」、
 厚生労働省「毎月勤労統計」「職業安定業務統計」、経済産業省「鉱工業指数統計」等

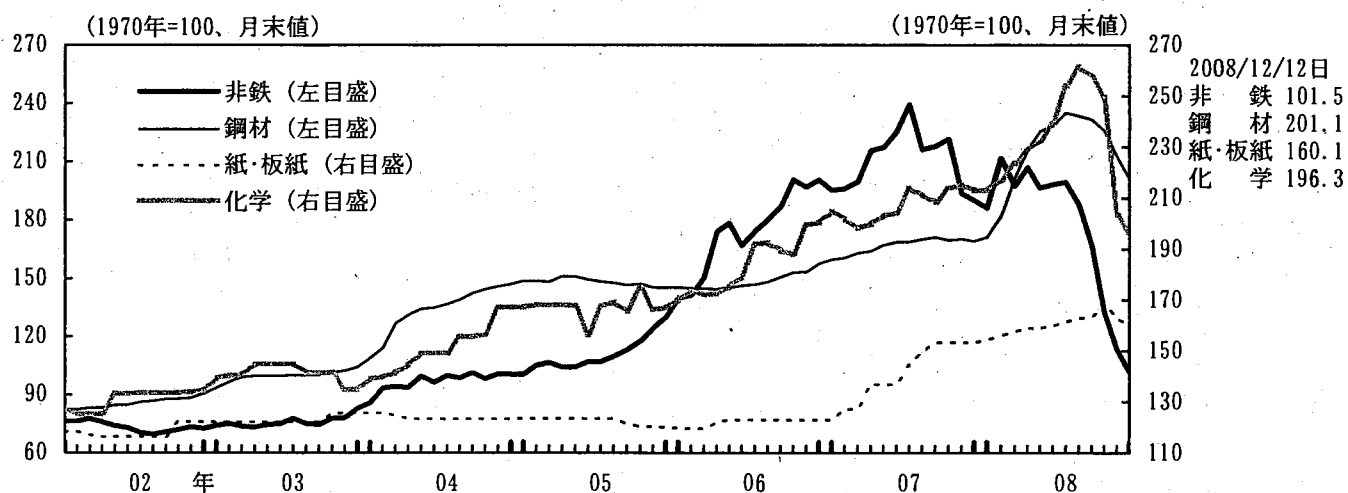
国内商品市況

(1) 日経商品指数

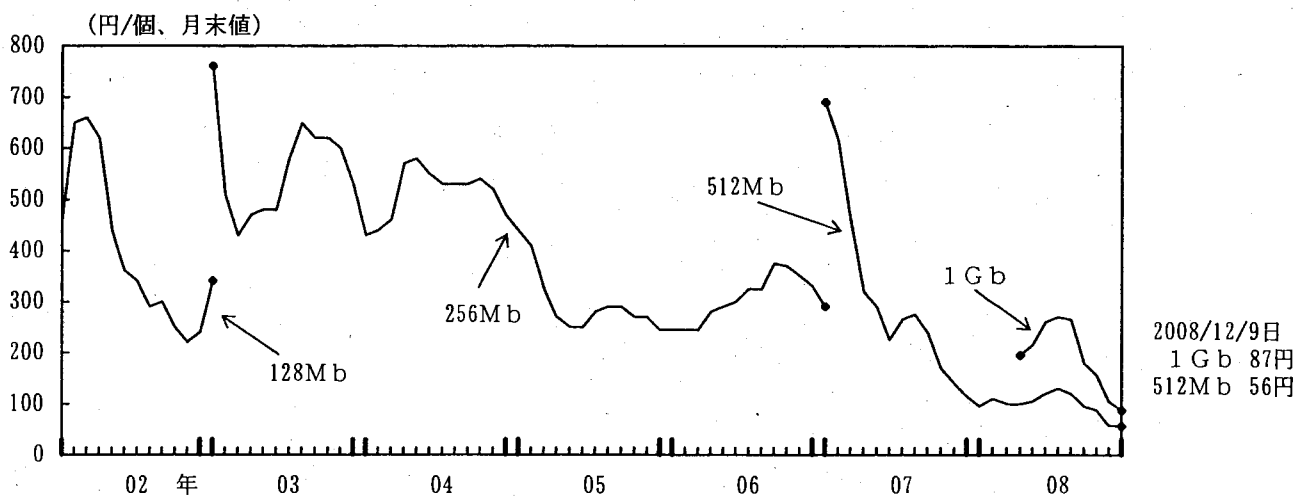
① 全体(42種)、石油



② 非鉄、鋼材、紙・板紙、化学



(2) 半導体市況



- (注) 1. 半導体市況は、大口需要家渡し。月次計数は、各月最終週の火曜日の価格。
2. 半導体市況は、世代交代を反映し、2003年1月に128Mb(シンクロナス型)→256Mb(DDR型)へ、2007年1月に256Mb(DDR型)→512Mb(DDR2型)へと系列の切り替えを行っている。
なお、2006年2月14日より、データがドル建てに変更されたため、直前1週間の平均レートで円換算している。

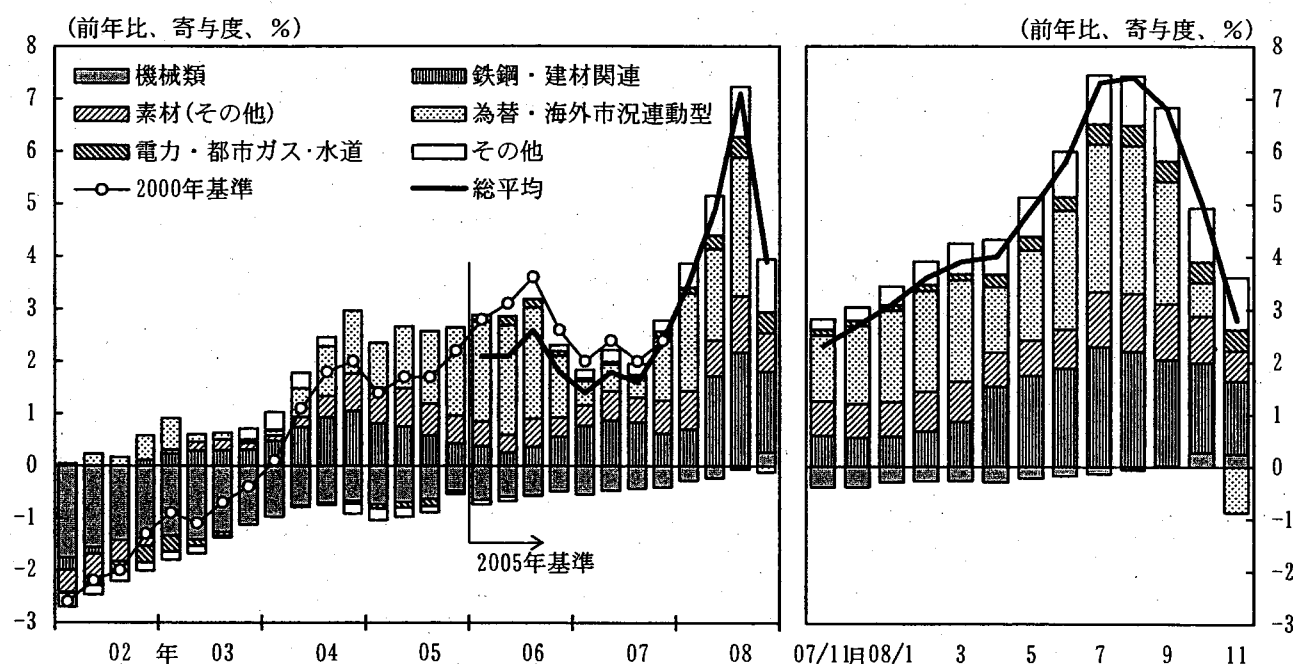
(資料) 日本経済新聞社「日経主要商品価格指数」等

国内企業物価

(1) 前年比

<四半期>

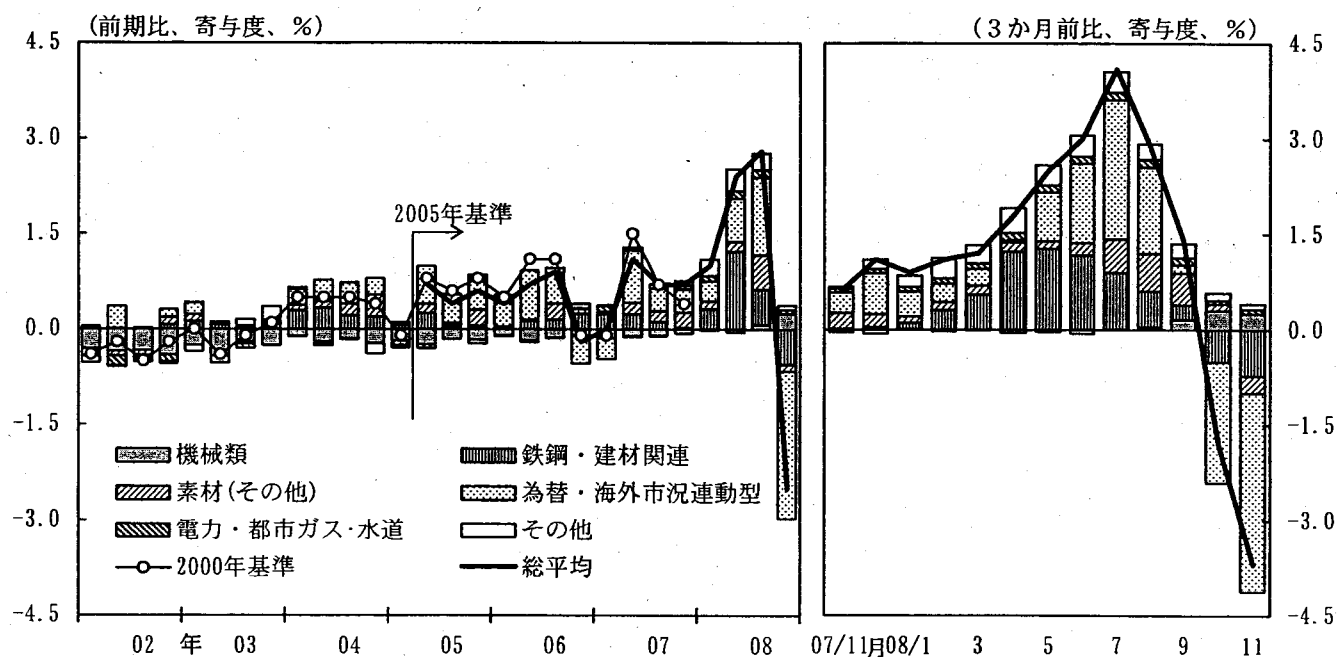
<月次>



(2) 前期比、3か月前比(夏季電力料金調整後)

<四半期>

<月次>

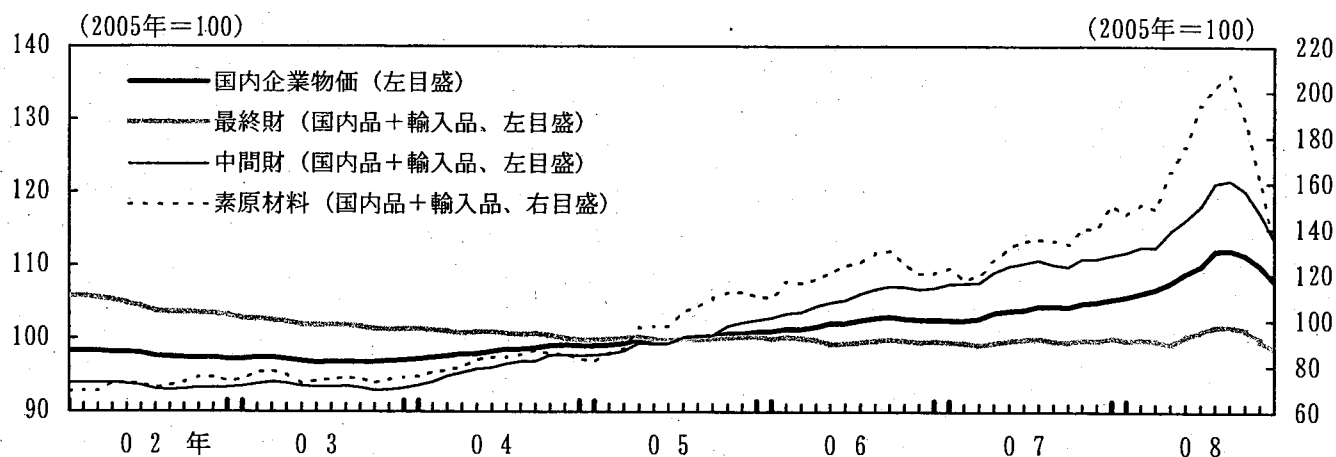


- (注) 1. 機械類：電気機器、情報通信機器、電子部品・デバイス、一般機器、輸送用機器、精密機器
 2. 鉄鋼・建材関連：鉄鋼、金属製品、窯業・土石製品、製材・木製品、スクラップ類
 3. 素材(その他)：化学製品、プラスチック製品、繊維製品、パルプ・紙・同製品
 4. 為替・海外市況連動型：石油・石炭製品、非鉄金属
 5. その他：加工食品、その他工業製品、農林水産物、鉱産物
 6. (2)は、毎年7～9月にかけて適用されている夏季割り増し電力料金の影響(国内企業物価に対する寄与度は0.2%程度)を除いている。
 7. 2008/4Qは、10～11月の平均値を用いて算出。なお、2000年基準の2007/4Qは、10月の値。

(資料) 日本銀行「企業物価指数」

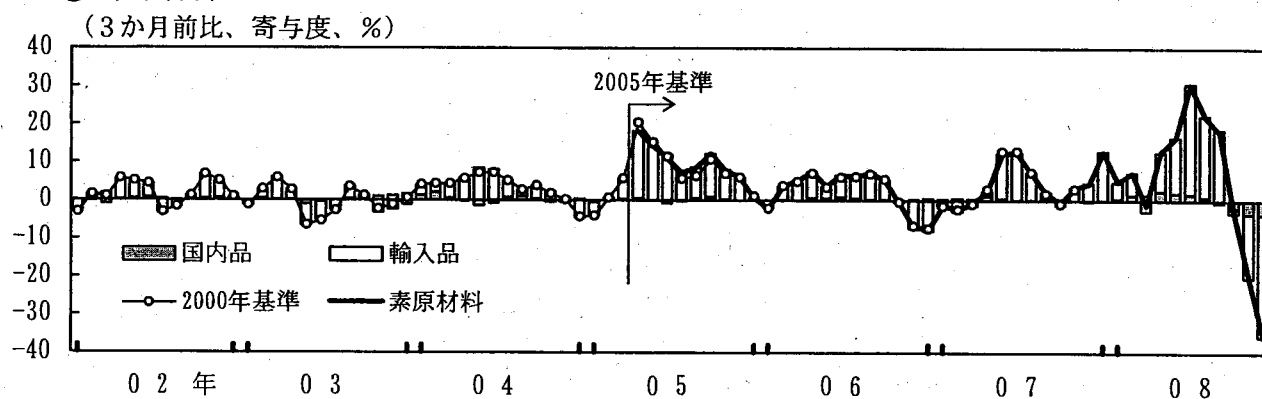
企業物価指数の需要段階別推移

(1) 需要段階別にみた企業物価

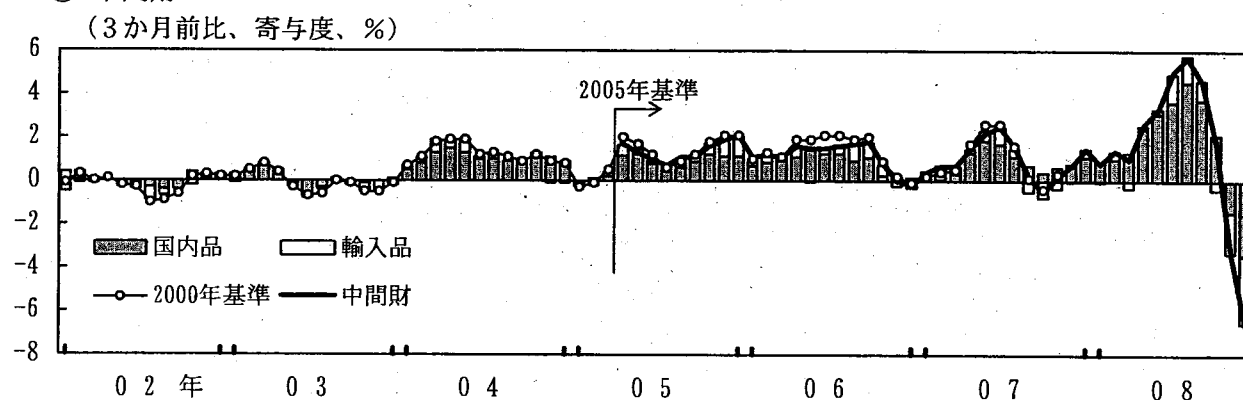


(2) 各需要段階別指数の推移 (国内品+輸入品)

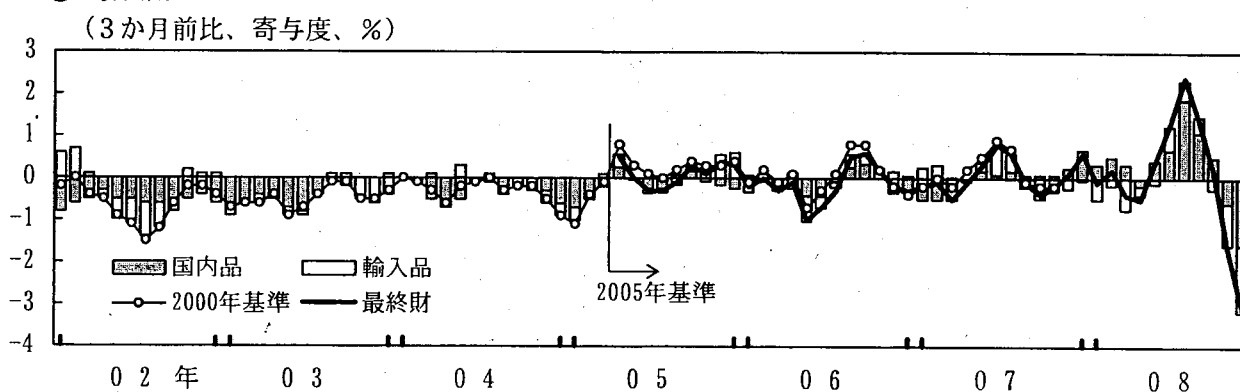
① 素原材料



② 中間財



③ 最終財



(注) 国内企業物価および中間財については、夏季電力料金を調整。

(資料) 日本銀行「企業物価指数」

企業向けサービス価格

(四半期)

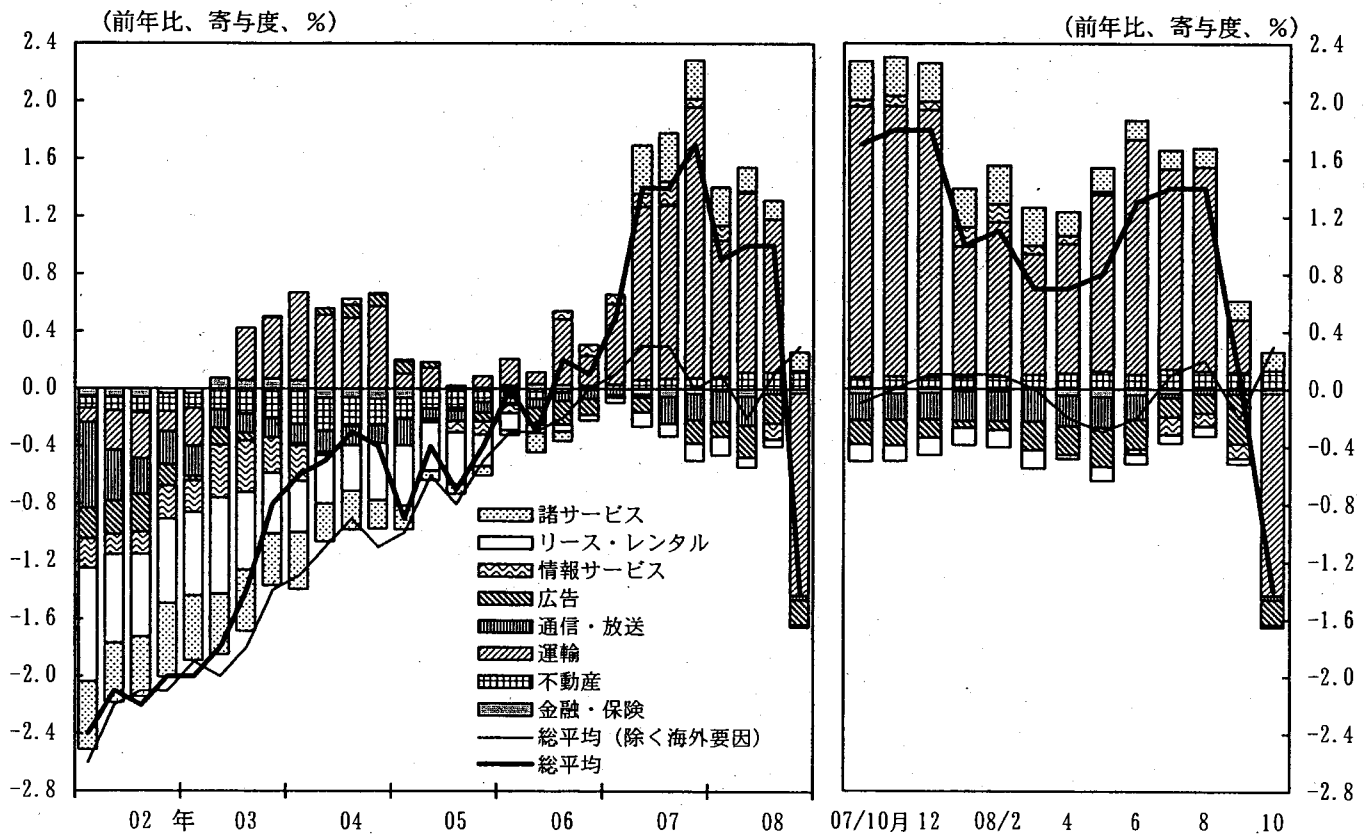
(月次)

(前年比, %)

(前年比, %)

		08/1Q	2Q	3Q	4Q	08/7月	8	9	10
総平均	[100.0]	0.9	1.0	1.0	-1.4	1.4	1.4	0.1	-1.4
金融・保険	[5.0]	-0.2	-0.9	0.0	-0.5	-0.5	0.3	0.2	-0.5
不動産	[7.3]	1.2	1.7	1.6	1.9	2.0	1.5	1.5	1.9
運輸	[19.3]	4.3	5.6	4.7	-6.0	6.1	6.2	1.6	-6.0
通信・放送	[9.6]	-2.5	-2.3	-0.4	-0.4	-0.4	-0.4	-0.4	-0.4
広告	[7.5]	-1.3	-2.9	-2.8	-2.3	-1.8	-1.9	-4.6	-2.3
情報サービス	[10.6]	1.0	0.1	-1.1	0.0	-1.2	-0.8	-0.9	0.0
リース・レンタル	[9.3]	-1.9	-1.0	-0.8	-0.3	-0.9	-1.0	-0.6	-0.3
諸サービス	[31.3]	0.8	0.5	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4
総平均 (除く海外要因)	[96.3]	0.1	-0.2	0.1	0.3	0.1	0.2	-0.2	0.3

— []はウェイト (%)

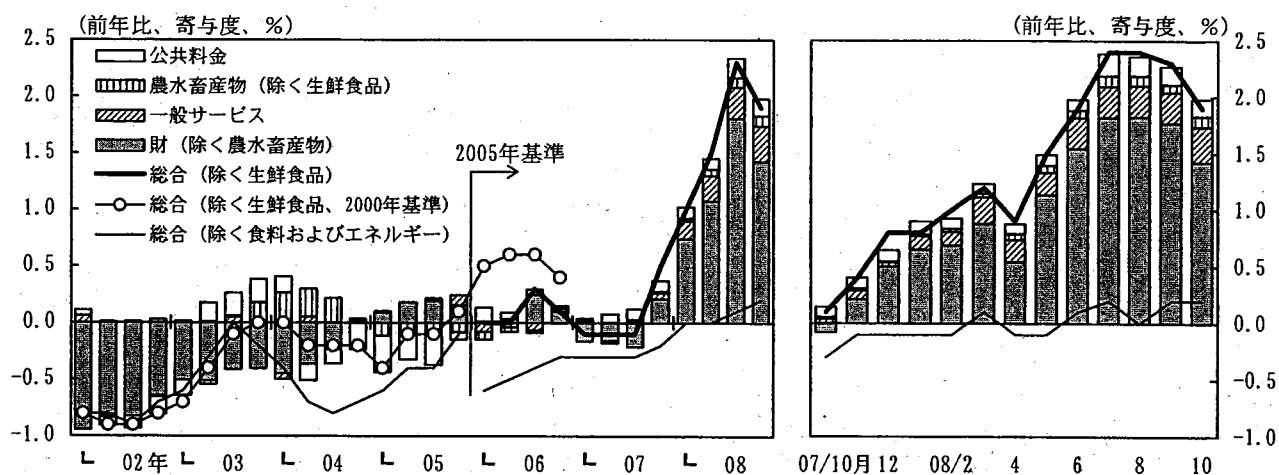


- (注) 1. 海外要因: 国際航空旅客輸送、定期船、不定期船、外航タンカー、外航貨物用船料、国際航空貨物輸送
 2. 内訳は、総平均に対する寄与度。
 3. 2008/4Qは、10月の値を用いて算出。

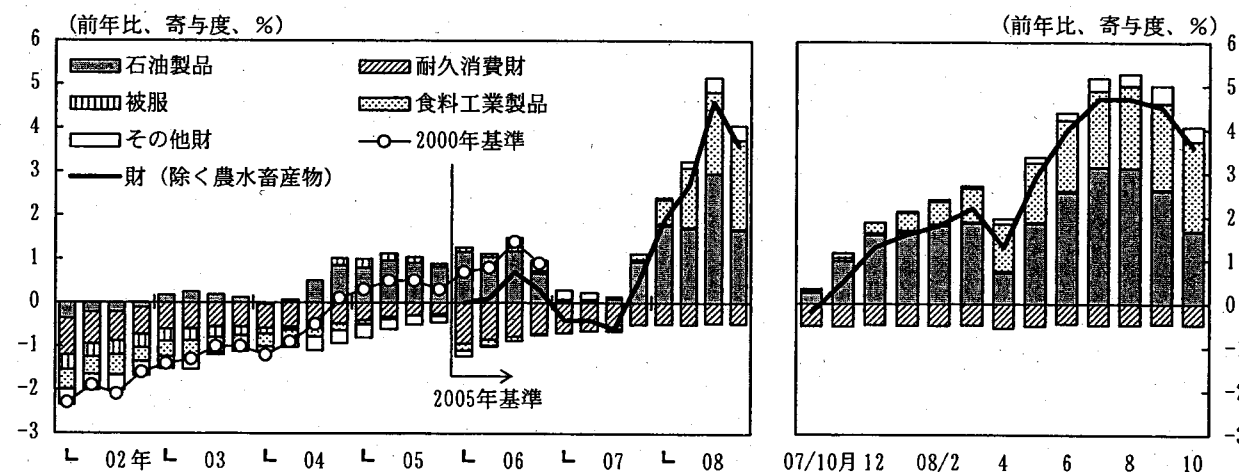
(資料) 日本銀行「企業向けサービス価格指数」

消費者物価 (全国)

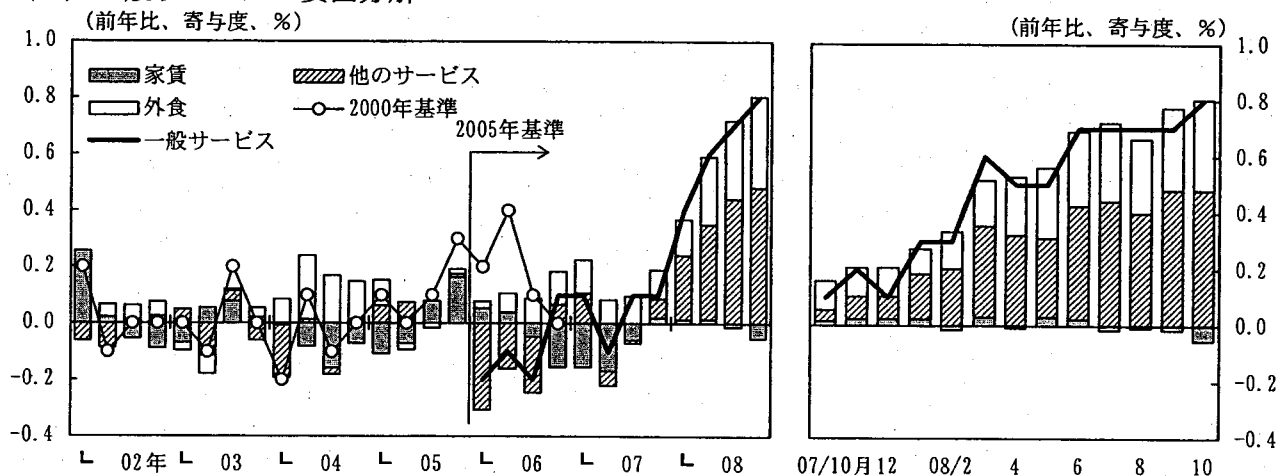
(1) 総合 (除く生鮮食品)



(2) 財 (除く農水畜産物) の要因分解



(3) 一般サービスの要因分解



(注) 1. 分類は、原則、総務省に則している。

ただし、以下の分類については、組み替えて定義している（「」内は総務省公表ベース）。

財＝「財」－「電気・都市ガス・水道」

公共料金＝「公共サービス」＋「電気・都市ガス・水道」

被服＝「衣料」＋「シャツ・セーター・下着類」

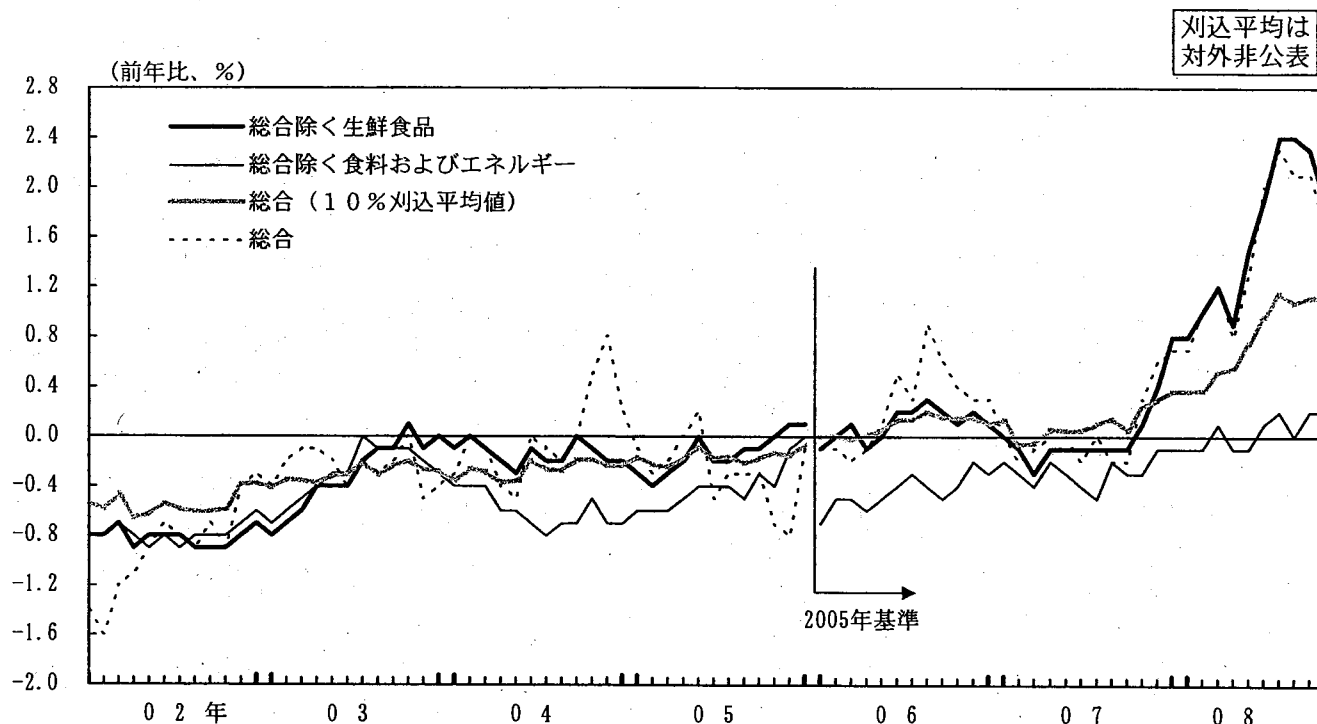
家賃＝「民営家賃」＋「持家の帰属家賃」

2. 「食料」は「酒類」を除く。また、「エネルギー」は「電気代」、「都市ガス代」、「プロパンガス」、「灯油」、「ガソリン」からなる。

3. 2008/4Qは、10月の値を用いて算出。

(資料) 総務省「消費者物価指数」

消費者物価における食料・エネルギーの影響



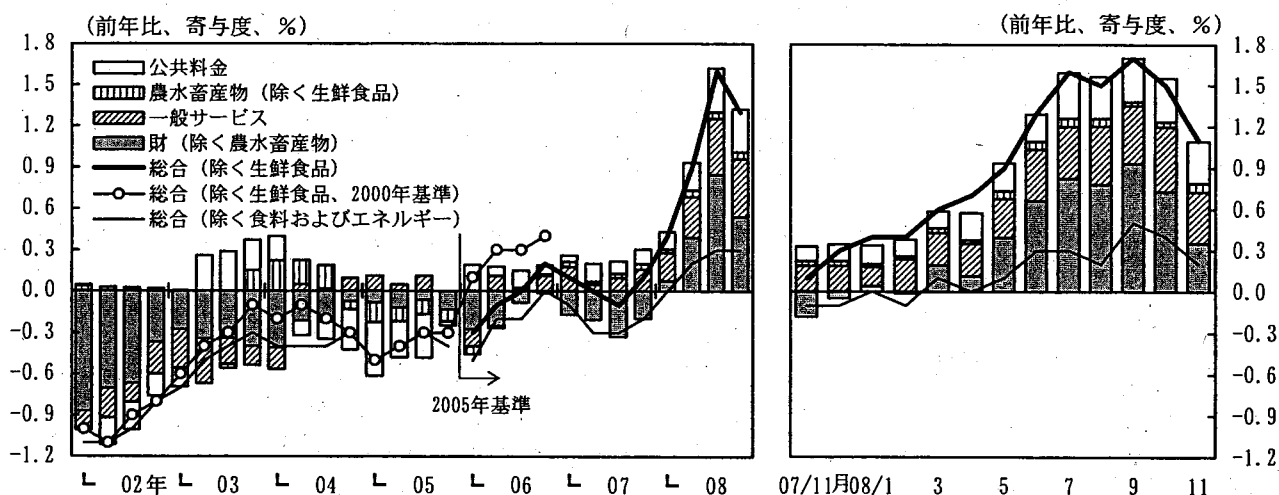
	前年比		総合除く生鮮食品に対する寄与度							前年比	
	総合除く生鮮食品	総合除く食料およびエネルギー	①食料工業製品	②外食	③農水畜産物	④石油製品	⑤電気代	⑥都市ガス代	食料・エネルギー(①～⑥)計	総合	生鮮食品
対外(総合=10000)	9588	6809	1214	555	269	355	292	93	2778	10000	412
08/1Q	1.0	0.0	0.21	0.05	0.02	0.68	0.04	0.01	1.02	0.9	0.0
2Q	1.5	0.0	0.51	0.09	0.06	0.66	0.11	0.03	1.46	1.4	0.8
3Q	2.3	0.1	0.70	0.11	0.09	1.14	0.16	0.06	2.26	2.2	▲1.5
4Q	1.9	0.2	0.76	0.13	0.10	0.64	0.14	0.08	1.85	1.7	▲3.1
08/5月	1.5	▲0.1	0.51	0.10	0.06	0.72	0.11	0.03	1.52	1.3	▲1.0
6月	1.9	0.1	0.61	0.10	0.07	0.99	0.11	0.03	1.91	2.0	3.6
7月	2.4	0.2	0.65	0.11	0.09	1.21	0.16	0.06	2.29	2.3	1.8
8月	2.4	0.0	0.70	0.10	0.09	1.20	0.16	0.06	2.32	2.1	▲2.9
9月	2.3	0.2	0.74	0.12	0.08	1.01	0.15	0.06	2.17	2.1	▲3.2
10月	1.9	0.2	0.76	0.13	0.10	0.64	0.14	0.08	1.85	1.7	▲3.1

- (注) 1. 食料は酒類を除く。
 2. ①の食料工業製品は、酒類を除く。
 3. ③の農水畜産物は、生鮮食品および切り花（カーネーション、きく、バラ）を除く。
 4. ④の石油製品はプロパンガス、灯油、ガソリンからなる。
 5. 食料は食料工業製品（除く酒類）、外食、農水畜産物（除く生鮮食品および切り花）から、エネルギーは石油製品、電気代、都市ガス代からなる。
 6. 2008/4Qは、10月の値を用いて算出。

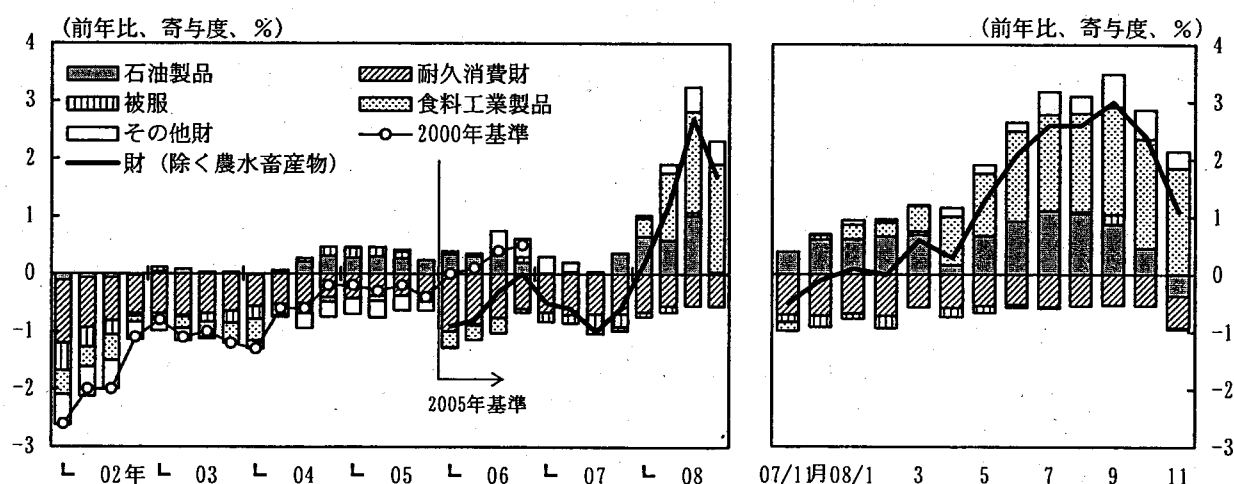
(資料) 総務省「消費者物価指数」

消費者物価 (東京)

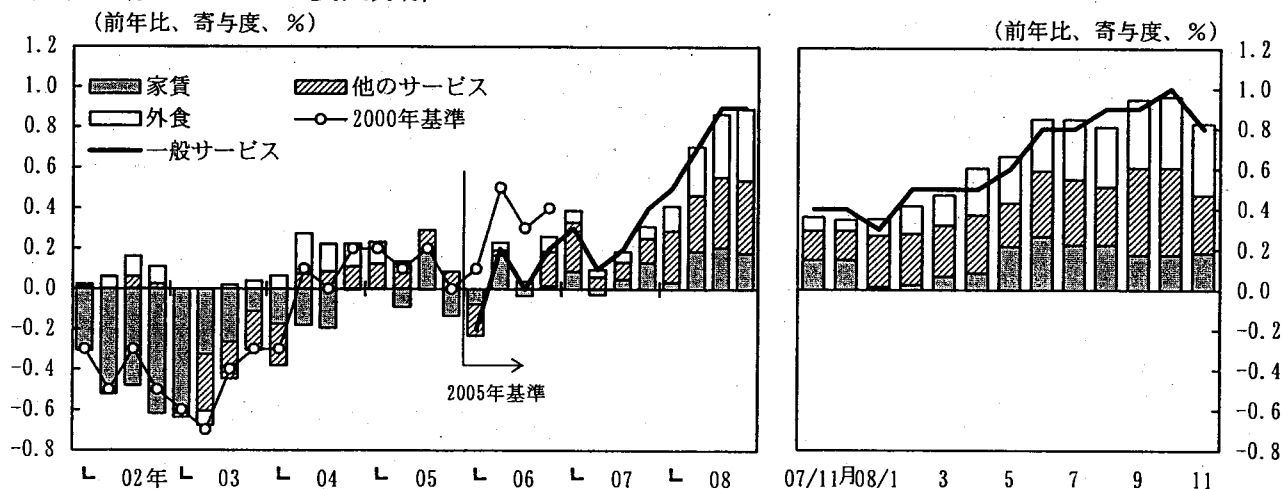
(1) 総合 (除く生鮮食品)



(2) 財 (除く農水畜産物) の要因分解



(3) 一般サービスの要因分解



(注) 1. 分類は、原則、総務省に則している。

ただし、以下の分類については、組み替えて定義している(「」内は総務省公表ベース)。

財＝「財」－「電気・都市ガス・水道」

公共料金＝「公共サービス」＋「電気・都市ガス・水道」

被服＝「衣料」＋「シャツ・セーター・下着類」

家賃＝「民営家賃」＋「持家の帰属家賃」

2. 「食料」は「酒類」を除く。また、「エネルギー」は「電気代」、「都市ガス代」、「プロパンガス」、「灯油」、「ガソリン」からなる。

3. 2008/11月のデータは中旬速報値。

4. 2008/4Qは、10～11月の平均値を用いて算出。

(資料) 総務省「消費者物価指数」

地 価 関 連 指 標

<市街地価格指数>

		— 半年前比：％				
		06/9 月末	07/3 月末	9 月末	08/3 月末	9 月末
六大都市	商業地	8.9	9.8	8.5	3.2	-4.2
	住宅地	2.8	4.7	3.4	0.7	-2.5
六大都市以外	商業地	-1.9	-0.9	-0.5	-0.6	-1.7
	住宅地	-1.2	-0.6	-0.3	-0.5	-1.3

<地価公示(1月1日時点)・都道府県地価調査(7月1日時点)>

		— 前年比：％						
		05/7 月時点	06/1	7	07/1	7	08/1	7
住宅地	東京圏	-2.4	-0.9	0.7	3.6	4.8	5.5	1.6
	大阪圏	-3.7	-1.6	0.0	1.8	2.9	2.7	1.0
	名古屋圏	-2.5	-1.3	-0.1	1.7	2.4	2.8	1.5
	三大都市圏	-2.8	-1.2	0.4	2.8	4.0	4.3	1.4
	地方平均	-4.1	—	-3.1	—	-2.3	—	-2.1
商業地	東京圏	-1.5	1.0	3.9	9.4	12.1	12.2	4.0
	大阪圏	-3.3	0.8	3.6	8.3	8.0	7.2	2.8
	名古屋圏	-2.1	0.9	2.4	7.8	7.2	8.4	1.9
	三大都市圏	-2.1	1.0	3.6	8.9	10.4	10.4	3.3
	地方平均	-6.1	—	-4.3	—	-2.6	—	-2.5

<オフィスビル空室率等

>

<土地取引件数(法務統計「売買による土地所有権の移転登記件数」)>

		— 千件、()内は前年比：％					
06 年	07 年	08/1Q	2Q	3Q	08/7 月	8	9
1,547	1,440	333	335	306	114	93	99
(-2.1)	(-6.9)	(-9.4)	(-11.0)	(-4.5)	(-1.8)	(-16.0)	(5.9)

(資料) 日本不動産研究所「市街地価格指数」、国土交通省「地価公示」「都道府県地価調査」、
法務省「登記統計調査」